

ダンジョンに出会いとボッチを添えて

テクロス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

修学旅行の1件で自暴自棄になった比企谷八幡は事故死したと思いきや目覚めたのは見知らぬ迷宮。人との出会いが、繋がりが、彼を強みへと、高みへと誘う。果たしてそこで笑うのは神かもしれない。もしくは悪魔が泣くのかもしれない。

目次

1章 駆け出し編

#1 終わりと目覚めと出会いと | 1

#2 家とスキルと渴望と | 7

#3 だから俺達は走る | 17

#4 女神のリベンジp | 26

#5 あの日 | 36

#6 今度はお前から離れない | 46

#7 盗賊少女と悪意 | 55

#8 やはり俺は人が | 65

#9 貴方は何を思い何をするの? | 75

#10 神父とポツチ+?α? | 86

#11 憧れと兄と膝枕 | 95

#12 埃かぶりの少女(シンデレラ) | 105

#13 女神の思い男知らず | 116

#14 One of third+α | 127

#15 神との戯れと嫉妬 | 146

2章 探求編

#16 女神とハチマン | 156

#17 会議は踊る、されどしんがつそん | 167

番外編 幕間の絶望 | 177

#18 鍛冶師(スミス)と銃鍛冶師(ガンスミス) | 186

#19 18階層の悪夢 | 198

#20 対峙と決意 | 207

#21 けれど俺も男の子 | 217

#22 美談 | 228

#23 悪魔と讃歌 | 237

#24 そしてボツチは足を踏み入れる | 248

#25 このすぼ | 258

#26 帰る場所 | 267

#27 オラリオよ、俺は帰ってきた | 277

#28 そして俺は、知らぬ感情に悩む | 288

#29 気分はリア充か月乙女か蛇 | 298

#30 分岐路手前 | 308

#31 譲れない者達 | 320

#32 目覚め+?α | 329

番外編 病んだオラリオにボツチを添えるのは間違っている

344

2. 5章 魔境都市 千葉 編

2. 5章 #1 Take off for Chiba | 351

#2 再開と罠 | 365

#3 ALIVE at the Chiba | 375

#4 約束 | 386

#5 参戦 | 397

#6 雪の女王 | 408

#7 別れの賛美歌はない | 419

#8 贈り物【終章】 | 438

3章 春姫編

#33 それ(ムツツリ)でも、守りたいもの(童貞)があるん

だ! | 448

駆ける	620
相見える時	611
冒険者失格	602
異世界忘却	592
分離 剣姫と誓う	583
重責 血濡れの代償	578
片翼 モンスターの定義	570
#41 竜の少女と不調の俺	561
#40 ハチマン危機一髪	548
#39 己との戦い	534
#38 クソツタレのエルフと新魔法	516
#37 恋と愛の悩みと国家転覆	500
#36 霸王と俺と+α	490
#35 霸王	478
#34 詐欺師	462

1章 駆け出し編

#1 終わりと目覚めと出会いと

「貴方のやり方、嫌いだわ」

「もつと人の気持ち考えてよ！」

昔から人の気持ちがイマイチ分からない子供だと言われてきた。

頼まれれば何でもやった。嫌だと思ふ事もあったが人に好かれる為ならば良かれと思つて出来る限りの事はした。……しかしそんな思いと裏腹に人とは壁ができるだけだった。

親からは手のかからない子だと言われてきた。最初はそれが堪らなく嬉しくて親に負担をかけまいと何事も心配させまいと頑張つて愛されようとした。……結果愛情に近い感情は向けられずその行為が義務と変わり果てた。

人間関係や家族関係にも半ば諦めかけていた高校生活に転機が訪れた。

奉仕部……それは人に餌を与えるのではなく餌の取り方を教える部活。

その部長の雪ノ下雪乃を筆頭に由比ヶ浜結衣、顧問の平塚先生に川崎や戸塚に材木座。

俺はこの関係をとても気に入っていた。リア充達みたいな「取り敢えずくつついときや良いだろ」みたいな紛い物のような関係でなくお互いが近すぎず遠すぎず、理解しあつてる関係だと思つていた。……そう、思つていたんだ。

転機にも転機は訪れ、皆がそれなりに心を踊らせる修学旅行前に「告白を成功させたい」「告白を阻止してほしい」という無茶な依頼に板挟みになった。正直打つ手が無い。絶対に成功する告白などある訳がない。更にはその相手から「告白を阻止してほしい」なんて依頼が俺だけに來てる。悩んでる間にも時間は過ぎていくだけ……手はどこにある。

あつた……簡単に説明すれば俺が先に嘘の告白をして付き合う気が

無いという意志を示させて次回に持ち越させることだ。次があるかどうかは知らんが…。

作戦は成功した…でも失ってしまった。大切な関係を…2人なら分かってくれると勝手に期待し勝手に失望した。

家に戻れば妹から罵詈雑言が飛んで来た。それを聞きつけた親からもたんまり怒られた。俺の話には一切耳を貸してくれなかった。いつもの事だ。

自暴自棄になった俺は街をさま迷っていた。学校にも行かずネットカフェに籠って惰眠を貪った。フラフラしてればチンピラから絡んでくるから返り討ちにして金を巻き上げるだけ。普段から筋トレとかしてたからそう苦戦する事はなかった。まあ敵討ちに合うこともしばしばあったが…。

そんな俺の色のない一生は道端で終わった。
歩いてた俺はトラックに突っ込まれて死んだ。

そのトラックの運転手は少し前にボコボコにしたチンピラだった。
はっ、因果応報ってやつだな。

D a r k C r y
暗く暗くて暗い闇が俺を包む。

体の感覚が無い。

あるかどうか分からない耳にねっとりとした声が響く。

愛と誇りと力への探究心を忘れるな

なんなんだよ…それ

「……………いー!」

頭が痛い…あと5分…

「…て…:…さ…いー!」

ええい、ゆっくり寝させてもくれんのか!

「んあ?…:…」

目を開けると白髪で赤目の少年がこちらを覗き込んでいた

「ハハハ…」

「5階層ですよ」

「5階層だあ?」

何を言ってるんだ?コイツ

5階層?5層なら知ってるよ?メイドインがアビスのやつとかでしよ?違う?違うよね。

「ええ、ダンジョンの…」

「ダンジョン?」

ダンジョン?はて…ダンジョンで飯食う物語なら知ってるが…。違う?違いますよね…。

「え?」

ダメだ…話が噛み合っていない。この白い奴も信じられない目をしてる。

『ヴアアアアアアアアアアアアアア!!』

空気が震えた。生まれて初めてヒツなんて声が出た。てか白髪よ、頼むからお前も一緒にビビらないでくれ、不安一杯で発狂しそうになる。

「ミノタウロス!?どうしてここに…」

語感から察するにここにいちやいけな系なのね…うん、ヤバいですね☆

『ヴオオオオオオ!!』

ミノタウロスとやらが蹄を振りかぶる。

比企谷八幡、享年17歳。死因…ミノタウロスにひき肉にされる

『ブオ?』

しかしその一撃が落とされる事はなかった。何事かとミノタウロスを見上げてみれば体のあちこちに銀の線が走っている。

刹那、視界が真っ赤に染まった。ついでに全身も真っ赤に染まった。汚されちゃった…。

「あの…大丈夫ですか?」

ミノタウロスがひき肉になった代わりに現れたのは蒼色の軽装を身につけ眩しい程の銀色の胸当てや手甲に針のように鋭いサーベル。

八幡一生の不覚、見とれてしまった。俺はそういうのに散々嫌な思

いをしてきたのにその女性に見惚れてしまった。

「うわああああああああん！」

白髪の少年は情けない声を上げながら恐ろしく速い逃げ足で「脱兎の如く」逃げ出した。あつ、ちよつと!?

俺は立ち上がって金髪の美少女と向き合う。

脳内シミュレーションは完璧。やったるぜ！慌てず噛まず引かれ
ない丁寧なお礼を！

「あ、あ、危ない所たしゆけてくれてありがとう」

ダメだった。恥ずかしい、今すぐ逃げ出したい。

「ギャハハハ!!どうしたお前！トマトみたいに真っ赤になってよー
！ミノタウロスの血でも浴びたのかー？」

するとケモ耳を生やした如何にもイタそうな青年がやってきた。
なんだア？テメエ。土下座するぞコノヤロー。

「そうなんです…よっ！」

その青年に向けて首肯にしては大ぶり過ぎるくらいに首を振る。
すると自然に髪の毛にかかった血は青年に飛んでく。

「おわっ！飛ばしてくんじゃねえ！汚えなあ！」

ふん、俺だって本気出せばこんくらい嫌がらせはできんだよ！

「それじゃあ、俺はこの辺で失礼します」

「おい待てエ！お前、いかにも駆け出しみたいだが、装備はどうした」
ケモ耳のあんちゃんが問いかけてくる。適当にそんなもん最初か
らないと言うしかなく…。

「…じゃあ君はどうしてここに居るの？」

金髪の美少女が魅惑の質問をしてくる。

「いや、気付いたらここにいたんでそこら辺ちよつとよく分からない
んですよ。それじゃ、危ない所を助けてもらいありがとうございま
した」

言い終わった直後にその場を後にする。ここに居続けたら命がい
くつあっても足りないからネ。

同じく血まみれになった白髪少年であろう血痕を辿りダンジョン
とやらから脱出する。

勇気を出して↑ここ大事、知らない人に話しかけて身だしなみを整えられる場所を聞くとシャワーの貸し出しがあるらしくそこに向かい服を脱いだ訳だが…

「こんなペンダント持ってたっけ？」

見慣れないペンダント、赤色の宝玉が首に掛かっていた。ふむ、本当に身に覚えがない。しかし不思議と外す気は全く起こらず寧ろそれを付ける事で安心感が湧いてくる。

シャワーも済ませまた別の人に勇気を出して↑ここ大事、話しかけこの街について聞いた。

聞くに退屈した神が天界から降りてきて不自由を楽しみたいから人間を眷属ファミリアにして『恩恵』を授けてモンスターに対抗しうる力を授けた…とか、ここは世界に唯一ダンジョンのあるオラリオだ…とか、「豊饒の女主人」の店員には絶対喧嘩を売るな…とか。

ふむふむ、最後の情報、ふざけてるのか？とか思ったがその時だけ顔が死んでたからマジそうだ。

後はギルドに聞きなと言われたとおりにギルドとやらに向かうと

「エイナさん大好きー!!」

と叫び飛び出してきた少年とぶつかってしまった。お前前方不注意だぞ！教習所からやり直せ！

「ぐはあッ！」

「うわあ！」

成程、これが『恩恵』の力。普通に痛い…グフツ。

「大丈夫ですか!?! って貴方は!」

ぶつかった相手を見上げてみるとさっきの白髪頭の少年がいた。

「心配ない…:ゲフツ」

「大丈夫じゃなさそうな声が聞こえたんですけど!」

「大丈夫? ベル君、と冒険者さん」

奥から出てきたのは茶髪でショートヘアで少しとんがった耳が特徴的な美女だった。思ったんだがこの町の女の人、レベル高すぎじゃない? ね?

「えーとその、冒険者登録ってここですか?」

「ええ!?!?」

白髪少年驚きの声を上げるが手で口を塞いでそれを制する。言わせん、さっきの事を言われたら面倒臭い事になるのは必然だからな。「え、ええ、ここで冒険者登録はできます」

それからは簡単だった。名前と苗字が逆なのは驚いたが…それはそうと書類に個人情報を通り書き込んだが1つ困る項目があった。ファミリア、どうしよ…

そんな埋まることのない項目に悪戦苦闘していると白髪頭がひよこり覗いてきた

「ファミリア、所属してないんですか?」

「あ、ああ…」

「良かったら僕の所のファミリアに入りませんか?」

「是非喜んで!」

え?・即決すぎるって?そりゃ、こんなチャンス掴み取るしかないだろう?

書類を見直したとんがり耳のお姉さんは満足と言った顔で

「それではハチマン・ヒキガヤさん、これにて書類は正式に受理されました。今後のアドバイザーは私、エイナ・チュールが務めさせていただきます」

晴れて冒険者になった俺、比企谷八幡改めハチマン・ヒキガヤの戦いはこれからだ!!

「じゃあヒキガヤさん、僕達のホームに帰りましょう!」

「あ、ああ」

白髪頭に手を引かれる事でホームとやらの案内される。幸先が不安だな。

#2 家とスキルと渴望と

初めてのファミリア、その本拠地^{ホーム}に向かう途中に俺は隣に歩いているベル・クラネルと世間話をしていた。

「そういえばヒキガヤさんはどうしてダンジョンに？」

「ん？ああ、それが俺も良く分からなくて気付いたらダンジョンにいてな、初めて目にしたのがクラネルさんだったんだよ」

「ええ!?ダンジョンにいた切っ掛けとか心当たりはないんですか？」

「無い、ホントに気付いたらだった」

もしあの時、クラネルさんがいなかったらもしかしたら俺はミノタウロスにミンチにされていたのかもしれない、もし仮に金髪の美女、アイズ・ヴァレンシュタインに助けられていても地上に戻れることも無くモンスターに殺されていただろう。そう思うと今更だがクラネルさんには感謝の気持ちが湧いてくる。

「しかし、ミノタウロスだっけ？あんな奴、さっさと強くなってノリツノリで倒せるようにならなきゃなー」

今になって溢れてくるモンスターへの恐怖の裏返しなのからしくない強がりの言葉が出てくる。しかし出てきた言葉に嘘はない。絶対にミノタウロス、いや全てのモンスターを余裕で、完膚なきまでに叩きのめす。…やるんだ。

「ハハハ…そうだね、そうする為にも頑張つて強くならないと…!」

クラネルさんも俺に言ったのか、はたまた自分に言い聞かせたのかもしれない言葉を口にする。

「着いたよ、ここが僕達のホームだよ!」

目の前にぽつんとただ何かを待っているかのように建っているその教会は人気の無い路地裏深くにあった。

「……」

沈黙が恥ずかしいのか勢いで押し切ろうと声を張ったのが恥ずかしいのかまたはどっちもかクラネルの顔は返り血を浴びた時並に赤

くなっていた。

「……」

「ヒキガヤ…:さん?」

まったく、この異世界は優しくもないな。いきなり大きなファミリアに入れてもらえる訳ないもんな。

「いいんじゃないの?。0から感があつてさ」

俺の場合死に戻りとかできる訳でもないし本気にならなきゃ人に話しかける度胸もないんだからハードモード通り越してEXTRAハードもしくはH A C H I M A N M U S T D I E レベルな気もする。

「嫌がらないの?」

「別に、雨風凌げりやなんでも良いんだよ」

実際あつちの世界でもネカフエだけじゃなくてそんな廃墟に入り浸った事もあるしな。クラネルさんと扉のない玄関口をくぐって教会の中に入った。屋内も外装に負けず劣らずの朽ちっぷり、雨風凌げりやいいつて言つたがこれは中々だぞ。

そこから祭壇奥にある薄暗い部屋のまた奥にある本の無い本棚のまたまた奥にある地下へと伸びる階段を下りドアを潜ると地下室とは思えない位には生活臭のする小部屋があつた。

「神様、帰つてきましたー!。ただいまー!」

元気よくクラネルが声を張り上げると紫色のソファアに寝っ転がっていた彼女はクラネルの元にテトテトと小走りやってきた。

「やあやあー!お帰り!。今日はいつもより早かつたね?」

「ちよつとダンジョンで色々あります!」

「おいおい、何かあつたのかい?。悩み事ならボクに相談するといい!。…つておわあー!。ベル君!。後ろの彼は…!」

黒髪ツインテールでリボンに銀色の鐘^{ベル}。幼い体に似つかわしくない豊満な双丘。この人^{ロリ巨乳}がクラネルの言つてた神なのか…。実感湧かぬーな。

「ども、訳あつてクラネルさんのファミリアに所属させてもらいに来ましたハチマン・ヒキガヤつす!。宜しくつす!」

「ヒキガヤさん…さつきとテンションが全く違う…」

「言うな、ここは掴みが肝心なんだよ。ボソボソ喋ってるやつなんて誰も欲しかねえよ」

「全部聴こえているよ…」

ほらみる、神様呆れちゃってるだろ。

「それにしても、入団希望者なのかい？ホントかい？イタズラとかじゃなくて無名のボク、ヘステイアのファミリアに入りたいのかい？冗談とか許さないからね？」

怖っ！最後らへんガチで殺気放つてた気がすんだが…。

「まあ、色々困ってる所をクラネルさんに助けてもらいまして、晴れて新人冒険者になりました、ファミリアに入れてもらいたいな…なんて」

なんならもうギルドに書類提出しちやっただから後戻り出来ない、というかマジで路頭に迷うから入れて欲しいなって…。

ちらりと神ヘステイアに視線を移すと彼女は涙目になりながらウンウンと頷いていた。

「やったねベル君！これでソロでダンジョンに潜る必要がなくなったね！」

「やりましたね！神様！」

2人はヒシつと抱き合ってるがどうしてだろうかこの2人が兄妹にしか見えない。

「それじゃあハチマン君だっけ？さつきと恩恵を刻んじやおう！その後ベル君のステイタス更新だぜ！」

「ちよちよちよ、そんな簡単に良いんですか？」

「ん？なんの事だい？」

「クラネルさんは滲み出るお人好しオーラでファミリアに勧誘してくれましたが神様は嫌がらないんですか？曲がりなりにも目が腐った男なんて普通ファミリアに入れないんじゃないんですか？」

そうだ。町を歩いてる時もすれ違う人達はヒエツとか言っただけ怖がる人もいたし軽くシヨックで倒れてる人なんかもいた。そんな男をファミリアに入れるなんて

「何を言ってるんだい？この街では外見なんて所詮個性であって差異ではないんだよ。町の人をよく見たかい？ヒューマンや亜^{デミヒューマン}人、エルフにドワーフそれに神だっている。目が腐ってるなんてプラスにもマイナスにも働くアドバンテージでしかないんだよ。よってそんな変な理由でファミリア入団拒否なんてしないよ！」

朗報　この人マジで女神だった。

「僕もヒキガヤさんの目は全然気になりませんよ！」

付け加えるようにクラネルが言う。……まったく、どうして神もクラネルさんもお人好しなんだろうか。

「ささ、恩恵を、刻んじやうから上半裸になつてくれ」

言われた通りに服を脱ぎ上半身半裸に首から下げてるペンダントだけになりうつ伏せになって神様に背中を委ねる。神様は俺の背中を数回撫でる。ゾワツ、とする。チャリと音がした数秒後に背中に何かを垂らされる。ロウソクではない、血だ。血が落とされた場所を中心に指でなぞり始め、ゆつくりと刻印を施す。

「むむっ!!これは…」

「何かあつたんですか？」

恐る恐る尋ねてみる。まさか爆発するとかじゃないでしょうね。

「いや、ベル君のも終わってから紙に移して見せるよ」

一通りの作業を終え神様は俺達にステイタスを書いた紙を手渡し
てくる。

ハチマン・ヒキガヤ

L v. 1

力：I　50　耐久：I　8　器用：I　25　敏捷：I

43　魔力：G　205

《魔法》

【魔力操作】

《スキル》

□

魔力操作？魔法なんて縁がないと思っていたが…

ん？スキルの欄がぼかしてある文字があり読めないようになって

る。

「神様、このスキルのスロットはどうしたんですか？何か消した跡があるような…」

「ん、ああ、ちよつと手元が狂ってね。いつも通り空欄だから、安心して」

「ですよー…」

肩を落とすベルを端目に神へスティアを見ると目が合ってしまった。

あ！露骨に目え逸らした！それに下手つぴな口笛なんか吹いてるし。

絶対なんかあるだろ…

それから晩御飯にじやが丸くんなるものを食べたがこれまた美味しいったらありやしない。今度作ってみたいな。

夜遅くに目が覚める神様やクラネルを起こすまいとひっそりと部屋から出て地上に戻る。まだマトモな椅子に腰を落とし軽く深呼吸。ヘスティア様のファミリアに所属して半日も経ってないが分かったことがある。このファミリアはとてつもなく貧乏だ。今日の晩御飯からみて恐らく2人で生活するのに精一杯なのだろう。そこに俺が入ったと考えると更に重荷になりかねない。武器なんて買う余裕がないだろう。

足でまといにはなりたくない。

魔法なんて知らない。どう使うかも知らない。だから知らなくて…！

「ちちんぷいぷい」

取り敢えず言ってみたが出てくるものは何も無く夜風が吹いているだけだ。虚しいな…。

「エクスペクト…やめとこ」

色々な意味で危ない気がする。

手を出し全神経を集中させる。

魔力の流れをイメージする、水の流れ数多の分岐路を閉じ手のひら

ただ一点に絞る。出すものは、そうだな、剣なんてどうだろう。西洋の剣だ。

「出た…」

フツと出てきたそれは青く発光したただそこにあるだけだった。

「この調子で…」

色々試したり試行錯誤をしてみる。夜はまだまだ長い。

たった1人の家族が連れてきた子が1人で練習している。どうやら発現した魔法の実験らしい。

出した剣は砕けたりどっかに飛んで行ったりでめちやくちやだがボクではどうしようもない。それでも彼は続ける。その内彼は出した剣を掴み振り回してみたりしてる。あれは、極東の技かい？もうそこまで維持できるようになったのか…彼の成長速度には驚かさされる。それも彼のセンスが抜群に良いのか…彼の知らないスキルのお陰だろうか…

Devils soul
悪魔の魂

・不明

スタイリツシユライズ

・早熟する。

・敵に攻撃を命中させる程成長する。

・敵の強さにより効果向上。

・戦意を喪失した場合ステータス激減。

スタイリツシユライズ…ベル君に発現したりアリスフレーザーとは似て非なるもの。このスキルがあれば彼は確実に強くなってくだろう。一旦彼の事は保留してベル君の事を……!!

そんな事を思ってしまった自分が嫌いになる。

そうじゃないだろ…彼だってファミリアだ。家族だ。

邪険にする事は絶対にはいけない。

「今日はこの辺にしておくか」

いけない！直ぐもどらなきや！

「…………んあ」

朝ごはんを作るため朝早くに起きる習慣が身についていたのがオラリオでも発揮されてしまうとは…もしや俺社畜ならぬ家畜の才能があるんじゃないや？いらねえよ。

「…………ん」

ちやうどクラネルも起きたらしく目をゴシゴシと擦ってる。

「ヒキガヤさん、今日はどうします?」

「ああ、ダンジョンに行ってみるさ」

「じゃあ僕も行くよ」

「そ、そうか…」

「へへっ」

「なんだよ急に笑いだして、キモイぞ」

「誰かとダンジョンに潜るのが初めてだからつい嬉しくて」

クラネルは俺と会うまでは1人でダンジョンに行っていたという。

アドバイザーのエイナさん曰く自殺行為らしい。

メインストリートは昨日とは違い人混みがなくやけに広く感じる。

それでも人はいてパルウムやドワーフが見受けられる。

「!?!」

2人同時に振り返る。気持ち悪い感じがする。まるでパン屋にいるどのパンを喰おうかトングをカチカチ鳴らすOLを見ている様な感じ…いや、この場合俺達がパンになった気分だ。

「感じたか?」

「ヒキガヤさんも?」

「ああ、気持ち悪いなあ」

「…………あの」

2人してすぐさま身構えるが声をかけてきたのはウェイトレスの格好をしたヒューマンの少女だった。

「す、すみません。少し驚いて…」

「い、いえ、こちらこそ驚かせてしまって…」

「何か僕達に?」

「あ…はい。これ、落としましたよ」

差し出してきたその手には紫色の結晶だった。これが魔石ってやつか。

「す、すいません。ありがとうございます」
「なんだ。クラネルが落としただけか…」

「こんな朝早くからダンジョンへ行かれるんですか？」

「はい、仲間と軽く行ってみようかななんて」

「コミュニケーション高いなあと思ってるけどグウと俺の生意気な腹が鳴り出した。」

「きよとんと目を丸くする2人…なんだよ。」

すぐにプツと笑い出すウエイトレス。グハアツ!!ハチマンのハートに痛烈なダメージが!

「うふふっ、お腹、空いてらっしやるんですか？」

「朝を抜いてきたもんで…」

「パタパタと店と思われる場所に戻ったウエイトレスはほどなくして戻ってきた。その手には大きめのバスケットを持って。」

「これをよかつたら…まだお店がやってなくて、賄いじゃあないんですけど…」

「いや、受け取れませんよ。無償の施しは受けないようにしてるもんで…」

「それじゃあ交換条件でどうでしょう?今日の夜、私の働くあの酒場で、晩御飯を召し上がって頂くということだ」

「そういう事なら…いいか?クラネル」

「うん、それじゃあ今日の夜に伺わせてもらいます。僕…ベル・クラネルって言います。貴方の名前は?」

「シル・フローヴァといいます。黒髪の貴方は?」

「…ハチマン・ヒキガヤです」

軽く自己紹介を終えた俺達は白亜の摩天楼を目指して歩き出した。

「ガルアアアア!!」

「ふっ!」

「コボルトに一閃を刻む。」

「シャアッ！」

「丸わかりなんだよ…」

背後から飛びかかって来たコボルトの口にノールックでこの剣、名付けて【幻影剣】を突き刺す。これで丁度10匹目だな。

「」「」「グルオオオオ！」」「」

「クラネル！」

「任せて！」

隣にいるクラネルがコボルトの群れに突っ込む。クラネルさんも凄いい勢いでコボルトを切り裂くがどうしても捌ききれず洩れてしまふのは俺が幻影剣を投射して絶命させる。

そんなこんなで粗方モンスターの群れを退けた俺達は少し休憩を挟む。

あのフローヴァさんのくれた昼飯を挟みながらクラネルとダベリング

「誰かと一緒っていいね！」

「そうかもな…ってか初めてだから分かんねーよ」

「それもそっか。それにしてもハチマンは強いね。あの剣でモンスターをズババーンって斬ってて、思わず見惚れちゃったよ」

「俺なんてまだまだだ…クラネルも足が早くて羨ましい」

「ギシシシシ…」

影からモンスターが姿を現す。ゴブリンの群れか…大体8匹かな。

「次は俺の番だな」

「任せたよ」

「任された」

ニヤアと笑いゴブリンに順番に指を向ける。

「さてと、どーれーにーしーよーおーかーなー…お前だ」

「ギイ!？」

何かを感じたのか指名されたゴブリンは後ずさりをしているが幻影剣を手に取り一気に突進し間合いを詰め喉元を突く。

仲間の絶命が早くて把握できないのか何のアクションも起こさないから俺はもう1匹に幻影剣を突き刺し飛び退きその場を離脱する。

「芸術は爆発だ」

その1匹を中心に爆発が起きゴブリンは巻き添えを食らう。

しかし威力も範囲もまだまだ足りない。まだ足りないな…もつと、もつと…力がある。

そんなこんなで俺達は半日はダンジョンに潜っていた。

#3 だから俺達は走る

ダンジョンからホームに戻りステイタスの更新をする。

俺もベルも凄い勢いで成長していてクラネルのステイタスを見た神様は何故か拗ねてしまった。：クラネルよそーゆーとこだと思うよ？ぼかあ

神様もバイトの打ち上げがあるらしく俺達は朝に予約？した居酒屋へと向かう。

日は既に沈みかかっており朝とは違う賑やかさ街にはあつた。

アブナイ衣装を着た獣人の女性が客引きをしていたり、より布面積の少ない格好をしたアマゾネスは服も恥も脱ぎ捨てて闊歩してる。

メイנסトリートを歩きながら俺達は目的の場所を探す。

「ここ、かな…」

『豊饒の女主人』？ってどつかで聞いたような…ま、いいか。

「ここがああの女のハウスね」

「ハチマン、なんか口調おかしくない？」

「気のせいだ、さ、入るぞ」

扉を開けると豪傑そうなドワーフの女将らしき人に猫耳生やしたチャンネー、いやニャンネー。見渡す限り店員全員がが女性だ。

「ベルさんっ」

俺は？とか思いながら声のした方にチラと視線をやればフロアヴァさんはすぐそこにいた。

「どうも」

「はい、いらっしやいませ、お客様二名入りまーす！」

カウンター席の端っこに案内してもらい向かい側にはM.S. 豪傑がいる。なんてプレツシャーなんだ…

「アンタがシルのお客さんかい？ははっ、冒険者のくせに可愛い顔と陰気臭い顔してるねえー！」

ほっつけ。

「何でもアタシ達に悲鳴を上げさせるほど大食漢なんだそうじゃない

か！」

おいおい、フローヴァさん？そんな事言つてませんよ？

笑つて誤魔化さないでね？

メニニューを手に取り値段の方に注目する。今日の稼ぎは9600
ヴァリス。クラネル曰く過去最高の稼ぎらしい。

取り敢えず無難に2人でパスタを頼む。300ヴァリスらしいが
サイゼに比べたらもつと良心的なんだよなあ。

「酒は？」なんて聞かれて遠慮しますと答えてもドンつと酒を置かれ
る。未成年なんだけど大丈夫？

俺達の間にはフローヴァさんが入ってきて何やら話してるが無視だ
無視。こーゆーのはクラネルが適任なんだよ。俺が話しても会話が
続くどころか関係が悪化するまでである。

うへえこのパスタ…でかい！

ガヤガヤ…

途端に後ろの方が騒がしくなり何事かと見ると心臓が高鳴るの
を感じた。俺のオラリオ生活0日目に助けてくれた…アイズ・バレン
タインさんだっけ？フローヴァさんの話を聞くに「ロキ・ファミリア」
の宴会らしく陽キャ宜しくのざわめきを見せている。

「そうだ、アイズ！お前のあの話を聞かせてやれよ！」

あの日いた獣耳のあんちゃんがバレンタインさんに話を振つてい
る。

「あの話…？」

「あれだって、帰る途中何匹か逃がしたミノタウロス！最後の1匹、お
前が5階層で始末しただろ!?それで、ほれ、あん時居たトマト野郎共
の！」

グサツ!!心臓が別の意味で高鳴る。ベルの方を見るとガタガタ震
えてる。兎かよ…

「それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出っつていうようなひよろく
せえ冒険者が！しかも2人も！」

俺たちだな…しかし常にクールを心に置いてる俺、こういった陰口
には慣れたもんだ。…そこは奴らに感謝かな。

「それでそいつら、アイズが細切れにしたくっせー牛の血を全身に浴びて…真っ赤なトマトになっちまったんだよ！くくくっ、ひーっ、腹痛てええ…」

男の話聞いた他のメンバーは失笑し、他のテーブルの部外者は笑いを堪えている。

「それにだぜ？そのトマト野郎、叫びながらどっか行っちゃまって…ぶくくっ！うちのお姫様、助けた相手に逃げられてやんの！」

「アハハハハッ！そりや傑作やあ！冒険者怖がらせてまうアイズたんマジ萌えー!!」

「ふ、ふふっ…ご、ごめんなさい、アイズっ、流石に我慢できない…！」

「…」

「あああん、ほら、そんな怖い目しないの！可愛い顔が台無しだぞー？」

「ほんと、ざまあねえよな。まったく、泣き喚くくらいだったら最初っから冒険者になんかなるんじゃないやねえつての。ドン引きだぜ、なあアイズ？」

「…」

「更にもう1人はアイズの気を引きたいのか気付いたらここにいたーとか抜かしてやんの！」

「なんやそいつ、ウチのアイズたんの色目使うなんて100年早いわー！」

仰る通りで…バレンティンさん？すみませんね。迷惑かけちゃつて。

「ああいうヤツがいるから俺達の品位が下がるっていうかよ、勘弁して欲しいぜ」

はっ！他者の失敗談をを酒のツマミにしてる奴らに品位もクソもねーだろ。

「いい加減そのうるさい口を閉じろ、ベート。ミノタウロスを逃したのは我々の不手際だ。巻き込んでしまったその少年達に謝罪することとはあれ、酒の肴にする権利などない。恥を知れ」

「どうやら少なからず『ロキ・ファミリア』には常識人がいるようだ。『おーおー、流石エルフ様、誇り高いこつて。でもよ、そんな救えねえヤツを擁護して何になるってんだ？それはてめえの失敗をてめえで誤魔化すための、ただの自己満足だろ？ゴミをゴミといって何が悪い』」

「これ、やめえ。ベートもリヴェリアも。酒が不味くなるわ」

ーズルズルズル。

「アイズはどう思うよ？自分の目の前で震え上がるだけの情けねえ野郎を。あれが俺たちと同じ冒険者を名乗ってるんだぜ？」

「…あの状況じゃあ、しようがなかったと思います」

ーズルズルズル、ズルズルズル。

「何だよ、いい子ちゃんぶつちまって。…じゃあ、質問を変えるぜ？あのがき共と俺、ツガイにするならどれがいい？」

「ベート、君、酔ってるの？」

「うるせえ。ほら、アイズ、選べよ。雌のお前はどの雄に尻尾降って、どっちの雄に無茶苦茶にされてえんだ？」

「私は、そんな事言うベートさんとだけは、ごめんです」

笑いを堪える為にジヨツキで口を隠す。

m9 (ハハ) プギャー！振られてやんの！

「無様だな」

「黙れババアツ。…じゃあ何か、お前はあのガキに好きだの愛してるだの目の前で抜かされたら、受け入れるってのか？」

ババア!?めつちや美人だろ!?あれでババアとか…あつ…(察し)

「……っ」

震えるベルに少し詰め寄る。別にそーゆー事じゃないからね？

「ベル、逃げちまえ。嫌な事、どうしようもない事があつたら逃げてもいいんだ」

「ハチ、マン…」

「泣くなよ…」

イタイオオカミオトコはまだ続ける

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ」

「はて、アンタみたいなイタイ人は知りませんねえ」
「喧嘩売ってんのか？ いいぜ？ 買ってやるよ」

ガタツと、俺も立ち上がる。あんちゃんは舌打ちをして扉の先に行く

…のを俺は黙って見てる。

あんちゃんが外に行ったのを確認した俺は静かに席に座り静かにパスタを食う。

後にシル・フローヴァはこう語る

「あそこまで無責任な人は初めて見ました。後パスタを、食べる姿はまるで貴族のように上品でした。だってフォークとかスプーンの音がしませんしジョッキは何故かワイングラスに見え机にはテーブルクロスが敷いてあるように見え、明かりはまるで黄金の蠟燭立てのように彼を照らしていました。こう、上手く言えませんが…スタイリッシュ？ でした！」

「てめえ!! 何で表に出ねえんだ!?!」

「え? だって俺は喧嘩するなんて言っていないし…」

「この期に及んでそんな事言うのかあ!?!」

「うるせえなあ…」ボソツ

「聞こえてんだよ!」

最後のパスタを急いで口に含む。何本かはみ出してしまう。

カウンターにドンと金の入った袋を置く。

「モゴモゴモゴ」(ご馳走様でした!)

「あっち向いて言いな!」

許可も降りた事なのでイタイあんちゃんの方を向く。

「ああ? んだよその目は…」

「フオフオわほ」(デフォだぞ)

「飲み込んでから言え!」

口の中のものを飲み込み、首を上に向けながら口からはみ出たパスタを嚼る。勿論トマトソースはヤツの顔と服に向かって飛んでいく。

食らえ！

当時の状況についてミア・グラントは語る

「あそこまで清々しい嫌がらせは初めてだね。相手が白モノの服を着てることを承知でやろうとする度胸。ソースモノの汚れはこれまた取れにくいんだよ。キレイな楕円を描きながらボウズの口に入ってく。パスタ。綿密に計算されたより早くより広範囲に飛ぶように計算されたあの動き。……鬼畜の所業だね。」

「てめえく！またやりやがったな！」

「近くにいたお前が悪いな」

「んだとお!?!じゃあ別んどこ向いてやりやいいだろ!?!」

「それじゃあ他の人に迷惑が……」

「俺にはいいってか!」

「駆け出し冒険者を間接的に殺しかけたんだ。いやもしかしたらお前の言う雑魚冒険者の処理か酒のツマミにする為にわざとミノタウロスを見逃したのかもしれない。だって……笑えるネタだもんなあ?」

この一言で【ロキ・ファミア】ではない冒険者達がざわめきだす。フフフツこれが俺の狙いよ。

「んだと?舐めんじゃねえ!!」

逆上した男が殴り掛かる。

「ベート、辞めるんだ」

「フィン!邪魔すんじゃねえ!」

チツ、下が下なら上も上だと思っただがそこはしっかりとらしてららしい。

「部下が失礼した」

「ああ、初めて居酒屋で飯食おうとしたらこれだ。まったく、オタクのワンチャンは狂犬病かなんか?」

「狂犬……なんだって?」

えっ……この世界狂犬病ないの?

「あー、一種のビョーキとでも思ってくれ」

「俺はビョーキじゃねえ！」

「ビョーキの奴は皆そう言うんだぜ！」

「ベートも落ち着いて…あまり見ない顔だね、新人かな？」

「だったら？潰すの？勘弁して欲しいが、絶対負けるし」

「じゃあなんでベートに突っかかったのかい？彼のレベルは5、悪いけど実力はハッキリしてるハズだが…」

「げっ、レベル5!?マジかよ…」

「戦闘だけが全てじゃない、あんたみたいにコツチも使わなきゃ生きてけないだろ？」

頭をコンコンと指でつつく。

「後、その人を値踏みするような目は辞めてくれると嬉しい。正直今朝もされてイラついてんだ」

「待ってくれ、君の名前を聞いてもいいかな？」

「通りすがりのトマト野郎さ…じゃあ女将さん、お騒がせしてすみませんでした、代金には色付けといたんで勘弁して下さい。………後おいワンコロ！」

顔だけベート・ローガの方を向く。

「あ?んだよ」

「絶対追い抜かして吠え面かかせてやんよ」

「………はっ、てめえにできるもんなら見せてみる。死ぬなよ…」

「ああ…」

「また来な！」

「うす」

女将さんに元気良く見送られる。なんだろう…悪い気はしない。

夜風が寒い外に出る。

「うう、寒…」

「あの…」

声のした方を向くと夜風に金髪をたなびかせる美少女はそこにいた。

「何か用…でございませうか？」

「どうして敬語なの？」

#4 女神のリベンジp

「うおおおおおおー！」

絶対超える！超えてみせる!!いつもの汚い手なんて使わない!!!

力だ！もつと力が…！

八つ当たりにも等しい感情に身を任せモンスター共を切り刻む。

3、4回切ると幻影剣は砕けてしまうから新しいのを次から次へと新しいを出す。

もう100にも届く程モンスターを殺した。コボルトやゴブリンは勿論ウォーシャドウやフロッグ・シューターを相手取る。

姿勢を低くしウォーシャドウの足を掴み振り回し他のウォーシャドウの頭と頭を衝突させて同時に殺す。

フロッグ・シューターは伸ばしてきた舌を掴み空いた口に幻影剣を3、4本投射する。

流星に魔力も尽きてきたのか地に膝をつけてしまう。

くそ…こんな所で立ち止まってる場合じゃねえんだよ！

コケにされた。久しぶりにプライドなんてもんが傷ついた気がする。

あの時は普通でいられた。だって真実だったのだから…

「フフフフ…」

可笑しくて笑っちゃまう。久々にこんな感情が湧いた。

「……誰だ！」

物陰から視線を感じる。モンスターか？幻影剣を俺の周りに固定し物陰周辺をロツクオンする。

「つたく、最近の若者は礼儀を知らないのか？」

手を上げながら物陰から出てきたのはローブを被った老人だった。黒髪のオールバックで神父を彷彿とさせる格好をしていた。いかにも冒険者向きではないのはなりたての俺でも分かった。

「そんな所にいるからモンスターか闇討だと思わないか？」

「ふむ、そう考えればそうだな」

「で、何か用でもあるの?」

「フフフツ…渡したい物があつてな…」

「?」

そう言い彼が渡してきたのは何か長いものが包まれた布だった。

「これは?」

「開けてみたら?」

言われるがままに布を取ってみると…

「これは…剣?」

それは灰色のロングソードだった。

「ん?この形って…」

「お前さんがピュンピュン飛ばしてんのと一緒だな」

当然だろ?という風に言ってるが頭が混乱して考えが纏まらない。

どうしてだ?どうして幻影剣と形が一緒なんだ?

「そいつはフォースエッジっていうからな!大切にしろよ」

そう言いながら去る彼を追いかけた方がいいと思うがそうはしなかった。

「なーんか、臭うなあ」

バキバキ…

壁からモンスターが1匹産まれてくる。

「試し斬りには丁度良いじゃねーかよ…」

生を受けたばかりなトカゲの首元に目掛けてフォースエッジを振り下ろすと見事に首と胴体は別れを告げる時間も無く離れ離れになった。

「…ん?」

この剣何かおかしい…切れ味に問題は無いが何かしっくりこない。まるで何かを隠しているような…

ギョルルルル…

そろそろ戻るか…

街を歩いているとふと目につく喫茶店があった。

「コーヒー…か」

そういえばここに來てから全然飲んでないな…。

見る限り今の所客はいないようだ。

「行ってみるか…」

扉を開ければ鼻腔をくすぐるコーヒーの匂い…はあ、これなんだよ。

「おばちゃん、コーヒー杯、あと練乳と砂糖、あーいちごパフェも」
「っ」

「あいよ」

おばちゃんがテキパキと準備するがその姿には一切の無駄がなく洗練されていた。

「はいよ」

出されたコーヒーに練乳と砂糖をぶち込む。一見適当に入れてるようだが体がマックスコーヒーの味を覚えているため適量に完璧にマックスコーヒーが再現されていく。

一口啜る。

「流石マックスだな…」

甘みが脳に届き頭に掛かっていたモヤが一気に晴れてく。

残りは一気に胃に詰め込む。

いちごパフェにも手を付けるがこれもまたとんでもなく美味しい。

よし、これからはここに通うとしようか。

「ごっそさんでした」

「まいど、520ヴァリスだよ」

「ほい」

寄り道もしたがホームに帰るとベルと神様がベッドで仲良さそうに寝ていた。

「相変わらず仲良さそうなこっつて…」

背中に背負っていたフォースエッジを立て掛けるために外そうとするとそれは光となり俺の中に吸い込まれていった。

何を言っているかわからねえと思うが俺もさっぱり分からん。

改めて出て来いと思うとフォースエッジはフツと出てくる。

…そんな感じね。
さてと…俺も寝るか…

くとある場所く

カツン…カツン…空虚な空間には似合わないヒールの音が鳴る。

女の目的は最も奥にあるたつた一つの牢獄。

女は格子を優しく掴み、中にいる男に話しかける。

「彼が現れたわ」

男は岩のように動かなかつた首を上げ女を見る…いや、その目はただただ虚空を写すだけだった。

「……………」

女にでさえ聞こえない声で彼は呟く。

「じゃあ、必要な物は言いなさい。何でも揃えてあげる」

「……………」

「約束しましょう。彼への罪滅ぼしが終わったら貴方の魂を還してあげるわ」

まるで何かの皮が剥がれたような音がする。彼が指を動かしたからだ。

「font:u87」スパード「font」

確かにその声を聞いた彼女は不敵な微笑みを浮かべた。

そしてその微笑みは誰にも見られることはなかった。

あれから丸一日寝ていたらしく俺はベルの叫び声で起こされてしまった。なんだよ…女神に添い寝されたからってうるさいなあ…

後神様、髪の毛事は気にしないでくれ…グレてないからね？

ホントこれ、いつ治るのかな…

「ととと取り敢えずステイタスの更新でもしましょうか！」

ハチマン・ヒキガヤ

Lv1

力:H 130↓F 312 耐久:i 32↓I 40 器用:

G 220↓F 350 敏捷:H 190↓G 269 魔力:F

《魔法》

魔力操作

《スキル》

相変わらず凄い成長、いやこれじゃまるで『進化』とでもいうのか
：

ベルのステイタス更新をしている神様を見るがやはり何かあるような顔をしてる。何か知られちゃ不味い事でもあるのか：はたまた知らせる必要はなかっただ隠し事が苦手な人なのか：

「ベル君、紙を切らしてしまったから今日は口頭で伝えてもいいかい？」

「あ、はい。僕は構いませんけど…」

ちよーちよー、思いつきしあったでしょうが。

「とまあ、2人の熟練度がすごい勢いで伸びてるわけ。何か心当たりはある？」

「6階層まで行ったんだっけ」

「ぶっ!? あ、あふおー! 防具もつけないまま到達階層を増やしてるんじゃない!」

「す、すみません」

「…これはボク個人の見解に過ぎないけど、君達には才能があると思う。冒険者としての器量も、素質も、君たちは兼ね備えちゃってる」
なんか、そう言われるとむず痒いというか、なんと言うか…

「君達はきつと強くなる。そして君達自身も、今より強くなりたいと望んでいる：約束して欲しい、無理はしないって。昨日みたいな無茶はしないと誓ってくれ。強くなりたいうって君達の意志をボクは反対しない、尊重する。応援も、手伝いも、力も貸そう。：だから、お願いだから、ボクを1人にしないでくれ」

神とは根本から俺たちみたいなのとは違う。永遠を生き、変わることの無い神生を送ってきた。刺激を求めて下界に降りヒトと触れ合い寵愛してきたから失いたく無いのだろう。

寂しい…：そんな感覚はどうの昔に無くなっている。

でもこの神は違う。俺じゃない孤独は辛いし静寂は身を蝕む。そんな体験をしたのだろう。その果てにベルと出会った。ベルもまた然り。

そんな2人の間に入った俺は上等な料理にハチミツ、いや練乳をぶちまけるが如き所業をしたのかもしれない。

どうもいたたまれない。ベルへの恩返しが終わったらどうしようか。

「ハチマンくんとベルくんつ、ボクは今日の夜…いや何日か部屋を留守にするよつ。構わないかなつ？」

「えっ？あ、分かりました、バイトですか？」

「友人の開くパーティーに顔を出そうかなと思つてね。久しぶりに皆の顔を見たくなつたんだ」

友人：パーティー…プロム…ウツアタマガ。

それから神様は宴に行きベルはダンジョンに潜りに行った。

俺？俺は…寝る。もうね、疲れが溜まりまくりのよ、時には休みも必要だよね。

〜豊饒の女主人〜

「すみませ〜ん、その、シルさん…シル・フローヴァさんはいらつしやいますか？」

『豊饒の女主人』へ足を踏み入れた僕は自分でも情けないくらいの声しか出なかった。

「あああ！あん時の食い逃げニヤ！シルに貢がせるだけ貢がせといて役に立たニヤクニヤつたらポイしていった、あん時のクソ白髪頭ニヤ！！」

「貴方は黙っていてください」

「ぶにゃ!？」

エルフの店員さんがキャットピープルの店員さんに見舞った一撃が見えなかった。

直ぐにシルさんはやって来る。一昨日の事を思い出すと恥ずかしくてしようがない。

「昨日は、すいませんでした。お金も払わずに、勝手に」

「いいんです…こうして戻ってきて貰えたんですから、私は嬉しいです」

「これ、払えなかった分です。足りないって言うなら、色を付けてお返しします」

「あら？フフツツ、あの人も素直じゃないんですね」

何かを察したそうに笑うシルさん…。誰の事を言ってるんだろう。

「坊主が来てるって？」

カウンターバーの内側にあるドアからぬうと出てきたのはこの女将さん——ミアさんだった。

「ああ、なるほどね、金を渡しに来たのかい。関心じゃないか…でも受け取れないね」

「ええっ!?!ど、どうしてですか?ぼ、ボクはその、食い逃げをしたんですよ…」

「坊主、お代はとつくに払われてるんだよ」

「え？」

え?お代はとつくに払われてる?誰が…

ふと頭に彼の顔が浮かんでくる。ダンジョンに行くかと誘ったが手をヒラヒラとさせて断った彼が…

「全く…あの坊主も大概だよ。酔ってるとはいえ一級冒険者に楯突くなんてさ。フフっでもスッキリしたよ」

「な、何があったんですか…」

「本人に聞きな!」

「…坊主」

「何ですか?」

「冒険者なんてカッコつけるだけ無駄な職業さ。最初の内は生きることだけに必死になってればいい。背伸びしたって録なことは起きないんだからね」

目を見開く。ボクの事情を見通しているのだろうか?彼女はニツと笑みを浮かべる。

「最後まで2本の足で立ってたヤツが1番なのさ!惨めだろうか?」

だろうとね。すりやあ、帰ってきたソイツにアタシが盛大に酒を振る舞ってやる。ほら、勝ち組だろう?」

ミア、母さん……!

「気持ち悪い顔してんじやないよ! さあ! 行った行った! アタシにここまで言わせたんだ、くたばったら許さないからねえ」

「大丈夫です、ありがとうございます! 行ってきました!」

勢いよく駆け出して店を出る際、「行ってきます」なんて叫んでしまわずいと顔を赤くさせっぱなしだった。

モンスターフィリア
「怪物宴?」

「そうですよ、知らないんですか? 『ガネーシヤファミリア』主催のお祭りです」

知らない単語に戸惑う俺は今洋服屋にいる。

神様が宴に行つてから3日経つが実はここに来てずっとジャージしか着てない俺である。汚いよね。

さすがにヤバいと思つたから部屋を飛び出した訳だが……

「やつぱコートかなあ?」

赤、青、紫、黒のロングコートが隅っこにポツンとある。店員曰く試しに作ってみたがどうも売れないらしい。

オラリオの人達は俺のいた世界とは違い奇抜な格好をした人が非常に多い。今までジャージで過ごせたのはそのお陰だと思つが……流石にね?

「少し痛手だが、ズボンとかも一緒に貰おうかな」

「ま、毎度ありがとうございます!」

「それと、服がボロボロになつたらまたここで作ってもらおうと思うのでストックを作ってもらえませんか?」

「分かりました! 他の店員にも分かるようにお名前を伺つてもいいでしょう?」

「ハチマン・ヒキガヤです」

「ではヒキガヤ様、今後とも当店をどうぞ最前お願いします!」

試しにと紫のコートを着てみる。

うん、なんだか足りない気もするが気にしない。

一旦荷物はホームに置いてこうかなと踵を返すと目の前には金が広がっていた。マックスコーヒーとは違うまた別の独特な香りが俺を包む。

しかし気を取られる事0.5秒、その匂いをハッキリと頭のデータベースに記録した後その人物を躲そうと横にズレるとその金もまたズレる。

「あの…」

「……」

「なんか用でも?」

「……」

無言を貫く金髪のチャンネー、いや何となく正体分かんだけどね?

「……」

「……」

ダッ!

俺は勢い良く地面を蹴る。チャンネー改めアイズ・ヴァレンシユタインから反対の方向に駆け出す駆け出しの俺。

しかし不意打ち虚しく上から再び金アイズ・ヴァレンシユタインが降ってきて目の前に立ちはだかる。

今度は向かい合う形で対面する。

「……」

「……あの」

「はいっ!」

いきなり話しかけてきたからつい声が裏返ってしまう。

「あれから、順調そう?」

「ああ、まあな、着実に強くはなってる気がする」

「良かったら付き合う?」

刹那頭が真っ白になる。いや、中身の話ね?

フラッシュバックするあの日の光景…

『好きです、付き合ってください…なーんて言うと思った?』

『ナルガヤキツも!』

『だーれー？ヒキガエルにメアド教えたのー？ちよーキモイんだけど！』

「アンタを好きな奴なんている訳ないでしょ〜？」

「えーと、友達じゃダメかな…」

消し去りたくて仕方ない記憶が鮮明に思考を侵食する。

「大丈夫？」

しかしそれはアイズ・ヴァレンシユタインによって制止された。

「あ、ああ、平気だ。心配かけたな…」

「顔が真っ青だよ？」

「か、糖分が足りなくて…」

咄嗟に誤魔化す。誤魔化しきれないと思うが…

「おーい、アイズたーん！どこいくねーん！」

後ろから追いかけてきた限りなく男に近い神様がやってくる。

ナイスタイムイング！

「アイズたーん…誰やそいつ」

後半ドスの効いた声でアイズ・ヴァレンシユタインに話しかけるが目では「自己紹介しろや、われ」と語りかけてくる。怖っ！

「ど、どうも、偶々ヴァレンシユタイン氏に助けていただいた者です。

じゃあ俺は用事があるんでこれで！じゃ！」

「あ……」

後ろで寂しそうな声を出してるアイズ・ヴァレンシユタインを無視して帰ろうとするが運命がそれを許さなかった。

「モンスターだー!!」

嘘だろ…と思つてると頭に「頑張つてね」なんて女の声が聞こえた気がした。運命どころか因縁じゃないすか…

よっしや、さっさとモンスターぶちのめして犯人にビンタかましてやるか！

フォースエッジを取り出しモンスターと対峙する。

「全く…退屈させてくれないな、この街は！」

さあ、パーティーでも始めようか…

#5 あの日

拳を振り下げるモンスターの拳をフォースエッジで突き刺す。

「ガアアアアアア!!」

痛みに悶えるモンスターの顔を綺麗な十字に切り刻みトドメと言わんばかりに首を切断する。

ゴシヤ、と4等分にされたモンスターの顔が落ちる

「これで3匹目…」

流石にちよい下ら辺の層にいるモンスターは手応えを感じる。

フォースエッジを背中にしまいダイダロス街の住宅街の屋根に登る。

「他には…」

スタツ

隣に軽い音を立て此方を見てるのは『戦姫』。決して歌ったりもしないし殴ったりもしてこないだろう。…多分。

「何か用か?」

「どうしてそんなに強いのか?」

「嫌味か?」

「そんなこと、ない…」

目に見えて少ししよぼんとする『戦姫』。

「ひたすらダンジョンにいたからな」

「どんな戦い方をしたの?」

「あ? ひたすら斬ったり殴ったり掴んでは投げてみたりしてただけだが…」

「…独特、だね」

そうか? 別に誰かが教えてくれるような戦い方なんて無いし。ベルからは微妙な顔をされたが間違ってる筈がないだろう。人によって戦い方なんて千差万別。ベルはナイフで戦うならヴァレンシユタインは腰に提げたレイピアを使ったりするのだろうか。

「ヴァアアアアア!!」

少し離れた場所からモンスター雄の雄叫びが聞こえる。丁度反対側にも一体モンスターを発見した。

「ヴァレンシュタインはあつちのモンスター、俺はあつちの猿んところに行く」

「うん、気をつけて」

「……」

人に心配される経験が少ない為なんとも言えない気持ちの悪い感覚に襲われる。

「…訳わかんねえよ」

彼女の背中を見ながら呟く。見ず知らずの男にそこまで気にかけるか？

しかしそんな事に時間と思考を割く暇は無いから足早にモンスターの元へ向かう。

「ほあああああああああ!?!」

何やってんの？アイツら…

そこには神様をお姫様抱っこしてるベル・クラネルの姿があった。逃げるクラネル達を追いかける猿のモンスター、少ししっこすぎやしないか？

俺も追いつく為に走ってるがクラネルの速さは知ってる通りめちゃくちゃ早い。しかしそれに負けず劣らずモンスターも早い。

「あそこは……」

しかしクラネル達が行き着いた先は袋小路だった。

目に見えてクラネルの顔が暗くなっていく。

ダイダロス街の住民達は屋内からクラネル達を盗み見している。

「見捨てるのか……」

良く考えればそれもそうだ。

誰だって自分が可愛い、巻き添えは喰らいたくない。そんな事は当然の反応だ。

ジワツ……

……見てるならそこで見てろ。

喋ってる神様とクラネルの間をモンスターが拳を振り上げる。

「不味い……」

拳と彼らの間に割り込みモンスターの拳をフォースエッジで受けるが攻撃は防いでも威力までは防げず吹き飛ばされ壁に激突する。

「がはっ……」

「ハチマン!? どうしてここに!?!」

「モンスターが逃げたらしいから狩ってたんだよ。多分そいつが最後になる」

「ハチマン……服似合ってるよ。後髪の毛また少し白くなってよ」

「今、それ言う必要がある、か?」

息絶え絶えに返事をする。なんか悪い気はしない。クラネルからは少し出会ったばかりの戸塚臭がする。天使とまではいかないがな!

ていうかまた髪の毛白くなってんの? マジで何なんだよこれ。

「倒す手はあるのか?」

「ベル君のステイタスを更新して強化したベル君の力をヤツにぶつける」

なるほど、クラネルの爆発的な伸びならもしかしたらヤツを殺れるかもしれない。チラと彼を見てみるとやはりその顔は暗く沈んでいた。

「…無理です、神様。神様も見たでしょう? 僕の攻撃、アイツに効かないんです。少し力が強くなっても、シルバーバックには致命傷を与えられません。僕は…あいつを、倒せません」

見るからに落ち込んでるクラネル、こりや必殺技的な奴が弾かれたんだろう。

「攻撃が、通用するようになれば?」

「え?」

「ダメージを与える事ができれば、君はあのモンスターが倒せるかい?」

そう言った神様は手にしてたケースを開けて中身をクラネルに渡す。

「ベル君、いつから君はそんなハチマン君みたいな卑屈なやつになつたんだい？ちよつと前なら運命の出会いとか馬鹿みたいなこと言つて、平気でダンジョンの奥へもぐつていったじゃないか。あの時の能天気な君は、目標を見つけて絶対に強くなるって誓つてた君は、一体どこへ行つたんだい？」

クラネルを諭す様に語る神様：絶対俺の事いらないよね？

「ボクは君のことを信じてるぜ？こんなの『冒険』の内にも入らない。だってそうだろ？ヴァレン何某とかいう化物みたいな女を目標にしている、冒険者ベル・クラネルなら、あんなモンスターちよちよいのちよいき。ボクが君を勝たせてやる。勝たせてみせる」

「神様……………ハチマンの前で言わないで下さい／＼／」

「あれ？言つちやダメだった？」

「ダメです！」

「ヴァアアアアア!!」

猿のモンスター、シルバーバックが痺れを切らせたのか吠えてる。

「時間は俺が稼ぐ、神様はクラネルのステイタス更新を」

「任せたよ！ハチマン君！」

シルバーバックの前に立ちフォースエッジを逆手に持ち魔力を籠める。

「メインディッシュには少し早すぎやしないか？」

力一杯振るつた斬撃は魔力と共にシルバーバックの足元へ向かい右足を切断した。

「こんくらいでいいかな…」

痛みを怒りに変えたシルバーバックの拳は先程のより早く向かつてくる。

「まだなんだよなあ」

振り上げていたフォースエッジに残っていた魔力をできるだけ充填し追い討ちにと振り下げる。

斬撃は拳とぶつかり相殺される。斬撃は砕け散りシルバーバックの拳も砕ける。あれじゃ暫くは動けまい。

「それじゃあメインディッシュだ。クラネル!!」

バツと物陰からステイタス更新を終えたクラネルが飛び出す。その速さは今までとは比べ物にならない速さだった。

「——あああああああああああああああッッ！」
突撃槍ベネトレイション

クラネルの新しい漆黒の刃がシルバーバックの胸部を穿つ。その勢いを殺しきれなかったクラネルは宙を舞い落っこちた。

「——ッッ!!」

瞬間歓声が迸る。

ダイダロス通りの住民達が興奮を爆発させた。

歓声に当てられたクラネル達は嬉しそうに笑う。

ジワッ……

もう1人の立役者の方を見ると彼女は路上に倒れていた。

彼女の元へ駆け寄ると歓声を振り切ったベルも到着した。

そんな時にも関わらず、いやそんな時にだからこそなのか背中になんか時ぞやの気持ち悪い視線を感じる。

バツと振り返るが何も見えない。

ーきつとそいつがモンスターを放した犯人だ。

「精一杯の殺意を込めて視線の先を睨む。」

「……殺す」

そんな眩きは歓声にもみ消された。

ゾワッ!!

これまで長い間を生きてきたが有り得ない程の殺気を今回の犯人。フレイヤを包む。

「フフフフフ……久しぶりだわあ!この感覚!身の毛もよだつような感じ!でもまだ足りない……人からしたら黒でもまだ覚醒もしてない貴方は純白。その翼が!その咆哮が!その殺気が!オラリオを包んだその時貴方はやっと私のモノになるの……」

お気に入りの2人のうち1人を怒らせてしまった。

しかし収穫もあった。

やはりあの目はあの時のあの方に瓜二つであった。

「子供か血縁者かまたは……まさかね」

そう、あの方の血縁者は何故か途絶えたはず……この世界に誰一人としていないのだから。

「お詫びを考えとかなきゃ後味悪いわね……」

そしてその顔は恋する乙女のそれであった。

途中で出会ったフローヴァさんの提案で『豊饒の女主人』に神様を休ませてもらえる事になった。因みに神様は過労で倒れたらしい。

そんな神様との会話を一通り終わらせたクラネルは俺とテーブル席に座っている。

「じゃあ、始めようか!」

「何をだよ」

「親睦会!」

「ええ……」

「そんな面倒くさそうな顔しないで!」

「めんどくさいじゃん……」

高校入学当初もあつたらしいけど体のいいグループ分けみたいなもんだろ?俺?呼ばれてないよ?事故で入院してたし。

「とは言え親睦会つたって何すんの?」

「軽く自己紹介とかかな?」

クラネル、意外とオドオドしてる感じがするがこういう時コイツは中々引かない奴である事が今日1番の発見だな。

「名前はハチマン・ヒキガヤ」

「それから?」

有無を言わせないような笑顔、やだこの子意外と悪魔っぽい?

「…年は17、趣味は読書位かな…好きな物はマックスコーヒー、イチゴパフェ、オリーブ抜きピザetc…。嫌いな物は…それ以外」

「好きな物と嫌いな物がざっくりし過ぎてるよ!」

「仕方ないだろ、嫌いな物なんて考えると何時ぞやの狼野郎しか出てこないんだよ」

「恨みが強すぎる気がするんだけど……」

「逆にお前は気にしなすぎるんだよ」

「そうかなあ…」

「そうだそうだ、ここは冒険者の街なんだろう？冒険者の性格も質も千差万別、いい人も居るかもしれないしバカみたいな事をする奴もいる」

「それは確定なんだ…」

「当たり前だ。良い奴なんてポンポンいる訳ないだろ」

ふと目を泳がせると慌ただしく皿を運ぶ猫耳生やした女性にエルフと思しき女性、普通の女性、豪傑な女性ガイル。いい人も居るだろうけどよく分からないから保留ね。

「ホントにこの街は色んな種族の人が集まんだな…」

ふと話を逸らすように語る。いやほんと、エルフとかドワーフとかファンタジーの塊みたいなのがわらわらといんだもん。面食らうじゃないだろうけどな」

「そうだね、ボクもここに来たばかりの頃は驚いたよ。ハチマンの故郷にはそういう人達はいなかったの？」

「いなかったぞ、なんなら同じヒューマンなのに肌の色、国、宗教、思想で戦争も虐殺も差別も起こるほど荒れ果ててたさ…まあ、それだけじゃないだろうけどな」

「そんな…」

「まあ…嘘なんだけどな」

「嘘なの!?嘘にしては暗すぎると思うんだけど…」

「フフ、チョットシタドツキリダヨ」

「顔が全然笑ってないよ？」

「他には…」

「え？」

「他に聞きたい事は？」

あんなに興味深々だったんだ。少し位は御要望に答えないとな。

「ハチマンは本が好きって言ったよね。じゃあ好きな物語は？」

好きな物語…か。ホントに色々ある。ラノベ系から日本文学、挙げればキリがない。俺が本を読むようになった切っ掛け…あの本が

あつたな。

「じゃあ八幡、私達北海道に旅行行ってくるから留守番宜しくね」

ボタンとしまったとびらはガチャリとかぎがかけられる音がする。向こうからかぎをかけたのだ。

「いつてらっしやい……」

手に持つくしゃくしゃの作文用紙、そこには「夏休みの思い出」という題名が書かれていた。

リビングに戻れば誰もいなく静まった空気が俺をむしばんでいた。足早に自室に向かい本棚をあさる。

「あつた」

手に取る1冊の古ぼけた本、「ホームアローン」だ。それを机に広げて読みふける。

この本はたんじょうびに渡された500円をポケットに入れ古本屋で買ったのを覚えてる。

こののストーリーは家族旅行にふてぎわで置いてかれた男の子が空き巣どろぼうをきそうてんがいな発想でげきたいする物語だ。ギャグシーンにはクスツとさせられたが個人的には少年の不在を心配し旅行から帰ってきた家族に抱きしめられるシーンが1番印象的だった。

胸が痛かった。未知の感情に押しつぶされそうな感じ……

「あれ？」

不意に泣いていた。ポタポタと終盤のページに涙が落ちる。

汚れてしまったらいけない。

何度もゴシゴシと拭くが何度拭っても涙は落ち続ける。

涙も一通り落ち着かせ机に作文用紙を広げ鉛筆を持つ。

この作文は休み明けの授業参観で読むんだ。ちゃんとした文にしなくては……

そして迎えた授業参観日、勿論というかやはり親は来ず妹の小町の所に行ったのだろう。

親のいない授業参観、でも恥はかけない。妹にも親にも迷惑は掛けられないのだから：

慣れない料理で傷ついてしまい雑に貼られた絆創膏がある指を隠すように作文用紙を持ち教卓の前に立つ。

目の前には興味無さそうにこちらを見る他の生徒の保護者、早く授業が終わらないかなと時計ばっか見つめる奴や早く読みたくて仕方ない奴、寝てる奴、様々な有象無象がいる。

見せてやるよ、俺の思空想い出話話

「僕の夏休み、3年〇組、ひき谷八まん、夏休みに家族と北海道へ旅行に行きました。そこでは蟹をいっぱい食べたりお父さんとスケートをしたりしました。妹はずっとはしやぎっぱなしでとても楽しそうでした。時計塔に行ったりクラーク博士の像をみたり熊を見たり楽しかったです。」

ビキビキとナニかが音を立てて壊れていく、視界がモノクロになっていく、あれ？世界ってこんなにも味気無かったっけ？

止めてくれ……………

「また、行きたいです……………」

ぺこり頭を下げ色のない拍手が送られる。

やめてくれ…

その日の夕飯は父が授業参観で撮った小町のビデオを鑑賞した。

父も母も小町も笑っていた。俺も笑わなくては…

精一杯の笑顔を浮かべる俺は家族と偽りの一つになれた。それが堪らなく嬉しかった。

ヤメテクレ……………

その日は涙で枕を濡らした。

布団をかぶり枕カバーを噛み精一杯嗚咽を殺して殺して殺しまくった。暖かいはずの布団を被ってる筈なのにどうも寒かった。

ごみ箱に入った「ホームアローン」に背を向けて俺は寝ていた。

「ホームアローンかな」

「えーと、それってどういう本？」

席の前にいる白髪頭のベル・クラネルが首を傾げる。そりや分からないだろう。こっちの世界のやつだからな。

「そうだな、一言で言うとな面的な家族愛を描いた物語だな」

「へえ、読んでみたいな」

「悪いがそれは出来ないな、どこにもないんだ。クラネルはおすすめの本とかあるか？」

「あるよ！アルゴノウトって本んだけど凄く面白いんだ！今度ハチマンも読んでみなよ！」

「ああ、そうする」

「2人だけのファミリア^家_族だけどこれからも宜しくね！ハチマン！」

「おう」

ファミリアはいずれ大きくなってく。団員も増えてくれば必然として『1人でも大丈夫』な奴は存在感が無くなってく。ファミリア^家_族なんて、そんなもんだ。

ニコニコと底抜けに笑うクラネルは眩しくてそして届きそうに無かった。

#6 今度はお前から離れない

こんにちは比企谷八幡、あ、いや、ハチマン・ヒキガヤです。今私は隣にいる「ヘステイア・ファミリア」の団長、ベル・クラネルと一緒に正座してます。え？なんで正座してるのかって？そりやあれだよ、「冒険者は冒険してはいけない」なんて教えを破ったからだ。

「キイミイ達はっ！私の言ったこと全っ然っ分かってないじゃない！！5階層を超えた上にあまつさえ7階層！迂闊にも程があるよ！」
「ぐぐぐぐぐめんさいいつ！」

必死に頭を下げるクラネルを端目に 見慣れない応接室をぐるりと見回す。はえ、すっごい応接室って感じ。

「ハチマン君も聞いているの!？」

「ちゃんと聞いてますよ」

「んもう！2人共危機感無さすぎ！つい1週間前にミノタウロスに襲われて死にかけたのは誰だっけ!？」

うぐ、それを言われると弱るといふか…

「まあまあエイナちゃん、許してやりなよ。若気の至りってやつだからナ！」

そう言い花京院よろしく入室してきたのはかつて俺にフォーエエツジを渡したあの神父風の男だ。

「アラル神父…」

「エイナちゃんがどーしても納得できないならステイタスをちよちよっと見せて貰うといい。坊主達もそれで納得してもらったら7階層なり10階層なりと行くといい」

「7階層はともかくそれ以下はダメですよ！」

「どーもーかーくーだ。ほら、脱げ」

淡々と脱ぐことを強要された俺達は揃って上着を脱ぎその背中をエイナ・チュールさんに見せる。

ベル・クラネル

LVI

力：E 403 耐久：H 199 器用：E 412 敏捷：D
512
魔力：I 0
ハチマン・ヒキガヤ
Lv1
力：D 510 耐久：G 299 器用：D 526 敏捷：E
421
魔力：D 514

【魔法】

魔力操作

なんだろう、凄い視線を感じる。

チラと後ろを見るとチュールさんだけでなく神父も此方を覗き込んでいた。クラネルには目もくれず…

「まだ弱いな」

グサツ!!

「何を言ってるんですか神父！駆け出しでここまで伸びてるのなら万々歳ですよ!」

「そうか？ワハハ、いやあ、今まで他の冒険者との接点なんて死体を吊う位しかしなかったが…いやね？ほら、Lv1、なんて聞けば誰しもまだまだだなんて思わない？」

「全員がそうだとは思わないで下さい!」

「そうだな、皆そうだとは限らないもんな…じゃ！俺はこれで失敬するよ。君達の吉報が待ち遠しいナ!」

スタスタと部屋から出てく神父。

「あの、エイナさん。あの人って…」

「ああ、あの人はアラル神父って行ってね、ダンジョンで死んじやった冒険者の亡骸を運んでは共同墓地で吊ってくれてる神父様だよ。たまーにダンジョンにいる時もあるんだよね」

「お優しい人なんですネ」

「そうなんだけど、どこか掴めないっていうか、ダンジョンにいる時も何かを探してる感じがするって他の冒険者も不気味がってるんだ。

今ではあんなにニコニコしてるけどそれまではただ冒険者を吊ってはダンジョンへ、吊ってはダンジョンへって感じだから一部のギルド職員は『悪魔』って呼んだりするんだ」

「それはちよつと…」

「うん、分かるよ？その気持ち、でも1週間前くらいから急に上機嫌になったから余計不気味がる人も増えてさ」

苦笑混じりに説明してくれるチュールさん。

そんなムードを切り上げ俺達を交互に見渡すチュールさん。

「2人とも明日予定ある？」

次の日、俺達は大通りと面するように設けられた半円形の広場に1人立っている。

待ち合わせをしているからだ。

隣のクラネルは顔を赤くしている。(こここれって、デート!?)とか思ってるんだろう。クラネルは分かりやすくして仕方ない。まるで過去の俺を見てる気分だ。…あんな目にあつたかどうかは別として。

「おーい、ベールーくん！ハーチャーマーシーくん!!」

俺の名前、呼びにくいでしょ…そういうのクラネルだけで充分ですよ？待ち合わせの十時ぴったし、と。

「おはよう、来るの早いね。なあに？そんなに新しい防具買うのが楽しみだったの？」

「いやあ、実はハチマンに朝早くに起こされて…」

「え!?!ハチマンくんが!?!」

「ええ、なんでも『女性との待ち合わせは30分前集合が常識だボケ』って言われて」

「ふーん、案外紳士なんだね！」

……………めっちゃ楽しみでした！

なんなら昨日の午後にはダンジョンに潜って集金してたもん！金はあるも損は無いらね!!

「それで？君達？」

「どうかしました？」

「私の私服姿を見て、何か言うことは無いのかな？」

「普段と違い似合ってますよ」

「嬉しい事言ってくれるじゃない！このこの」

そう言いエイナさんに軽くヘッドロックを掛けられる。別に振りほどこうと思えばできるがそんな事はしない、何故なら俺は紳士！女性を傷つける事なんて出来ないのだから！別に胸の感触を堪能してる訳じゃないと断言しよう！

「ハチマン、見た事ない位顔が緩んでるよ…」

聞こえない聞こえない…

「今日行くところは…ダンジョンだよ」

「ええっ!？」

「正確にはダンジョンの上にあるバベルだけどね」

聞くに『バベル』とはダンジョンの蓋をするように築かれた超高層の塔。つまりあの摩天楼施設だ。

ギルドの役割はそのダンジョンの監視、冒険者の為にシャワールームとか簡易食堂や治療施設、更によく使わせてもらってる換金所もある。

今日行くところは商業者にテナントを貸し出している所、つまりは武器や防具の大手ブランドを作ってる「ヘファイストス・ファミリア」だ。それって凄く高い所なんじゃ？とも思ったがどうやら俺達が見て回るのは末端の鍛冶師が作った商品らしくどれも手頃な価格らしい。

武器とかにも色々あるらしく鍛冶師の『恩恵』の力で武器に属性を付与できるらしい。つまりはエンチャントだ。中には絶対折れない剣だったり、切れ味が落ちない刀とか、『魔剣』なんて呼ばれてる消耗品とか。

魔剣…：…ね。

それからは自由に店を見回ったりした。なんのタクテイカルアドバンテージもなさそうな剣だったり、逆に無骨すぎる槍、何故かこの店でバイトをしてる神様 e t c : いやあんた何してんの？仮にも仮

にもだよ？神様でしょ？

まあ神様には神様なりの事情があるらしく俺達は何故かあるエレベーターで上に昇った。どうやら魔石の力で上に行ってるらしい。なんか使えそうだな…

原石の鍛冶師達の商品が並んでるスペースに行き商品を見てく。どれもさつき見た様なアホみたいに高い商品とは違いどれも手の届く値段だ。

クラネルの方を見てみるとどうやら気に入った防具を見つけたらしい。俺はどうしようか、防具なんてこれといって何も付けてない。そんなに金に余裕が無かったからだ。

「ベル君は…見つけちゃったみたいだね、ハチマン君は見つかった？」
「いいえ、何にしたらいいか分からなくて」「それじゃあちよつと付き合つて！」「あ、ちよつと…」

強引に手首を掴まれて連れていかれる。おのれクラネル…覚えておけよ？

「これなんてどう？」

ガツチリした甲冑を試着させられる。

「動きにくくて…」

「じゃあこれなんてどう？」

ベルみたいな軽装の装備を付けてもらう。その際にチュールさんに手の平を見られる。

「これって…豆？」

その手の平には豆ができていて所々割れていたりした。

そんな手を触るチュールさんの手を払い除ける。

「あまり気分のいいものじゃないでしょう、やめてください」

「嫌な思いさせちゃったかな、ごめんね」

「いえ、悪いのはこっちですよ」

どうしても自分の醜い所は見えて欲しくない気持ちが湧いてきてしまう。

これも人の性と決めつけて受け入れてしまう自分がどうしても嫌になる。

「それで、ライトアーマーはどうか」

「ええ、動きやすくていいと思います…けど」

「コート、脱ぎたくないの？」

そう、装備を着ける上でどうしても邪魔になってしまうコートを脱いでしまうのはなんだか勿体ない気がする。なんだろうか、譲れないという魂が叫びたがってるんだ。

「じゃあ、コートの中に着れる様にプロテクターかレザーアーマーにしようよ」

ということでコートの中に黒い革のレーザーアーマー、膝当て、丈夫なブーツに某ソルジャーみたいな肩パッドを買う。中々な値段だ。

チユールさんはなんか別の買い物してる。

ギルド職員が装備屋で買い物用の事なんかあるんだ。

全員広場に戻り後は解散するだけとなったのだが

「ベル君。はいこれ」

クラネルに手渡されたのは細長いプロテクターだった。彼女と同じ瞳の色のエメラルドのプロテクター。

「こ、これって…」

「私からのプレゼント。ちゃんと使ってあげてね」

自分が情けないのか渋るクラネルだが彼女は1歩も引かない。そこが彼女の強さなのだろうか。

「ハチマン君もはいー！」

不意打ち気味に彼女は俺にとある物を渡してきた。

「これって……」

「革のグローブ、悪い事しちゃったから…」

「それこそ受け取れませんよ。貴方は何も悪い事をしてないんですから」

「いいから、付けてみて」

言われるがままに手袋を着ける。うん、ピッタリだ。試しにフォースエツジを出して降ってみるが全然手に痛みは来ない。これなら…

「はい、これはもう君が使っちゃったから君の物ね！」

「ええ…」

「君のためだと思つて受け取つてほしいな」

「え……」

「本当にさ、冒険者はいつ死んじやうかわからないんだ。どんなに強いと思つていた人も、神の気まぐれみたいに簡単に死んじやうの。私は、戻つてこなかった冒険者を沢山見てきた」

「……………」

「…いなくならないでほしいなあ、君達には。あはは、これじゃあやっぱり私のためかな？……ダメ…かな？」

そんな事言われたんだ。答えは決まつてる。

「喜んでお受けします」

SP 感覚でチュールさんを家に送つた後俺達は路地裏に入つてくと何かが駆ける音が聞こえる。

「行つてみるか？」

「うん…」

夜中に聞こえる足音なんて面倒事ではない。

しかしそんな足音はこつちが行くまでもなくやがてこちらに向かつてきた。

「あうっ！」

「えっ？」

一つの小さな影はクラネルにぶつかるとそのまま転んでしまった。見るに神様よりも小さい身長、細い手足、確かクラネルから聞いた情報と一致するな…

「パルウム…」

「追いついたぞ、この糞。パルウムが！」

いかにもな格好の冒険者が現れる。

「もう逃がさねえからな……………」

こいつは何故この子をも？

そんな事を考えてるとクラネルがその子の前に立ちはだかる。

「…ああ？ガキ、邪魔だ、そこをどきやがれ」

頬を引き攣らせ睨んでくる男。

この前みたいに舌戦ができるようでもない。

仕方ない、今回だけはクラネルに付き合おう。幼い子を虐めるのは紳士（自称）として見過ごせないからな！

「そのガキもやるってのかよ、マジで殺されたいらしいな…！」

「一回落ち着いた方が…」

クラネルが下手に出る。よし、それでいいぞ。

「カルシウムを取った方がイライラしないで済みますよ…」

真似て下手に出る。ナイスフォローだと自分的に思う。

「黙れ!!何なんだよてめえらは!!そのチビの仲間なのかっ！」

あれ、余計に怒らせちゃった？

「いや、初対面です」

「じゃあなんでそいつを庇ってんだ!？」

「お、女の子だから？」

「ふざけんじゃねえ!!」

男が剣を構えた瞬間俺とクラネルは同時に得物を構える。あれ？

おかしい……

「止めなさい」

芯のある鋭い声が割って入る。

声の持ち主はチュールさんと似てる整った顔立ち。そして突き出た耳。

そしてちよつとばかり前に行った店のエプロン。

「次から次へと…!?今度は何だア!？」

「貴方が危害を加えようとしているその人は…彼は、私のかげがえのない同僚の伴侶となる方とその仲間です。手を出すのは許しません」

「どいつもこいつもわけのわからねえ事を！ぶつ殺されてえのかあッ!? ああッ!？」

「吠えるな」

ヒエッ…声のせいもありさながらその場が凍る。

「手荒なことはしたくありません。私はいつもやり過ぎてしまう」

それってもしかしてオラオラの意味ですか？

男は店員さんの迫力に負けてしまい退散していった。

追いかけられていたパルウムもいつの間にか逃げた。余談だがあの店員さんの名前はリユー・リオンというらしい。

リオンさんにお礼を言ってからその場で別れた。

次の日、と行きたい所だがクラネルも神様も寝静まった頃、俺は一人地下から出て魔法の練習をしていた。

（俺の魔法は『魔力操作』、つまり魔力さえあれば出来ないことは無い…多分…）

オラリオ生活を初めて思うのがアニメが無いという事だ。気になつていたアニメや特撮の結末が知りたくて眠れない夜も無くはない。例えば某ウルトラなマンのZとか気になつていた。

余談は兎も角今は新しい魔法の構想を試すのに集中しなくては。偶にやる戦法としては相手を掴んでは投げたりちぎったりして戦うこともある。しかし体格のある敵に対しては自分の腕などちっぽけにも程がある。

手を前に出しイメージを練る。

ー全てを掴む剛腕ー

ーどれ程伸ばしても届くような腕ー

ーそんな私の手は一体、誰が握ってくれるのだろうかー

ボウ…と出てきた俺の腕の2倍はある大きな右腕。

動かそうとすると直ぐに目眩がして腕が消えてしまう。少し休憩…。

何度でも、何時までも試す。倒れそうになつても踏ん張り維持し続ける。出来るなら生活の支えになるくらいには仕上がりせなくては…。気が付けば腕は10秒位は維持出来るようになった。更には細かい動きも可能になった。

（今度は両手で…）

と思つたが流石に時間と体力を掛けすぎた、また今度にしよう。フフフ、クラネルの奴に大目玉喰らわせてやる。

#7 盗賊少女と悪意

「ハ、ハチマン？怒ってる？」

「あ？怒ってねえよ」

「でもハチマンの目、凄く怖いよ？」

すれ違う通行人がハチマンの目に圧倒されて道を開けて大名が通るような感じになってるよ…

「大丈夫だろ、こんなんでもビビるのは一般人だろ？冒険者なら慣れるだろ」

「ふえええん！ママアアア！！」

あの豪傑で有名な種族、アマゾネスの冒険者が泣き出したよ？

流石にバツが悪くなったのか少し目を伏せて歩くハチマン。あれ？僕も視界が潤んできた…。

隣で歩いているのはハチマン・ヒキガヤ、僕の3つ上で同じヒューマン。

出会った当初は真っ黒だった髪色も目を追うことに銀色っぽくなつてく。原因は本人も神様も見当がつかないらしい。バトルスタイルはロングソードを使ったり魔法を使ったり、はたまたモンスターを投げたりと常識にとられない戦い方だ。

性格は神様曰く『闇堕ちしたベル君』らしい。意味が分かりませんよ…。

そんなハチマンは近くの「ヘアアイストス・ファミリア」の経営するお店のショーケースに手を付き自分の目を見る。

「4割増で濁ってるだけだろ、何がいけないってんだよ…」

「ひ、ひいいいいいい！！」

ショーケースの向こう側にいた店員さんらしき人が盛大に腰を抜かした。余りにもハチマンに対する扱いが酷くて良い気がしないな…

「そんなにビビる必要あるのか…？」

サア……………

またハチマンの髪色が銀色に染まってく。もう彼の髪の毛は左前側頭部が完全に銀色になってしまった。

(あれ?)

1回目ハチマンの髪色が変わったのはシルさんから聞いた話だと酒場の件で僕が飛び出した時にはもう染まっていたらしい。

2回目は怪物祭で神様が倒れてしまい『豊饒の女主人』に担ぎ込んだ時に気付いた。

そして今回は周りの人から目を怖いと言われたから?

ダメだ、僕の頭じゃ法則性が見つけれられない。今度神様やエイナさんに相談してみようかな、ハチマンの体が心配だ。

僕の初めてのパーティーメンバー

僕の初めての仲間

人目を気にしながら歩いていたら広場の噴水前にやって来た。

「ハチマン、今日もいつも通りでいい?」

「なあ、今日は20匹ずつにしないか?10匹じゃ足りなくなってきたと思うしな」

「そうだね、じゃあいつも通り危なくなったら助け合うということ」

今日も頑張ろう、と言おうとすると...

「お兄さんお兄さん。白髪とモノクロのお兄さん」

僕達の事だと思えばハチマンとキョロキョロするが見当たらない。

冒険者がすれ違つてくれただけだ。

「下ですよ、下」

いた。身長はおよそ100cm。クリーム色のゆつたりとしたローブを身につけ、フードからは栗色の前神がはみ出てる。そしてその小さな体の倍以上はあるバックパックを背負っていた。

「き、君はっ...」

「初めまして、お兄さん方。突然ですがサポーターなんか探してませんか?」

「え?...ええ?」

「混乱してるんですか?でも今の状況は簡単ですよ?冒険者さんのおこぼれにあずかりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みに来てい

るんです」

太陽のようにニツコリ笑う少女。

「そ、そうじゃなくて…君、昨日の…?」

「…?お兄さん、リリとお会いしたことがありましたか?リリは覚えてないのですが」

可愛らしく首を傾げる少女を前に少し戸惑ってしまう。ハチマンの方をチラリと見ると目は相変わらずだがどうしても少女を訝しげに覗いていた。

「それでお兄さん方、どうですか、サポーターはいりませんか?」

「ええっと…で、できるなら、欲しいかな…?」

「本当ですかっ!なら、リリを連れて行ってくれませんか、お兄さん!」

「いや、それはいいんだけど、うーん…」

「あつ、名前でしたか?失敬、リリはリリルカ・アーデです。お兄さん方の名前は何と言うんですか?」

「僕はベル・クラネル、こっちは…」

肩にポンと手を置き紹介を遮るハチマン。どうやら自分で自己紹介をするらしい。

「ハチマン・ヒキガヤだ。ところで…」

中腰になりアーデさんの目を覗き込むハチマンその目は細められていて僕でも少しビクリしちゃった。

「あうう…」

その様子を見ていた住民の1人が気絶しちゃった…。

しかしそんなハチマンを目の前にしてもたじろぎもしないアーデさん。すごいや…

「サポーターって何?」

僕とアーデさんは盛大にすつ転んでしまった。

サポーターとは、ダンジョンに潜る冒険者を追従し、ドロップアイテム、魔石etc…を回収する俗に言う『荷物持ち』である。多くのサポーターは諸々の理由で挫折した冒険者が至る職業であり、周りの

冒険者からは『落ちこぼれ』と呼ばれ蔑まされるらしい。それはファミリア内部でもされるらしい。……反吐が出る。

目の前にいる胡散臭いリリルカ・アーデと名乗る少女は捨て犬の如く同行の許可を待っている。

「どうかなあ、ハチマン」

「まつ、いいんじゃないの？俺達も魔石とかポーチに入んなくてポケットがパンパンになるまで入れてたし。それにその子は見た感じ昨日の追っかけられてたパルウムじゃなさそうだし」

「えっ？どういう事？」

「アーデさん、一旦フードを取ってはくれないか？」

そう言うと彼女は「喜んで！」と言いフードを取る。

その頭には昨日のパルウムには見られなかった犬の耳らしきものが生えていた。

「じゅ、獣人？」

「はい、リリは犬ヘシアンスロープ人です」

ほらな？昨日子にすんごい似てるけどそもそもその種族が違う。これ程の判断材料はあるまい。

「それではお兄さん方、どうでしょうか？リリを雇ってはもらえますんか？」

クラネルがこつちを見てくる。恐らく同意を求めているのだろう。俺は首を縦に振り同意を示す。

「分かりました。それじゃあひとまず、今日一日だけ、サポーターをお願いします」

「ありがとうございますー！」

ダンジョンは決まった階層を境にして地形も性質も違う。

1〜4階層はゴブリンやコボルトといった低級モンスターばかり出てくるが4階層に近づくにつれて少しずつ強くなってく。まあ誤差程度だと認識してるが…。

しかし5階層からは状況が変わる。『キラーアント』を始めとしたいやらしいモンスターが多く出現する。

聞いた話では多くの冒険者の経験、武装、機転、そして何よりも「ステイタス」が求められる。

しかし…

「ふっっ！」

「ギシャアア!!」

それは普通の冒険者に限る。俺達の成長速度に驚くチュールさんの反応を見る限り異常なのだろう、俺達は。

クラネルはキラアートの胴体を真つ二つに切り裂いていた。

「ジギキギギ！」

「よっ、と」

降下してきた『パープル・モス』を往なし《ヘステイア・ナイフ》で羽を落とす。バランスを失ったモンスターに短刀を打ち込みとどめを刺す。

「そこ動くなよおっ！」

走り出した先には再びキラアント2匹。

クラネルの繰り出す刺突がキラアントの胴体を串刺しにする。すぐさまもう一体を相手取ろうとするが、ナイフが抜けないらしい。

それを見かねたキラアントはクラネルに飛びかかる。

「ちっ…」

俺は走り出しキラアントの間合いに入る。

「でやあぁッ!!」

思いつきり右手を振り上げる。その右手はキラアントにかすりもしない代わりにキラアントは動きを止める。魔力で作った腕、(魔腕とでも名付けておくか)がキラアントをガツチリと握っているからだ。

「潰れる!!」

キラアントを勢いよく地面に数回叩き付けるとキラアントは粉々になって粉碎された。

「ふう、やっぱり動きはある程度トレースさせた方が扱いやすいな…」
イメージだけで魔腕を動かす事は出来るがじぶんがした動きをコ

ンマ0.3秒位の差で真似させた方がコントロールしやすい事が特訓で判明した。

「ハチマン、今のって…」

「話は後だ、お残し来てるぞ」

「う、うん！」

残存しているモンスターを狩るクラネル。

「ベルさまお強い〜！」

そんな光景を脇にアーデはクラネルの屠った死骸を一箇所に纏めていた。笑っていても細心の注意を払う。その動作からサポーターとしてどれ程の技量かが分かる。…そろそろか。

「ーグシュ…ツ！シャアアアアア!!」

「わああっ！べ、ベル様ーっ、また産まれましたあー!？」

しかしクラネルは立ち止まり息をついている。

「何ぼーっとしてるんですか!?!やられちゃいますよ!?!」

「大丈夫だよ、ねっ？ハチマン」

刹那、紫の一閃が産まれてくるキラアアントに突き刺さる。

「だとしても油断し過ぎだ」

キラアアントに刺さったフォースエッジを抜きながら答える。あれ？ちよつと威力付けすぎたかな？抜けないや。

無事剣も抜け、魔石の回収作業をしている。

しかしと言うかやはり、アーデは手馴れており、余りの腕前に感化されてしまった。

「そういえばハチマン、あの魔法って何？」

「リリも気になります。一体どんな魔法なんですか？」

2人一緒に詰め寄ってくる。君達案外気が合うんじゃないの？

「魔力で腕を作ってそれを操作しただけだ。威力とかあるのもいいんだが、魔力の消耗も幻影剣より激しくてな…」

「余り乱用は出来ないって感じですか…」

「そんな感じだ」

「まあ、御二方のお強さは【ステイタス】や【魔法】以外にも武器によるところも確かにあるのでしようが」

「やつぱりそうだよ。僕もちよつとこのナイフに頼っちゃってるんだ。こんなんじやあ本当に強くはなれないかなあ」

「いえいえ、武器は持ち主に頼られてこそ本懐です。要は武器の力に翻弄されず、御することができればそれはベル様の歴としたお力ですよ」

雑談を挟みながら魔石回収をし、残すは2匹位だ。

「ハチマン様、あちらにあるニードルラビットの首をもいでくれませんか？非力なりりでは上手く出来なくて…」

「あいよ」

首をもぐなんて簡単に言うが初めてなんだよ。クラネル達に背を向けるように作業に取り掛かる。

「ベル様、あちらのキラアアントは壁に埋まっちゃってしまってるりりには届きそうもありません。ですので、ベル様？お願いできませんか？」

「任せといて」

なんて会話が後ろから聞こえる。

俺は黙々とニードルラビットの首を折り、魔石を回収する。

パープル・モスの毒がどうのこうのと言われてダンジョンから戻る。アーデの報酬は信用が欲しいと言っていたから俺達2人で山分けという形になった。なんだか腑に落ちない。

クラネルは治療施設に通った後にチュールさんに聞きたい事があると喋っていたので待ち合わせ場所を決めてから俺は時間つぶしに「ヘファイストス・ファミア」の店に足を運ぶ。

やはりどれもこれも高い。

店員から許可を貰い剣とか斧とかナイフを振るってみるがどうも納得いかない。どれもすぐ折れそうだしっくりこない。

「いかがでしょうか？」

「すみません…どれもしっくりこなくて…」

「チツ…：分かりました。それではごゆっくり」

本人は聞こえないようにしたつもりだろうがバツチり聞こえたぞ。最近の俺はどうも五感が鋭くなった気がする。悪口とかそーゆーの

は嫌でも聞こえるのはどうしてだろうね。

何故武器屋に寄ったのかという戦いの幅を広げたいと思ったからだ。飛び道具が欲しいが弓とかそんなちやちなもんじゃなくて銃とか使いたいがある筈がないだろう。なんならあつちの世界の技術をこつちに逆輸入してもいいのでは？とか思うがそもそも銃の構造とか大まかな内容しか分からないんだよなあ。

「おいてめえ!!」

突然店員に怒声を浴びせられる。

何事かと振り向くと急に手を掴まれた。

「てめえ、万引きしてんじやねえよ!!」

「は!?!いや、やってませんよ」

「嘘言つてんじやねえ!!じやあなんだよこれは!!」

どこから出したのか如何にも高そうな装飾が施されたナイフを出してくる。遠目からそれを見てたのか周りの客は軽蔑の目を向ける。

「あんたがさつきポケットから出したんだろ!？」

「ガタガタ見苦しい言い訳してんじやねえよ!さつきとこつちに来い!周りの客に迷惑だ!」

恐らくレベル2か3なのか振り切れない力で裏の事務室みたいな部屋に連れてかれる。腕は椅子の後ろに縛られ足も椅子の足に結ばれてる為身動き出来ない。魔法を使えば逃げれない事も無いがこれも奴らの罠だろう。下手に暴れて怪我でもさせたら俺が助かったとしてもその後が面倒だ。最悪ファミリアが崩壊するかもしれない。

「神様つてのは面倒でなあ、人間の嘘を見抜けるって話さ」

「だつたらなんだよ」

「言えよ」

「は?」

「金欲しさにナイフを盗んじやいましたあつて情けなく!心から!誠意込めて!言えよ!そうすりゃあ神も騙せつからよオ!」

そういう事か、神も認めれば訴える事で多額の賠償金を背負わせられる。そしてこいつはその功績でうはうはになれるってわけか…

「…だが断る」

「ああ？」

「誰が言うかよ、ばーか」

男の頭に青筋が走る。

あらら、やりすぎちゃったかな？

「その目！そのバカみてえに舐め腐った目！二度とそんな目え、できねえようにしてやらあ!!お前らー!」

呼び掛けに反応したのか仲間と思われる男達がゾロゾロと入ってきて俺が助けを呼べないように猿轡をしてから大きい木箱の中に詰め込み運び出す。それから暫くして気が付くと如何にも鍛冶場つて所に俺は男達に囲まれてた。俺は両側にある台に手を置かされていた。

「さてと、嘘ひとつできねえならあ、嫌でもその口から言わせてやるぜえ？お前の名前は？どこのファミリアだ？」

口を開かない。

これからされるであろう事は既に予想出来る。少しでも恐怖を紛らわす為に、間違えても屈さないようにと、俺は一言も喋らずただ俯いていた。

「おお、そうかそうか、お前がそんなに喋らないならなあ、嫌でも喋らさせてやるぜえ!!」

男は手に持っていたハンマーを俺の指に振り下ろす。

グシャ!

「~~~~ツ!!」

鈍い音と共に指に激痛が走る。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

でも、我慢しなくては…。

「まだ黙るってか…じゃあまだまだア!!!」

「シルさん!!ハチマン、来てませんか!？」

【豊饒の女主人】の扉を乱暴に開け入る。申し訳ないけど今はそれどころじゃない。僕の仲間のハチマンが姿を消した。一旦解散してか

ら既に6時間は経ちもう夜の9時はまわってる。ここの店員さんにはお世話になりっぱなしだ。毎日お弁当を作ってもらっては無くしたナイフだっけ見つけてもらって…

「ハチマン…」

一体どこに…僕の眩きは闇の中へと吸い込まれていった。

#8 やはり俺は人が

■ ■ ■ ■

「すみません！紫のコートを着てて髪が黒色に銀色が入ってて目が特徴的な男の人を見ませんでしたか!？」

酒場の冒険者に聞いて回る。しかし収穫は得られず…

「紫のコート？ああ、確か「ヘアアイストス・ファミリア」にいたなあ」「ヘアアイストス・ファミリア」？それじゃあ神様に聞いた方が手取り早いかも。

踵を返してホームに向かう。今の時間なら神様は帰ってきてるだろう。

「神様!!」

「なんだい！ベル君!？」

「神様のバイトしてるお店に何かありませんでしたか!？」

「ふーむ、そういえば万引き犯が捕まったらしいよ？ボクはちょうどその時席を外していたから立ち会わなかったけど…ベル君?」

「神様、もしかしたらその人、ハチマンかもしれません」

「なんだって!?!でもハチマン君は万引きなんかしないだろう!?!……ハッ」

神様が何かを察したような顔になる。

「か、神様?」

「もし本当にハチマン君が万引きをしたのなら既に僕達のファミリアに何かしらのアクションがあってもおかしくない」

「何も無いって事は…」

「十中八九……冤罪だ」

ハッと息を飲む。どうして?どうしてハチマンがそんな目に会わないといけないのか…。黒いモヤモヤが頭を埋め尽くす。

「こうしちゃいられない、ベル君、行くよ!」

神様に手を取られて連れて行かれる。しかし神様の目的地を察した僕はシルババツクに襲われた時のよう神様をお姫様抱っこで連れて行った。

「リユー」

私の同僚が申し訳なさそうに語りかけてくる。こういう声色をする時は大体2パターンに分かれる。

「どうかしました？シル」

「お願い、ハチマンさんを助けてあげて…」

きゅつと袖を掴みこちらを見つめてくる。

「しかし私にはまだ仕事が…」

「お願い！…私、胸騒ぎが止まらないの…もしハチマンさんをこのままにしていると、何か取り返しのつかない事になるんじゃないかって思っ
て…」

「リユー!!」

自分を呼ぶ声が聞こえ、そちらを見るとミア母さんが腕を組んで立っていた。

「おつかいに行つてきな」

「ミア母さん!?今はそれどころじゃ…」

「口ごたえするんじゃないよ!ここじゃ私がルールだよ!」

「ミア母さん…何を買つてくるんですか?」

「あたしのパスタを美味しい美味いって食う坊主を連れてきな」

「え?」

「いいから行つてきな!!」

言われるがままに店を飛び出す。

ハチマン・ヒキガヤ

私の同僚のシルがとても気に入ってる冒険者の相棒のような立ち位置にいる男。性格は寡黙な人だと思いきや自分よりも圧倒的に強い冒険者にも構わず舌戦を繰り広げる事。愚かなのか仲間思いなのか…。特徴的な目の奥に何が秘められているのか…。見極めたい。

私は木刀と刀を持ち店を飛び出した。

「ちっ!…こいつ全然喋りやがらねえ!冷めちまったじゃねえかよ。おい!!酒飲みに行くぞ!!」

男達の声が遠ざかりドアが閉じる音がする。どうやら耐えれた様だ。奴らに暴行を加えられた際に魔力を薄く体にコーティングさせなんとかダメージを5分の1程抑えていたが麻袋を顔に被せられてからはどこに攻撃が当たるかも分からず終始コーティングを続けていた為魔力が少ししか残っていない。

残りの魔力を使い糸ノコギリみたいにし両手の拘束を解く。足の拘束も外し顔に掛けられた麻袋を取る。目に映る景色は右半分が暗い。奴らに熱したハンマーで殴られたからだ。脱がされ壁に追いやられたコートに手を伸ばす。炉の方に目をやればレザーアーマーは燃やされた様だ。爪は殆ど剥がれかけバカみたいに痛い。一本はあらぬ方向に折れ曲がっている。床には自分の血が飛び散っていて鍛冶場は一瞬で拷問場が変わっていた。どうやら手袋は無事だったようだが今は着けられない。痛いもん。痛みに耐えながらブーツを履き念の為部屋に使いそうな物が無いか調べるとポーシヨンが4本程見つかった。ポーシヨンの味はマジで嫌いだが背に腹はかえられない為そのうち一本を一気に飲み干す。傷が癒えた気がするがやはり目は回復しない。近くに転がっているとある物を回収する。

扉を慎重に開け外に出る。外風が俺の肌を刺す。

「グッ…」

あいつら、絶対に許さねえ…。

周囲を警戒しながら歩を進める。1歩1歩が辛いしなんなら左足も引き摺りがちだし。右手なんか肩は外れ、折れてるし…。取り敢えず身を休める為の場所に行かなくては…。

「やっぱり出てきたかあ…」

男達がニヤニヤといやらしい微笑みを浮かべている。どうやら脱走は予想されていたらしい。

(マジかよ……)

絶望感が頭を支配するがすぐに全速力で走る。

「待ちやがれえ!!!」

駆ける、駆ける、駆ける。足の痛みなんて無視して走る。アドレナリンが分泌されているのか痛みが引いてく。自然と笑いが零れる。

とうとう狂ったのかと思うが違う。実感できたんだ。俺は生きてるんだと。今、夜空の下で自由に走り回っているんだ。前の世界じゃコレの片鱗も味わえなかった感情。なんていうんだらうか？

「ハハハッ、ハハハハハハハハハハ!!」

待ち合わせ等に使われる大広間に出る。噴水の前に着いた俺は手で水を掬い喉に流し込む。喉の痛みで盛大に噎せ返るがそれでも笑みは止まらない。

「ククククッ、フフフフフフフ…」

「とうとうイカれちまったのかあ!？」

「いやいや、楽しみなんだろうなあ!アンタらを殺れるのが!」

空っぽだったハズの魔力が溢れる。今の俺ならアイツらに負ける気がしない。

練った魔力を各通路に結界として展開し維持する。それだけで魔力が大きく消費されるがまあいいハンデだろう。

「さあ、始めようか、イカれたパーティーをよ!」

「ちくしょう…てめえら!!殺るぞ!!」

剣を抜く冒険者、いや、落伍者達は全部で3つ。

奴らの動きが全てスローに見える。振り下ろされる斧を小さく後ろに下がることで避けその腕を掴み力を込める。

バキヤ…

「うぎやああああああ!!!」

鈍い音と共に腕が折れる。蹲るその体を頭を掴む事によって持ち上げ魔法を撃ってくる奴の盾にする。盾の役目を終えた男を地面に叩きつける。

グシャ…

動かなくなつた奴の事に目もくれず次の男を見る。

「ひっ…、このおとおお!!!」

ショートソードを振り回してくるがフォースエッジで払うとショートソードは中を舞い転がってる男の足に突き刺さる。

「ぐあああああああ…」

叫ぶ気力も残ってないのか呻き声しか上がらない。剣を払われた

男は尻もちをついているがニマニマしてる。ウザイ顔、直ぐに叩き潰してやるよ。

「ソイツの後にな…」

後ろに向かって回し蹴りを放つと予想通り忍び寄った男の顎に当たる。男は慣性に従うまま重力に逆らい10mは吹っ飛ぶ。尻もち男は放っておいてソイツの元に歩いてく。俺を認識したのか男はその顔を恐怖で塗りつぶされ逃げようと試みるが上手く立てないようだ。

「立てないだろ。顎の振動は脳に伝わり脳震盪を起こすんだよ。まあ、アンタらには分からんだろうがな…」

魔力を腕に纏わせ強度を増加させ拳を振り上げる。この技はアンタらの拷問のお陰で出来るようになったんだ。そこは感謝するよ。

「あがつ、あがつ…」

「じゃあな…」

拳をその顔に叩きつける。ピクリとも動かなくなった。

「助けてくれえ！誰かあ!!」

股間を濡らしながら結界に手を叩きつけ助けを乞う男、そういえばこいつが俺に濡れ衣を着せたんだよな。

夜風にコートをハタハタとたなびかせ。元凶の元にゆっくり歩いてく。俺の存在に気づいたのかそれは酷く怯えている。ポケットからあの場所から出る際に持ち出した物を取り出す。こいつが俺を陥れる為に使ったナイフだ。

魔腕で男を抑え腹部にズブリと刺す。

「ギ、ギやあああああああ!!」

叫び声が収まるまで待つ。さっさと終わってくれよ。俺は耐えたんだからさ…。

男の嗚咽が静寂を支配する中フォーエツジを携えその首元に刃を掛ける。

「ま、ま、待ってくれ!!悪かった！俺達だって金が欲しかったんだ！あまり良い作品が作れなくてスランプ気味だったんだ！許してくれよ！なっ?!なっ?!」

涙目で懇願してくるが耳に入らない。

刃を振り上げる。

「あ、ああああ……」

「……あばよ」

振り下ろす。

しかし……

ガキン!!

「何故邪魔をするんですか……リオンさん……!」

疾風のように現れた彼女は俺の一閃を受け止めていた。一体どこから入ったんだ?と思つたが結界は壁のように張っていた為、上から侵入されたようだ。

「今すぐ剣を降ろしなさい。まだ今なら歯止めは効きます」
「……………」

剣を収める。彼女の力量は俺と雲泥の差だ。今の俺に届く事は決して無い。

「ハチマン!!」

結界の向こう側にクラネル、神様、そして知らない神様がいる。赤髪で眼帯を付けた女神と女性にも引けを取らない程長い髪でローブに身を包んでいる。男……なのか?

結界を解くところちに全員駆け寄ってくる。

神様の呼び掛けでヘファイストス様とミアハ様がハチマンの探索に同行

してくれる。

先ず当時の店番の男達を割り出しその人達の鍛冶場に向かう。しかしそこは鍛冶師の武器や防具を作る場所では無く拷問場でしかなかった。壁や床に飛び散った血の跡。恐らく被せられていたのだろう血の染みた麻袋。鉄を打つ為にある筈のハンマーにも血が付いていて自体の深刻さを物語っていた。

「逃げ出せたのだろうかこの血の量じゃあまり遠くに行けない筈だ」
「早く行こう。ハチマン君が心配だ」

「ヘスティア、ごめんなさい、私の子が貴方の子に酷い事を…！」

「気にしないでくれヘファイストス、君は悪くないよ」

部屋から出ると血の跡がある事に気付きそれを辿っていく。血の量は段々増えていってる。傷が開いてきてるのかもしれない。

「ぎゃあああああああああ!!!」

血を辿っていくと男性の物と思しき絶叫が聞こえた。

「この声、ハチマンのじゃない」

「とにかく急ぐんだ！」

道を抜けた先は大広間で何故か半透明な壁に阻まれて先に行くことが出来なかった。きつとハチマンの魔法だろう。しかし壁の向こう側には見慣れた影があった。

「ハチマン!!」

精一杯声を上げると壁が崩れて先に進む事ができるようになった。ハチマンが助かってる。それだけで嬉しかった。ハチマンの影に向かっていくと段々彼の全容が明らかになってく。

ハチマンを見た神様はワナワナと震え、ヘファイストス様は口を抑え絶句し、ミアハ様はポーシオンをポケットから取り出そうとしているが手が震えている。

その姿は今朝の面影を残していなかった。

酷い、どうしてこんな事を…。

「何とか一線は超えなかったようです。少し遅れていたらどうなっていた事か…」

何故かいるリユーさんが何かを言ってるが聞こえない。周りには首謀者と思しき人達が転がってる。恐らくハチマンに振り返りにあったのだろう。

「ハチマン君、君に何が起こったのか、教えてくれないかい？」

「……………」

「お願いだよ。今回の件について良く知っておきたいんだ」

「冤罪着せられて、拉致られて、拷問された。逃げて追ってきたから二度と立てないようにした」

淡々と、無感情に、告げるハチマン。その声はガサガサだった。や

はりかどやるせない顔をする神様と自分の眷属がやった事にシヨツクを受けているヘファイストス様。

「怪我の具合を見せてみる」

是非も問わミアハ様がハチマンの体のあちこちを調べる。まるで陶磁器を扱うように慎重に…。その間リユーさんは首謀者達を縛り上げている。「ガネーシャ・ファミリア」に突き出すのだろう。

「一通り終わったが聞いてくれ。ハチマンの体の傷は粗方治る」

その言葉に一同が ホツとする。しかし…と続けるミアハ様。やめてくれ、続けなくてくれ。そう思ってしまう。

「しかし治すにはそれ相応のポーシヨンが必要になる」

バツが悪そうに語るミアハ様。僕達のファミリアが貧乏なのを氣遣つての事だろう。

「ポーシヨン代は私のファミリアが持つわ！この子が治るならなんでもするわ。これは私の子が招いた事…」

「さてと、残るは断罪だな」

ゾワツ!!

その場にいる全員に悪寒が走つたのか声のした方を向く。ただしハチマンは驚く事もなく表情一つ変えずに顔を上げるだけだった。

そこには今までに見た事ない人形の化け物がいた。

山羊のような角に逆だった髪？ををしており一対の翼を広げ紫の稲妻がその黒い体を迸っていた。

「モ、モンスター…?」

「おいおい、そんな俺達の1000000000分の1にも満たないような奴らと一緒にしてもらったら困るな。この事は今日の日記に書かせてもらうぜ」

見た目に違わず軽口を叩くソレはヤレヤレといった仕草をしていた。ダメだ、情報に頭が追いつかない。

「先ずはっと、ソイツラの処分の後は坊主の鍵でも開けてやるか…随分と硬いらしいしな。…よっと」

「げはっ!!」

地上に降りたソレは何処からか出した剣を手に目にも止まらぬ速

さで僕達の後ろにいた。…気絶させたであろうハチマンを抱きながら。

ブシャアアア

冒険者達の首から間欠泉のように吹き出す血…

その光景にカタカタと口を震えさせ怯えながらも僕は口を開いた。

「ハ、ハチマンに何かしたら…ゆ、許しませんよ…!」

「安心してくれ、取って喰う訳じゃない。タダの診断さ」

ハチマンの胸に手を合わせるソレは暫くした後ハチマンをゆつくりと地面に降ろす。まるで我が子を扱う母親の様に。

「ソイツをハイポジションの風呂にでも入れてやれ。そうすりや傷なんてすぐ治る。じゃあ拙者はドロクさせて頂く」

雷光と共に消えたソレはその場にいたハチマンを除く全員の胸にしこりを残しながら消えてった。

「神ヘスティア、先程のアレをご存知ですか?」

「詳しくは知らないけど。一つだけ言える。全員、さっきのヤツは忘れる事!アイツの事は知ってても関係を持つてもいけない存在だ。百害あって一利なしだ。そして勿論他言無用だ…」

「ではヘスティア、ハチマンを一先ず我がファミリアに連れて行こう。ヘファイストス、【ガネーシャ・ファミリア】への通報を頼む。先程

のヤツの事は掻い摘んで説明してくれ」

「勿論よ…あんなのが居るなんて、混乱しか産まないわ」

「神様、さっきのを知ってるんですか?」

神様に聞いてみるとハチマンをおぶってるリユーさんも知りたそうに神様を見ている。

「悪夢だよ…あれは…」

とても懐かしそうに、そして奇異な物を見るような目で空を見る神様。一体どういう事なんだろうか…

「カウンター入るってマジかよww。やっぱりスゲー成長だなあ」

ダメージは入ってないが確実に当てられた腹を擦る。

「さてと、そろそろ準備を始めないとネ!」

夜風に吹かれる俺、
かっくいいだろ？

#9 貴方は何を思い何をするの？

気が付くとそこは青、赤、紫が入り交じった空が広がっていた。地面は灰色。

「どこだ？ここは…」

確か俺は、アイツらを半殺しにして、殺そうとしたらリオンさんに止められて…。変なのに気絶させられて…。そこから思い出せない。

考えても仕方ないから当たりを見回すとそこには扉があった。とてもとても大きく固く閉ざされた扉。

ふと近づき開けようとすると…

「うっ!!うああああ!!ああああああ!!」

黒いナニカが全身に纏わり付くと激痛が走る。

「まだだ

何がだよ!

「まだお前は飢えられる

腹減っちゃねえよ!!

「まだ足りない

だから何がだよ!!

「誇りも愛も

知らねえよ…!そんなの知らねえよ!!

「八幡…

…ツ!

「貴方は何でもできるわね…

違うツ!違う!!俺は…!俺は…

俺の意識は暗い闇の中へと飲み込まれていった。

目が覚める。知らない天井、自然と安心できる匂い。身を起こして窓から外を見ると辺りは暗かった。夢…だったのか?だったら夕子の悪い夢だな…

「目が覚めたか？」

振り返るとあの時駆けつけてきた髪の長い神がいた。

「貴方は…」

「そうか、初対面だったな。私はミアハ、この『ミアハ・ファミリア』の主神を務めている。ヘステイアとは長い付き合いだな、君の事は聞いている。そう警戒するな、というのは難しい話だな」

「一つ、良いですか？俺はどのくらい寝てましたか？」

「丸一日だ。あの後エルフのウエイトレスが君をここまで運んでもらってからポーション風呂に入れたんだ。その後は熟睡だ」

「ポーション風呂って…」

「む？ポーションは苦手か？」

「我儘言うのもアレなんですけど味が苦手で…」

「ふむ、ならばポーションに味を付けるとするか？好きな味は何だ？」

「激甘コーヒー…です」

「即答する程好むとは…今度共に飲みに行こう。私も味を確認したい」

「あの、なんで新作ポーションを作る流れになってるんですか？」

「同じ極貧ファミリアとしては顧客の1人や2人は確保したいのでな、その程度の願いを聞かずに神は名乗れないだろう？」

「ヤバい、なんだこの優しさの塊みたいな神は…！」

「お、堕ちるもんか！」

「それぞれ、それじゃあ俺はこの辺で失礼します。看病ありがとうございます
いました！それじゃー！」

足早にその場を去る。外は太陽が出てこようとしている時間だ。足は自然とあの場所に向かっていた。そう、噴水の広場だ。

(ここでドンパチやりあつてたんだよな…)

フラッシュバックする光景…、平気で刃を振るい、魔法を使う俺は奴等からどう見えたんだろうか…。

怯えた目、震える足、痙攣する手。

「悪魔じゃないかしら？」

バツと後ろを振り向くとそこにはローブを見に纏いフードを深く被った女がいた。この気配、神か？

「誰だ…」

「通りすがりの女神、今はそれで充分よ」

「だったらその女神が何の用だ？」

「一つ質問させて貰えないかしら？ズバリ貴方の願いは何かしら？」

随分と詰めてくるな…。俺の願い…ね…。

「ノーコメントだ、アンタに教える義理が無いな」

「ふふっ、ミステリアスな子ね。いいわあ、貴方はそのまま進み続けなさい」

「何様のつもりなんだよ…」

「あら、知らないかしら、私達は神様よ？どうか私を楽しませてちょうだい…」

まるで懇願するように告げた彼女は瞬きした瞬間に消えていた。なんなんだよと思っただけでも仕方ないから考える事をやめた。広場で腰をかけてじっとしている。

ープリキュアどこまで進んだんだろう…

ーガンダム新作やってるのかな…

ー仮面ライダーかっこいいなあ

ー戦隊も引けを取らないよなあ

ーウルトラマンZ…

ーFGOどうなったんだ？

ー二ノ先輩可愛いなあ

駄目だ。変な考えしか浮かんでこない。

「あの、何をしていらっしやるんですか？」

顔を上げると「豊饒の女主人」のウェイトレス、フローヴァさんがいた。明け方に買い出しなのだろうか、重そうな荷物を持って大変だなあ。

「どうも、ご無沙汰してます」

「そんなにかしこまらないでください！」

「はあ…」

「それよりも、大丈夫なんですか？」

「まあ、体の方はピンピンしてます」

「それは良かったです。ハチマンさん、お店の方に来ませんか？ミア母さんも心配してましたし」

あのミセス豪傑が!?これは大事件の予感だ。それに顔を出さないとなんか言われそうだしな。

「それじゃあお言葉に甘えて…」

立ち上がりフローヴァさんの方に近づき荷物をひったくるようにして持つ。

「あっ…いいんですか？」

「重そうだったんで…それとも持ちます？」

「意地悪な聞き方するんですね」

「あなたもいつもやってるでしょう？」

軽口を叩きながら【豊饒の女主人】の扉を潜る。

するとカウンターに立っていた彼女はこちらを見つけると直ぐにキッチンへと行った。

「それじゃあハチマンさんはその席に座って待っててください」

指定された席に座る。客のいないこの店はどこか寂しがつてる印象を受ける。暫くするとドンツと前に置かれた山盛りのトマトソースパスタ。ああ、きつとこれから全てが始まったのかもな…。

「…いただきます…」

一口飲み込めばまた一口とスプーンは進む。丁寧に丁寧にパスタをフォークに絡めては口に運ぶ。

「美味しいなあ…」

味わった事の無い味が口に広がる。

その味は出来たてだからなのだろうか、はたまた唐辛子でも入っているのか、感じたことの無い温かさに支配される。

「あたしの作ったパスタだから当然だよ！」

「そうですね…」

「今度食いに来なかつたら容赦しないよ！」

「善処します…」

「素直にはいと言いな！」

「は、はいっ！」

勝てない、本能が叫ぶ。力量とかそんな生ぬるい奴じゃない。もつと根本的な何かで負けてる。

そう感じると黒髪で猫耳を生やした店員がやって来て隣に座る。

「つかぬ事聞くけどおミャーは拷問されてたのかニャー？」

「クロエー！」

突然の質問に戸惑うとリオンさんが割って入る。きつと気を使っ
てくれてるのだろう。

「平気ですよ、リオンさん」

軽くリオンさんに告げると近くの椅子に彼女も座る。

「そうだな、拷問…されたな」

ハツと息を飲む声がある。他の店員もこの場にいなくても耳を傾
けているのだろう。

「教えて欲しいニャ、どんな気持ちだったのかニャ？やっていた側
だったからその気持ちを知りたいのニャ」

サラツととんでもない事が聞こえたから無視をしよう。

「平たく言えば悔しさと悲しさかな…」

うーん、と考えた結果この言葉しか見つからなかった。

「それはどうしてだニャ？」

「少しでも痛みを和らげる為に色々してた手の一つっただけだ。楽し
い出来事とかそんなのを思い出そうとしたんだけど…」

「けどっ…」

「…いや、この話は終わりにしよう。店長、ごっそさんでした」

「今回はあたしの奢りだよ。また来な」

「うす」

強引に話を切り上げて店から出る。

「言えねえなあ…」

だって、何も無いんだから…

「よお」

と言いホームの扉を開けた3人目の同居人。2人目のボクの眷属。その姿は何かを探していたように眠っていた時よりも何かを垣間見たような清々しい佇まいをしていた。

「おかえり、ハチマン君」

「ハチマアアアアン!!!」

ボクの初めての眷属が涙で顔を濡らしながら彼に抱きつく。抱きつかれた彼は服が汚れるからなのか顔を少し歪めている。正直羨ましい。ベル君、君つてもしかしてそっちの気があるんじゃないんだろうね。

「ハチマンンンンンンン!!」

ハチマン君が抗議するような目で見てくるがベル君の意思も汲み取って欲しい。昨日だけで何回お見舞いに行くと言ったと思うんだい？生活のために一応ダンジョンには行ったらしいけど行く前に1回、お昼に少なくとも3回、夜には5回も行ったんだよ!?挙句の果てには泊まるなんて言い出して連れて帰るのに大変だったんだぞ!!

「じゃあハチマン君の退院祝いにじゃが丸くんパーティーと洒落こもうぜー!」

「わーい!」

「え?俺、食ってきたのに…」

今回の主役は君だぜ?逃がさないよ。

「クラネル、今日の午後は空いてるか?」

「特に用事は無いけど、どうして?」

「神様と2人で出かけたらどうだ?」

ハチマン君:君つて子は!?なんて良い子なんだ!

にやけが止まらないよ〜／／／

「ちよつとは奮発して美味いもんでも食ってこいよ」

「ハチマンはどうするの?」

「俺はちよつと用事があるから」

「だったら、分かったけど…」

「なら決まりだ、さっさとダンジョン行って金稼ぐぞ!神様はこれを使って高い服でも選んどいて下さいね」

どん！と懐から出したお金の詰まった麻袋をテーブルに置く。

「こんな大金、受け取れないよ…」

「この前の賠償金だと思つてて下さい」

彼には彼なりに思っていることもあるのだろうか…。

「ハチマン君…」

「？」

「君は君を誘拐したヘファイストスの子達をどう思っているんだい？」

「うーん…」

顎を撫で深く考える素振りをする。

「別に、何も？恨んではいますけどそれを引き摺るつもりはありません。いつまでもグチグチ言つてたらそれこそ同じような奴になる気がするんでね」

「そうか、なら良いんだ…」

「それじゃあクラネル、さっさと用意しな。お前も一張羅買うんだから…」

「うん！」

ベル君は軽装【兎鎧】ビヨンキチを身に纏う。その間ハチマン君はどこから出したのか【フォースエツジ】をタオルとかで拭いたりしてる。

「それじゃあ神様、いつてきま〜す！」

「いつてきます」

「うん、行ってらっしやい！」

笑顔で彼等を送り出す。

さてと、ハチマン君が折角気を遣ってくれたんだ。飛びっきりのオシヤレをしないとね！

ーダンジョンにてー

俺は斬る、掴む、投げる、殴る、撃つ。

もう1人は駆ける、捌く、そして駆ける。

様々な手を使ってモンスターの命を摘み取っていく。冒険者とは仕事というには責務とかそんなのを感じる必要がないからどつち

かつて言うのと金の稼げる趣味のようなものだろう。きつと色んな人がいるのだろう。金が欲しくて冒険者やってる人、モンスターに大切な人を殺されたから復讐心で冒険者を やってる人、隣にいるこいつのようにモテたいからという何ともまあ、なんだ、うん……。みたいな理由で冒険者になった奴がいる。

そこで浮かんでくるのが「じゃあ俺は？」だ。なんとなくとしか言い様がない。そこで思い浮かんでくるのが鳥等の動物に見られる帰省本能というものだろう。自然と体が巣に帰ろうとするやつだっけ？そんなのだろうか。だからといって俺の体にはダンジョン生まれのモンスターとこれといった共通点は見られないしなんなら襲われるまでである。

「よし、この辺で切り上げるか」

「？もういいの？」

「バツカお前、準備とかに時間かけんだから当たり前だろ」

「そっか、じゃあ戻ろう」

その後はシャワーを浴びて換金して、俺がコートを買った服屋でそれなりに似合う一張羅買う。うむ、我ながらいいセンスだ。

待ち合わせによく使うようになった噴水前でクラネルを待機させる。何故かモジモジするクラネル、キモイぞ」

「キモイって…緊張するんだもん！」

「なんだ、お前デートもした事ないのか？」

「え？ハチマンはあるの？」

「ああ、あるぞ、「荷物、持つ」といて」しか言われなかったがな」

「それってデートって言えるの？っていうかこれもデートなの？」

「仲のいい異性と食事しに行くのは立派なデートだろ、そりゃ」

「でも神様だよ？僕達みたいな人とは全く違うんだよ？」

なるほど、つまりクラネルは自分達とは次元の違う神とそういう仲間になるのも恐縮な感じなのか…。どれ、モテたいのにその気持ちに気づかないアホには少し教育してやるとするか…。

「クラネル、お前は互いの身分を超えた話を知ってるか？」

「勿論！ジュリエとロミエットとかがいい例だね！」

少し俺が知ってるのと違う気がするがあまり言及はしないようにしよう。

「きつとそんな感じなんだよ、神も…」
「え?」

「例え生きる時間が違っても一緒にいたい、そう思うんだろう」
「でも、死んじゃったら一人ぼっちになっちゃうんだよ?」

「それも承知の上だろう」
「だったら…だから」

「そこは俺達が頑張るんだよ…」
「?」

「確かレベルが上がるという事は神に近づく事なんだろう?」

「そうだけど、まさか…」

驚愕するクラネルに向けてニヤツと笑いかける。

「だったらそのカミサマに少しでも近づけばいい」

「強くなる事とレベルアップがイコールで結べるのなら強くなろう、もしイコールで結べなかつたらその他に必要な事をすればいい。その先にあり、尚且つ不変にて不滅ならそれはきつと他のどんなモノよりも本物なのだから…」

「ハチマン?」

「まあ、兎も角頑張れよ、俺も頑張るから…」

「ハチマン…」

「今の俺にはダンジョンで戦う理由なんてこれっぽっちも無い、だから探す。俺の戦う理由を…。ダンジョンでな」

「うん!!」

隣にいたクラネルは俺の前に立ち手を出してくる。一瞬呆気にとられたが瞬時に理解し手を取ろうとするが…

(ああ、ここでも邪魔してくるのか…)

過去の記憶が…黒いモヤが、邪魔してくる。

それでも…あと1回だけでも…

「おい!2人共」

少し離れた所から神様が走ってくる。結構似合うドレスを見に纏

いながら。

「そら、行つてこ…」

「あ、いたー！ー！」

叫び声をした方を見ると複数人の女神がこちらを指さしている。これって不味い状況なのでは？

「ヘステイアがおったぞー！ー！」

「ということは…あの隣にいるのがっ！」

「2人いるけどどっちー!?!」

「あの、紫コートハンサムくんだ！」

例外なく見目麗しい美女美少女の集団が、大挙して、攻めかかってくる。その光景はさながら某ジブリなナウシカの王蟲の様だ。

「狙いは俺の様だ、お前は神様と！」

クラネルを俺がいる場所より少し離れた所に向けて魔腕を使い押し出す。魔法だって傷つけるだけじゃなく色んな使い道があるんだぜ。…これでいいんだ。

「ゲットーツ！」

「やーん、抱き心地いい〜！」

「ヘステイアもいい男見つけるわね！」

「むぶ〜!!／／／」

沢山の腕が俺を引つ張り代わる代わる胸の中で抱きしめる。良く女性の胸はそれぞれ感触が違うといわれているが、本当にそうだった。マシユマロみたいだったり風船みたいだったり、綿あめみたいだったりする。

「なっ、なっ！」

「ごめんなさいね、ヘステイア。私達どうしても貴方の子が気になっちゃって、後をつけてきちゃったの、…あらやだ、本当にハンサムね。私好み…」

「ん——っ、ん——っ！ん？」

「ハ、ハチマー——ン!!」

肉の波に触れてそれを掻き分けながら腕を天に向けて出す。サムズアップ、そのサインがクラネル達に届くように…。

「ベル君！ハチマン君が耐えてる内に早く！」

「でも！ハチマンが！」

「彼の意志を無駄にするんじゃない！行くよ！」

「ハチマン……」

離れた所から2人分の足音が離れてく……。

へへっ、俺の屍を超えてゆけ。

これでいいんだ!!

#10 神父とボツチ十？α？

暗闇の中、騒々しい声がする。

「逃げてからそんなに時間は掛かってないわ！どこか近くに隠れてる筈よ！見つけ出してモノにするわよ！」

「「おーーーーー！」」

僅かに空いてる穴から辺りの様子を見ると女神の防衛網が築かれつつある。何とかしないと…。

しかし

「ここら辺は探索し尽くしたわ、離れた所にいるのかも」

「相手は冒険者、その可能性も高いわね…」

「仕方ない、今日の所は諦めましょうか」

「ちえー、もつと触れ合いたかったのになー！」

ゾロゾロと足音が遠ざかっていく。ふう、危機は去った。10分程時間を置き俺は隠れてた木箱からノソノソと出る。

「チョロいな、やつは隠密には木箱に限る」

某ステルスゲームとかの知識がこういう所で活かされたのは嬉しい誤算だ。因みに3が神作だと俺は思う。異論は認める。

「え？」「む…」「あ…」「お？」「ん？」

へ？

間の抜けた声5つ、戸惑いつつ振り向くと「ロキ・ファミリア」の幹部クラスと思われる面子がこちらを見てポカンとした顔をした。

エルフ2人に恐らく双子であろうアマゾネス2人、そしてヒューマン。

OK冷静にクールに分析しよう、ここは相手の視線になって考えるんだ。歩いてたら木箱から出てきた紫コートの男、うん、怪しい。どうする？、どうする!?!相手は上級冒険者、こっちは不審者の肩書きが付きそうな下級冒険者。やる事は決まってる！

スタスタ…

MU☆SHI！ いつそ清々しいほどの無視だった。おいおい、これもう無視の領域じゃねえぞ、黙殺だ黙殺。ポツダム宣言並みに黙殺

されたよ、今。歴史の教科書に載るレベル。あつてもここオラリオだった。何だろう、こういう時にネタが通じる人がいないから少し寂しかったりするなあ。あつ！ネタ喋るような奴んで元からいなかった！H A H A H A！はあ…。

「あの…」

何度か聞いたか細い声がする。ダンジョンで目覚めてミノタウロスに追い回されて殺されそうになった時、酒場でバカにされた時とか怪物祭で

も。「何？俺の事好きなの？」とでも勘ぐりそうになるくらいは声を掛けられてる。あれ？もしかして…ねーよ。

「ど、どうかしたか？」

「どうして、木箱から出てきたの？」

やっぱりそれを聞いてくるか…。

「厄介なのに追いかけてられてな、隠れてたんだ」

「大変、だね」

「そうだな…」

「……」

沈黙！それはまるで潜ったプールの中のような静けさ。ホント、何でもこう俺にコミュ力が無いのだろうか…。

「それじゃあ…」

話す事ももう無いだろうし振り返り行こうとすると動きを止められる。袖を掴まれたからだ。

「おお！」

「意外と大胆ね」

「誰なんですか!?あのヒューマン！」

「あの時酒場にいた…」

おいそこ、隠れてないでどうにかしてくれ。

「何い、何か用なの？」

「……あの、償いがしたくて」

「？」

「ベートさんのせいで気を悪くしちゃって、あの時ちゃんとやめてっ

て言えたら…」

「なんだ、そんな事かよ…」

「？」

「お陰様で少なくともクラネルは高みを目指すようになった。俺も少しは前に進めてるのかもしれない…」

「でも、私は…」

「女の子が償い償い言うもんじゃない」

「それは、どうして？」

そこ聞いちゃうかく、いや俺も俺で軽率だったな…。反省反省。

「色々あるんだよ、色々…。ああ、そうだどうしても償いたいならクラネルに特訓でもつけてやってくれないか？あいつ、アンタに憧れてんだ。1週間でいい。強くしてやってくれ」

「うん、わかった…」

「今度こそそれじゃあな」

少し小走りで目的の場所に向かう。ずっと気になってた、神様もクラネルもいない今なら確認できるだろう。増えてきた人混みを掻き分けながら進む。路地を曲がり進んではまた曲がって行く。

「ここがあああの男のハウスね…」

独り言である。気にするな。目の前に鎮座するのはみすぼらしい教会とその周りに点々と存在する墓、俗に言う共同墓地というやつだろう。命尽きた冒険者達が吊われてる場所。

緊張もあり暫く墓を見て回る。色々な名前が掘られている墓石も様々な形をしている。

「ん？」

奥の方にある墓を見ると

EVA

と掘られた墓がある。しかも逆さの五芒星に掘ってある。

悪魔崇拜

忘れもしない中学2年の闇ともいえる時期によくネットで調べまくったから印象に残っている。神が目視できるこのオラリオになぜ悪魔崇拜する人間がいるんだ？

神を嫌っていた？

神の支配するオラリオが嫌だから？

人間が嫌いだから？

悪側の人間だから？

そして何より、なんでこの名前に懐かしさを感じてるんだ…

「よお、こんな所で何してんだ？」

夕焼けをバックに現れたのは目当ての人物、アラル神父だ。

「少し、神父に用があつて…」

「お？なんだなんだ、懺悔か？ 恥ずかしいあの事とか喋っちゃう？」

「いや、別にそういう訳じゃないんだが…」

「じゃあどうしたんだ？」

「この墓の人は？ なんで悪魔崇拝なんだ？」

「なんだ、その事ね。その墓に中身は無くても、本人の意思で遺品が中にあるだけなんだよ。それに、紋章に関しても本人の意思で掘ったんだ」

「神父としてはどうなんだよ。教会側の人間が悪魔崇拝する奴なんか吊つて。嫌じゃないのか？」

「まさか、神なんて街を歩くだけで会えるつつうの！ こちとら商売あがったりだね！ それに、それ位の我儘聞けなかったら神父やってらんねえよ」

「この神父大丈夫なのかよ…」

「まあ、まだ話は終わりじゃないだろう？ 来いよ、案内したる」

「知らない人にホイホイ着いてっちゃいけないってかみさまがあゝ…」

「パフエ食うか？」

「いただこう！」

そこ、チヨロいとか思わない事、いいね？

ガキン！ ハンマーを振り下ろす。魂を込めて。

アイツは何でも使える…

ガキン！

触れた物は、大抵熟年のプロのように…
ガキン！

何ならぶつ壊す勢いで…

ガキン！

何度俺の傑作を壊したとか…

ガキン！！

でも銃だけは壊さなかった…

ガキン！

毎日一緒にメンテナンスしてたなあ…

ガキン…

また作ってやろう…

ガキン！

今度はお前と一緒にいられるように…

ガキン！！

あとナイトメアも改良しよう…

なあ…聞こえてるか？

俺はお前と歩きたかった…一緒に…。

もう無理そうだから…この子達に全てを捧げる。ゴメンよ、ゴメン

よ、スパード…。

アンタを戻す為に鎧を作らされた、どうかどうか、無事でいてくれ。

「ぶあつくしよい！！」

「おっさんかよ…」

「うるせー、まだ花も潤う17だ」

軽口を叩きながら教会の中をキョロキョロと見回す客人。フッフ

…立派だろ？

バキッ…

「天井少し脆くなったかな…」

ローンまだ残ってんのにな…。

「まあ、適当に座ってくれや」

そう言われた客人、ハチマン・ヒキガヤはそこらに転がってる椅子

を足で上にやると空中でクルクルと回った椅子は綺麗に地面に着地しまるでそうなる事を知ってたかのようにノールックで座る。一々スタイリッツシユだな。

「それで？要件は？」

「アンタ、3日前の夜あの冒険者を殺した奴か？」

「ほう、その根拠は？」

「強いて言うなら、臭いだ」

「マジ？俺そんな臭う？加齢臭？」

「そんなんじゃない、何か、初めて会った時から独特な匂いがしたから覚えてただけだ」

ふむ、覚醒してなくても嗅覚は顕在か…。

「それで？俺が仮にそうだと言ったら、どうする？」

顎を触り考える仕草をするヒューマン。さあ、どんな答えを出す？

「別に、どうしようしようと思ってる訳じゃないが、俺に戦い方を教えてくれ、もつと…もつと力がある。誰にも負けない力が」

そう来たか…。

「お前のバトルスタイルは大体把握してる。戦い方は自分の発想でどうにかしろ。問題は体の方だ。軟弱な体じゃどんな強い技でも威力なんてクソザコナメクジだ。だから俺にできるのは完璧に近い体と、五感を成長させてやる事だ。最も効果的にな…」

「おお…どうやって？」

「ステータスを授かってる冒険者はひたすら努力をすればそれがそのまま数字に表れる。憎い程な…。という訳だから死ぬ程特訓してもらおう！」

「OK、了解した」

「お？嫌がらないのか？」

「それが強さに直結するならなんだってやる…」

「ならば明日の朝2時にオラリオ東関所前に来い！」

「分かった、ありがとうアラル神父」

「おおっと、そいつは違うな」

「ん？」

明かそう、コイツなら大丈夫だろう。

「アラルはオラリオで通してる偽名、俺の本当の名は…」

「アラストル…、我が名はアラストル！2人きりの時はそう呼ぶがいい！」

本来の姿を現し翼を大きく広げ告げる。

懐かしいなあ…。

episode of Alastor

そこは魔界、闇が支配した世界。俺達悪魔はそこで自由に暮らしたり魔帝に尽くす事で豊かな暮らしを勝ち取ったりしていた。まあ、俺もその内の1人だ。誰だって豊かな暮らしは欲しい。美味しい人肉は食いたいし血も啜りたい。そんな俺の悩みの種は今日も洞穴の中でなんかやつてる。そいつは馬鹿みたいに強い癖に更に上を目指そうとしない奴で、兎に角いけ好かない奴だった。人間の文化に興味を持ち、偶に人間界からガラクタを持ってきては洞穴に持ち込みあちこちを弄り回したりしてる。俺は偶然にその場面を見てからちよくちよくちよつかいをかけに行ってる。

「これはこれは、魔帝の右腕のスパードさん、何をしてらっしゃって？」

しやがみこみ持ってきたそれを観察してる悪魔に声を掛ける。

「アラストルか…。人間界から面白い物を見つけた」

「ほう？この前の【火薬】とかいう奴じゃだろうか？」

「安心しろ、人間が娯楽の為に使ってる物だ。ピアノというらしい」

「ピアノ…ねえ。フィニアスには見せたのか？」

「ああ、声は掛けた」

「お前そんなに喋れるのなら会議とかでも喋ったらどうなんだ？」

「黙ってたら終わるような会議に興味はない」

「どうやら寡黙なスパードさんは極度のめんどくさがり屋だったよ
うだ。」

「皆の衆、待たせたな」

「噂をすれば…」

やって来たのは顔の約4分の1が魔具の男、魔界で一二を争う程頭の良い悪魔、名をフィニアスと言う。因みに張り合ってるのはスパードだ。

「フィニアス、何か分かったか？」

「勿論だ友よ。それは人間の作り出した【楽譜】とやらに記されてる【音符】を間違えず且つ決められたスピードで丁寧になその音の鳴る【鍵盤】を叩く事によって美しい【音楽】を作り出せるらしい」

「その【楽譜】のサンプルは？」

「ここに」

服の中に隠してあった紙つペらをフィニアスが取り出すとスパードはそれを受け取り適当そこらに転がってる椅子を足で上にやると空中でクルクルと回った椅子は綺麗に地面に着地しまるでそうなる事を知ってたかのようにノールツクで座る。一々スタイリッシュだな。

暫く楽譜を見たり鍵盤を叩き音を鳴らしたりしながら試行錯誤するスパード。

「分からん、後でプルソンに聞く」

忘れてた、あいつ飽き性なんだった。

「そういえばスパード、最近アルゴサク스가何かしようとしてると小耳に挟んだ」

「チツ、余計な事をしやがって、また面倒な仕事が増えるな」
うわあ、マジで嫌そう。

「どうすんだ？」

「泣きべそかかせてやる」

「悪魔が泣くのかね？」

「さあ？」

泣いた悪魔なんて聞いたことアねえな。

「じゃあ行ってくる」

いつもの禍々しい剣を出現させ翼を大きくはためかせながら飛び去る。その姿はあつという間に見えなくなった。

「で？なんて【音楽】なんだよ」

「カエルの歌というらしい」

「カエルだあ？それじゃあバエル共の歌ってことか？」

「それはないだろう…」

ため息を吐くフィニアス。

「なあ、アラストル」

「なんだよ」

「スパードの事についてなんだが…」

「ああ」

「あいつはムンドウスを倒せると思うか？」

「何？あいつ叛逆でもすんの？」

「そうではないが、あいつは禁断の果実を食さずにあの力だ。もし実

を取り込んだりでもしたら…」

「多分、誰にも負けないだろうな。それこそ天界のカス共をも楽に

殺れるだろう」

「そうだったらもう魔界の時代だな」

「そうはならんだろ」

「何故だ？」

「あいつの性格を考えたからだ」

「それもそうだな」

そう、めんどくさがり屋のスパードは圧政者の敵ではなく弱者の友であり続けた。きっとこれからもうそんなんだ。

#11 憧れと兄と膝枕

「少し長引いちゃったね」

「はい。少しというかかなり、ですけど。もう12時です。夜中の」
「えっ、本当に？」

ええ、とリリは金色の懐中時計を手にして答えた。

短針と長針が見事に数字の12に重なるうとしていた。

ハチマンが復帰してから既に1週間が経っている。

リリのお陰で僕達は冒険者として軌道に乗った、安定してきたと言えるのかもしれない。サポーターひとりでここまで違うものなのかと、僕達は頻りに驚くばかりだ。

「それじゃあ、リリ、今日の報酬も稼いだ分の山分けでいい？」

「ベル様、もう少し物欲を覚えた方がいいと思います。ありがたく頂戴しているリリが言えた立場ではありませんが……人が良すぎです」

「あははは、大丈夫だよ。ハチマンの方が物欲無いから……」

「ああ……そうですね。最早あれは欠損してるレベルです」

そう、僕達がこうして話せてるのはその少し離れた所でハチマンがモンスターと戦っている、いや、蹂躪しているお陰だからだ。

最近のハチマンの成長は凄まじい。僕と神様がで、デートした次の日からダンジョン探索する前からボロボロだった。詳しく聞こうとしても上手くはぐらかされる。

それにハチマンは報酬を山分けしようとしてもキツチリ1000ヴァリスしか受け取っていない。解散したら直ぐ何処かに行くから何か用事でもあるのだろうか……

「うわあ、本当だ。すっかり夜になっちゃってる……」

ダンジョンから出て空を見上げると既に闇の帳が降りていた。魔石が埋め込まれた街灯が暗い町を照らしていた。

「なあ、『天界』で神は何してんだろうな」

ふとハチマンが空を見上げながら呟く。

「天界では神様達にはいくつかの義務があると聞きます。その最たる例が、下界で眠りについたリリ達、子供達の処理だそうです」

「それって…」

「はい。亡くなった人の、死後の進路ですね」

聞くに神の下す『魂』の精算は神によって千差万別で、天界での生活を許したり、想像を絶する責苦を与えたり、…例を挙げればキリがない。その『魂』は神の裁量一つで管理される。生前の振る舞いや、善や悪といった概念は存在しないらしい。神に気に入られるか気に入られないか。

「まあ、最終的にはほとんどの者が転生させてもらえるようなのですが…とにかく、そんなこともあって、天界では激滅した神様達の穴を埋め合わせるため、居残り組の神様達が今も不眠不休でお仕事をしていらつしやるらしいですよ？次回の下界行きも、血なまぐさい厳重な『お話し』のうえで順番を決めるだとか」

「それでも何やかんやで仕事はするんだな」

「あくまで噂ですけど神様達の中では『仕事をしないと奴が来る』といひ伝えられており泣く泣くお仕事をせざるを得ない状況らしいです」
「『奴』って？」

「さあ、リリもよく知りません。恐ろしすぎて名前も出せないんだとか…」

そ、そんなに怖い人？がいるなんて…。そんな所に行きたくない、いや死にたくない…と僕は本気で思ってしまった。神の憂さ晴らしに付き合いたくないからだ。

「…でも、リリは死ぬことに憧れていたことがありましたよ」

「え」

「……」

「一度、神様達のもとに還れば…今度生まれるリリは、今のリリよりちよつとはマシになっているのかなあ、なんて…」

栗色の前髪が揺れ、鬚になった大きな瞳が遠い目をしている。

「リ…リリッ！」

力一杯叫んだ。叫ばないと何処かに行っちゃう気がした。

「…ごめんなさい、変なこと言って」

「……」

「昔のことです。真に受けなくてください。リリはこれでもたくましくなりましたから、今ではそんなことちつとも思ってません」

何も言えない。本人は既に立ち直っているからだ。この僕の持つてる感情を形にできず、言葉としてリリに伝えることはできなかった。

「なあ、アーデ」

「なんでしようか、ハチマン様」

「俺達はお前の役に立ててるか？」

「それは勿論です！ハチマン様達のお陰でリリはお金に困っていません…ありがたい限りです」

「そう、そりや…よかった」

ハチマンの声は何処か嬉しそうだったが暗闇のせいでその顔は良く見えなかった。

「さ、帰るか…」

「そうですね。リリも今日は【ファミリア】のホームに一度帰っておかなければいけません」

「俺はこの後用事が…」

「ハチマンっていつも何してるの？」

「徘徊」

「徘徊って…」

あれから3日経った。

部屋の掃除をハチマンがしている。というか家事の殆どをハチマンが負担している。ハチマンの家事スキルは驚く程高くあつという間に僕と神様の生活は改善されていった。

白いエプロンを身に纏い箒を持ち埃を払う姿は全国の母親に見て欲しい。きつと全会一致で100点満点の評価を得るだろう。

僕はハチマンだけにやらせるのもアレだから雑巾で床を磨いてる。因みにボロボロになった床はハチマンが全部張り替えた。本人曰く「ネット見てたら覚えた」そうだ。ネット？よく分からないけど本と

かそういうやつだろうか…。

「おいクラネル」

「どうしたの？」

「この棚の上のバスケットって…」

「あっ!!」

「はあく、返しに行くぞ」

エプロンを脱ぎコートに替えるハチマン。何やかんや言っただけ僕達を気にかけてくれるのはハチマンが俗に言うツンデレって奴なのかな…。

「ハチマンって…ツンデレ？」

「バカなこと言っただけでねえで準備しろ」

「は〜い！」

僕には兄弟がいないけどもしかしたら僕にお兄ちゃんがいたらこんな感じなのかな…。

「襟、乱れてるぞ」

そう言い僕の服装を整えてくれるハチマン。

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「あ？」

「い、今のなしって事で…」

「ふっ、お兄ちゃん…ねえ」

ハチマンが…デレた!?

ハチマンの照れた顔に意識を取られ【豊饒の女主人】までの出来事が思い出せない。ここからは切り替えていかないと…!

「本っ当つに、ごめんなさいっ！」

「あははは…」

ぱんっ!と手を合わせて勢いよく頭を下げる。

「顔を上げてください、ベルさん。私は気にしていませんから」
「いや、でも…」

「それなら、今度から気をつけるように頑張ってください。過ぎたこととは戻ってきませんから、これからの行動で誠意を示すということ。それにハチマンさんにアーニヤとクロエの相手をしてもらって

るのでこちらから強く言う筋はありません」

そう、僕とシルさんがこうして話せてるのはカウンター席に座ってるハチマンが指から出した魔力の光で二人の気を引いてるからだ。…いつ見ても便利そうだなあ。

【ニヤニヤ！】

【体が！体が勝手に！】

お詫びにというわけではないけど簡単な注文をする。ハチマンのよく食べるトマトパスタも一緒に。

「あれ、前にこんなの飾ってありました？」

店の端にある白色の本が視界の端をつついた。

「ああ、それは…お客様のどなたが、お店に忘れていったようなんですよ。取りに戻られた際に気付いてもらえるように、こうして置いていて」

ハチマンに遊ばれ…ゲフンゲフン、遊んでいたキャットピープルの店員さんがシルさん、そして何故かリユーさんに独断で休憩を言い渡してたけど、大丈夫なのかな？

それに何かニヤついてたけど。

【ヒキガヤさん、口にトマトソースが付いてますよ】

【マジすか…】

【拭いてあげるので少しじつとしてください】

【いや、それくらい自分で…ムグウ！】

【抵抗しても無駄です。振りほどけないでしょう？なんたってレベル4ですから】

【レベル4すげえ…】

他種族からも評判のエルフ、その魔性の美はどうやらハチマンにも効いたようだ。ハチマンのこういう人らしい一面ってあんまり見た事ない気がするから見れて嬉しいな。

「なら、読書なんていかがでしょう？」

「え？読書？」

「はい。ベルさんは本をお読みになられないようですから。この機会にぜひ試してみては？」

読書かあ…。英雄のおとぎ話を讀んだ後感じていた、居てもたつてもいられなくなるあの感覚。今の僕にはいい薬になるかもしれない。「ありがとうございます、シルさん。僕、本を讀んでみることにします」

「ハチマンさん、パスタは美味しいですか？」

「はい。俺トマト嫌いな筈なのにこうも食えるなんて、流石って感じですよ」

「私もミア母さんくらい上手く作れたら…」

「え？何か言いました？」

「いえ、何でもありません」

二人のやり取りに耳を傾けながらシルさんから本を受け取り僕達は店を出た。

クラネルがソファアで本を讀んでる間に俺は地下から地上に戻りひっそりとダンジョンに潜る。アラストルとの地獄の特訓で自分に足りないのは発想力だと言われた。それもそうだ。幻影剣は剣を形にして撃つだけ。魔腕は魔力を形にして動かすだけ。そこに密度も威力もありはしない。雑魚いモンスターには効果覷面だがそれが対人、上級冒険者になつたらあまり効かないのでは…という事だ。

だからより精度の良いものを作れるようにならなくては…。

走り、モンスターをフォースエッジで切り裂きながら想像し創造する。今までの使い捨てのような幻影剣なんていらぬ。より切れ味があり、より早く飛び、より多く造るようにな。何百回何千回作ろうとして砕け散つても諦めない。イメージしろ、常に最高の剣を…。決めつけるな、己の限界を…。

ブウン…

見てくれは一緒に青く鈍く光っている剣が浮いている。それをそこらにいる蟻のモンスター一体に投射する。

「ギッ…」

断末魔を上げる暇もなくその体を真っ二つに割いた幻影剣。その威力は格段に上がり、速度も目にも留まらぬ速さに仕上がった。

「でも、まだだ…」

それを8本作り出し自分の両脇に固定し剣を構えモンスターの群れに突っ込む。何体かを同時に相手していると後ろから襲ってくるモンスター。その気配を察知し出していた幻影剣を一気にそのモンスター一体にその刃を飛ばす。そうすると…

「式号機の出来上がりだな」

某世界的人気を誇るアニメのトラウマシーンの再現だ。それはさて置き、他に工夫を凝らし出した幻影剣を自分の周りをグルグルと回転させ近づいて来るモンスターを巻き込んだり、それを全方位に発射させたり、ターゲットにしたモンスターの真上に幻影剣を出し、ハリセンボンみたいにしたりと、自分でも惨いと思うような事を何度もした。

しかし、まだ足りない、全然足りない。そこでふと、思いつく。

「そうだ…俺自身を強化すればいい」

周りにモンスターが居ない事を確認してから身体中に流れる魔力をイメージで掴む。流れる水のような、迸る炎のようにな痺れる稲妻のような、吹き荒れる風のような、照らす光のような、飲み込む闇のような…

「掴んだ…」

掴んだイメージを体の隅々に行き渡らせる。満遍なく全身の神経1本1本に至るまで。

「できた…か…?」

青、ではなく体の周りがほのかに紫色に光った。

「ギギイーーーーー!!」

モンスター共目測り30匹位が現れる。丁度いい…

「少し、試させろっ…」

全身に魔力を流して為消耗が激しい。これは一気に決着を付けないといけないか…

「はああああああっ!!」

モンスターに向かって走るとその速さは格段に違く、フォースエツジを一振するだけだ5、6匹は容易く切り裂ける。

「これなら!!」

フォースエッジを逆手に構えありつただけの魔力を注ぎ込み本気で振る。

その斬撃は形となりモンスターの群れに進んでく。

ドゴオーローン!!

晴れた霧には何もなかった。沸いてきたモンスターを殲滅できたからだ。この威力、悪魔的だ!

「あ、れ?」

意識が遠のいてく、しまった、魔力を使いすぎた。コートの中に入られたマジックポーションに手を伸ばそうとするが力及ばずそのまま倒れる。

「ファイアボルトオ!!」

何処か遠い所から聞き慣れた叫び声がある。あまりはしやぎすぎるなよ…。

「……?」

「どうした、アイズ」

足を止めた私にリヴェリアが声をかける。軽く下層に行つてた帰りだがふと目に留まった光景に気を取られたからだ。

「人が倒れてる」

「モンスターにやられたか」

ルームの中央にぼつねんと、一人の冒険者が転がっていた。まるで行き倒れのように地面に倒れてるソレに2人は近付く。

「外傷は無し、治療および解毒の必要性も皆無…典型的な精神疲弊マインドダウンだな」

よくも気絶するまで自分を追い込めたものだど、リヴェリアは感心してみせる。一方で私は膝に両手をついた姿勢で、その冒険者のコートと銀と黒の入り交じった頭髪を見つめていた。見覚えがある。つい最近見かけた冒険者だ。木箱に入っていたから記憶に残っている。

「この子…」

「む、よく見れば木箱に入っていた冒険者ではないか…あの馬鹿狼が

戸部、君は責任を知ってるかい？

姫菜、君は何故隠すんだい？

平塚先生、貴方は何故放任できるんですか？

陽乃さん、貴方は自分の無力さを知ってますか？

小町ちゃん、君は真に有能かい？

そして葉山^俺、君にアレができるかい？

「比企谷、どうしてお前は、こんなにも愛されないんだ」

僕の眩きは、今でも進む日常に掻き消されてく。今も、そしてこれから…。

#12 埃かぶりの少女（シンデレラ）

「…っ」

「あ、起きた？」

おぶられてるであろう振動で目を覚ます。聞き慣れた声、十中八九クラネルだろう。つたく、また変な夢を見た。

「クラネルか？」

「うん…」

後ろ姿しか見えないがどうやら元気が無さそうだ。

「何かあったのか？」

「ハチマン…」

「どうした？」

「気絶してたんだけどその前の事、覚えてる？」

「魔法で新技の実験したら魔力切れで倒れた」

「そうだったんだ。僕もね？魔法が発現したんだ」

「マジか！良かったな…。俺みたいにぶっ倒れるなよ？」

「うん：僕もはしゃいでダンジョンに潜って魔法を撃ってたんだ」

「おう」

「そしたらね？」

少し涙声になるクラネル。

「勿体ぶるなよ」

「やっぱいいいや…」

気になる、俺が気絶してた時何があったのか。しかし今のクラネルの精神状態じゃ無理だろう。

「そっか…」

慰められずそれしか言えない自分が悔しい。

クラネルの背中におぶられながら夜空を見上げる。こんな時も夜空は綺麗なのが恨めしい。

ホームに帰るとクラネルの魔法が発現した理由が判明した。

「魔導書？」
グリモア

「な、なんですか、ソレ…?」

「簡単に言っちゃうと、魔法の強制発現書…」

詳しく聞けばスキルに『神秘』と『魔道』という希少なスキルを発現させた人にしか作れないものでバチくそ高価なのが瞬時に理解できた。

「いいかクラネル?お前は本の持ち主に偶然出会った。そして本を読む前にその持ち主に直接返した。だから本は手元がない、間違っても使用済みの魔導書なんて最初からなかった…そういうことにするんだ」

「ハチマン!」

「よく言った!ハチマン君!」

「ダメですよ!神様!」

ちっ、クラネルは根っからの善人なのを忘れてた。

「だからといってな、正直に言ったらん千万の借金地獄だぞ。返せる?」

「うぐっ…と、とにかくっ、この本を貸してくれちゃった人に、僕、事情を話してきます!」

「ベル君、止せっ、君は潔癖すぎるっ!世界は神よりも気まぐれなんだぞ!」

「隠したってバレるに決まってるじゃないですか!」

それもそうだ。いくら嘘をついたって酒場に持ち主が来たらアウト。こうなったら2人で『DO☆GE☆ZA☆』に賭けるしかない。俺の土下座は天下一品だぜ?

クラネルと俺は神様の静止を振り切ってホームを出た。その際にクラネルがドアを蹴り破った。アレも直さなきゃな…。

ー【豊饒の女主人】ー

「…それは、大変なことをしてしまいましたね、ベルさん」

「ちよつとシルサーーンッ!?何でさも他人事みたいに言ってるんですか!?!」

トレーで顔の下半分を隠し上目遣いでクラネルを見つめる。

「やっぱり、ダメですか？」

「すつごく可愛いですけどダメッ！」

「けっ!!イライラして来た」

「鬱陶しいよ、坊主。人様の店で、朝っぱらから」

「よっ!待ってました!立てば振動座つても振動、歩く姿は金剛夜叉明王!【豊饒の女主人】の店主!ミア・グランドだくッ!

そんな巨神ゲフンゲフン、ミアさんはクラネルから魔導書をひよいと取り上げると中身をパラパラと見るとふん、と息をついた。

「確かに魔導書だねえ……でもま、読んじまったもんは仕方ない。坊主、気にするのはよしな」

「ええ!?で、でもっ……」

「こんなものをどうか読んでくださいとばかりに店へ置いてったヤツが悪い。坊主が読まなくなつて貴重な魔導書を見つけたら、自分のものだと嘘ついてまでそこら辺の冒険者が目を通していたよ。コレはそういうモンさ。手放しちまった時点で持ち主も覚悟はしているさ。坊主だつて金の詰まった財布を無くしたら、そっくりそのまま返ってくるなんて思わないだろう?」

「それは……」

「男だつたらグズグズ言つてんじやないよ!」

クラネルの意見はトラップカード《怒声》によって掻き消された。おー怖。

ー【広場】ー

店を出た俺はダンジョンに行く為に装備品を取りに1人で戻ったクラネルを待つたために俺はいつもアーデと待ち合わせに使つてる広場でベンチに座っていた。

筋肉隆々とした冒険者ややけに露出の高い女冒険者等、様々な冒険者を観察しているとある光景が目に入った。アーデと冒険者らしき男達がいた。その雰囲気は決していいものとは言えなかった。

ーもしかしたらソーマファミリアの構成員か?

確かアーデはソーマファミリアに所属してたな。ソーマファミリアといえは金にがめつい。よく換金所で揉め事を起こしてたから記

憶に残ってる。ちよつと前に聞いたアーデの話から推測すると、主神のソーマの作る『神酒』が欲しいが、より高額金を納めないとけない為必死に金を集めてる。だから立場の弱いアーデから金をふんだくってるのだろう。

ああ、なんて…

「醜い…」

ジワ…

俺は立ち上がりフォースエッジを出しながら冒険者達に近付こうとするが…

「おい」

肩を掴まれてそれを遮られる。振り返ると体格のいい黒髪のヒューマンがいた。

(あ、この人…)

「やっぱりあの時のガキか…まあいい、聞かぜ。お前、あのチビとつるんでるのか？」

この声と口調、間違いない。あの時のロリコンだ…。

「おい、さっさと答えやがれ。お前、あのサポーターを雇ってんのか？」

「だったらどうした、あの時のパルウムとは関係ないんじゃないのか？」

「バアカ…と言ってやりてえが、思うのはてめえの勝手だな。せいぜい間抜けを演じてろ」

「それよりお前、俺に協力しろ。…あのチビをはめるんだ」

「は？」

「タダとは言わねえよ。報酬は払ってやるしアレから金を巻き上げたら分け前もくれてやる」

本気で言ってるようだ。いよいよ救いようがない…。そのまま話を聞いてれば勝手に喋ってくれそうだ。

「続ける」

「お？乗り気か？よし、お前らはいつもを装ってあのチビとダンジョンにもぐればいい。後は適当に別れてアイツを孤立させろ。後は俺

「がやる。どうだ？簡単だろ？」

嫌な笑い方。今まで何度も体験してきた感覚だ。こういう手の質問の答えは昔から相場が決まっている。

「…だが断るッ！」

「何イツ!？」

「この俺の最も好きな事の一つは…強さを鼻にかけて弱き者から奪ってく奴を貶める事だ！」

「クソガキがあ……………」

「ガキはてめえらだろ…」

互いに睨み合う。怒気に怯えるように木の枝葉がざわめく。

暫くすると男は盛大な舌打ちをして踵を返す。その背中から俺は視線を離さなかった。

「…ハチマン?」「…ハチマン様?」

振り返るといつものと化した面子、アーデとクラネルがいた。

「どうかしたの?怖い顔してたけど」

心配そうな2人を見る。あの冒険者の言う事はきつと嘘ではない。手を組もうつてのに嘘を教えるなぞトラブルを自分から撒き散らすのと同義。

ならばきつとアーデは裏切っているのだろう。考えてみればそうだ。アーデはクラネルのナイフに興味を持っていた。話を聞けば俺が「ヘファイストス・ファミリア」の連中に拉致された日にナイフを失くしたらしい。普通失くすか?神様から貰った大切な物を。きつと盗まれたのかもしれない。いや、若しくはただダンジョンで落とされたのかもしれない。

ああ…疑い出せばキリがない。クラネルならきつとそれでもと言いき信じるだろう。

だつたらやる事は一つだけ…ダンジョンでアーデを孤立させない。「気に食わねえ冒険者に絡まれたただだ。あの時のパルウムを追つた奴だ」

ピクリとアーデが反応するのを見逃さなかった。

「ええっ!?それで、どうしたの?」

「ん？そのパルウムを探してたから適当にあしらっただけだ」

「そうだったんだ…」

「それよか、さっさとダンジョン行くぞ」

「うん」「はい！」

返事するクラネルとアーデ。アーデよ、お前は相手が悪かったんだ。俺を相手に仮面を被るなんて2万年早いんだぜ。そんな脆いもの、すぐ分かる。

「あれ？ハチマン、また銀色増えた？」

「マジか…」

「…もう、潮時かあ」

本当にそう思ってるのか？…なあ、アーデ。

ー【ダンジョン】ー

「今日10階層まで行ってみませんか？」

曰くステイタスがAとBがちらほら出てきた為試しに行ってみないか、というらしい。よりもよって今日なのか…。

「…」

俺はあくまで悩んでいる雰囲気は出してるがクラネルをチラと見ると彼もまた悩んでる。そう、10階層には出ると聞く、ミノタウロスのようなモンスターが。

「…実は、リリは近日中に、大金を用意しなければいけないのです」

「っ！もしかして、それって…」

「事情は言えません。ただ、リリの「ファミリア」に関係することなので…」

チツ、悟られたか！リルルカ・アーデ、中々心理戦が得意と見た。向こうには例え嘘だろうとクラネルを納得させる理由がある。対して俺はそれをさせない程強力な言い分がない！詰みか…いや違う、考える、考えるんだ。アーデをクズい冒険者達とエンカウトさせず、尚且つ奴らと揉め事にならないですむ方法を。この程度の修羅場、あく程潜り抜けてるだろ！

「ハチマンは、どうする?」

隣で考えてる仲間に話しかける。こういう時に彼の判断は頼りになる。

「ん…まあ、確かに俺達も強くなったから、行くか」

「え…」

「どうかしたか?」

「いや、ハチマン結構悩んでみたいだから行きたくないのかなーって思ってる…」

「その気持ちもある、だがアーデの事もあるからな、キツくなる分俺が動けばいい話だし」

「そうだね、じゃあ行こう!」

「あー、その前にアーデ、マジックポーション持ってないか?俺のやつ切らしちまって…」

「まったく、ハチマン様は準備というか危機感が足りないんじゃないんですか?」

文句を言われつつリリのコートから取り出されたポーションを受け取るハチマン。

「ちゃんと考えてるぞ、ちゃんとな」

鼻をつまみながらポーションを一気に飲み干すハチマン。やっぱり味は嫌いなんだ。

「それじゃありり、ナビ宜しくね」

「はい!お任せください!」

さてと、万が一の保険は掛けた。

「霧が深いなあ」

「……」

「モンスター、多いなあ…」

「……………」

「オーク、キモイなあ……」

「……………」

「アーデに見捨てられたなあ……………」

「ハチマン、ホントごめん……」

案の定俺達はアーデに大量のモンスターを押し付けられた。当の本人は一足先に退散したが、孤立させてしまった。一応去りゆくアーデには警告したが……大丈夫だろうか。

(アーデ！あのクソツタレ共が徘徊してる！気を付けろ！)

それにしてもホントにキリがない。倒せば次から次へとやって来る。これがモテ期？ねーよ。

「クラネル！少し時間を稼いでくれ！」

「分かった！」

フォースエッジを地面に突き刺し目を瞑る。

アーデからポジションを貰った際に自分の魔力を彼女の袖に付着させた。地面に突き刺したフォースエッジの剣先に魔力を集中させるとそれに呼応するかのように俺のアホ毛がピクピクと動きアーデにマークした魔力の方に傾く。原理的にソナー的な奴だと思っただけらしい。

「クラネル！アーデはあっちだ！……ここは俺が引き受ける！お前は行け！」

「ハチマン！で、でも！」

「お前が雇ったんだ！お前が行け！俺も後で行く！……大丈夫だ、死にやしねえよ」

苦悶の表情を浮かべるクラネルはモンスターを無視して走り去っていく。さてと、ここは俺のステージだ。

「……トリガー」

身体中に魔力を行き届かせ全体を強化する。こっからは時間と勝負だ。

「こいよ、ブサイク共」

『ぶおおおお!!』

《振り下ろされた《ダンジョン製》の武器を強化された拳で粉碎する。驚いてる隙にフォースエッジで首をはね飛ばしその亡骸を魔腕でシ

ルバーバックに投げつけ動きを封じよるめいている内に顔を綺麗に4等分に切り裂く、こういう時には振りやすい日本刀がいいが、持ち手のない今はないものねだりなんてできない。

死んだシルバーバックの上に立っているとそこを中心にモンスターに囲まれる。しかし俺ばかり見てるモンスターは気付かない、俺が畏だということを…。

「ヴァカメー」

上空に展開した数多の幻影剣、それにより寄ってきたモンスターは全部ハリネズミになり消えてく。知ってるかい？ハリネズミは英語でヘッジホッグっていうんだぜ。

「やべえな、意識が…」

フォースエッジを杖代わりにしてなんとか立っていられる状態。もつと魔力効率を上げなきゃな。工夫と強化を両立させなくては…。

コートに手を入れてマジックポーションを取り出し飲み干す。え？なんで持つてるのかって？まあ、リリルカにマークを付ける為の嘘とかかなんというか…。まあ、騙したのはお互い様だしなして事だな。そろそろ行くか…。

パキパキ…

ちっ、またモンスターか…。しかもご丁寧に道を塞いでいやがる。俺なんか恨まれる事した？

しかしそんなモンスター達は風に蹴散らされた。その風の発生源はこちらに向かってくる。

「あの、大丈夫ですか？」

何度言われりやいいんだ、そのセリフ。

「平気です、ありがとうございませす。この恩はきつとどこかで返させてもらいます。それじゃ、急いでるんで…」

風の主アイズ・ヴァレンシユタインに背を向けて走る。アホ毛はまだ機能する。あとはその方向に向かって走るだけ。

3階層上の7階層の小さなルームでリリがベルに抱きついて泣いていた。周りには大量のキラアートの死骸。多分モンスターに襲

われてる所をクラネルに助けて貰ったのだろう。リルルカが泣いている。その姿には仮面など着いていない、クラネルはそれを受け止め優しく抱きしめている。俺はそれを陰で見守っている。

―【街路】―

あれからリルルカと別れた俺達はホームに足を向けていた。クラネルは浮かぬ顔をしている。

「そんなに気がかりなのか？」

「うん…」

「あんな事があつたんだ、接しにくくなるだろうな」

「ハチマン、どうすればいいのかな…」

「どうって？」

「僕はリリとハチマンとダンジョンに行きたい。でも、どう声を掛けたらいいのか…」

「なんだ、そんな事か…簡単だ、今から教える言葉復唱すればいい。1回しか言わないからよく聞けよ……………」

「そ、それで、いいの？」

「絶対大丈夫」

「ありがとう！ハチマン！」

そして2日後

「サポーターさん、サポーターさん、冒険者を探してませんか？」

「えっ？」

俯いてたりルルカにクラネルが話しかける。

「混乱してるのか？でも今の状況は簡単だ。サポーターさんの力を借りたいアホで三分の一人前の冒険者が、自分を売り込んでるんだ」

続いて俺が言う。

「僕達と一緒に、ダンジョンへもぐってくれないかな？」

リルルカに向けて右手を出すクラネル。

「――はいっ、リリを連れていってくださいー！」

その手を取るリルルカ。

死に憧れていたリルルカ・アード、その人生はリセットできなくと

も人間関係はリセットできた。しかもより良い方向に。

なんだろう、この感情。今まで味わったことの無い感じだ。

(ああ、そういう事か…)

俺の最も嫌いな感情を抱いてしまった。そんな自分がリセットしたい。

#13 女神の思い男知らず

ー【カフェ】ー

「じゃあ、【ソーマ・ファミリア】の方はもういいの？」

「はい。リリはじきに亡くなったことにされるでしょうから」

僕達とリリが改めてパーティーを結成して1日。リリの状況確認の為僕は彼女から説明を受けた。因みにこのカフェはハチマンの紹介だ。

「その、死人だなんて、リリはいいの？」

「お心づかいありがとうございます。ですが割り切った方がいいかと。ベル様やハチマン様がリリをご存知であるなら、リリはそれだけで満足です」

本心から言ってるリリに、僕はこれ以上触れるのは止めた。彼女の心の傷を広げるような真似はしない為だ。

後は彼女の十八番の魔法【シンダー・エラ】という変身魔法に頼るしかない。この能力を知らない限り、他者が『リリルカ・アーデ』に辿り着く可能性は限りなく低いだろう。

「おーい、ベル君！」

「あつ、神様！」

リリとそう変わらない小さな体が僕とリリの前に到着する。

「お待たせ。すまない、待ったかい？」

「そんなことないです。すいません、バイトに都合をつけてもらって…」

「ボクの方は平気さ。それより…彼女がそうかい？」

「リ、リリルカ・アーデです。は、初めましてっ」

向けられる視線にリリは慌てて椅子を降りて一礼する。そこで神様の椅子が無い事に気づく。

「いけない。神様の椅子を用意してもらってないや…」

「…：なあにつ、気にすることはないさーこの客の数だ、代わりの椅子もないのだろう！よしっ、ベル君すわるんだっ、ボクは君の膝の上に

座らせてもらうよ!」

「あはは、神様もそんな冗談を言うんですね。ちょっと待っていてください、店の人に頼んできますから」

そう言いお店の人に声を掛ける為にカウンターに近づくと何者かに肩を掴まれて椅子に座らされる。何事かと思いいその人の方を見ると既にカウンターに幾つものピザがのつてるお皿とその量に劣らない程のサンデーグラスを前にし店員のおばあさんが運んできたコーヒークップを片手に持つハチマンがいた。

「クラネル、話がある」

「ハチマン：ビツクリして声すら出なかったよ」

「あー、悪かった。それでさ、お前はリリルカをどう思う?」

「どうって、大切なパーティーメンバーだよ?」

「それは知ってる。あー、なんというか、その…」

ハチマンにしては歯切れが悪いいつもならズバツと言うはずなのに…。

「リリルカの今までの裏切りをを断罪するつもりはないのか?」

ビクツとする。そう、リリに盗られた今までのお金は他の冒険者に盗られて一文も戻ってきやしない。質問の意味を問いたくてハチマンを見ると真剣な眼差しでこちらを見てくる。でも僕に出てくる答えは一つ。

「ないよ」

じつと彼の目を見る。街の人が怖がる目。でも僕は知ってる。彼が優しい事を…。きつと試されてるんだ。

「そうか、ならいいんだ」

コーヒークップに口をつけ中身を飲み干す。とても甘い匂いがする。そっか、ハチマンは甘い物が大好きなんだ。

「あつちの話も終わりそうだし、戻ったらどうだ?椅子はそれでも持っていきな」

「うん…ハチマンはどうするの?」

「俺は…鍛錬」

じゃあな、と言いお代を払ったハチマンはどこかへ行ってしまう

た。歌を小声で歌いながら…。

「男なら〜 誰かのために強くなれ〜 齒を食いしばって〜 思いつきり守り抜け〜」

掃除してる時とかも偶に口ずさんでいるけどハチマンの歌は凄く元氣が出るなあ。

そう思いつつ神様とリリの所に椅子を持っていく。

「ごめんなさいっ」

「えっ？」

今僕は「ソーマ・ファミリア」の件をエイナさんに報告しようとギルドに足を運んだところ、たまたま居合わせたアイズさんに謝罪を受けていた。

「私が倒し損ねたミノタウロスのせいで、君達に迷惑をかけて、いつばい傷付けたから…ずっと謝りたかった。ごめんなさい」

「ち、違います！悪いのは迂闊に下層へもぐった僕でっ、ヴァレンシユタインさんは、貴方は全然悪くなくて!?むしろ助けてもらった命の恩人で！というか謝らないといけないのはお礼を言わずに散々逃げ回ってた僕の方でっ…ご、ごめんなさいっっ！」

ご覧の通りしどろもどろでたじたじの謝罪を述べた後色々と話しているうちになんと あ の ヴアレンシユタインさんが！特訓をつけてくれることになりました！

特訓は明日からだだから凄く楽しみで眠れず夜更かししてしまい朝にハチマンに叩き起されたのは秘密だ。

ー【市壁の上】ー

そんな事もあったなど地面に転がりながら考える。アイズさんと特訓してもう5日か6日は経っている。

「今日はお昼寝の特訓をしようか」

「はっ」

横転しては立ち横転の繰り返しの特訓は日に日に厳しさが増していく中、アイズさんからそんな提案をされた。

「あの…もしかして、眠いんですか？」

「……」

「訓練だよ」

「は、はいっ」

こてん、と市壁上の道に寝そべり目を閉じるアイズさん。それを眺めてみると

「寝ないの？」

「あ、は、はい……」

彼女なりの誠意なのだろう、と自分に言い聞かせその隣に

「し、失礼します……」

おずおずと、隣に寝そべろうとすると……。

ヒュルルルルルル……

ん？なんの音だ？

ズドーン!!!

僕達から10〜15mは離れた所に砂塵と衝撃が走る。流石に起きたアイズさんとそこに目を向ける。段々その正体が鮮明に見えてくる。

ギギギギ……

そんな重苦しい金属音と共に姿を現したのは重そうな鎧を全身に纏ったハチマンだった。

「どーした!!もう終わりか?」

ハチマンを端目に他の声がした方、壁の外側を見るとアラル神父がいた。

「う、るせえっ!まだだっ……まだ終わってない!トリガー!!」

身体を紫色に包ませ強化したたハチマンはアラル神父の所に突っ込んでいき組手をしている。しかしアラル神父の実力は見たただけでももの凄くて、ハチマンも手も足も出でない。腹を蹴られ崩れたら頭を掴まれてそこらに投げられる。それでも重い体に鞭を打ち立ち上がり再びアラル神父に立ち向かうハチマン。しかし結果は虚しく今度は顔から地面に激突した。それでも立ち上がったハチマンは諦めずアラル神父に挑み渾身のパンチをなんとか入れることができた。よろめいた隙を見逃さなかったハチマンは魔腕でアラル神父の動き

を封じ技の準備に入る。

両手を胸の前でエネルギーを貯めて1度引き離してから右腕を縦に、そして左手首を右手首に垂直になるように組むとそこから光の束が出る。それはアラル神父に直撃し爆発が起きた。

ドサツ…

あれだけ魔力を使ったのもありハチマンも倒れてしまった。そんなハチマンは少し焦げたアラル神父に担がれている。

「よお、あん時のボウズだな」

「!!」

いつの間にか隣にいる？何で？移動？それにしても移動が速すぎる…。

「あの、ハチマンとは…」

「聞いてないのか？コイツを鍛えてやってんだよ」

「今のも？」

「ああ、『ギアを付けて本気でやってみろ』って内容だ」

「ギアっていうのは…」

「あの鎧さね、正式名称『テクターギアβ』。関節部には通常の500倍固い形状記憶合金。所々についてるチューブは動きを大幅に軽減させる為の油圧機。普通の人間なら着けると忽ち腕が変な方向に曲がるだろうナ」

寝かしたハチマンのテクターギアを外しながら愉快そうにアラル神父は語る。

「ハチマンはずっとそれを着けてたんですか？」

「いやまさか、最初は体づくりの為に取り敢えず筋トレとか柔軟だったな。ある程度仕上がったらくっつけて感じだぞっと。お、そこにいるのは【ロキ・ファミリア】の【剣姫】じゃないか、遠征以来だな」

黙って様子を見ていたアイズさんに気付いたアラル神父が軽く挨拶をする。

「お知り合いなんですか？」

「うん、私達が遠征する時に着いてくるの。勝手に…」

「どうしてまた…」

「待ってんだよ。冒険者が死ぬのを」

嬉しそうにアラル神父が答える。

冒険者が死ぬのを待つのか？

「あの、助けたりしないんですか？」

「基本手出しはしないな、生きてんならそれでいいし死んだなら回収して埋める。なんで助けなきゃいけないんだっていう話なんだよ。そこで倒れるのは足りなかったからじゃないのか？力も速さも仲間も純粹さも…そして何より俺を突き動かす程の理想も」

寝てるハチマンにマジックポーションをかけるアラル神父は淡々と告げる。

「その点【ロキ・ファミリア】は見ていて本当につまらない。誰も冒険をしちゃいねー。安全に徹しすぎて。モンスターと戦ってるから危険？そんなの誰だって同じ、ダンジョンに潜ってんならそんなリスクは必要条件だ、十分条件じゃない。その上自分達が上級冒険者なんてとんでもねー勘違いしてやがる。いいか、貴様らなどただの迷惑な自治厨だ」

ビシツとアイズさんを指さすアラル神父。それにコテンと頭をかしげるアイズさん。僕は冒険者なのに冒険をしていない、そんな言葉が頭の中をこだましてる。

「つてのは俺個人の意見だ。コイツとはちよつと話があるから借りてくぞ」

「あ、あの…」

「大丈夫だ、今度は拉致とかじゃねーから。ちゃんと返すぜ」

言ってる事は納得はできず理解はできるが悪い人ではなさそうだ。ハチマンを担いでアラル神父は去っていく。

「アイズさん、続きをしませんか？」

「うん」

僕も追いつかなきゃ

ー【アラル教会】ー

「で、ギアはどうだった？」

「着けてる時は死体の気分だが、外すとどうも調子が良くなった気がする」

ボロい教会でアラストルと俺は談笑していた。

ふと目をやると端の方に少しボロいピアノを見つける。

「なあ、それって…」

「ああ、それか…親友が拾ってきた奴を取っておいてんだよ。いつか弾きにくると思ってるな」

「ほーん、少し弾いてみてもいいか？」

「お好きに」

ピアノ前の椅子に座り鍵盤を見ると気付いた。確かにこのピアノはボロいが埃こそ被っておらず丁寧に掃除されている。

「とはいってもかえるの歌位しか弾けないんだよなあ」

「それでいいんじゃないの？」

アラストルの要望？もあり、おぼつかない手取りでかえるの歌を弾いてく。その音色にアラストルはうっとりし、どこか寂しげな表情を浮かべている。

「お前も…弾けるようになったんだな…」

何か独り言を言ってるが今は演奏に集中しよう。どうしてだろうか、ピアノを弾いてるとたどたどしかった手はヌルヌルと動くようになり段々アレンジが加えられるようになってきた。

(不思議だ)

アラストルは元々悪魔と呼ばれる種族らしく今や地上にいるのは自分以外に片手でも数えられる位らしい。…ってかいんのかよ。その誰もが人に紛し各々の生活を営んでると聞く。元々その気性は荒々しく、そしてそれに見合った実力を秘めてると聞く。神が地上に降りるよりずっと前には地上を悪魔が支配してたと聞くが一人の悪魔が叛逆を起こし魔界に悪魔達を封印したらしい。その際に神が地上に降りるのを見越して人間が調子に乗りすぎないようにと“抑止”として数体の悪魔を地上に出し姿を消したらしい。

(すげえな…)

そこでふと疑問が出てくる。

「その封印した悪魔はどうして裏切ったんだ？」

「それは…アイツのみぞ知る事だ」

意外にもフラットな関係だったりするのだろうか…それとも知っ
ていて隠しているのか…。悩ましい…。

「とまあ、2日後だ」

「？それがどうした？」

「2日後ダンジョンに行け」

「ほぼ毎日行ってるが…」

兎に角言ったからな、と言われ帰された。

解せぬ。

ー【豊饒の女主人】ー

「トマトソースパスタとオムライス」

「はいよー」

暫くするとドン！と目の前に出されたパスタとオムライスに手を
つける。やっぱり美味い…このパスタとオムライスは最高だな。

「ヒキガヤさん」

今となつては聞き慣れた声か俺を呼ぶ。

「リオンさん」

「リユーと呼んでください。親しい人は皆呼んでくれます」

「じゃありオンさフグウ！」

リオンさんに口を軽く掴まれる。その顔はふざけてるのか？って
顔だ。

「今一度言います。親しい人は皆リユーと呼んでくれます」

「り、り、り、」

名前を呼ばれたのかチラチラと顔を見てくるリオンさん。
ちよつと、可愛くて告白してフラれそうなんですけど！フラれちゃう
のかよ…。

「リユーサン」

「棒読みなんですけど、妥協しましょう。今度はちゃんと呼んでくださ
いね」

「はあ、期待しないでくださいいね」

これは予防線だ。気軽に女性に接するといつの日のようにトラウマを刻まれるのかもしれない。比較的仲が良かったであろうあの2人も…

『ヒツキー…来ないね』

『あんな男、二度と来ないで欲しいわ』

『うん、そうだよね』

気分が悪くなってきた。俺は目の前の料理を胃に詰め込みお代をカウンターに置き足早に店を出た。あーあ、今度から別の店探さないとな。

リオンさんに落ち度はない。そう、全面的に俺が悪いんだ。勝手に女性に期待して勝手に裏切られたと勘違いし、勝手に絶望した俺の…。

ー本当にこれで、いいのか？

「はっー！」

久々にこの夢？か…。相変わらずウユニ塩湖の空を紫や青、そして赤に染まりポツンと俺とバカでかい門がある。中身は分からないがとんでもないのを封じ込めてる雰囲気がある。

「俺は強くなってるのだろうか…」

きっと身体的には強くなってるのだろう。でも、それだけじゃないはず…納得がいかないんだ。もっと別の何かが強くならなきゃ…。

門は押しても開く気配がしない。ならば諦めるだけだ。『押してダメなら諦めろ、千里の道も諦めろ』は俺の座右の銘だからな。

門に背を向けて歩く。しかしどこか煮えきらずアラストルに喰らわせたビーム技のエボルレイ・シュトロームを発射する。

【効果はいまひとつのようだ】

【八幡は諦めた】

【目の前が真っ暗になった】

ハアツ、ハアツ、ハアツ、聞いてない！聞いてない！聞いてない！！あんなモンスターがいるなんて！

『グルルルルル…』

白く輝く黒い拳に黒い胴体に見合わない二対の翼。曲がった角にギラギラと憎悪に染まる2つの目。仲間達は皆その拳の餌食になった。

始まりはダンジョンのとあるルームに入った時だ。筒状のルームで壁が赤かった。匂いも酷い。地面には沢山の武器やアマゾネスの物と見られる装飾品。気味が悪いから立ち去ろうとするとコイツが出てきた。仲間を一撃殴るだけで壁にぶち当たり血肉の塊と化す。そこで理解した。この壁は人間の名残だ。逃げようとするが出口がない。さつきまでであったハズなのに…。目の前で仲間達が殴殺されてく。最後の1人になった時には出口が現れ俺は壁に付いた血肉を舐めてる化物から逃げる。しかし罠だった。恐怖を刻まれた俺を逃がして出口を探すのが奴の狙い。1回層上に上がった途端に足の感覚が無くなる。

「あゝっ…」

白い光弾が頭上を舞う、きつとそれに足をやられたんだ。

「いゝやゝだ、じにゝだぐなゝいゝ」

涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにする。きつと行いが悪かったからこうなつたんだ。アーデから金をむしり取った。他の奴らからもだ。ああ、神様…何でもするからどうか助けて下さい…。

「Crash and bash!」

野太い声が後ろから聞こえる。え？クラッシュユバンディク

グチャ…

『フー、フー、ヴオオオオオオオオ!!』

高らかに雄叫びを挙げる。

気分が良い。両目とも見える。匂いも濃くなってきた。

でも油断しない。他の人間にバレたらめんどくさい事になる。それだけは回避しなくては…。きつと奴はここを頻繁に通るだろう。匂いが一番濃くなつた時…それが奴の終わりの時だ！

今は隠れよう…。

ひっそりと、岩のようにベオウルフは眠りにつく。
かつての憧れ、今は怨敵と化したスパードダを葬る為に…。

#14 One of third + α

ー【ホーム】ー

バキリ、と音が立ちカップの取っ手が割れた。

「……」

本体は全壊こそしなかったが白い破片がバラバラになって散っていた。

「ベル君、ハチマン君、【ステイタス】を更新しておかないかい？」

謎の胸騒ぎは収まることを知らず何かの作業をするハチマン君と冒険に行きたそうにしてるベル君を見て酷く心配になる。

「あー、俺はクラネルの後で……」

「どうかしたのかい？」

「いやまあ、靴紐が切れちゃって、交換してるとこなんで」

「分かったよ。それじゃあベル君、脱いで横になりたまえ」

ハチマン君も何やら不吉な事が起きてるらしい。これはやって損はないだろう。

【ステイタス】の更新をしてると扉をカリカリとする音がする。

「俺が行きます」

ハチマン君が出て行く。暫くすると戻ってきた。

「なんだったんだい？」

「黒猫が扉を引っ掻いてまして……」

不吉だ。不吉すぎる。

「よし、ベル君は終わり、ハチマン君も脱ぎたまえ」

うす、と返事し上半身を裸にする。その胸には綺麗なネックレスがあった。銀盤に紅い宝玉が両面に固定されており彼によく似合っている。

「!!」

ハチマン君はベル君よりも先に特訓してたと聞くがまさかここまで差が開くなんて……。ベル君はヴァレン何某くんにしごかれてたがハチマン君の相手は分からない。でも相当過酷だったのだろう。結

果は数字に出るとはバイトのおばちゃんもよく言ったものだ。

「ん？やべつ、もう時間だ。すみません神様、結果は帰ってから聞きます。行くぞ！クラネル」

「うんー」

「あ、ちよつ待てよー」

一瞬口調が変わってしまったが彼らはそそくさと着替え出て行ってしまった。

ハチマン・ヒキガヤ

Lv1

力：SS1090 耐久：S 980 器用：SS 1019 敏

捷：SS 1000 魔力：SS 1027

「何だよ、SSって…」

しかもちやつかりベル君を抜かしてる。こりやうかうかしてられないよ。

ちり、と首筋が疼いた。この感じはあの雪ノ下陽乃に囁かれた感触と似ている。今までは気にもならなかった。『なんだ、視線か』程度だったのに今では腸が煮えくり返るような気分だ。俺はオラリオに来て短気になったのかもしれない。

「…」

これはクラネルにも同じ事が起こったのか2人して顔を合わせる。あの時と同じだ。【豊饒の女主人】に初めて行った日と同じ感じ。怪物祭の時と同じ。そう、きつとこの後想像もつかない様な事が起きるのだろう。なんなら今日がアラストルの言ってた2日後だ。

「リリルカ、クラネル、お前達は一旦地上に戻ってくれないか？」

「え？どうして？」「どうしてでしょうか？」

「いやまあ、ほら、さつきお昼食べただろ？この先嫌な感じがするからフローヴァさんにリリルカと弁当を返しに行つて欲しいなって」

「別にいいけど…ハチマンは行かないの？」

「そうですよ、お独りで残る意味があまり感じられませんわが…」

「ほら、別に3人で行く意味なんて無いし、それにリリルカはクラネル

が戻って来る時に女性を誑かさないように見てて欲しいんだ。ドロップアイテムとか売って荷物を減らしたいしな」

「ええっ!?」「分かりました。そこまで言うのなら…」

困惑するクラネルとクラネルにジト目を向けるリリルカは地上に戻って行く。

…これで、よかったんだ。

リリルカ、お前のモンスターとか、ダンジョンの知識はとても役に立った。こんな頼りない俺達を信用して着いてきてくれて、とても嬉しかった。ありがとう。

ベル、ベル・クラネル。俺の名前をマトモに呼んでくれた仲間。最初は甘い奴だなんて思ってたがその芯の強さは誰よりも俺が知ってる。いや、神様の方が知ってるのかも…。お前は十分ではないが強くなった。それにリリルカもいる。きつと俺が居なくてもお前はやっていける。…そう俺が信じてる。

クラネル、お前はもう1人で走れる

目の前の通路に目を向ける。禍々しい雰囲気だ。この感じ、オラリオに来るちよつと前のトラックに轢かれる時の感覚かな。『死』が手招きしている。怖い…怖い…本当なら今すぐ俺も上に行って「連れてってくれ」なんて言ったらアイツらは笑顔で受け入れてくれるだろう。ダメだ、そんなの、ダメなんだ…。またダンジョンに行ったら俺達共々殺される。これだけは回避しなくては…。

理想通りにいけば、さっさとこの先の『死』を排除してここに戻ってアイツらをここ、9階層への入口で迎えること。

「行くか…」

遺書もない、祈りも済ませてない、願いも叶えてないし愛も誇りも探究心だつて満たされてない。それでも行かなきゃいけない。頭の中でクドクド言つたつて誰も見てやしないんだ。

歩いていてもあれだから暫く走っていると広いルームに入る。パッと見体育館位のルーム。しかしその光景は凄惨だった。

「なんだこれは…」

死体まみれだった。中央付近に2体のモンスターがいる。赤い牛、

始まりの日に散々な目に合わされた思い出がある、『ミノタウロス』。もう一体は1本角に黒い体に光る拳をして今にも拳を振りかざして化物。

「ひ、ひいい!!」「助けてえええ!!」

泣き叫ぶ2人の冒険者がいる。どっからどうみてもピンチだ。不味い、助けなくては…。

間に合え、間に合え!!

ガキン!!

フォースエツジでなんとかその拳を受け止めて、その衝撃で吹き飛ばされるがなんとかか体制を直す。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「グルルルルル…」

2体のモンスターは俺を見つめるなり敵意をむき出しにしてくる。よし、何とか注意は引けた。

「そこの2人!逃げろ!」

コートに入れてたポジションのありつたけを魔腕に持たせ怪我をしている冒険者にかける。これでなんとかうごけるようにはなるだろう。

「あ、ありがとう!」「助けを呼んでくる!それまで、持ちこたえてくれ!」

(はっ、期待しちゃいねーよ)

2体のモンスターに交互に目を向け確認する。

(ああ、死にたくないなあ…)

やっぱり、俺は臆病だ。

ー【7階層】ー

リリと僕はいつもより少ないモンスター達に警戒しながら進んでいた。

「ねえ、リリ…」

「? どうかしましたか?ベル様」

「ハチマンの様子、おかしくなかった?」

「言われてみれば少し変というか…。どこか優しい目をしていました」

そう、ハチマンは笑顔だった。まるで、何かを諦めたかのような…そんな笑顔。

「うん…。やっぱり僕、戻るよ」

「よろしいのですか？」

「おかしいよ、ハチマンがあんな事を言い出したのは僕とハチマンが『嫌な予感』をした後すぐだった。よく考えてみれば僕達をそれから逃がすため…なのかな…」

「考えすぎなのでは？」

「そうだといいんだけど…」

踵を返してハチマンの元に向かう。大丈夫だといいんだけど…。

ー【9階層】ー

「うおおおおおおおツ!!」

「ガアアアアアアア!!」

「ブルルルルア!!」

な、なんだよ、これ…。

そこには2体のモンスターを相手に剣を振るうハチマンの姿があった。トラウマの象徴たる【ミノタウロス】と見た事も聞いたことも無いモンスターがハチマンに寄って集って襲いかかっていた。

「どうしてだよッ!ハチマンツツ!!」

どうしていつも、ハチマンは遠くに行っちゃうんだよ…!

「…2人かな」

遠征に出ている【ロキ・ファミリア】の幹部達のそれぞれが音に反応する。

丁度面々が通過しようとしてる十字路、その右手の方角から激しい足音が聞こえる。

「なーんか、やけに慌てるね。声かけてみる？」

「止めなさい、ダンジョン内では他所のパーティに基本不干涉よ」

「ねえっ、どうしたのー!」

「…馬鹿たれ」

声を大にして呼びかけたティオネに姉のティオナはがつくりする。

「つて…げえっ!? あ、【^{アマッソ}大切断】!?!」

「ていうか、【ロキ・ファミア】!? え、遠征!?!」

「よし、黙ろうぜ? んで、こつちの質問に答えろ。お前達は何してんだ? キラーアントの群れにでも襲われて、仲間でも見捨ててきちまったか?」

「そんなわけあるかつ! あんなのに比べたらキラーアントの方が万倍マシだ」

「ミノタウロスと、新種が出たんだ」

「!!!!」

フィン、ベート、ティオネ、ティオナ、アイズ、リヴェリアが驚愕する。

話を聞くとルームで殺されそうな時に紫のコートを着た少年に助けられたらしい。新種は拳を、ミノタウロスは天然ではなく人工の大剣を装備していたこと。

「そのミノタウロスと新種はどこで見たの?」

「きゅ、9階層、動いてなければ…」

「…フィン」

「ああ、分かってる、隊はこのまま前身! 指揮はラウル、君がとるんだ!」

「は、はい!?!」

「…まさか、行くのか?」

「親指が疼いてるんだ。見にいっておきたい。それともリヴェリアは残るのかい?」

「…フィンの勘が働いてるなら確かだな。どれ、私も行かせてもらおう」

思い思いに第1級冒険者達は、9階層へと先行するのであった。

「なぜ来たんだあッ!!」

俺の怒声がルームを包む、その相手は勿論クラネルとリリル力だ。

入口に立ち尽くす2人の顔は名状しがたかった。

「だって…だって…」

「フー、フー…」

不味いツ！ミノタウロスの目的が俺からクラネルに変わった！

「ハチマン1人じゃ無理だろ!?!」

「なん、だつ…」

化物の拳を受け止めて吹き飛びながらクラネルの煽りを受ける。俺の体はクラネル達の近くまで転がった。

「がはあつ！」

「ハチマン、お願いだよ。ハチマンの目には僕達は足でまといに見えるの?」

歩み寄ってくるモンスター動きを止めるため魔力で結界を作り時間を稼ぐ。この時間でクラネル達を帰さなくては…。

霞む視界の中でクラネルは涙声になりながら聞いてくる。

「そんなにも僕達は弱いのか?」

「っ…そうだ!クラネル、お前は泣き虫で!臆病で!頼りない!拳句の果てには美神と美人の知り合いがいて!そんなお前が死んでみる!悲しまれるだろ?俺は違う…何も無い。心から愛してくれる神もいなければ毎回弁当を作ってくれるような人もいない。タダのパフェとオリーブ抜きピザと激甘コーヒーが好きな変な奴だ。ほらな、死んでも損は無い」

「っ……」

「行けよ…リリルカ!クラネルを引きずってでも逃げろ!」

「いや…です…」

「行けよ!!」

化物の拳が結界にぶつかる。それだけでミシツとひびが入る。釣られてミノタウロスも剣撃を繰り返される。この結界も長くはもたない。

「ハチマン、僕は悲しいよ」

「ハチマンが死んじゃったら悲しいよ…だってハチマンは僕の初めての仲間だもん…。だからそんな悲しいことを言わないでよ。そして

お願い、僕と一緒に冒険をしない?」

ボロボロの俺に手を差し伸べてくるクラネル。暗いダンジョンがやけに明るく感じる。今俺はどんな表情をしているのだろう。それが気になって仕方ない。やっぱりっていうか、敵わないなあ。

「分かった。クラネル、冒険をしよう。他の誰もが出来ないような冒険を、そしていつか辿りつこう…」

差し伸べられた手を握り返す。いつの日か握れなかった手をこんな場所で握れるなんてな。

「誰もが到達してない境地へ」

「僕は英雄になりたい、ハチマンは?」

「俺は…愛と誇りと力への探究心を満たす」

「欲張りだね」

「うっせ、良いだろ?別に」

バキィ!

「リリ!取り敢えず隠れて!!」

「は、はい!」

結界を解除した瞬間二手に分かれる。さっきまでいた場所に化物の攻撃が当たり間一髪で回避できた。

「クラ:ベル!お前は因縁のミノタウロスを!俺はこつちを殺る!」

「! 分かった!ハチマン、気を付けて!」

「当たり前だっ」

さてと、これで2対1から1体1x2になった。勝機はまだ見えな
い。でも、掴んでみせる。

「グルルルオオオ!!」

吠える化物がこちらを見据えている。

「来いよ!ぺちゃんこ鼻!そのブサイクな顔、ベコベコにしてやる!」
煽りに引つかかったのか繰り出される右ストレートをフォース
エッジで横にずらす。その威力で右手が痺れるが向かってくる左
フックをしゃがんで回避。右手の握り拳を振り落としてくるが地面
をローリングしてなんとか回避する。そのままフォースエッジを胸
に突き立てる。

「グオオオオオオオ…」

突き立てたフォースエッジを握ってる右手を掴まれる。そのまま奴の拳を受けそうになるが体を捻る事ですんでのところ躲すことが出来た。ガラ空きになった化物の顔に幻影剣を幾つか投射すると怯んだ化物は手を離してくれる。その隙に魔腕で奴の腹を数回本気で殴る。

「ガアアアアアアア!!」

よろめかせることができたがダメージはあまり見受けられない。距離をとって様子を見る。化物は恨めしそうにこちらを見てくる。背後に目をやるとベルがミノタウロスと死戦を繰り広げている。あつちはあつちで大変そうだ。

「グウウウウウウ…」

背中に白い翼を出現させた化物はそこから白い光弾を出してくる。それを幻影剣でなんとか相殺する。その後両手を地面に着けた化物はこちらに突進してくる。

(とんでもない速さ…!)

あつという間に距離を詰められる。

(ダメだ!回避できない)

魔腕を出し奴の頭を抱え受け止めようとするが体が浮き壁に激突する。

ザシユツ…

化物の曲がった角は俺の心臓に突き刺さった。

ミノタウロスの一撃は重く痛く、そして辛い。
でも、何よりも。

怖い。もう、立ち上がれないくらいに。

地響きが徐々に近付いてくるのがはつきりとわかり、身の毛が逆立つ。

ゆつくりとミノタウロスはこちらに迫っていた。ハチマンも突進をされてダウンしているのが暗くてよく見えなくても分かる。

ーもう、無理。

「……？」

地響きが止まった。恐る恐る顔を上げると…

「あの人、いた。」

「……」

澄んだ黄金の長髪。蒼色の鎧。銀のサーベル。

いつぞやの光景と同じように、こちらに背を向けて立っていた。

「…大丈夫？」

「…頑張ったね」

「今、助けるから」

「たす、け？」

視界の中の光景に色が戻った。灼熱の色が、灯った。

助ける？

助けられる？

また？

この人に？

同じように？

繰り返すように？

誰が？

「僕達が？」

「ツツツ!!」

僕の足は地面を蹴り飛ばした、立ち上がり再起する為に。

「…ないんだっ」

「アイズ・ヴァレンシユタインに、もう助けられるわけにはいかいんだっ！」

腹の底から叫んでナイフを構える。

「ハチマンツ！いつまで寝てるんだよ!!ついさつき一緒に冒険するつて言ったじゃないかッ!!!」

「ただ、またウユニ塩湖みたいな光景の中にいる。体に力が入らない。」

死んだのか？

頭の中についさっきの光景情景が映る。

(辿りつこう)

(誰も到達してない境地へ)

そうだ、あんな事を言ったんだ。言えたんだ。

ーそれで満足か？

なわけ…

ーではどうする？

諦めない

力を振り絞り立ち上がる。門の前に立ち手を付け力一杯押す。それでも扉はビクともしない。

『押しダメなら諦める？千里の道も諦める？』バカ言うんじゃねえ！まだやりようはいくらでもあるだろ！引いてもない、持ち上げてもない、引戸かもしれない、持ち上げられるかもしれない、まだ何も試してないじゃねえか！ーパターンダメだっただけで何諦めてんだよ！

「うおおおおおおおおお!!!」

力だ！境地へ辿り着く為の力を！もう二度と！無力だなんて言わせないように！

ゴゴゴゴ…

門が少しだけ、腕一本分は開いた。そこに手を突っ込む。

カチャ…

何かに触れた感触がする。それを掴み思いつきりこちら側に引き込む。

「はあああああああああ!!!」

それは日本刀だった。見た目は黒い鞘に金色の鍔、黄色の下緒、群青の帯、そして白色の柄だ。鞘から刀を抜いて見るとそれは綺麗な刀身をしていた。

「これなら…」

刀をより強く握り自分の中に確かにある意志を確認する。

『ハチマンツ！いつまで寝てるんだよ!!ついさつき一緒に冒険するっ

て言ったじゃないかッ!!』

声が響く、ベルの声だ。全く、ゆっくり寝させてもくれねえのか…。
「今行く」

視界が真っ白に包まれる。そして待つてろよ、ベオウルフ。泣きつ面に蹴り入れてやる。

化物即ちベオウルフは困惑してフリーズしていた。おかしい、こんなにも手応えがないなんて…。何の為に這い上がってきたと思ってるんだ!…と。

虚無が彼を支配する。視界の端でチラチラとしてる有象無象共がウザったらしく感じる。

殺してやる…ひき肉にして骨の髄までしゃぶり尽くしてやる。この人間はどれも美味いからな。そう思い狙いをあの銀髪のカギにしようとする
と
ピュー!

口笛がルーム内に響く。何事かと振り返ろうとするとベオウルフの顔にドロップキックが綺麗に決まる。その犯人は言わずも知れた男、ハチマンである。

ズズーン…

5 m近く飛んだベオウルフ。なびく紫のコートとその髪の毛の8割近くが銀色に染まり肌も少し血の気がなくなったハチマン。

「さてと、第2ラウンドと洒落こもうぜ?」

さつきみたいな切迫したような雰囲気はなく余裕そうな顔をしてる。

「ハチマン…髪の毛が」

「あ?これか?別に歳食った訳じゃないから気にすんな」

ベルの顔が喜びの感情に染る。

2人して背中合わせの形になる。

「ベル、この勝負、勝ちを獲るぞ」

「うん!負けられない!」

ハチマンの前にベオウルフ、ベルの前にミノタウロス。どちらも

笑ってるような顔をしてる。

「勝負だツ……！」

「ま、ダンジョンで獲物を横取りするのはルール違反だわな。ふられたな、アイズ」

少年達の熾烈な戦いを前にベートは呑気に笑う。ルールにはベートとティオナに続いてティオネが到着し、遅れてリヴェリアとフィンが到着した。

「あの白髪頭……もしかして、あの時のトマト野郎か？くっ、はっはははっ！お！それにスパゲティ野郎もいるじゃねえか！よく見ればあいつも白髪になってるじゃねえか！流行りか!？」

「白じゃない、銀色」

興奮しているベートに珍しくアイズが突っ込む。

「んなの別に変わんねーだろ」

「だったら……犬も狼も変わんねえよなあ？」

「ロキ・ファミリア」一同が振り返ると影の中から1人の男が出てくる。

「お前は……！」

「アラル神父……」

老化による白髪をオールバックにし、ダンジョンにも関わらず神父服を着ている初老の男、アラストル改めアラルがそこにいた。

「おっ、あいつ染まってきたか……」

目の前でベオウルフと戦いを繰り広げてるハチマンに目を向ける。

「グオオオオオオ!!」

迫るベオウルフの拳を右手と右魔腕で受け止め、そのまま離さず左の拳をベオウルフの顔にぶち当てる。ベオウルフの体は宙を浮き壁まで吹き飛んでいった。

「ねえ、リヴェリア。あの紫の子って……」

「私の記憶が正しければ木箱に隠れていた少年の筈だ」

「Lv1のはずでしょ？」

「動きと力がLv1とは段違いすぎる……」

「ナイフ使ってる子も同じようだ…」

そう、さつきまでワンサイドゲームだったはずの戦いは渡り合えるようになっていた。

ベルの冒険はミノタウロスとのギリギリの戦い、アイズ・ヴァレンシュタインとの訓練で学んだ「駆け引き」が最大限、いや、その限界すら超えて活かされていた。

「あの子、駆け引きが上手いね」

感嘆の声を漏らすテイオネ、その感想は自分の戦いとは全く違う故に出てきた本心だった。

対してハチマンの冒険はベオウルフを蹂躪するものだった。彼を支配する絶対的な余裕はアラストルの記憶に一致するあのベオウルフをもつてしても崩す事ができていない。

「あの身のこなし…一体どんな鍛え方をしたの？」

「テクターギアっていうとても重い鎧を着けて格闘戦をやってた」

「え？」

アイズによるわけのわからない単語が出てきた為困惑する一同。

「付け加えればそれ込みでオラリオ一の早馬で追い回しながら弓を撃ちまくって躲かせたり、ひたすらオラリオ外周を走らせたり、バカでかい鉄球を拳で割るまで帰らせなかつたり…」

その他耳を塞ぎたくなるような訓練内容をアラルから聞かされたベートは驚いた。ついさつきまで雑魚虫みたいな奴がここまで化けるなんて…と。しかしそれを証明するかのようにはハチマンは強くなっていた。

「オオオオオオオオツ!!」

雄叫びを挙げるベオウルフは両手を地面に着け、突進の構えをしている。まるで『受け止めてみる』と言わんばかりに…。

「来いよー」

フォースエッジをしまい、魔腕と両手を広げるハチマン。その行為は冒険者としては正に悪手そのものだった。

「あの子、バカなの…?」

「いや、間違っちゃいねえ」

そうベートが反論する。

「ベートが擁護するとは一体どういう風の吹き回しなんだ？」

「うっせえよババア……。確かに躲すのは誰でも出来る。少し飛ばばいいんだからなあ……。でもなあ受け止めるのは誰にもできる事じゃねえ。あの目を見てみる、ありや逃げねえやつが目だ」

ベートのハチマンに対する見方は変わっていた。スパゲティのソースを飛ばしてきたり正論でぶん殴ってくるようないけない奴だったはずなのにまっすぐ立ち、その目の奥に燃え盛る炎を見抜いていたから変わったのだ。端的に言い表せば「見直した」と言う。

「ガアアアアア!!」

突進してくるベオウルフの両肩を魔腕で掴み、頭の角を生身の両手で掴む。

ガガガガガ!!!

地面の抉れる音がし、それでもハチマンは踏ん張る。それが功を成しベオウルフの突進を受け止めきる事ができた。

「グウウ……」

何を思ったかベオウルフが翼を展開すると両腕が急激に白く光出し、それを地面に叩きつけると拳を中心に広範囲が激しい轟音と共に光に包まれ砂ぼこりが舞う。

同刻、ミノタウロスと戦っていたベルもミノタウロスの一撃を防ぎきれず吹き飛び壁に激突する。

「ねえー助けに行かなくていいの!？」

貧乳が目印のティオナがハチマンを助けに行こうとすると目の前に目の前にリルルカ・アーデが遮るように立つ。

「……て……さい……」

「え?」

「やめて、ください……。ベル様とハチマン様の戦いはまだ終わってません……!お願いです……手出しはしないで、くだ、さい……」

震える声と足で懇願するリリはティオナを止めるのに十分だった。なぜならティオナも心のどこかで手を出すのに躊躇していたからだ。本当はリリも止めて欲しかった。それでも彼らのやり取り、絆を見た

ら止めずには居られなかった。きつと、テイオナを行かせるとリリの人生で一番後悔するかもしれないと思ったからだ。

グググ：

その声に呼応するようにベルが立ち上がる。その目はまだ闘士に燃えている。

煙の中から黒い物体が飛び出した。人の大きさではない、ベオウルフだ。地面を転がったベオウルフは煙の中を見る。

バチバチ：

何かが弾ける音がした数秒後霧が晴れ、その中にいたのはコートが無いハチマンだった。あの爆発に耐えるため全身を覆うコートに魔力を流し耐久性を上げ身を守ったからだ。そしてその手にはフォースエッジでなく、日本刀を握っていた。

「すまない…」

ベオウルフに向けて詫びの言葉を入れるハチマン。

「お前を侮ってた、心の何処かで油断してた。でももうしない。少し本気を出すとするか…！」

ハチマンの強化技「トリガー」を発動させるといつもなら紫に包まれる体は蒼色に包まれた。

「死ぬ気で来い…殺してやる」

「グオ、オ、オ、オ、オオオ!!!」

翼を展開したまま有り得ない速度で突進し、拳を突き出すベオウルフ。だがそれはハチマンの日本刀「閻魔刀」の鞘を振り上げることで弾かれる。よろめいた隙を逃さないハチマンは抜刀し上下にベオウルフの胸を切り裂く。これ以上の追撃をさせないため光弾を出し牽制するがそれも左手に持つ鞘で弾かれる。なんとか距離を取ったベオウルフは地団駄を踏む。するとベオウルフの目の前に天井から人2人分の大きさの岩が落ち、それを殴ることでハチマンに飛ばすがそれすらも「閻魔刀」の餌食になる。

(やはり…敵わないな)

最早万策尽き諦めかけたベオウルフ。しかし、彼の思う「奴」がそれを阻む。

出す。また踏み台にし残りの2体のモンスターを睨む。

「くらいやがれ…昇ry…ゼステイウムアツパー!」

重なって落ちてくるモンスターをアツパーし、元いた天井へと串刺しにする。

「ふう…片付いた…か…」

フラフラするハチマン。その髪の毛は元の色に戻っていた。と言っても相変わらず左側は銀が入り交じっているが…。

「悪い、ベル。お前が、勝つのを見越して、少しだけ…寝るわ」

聞こえてるかも分からないセリフを吐いたハチマンは倒れ込み意識を手放した。何故か涙を流しながら…。

episode of Beowulf

「スパード!覚悟オ!」

そう叫び殴り掛かるが拳を上弾かれ腹に八卦を喰らう。

「ガハアツ!!」

「スパード!」先生!

目標に駆け寄る白と黒の悪魔。噂に聞いてた弟子か…。

「お前らは素振りの練習だ…話は俺が付ける」

「ですが…」

「モデウス、俺の決定に意義を申し立てるのか?」

「いえ…」

「ならいい、バアル。モデウスと2日ぶっ通しで打ち合いをしろ。勿論小細工無しでだ。」

「分かった」

去ってくスパードの弟子達。2日とは…噂に違わず厳しいようだ。

「さてと、ベオウルフ。まだ懲りてないのか…」

「ふん!貴様を殺すまでは俺も諦めん!」

「その熱意…アイツらにもあつたらなあ」

ポリポリと頬をかくスパード。

「ええい!もう一度だ!もう一度勝負だ!」

「ちツ…良いだろう。折れるまで叩きのめしてくれ」

結果は惨敗。剣すらも使われなかった。悔しさが頭を支配するがそれで良いのかもしれないと思う。スパイダは英雄だ。殆ど一人で地上界を手中に収め勢力圏を一気に拡大させた。流石俺の憧れだ。貴様はいつまでもそうあつて欲しい。

時は流れ…

「何故だ！何故我らを裏切った！スパイダ!!!」

扉を開けると人間界の楽器『ピアノ』なるものを奏でるスパイダがいた。

「……」

立ち上がりこちらを見る奴の無視に苛立ち襲いかかる。一切通用しないと分かっているにもかかわらず、全て手のひらで受け止められる。

「そろそろ執拗い…」

剣を取り出したスパイダは瞬間に俺の眼前に迫り剣を振るう。

「ガアアアアア!!」

「ベオウルフ、貴様をテメンニグルに封じる…」

左目をやられた俺はついでにとうなじ付近を手刀され、意識を刈り取られる。その寸前言葉が聞こえた。

「すまない…」

そこで俺は完全に意識を失った。今度会ったら必ず殺してくれる。

#15 神との戯れと嫉妬

ベオウルフ戦を迎えた次の日、俺は宛もなく街路を彷徨っていた。喧騒に溢れかえる街は黄色く活気づいているがどうも俺の気分は暗くなっていた。その理由は30分前に遡る。

ー【ホーム】ー

ベルがミノタウロスとの戦いで疲弊してる中、俺はピンピンしていた。

「おや、ハチマン君、どこかへ出かけるのかい？」

「ええ、暇だしダンジョンでも行こうかなって…」

「バツカもーっーん!!」

「ええ…」

突然の神様の怒号により俺は正座をさせられていた。

「昨日あんなに死にかけてのにまた行くってのかい!？」

「いやでも湧き上がる冒険欲ってのが俺にもあります…」

「ダメなもんはダメだからね!いいかい?こっそり行っても神の前には嘘はつけないんだぞ!!」

説教も終わり神様はバイトへ行ってしまった。一人残された俺は暫くベルの様子を見た後ホームを出た。ベルの看病を適任に任せて…。

「じゃありルカ、ベルを頼んだZE☆」

「はい!お任せください!」

無い胸にポンと拳を置くその姿はとても頼もしかった。

とまあ、外に出たはいいけどダンジョンにも行けないからすごぶる機嫌も悪くなっているのだ。

「はあ…」「はあ…」

「ん?」「?」

隣で俺と同じダークなため息が聞こえた為そつちを見ると俺以上に髪の毛がボサボサの男神がいた。ローブを身にまとった猫背の神

が…。

「酒が作れない…ねえ」

「そうだ、酒を作る事が俺の生きがいだった。それもギルドに奪われてしまった…」

近くのベンチに腰掛け二人してじゃが丸くんを齧りながら「ソーマ・ファミア」の主神のソーマとダベリング。じゃが丸くんを買う際に角髪を結った男神がやはりマスコットがくとか言ってたが全く頭に入ってこない。すみません、そういう話はウチの主神にでもしてください。

「それでギルドが憎いと?」

「別にそうではない、アレは俺の監督不足が招いた結果だ」

随分と踏ん切りがついてるんだなあ、やはり神だからか?

「まあ、こつそり作ろうと思ってるが…」

「おい神、自重しろし。送還されんぞ」

「分かってる」

どこぞのオカンの心労が理解できてきた。

「じゃあなんで外に?材料集め?」

「違う、それも考えていたが…別の生きがいを探してみようかと」

「ほう、別の…」

やはりそこは神、逞しい。見た目に反して…。

「それで街を彷徨っていたら君に会ったんだ」

「なるほど…」

「君はなんでため息を?」

問われた俺は嘘偽りなく語る。昨日ダンジョンで死にかけただけの事、それで今日のダンジョン探索を禁じられたこと、何かで悩んでいること。

「ならば君も私の新しい趣味探しに付き合え」

「ええ…」

「新しい趣味を見つければ君の悩みも退屈も腫れるだろう」

「成程」

いつまでもウジウジしてたってしょうがない、きつとそういうこと

なんだろう。

「君の目はいい人よけになりそうだしな」

ゲシツ!

「あ痛っ!」

「ふん」

人を出汗にするんだ。これくらいはやっても許されるだろう。神だろうと人だろうと平等に接する。これが俺のポリシーだ。

「ここは?」

「本屋だ」

暫く歩き到着したのはそれなりのデカさの書店だ。オラリオに来て全然本とかに触れてないから行きたいと思ってたし、こいつ^{ソーマ}にも似合いそうだしな。

「文献を通して身につける知識もそう悪くないと思うぞ」

「そうなのか…」

割と世間知らずのこいつと別れ何冊か見繕って持ってくる。

「試しにどうだ? 物語でも読んでみたら」

「嘘物語は嫌いだ」

「そう言うだろうと思って伝承にもとづくやつもあるぞ」

「その話は天界から観測済みだ」

「……」

本を元の棚に戻し他の本を持ってくる。

「詩集だ。人が何を思いどうしたかが綴られてる」

「ほう」

「試しに読んでみたらどうだ?」

「どれどれ、『欲あれど動かぬ者は災いなり』…だそうだ」

言い得て妙な台詞だな。ってかすげえイケボで言うんだからビツクリしたよぼかあ。

「気に入ったか?」

「そこそこって所だ…人も中々深そうな事を言うな。うん、気に入った、買おう」

そう言い本を持っていくがその手には俺の持ってきた詩集の下に

本が隠されるようにあった。

「それは？」

「バレたか…まあいい、見せてやろう」

その本の表紙を見せてくるが…『絶対モテ術！これさえあれば気になるあの子も女神もメロメロ!!』だと？

「恋愛…したいのか？」

「新しい試みとしてはどうだろうか…」

「ま、まあいいんじゃないか？」

恋愛とかそういうのは俺としては言える立場じゃないから…。役に立つアドバイスとかはできないと思う。

「ありがとうございます」

気の抜けた店員を背にソーマと店を出る。そしてそこら辺のベンチに座り先程の頭ピンクな本を開く。

「ふむ、『不衛生な男子は見られない！』か…君から見て俺はどう見える？異性として見れるか？」

「いやべつに」

即答である。その回答速度計れたのなら0.2秒だ。

「…『髪がボサボサの男はアウトオブ眼中』か…よし、切ってくれ」

「は？なんで俺が…床屋とか行けばいいだろ」

「頼めない」

「俺は振り回せるのに突然なコミュ障発揮すんなよ」

ほんとこの神、さっきの会計だって俺にやらせやがって…。

「はあ…文句、言うなよ？」

ソーマの前に立ち闇魔刀を取り出す。

「何をするつもりだ？」

「なにつて、スリリングな散髪」

「刀で？」

「ああ」

「嘘だろ？」

嘘じゃないんだな☆

「まあ、じつとしてればすぐ終わる」

ソーマは動かない。すぐに済ませて欲しいのだろう。きっと諦めて委ねてくれたのだろう。

刀を構え集中する。

「はぁッ！」

刹那、ソーマの周りにパサパサと髪の毛が落ちる。手早くそれを適当な袋に入れゴミ箱に捨てる。

ソーマは立ち上がり近くの噴水の水溜まりを覗き込む。

「これが、俺か…」

肩に着いていた髪の毛は無くなり、ある程度はサツパリした雰囲気になった。

「まあ、これくらいが妥当じゃねーの？」

「満足だ、ありがとう」

髪で隠れていた表情は見えるようになり、頬が少し緩んでいる。ふっ、美容師ハチマンここに爆誕。因みにこれがデビュー戦にして引退戦。

「これで俺もモテモテというやつか…」

「いや、身だしなみは見られる為の切符だから問題は中身だと思うぞ」

いや、よく考えてみれば見た目が全ての9割を占めるともいわれているが（〇〇より）、ソーマの将来を考えて黙っておこう。

「なん…だと…う？」

驚愕の表情を浮かべるソーマ。アンタ、この短時間で柔らかくなっただね。

「そりやそうだろ、見た目だけで美味くない料理はウケないのと一緒にだ」

「なるほど…中身か…」

「ああ、でもまあ、無理やり変える必要なんてないんじゃないのか？」

「その理由は？」

「こちらをじっと見つめてくる。」

「変わるなんてのは結局、現状から逃げるために変わるのだろう。それが本当の逃げなんじゃないのか？本当に逃げてないというなら変わらないでそこで踏ん張んだよ。今の自分や過去の自分を肯定して

やれないのが逃げというんだろう?」

雪ノ下雪乃に語った事を思い出しながら語る。あの時雪ノ下は何を思っていたのだろうか…。今の俺にも分からない。俺は変わったのだろうか?あの件の後にも色々あった。ヤンキー達の暴走を止めたり、ネットカフェに泊まり込んだ時もあったな…。

今の俺は昔の俺に誇れるか?

「少し…聞いてくれないか?」

黙っていたソーマが口を開く。

「俺のファミリアの事は聞いたな?俺の作った酒欲しさに暴走してしまった団員たちが他の冒険者や身内に酷い事をした事だ。それで俺は考えたんだ。もしあの時、資金欲しさに神酒ソーマを出汗にしなかったらどうなったのだろうか。俺のファミリアは温かいファミリアになれるのだろうか…。木は根がしっかりと育たない。だから俺が変わろうとしたが、君の言葉を聞いて確信した。俺は温かいファミリアを作る為に団員たちに話そうと思う。そして皆で変わるようにするさ。過去を振り返りながら…。間違った現状と今の考えを改める為に…。……………今日はありがとう、リルル力によるしく伝えてくれ、『風邪をひかないように』…。と。」

気付いていたのか…。神はお見通しってか。

去りゆくソーマの背中を見送る。その背筋はしっかりと伸びていた。

「さてと、俺も行くか…」

ゆっくりと歩き出す。まだ太陽は直上にある。解けることの無い悩みを

抱えながら歩く。少し重いがこれくらいが丁度いいのかもな。この重みでまだ地に足着けてられるから。

ー【カフェ ポレポレ】ー

「店長、いつもの」

「はーよ」

即座に出されるデカ盛りパフェとニアイコールマックスコーヒーとオリーブ抜きピザ。

「いつも悪いね」

「金払いが良いからあたしにや神様に見えるね」

「神様なんて、そこらにいるだろ」

「名ばかりの神なんていらぬね。本当に必要なのは金払いと人のいい客神さね」

商い魂猛々しい婆さんだな。怖いもの知らず過ぎてすげーが1周回ってこえーよ。

「ん、ごっつそさん」

「今日は早いね」

「腹が空かないんすよ」

「冒険者なんだから、無理しちやあいかんよ」

「胸に刻んどきますよ」

カウンターに金を置き手をヒラヒラさせながら店を後にする。さてと、この後どうしようか。

ー【ミアハ・ファミリアの本拠地兼店】ー

「お邪魔します」

「おお、ハチマンではないか」

カウンターにいるミアハ様が迎えてくれる。その隣には唯一の構成員、ナアーザ・エリスイスさんがいる。手頃なポーションを幾つか買いミアハ様と雑談をしてみると

「ヘスティアから聞いたぞ、昨日ダンジョンで死にかけたのだろうか？」

「大丈夫、なの？」

「ええまあ、心臓ぶち抜かれた位ですから」

「ええ？」

ん？

「ハチマン、嫌なら構わないがこちらに来て胸を見せてはくれないか？」

「?いいですけど…」

店の奥に入りシャツをめくり、胸を見せる。

「なぜ髪が銀色になつてく？」

「どうしてベオウルフの名を知った？」

「どうゆう理由でアラストルは俺に目をかける？
恐怖心が湧いてくる。」

昨日のダンジョンで体感したそれとはまた違う。死への恐怖ではない、また別の得体の知れない恐怖心だ。

フラフラと彷徨う、そのうち人気のない広場に出た。しかしそんな事別にいい。ずっと俺は人か化物かを考える。

「貴様がハチマン・ヒキガヤ…だな？」

俺の思考を邪魔する影が2つ。黒いバイザーに黒い服。いかにもって格好の男らだ。

「だったらなんだよ…今無性にイラついてんだ。どっか行つてくれよ…」

「それはできない相談だ。あのお方の寵愛を受けるため、貴様には死んでもらう」

「相手はレベル1、負けるはずが無いな」

「どうやら向こうは殺る気らしい。」

「いいだろう、だったら後悔するなよ？…心失くしたヒト。俺がまだ人かどうか教えて貰おうか」

「ヘステイア・ファミアアのホーム」

「ただいま…戻りました」

ホームに戻るとベルの両脇にリリルカとヘステイア様が川の字になつて寝ていた。

「まあ、ベッド位は譲ってやるか」

いつものソファに寝っ転がり惰眠を貪る。

今日はよく眠れそうだな。

「【ギルド】」

「エイナ大変！」

同僚のミイシヤが額に汗を浮かべながら走ってくる。

「ど、どうしたの!？」

「ついさっき冒険者2人と一般人が病院に担ぎ込まれたの！」

「それって、喧嘩？」

「ここオラリオで喧嘩は日常茶飯事だ。ミイシヤもそれを知ってるはずなのにどこか様子が変だ。

「うん、でね？その運ばれた冒険者が2人とも瀕死なの！」

「え…喧嘩でそこまでやるの?」

「聞いた話だと両手足と顔の複雑骨折、喉も潰されてたんだって…」

「喧嘩じゃないでしょ…?」

「その2人の冒険者の近くに紙が落ちててね、そこには確か『喧嘩吹っかけられたからやった、コイツらには人の心が無いんだもん』って書かれてたの」

人の…心が…無い？

「続けるね、通報してくれた人によると『冒険者が2人がかりで誰かに襲いかかっているのが見えた。近くに一般人も倒れてる』らしいんだ」

「その人ってどういう人？」

「印象的だったから覚えてるよ、紫のコートを着た冒険者さんだったよ。エイナの担当じゃなかったっけ？確か名前は」

「ハチマン君だよ」

「そう…そんな名前だった！」

ハチマン君、サポーターの件の次は喧嘩騒動?どうやら君もベル君みたいな災難体質らしいね。でも良かった、彼に危険がなくて。

2章 探求編

#16 女神とハチマン

ー【ギルド】ー

今朝のギルドはいつもよりがやがやしている。そんな人混みをかき分けて目当ての人の元へ行く俺たち。

「おはようございます、エイナさん！」
「ども」

機嫌のいいベル、そんな様子を感じ取ったチュールさんは「何かいいことでもあったの？」と問う。…さてと、準備するか。

「僕達、とうとうLv2になったんです！」

バサバサツと書類の山が崩れるが関係ない。俺はひたすらその夕イミングを伺う。

「Lv2？」

「はい！」

「ベル君冒険者になったのいつ？」

「1ヶ月前です！」

「ハチマン君は？」

「1ヶ月前位ですかね…」

屈伸もして伸脚も済ませたと…。

同僚と思われる人は石と化し、チュールさんはフルフルと震えている。そして、それが爆発した。

「1ヶ月そこらでムグウ！」

「エイナ!？」

ハンカチを持たせた魔腕で口を軽く塞ぐ。

「チュールさん、シー」

人差し指を口に当ててジェスチャーを取る。それを理解したのはチュールさんもウンウンと頷く。聞き分けのいいチュールさんには悪いけどあまりギルドは信用してないんですね。だってオラリオ

の中枢だもん。

ここはオラリオ、何が起こるか分からない街、それ故にこれっぽっちも信用できない。

話は戻るがLvの上昇には『偉業』——格上の相手を打破するなどして、より上位の【エクセリア経験値】を得るのが不可欠だ。

その後はチュールさんに言われるがままに活動報告をした後、こちらの要件に入った。

「発展アビリティのことです…」

「ああ、そっか、Lv2になっただもんね」

『発展アビリティ』は既存の『基本アビリティ』に加えて発現する能力だ。発現するタイミングは「ランクアップ」時。冒険者になってどのような行動をしたかによってアビリティは異なる。候補としてアビリティは複数出てきてそれを選択することで初めて発現する。

「選択可能なアビリティはいくつ?」

「僕もハチマンも3つです」

ベルの発展アビリティは毒などを防ぐ『耐異常』、次に1度倒したら次は能力が強化される『狩人』、そして3つ目が『幸運』。

「ハチマン君のは?」

「俺は…『狩人』と『耐異常』と『ソードマスター』です」

「うーん、『ソードマスター』と『幸運』…神ヘステイアは何も言っていなかった?」

「勘って言ってましたけど…『加護』に近いかもしれないって…『ソードマスター』は強化系だろうとも…」

『『幸運』はドロップアイテムがよく出るとかなのかな。じゃあ『ソードマスター』はやっぱり剣系の攻撃が強化されるとかかなー』

「なるほど」

そんなこんなで話し合ってるうちにベルは『幸運』俺は『ソードマスター』にすることにした。だってね、ソードマスターとかカツコイイもん。そうじゃない?

「ベル、先に戻つていてくれないか?少しチュールさんと話があるんだ」

「いや、待ってるよ」

チュールさんに案内されて個別ブースに入る。

「それで、話って何かな」

「俺のレベルアップの記録を誤魔化してくれませんか？」

チュールさんの目が一瞬大きく開かれる。

「その理由を聞いても？」

「俺のやってきた事は危険だから…です。下手に真似されて死なれたらそれこそギルドの損失でしょう？」

「優しいね…本音は？」

見透かされてたか…

「俺だけの道だから、誰にも辿って欲しくないんです。それに、こんな速くレベルアップしたらそれこそ先輩達（笑）に目を付けられちゃうし」

「つまり、目立ちたくないってこと？」

「それもあるし、相手にしたくないんですよ。あんな立ち止まってる奴らなんて…」

「立ち止まってる…？」

「嫉妬ばかりする様な阿呆は邪魔でしかないですからね」

「ちよちよっ言い方…」

「すみません、気をつけます。まあ、この件はよろしくお願いします。適当に2年とかかかった事にしてください」

手をヒラヒラとしてチュールさんに背を向ける。

「あ…」

「？ どうかしましたか？」

「手袋、まだ着けていてくれたんだ」

その視線は俺の修繕されたばかりの手袋に向けられてた。

「別に、使えるから使ってるだけですよ」

「ふふっ、素直じゃないなあ」

チュールさんの微笑みの意味はホームに戻ってもよく分からなかった。

「じゃあ早速やろうか。君達のランクアップを」

そう言い、いつものベッドで「ステイタス」の更新を始める。最初はベル君で次はハチマン君だ。

「どうとうベル君もLv2かあ：なあんて普通なら言うんだらうけど、君の場合、感慨を感じる暇もなかったね：」

「そ、そうですか？」

「ボクの【ファミリア】に入っすぐ、君がゴブリンに勝てたって大はしゃぎで帰ってきたことを、昨日のことにように思い出せるよ」

そんなボクの話「え、ええ」とか「は、はい」とか、おぼつかない返事をするけど今は許そう。彼も感じるものがあるのだろう。

さてさて、愛しのベル君はどんな風に成長してるんだらうね！

ベル・クラネル

Lv2

力：I 0 耐久：I 0 器用：I 0 敏捷：I 0 魔力：

I 0

幸運：I

《魔法》【ファイアボルト】・速攻魔法

《スキル》

【英雄願望】・能動的行動に対するチャージ実行権

むむむ、新しいスキルが発動してるじゃないか！なるほどなるほどー、ベル君は英雄になりたいのか。

ステイタス発表はハチマン君が終わってからだから発表がもどかしいなあ。

「それじゃあハチマン君も始めるよ」

「うす」

彼の背中に血を垂らしステイタスを確認する。ベル君はソファで読書をしてる。貰った本が魔導書だった為気の毒に思ったハチマン君が買ってきたのだ。：君は優しいね。

ハチマン・ヒキガヤ

Lv2

力：I 0 耐久：I 0 器用：I 0 敏捷：I 0 魔力：

ソードマスター：I

《魔法》【魔力操作】・不定形魔法・不詠唱魔法

《スキル》

Devils Soul

【悪魔の魂】

・ 敵対する者が魔に近い者の場合、その魂は元ある形へ戻っていない。

・ 敵対する者が人の誇りを失った者ならば、この身は更なる境地へ向かっていく。

——諦めるな——

【スタイリッシュユライズ】

- ・ 早熟する。
- ・ 敵に攻撃を命中させる程成長する。
- ・ 敵の強さにより効果向上。
- ・ 戦意を喪失した場合ステータス激減。

——本物を——

ああ…そうだったのか…。

ステイタス更新

今まで目を向けてなかった事がこんな事で気付いてしまう事に自分が嫌になる。彼だって前に進むために頑張ってたんだ。思い返せばベル君がヴァレンシュタイン君に鍛えてもらう前から早朝にホームを出ていた。それで人知れず努力していたんだね。ゴメンよ…君の成長がベル君を抜かしてしまいボクはちよっぴりヤキモチを妬いて君のステイタス更新を疎かにしてしまっただ。多分君は気付いてるんだろう。ボクとベル君とのデートの時だって、サポーター君の件でカフェに集合した時だって、君はいつもボクとベル君と一緒にいるよう仕向けたよね。ありがとう、そしてごめんさい。

ボクはダメな主神だ。これからはちゃんと目を向けないと。

ステイタスとは子供達の魂を数値化したものだ。ベル君のヴァレンシュタイン君を慕う気持ちはスキル《憧憬一途》に現れた。彼のステイタス欄に刻まれたあの文字は多分彼が魂に刻んだ《思い》なのだ。

「素敵なお歌声ね」

!!

「H Q! H Q!! コチラハチマン、歌声を聞かれた! 繰り返す! 歌声を聞かれた! 相手はローブを着た女神!

「ネガティブ、応援は出せない。独りで対処せよ。

「チイっ!!」

「ど、どうも (超裏声)」

「あら、急に声が変わったわね」

「急に変声期を迎えまして (超裏声)」

「そう」

「それじゃああつしは失礼いたしやす (超裏声)」

「もう行っちゃうの?」

寂しそうな声が後ろから聞こえる。だが一級女鑑定士の俺からすればこれはアレだ。男慣れした女の使うセリフランキング第2位。因みに1位は『なんか暑くなっちゃった』だ。

「まあ: 通りすがりの女神と語り合う事なんて1つもないですし」

「覚えててくれたのかしら? 嬉しいわ」

「覚えてたっていうか脳裏にこびりついてたんすよね。台所のカビみたいに」

「酷い言いようね」

「フード越したがムツとした声色の女神。

「立ち話もなんだし、歩きながら話さないかしら?」

「分かりました:」

「そういえばレベルアップしたのね、おめでとう」

「ありがとうございます、どうして知ってるんですか?」

「見た目で分かるわよ。レベルアップは所謂私^神たちに近づく事なのでから」

「へー」

神に近づくのがレベルアップなのか、初めて知った。

「そうね、何か贈り物がしたいわ。2つ名を考えているのだけれど、ど

んなのがいいかしら?」

「イタイのはやめて欲しいです…」

ホント、ブラックハザードとかオーマなんて呼ばれたら最悪自殺するよ?」

「じゃあ『女神の伴侶』なんてどう?」

「身を固めるにはまだ早いと…」

それに誰の伴侶だよ。

「注文が多いのね、山猫かしら?」

「じゃあ体中に塩を揉みこんでくれますか?」

「貴方のお皿に乗ったら食べてくれるかしら?」

「マズけりや捨てますよ」

「案外鬼畜なのね…でも安心したわ、私、味には自信あるのよ」

ローブの上からでも分かるよう胸を寄せてアピールしてくる。淫乱だなあ…。

「いいですか?この街には残念ながら俺より強い人がいるし、誠に遺憾ながらイケメンだっているんですよ。だから、得体の知れないこんな俺よりもそっちに目を向けた方がいいですよ」

隣では話さずちゃんと対面し、少ししゃがんで目と目を合わせ肩を掴み本心を喋る。神相手に嘘はつけないのは身をもって知ったからね。

「それに、貴方は凄く綺麗なんだから、自s「見つけた…」あ?」

いつの間にか露出多めで褐色肌の女達に囲まれる。その数、およそ15人。

「知り合いですか?」

「知らないわ、あんなの」

そう言い髪を弄ってるが、余裕そうだね。

「神フレイヤ、女神イシュタルの為に、死んでもらう!」

フレイヤと呼ばれた女神にナイフが迫るが魔腕で防ぐ。

「あら、守ってくれるのかしら?」

「目の前で死なれたら明日気持ちよく起きれないんでね」

「なら私を守って頂戴、騎士さん」

「小僧、邪魔する気が…」

魔力でドーム状の結界を作りお互いに逃げられないようにする。

「引けと行っても引かないんだろ？個人的な恨みは無いけど、19／20位はメンタルズタズタにしてやるよ。ダンジョンに潜れなくてストレスも溜まつてたんだ。いい声聞かせろよ！」

ベオウルフを出しファイテングポーズをとる。本当に、退屈させないな、この街は。

♪Vergil battle 2

「無名の癖に！しゃしゃるな！」

女のナイフが向かってくるハチマンの首元に迫るが最低限の動きで躲される。Lv1の相手に避けられる筈がないと高を括っていたアマゾネスはたじろぐ。その隙にハチマンの魔腕が彼女の頭を掴み強引にハチマン側に持つてく。そこにハチマン渾身のストレートが顔に繰り出される。そのまま結界の反対側まで吹き飛んだアマゾネスはピクリとも動かなくなつた。

「ちくしょう！よくも!!」

他のアマゾネスが曲剣を振り回しハチマンに襲いかかるがいつの間にか閻魔刀に持ち替えたハチマンはその鞘で攻撃を弾く。

「Too late (遅い)」

がら空きの腹に突き出される閻魔刀(鞘付き)。

「っ！ゲホッ！ゲホッ!!」

1ccも残らず体内の酸素を吐き出さされた女はハチマンの前で激しく噎せる。そのうなじにハチマンの手刀が炸裂しその女は倒れ込む。

「なんだよあの強さ…聞いてないぞ！」

「お前！一体何者だ！」

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。そう！我こそ

は！えくと、トニー・レッドクレイブ！」

「トニー・レッドクレイブ？聞いたことあるか？」

「いや？」

そりやそうだ。だって速攻で考えた偽名だもん。

「後13人、どうする？まだやるか？」

「くっ！数で押せ！相手は独りだッ！」

一斉に掛かってくるアマゾネス。モテ期かな？モテ期じゃねーよ。

モテ期は来ない（涙）。

「13名様ご案内よ、山猫さん♪」

後ろで女神フレイヤ（仮定）が煽ててくるが仕方ない、乗ってやるか。

「いらっしやいませー!!!」

ー3分後ー

「終わったわね」

結果が解けてく中フレイヤの視線の先にはハチマンが背を向けて立っている。足元には大勢のアマゾネスが転がっている。

「なんとはなしに倒しちゃったけど、何したんですか？」

ジロリとハチマンの視線がフレイヤに刺さる。

「嫉妬されただけよ。私は何もしてないわ」

「嫉妬で暗殺されかけるって…」

「面倒なのよ、女の世界は」

髪の毛を弄りながら自身の心情を一言で片付けるフレイヤ。そんなフレイヤにハチマンは心底不思議に思う。

【謎】それがハチマンの彼女に対する感想だった。夜道に鼻歌を歌っている男に普通話しかけるか？それに唐突に口説くのはちよっぴりおかしい気もする、と。

「フレイヤ様、お怪我はありませんでしたか？」

しかしそんな二人の甘い時間（フレイヤ目線）は一人の男によって遮られた。

「あら、オツタル…」

オツタルと呼ばれた巨漢の男は現場を見て状況を判断する。

(恐らく失神しているイシュタル・ファミリアの団員達にフレイヤ様がお気に召しているハチマン・ヒキガヤ…噂にたぐわぬ目、負け続けた者の眼、絶望を知って尚立ち上がる者の眼をしている。)

「じゃあ、お迎えも来たようだし、俺はおいとましますよ、と」

「フレイヤ様をお守りした事を感謝する」

そんなオツタルの言葉を背中に受け振り返りもせず手をヒラヒラとするだけで去っていくハチマン。

「またデートを楽しみましょう、ハチマン♡」

刹那、ハチマンの背中に視線が刺さる。某青タイトのゲイボルグのように…。言わずもがなオツタルである。

(デート…したのか、フレイヤ様と…)

オラリオ最強の冒険者、オツタルはつい今日レベルアップしたハチマンに謎の敗北感を味合わされる羽目になった。

(考えてあげるわ、貴方にピッタリの二つ名)

「ウフフフフ…」

ハチマンは後に後悔する事になるだろう。美を司る女神の乙女心を刺激した事を。

#17 会議は踊る、されどしんがっそん

ハチマン・ヒキガヤの朝は日が姿を見せる前から始まる。

a m 02:00

「ん……」

早起きが習慣となった為自然と体が起きる。ベルと神様を端目に普段着に着替えコートを羽織る。

「行つてきます…」

静かに告げ外に出る。そこからオラリオの壁外に走って行く。

「どうも」

「じゃあいつものね」

検問でボディチェックと外出許可証を見せ初めてオラリオの外に行ける。俺はもう何回も出ているためもう検問の人とは顔見知りみたいなものになっている。

「じゃ、始めるか」

軽く準備運動をしたらオラリオの外周を走る。

出来るだけ早く、息を切らさないように。

a m 04:00

暫く走った後【幻影剣】を出し素振りする。魔力が無くなくても活動できるようにする事と剣術を鍛える事が目的だ。

a m 06:00

「9997…9998…9999…10000!」

流星に汗も額を伝い、魔力もカラカラになってきた。

「まだまだ…」

両手を地面につけ、足を伸ばしたら腕を曲げたり伸ばしたりする「腕立て伏せ」をする。回数を2000回にしてその他に「腹筋」「上体起こし」「懸垂（壁に指をくい込ませ）」「スクワット」。

a m 08:00

「ぜえ…ぜえ…」

流星に疲労して息が上がる。

(そろそろ戻るか)

門番に一言告げ再びオラリオに戻る。

行きとは違い大勢の人が商売の準備を始めてる。

小走りでホームに向かっていると八百屋のおっちゃんやんが気を利かせてリンゴを投げ渡してくれる。その好意に甘え、悪いねと手を軽く挙げて走り去る。お、甘い。

ー【ホーム】ー

「たでえまあ」

「ん…おかえり、ハチマン…」

「おはよーハチマン君…ふあく…」

「朝の用意するから待ってな」

コートからエプロンに着替え朝ごはんの用意をする。とはいえ焼いたパンを出して目玉焼きとベーコン、レタスに乗せて胡椒をかけただけだが…。

「いつもありがとう、ハチマン」

「君の朝ごはんは本当に美味しいよ！」

2人も喜んでくれてるのだがやはりもつと贅沢させてやりたいと思う。

「そういえば今日神会デナトウスだったんだ！」

「一張羅にアイロンかけておきましたよ」

「流石だハチマン君！それじゃあ！行ってくるよ！いい二つ名を期待しといてくれたまえ！」

あせあせと着替えた神様は急いで出て行った。

「ハチマンはどんな二つ名がいいと思う？」

「俺はイタくなきや…お前は？」

「僕はバーニングファイテングファイターとかがいいな！」

「ええ…」

なんで燃えながら戦ってんだよ…不死鳥なの？

「絶影」

「」「決定!!」「」

「ノオオオオオオ!!」

「地獄だ」

退屈を持って余した神は何よりも予測不可能とはよく言ったものだ。タケよ、安らかに眠たまえ…。

「なーに自分は大丈夫だと思ってるのよ」

「よしてくれヘファイストス、今必死に現実逃避してるんだ」

「まあ気持ちは分からなくないわ、でも気をつけなさい、あんたのこの子、今日の注目株よ」

ハチマン君は裏で手を回したらしいが今回のレベルアップは異常な速さの為他の神に目をつけられている。極めつけは司会役がああ、ロキだということだ。絶対に何か言ってくるはずだ。気を付けないと…。

二つ名決めは順調に決まっていき、残す所ハチマン君とベル君になった。

「二つ名決める前になあ、ちよつと聞かせろや、チビ」

始まった、ロキのいちやもん。でも怖くない、なぜならハチマン君の方がよっぽど怖いからだ。彼が大切にしてる植木鉢をうっかり割ってしまった時は雷が落ちるかと思った。

「1ヶ月半で『恩恵』を昇華させるっちゅうのは、一体どういうことや？」

パンツ、と手元の資料を上から叩き鋭く見つめてくる。

「うちのアイズでも最初の『ランクアップ』を迎えるのに一年、一年かかったんやぞ？それをこの少年は1ヶ月やと？なにアホ抜かしとんねん」

ゴメンよロキ、ハチマン君は3週間位だ。

「うちの『恩恵』はこういうもんやない。1ヶ月そこで子供らみんなが器を一変させたら、世話ないっちゅう話や。それができへんから、どいつもこいつも苦労しとるんやろうが」

「ステイタス」はあくまで促進剤。その者の具現化されることのない可能性を掘り起こし力という形にするだけ。

ハチマン君の成長はあのスキルもあるが彼の今までの人生で彼が

可能性を発掘されなかった、見て貰えなかった故に芽吹いた向上心と
というのが成長の秘訣に大きく関わってると思う。

「おいこら、ドチビ、説明せえ…：なあんてドチビのこんな弱っちそうながキ共がランクアップしとんのや？」

だからロキの言葉はどこにも響かない。いつもみたい焦ったり
もしない。やましいことなんて一つもないのだから。

「ボクの子供達はそこらの子供達とは違って特殊なんだ。君達が見た
目や性能に目を奪われてるから見落としたんだ。ベル君は「弱そう
」だから、ハチマン君は「目が怖いから」誰にも見て貰えなかった。
ボク達の出会いは偶然だった…：それでも彼等の声に、心に耳を傾けて
みれば見えるものがあつたんだ。ベル君は何よりも強い「心」ハチ
マン君は誰よりも美しい「優しさ」。その強みとセンスがあつたか
らレベルアップできた。散々彼等は辛酸を舐める…：いや、飲まされ続
けてきたんだ。そんな彼等が諦めず困難に立ち向かって成長して…
何が悪いッ!!ボクの事は何と言われようと構わないがロキッ!ボク
の子供に文句を言うのは許さないぞッ!!」

呼吸する間もなく失った酸素を取り戻そうと肩で息をする。

(言ってやった…：言ってやったぞ!)

「そうか…：そりゃ、悪かったな」

珍しく正論を言われたロキは黙りこくった。それもそうだ、他者の
努力を自分のお気に入りの子供の記録を抜かされたからってコケに
したからだ。

「あら、ロキが謝るなんて珍しいわね」

美しいソプラノの声が響き渡った。

「うっせ、色ボケ女神」

ロキが悪態を付き返す。

「私の子達のタレコミなんだけど、このハチマンって子恐らく悪魔と
思われるモンスターに勝ったわよ」

「「「「「!!」「」」」」」

シンとしていた空気に亀裂が入る。

「悪魔…：コワイ…：歯…：折られる…」

「おお、どうした？フローヴァさんのことに行かないのか？」

「ハチマンと一緒にいきたいなって…」

頬を赤らめモジモジとするその姿は女の子みたいだった。ウソ、今ちよつとキュンとした？まさか…。

「ハチマン…この人は？」

俺の奥にある【EVA】と掘られた墓石を見るベル。

「知らない人なんだが、どうしても放っておけなくてな…ちよくちよく手入れとか花を手向けてんだよ」

「この人も喜ぶ筈だよ。もしかしたらハチマンの前世の恋人だったのかな？」

「まさか、前世なんてないだろ」

馬鹿言つてないで、行くぞ、と言いベルとタクシー（馬車）に乗つて【豊饒の女主人】に向かう。

ー【豊饒の女主人】ー

「「かんぱ〜い!!」「乾杯」

テンションを大にして音頭を取るベルとリリルカとフローヴァさん。それに便乗するように俺とリュウさんは淡々とそれに答える。こういう雰囲気は嫌いだった筈なのに自然と嫌な気はしない。

「クラネルさんは【リトル・ルーキー】、ヒキガヤさんは【亡影】ほうえいですか。良かったです、無難な二つ名で」

「そうですね」

「僕はもうちよつとカツコイイのが良かったな…」

ベルの愚痴をBGMにしつつトマトソースパスタを口にした後お酒を飲む。うむ、やはり美味しい。後はパフェでもあれば完璧なんだがな…。ちよつと走って買ってこようかな？

「そういえばハチマンさんはどんな戦い方をするんですか？」

そうフローヴァさんが聞いてくる。

「どんなって…どんな感じ？」

ベルとリリルカに聞いてみる。

「ハチマンのバトルスタイルはちよつと独特なんですよ。ね、リリ」

「ええ、最初見た時は頼もしさ半分と怖さ半分でした。モンスターを

掴んでは投げたりと豪快かと思いきや…」

「剣や魔法を使つて綺麗に戦つたりと不定形なんですよ」

「息ぴったりの説明ご苦労さま、とまあこんな感じですよ」

「へへ、何か戦う上で気をつけることとかありますか？」

難しい質問をされた。気をつけること…か。

「別に…広い視野と幅広い戦術をもつてダンジョンに潜つてるだけですよ」

「わあ…どことなくプロっぽいですね！」

うーん、プロっぽいね…まだまだ上はいるのに。この子、ちよつとズレてるのか？

それからは明日の事とかを話し合つた。ベルの壊れた防具とかを買い直しに行くのに俺が同行したり、それに漬け込んでサボろうとしたフローヴァさんがミアさんにドヤされたり、色々と騒がしかったが心のどこかでそれを良しとする俺ガイル。

「ヒキガヤさん達はダンジョン攻略を再開させる際、すぐに中層に向かうつもりですか？」

ふとリユースさんが質問を投げかけてくる。

「ひとまず、1階層で今の体の調子確かめてみようと思つてます。もし攻略が簡単だったら、12階層まで足を伸ばす感じですよ」

「ええ、それが賢明でしょう…ですが中層へもぐることはまだ止めておいた方がいい。貴方達の状況を見るに、少なからず私はそう思います」

「つまりリユース様は、ベル様とハチマン様では中層に太刀打ちできないと、そうお考えなのですか？」

「そこまで言うつもりはありません。ですが、上層と中層は違う」

「では、リユース様は…」

「ええ。貴方達はパーティーを増やすべきだよ」

遂に来てしまったか…この日が…。

「なぜヒキガヤさんは頭を抱えているんですか？」

「あはは…ハチマンは人付き合いが極端に苦手です…」

「でもリリとかリユース様とかとは普通に話せてますよね」

「そういえばそうだな、どうして?」

「いやリリ達に聞かれても…」

「はっはっ、パーティーのことでお困りかあつ、【リトル・ルーキー】【亡影】!」

声の主はガタイのいいおっさん、仲間を両脇に侍らせてこちらにやって来た。

「話は聞いてた。仲間が欲しいんだってなあ?なんなら、俺達のパーティーにてめえらを入れてやろうか?」

「ど、どういうことですか?」

ベルが問い返すと

「どうもこうも、善意だよ、善意。同業者が困ってんだ、広えく心を持って手を差し伸べてやってるんだよ。ひひっこんなナリじやあ似合わねえかあ?」

「い、いえ、別にそんなことは…」

リリに目をやれば心底嫌そうな顔をしてる。フローヴァさんは苦笑を浮かべリユーさんに至っては顔色一つ変えない。

「だあろう?助け合いつてやつだ、助け合いくい。それに今、話題かつさらってるお前さんなら、俺達のパーティーに入れても構わねえし…なあ!」

「それで、だ!俺達がお前を中層に連れてってやる代わりによお…この嬢ちゃん達を貸してくれよ!?!こんのえんれえ!別嬪のエルフ様達をよっ!仲間なら助け合い分かち合いが基本だ!そうだろう!?!」

ブチッ

ブチッ

店の中で何かが切れた音がした。

音のした方を見てみるとハチマンが立っていた。

「助け合い…ねえ…」

口元に着いたパスタソースをハンカチで拭いながらハチマンは虚ろな目をしていた。まるで…出会った頃のような。

「じゃあ助けてやらないと…」

「ああ？何言ってるんだ？てめえ」

そんな冒険者にハチマンがギロリと睨みつける。あれ？ハチマンの目って…黄色かったっけ？

「今日は良い一日だった。鍛錬でいい汗かけたし、おっちゃんにリングを貰えたし、パフエもピザも今日は一段と美味かった。【EVA】にも綺麗な花を手向けてやれたし、悪くない二つ名も貰えた。柄にもなくパーティーでひっさしぶりに楽しむ事ができた。後は帰っていい夢を見るはずなのにどうしてかなあ…どうしてこうもめで安たらみたいなカスに絡まれるのかなあ…」

「ヒッ…」

冒険者達がたじろぐ。ハチマンの何も言わせまいとするプレッシャーに押し負けてるんだ。

「あの日…門を開けてからおかしいんだ。どうも感情の制御が難しい。いつもならスルー出来るのに…もっとうまくやれるのに…どうも血が騒ぐんだ。ぶちのめさせて…誇り無き獣を打ち倒せて…。なあ、俺を…人殺しにしないでくれよ…な？」

サア…といつの間にかハチマンの髪の毛は完全に銀色になっていた。

「ヒ…ヒイイイ…」

立つてられず腰を抜かしてしまった冒険者達はウルウルとした目でハチマンを見つめていた。もはやさつきまでの面影は感じられない。

ハチマンはそんな冒険者達に視線を合わせるようにしやがむ。

「こ、殺さないで…もう…しませんから…」

ガシッとハチマンが肩を掴む。

「ヒッ…」

「なーんてな、んな事する訳ないだろ？」

先程までの雰囲気は消え去り、髪の毛も元の色に戻っていたハチマンはケラケラと笑いながら立ち上がった。

「酔ってたんだろ？これに懲りたらもうするんじゃないぞ？」

「あ…あ……」

「さっさと金置いて行けよ」

ハチマンが地獄の底から響くような声を出すと冒険者達は所持金全部出して叫びながら店から出て行った。

「ふう…すみませんね、迷惑かけちゃって…お詫びにこの金で全員分の飯と酒、奢らせて貰うんでジャンジャン頼んじやって下さい…ね？」

『『『『『いえええええええええええええええええい!!!』』』』』』

その日、【豊饒の女主人】は開店して以来の売上最高金額を叩き出した。

めでたしめでたし…？

番外編 幕間の絶望

その日はとても良い天気だった。

比企谷が学校に来なくなって2ヶ月がたった頃だ。担任教師に呼び出された2年F組の生徒は広い多目的室に呼び出された。

「突然ですが悲報があります。昨夜未明、不登校となっていた比企谷八幡さんがトラック事故に巻き込まれて死亡した事が発覚しました」
ざわつと室内の空気が固まる：一瞬だけ。

え？

確か昨日トラックの爆発事故があったとニュースでやっていたがそれに比企谷が巻き込まれた？

「えー、気持ちの整理がつかないと思うので今日は一日授業はなしということまで…」

比企谷八幡の死を聞かされた時より大きい喧騒が室内を包む。皆の様子を見てみると大体4パターンの反応が見られた。

①戸塚や川崎さんといったほんの少しだけ暗い顔をする者。

②結衣や戸部のように雰囲気盛り上げようとする者。

③今日一日授業が無いと告げられテンションが上がってる者。

④興味無さそうにしてる者。

じゃあ僕はどこに分類されるのか聞かれたらきつと⑤に分類されるだろう。

死を受け止められない者

どうして：どうして皆はそうしてられるんだ？人が死んだんだぞ？確かに皆にとってはどうでもよさそうな奴だったがどうしてヘラヘラしてられるんだ？戸部、結衣。どうして興味無さそうにしてられるんだ？由美子。なんで申し訳なさそうにしてないんだ？姫菜。大和、大岡、どうしてスマホばかり弄ってるんだ？

比企谷が守ってくれたんだぞ？

「葉山、少し良いか？」

平塚先生に呼ばれると崩れそうになった感情を持ち直し笑顔を取り繕って向かう。

「先生、どうかしましたか？」

「いきなりで悪いんだが、比企谷の葬式に出てくれないか？クラス代表として」

「それは…どうして俺に？」

「学級委員長と比企谷に何の接点も無いからな、少しは彼を知ってる君が良いと思ったまでだ」

「…：分かりました」

二つ返事で了承して元の場所に戻る。

「隼人…どつたの？何かやらかした？」

由美子がスマホを弄りながら聞いてくる。今はその動作すら頭にくる。

「いや、比企谷のお葬式に出てくれって頼まれたんだ」

「べーっ！葉山くんヒキタニの葬式とかマジダルいべー」

「戸部、冗談でもそういう事言うなよ…：な？」

少し圧をかけて戸部を諭す。

時は巡り放課後

部活の休憩時間を縫って奉仕部へと向かう。ドアに手をかけようとした瞬間部屋の中から声が聞こえる。

「ねえゆきのん、ヒッキー、死んじやったんだって」

「そう、目障りな男が死んでせいせいしたわ。あんなやり方しかできない男、死んで当然よ」

「そうだよね…：そうだよね！ヒッキーマジキモイもんね！」

耳を澄ませば聞こえてくる彼への罵詈雑言の数々。聞くに堪えず、俺はその場から走り去って行った。

ー【葉山家】ー

俺のせいだ…：俺が無茶な依頼をしたせいだ。俺が…：現状維持なんかを望んだから…：比企谷は…：

「うっ…：うう…：うわああああ…」

その日は久しぶりに枕を涙で濡らした。こんなの初めて雪乃ちゃん…：いや、雪ノ下さんに拒まれた日以来だ。

取り敢えず明日のお葬式で彼の死について聞いてみよう。

「どーせフラフラしてたら轢かれたとかそんな感じですよ。そんな事より、このお菓子、美味しいですよ！葉山さんもどーですか？」

あ…

「あのバカ息子、こんなイケメンさんの手を煩わせやがって…すいませんねえ？学校にも言ったんですけど、形式上行かせなきやって聞かなくて…マジで迷惑かけんじゃねえよ…クソガキが」

あああああ…あああああ…

「もう本当にいい加減にして欲しいわ。最後の最後にこんな出費…小町の将来に響くかも…」

葬式は葬式じゃなかった。唯一真面目なのはお坊さんくらいだった。一通り終わると出席した人達はこぞって喋りだし、彼の事なんて気にも止めてない雰囲気だった。

「それじゃ俺は…学校があるので…」

「真面目なのね、アイツにも見習って欲しいわ」

比企谷は言っていた。『人間誰しも良い奴とは限らないんだよ』と。今やつと理解した。俺は馬鹿だ。どうしようもない阿呆だ。楽園だと思っていた学校は最早地獄にしか見えない。人の死を何とも思っていない。そんな奴らの巣窟だ。

学校には戻らず真っ直ぐ家に帰って俺は胃の中の物を全部戻した。昨日も今日も何も食べてなかったから胃液しか吐いてない。喉が痛くても嗚咽が止まらない。

「うう…えぐつ…おええ…」

一通り収まり鏡を見るとやつれた男が立っていた。

「収まったか？」

「父さん…」

「話してみろ」

俺は昨日あった事…それに至る経緯を包み隠さず話した。いつ以来だろう、父さんと正直に話すのは…

「ふむ、比企谷君は死んだ、それは自分が彼を死に追いやる原因を作ってしまった償いをしたい。そういう事だな？」

「はい」

「隼人：一つ聞いてくれ、父さんも顧問弁護士なんかをしてるとな？頼まれるんだ。雪ノ下さんの所の汚職とかやらかした事の揉み消しを：そしてそれをこなしていると段々自分の中の何かが壊れていくのが実感する。隼人：お前はそうなるな、学校の人間が：彼の家族が腐っててもお前は、もう腐るな。父さんとの約束だ」

真剣な目で見つめてくる父さん。

「はい」

「ならば休学しろ、そして彼の身辺調査をするんだ。勿論独りで：だ」
「分かりました」

父さんは休学届を学校に提出すると言い家を出て行った。

「俺も：行かなきゃ」

メモとボイスレコーダー、スマホに小型カメラを持って家を出る。

(先ずは彼の経緯についてだ)

再び比企谷家に向かい彼の部屋を見せてくれと言うと二つ返事で了承された。

彼の部屋は見た感じ特におかしな点は無かった。AKIRAのDVDが何度も見られた形跡があった。確か昔金田バイクを作った貫ったつけ：机の奥には『絶対許さないノート』なる物があった：取っておこう。クローゼットを開けてみると色々物が置いてあった。中学の頃のアルバムや小学生の頃の彼が書いたと思われる作文。これも取っておこう。

「粗方見たかな：」

取っておいた物に目を通す。

『絶対許さないノート』はページの大半が破けて損失しており、たった1ページにとある人物の名前が書いてあった。

比企谷八幡

追い詰められた彼は自暴自棄になって：いやまだ判断が早い。

次は中学のアルバム：：：これでもかという程彼は写ってなかった。

次は作文。

何の変哲もない作文内容、それでもその内容は嘘だと一目で分かっ

た。作文用紙に水が着いたと思われる点があったからだ。涙…だろう。家族にも構って貰えなかった彼はこの頃からやさぐれ始めたのか…？

暗くなってきた。今日の所は帰ろう。

―【葉山家】―

「隼人、警察の知り合いからのタレコミだが…亡くなった比企谷君の遺体は見つからなかったらしい」

「え…それじゃあ」

「だがその近辺にある血跡と彼の財布が彼の死を証明していたらしい。警察でも気味が悪いと噂になっていたらしい」

「そうか…ありがとう」

「それと、彼の死ぬ二週間位前に大量の不良が病院送りになったらしい」

「比企谷がいなくなってる時期だ…そこから先は俺が調べてみるよ」

「励むんだぞ」

「はい」

比企谷…誰も理解してやれなかったのだからせめて俺だけでも…。さてと、まだ調べる事ができた。

次の日

―【病院】―

「失礼します」

病室の扉を開けると包帯でぐるぐる巻きにされたリーダー格の不良と思われる青年がベットで寝ていた。

「ああ？マッポじゃねえな…んの用すか」

「この写真の男に見覚えはありませんか？」

比企谷の生徒写真を見せる。

「このガキ…死んだのか？」

見覚えがあるかのように振る舞う青年。隠す気は無いようだ。

「ええ…トラックの爆発事故に巻き込まれて…運転手諸共」

「クソツ…つまんねえの」

「彼と知り合いだったんですか？」

「敵だった」

敵？ どういう事だ？

「何で対立してたんですか？」

「そう、アレは3週間位前だった」

俺はここらでそこそこの名が知れた不良だった。周りの舎弟からは帝王なんて呼ばれたりもしてる。

今日も気に食わねえ奴ボコそうとした日だった。一人の舎弟が因縁付けられてボコられたらしい。そいつはボサボサの髪の毛で腐った目をしてると聞いた。

直ぐに他の舎弟達を向かわせたが返り討ちにあった。どうも奴は怒り心頭と聞いた。だからというのもアレだが深夜の千葉港に呼び出してタイマン張ってたら後ろからヤられたんだよ。オレがな…。訳を聞けば俺以外の舎弟達はヤクのバイヤーやって金を荒稼ぎしてたらしくてな。その隠れ蓑に俺が宛てがわれた訳だ。

悔しかった。人生で一番悔しい思いをした。

絶望に明け暮れる中アイツ、比企谷だけは奴らに向かって言った。

「腐れ外道が、ぶちのめしてくれろ」

ってな。バカだよ、アイツは…相手が100人以上いても平気そうな顔してんだ。俺もやられっぱなしじゃ性にあわないから加勢した。なんとか勝つ事ができたが取り逃した奴らもいる。

そこで奴が俺に言ったんだ。

「不良やるのもいいがやるなら『健康優良不良少年』になってみるよ。曲がった奴を全員ぶちのめせ」

約束したんだ。俺に悪いと思うならなって見せろ、やって見せろってな。それが俺と比企谷八幡の約束だ。

「そんな事が…」

「まあ、死んだら約束もクソも無いがな…」

「じゃあやんないのかい？」

「やるよ…」

礼をして病室を出る。

影ながらこの町に麻薬が蔓延するのを防いだ比企谷……。誰よりも誇れる事をしたんだな……。

(後は……)

比企谷の家のご近所さんに比企谷の印象を聞いてみよう。

「八幡君？偉い子だったわ、小さい頃から一人でお使いに行ったり、妹の面倒を見てたりしてたわ」

「でも、小学校低学年の頃ふと笑わなくなったのよ」

「親御さんが小町ちゃんに付きつきりになつてからかしら……」

「見た目は陰気だけど優しそうな子って感じね」

これで彼を知る事ができた、誰よりも優しい彼を……。

行こう……。そしてできれば誤解を解こう。

ー【奉仕部】ー

「失礼するよ」

「あ！隼人君！ヤツハロー！」

「何の用かしら？」

息を深く吸って吐く。そして覚悟を決める。

「話があるんだ。修学旅行の件について……」

俺は何もかもを話した。比企谷が悪くない事、彼が休んでる間とんでもない事に巻き込まれていた事を。

「そう、そんな事があったの」

「ああ……だから比企谷は「それがどうしたのかしら？」「えっ？」」

「彼が死んだから……彼が悪くないから……どうしたの？もう私達にとつて彼は敵よ。まあ、既に死んでるのだし、もはや障害ですらないけど」

淡々と、無表情に、雪ノ下さんは告げた。

「そうか……分かったよ、知ってくれば……良かったんだ」

精一杯の笑顔を練り上げ教室から出ていく。ふと目を上にやると奉仕部のシールが貼られた表札がある。今の雪ノ下さんや結衣には奉仕部と名乗る資格は……無い。サツと素早く表札を盗る。

「これは比企谷に渡してくるよ……」

学校を去る。

家に戻り普段着に着替えると宛もなくまた出かける。

どうしてだ？どうして比企谷の事を誰も分かってくれないんだ？
アイツはこんなにも苦しんでいるのに…いや、もしかしたらもつと苦しんでるのだろう。

「ああ…これが彼の孤独なんだ…」

誰にも理解されない気持ちというのをやつと理解できた。

(こんなにも冷たいんだな)

雨も降っていないのに指先がかじかんでくる。

歩くのが疲ればバスに乗り降りてまた乗つてを繰り返していたらとある場所に着いた。

(ここは…おせんころがし…)

千葉屈指の心霊スポット…断崖絶壁のこの場所は自殺者もいると聞いた。料金を払い崖を登る。暫く道から外れとある崖に行き着く。ここなら誰にも見つかるまい。

ポケットから表札を出して見つめっていると自然と涙が浮かんでくる。

「うっ…うううっ…」

胸に表札を抱きしめ、一歩…前に踏み出した。

「比企谷アアアア!!!」

グシャ…

「っ…」

「どうしたの？ハチマン」

ベルがこちらを振り返り尋ねてくる。

「いや、今嫌な予感がしたんだが…」

「不吉だね…気を付けようね」

ホント、ゾワつとした。心の臓を掴まれた気分だ。

「気を取り直して行くよ、今日は壊れた防具とかを買い直しに行くんだから！」

「確か…ヴェルフって人のやつが良いんだっけ？」

「うん！軽くて丈夫で着心地も良かったんだ！」

「わーったわーったから…行くぞ、バベルはもうすぐだ」

ルンルン気分で歩いてくベルの背中を見つめふと思う。

(あっちの奴らは上手くやってるんだろうか…)

ブンブンと頭を振る。

「気にしたってどうしようもないんだ…」

今日は天気が良い…きつと今日も変な出会いか事件があるのだろう。どっちもは勘弁だな。

#18 鍛冶師（スミス）と銃鍛冶師（ガンスミス）

ー【ヘファイストスの店】ー

「どこかなー」

なんて言ってお目当ての作品を探してるベルを背景に俺は壁に背もたれて店内をくまなく見渡してた。ここで俺は冤罪をかけられたのだ。過ぎた事だし犯人は死んだといえど警戒を解く理由にはならない。

「何か…お探しかな？」

すぐ隣に初老で見てくださいでは鍛冶師というより学者、研究者と言われた方が納得のいく格好の男がいた。

ていうかどっから出てきた？店内は見渡せる場所にいたぞ？

「別に…何も…」

「ケケケツ…噂通りの無気力な男だ。こう言えば分かるかな？俺はアラストルと知り合いだ」

ビクッ…

「ケケケケケ…データ通り、分かりやすい男だ」

「てことはアンタも悪魔か…」

「御明答…私の名はマキャヴェリ。魔界では一番のガンスミスだったんだぜ？」

「へー」

マキャヴェリ…どこか心にくる名前だ。

「僕は君のファンでね…レベルアップ記念にお祝いの品を持ってきたんだ」

中々デカめの箱を俺に渡してくる。

「開けてみてくれ、バカなオラリオ人には扱いきれない芸術品だ」

言われた通り箱を開ければ白と黒の大型二丁拳銃が入ってた。サスペンダー型のホルスター付きで。？…胸が高鳴るのはどうして？
これって…恋？

「反応は良好…と。あ、箱は捨てて構わないよ」

「メモるなよ」

「悪いね…見てくれ通り学者にて研究者なんだ。これも性さ」

学者根性があるお方なこと。

「本当は腰にホルスターって考えてたが手癖の悪いドブネズミ共に盗られたらって考えるだけで発狂もんだから、脇にさせてもらったよ。後、余談だが白い銃は威力、黒い銃は連射性が高いよ。上手く使い分けな」

「ありがとう」

また何かメモるマキャヴェリ。人の話を聞く態度がなってないが悪い奴ではないのか？

「少し聞いてくれるかね？」

「何を？」

「悪魔について…少しね」

気になってた事だから耳だけに全神経を集中させる。ただし視線はベルに向けて。

「昔の悪魔社会と天界って簡単に表せば弱肉強食のヤクザみたいな感じで天界が無能で悪徳ばつか働く政治家みたいなものだったんだ」

「ほう」

「当時の人間界の実権を握ってたのは天界だが裏で牛耳ってた魔界は行動を起こしてね、人間界を支配するまで至らしめたんだ」

「それって…」

「別に虐殺をした訳じゃない。一体の悪魔が事を荒立てずに人間界を手に入れたんだ。まあ、その後天界で暫く過ごす羽目になったがね」

「それで？」

「今日はここまでだ、一気に話すとつまらないだろう？続きが気になってベッドでモンモンとしてるんだな。渡すものは渡した、俺は戻る」

去っていくマキャヴェリ…しかし少し歩いたらこちらに振り返って

「鎧騎士には気を付けろ、アレは間違いなく傑作だ」

「はあ？」

鎧騎士？なんだそりや…んなのオラリオに山ほどいるんだが。真意を問おうとしてもマキャベリはいない。

(折角だし、着けてみるか)

コートを脱ぎホルスターを着けてそこに拳銃を仕舞う。うーん、手に馴染むなあ。名前を付けよう：そうだな

「マイケル&クインシー：いや、エボニー&アイボリー：違うな。そうだ、ルーチェ&オンブラにしよう」

ルーチェは白い銃、オンブラを黒い銃として今度からそう呼ぼう。ふふふっ新しい相棒ができた感じだ。

「ハチマーン！」

ベルが駆け寄ってくる。隣に赤髪のおんちゃんを侍らして：この人がヴェルフとかいう人か：見たまんま鍛冶師だな。

「紹介するね、この人がヴェルフ・クロツゾさん。僕の防具を作ってくれた人！」

「紹介されたが俺はヴェルフ・クロツゾ。〔ヘファイストス・ファミリア〕の、今はまだ下っ端の鍛冶師だ」

「俺はハチマン・ヒキガヤ、特に何者でもない」

感じのいい好青年風を吹かしているが騙されないぞ？：クロツゾさん？お前が最初の的にならない事を切に願ってるぜ？

「じゃあ、お前があおの【リトル・ルーキー】か!? って事はそっちのは【亡影】?! 記録を塗り替えた世界最速兎と最初から最後までミステリアスの完全不明!」

なんだそりや、俺そんな風に呼ばれてんの？アンノウンとか：かっこいいじゃん？

バベル八階に設けられた小さな休憩所。エレベーターの近くにあり空間で、俺達とクロツゾさんは会話をしていた。

「本当に俺より年下なんだな。いや、冒険者に年齢なんてそれこそ関係ないか？」

「えっと、クロツゾさんの年は…？」

「今年で17だ。で、そのクロツゾさんってのは止めてくれ。家名、嫌いなんだよ。ヒキガヤヤ：ハチマンも止めてくれ」

おお：年下の癖にナチュラルに名字呼びを止めて名前呼びを強制してきたぞ、こいつ。コミュ力が高いなあ…。

「それで、だ。単刀直入に言うとな、俺はお前さんを離したくなかった

わけだ。俺の防具の価値を認めてくれた、お前を。お前は二度も俺の作品を買いに来てくれた。俺の顧客、本物だ」

本物：…ねえ…。そんな言葉を使えるんだ、きつとこの人は良い人なのだろう。そつと、組んでた腕を解く。

「じゃあ、僕にこれからも顧客でいてほしいっていうことですか？」

「間違いじゃないが…もうちよつと奥に踏み込ませてもらう」

「俺と直接契約しないか、ベル・クラネル？」

急にクロツ：ヴェルフさんが白い悪魔に見えてきた。ベル：マミツたりしないか？

「えっ…いい、いいんですか？」

「いいもなにも、お前さんの専属になれるなら願ったりなんだよ、俺は。ぐずぐずしていると他の鍛冶師がきつと声をかけてくるからな、手に入れかけた顧客も失うことになる。俺としては是が非でも契約したいわけだ」

快活そうに笑ったヴェルフさんは続ける。

「…こんな話の後じゃあ信じてもらえないかもしれないが、Lv云々はどうでもよかつたんだ。あんな数ある鎧の中から、俺のものを選んでくれたからな。挙句に、俺の作品を使いたいだなんて言われた日には…な？…こう、グツとこみ上げてくるものがあるってもんだらう？」

「…わかりました。ヴェルフさんと、契約を結ばせてもらいます」

「よし、決まりだ！断られたらどうしようかと思つたぞ！…ハチマンはどうする？…契約しとくか？」

「遠慮しとく、防具とかはつけないし、武器とかも壊れないしな」

「壊れないって…そりや、不壊属性なのか？」

「いや、そんなん知らんが…信用してるんだ、コイツらは壊れない。だつて俺のだからな…」

フォースエッジを手に取りその刀身を見ながら告げる。

「信用…」

「だから…大丈夫だ」

「分かつた」

潔いヴェルフさんは俺とベルを交互に見つめる。

「本題だ。言うぞ？」

「……」

「俺をパーティに入れてくれ」

「やって来たぜ！11階層！」

Spanien！

大きく両手を上げ『宇宙へ来たー！』のポーズをとってるヴェルフさんに突進してきたハードアーマーを閻魔刀で両断にする。ふつ、今となつては奴も敵ですらない……。なんちやつて。

「油断…死ぬぞ？」

「ああ、済まなかった。気を付ける」

ヴェルフさんは俺と似たような感じで防具をろくに付けてない。そこは少し好感が持てる。

「…新しいお仲間が増えたと聞いてみれば、なーんですか、ただベル様はモノで釣られて買収されただけではありませんか」

不機嫌な声がりりルルカから聞こえる。つていうかモノというかちよろまかし…あつ露骨に目線逸らしやがった。

「何だ、そんなに俺が邪魔か、チビスケ」

「チビではありません！りりにはりりルカ・アーデという名前がありますー！」

急ごしらえとはいえウチのパーティも賑やかになったものだな。と、まるで熟年の冒険者みたいな事を考えてしまう。いかんいかん、まだ俺は新人、伸びなくてはいけない、立ち止まってもいけない。俺と…ベルの目指した境地へと至る為に…。

「グオオオオオ…」

地面からいきなりモンスターが生み出される。オークだ、相変わらぬ気持ち悪いビジュアルをしてる。創造神の趣味が悪い証拠だな。

「ベル様は一人で好きなように動いてください。この鍛冶師の方はりりが微力ながら援護しましょう。ハチマン様、後衛でモンスターの撃破と全員の援護をお願いします」

「分かったー」「了解だ！」「承知した」

(試してみるか)

懐に手を入れルーチェとオンブラを取り出す。

「さてと、試し撃ちの時間だ」

銃を手に取り手首が交差するように構えると不意に頭が冴える。狙うべき頭に自然と銃口が向く。後は引き金を引くだけ…。

バン！バン！

飛び出た弾丸は的確にモンスターの頭を撃ち抜いた。勿論生きているはずもなく絶命した。

「ハ、ハチマン!?何それ!?!」

「説明は後だ、今は邪魔を消すぞ!」

「「ブギイイイ!!」」

「選べよ雑魚共…蜂の巣かハリネズミのどつちが良い?」

「「ブギイイ!」」

「答えは聞いてないがな」

幻影剣を周りに展開しオークとかインプにロックオンする。後は簡単だ。ルーチェとオンブラの引き金を引くと同時に幻影剣もありつたけ投射する。

「ふう、こつち方面は粗方片付いたな。リリルカ、ちよつくら休むか」

「まだモンスターは残ってますよ?大丈夫なんですか?」

「ヴェルフさんの実力は知らんがベルが付いてんだし大丈夫だろ」

見てる限りヴェルフさんも弱くはないのが戦いから伺える。

「一通りの安全は確保しましたし、ご飯にしましょう。他の人達がいるから、モンスターに警戒することもないでしょうし」

そんな訳でお昼をとる事になった。俺が作ったお弁当を出す、今日のデキは結構良かったから自信がある。ベルとリリルカは目を光らせて食べていた。それを不思議そうに見ていたヴェルフさんに食べてもらおうとダムが決壊したかのようにバクバク食べてった。ふっ…また一つ胃袋を掴んでしまったか…。俺も罪な男だな。

「そういえばハチマン、その白と黒のやつ何?」

「ええ、リリもずつと気になっていました」

「見たことねーな」

やはり銃はこの世界に存在しないのか。説明が難しくなるな。

「知り合いつていうかファンと名乗る科学者に貰った。ボウガンの殺傷力と連射性が段違いに上になった代物だ」

銃を取り出しよく見てみると持ち手の部分に不自然な窪みがあった。何か写真でも貼れそうな窪みだ。まあ、今の所誰の顔も貼る予定はないな。

新しい力：使い道を誤ってはいけない。

そう覚悟を決めるとベルの手が光っていた。

「おいベル：：なんだそりゃ」

チリチリとした淡い光を右手に収束させてる。もしかして新しいスキルだろうか？なんか：嫌な感じがする。

『——オオオオオオオオツツ!!』

顔を振り上げその方向に目を向ける。

体高約150c、体長は4mのドラゴン。

あれは：

「インファイト・ドラゴン：」

11、12階層に出現するレアモンスター。

『モンスターレックス迷宮の孤王』の存在しない上層において、実質あのモンスターが階層主だ。

フォースエッジを構え迎撃しようとするすると近くから声が響き渡った。

「[ファイアボルト]!!」

刹那全ての音が消えた。純白の閃光はインファイト・ドラゴンの体を貫きダンジョンの壁の一部を崩した。

「なんだ：：あの威力は：」

あれがベルのスキルと魔法の力：。

欲しい：：あの力が：：絶対的な切り札が：：俺みたいにチマチマしたやつじゃなくて爆発的な奴が：：!

その日はベル達を先に帰らせて深夜までダンジョンで狩りを続けてた。追いつく為に：：誰の背中を見ないで済むように。

早朝、いつの間にか帰ってきてたハチマンを連れて【豊饒の女主人】まで行く。シルさんのお弁当を受け取るためだ、その為少し待つ事になったのだが…。

「ふああ、眠い…」

目を伏せながら欠伸をするハチマン。目の事を気にしてるらしく今日は紙袋を被っている。最低限の視界を確保する為に右目の方に穴を開けている。

「おはようございます、クラネルさん…とヒキガヤさん、どうかしましたか？」

「なんだか『目のコンディションが過去最悪』らしいのであまり触れなideしてくれると助かります」

「はあ…分かりました」

手持ち無沙汰になっていると、カランとドアの鐘を鳴らして、リユーさんが声をかけてくれた。その間ハチマンはずっと空を眺めている。あつ、頭に鳥が止まった。

「そうですか、無事にパーティメンバーを」

「臨時、ってことになっちゃうかもしれないですけど…」

先日尋ねられたパーティメンバーの事について話す。

「相手の方は【ヘアアイス・ファミリア】の所属ですから、僕達の【ファミリア】ともう二度と問題を起こすことはないと思います。神様達も仲が良いそうなんです」

「それはどうかな」とでも言いたそうな目線がハチマンから飛んできてる。ハチマンはあの事件があつてからお店の類に顔を出さない。強いて言うなら【ミアハ・ファミリア】にしかポジションを買い求めに行かない。昨日ずっと腕を組んでたのはいつでも銃とやらを取り出せるようにしてたと考えると少しヒヤツとする。【ミアハ・ファミリア】といえはこの前ミアハ様とコーヒーを飲んだらしい。僕の知らない所でハチマンの交友が広くなるのは嬉しい反面少し嫉妬してしまうのは秘密だ。

「クロツゾ…」

ヴェルフさんの家名を出した時リユーさんは動きを止めた。その反応に少しギクツとする。

「な、何か知ってるんですか?」

リユーさんの話を要約すると、ヴェルフさんの家系は血筋によりより強い【魔剣】を打てることは知っていたがそれを隣国の【ラキア王国】に献上することによって地位を獲得した。その魔剣でエルフの里は草も残らず焼き払われたらしい。

「そうなんだ、ハチマンはどう思う?」

肩と頭に鳥が沢山止まってるハチマンに聞く。

「興味ないね」

「えっ…」

「というのは冗談だが、別に? そんな事があつたんだく位だ。戦争なんていつの時代もこんな感じだしな。俺の故郷も昔そんな感じのやられたし、似て非なる事もやってた。でもヴェルフさんはやってないだろ? 俺達はそれだけ知ってりやいいんだよ。背負わなくていい物は背負いたくないしな」

紙袋越しにポリポリと頬を搔くハチマン。僕はきつと考えすぎてたのかもしれない、ハチマンのこういう所に救われるなあ。

「ヒキガヤさんらしい考えですね」

リユーさんが同意するように声を漏らす。

「ベルさーん! お待たせしましたー」

シルさんが慌ただしくお弁当を持ってきてくれる。それを受け取りリユーさん達に別れを告げてハチマンとその場を去る。

「よ、ベル。おはよう」

「あ、おはようございます。えっと……ヴェルフさん、どうしてここに?」

「ああ、リリスケの伝言だ。今日はダンジョン探索に付き合えないらしい」

何でもヴェルフさんが一人で待っているとリリが凄い勢いで飛んできて事情を説明に来たらしい。下宿先のノームの店長が倒れてしまったらしい。

「どうする、3人でダンジョンに行くか？」

「う、うーん…」

「ベル、ハチマン。何だったら、今日一日俺に時間を貸してくれないか？」

ー【ヴェルフの工房】ー

「ここは…」

「自分の技術を他の鍛冶師に見せない為に個別の工房を与えてくださったんだ。陰気で偏屈とかは思わないでくれよ？これはヘファイストス様の方針でもあるからな」

見覚えのある工房だ。ハチマンが誘拐されて酷い事をされた場所とそっくりだ。置いてある物が違うだけで基本的な作りは一緒。ハチマンの方を見ると魔力で椅子を作り出して座り込んでる。

「あいつ、今日は…いや、今は特にピリピリしてるがどうかしたのか？」

「いやっ…これは…その…」

ハチマンに視線を送ると「別にやましい事じゃないから良いぞ」と簡素な言葉が返ってくる。

「実は…」

事の顛末をヴェルフさんに話した。ハチマンが冒険者になって間もない頃、あのお店に足を運んだら万引きの冤罪を着せられて工房に連れてこられて酷い事をされたと。

「そんな…悪いハチマン。そんな事を露知らず連れてきちまって…」

「頭を上げてくれ：ヴェルフさんは関係ないんだから謝る必要はないだろ？…だったら俺が怒る必要はない。それにアイツらは『死』という罰を受けた。俺もこんな目をしてたから悪いんだ…」

「目…？目…？目が関係あるのかよ」

ヴェルフさんが訪ねるとハチマンは紙袋に手をやってそれを外した。殆ど寝てないという事もあって今日は一段と深淵のような目になっていた。

「この目が気に入らなかったのと売上が悪かったかららしい：ター

ゲットにされるのはこの目のせい…だから全部俺のせいなんだ」

沈黙が流れる。そんな事ないと叫びたいが今までにないくらいハチマンは悲しそうな目をしていた。

「悪い…気まづくしちまった。まあ、謝礼とかはたんまり貰ったし！平気なんだけどネー！」

一転として急に明るく振る舞う。無理してるのだろう…演技が下手だよ、ハチマン。でも本当に忘れようとしてるらしい。なら踏み込まない方が良いでしょう。

「ちよつと用事を思い出した。行ってくる」

紙袋を被り直して工房から出て行くハチマン。

「おい、良いのかよ」

ヴェルフさんが聞いてくる。

「大丈夫ですよ、いつまで引きずってたらそれこそハチマンに失礼になりますから」

「信用してるんだな」

「ええ！だってハチマンは僕の相棒ですから！」

「ふう…」

工房から出てすぐ空を見る。こういうテンションが低い日は空を見るに限る。重い荷物をく枕に―して―、深呼吸く青空に―なる―。

「盗み聞きは感心しませんよ」

すぐそこの壁に寄りかかる赤髪で眼帯を付けた女神。もしかしたなくても女神へファイストスだろう。

「ごめんなさい、私の子から貴方が来てるって報告が入って」

「別に責めてるわけじゃないですよ」

「話は聞かせてもらったわ。貴方、目にコンプレックスを抱いてるの？」

「怯えられるから見ええないようにしてるだけですよ。そうすれば余計な敵を作らずにすむから…」

「そう…私と似てるわね」

似てる？その眼帯と関係があるのか？

「見せてくれるかしら？ 貴方の眼を」

断る理由もないから紙袋を取る。すると彼女は俺の頬に両手を添えこちらを覗き込んでくる。近い近い…当たってるよ。

「悲しい眼…希望と期待、理想と理由に打ちのめされた眼をしてるわ。辛い体験をしてきたのね。奥には優しさと、誠実さを秘めてるわ。それでも貴方は優しさを失わない…いえ、本当の優しさを知ってるのね。貴方の過去に何かがあったかは分からないけど、貴方が間違っていない事はすぐに分かるわ」

「俺は優しくなんかありません、優しかったら俺は人に危害なんて加えません」

「いいえ、人の過ちを正すのだって立派な優しさよ」

心につつかえてた何かが壊れた音がする。自然と視界が潤んでくる。俺はオラリオに来て初めて涙を流した。

「収まったかしら？」

「ええ…お恥ずかしい所をお見せしました」

「貴方の泣き顔意外と可愛かったわよ」

うぐツ！…恥ずかしくて蒸発しそうだ。…こうなったら。

顔を上げて仕返しと言わんばかりに左手を彼女の右頬に添えて眼帯を取ろうとすると

「だ、ダメよ…」

俺の手を取って抵抗するがお構い無しにその眼帯を取る。

「あっ…」

「なんだ、普通に綺麗じゃないですか。これで怯える奴とかビビりなだけじゃないんですか？」

眼帯を付け直すとすぐに背を向けて歩く。

「あの言葉、嬉しかったです。それじゃあ…」

軽く挨拶してホームに戻る。この後ソファでバタバタする予定ができたんだ。

#19 18階層の悪夢

「んがごごごご……ンあつ？」

久々の熟睡から解放される。頭は朦朧とするが体の調子がすこぶる良い。でも何か気がかりがある。

「何か……忘れてる？」

部屋の中をぐるりと見渡す。いつも着てるコートの隣に赤いコートが壁にかけてある。

(サラマンダーウールのコート……)

コートの上にローブを羽織るとゴワゴワして違和感がある為仕立て屋でコートにしてもらった。紫の奴とまた違ったタイプで銀の派手な装飾が施されてる。曰く『デザインは勿論炎以外の耐久性も格段に上がりました!』らしい。もういつそ鍛冶師になったら？

「あれ？」

ーなんでサラマンダーウール？

ーそりや中層に行くからだよな。

ー中層に行くのっていつ？

そりや…

「今日じゃねえか!!」

慌てて支度する。ポーション良し!赤いコート良し!火の元…良し!指さし確認良し!

「それじゃあ…あ？」

机の上に見覚えのないメモ書きが置いてありそれを手に取る。

「なにになに? 『起きたらできるだけ早く中層に向かう事、13階層で待ってるよ ベル』 気を遣わせたな…」

じゃあさつきと行かなくては…

「行つてきます」

返事のない空間に背を向け外に飛び出る。

ー【ダンジョン】ー

ザクツ…

ハチマンはモンスターを見かけるや否やフオースエッジでその命を刈り取りながら13階層に向かっていた。魔石は早々にハチマンの腰の麻袋に一杯になっていた。

「んあ？」

オラリオに来てから発達した聴覚がダンジョンの通路の奥から聞こえる音を逃がさなかった。

それはボロボロのパーティだった。ハチマンにとってある程度は馴染みのある鎧や刀を身につけたまるで日本人のような集団だった。リーダーと思しき男の背中には見るからに手負いの女性を担いでいた。

「…よかつたらこれ、使います？」

同郷ではないが似たような所の出身(?)として見捨ててられないと思いつい声をかけてポジションを投げ渡すハチマン。

「どうして私達に？」

それを受け取った肩鎧を着けた女性冒険者はハチマンに聞いてくる。

「まあ、大変そうなので…よかつたらバベルまで護衛します？」

ベル達の事が気にかかるがアイツらなら大丈夫だろうと思いつい提案する。

「桜花殿…どうします？」

「んん…背に腹はかえられない…頼む」

リーダー格の男はその提案に承諾の意を示す。

「じゃあ急ぎましょう」

ハチマンが前線を走り出てくるモンスターを疾走しながら居合をして消し炭にしていく。

「凄い腕前ですね、お名前は？」

「ハチマン・ヒキガヤツす…」

モンスターを相手にしてる為あまり話しかけて来ないでオーラを全開にしたがそんな思いも一刀両断された。

「ヒキガヤツて…あの『亡影』ですか？噂とは全く違いますね…」

「噂？噂とは…？」

「般若の面を被り悪事を働く冒険者を血祭りに挙げている非常に起床の人だと巷では…」

「とんでもない噂を流されてるものだと内心心底呆れ返るハチマン。そんな彼の尽力もあり、かなり早い時間でバベルに到着した一行。「この度は誠にありがとうございました」

肩鎧の女性冒険者と桜花が感謝の言葉をハチマンに送る。

「いや、いいんだ、それより冒険者を見かけなかったか？白髪頭とパールウムと赤髪の鍛冶師の三人組なんだが…」

ハチマンのパーティの特徴を言った瞬間ハツとした顔になり段々暗い表情になる。

「もしかしなくても…すまない、逃げる際に13階層でモンスターを押し付けてしまった」

「本当に申し訳ございません！」

「そうか…なら…行かないと…」

助けたファミリア、タケミカツチ・ファミリアに目もくれず再びダンジョンに走っていくハチマン。

(待っててくれ…皆…！)

不安が彼を包む。リユースさんが言っていた『中層は違う』という言葉が頭に反響する。

「アドバイザー君！」

「か、神へステイア？」

窓口に待機している受付嬢のエイナに詰め寄る。

「昨日ベル君とハチマン君はここに来たかい!？」

「ベル君は昨日探索出発前の朝に訪れたのみでハチマン君とはお会いしていませんが…?」

「昨日から、ベル君達がホームに帰ってきてない」「!」

異変に気付いたのは月が空の真上に来た時だ。その時はまだダンジョンに潜っているだろうと思ったがいくらか何でも帰りが遅いと思っただらアドバイザー君にも顔を出してないなんて…

「アドバイザー君、冒険者依頼も発注する。依頼内容は『ベル君達の捜索』だ」

手段を選んでる暇はない、他の冒険者達の協力を募らないと…そう思いデスクに出された羊皮紙にペンを走らせ依頼書を作成する。

「報酬はどうします?」

「40万ヴァリス。【ファミリア】の全財産だ」

今すぐ用意できる金を提示する。

「上層部の許可をもらってきます。掲示板に貼り出されるには恐らく一時間前後かかりますので、ご了承ください」

「わかった、頼んだよ」

ギルドの玄関口を潜る。前庭の中央のモニュメントの傍でミアハとナアーザ君が待っていた。

「どうであつた、ヘスティア」

「駄目だ、やっぱりベル君達はダンジョンから帰ってきてない」

押し黙る二人に過る全滅の可能性を否定するように叫ぶ。

「ベル君達は生きてる!ボクの『恩恵』は消えちゃいない!」

「ならばヘファイストスやタケミカツチ達のもとへ向かおう。可能な限り、多くの者に助けを仰ぐべきだ」

「うん!」

3人で広大な都市を奔走する。たった2人の家族の為に。

「すまん……」

右肩で支えてるヴェルフが力なく呟く。

「いや……」

疲労故にそれしか返せない。後ろに着いてきてくれてるリリは息を切らして疲弊している。視線に気付いた彼女は大丈夫です、と微笑みかける。

ヘルハウンドの一斉放火を被り何とか僕達は一命を取り留めることができた。サラマンダーウールが無かったら確実に死んでいた。

「リリ、残ってる道具は…?」

「回復薬が四つに解毒薬が2つ…以上です……」

ヴェルフの潰れた足を治すのとダンジョンから脱出する事が可能なのは足りない頭をフルに使ってもすぐに分かる事だった。

(現在位置、推定14階層)

13階層でヘルハウンドの大群から退却している際に、その先っぽっかり空いていた下部階層へと繋がる縦穴に落ちてしまった。

「一度、落ち着きましたよう」

「まずは、パーティの装備を確認しましょう。治療用の道具ですが、リリは回復薬が四、解毒材が二、ベル様達は？」

「俺は何も残っちゃいない」

「僕はまだ、レッグホルスターに回復薬がいくつか」

「次は武器です。リリはボウガンを先の崩落で失いました。ヴェルフ様の大刀は無事で…」

「ベルは大剣に、後は短剣とバックラーをなくしたか…」

「う、うん」

「分かりました……今後の方針ですが、武装も道具も限られている中、生きて帰還するためにはできる限りモンスターとの戦闘を避けなければいけません。状況が許すならば、逃げの一択です」

地面に腰を落としてるヴェルフは異論はないと頷く。

「ベル様、ヴェルフ様、取り乱さず聞いてください。これはリリの主観ですが…今いる階層は15階層かもしれません」

曰く落下の時間と通路の幅や光源、迷宮の難解さからの推測だという。『詰み』という言葉が脳裏に過る。

「ここからが本題です。上層への帰還が絶望的であるのは間違いありません、ですがからこそであえて上に行く選択肢を捨てて、18階層に避難する方法があります」

ダンジョンの安全圏である18階層はモンスターが出現しなく、腕の良い冒険者がいる為、帰る際に同伴してもらおう事ができれば帰還できさるだろう。

「ハチマンは？ハチマンは待たないの？」

「ハチマン様もリリ達を追って来ているでしょうがここで待つのは得策ではありません。リリ達にはハチマン様を待つだけの手段も時間

も残されてません。何せここは袋小路です、モンスターにここを嗅ぎ付けられたら全滅します…。ですのでせめて何かしらの目印を残しよう、リリ達と確定できる物ではなくても冒険者がいたと分かる物があればハチマン様もリリ達がいたと予想されるでしょう」

「おいおい、期待しすぎじゃないのか？」

ヴェルフがそう言うがきつとりりもそう思ってるだろう。

「でもハチマンなら来てくれるよ。分かるんだ、ハチマンなら良い意味で期待を裏切ってくれるから…」

皆を見つめて一息つく、このパーティのリーダーは僕だ、皆の命を預かってるんだ、決意は固めた、後は決断だ。

「進もう」

ー【ダンジョン】ー

「なんなんだい…これは…」

そこには無数のモンスターの屍が転がっていた。ヘスティアの見覚えのある剣がモンスターの頭を貫いていたり壁から生まれる瞬間に串刺しにされたり、モンスターにとっては凄惨すぎる光景が広がっていた。

「おいおい、ダンジョンってのはいつもこんな感じなのか？アスファイ…」

搜索隊にひっそりと加わったヘルメスがその団員の少女に聞く。

「ひーふーみー…恐らくこの階層全部のモンスターがここに集中したと思われれます」

眼鏡をくいつと上げて冷静に告げる。

「一体誰が…」

ヘルメスが呼んだ助っ人のエルフ君が呟く。

(間違いない、ハチマン君だ…)

「この剣…亡影の…」

タケミカツチの子供がハチマン君の二つ名を言うと同の空気がピリピリとします。

「この前Lv2になったばかりでこの実力ですか…」

「この剣が消えてないって事は恐らく近くにいるはずだ。注意深く気を付けながら急ごう！」

「はい！」

ハチマン君もこんな数のモンスターが寄ってきて無傷な訳がない。急がなくては……！

激しい爆炎が連鎖する。ヘルハウンドの群れはヴェルフの魔法により崩れ落ちていった。

「っ!? ヴェルフ！」

マインドダウン精神疲労、精神力の枯渇によりヴェルフは完璧に気を失った。

「……あ」

どしや、とりりも地面に転がった。

「りりっ……ごめんっ」

りりのバックパックを捨ててできるだけ身軽にした後りりを引きずる。

重い二人の体は僕の心にもものしかかってくる。今すぐ何もかもを投げ捨てたい衝動に駆られる。

「ふぎ、けろっ……!!」

何とか17階層の大広間に出る。

「なんで……」

余りにも静かすぎる。そこは無音の恐怖を放っていた。気配を感じてはいるのに何も無い。まるで何かの誕生を恐れているように。

バキリ

鳴った。出口と思われる洞窟に逃げ出そうとしたその時に。ぼつと横を振り向いた時、『嘆きの大壁』と呼ばれる200mはあるだろうその壁に巨大な亀裂が走った。

(やめろ……やめてくれ……)

そんな思いを引き裂くようにその怪物は大地に降り立った。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

振り下ろされた大鉄槌は走ってる僕のすぐ後ろに落下した。その爆風と衝撃波は僕とりりとヴェルフの体を出口の穴へと吹き飛ばし

勢いよくその中に入ってしまった。ハチマンが言うならホールインワ
ンってやつだろうか。

ピクリとも動かない僕の体を触れるのは草のような柔らかい感触。
そんな所にガチャ、ガチャ、という鎧のような音とこれは…馬？の蹄
の音が近づいてくる。

「仲間をつ、助けてくださいっ…！ハチマンをッ…」

「ヒヒイイイイン!!」

馬の嘶きと鎧の人の荒い息遣いが聞こえるがまるでそんなのは幻
だと言わんばかりにその気配は消えた。

そこで僕は意識を手放した。

「ぜえっ…ぜえっ…げほっ！げほっ、ガボッ!!」

激しい咳と共に大量の血を吐く。20頭に及ぶヘルハウンドの炎
は想像以上に凄まじくもう左手の感触が無い。大量のハードア
マーの突進は大砲のようで俺の臓器を砕いた。怪我をする度にやは
り人とは思えない程の速さで治っていくが今はもう治りも悪くなっ
た。

「やっど…17…階層か…」

フォースエッジを杖代わりにして歩くが視線も定まらない。息も
荒くなってきた。流石に限界か…

「なわけッ、ないだろオッ！」

ダンジョンを探索してる内に冒険者の物と思わしき物品を幾つか
見かけた。通路のど真ん中に。普通捨てるならダンジョンの端っこ
とかの筈なのに真ん中ときた。何かしらのサインとしたら今助けを
求めているのはどう考えてもアイツらしいわいわけだ。

「オオオオオオオ…」

階層主と名高いゴライアスがこちらを見つけるなり拳を振り上げ
てる。

フォースエッジを構えて迎撃の体制を取る。

その瞬間…

バリバリイツ!!

紫の雷光がゴライアスの胸を貫いた。

倒れたゴライアスの巨体の先にいたのはおぞましい鎧を身に纏い、どう見てもモンスターとしか言い様の無い馬に乗った身長2、3メートルの大男だった。

「スパーダアアア……」

「人違いなんだが……引いてはくれないだろうな……」

改めてフォースエッジの切っ先をその鎧男に向ける。

「一応聞いところか……名前は？」

「ネオ……アンジエロオ……」

「どうにか喋れるらしいな……自我は別として……!?!」

姿が消え周りを警戒していると後ろからとてつもない殺気を感じた為急いで身を屈めたらすぐ上をネオアンジエロの持っていた特大剣が掠める。

「話し合いは嫌いらしいな……気が合いそうだと思っただがなあ!!」

地面を蹴って奴に向かってく。奴の目を見据えてとびきりの殺意を出す。きつとこいつはマキャヴェリの言っていた最高傑作なのだろう。何となくだが奴には負けてはいけないと本能……いや、魂が叫ぶ。

ハチマンVS魔鎧ネオアンジエロ&ゲリユオン

その時俺は知る由もなかった、この後に起こるとんでもない悲劇を……。

#20 対峙と決意

ハチマンとゲリユオンに乗ったネオアンジエロとの戦闘は熾烈を極めていた。ルーチェとオンブラの弾丸はゲリユオンの時間停止能力によって難なく躲かれる。ゲリユオンの時間停止とネオアンジエロの技が組み合わさりハチマンの周りに大量の雷球が迫るがそれをルーチェとオンブラで迎撃する。

「くそっ、段々ペース上げてくるな…」

柄にもなくイライラしてるハチマン。それもそうだ、遠いところからチクチク攻撃され尚且つ自分の攻撃は当たらないのだから。

「こうなったら…」

ゲリユオンの周りに幻影剣を配置してそのままルーチェとオンブラを発砲する。

(さあ、やれるもんならやってみろ)

ハチマンは違和感を感じていた。時間停止ができるなら既に俺は死んでいるのでは？と。認知されない間に首でも跳ねたら勝ちなのに奴はそれをしない。

「どうして？」

「騎士道精神か？」

「それとも手加減？」

「いや、時間制限だろうか？」

ゲリユオンも見た感じそれなりに疲弊しているように見える。某吸血鬼のように連続して何秒も停止してられないのだろう。

ザシユザシユツ！

幻影剣はアンジエロの剣により壊されたが銃弾はゲリユオンの眉間に当たった。

「ヒヒイン!!!」

暴れるゲリユオンに振り落とされるアンジエロ。そのまま倒れたゲリユオンは動かなくなつた。

「残るはお前だけだな？」

闇魔刀を持ちアンジエロを見据える。アンジエロは紫色の雷を纏わせた大剣を構える。

大きく振り下ろされる剣を闇魔刀で逸らし一閃を入れるが既のところではバックステップで躲され鎧の胸の部分に一筋亀裂を入れるだけとなった。

一度闇魔刀を納刀し構えを取る。ハチマンはずっと努力してきた。追いつく為に…。あの日自分をミノタウロスから守ったアイズ・ヴァレンシユタインや自分の手を取ってくれたベル・クラネルに酒場で一泡吹かせてやると決意させたあの狼人にいつの日か出会った女神の従者。ダンジョンで追いつく為に試行錯誤を重ねやつとの思いで会得した技を奴に喰らわせる。

「Don't move! (動くな!)」

刹那、ハチマンは神速の居合で次元を切り裂き、ネオアンジエロを無数の斬撃の渦に巻き込む。名付けるなら「次元斬」だろうか。

「追加だ！持っつけてえ!! Over Drive!」

逆手でフォースエツジに持ち替えて魔力を乗せて黒い一閃を飛ばす。斬撃はアンジエロに受け止められるが起動が少しズレ顔の部分に当たる。

カラン…

兜がフロアに落ちる音が響く。兜の奥に隠れてた顔にハチマンは後ずさりをする。

「そんな…お前は…はや、ま…?」

顔色は白色に限りなく近づきその目は紅くギラギラと光っているが確かにその顔は葉山隼人であった。

「お前…どうしてここに…ぐあっ!!」

詰め寄ろうとするも再起したゲリユオンの突進で遮られる。その隙にネオアンジエロ改め葉山はフラフラとどこかへ行ってしまう。

「待ってッ…チィッ!」

行かせまいとゲリユオンはハチマンの周りの時を止めて妨害する。能力の効果が薄まりハチマンの自由が効いてきたらゲリユオンは再び突進してくる。

「邪魔を！するなあっ！」

両手で首を、魔腕で胴体を掴み巴投げをする。倒れたゲリュオンの頭を持ち閻魔刀でその首を切り落とす。

「死ね……！」

ゲリュオンの遺体から光が出てきてハチマンの体へと吸い込まれる。ハチマンにとってその経験は2回目だがこれといって体に変化は無かった。

「葉山は……見失ったか……」

葉山もそうだが元の目的を見失いかけないように踵を返して17階層にてベル達の痕跡を探す。

「これは……」

リルカのバックパックが投げ捨てられてる。余程の事がない限り捨てないと思うが捨てられてるならきつと状況的にマズイのだろう。バックパックを拾い上げその下の18階層へと下る。

グラツ……

しかし18階層の芝生を踏みしめた瞬間とてつもない倦怠感がハチマンの体を襲いそのまま地面に突っ伏してしまう。そのまま一言も発する事無くハチマンの意識は闇に沈んでいった。

「ああ……また……これが……」

「む？」「あれー？」

ベル一行を自陣のテントに担ぎ込んだ後に本来いるべき人がいないとアイズが探しに行ったから釣られてハチマンの軽い捜索に出ていたリヴェリアとティオネは森の茂みに突っ伏す紅いコートを着た人物を発見した。

「この顔は……」

「ぼーえー君だよね……」

近づきその体を改める。

「服の破け具合から傷は相当広がったようだ」

「広がった？」

過去形に疑問を抱くティオナ。

「回復魔法を使って傷を癒したがマインドダウンで気絶と考えるのが妥当だ」

「ふーん…」

何かしらの違和感を覚えながらティオナはハチマンを担ぎ自陣のテントまでハチマンを運ぶ。

「…てなきや…」

蚊の羽音のような声でハチマンが呟く。

「？」

「捨てなきや…」

哀しさと覚悟を孕ませた言葉にティオナはただ聞くことしかできなかつた。なぜなら彼は寝てるのだから。

「~~~~~つ!?!」

起き上がった瞬間に襲いかかる激しい倦怠感と激痛。ズタボロの体がとんでもない悲鳴をあげている。

転げ回っていると隣に見覚えのない赤色が見える。ハチマンのオニユウのコート、そしてその下で寝息を立てるハチマン。そしてその横にはリリとヴェルフも寝ている。

「ハチツ…マンツ…!…皆ツ!」

痛みを堪えてハチマンを揺さぶる。しかしどれだけ揺らしても起きない。リリもヴェルフも起きない。

何とかしなくては…そうだ!

「もうすぐはるですねえツ!!恋をしてーみませんかあツ!!」

ハチマンが掃除中歌ってた曲だ、フレーズが頭に染み込んでついその歌詞だけ覚えてしまったのだ。そして再び流れる沈黙、だけど僕はそれも壊す。

「はーるーよオー!!とおきはるよーーまーぶたツとーじれーばーそーこにー…」

別の曲を歌うがそれでもハチマンは目覚めない。でも不思議とその顔は少し笑ってるようだ。

「どうかしたの?」

スつとその姿を現したのはアイズさんだった。

「ほわあああああつー！」

驚いて大声を上げてしまう。歌ってたのもあつて凄く恥ずかしい。

「動けそう？」

「は、はいっー！」

何とか体を動かしてアイズさんに着いて行く。聞けばどうやらロキ・ファミリアの団長に会わせてくれるようだ。

ロキ・ファミリアの団長：一体どんな人なんだろう。

「またここか…」

いつもの夢の世界。デカイ扉に異色の風景、こんなのが自分の心の中にあるのかと思うと少し精神鑑定を受けた方がいいんじゃないかと思う。

「葉山…」

ここに来ると戦いの事とか自分について見つめてしまう気がする。今だって葉山の安否より戦いに勝てなかったのを悔しがる自分がいて何かの喪失感を感じる。

「分からねえな…」

自分が何を失ったのか、葉山をどうするか、この先どうするか、何も分からない。考えたくない。

「ん？」

少し開いた扉に近付き隙間を除く。

そこには暗闇が広がっていたがよく見ると銀色に光る何かがあった。手を伸ばしても届かない、もう少し開ける必要があるようだ。

「今はまだその時じゃない…よな」

その場で倒れ込む。ココ最近悩みっぱなしだ。ていうかオラリオに来てから悩みっぱなしまでである。まったく、俺の人生は苦難の連続だな。

『…ッ…あッ！』

「？」

夢の中なのに聞こえるはずが無い声が聞こえる。

「はーるーよオー!!とおきはるよーるーまーぶたツとーじれーばー
そーこにー…」

ベルの声だ。きつと掃除中歌ってたのを覚えたのだろう。歌えば俺が起きるとでも思ってるのだろうか。まったく…お前って奴は…
「愛をくくれし君のー、懐かしき声がするく」

続きを歌い返す。途中だと少しやるせん気持ちになるしな。よつてこれは何も恥ずかしくない事なのだ。

「さてと、そろそろ起きるか…」

ゲリユオンからもらったモノも確認したいしな。

「んがっ…」

うめき声と共に起きる。でかい欠伸をした後に周りを見渡す。

「誰もいない…」

テントから出ると辺りは夜のように暗くなっていた。

「あつ、ハチマンー！」

ベルが駆け寄ってくる。

「ベル…ここは？」

「ロキ・ファミアリアの野营地だよ、倒れてた僕達を介抱してくれたんだ」

「そうか、後で礼をしとかないとな」

「そうだね、もうご飯の時間だから行こう！ロキ・ファミアリアの人達に恵んで貰えるから」

至り尽くせりだな…。

ベルに連れられると焚き火を囲むように沢山の人達が輪になって座っていた。

「し、失礼します」

人気のない場所に向かうとリルカとヴェルフがコチラを見つめるなり手を振ってきた。

「遅いぞ」

「悪い、寝坊した」

からかうようにヴェルフがつついてくるが今はそれすらも心地よ

い。

「遅れた分はきーつちり働いてもらいますからね！」

「ああ、勿論だ」

リリルカも微笑みながら労働させようとしてくる。返事してしまつたがこの子、恐ろしいつたらありやしない。

ベルの右にススつと座ると俺の右に金髪の美少女がすとんと座ってくる。しかしこんな事ではいちいち動揺しないハチマンアイアンハート。やだ少しかツコイイ、今度からアイアンハチマンなんて名乗ろうかな。

他の場所の男性冒険者の痛い目に晒されながらも飯は進んでいった。ヴェルフやリリルカ、ヴァレンシユタインさんとも軽く喋つていたその時

「ねえハチマン、ハチマンの憧れの人って誰？」

ふとベルが思い出したように訪ねてきた。

「憧れの人？いきなりどうした？」

「前から聞こうと思つてただけだけど忘れちゃつてて…今じゃダメかな…？」

モジモジと女の子のように見つめてくる。ヴェルフやリリルカ、更にはヴァレンシユタインさんやリヴェリアと呼ばれていたエルフの人やテイオナと呼ばれたアマゾネスの人も興味ありげに耳を傾けている。

「憧れの人…ねえ」

『おにーちゃん、何やってるの？』

『ん？FF7』

『それって古いゲームでしょ？』

『フツ甘いな、小町よ古き良きって言葉を勧めるぞ？新しいのも良いが古いものになつてちゃんと需要があるのだ、そう、老兵キャラが持つ強みとはおっさん臭さと経験からくる熱い笑顔なのだから…』

『お兄ちゃん脱線してるよ…ふーん、面白いならいいんだけど、うるさくしないよね。小町勉強するから』

『頑張れよー、あーやつぱりセフィロスはカツコイイなあ〜：クライ
シスコアもキンハーもやるか〜』

『……………』

—————

「セフィロスかな…」

「どういう人なの？」

「俺に希望（中二病）と絶望（黒歴史）をくれた人だ」

「それって…」

「あまり話させないでくれ…思い出すと泣きそうになる（恥ずかしさ
のあまり）」

「ううん…ごめんねハチマン。食べる事に集中しよう？」

「ああ…」

思い出すとセフィロスのお陰で色々な思い出（黒歴史）ができたな
…。長い木の棒を持って霞の構えをして大興奮したり、セリフを丸暗
記したり…。魔法とかも…ん？

「これだ…」

「ハチマン？」

今の俺に無い爆発力をこれで補えるのでは…？うわあ…俺つても
しかして天才？

「いや、なんでもない。さっ食べようか」

「う、うん」

目の前の皿の料理を一気に腹に入れてく。

「ごっそさん、少し散歩行ってくる」

即座に立ち上がりキャンブから結構離れた人気のない場所へ移動
する。高台の上でダンジョンなのに何故かある街と森そして天井に
ひしめくクリスタルを背景に魔法の練習にかかる。

「セフィロスといたら正宗だが先ずは魔法からだな…」

セフィロスの魔法…代表的なのはメテオとかだが無理だろう。
手っ取り早いのでいったらフレアとかかな？

「うう…」

魔力を手の中で具現化させるも安定せず爆発してしまう。

「げほっ…げほっ…」

爆煙にむせてしまう。上手くないかないのは分かっていたがまさかここまでとは…。

「何をしているんだ？」

ふと影から緑色の髪の毛を生やしたエルフの美女がやって来る。あ、貴方は！

「えと、リヴェリア…さんでしたっけ？」

「ちゃんと自己紹介してなかったな、私の名前はリヴェリア・リヨス・アールヴ。知つての通りロキ・ファミアの所属だ」

「ご丁寧にも、ハチマン・ヒキガヤです。えと、ヘスティア・ファミリアです」

「蒸し返すようで悪いが何をしていた？」

ちよつと言葉が強くなるアールヴさん。ファミリアの為を思っているのだろう、俺が何かしでかすと疑ってるのだろう。

「魔法の練習ですよ、さっきのを見たでしょう？あんまり安定しなくて…」

「魔法の練習？…どういう事だ？」

そうか…俺以外の冒険者は詠唱さえすれば魔法が打てるんだっけか。羨ましい…いや、バリエーションに長ける俺の方が恵まれてるのか…。

「俺の魔法の特性…じゃあダメですか？」

「ふむ、理解はしたが納得はしてない。少し見学させてくれないか？」

腕を組んでコチラを見つめてくるアールヴさん。やはり絵になるなあ…。

「まあ、いいですけど…」

再びフレアの練習に入る。回数を重ねる度になんとか安定していき2時間もすれば8割がた完成はした。

「まだだ…まだ…」

「完成したんじゃないのか？」

「まだ、メガフレアとギガフレアが…」

そう、このフレアという魔法、上位互換があつてその名の通り威力

も上がって行くのだ。そうになると必然的に難易度も上がる。

「まだ時間かかるので戻っても良いですよ？」

「いや、折角の機会だ、最後まで見させてもらおう」

「リヴェリア？」

突然2人だけの空間に第三者の声割って入り何事かとそちらを見たとヴァレンシユタインさんがいた。

「アイズ：どうしてここが」

「テイオネが教えてくれたの、何してるの？」

「魔法の練習…」

そして再びアールヴさんにした説明をする。

「そうなんだ、じゃあ私も見ちゃダメ？」

「え？」「む…」

タイミング被った事にほんの0.2秒位お互いを見つめるがすぐに視線を戻す。目と目が逢うくしゅんくかんく…なんてな。

「まあ、一人増える位平気だが…」

「じゃあ失礼するね…」

アールヴさんの隣にちよこんと座るヴァレンシユタインさん。気を取り直してフレアの完成に取り掛かる為にマジックポーションを飲む。

「さてと…やるか」

何度爆発したか分からない位穴が空いた所にまたフレア（未完成）を飛ばしてく。

「芸術は…爆発だ！」

そして何度目かも分からない爆音が響く。

（待ってろよ…葉山…）

そして再び奴に相見えるのを夢見てまたフレアを飛ばすのであった。

#21 けれど俺も男の子

「ヒキガヤさん、なんで怒られてるか分かりますか？」

「魔法の練習をしたからです…」

「違います、他のファミリアの構成員の前でしたからです」

「どうも、ハチマン・ヒキガヤです。今の状況を説明しますと前回に引き続き魔法の練習をしていたら突然リユースさんがやって来て説教かまされてる所です。いや意味分からん。

「彼ならともかく何故私達も正座されてるのか聞きたいのだが…」

「お黙りなさい、彼が冒険者成り立てなのをいい事に彼の手の内を見ていたのでしょうか」

「そうではない…というのは些かできないな」

確かに俺の新魔法の一端を見たんだ、見てないとはいえないのだろう。

「ハチマンさん…ハチマンさん？」

さてと、ここで問題だ。俺は正座、前方にはリユースさん、必然的に目に入ってしまうのだ…ブルマが。

「は、はいっ!？」

「どうかしたのですか？」

「いや別に…」

「それで、彼女達をどうするのですか？」

「え?別にどうもしませんよ?」

「え?」

素っ頓狂な声を上げるリユースさん、一瞬ドキッとしてしまう、これがギャップ萌えですか…恐ろしいものだ。

「だって許可をしたのは俺ですし…別に見られたからって死ぬような魔法じゃないですし…今は大丈夫ですし…おすし」

「そうでしたか…そこまで考えてるのを露知らず私は…すみませんでした」

そう言いペコリと腰を曲げるリユースさん、しかし俺はこんな時でも彼女のブルマが目に入る。俺は自分の欲すらもコントロール出来な

くなつたのか？理性の化け物どこいった？

ああ…そういえばここに来てから一度も…。どうしよつかなく。

オラリオ

グイツ…

「てえツ！」

ふと終始無言だったヴァレンシユタインさんに耳を引つ張られる。心無しか表情が少しムスツとしている気もする。

「なぜ…？」

「なんか…嫌だったから…」

白い悪魔ですら『わけがわからないよ』とか言い出しそうな理由だが俺のいやらしい目線を察知してくれたのだろう。

「ありがとう、礼に今度じゃが丸くんを作ってやろう」

「!!いいの？」

「食いつくな、嘘つく訳ないだろ…今度会った時作るぞ」

汚い話、口止め料と言うやつに分類されるのだろう、これは。

「そろそろ遅い、我々も戻ろう」

「リユーさんはどうするんですか？」

「私には私のテントがありますので気にしないでください」

まあ、俺たちが別のファミリアのテントに入るのがおかしいのだろう。それにリユーさんにはリユーさんの事情があるのだ、そこは汲み取らなくては…。

「分かりました、それじゃあ気をつけてください」

リユーさんと別れ女gおつと間違えたリヴェリアさんとアイズと野営地に向かつて歩く。あつ、そういえばゲリュオンの能力の確認終わってない…明日やるか。

ー【テント】ー

テントの中に入るといつものメンバー、何故かいる神様に加えあの時助けたファミリアがいた。

「ー申し訳ありませんでした」

俺が来たのを見計らうとそのファミリアの構成員は揃って土下座しだした。フツ…俺の土下座の方が綺麗だな。

そんな下らない事を思っけてもリリルカやヴェルフはそういか

ないのだろう。この人達のせいで死にかけた、それは揺るがない真実だ。怒るのはご最もなのだ。糾弾し裁く権利があるのはこちらだ。「…いくら謝られても、簡単には許せません。リリ達は死にかけたのですから」

いくら出せば許してくれるんだろう…。あつすみません、もうそんな事考えないので睨まないでくださいお願いします。

「まあ、確かにそう割り切れるものじゃないな」

ヴェルフもやるせない顔をしている。仕方ない、ここは俺が一肌：「あれは俺が出した指示だ。そして俺は、今でもあの指示が間違っていたとは思ってない」
脱いで…やるか…。

「…それをよく俺等の前で口にできるな、大男？」

何火にいらぬ油注いじやってんの？この人…ほらみろ、熱くなりやすい鍛冶師のヴェルフが食いついたじやないか！

ちっ…しゃーない。

「まあ、ヴェルフも落ち着け」

「これが落ち着いてられるかよ…！」

握り拳を作り怒りに震えるヴェルフ。

「痛い程分かる、自分を苦しめた奴が目の前にいるんだ、しかもそれを反省しようとしめない。許せないよな…：だったら働いて貰おうぜ？殴る蹴るだけじゃどうにもならない事だつてある。お前の欲しい素材でもたんまり要求したれ、あんたらもそれで良いだろ？」

「…割り切つてはやる。だが、納得はしないからな」

少し強引だが受け入れてくれたヴェルフ。チラリとなんつったつけ…：タケミカツチ・ファミアリアを見る。別に同情とかじゃない、ただ早く寝たいだけなのだ。

「は、はいー」

肩鎧の女性…：確か命つて名前だつて…。その人が元気よく挨拶する、おーハチマンポイント高いぞ。

「いや〜終わった終わった。そっちも上手く纏まったみたいだね」

突然テントに入ってきた見知らぬ神と青髪の眼鏡。それから今後

どうやら安眠は程遠いようだ。

新しい朝が来た。いやね？ヴェルフと一晩中話しててろくに眠れなかつたんよ。途中でベルも参加してきてさ。

『ハチマンの好きな物は？』

『…ミアさんのトマトソース、パスタ、ポルポレのオリーブ抜きピザ、グランドパフェに激甘コーヒー…後は俺の作ったじゃが丸くんver. 5. 5. 5』

『うつ……』

『おいベル嘔吐くなよ？』

『ハチマンは本当に甘いのが好きなんだ…胃もたれするくらい』

『そうなのか』メモメモ…

『メモってどうすんだよ』

てな具合がずっと続いた訳だ。

『てか今日何すんだ？』

『リヴィラの街を見学だつてさ』

『リヴィラの街って冒険者がダンジョンで作った街だっけ？』

そういうのってだいたいヤバい所なんだよなあ…ろくな統治組織とか無いからやりたい放題なんだろうな。

『全員行くってか？』

『ああ、そうなってるハズだ』

やはり隣にいるヴェルフが答える。途中で寝落ちしたベルもデカイ欠伸をしてテントから出てきた。

全員集合した所でリヴィラの街へ向かう。案内はヴァレンシユタインさんとアマゾネスの姉妹だ。他にはヘルメスっていう何故か見ると無性に腹立つ神様にその付き添いのアスファイって人もいた。

歩いてると森だけの景色は変わり綺麗な草木が生い茂っている。川はせせらぎ鳥のようなモンスターは飛び立つ。天井のクリスタルと奥くに見える壁を除けばまんま田舎の風景だ。そして偶に移植されたのか桜が見られる。

「おお、桜か…懐かしい」

すよ!

「ちつ、小汚ねえ…更地にしてやろうか…」

「ハチマン!?発想がテロリストのそれだよ…!」

「悪いな、食われる前に食う主義なんだよ、俺は」

アスフイさんから詳しく話を聞いてもやってる事は相場の倍以上の値段で売りつけたりとか買取金額は極力安くしたりとやりたい放題らしい。『安く仕入れて高く売る』聞こえはいいがやってる事は転売屋のそれだ。チツ…マジで腹が立つ。

そんなこんなでリヴィラの街へと入ってくがやはりモンスターにも襲撃されるらしく設けられてるのは即席の小屋が殆どだった。

「バックパックが2万ヴアリスだなんて…法外もいいところですよ!」

「砥石がこの値段はありえねえ…」

色々と大変そうだ。

「ハチマンは何か買いたいものはある?」

「別に何も…」

ドンツ…

よそ見していたのかベルが冒険者とぶつかってしまふ。ちゃんと前見て歩けよな。

「ああん?」

「あ…す、すいません!」

その相手はいかつい体つきに額や頬に傷のある強面の男だった。

「てめえ、まさか…!」

「間違いねえ!モルド、こいつ、あの酒場の時のガキだ!」

思い出した、この前【豊饒の女主人】で開かれた昇格祝いをぶち壊した奴だ。ベルが驚いているとモルドと呼ばれた冒険者は怒りに顔を歪める。

「何でてめえがここに…」

ベルに掴みかかるが俺が視界に入るなり急にぴたりと動きを止めた。そして目は横に動き近くにいるヴァレンシユタインさんにも止まる。

「剣姫もいるのか…チイツ…行くぞ!」

勝手に因縁をつけてくる奴程面倒くさいのではない。今のうち消すのも…やめとこう。

それから少し休憩しようという事になり街の広場に移動する。手摺の向こうは崖下で、遙か下に広がる湖に一直線だ。周りから孤立して手摺に手を付き『ダンジョンサンド』なる激甘パンを齧りながらコイン投げをして遊んでるハチマンに近づく。定期的に「最高10秒か…」とか言ってるけどどうしたんだろう。

「ハチマンは何してるの?」

「ん? 実験だ」

「新しい魔法?」

「ああ、お前達を探してる時邪魔が入ってな。殺して奪った能力だ」

表情に影を落としながら語るハチマン。何か後ろめたい事があるのだろうか。

「大丈夫? よかったら力になるよ」

「いや、いいんだ。俺の問題だし、俺しか解決できない」

「そっか…いつでも相談してよ?」

「ああ、そうさせてもらう」

コインをピンと高くにあげてそれをキャッチする。

そういえば俺は一度も風呂に入っていないのでは? そう気付いたのはゲリユオンから強奪した時止めの能力をある程度コントロールできるようになった時だった。周りを見れば誰もいなかった。

そういえば女性陣はゾロゾロとどっか行ってたな…。ベルもふらふらとどっか行つたし…。

「水辺を探さなくちゃ始まんねーな…」

街から離れ水辺を探しているといい所を見つけた。ちよつとした崖の上に流れてる川だ。まずは景色を堪能するために崖っぷちに立って目の前に広がる光景を堪能する。緑の森、綺麗なクリスタル、木に登ろうとしてるベルと神ヘルメス…ん?

「何やってんだ?... あいつら」

目指してると思われる場所を目で追うと俺の真下の滝面で止まった。

「はあッ……!？」

そこを一言で表すとするならば『楽園』以外の言葉は見つからないだろう。そこらのギャルゲーですら白目むくレベルの美人達が水浴びをしていた。黒髪、金髪、青髪の属性の詰め合わせ：夢いっぱいなおっp：ゲフンゲフン。目を逸らさなければと思いつながら俺は5秒位その絶景を目に焼き付けてしまった。

「それにしてもあいつら…覗きか？」

容易く想像できる。あの心底腹立つ雰囲気纏う神ヘルメスに誑かされたベルがホイホイ付いてってしまったのだろう、おいたわしや…。

「気に食わん…」

ベルよ、覗きなんてイケナイことしちやあいけませんよ!!

「止めさせるか…!」

作戦は一瞬で出来上がった。後は実行するだけだ。

「ご禁制だぜ、クソメス、ベル：The World!!」

刹那、時は鼓動を止めた。せせらぐ水は静止し、飛び立つ鳥は有り得ない止まり方をした。

10…9…8

一気にベル達に向かって飛び一瞬でその距離を縮める。

「喰らえ…ハチマンパンチ！」

腹のムカムカへの特効薬としてヘルメスに適当な布で目隠しをしてから一発ぶん殴り女性冒険者に見られやすい位置に投げ捨てる。

7…6…5…

その後ベルを担ぎそこから見通しのいい少し離れた場所に飛んでく。

4…3…2…

そして予め用意した紙を髪の上に置く。

『覗き ダメ 絶対！』

1…

その場を離れる。

「そして時は動き出す」

0…

「うぼああああ!!」

「何この声!?!」「ヘルメス様…あなただって神は…!」「またかい…ヘルメス」「さつき、ざわーるどって…」「アイズどうしたのー?」「不埒ですね…神ヘルメスは」「うん…」

後は女性陣がやってくれるだろう…。やはり時間を止めるにしても魔力は消費するんだな…。動くまくったからクタクタだよ…ぼかあ。

新たな水浴び場を探すべく森の中をフラフラと歩く。

サラサラ…

水の音がする。今度こそと藁にすがる思いで音のした方へ茂みを掻き分けながら向かう。

(今度こそさつきぱりするんだ…!)

千葉が誇る健康優良児として風呂を欠かしてはいけないのだ。川も近づいてきた事もあり既に赤いコートは脱いである。後はインナーとズボンを脱ぐだけだ。

「―何者だ!」

鋭い一声と共に近くの気にナイフが投擲される。

ぐすん…

「ヒキガヤさん…何故ここに」

何故…こんな残酷な事が起こるのだろうか…。

目の前で胸を腕で隠しながらこちらを見つめてくるリユースさん。さっきの出来事がなければ俺は鼻血を出して倒れていただろう。

速やかにその光景を目に焼き付けた後俺は静かに後ろを向き背中を向けながらこれまでの経緯を（一部抜粋して）説明する。

「なるほど、搜索と鍛錬の疲れが重なり水浴び場を求めていたら私と出くわしたと…」

「まあ、そんな感じですよ…」

「そうですか…ではヒキガヤさん…」

「え、マジですか？」

リユースさん、酔ってます？

彼女の口から零れた言葉はいつもの彼女からは想像できないような内容だった。

#22 美談

そこは墓場だった。アラストルの管理するような墓ではなく、ダクソとかそんなのでよく見られる剣が槍が突き刺さり木の一部を紐で結ばれた簡素な十字の墓がいくつも並んでいた。

「…彼女達に花を手向けるために、時折ミア母さんから暇をもらっています」

十以上ある墓の一つ一つに手に持っていた花を丁寧添えていく。そしてポーチに入っていた瓶、恐らくお酒だろう。それを特定の墓に順番に飲ませていった。

「これは…」

「私が所属していた、『ファミリア』の仲間達の墓です」

「!!」

静かにこちらを見つめてくるその空色の瞳に、一瞬吸い込まれそうになる。

「私の素性を知る者が現れたなら、いずれ貴方にも知れるでしょう。」

…自らの口で話せなかったことを、後悔したくない」

身勝手にすが聞いてもらえますか、と。その尋ねに俺は頷く。

「私は、ギルドのブラックリストに載っています」

「……」

「冒険者の地位も既に剥奪されています…一時期は賞金も懸けられていました」

顔を隠し、他人に正体を悟られないように俺達と別行動を取っていたのは…それが理由だったのだろう。

「私が所属していた派閥は『アストレア・ファミリア』…正義と秩序を司る女神アストレア様のもとで、当時の私は少なからず名を馳せていました。私達のファミリアは迷宮探索以外にも、都市の平和を乱す者を取り締まっていました。その分、敵対する者も多くいた。ある日、敵対していたファミリアにダンジョンで罠に嵌められ、私以外の団員は全滅…遺体を回収することもできず、当時の私はこの18階層に仲間達の遺品を埋めました」

「それが、この墓ですか…」

「はい。彼女達はこの階層が好きだった」

自分達が死んだらここに埋めてくれと、冗談を交わしていた、と。当時の事を思い出しているのか、リユーさんは唇を曲げ、目を伏せがちにする。

「…生き残った私は、アストレア様に全てを伝え、そしてこの都市からお一人で去ってほしいと頭を下げました。何度も懇願する私に、あの方も受け入れてくれた」

「神様を都市から逃がす為ですか？」

「いや、違う」

もっと自分本位で、浅ましい動機だとリユーさんは頑なに否定する。

「激情の言いなりになる醜い私の姿を、あの方に見てほしくなかった。仲間を失った私怨から、私は仇である「ファミリア」に一人で仇討ちをしました」

「一人で…」

「あれはもう正義ですらなかった。復讐に突き動かされた私は、彼の組織に与する者、関係を持った者…疑わしき者全てに襲いかかりました」

「その後は…」

「力尽きました。全ての者に報復した後、誰もいない、暗い路地で」
死ぬ覚悟だったのだろうか。復讐をやり遂げ、主神も、仲間も失った彼女を生に繋ぎ止めるものは、既になかったのだから。

「血に濡れて、汚泥にまみれ…愚かな行いをした者には、相応しい末路だった」

「…」

「けれど…」

「大丈夫？、シルさんの温かい手が彼女の冷えきった手を取った。彼女のベルにしているようなお節介があった為に彼女は生の道へと戻れたのだろう。」

「私を助けたシルは、ミア母さんに頼み込んで、『豊饒の女主人』の一

員として迎えてくれました。…地毛も、強引に染められてしまいました
たが」

優しい声音で、リユーさんは現在のの自分に至るまでの話を締めく
くった。

「…耳を汚す話を聞かせてしまつてすみません」

「そんな事…」

「詰まるところ、私は恥知らずで、横暴なエルフということですよ…ヒキ
ガヤさんの信用を裏切ってしまうほどの」

自嘲に似た言葉を発するリユーさん。

「何処がですか？」

「え？」

空色の目が大きく開かれる。

「仲間の為に復讐に燃える事の何が悪いんですか？指名手配されたの
は癒着してたギルド職員が悪いんだし、そもそもの復讐の引き金は対
立ファミリアなんですし。恥知らず？ちゃんと働いてるじゃないで
すか、横暴？そんな場面見た事ありませんよ。それに信用つて言いま
したか？俺の方が裏切ってるんですから大丈夫ですよ。だから、自分
を貶さないでください。それは俺の十八番なんですから…キャラ被
りしますよ…」

ついオタク特有の早口でまくし立ててしまったが言いたいことは
ちゃんと言えた。余りにも長く喋った為に終わるや否や肩で息をし
て急いで酸素を取り込む。

そんな俺の自分本位な意見をぶつけられた彼女はポカンと見た事
ないような顔をしている。そして一瞬だけ微笑むと俺に語りかけて
きた。

「そうですか…ふふっキャラ被りですか、それではいけませんね。私
も辞めます、ですのでヒキガヤさんも自嘲はお止めください」

こちらに歩み寄り自然と俺を見上げる。やめてください、そんな目
で見ないでください溶けてしまいます。

「善処致しかねます」

目を逸らしそれしか言えなかった。やはり彼女は眩しすぎる。

「そこは素直にハイと言ってください…」

俺の手袋を掴みながら俯いて言う事じゃないと思うんですけど。

「無理ですよ…俺には、誰かに語れるような美談なんてないんですから…」「振りほどかないんですね」…え？」

「拒否をしていながら私の手を振りほどかないのですか？」

何を言ってるんだ？この人は？

「手を差し伸べられっ放しの私が貴方に手を差し伸べる事ができました。こんなの初めてなんですよ？見目麗しいと言われるエルフに手を取られたんですからこれも立派な美談になるでしょう」

顔を少し赤くしながら暴論で殴ってくるリユーさんに思考が追いつかない。

「だから自嘲なんてやめて一生それを語っていけと？」

「はい、次の美談が出来るまでそれをずっと語ってゆきなさい。ああ…でも時折思い出してください。いずれ美談に埋もれるであろうヒキガヤさんが最初に語ったのは美人なエルフに手を取られたって事を…」

先程とは違い俺の嫌いなトマトのように赤くなりながら愚策を提案するリユーさん。

「いかがですか？」

たればが大嫌いな俺がここまで思ってしまったんだ。これ程願ったことは無い…今すぐ消しゴムみたいに嫌過な事去を消せたら笑いながら頷けるだろうな、と。

「まあ、第一候補位には入れときます…」

そんな言葉しか返せない不甲斐ない自分に嫌悪感が湧いてくる。きつと過去を精算できたら胸を張ってそんな事も豪語できる日が来るのだろうか…今はまだ分からない。あつちに戻る機会なんてもう二度と無いのかもしれない。そうしたらこの過去はどうすればいいのだろうか。

「神様、聞きたい事があるんですけど少し良いですか？」

「ハチマン君、どうしたんだい？」

夜、神様と話をなるべく少しテントから離れた場所に移動する。

「珍しいじゃないか、君から話なんて。よーし！なんでも答えてあげるよー！」

胸に拳をトンと当ててバルンと揺れる胸に一瞥する。ん？今何でもって…。まあいい、本題に入ろう。

「武器って強くなればなるほど高価になりますよね？」

「そうだね、ヘファイストスの店で働いてるからよく分かるよ。ボク達じゃ手に届かない値段をしていたよ」

「武器に特殊効果とか付いてると更に高くなりますよね？」

「…そうだね、ヘファイストスも強いのは良いけど売れ行きが怪しいってボヤいてたよ」

「オーダーメイドの武器ってバカみたいな値段、してますよね？」

「その子オンリーワンの武器だからね、仕方ないよね」

「じゃあ最後に…ベルのヘステイアナイフ、幾らしたんですか？」

「君のような勘のいいガキは嫌いだよ」

そう言い告げるとダツシユで逃げようとするがステイタスを授かった俺は魔力で結界を作り逃げ道を塞ぐ。

「さあ、答えてください…手荒な真似はしたくない」

「ぐぬぬぬぬ…おおく…」

「へ？」

「におく…」

「なんですって？」

「2億ヴァリス…」

「におっ…！」

バタン

「ハチマン君!?ハチマン君!ハチマンくーんーん!!」

デンデンツデ デンデン デンデンデン!

GAME OVER

目を覚ますとそこはテントだった。直ぐに起き上がり神様に文句を言うべくテントを出る。2億って…一生で返せる金額じゃねえよ。

「おつ、ハチマン起きたか」

「すまん…」

ダンジョンの天井を見上げるとクリスタルは朝のような光を発していた。まあ、朝なんだろうな。

「ベルとヘステイア様を探してきてくれないか？そろそろロキ・ファミリアが発射するから装備の整備もしたいしな」

「分かった」

どうせ神様がベルといえるのだろうかと思ひ神様のテントに向かう。暖簾を潜るとそこには異変しかなかった。

「なんだこりゃ…」

ナアーザさんから貰ったポーションが散乱している。いくらだしらない神様でもこんなヘマはしない…筈だ。

「？」

ふと地面に落ちている巻物に視線が吸い込まれる。手に取って読んでみる。

『…リトルルーキー。女神は預かった。無事に返してほしかったら一人で中央樹の真東、一本水晶まで来い』

「汚え、のみ以下の根性してやがる。『殺しに来て』にしか見えねえな…」

すぐにテントを出てヴェルフ達に事情を説明すると一緒に行く事になったが神様を探させてからベルの方へ向かう事になった。

「モルド！」

アスファイから貰った『ハデス・ヘッド』を用い姿を晦ましベルを一方的に黽っているモルドに仲間からの報告が入った。

「なんだあ!?!どうかしたのかよー!」

「【亡影】がかちこんで来やがった!」

「なにイ!?!」

思わず仲間の方に振り返るとモルドは仲間の異変に気付いた。仲間の表情には焦りともう一つ、混乱が見えた。

「何か…あったのかよ…」

「それが…」

仲間の視線は後ろの方にやられら、モルドやベルを取り囲んでた冒険者達がモルドに見えやすいように道を空けると一つの影がそちらに近付いていた。

「ハチ…マン?」

赤いコートを風に揺らしながら近付いて来るハチマンの顔には怒りや憎しみといった表情は何一つなかった。無表情に添えられた一筋の水跡がベルやモルド、そして取り巻き達に何か違う事を察しさせた。

「ハチマン、泣いてるの?」

「…厳密に言うと言いたくなる」

「はっ! 亡影のおぼっちゃん泣き虫だったのかよお?」

その一言で取り巻きの冒険者達ははっとすると急に笑い出す。そう、いくらおっかない顔をしてたって所詮はレベルアップしたばかりの新人。負ける訳が無いと取り巻き達は笑う事によって自らを鼓舞するのだった。

「デメエら! 俺だけ楽しむのも悪いだろ! お前らが亡影を殺っちゃえ!!」

「!!!」

武器を構えハチマンに滲み寄って来る。

「ハチマン!」

「安心しろ、なあに、殺しはしない」

「はっ! 言うなあ! 殺されるのはお前なんだよ!」

先頭にいた一人が襲いかかってくるがそれを最低限の動きで躲し腹にベオウルフでカウンターを撃ち込む。

「がはあっ!!」

そのまま首根っこを掴み地面に叩きつけ片足でグリグリと顔を踏み蹴る。

「いつから自分達が狩る側だと勘違いしてたんだ? 年上だからって付け上がるなよ…弱く見えるぞ」

ハチマンのその目は期待に裏切られた失望の念と哀れみの感情を

孕んでいた。

「ふざけるなあ!!」

震える手でハチマンに殴りかかるがハチマンの拳にその威力を殺され弾き飛ばされる。

「全然足りねえ!!」

「あそこか!」

ヴェルフ達はヘステイアの保護を終えハチマンやベルに加勢しようとして途中で合流したりユーと敵陣へ向かう。

「ぎゃああああ!!」

「ひいいひいいひい!」

しかし冒険者達はヴェルフ達に見向きもせずに向こうの方向を見ている。大量にいる冒険者は虫けらのように鈍い音を立てながら吹き飛ばされ自分は逃げようと試みる者もいるようだ。よく見ると慣れた紫の巨大な腕が冒険者達を掴んでは投げたり武器のように振り回して追衝突させ双方にダメージを与えたりしている。奥にはベルが何かと戦っているのが見える。

「あの荒々しい戦い方は…」

「間違いねえ、ハチマンだ」

それなりに近くで彼の戦い方を見て来たヴェルフとりりは即座にその正体がハチマンだと見抜いた。

「あれが亡影…」

「普段の物言いからは想像できません…」

タケミカツチファミアリアは戦慄していた。あそこまで容赦のない戦いがあったていいのかと。

「うおおおおおおお!!」

轟音と共に現れた白い半円の光が冒険者達を飲み込む。ベオウルフの特殊能力『ヴォルケイノ』だ。戦いを重ねる毎にハチマンは力だけに及ばず魔具の使い方も上達していく。まるで嘗て自分が使っていたかのように…。

「やめろ…君達はそんな子じゃない筈だ…」

ヘステイアが前に出る。わなわなと震えながらハチマンの元に向かう。それでも冒険者達が打ちのめされるのは終わらずハチマンはとことん冒険者達を痛めつけてる。

「やめろー！ー！」

グシヤ：

「あああああああああ!!」

それでも戦うのを止めない二人。

「ー止めるんだ」

威圧感を含んだ言葉が戦場を飲み込んだ。そこには神威を解放したヘステイアが立っていた。

#23 悪魔と讃歌

「ひ、ひいいいいー」

先に動いたのはモルドだった、兜を脱ぎ捨て脱兎のごとく情けなく走り去る。

「徒党を組まなきゃ強く吠えれないのか…アンタは」

脱ぎ捨てられた兜を拾いながら呆れるように愚痴を零すように呟く。思い出す、徒党を組まなきゃ強く吠えれないあの女を…。

「ハチマン、それどうするの?」

「後で色々とな…」

ベルの質問をあやふやにしながらピンチに駆けつけた各々と言葉を交わしながら一同は肩の力を抜いた。

そして、「ともかくこれで」と神様がそう言いかけようとした…まさにその時だった。

「えっー?」

足場が揺れる。いや、階層全体が揺らめいている。

「じ、地震?」

「いえ、これは…」

「ダンジョンが、震えてるのか?」

千草、命、桜花が足元を見下ろしながらうろたえた。揺れは段々大きくなり、周囲の木々を揺らす程に大きくなった。

「これは…嫌な揺れだ」

リコーさんがそう口にすると同時に階層は揺れたまま周囲がふつと暗くなった。天井の水晶に不穏な影が見える。

「……」

チラリと叩きのめした冒険者達を見るときもぬけの殻となっていた。俺達がよそ見してる間に逃げたのだろう。タフな奴らだ、そこだけが評価点だな。

そしてーバキリとその時が来たと知らせる音がする。

「亀裂…!? モンスター!?!」

「ありえませんが、ここは安全階層です!?!」

「イレギュラーってやつだな…」

いつでもこんなイレギュラーに付き纏われるな…俺達は。そう思うと少し笑えてくる。きつと強がりの笑いなのだろう。

天井の水晶を突き破って落ちてきたそのモンスターは余りにもデカすぎる産声をあげた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

黒い体皮に覆われたその巨体は色こそ違えど見覚えがあった。

「ゴライアス…」

着地したゴライアスの近くにあのモルド一派がいた。しかもぼつちり目と目が合っている。好きだと気付いた?…なわけないか。

「行くか…」

「うん!」

ベルと並びゴライアスを見据える。あの時を思い出す。二人で誓ったあの時よりは強くなれたのだろうか…。

「待ちなさい」

リユースさんが立ち塞がり睨み付けるように見据えてくる。

「本当に、彼等を助けにいくつもりですか?このパーティーで?」

それはいつそ無情とも言えるほど冷徹で、かつ至極当然な問いかけだった。それもそうか、俺達は頭数だけの弱小パーティー。推定レベル4か5のゴライアスとの力量は言うまでもない。

瞠目し固まったベル、しかしそんな迷いも一瞬で振り切られる。

「助けましょう」

「貴方はパーティーのリーダー失格だ」

リユースさんの非難の言葉と眼差しがベルに向けられる。その痛みに打ちのめされそうなベル。

「でも、間違っちゃいない」

「だが、間違っていない」

俺とリユースさんで似たようなセリフを吐いてしまいが別に構わない。目先の事にすぐ飛びつくのがベル・クラネルだ。

「ま、お前にマトモな采配なんてこれっぽっちも期待しちやいないからな」

「ハ、ハチマン!？」

「お前はお前のやりたい事をやれ、きつとそれは悪くない事なんだからな。俺は気さえ向けば手伝うからよ」

「ハチマン…」

「教えろ、何をすればいい?」

「あの人達を助けて、ゴライアスを倒す」

「分かった、話は聞いてたな、お前んとこの墓石が増えない内にさつきと回収してこい、アラル」

俺達のすぐ横に小さい落雷が落ちたかと思えば久しぶりに見たその男は怠そうに笑いながらこちらを見ていた。

「相変わらず人使いが荒いな…」

「頼んだぞ…アラル」

「任されたさ」

再び雷と共に姿を消したアラルを見届け後ろを振り向く。そこにはリリルカが、ヴェルフが、命が、桜花が、千草が、ヘステイアが、リユーさんが、そしてベルが。

誰もが微笑みながら頷いた。

ベルは叫んだ。

「行くうー!」

俺達は新たな戦場へと身を投じるのであった。

「スコット、ガイル、どこだ!?!助けろっ、助けてくれえええっ!?!」

情けなく悲鳴を上げるモルドは半狂乱に陥っていた。

マッドビートル、バグベアー、ガンリベルラ、ミノタウロス…あらゆる種類の中層のモンスターが周囲からとめどなく押し寄せ、牙を、爪を、角を、モルドに振るう。何とか両手剣で反撃するがこれといったダメージは入ってない。

『ガアアアアア!!』

「ぐおっ!?!」

バグベアーの薙ぎ払いで防具が切り裂かれ剣も弾かれてしまった。3頭のバグベアーがあっさりと接近しモルドを見下ろしてる。牙を

むき出しにしながら彼へ覆いかぶさろうとした。

「死ね……」

突如紫の光が見えたかと思っただらバグベアー達の体に無数の蒼い切り傷が付き爆散した先に紅いコートが見える。モルドの前に庇うように立ちモンスターに銀色の弾丸を撃ち込みながら牽制している。

「…なんで、てめえ…」

波のように押し寄せてくるモンスター達に紫の光を体に纏いながら突進していく。

突然がしつ、襟首を何者かに掴まれた。

「ハチマン様のお邪魔になるので運んじやいますよ!」

「いつ、ででででででででででええっ!?だ、誰だっ、ケツがああああああ!」

大型のバックパックを背負ったパルウムの少女に引き摺られながら運搬されていくなかモルドの目にはハチマンの姿が映っていた。

手を変え品を変えながらモンスターに引くことなく戦う姿がとんでもなく遠く見えた。普通ならビビるような攻撃を表情一つ変えずに躲しながら的確にカウンターを刻んでいく。ベテラン(自称)冒険者のモルドには異次元の存在にしか見えなかった。

「……まで差が開くなんて…」

「ハチマン様はずっとお一人で努力してきましたからねっ!」

両目を瞑り、べっ、と舌を出す彼女はモルドを安全圏まで運ぶと再び戦場へと足を向けて言った。

時間停止能力『クイックシルバー』、能力バフの『トリガー』他にも『魔腕』や『幻影剣』を駆使してゴライアスの呼んだモンスターを狩っている。勿論付き纏うのは魔力切れである。

何が言いたいかというと、

「ほら、亡影、頼まれたポーションとマジックポーションだ」

「うす、あざす…」

名前も知らない冒険者にポーションを浴びせてもらいながらマジックポーションをガブ飲みしていた。

「ひどい切り傷だな…モンスターじゃないな？」

「ええ、木の中とか突っ切ってたら枝とかに引っかかって…」

「お陰様でこつちもあのデカブツに集中できてる、感謝だな」

「こんな状況だ、お互い様でしょ…」

もう大丈夫です、と言い立ち上がる。そこに眼帯をした大男がやって来る。

「おう、【リトル・ルーキー】！【亡影】！お前ら、そんな装備で大丈夫か!？」

「大剣をつ、一番良いのをお願いします！」

「大丈夫だ、問題ない」

ベルは大剣を受け取り、俺はベオウルフを出して8番目に仕掛ける【08小隊】と一緒にゴライアスへと驀進する。なんか、嵐の中でも輝けそうな気がするな。

大地を抉りベルと先陣を切り進む。後ろの冒険者達はというと。

「いくぜいくぜいくぜー！」とか

「キバっていくぜ！」とか

「戦場キターー!!」と意気込んでとても頼りがいがある。

『ーアアツ!!』

そんなやる気もゴライアスの口から発せられた波動弾のような咆哮がすぐ横3mに着弾する。

「逃げろー！」

「戦略的撤退!!」

「逃げるは恥だが役に立つウー！」

前言撤回、そんなこと無かった。勇敢な戦士達はルーキーじゃ到底かないっこない危険察知能力で戦線を離脱した。畜生、今度危険察知用リーダーにしてやる、地雷探知犬みたいに。

ゴライアスの赤い目が俺達を見据えるや否やそのバカでかい拳が迫る。

マズイ、あれはベルで捌ける攻撃じゃない。

「全力ゼンカイで打ち破れよ！ベオウルフ！」

嬉しそうにいつもより眩しく光るベオウルフの拳をゴライアスの

拳へと向ける。拳が触れた瞬間凄まじい衝撃波が辺りに走る。

「今だ行け！」

「うん！」

ゴライアスの顔に攻撃をかます為腕に飛び移り走るベル。やはりその巨体の為拳の威力も凄まじく右腕が痺れる、もしかしたらヒビが入ったかもしれない。押し負けてる、そんな現状が嫌でどうしても踏ん張ってしまう。負けたくない、そんな感情が理性を抑えて下らない意地となりこんな意味もない張り合いに発展している。

ズザザザ：

「トリガー」を使っても押される状況に変わりはない。「クイツクシルバー」を使つて離脱を試みようとする理性の叫びを無視しても足りない。

ガキン：

『アアアアアッ!!』

「ハチマンさん！」

ベルの攻撃が弾かれた音と痺れを切らしたのだろうゴライアスの怒号と誰かの警告の声と共に俺の体は木を薙ぎ倒しながら数十メートルは吹き飛んだ。

「ッ!!」

疲労が祟り閉じたくももない瞼が意識と共に落ちてく。指一本動かす事も叶わない、声一つ出せない。全く、情けないな…。

いつもの夢の中、でかい扉に俺しかいない筈なのに目の前には俺がいた。髪は全て白銀に染まり肌は血が抜かれたような白で目は金色だった。

「こうして会うのは初めてだな」

「アンタは…誰だ？」

「俺は…お前だ、よく見るだろ？こういう展開」

「潜在意識的なアレの事か？」

「まあそんな所だ、面倒な思考は抜きにして少し語り合おうぜ？」

「一つ聞いていいか？」

「いいだろう」

「なんで嘘をつく？」

「ほう、その心は？」

「潜在意識的なモノならばこんな夢を見始めた頃から出てきてもおかしくないはずだ、こんな忙しい時に出てくるのだろうか？ 思っ
な」

「やっぱタイミング間違えたか…そうだ、俺はお前の潜在意識的なモノではない。それはお前の意識であって俺ではない、俺はお前の力の源、魂の具現化といった所だ」

「魂、力…」

「そろそろ俺も質問したい。お前に『生きる意味』を問いたくてな」

「俺の生きる意味…」

「……………」

「俺は……………」

「それがお前の意味か？」

「下らないか？」

「いや、意外だ、目立ちたがらないお前がそんな意味を持つなんてな。いいんじゃないか？ 応援するさ」

「あ、ありがとう…」

「つと…そろそろ時間か。悪いな、時間取らせて」

「本音語ったんだ、悪い気はしない。」

俺じゃない俺に背を向けて歩き出す。

「エヴァとアラストル、会えたらマキャヴェリに宜しく言っ
れよな！」

そう叫んだ紫の悪魔は声を大にした後に扉の中に入ってく。

リン…リン…

鈴の音が聴こえる。少し耳障りだ。

ゴオン…ゴオン…ゴオン！

鈴の音はやがてグラントベルの音に成り代わる。マジでうるさい。
「んあッ!？」

重い体を起こし辺りを見渡すとそこにはニヤニヤと暗黒微笑を浮かべるアラストールがいた。

「いい夢見れたか?」

「まあな、どのくらい寝てた?」

「ざっと30分、兎の小僧もさつき起きてなんかチャージしてたぞ」

「そうか…」

体に刺さった枝とかを抜きながら答える。アドレナリンがドバドバに分泌されているからなのかあんまり痛みは感じない。

「お前がわざわざ出しやばらなくても勝てるぞ」

ヘラヘラと笑いながら辛辣に語るアラストール。

「休みたいけどな、行くさ」

「その心は?」

「俺だけサボってるその後が怖いからな」

そしてなにより、置いてけぼりはゴメンなんぞな。

「そうか、じゃあこれに着替えてけ。その格好じゃ致命傷だったってバレるしな」

ポンと手渡されたのはいつもアラストールが使ってる剣だ。

「いいのか?」

「貸すだけだからな、ちゃんと返しに来いよ?俺は知り合いを迎えに行くから先に帰らせてもらうぜ。後でお前にも紹介してやるよ」

手をヒラヒラさせて俺に背を向けて歩いて行くアラストール。

「アラストール!」

「ん?」

「俺が宜しく言ってたぞ」

文から可笑しいが言わなきゃいけないという謎の使命感に駆られその言葉のまま伝える。少し恥ずかしい。

「おk、後で病院行ってこいよ」

雷光の如く消えてくアラストールを視界の隅に追いやリベルの元へ向かう。一応ベルの音で位置は分かるが問題なのはゴライアスが進路の間に

居る事だ。迂回するのもアリだが…。

「瘡に触るな…」

モンスターに道を譲るのが何となく腹立つ。

「やってやるか！ Take your time！」

「クイックシルバー」と「トリガー」を発動させゴライアスの元の首まで接近してアラストールを構える

「足止めはさせて貰う！」

魔力を込めた一閃を横に薙る。そしてそのまま頭を踏み台にして一点だけ光ってる場所に飛んでく。なんだろう、移動速度とかがめちゃくちゃ上がってる気がする。アラストールのお陰か？

着地した瞬間「クイックシルバー」を解除する。

「うわあ!!」

近くにいた神様が驚いて尻もちを着く。

「ハハハハチマン君?! 一体どこから」

「そんな事は良いんですよ、ベルは行けそうですか?」

「まだ時間はかかりそうだ、念の為ハチマン君もベル君と行ってくれるかい?」

「時間稼いだ方が建設的な気がするんですけど」

すると微笑みながら神様は首を横に振る。

「ううん、君とハチマン君が行って勝つんだよ。それまでの時間は皆が稼いでくれる、君も力を蓄え給え」

「…分かりました」

ゴライアスが落ちた首の代わりに再生してるのを視界の中央に見据えながらベルの左隣で力を溜める。フォースエツジに蓄えられる紫の魔力はやがて黒くなり黒い魔力は体にも広がっていく。

ヘスティアは二人の子どもの背眷属中を眺めていた。一人は恋焦がれる程白い光を纏う男の子。そしてもう一人は心臓を握られているような感覚を覚えるような黒を纏う男の子。互いに色こそ違えどどちらも優しさを兼ね備えたかけがえのない家族だ。

ヴェルフ君もリルカ君もエルフ君も…皆が君達を待っている。

「君達はよくやってるよ…流石、ボクの子供だよ。胸を張ってくれた

#24　そしてボツチは足を踏み入れる

―焔蜂亭―

「え!?リリ【ソーマ・ファミリア】辞めれたの!？」

「はい!ソーマ様も二つ返事で許可をして下さったのでもう大丈夫だと思えます!」

ヴェルフのランクアップを祝した祝賀会にてリリルカの意外な報告を聞いたベルは驚いていた。ソーマか…最近アイツどうしてるんだろう。

「なあ、ソーマは何してたんだ？」

「ポエムを読み耽ってましたよ?あつ、ハチマン様に宜しく伝えるよう仰ってました。お二人つてどういった関係ですか？」

「別に?ちよつと一緒と話したただけだが…」

俺とソーマの意外な関係にもヴェルフとベルは驚く。君達、俺に知り合いがいて悪い?少しならいるからね?少しなら…。

「その話題は置いといて、今日は何しに来たんだ？」

そう言うトベルとリリ、そして俺はヴェルフに向き直る。照れ臭そうに頭を掻くヴェルフ。

「ランクアップおめでとう、ヴェルフ!」

「これで晴れて上級鍛冶師、ですね」

「おめつとさん」

今まで見たことないような表情で嬉しさを噛み締めるヴェルフ。何故だろう、見てるこつちも少しだけ嬉しいという感情が湧いてくる。

そこからは色々と話合った。ヘファイストスさんのロゴの事とか、この前の黒いゴライアスについての意見交換とかをした。ゴキユゴキユと酒を飲みながら。いけるな…。

「ベル様も、先日的事件で随分株が上がったことだと思えます。少なくともあの階層主攻略に参加した冒険者達には、認めてもらったのではないのでしょうか？」

「う、うん…」

実際の所色々とお誘いはあった。飲みに行かないかとか、ウチのファミリアに入らないかとか、まあ、丁重にお断りさせてもらったがな。

「ー何だ何だ、どこぞの兎が一丁前に有名になったなんて聞こえてくるぞー！」

ま、こういう展開になるのはあながち予想はできてたんだがな。酒に口を付けながらジロリと目線だけに移すとパルウムの冒険者が杯を片手に叫んでいる。

「ルーキーは怖いものなしでいいご身分だなあ！世界最速兎といい、嘘もインチキもやりたい放題だ、オイラは恥ずかしくて真似できねえよー！」

「すみませーん、トマトソースパスタ追加、あつ、大盛りでお願いしまーす」

ウエイトレスさんに追加の注文をする。

「っ…オイラ、知ってるぜ！『兎』は他派閥の連中とつるんでるんだ！売れない下っ端鍛冶師にガキのサポーター、第一印象最悪のクソダサコートの剣士！とんだ凸凹パーティだ！」

ガタツ

ベルが立ち上がりそうになるのを両隣のヴェルフとリリが抑える。クソダサコートって…。

「落ち着け、ベル」

「ああいうのは無視が安定です」

ヌギヌギ

「よせハチマン！お前のコートはカツコイイぞ！悔しいがヘファイストス様のお墨付きだ！」

「リリも素敵だと思えますよ！ソーマ様も絶賛してましたよ！」

「大丈夫だよハチマン！ものすごくかっこいいから！僕も欲しいなー！」

何故か必死にカバーしてくれる仲間達。ううっ、ありがとう…。それにしてもアイツには少しカチンと来たぞ。

俺達の断固たる無視の意思にクソガキはチツ！とバカでかい舌打

ちをした。土手っ腹に弾ぶち込んでやろうか？あ？

「威厳も尊厳もない女神が率いるファミリアなんてたかが知れているだろうな！きつと主神が落ちこぼれだから、眷属も腰抜けなんだろうな！」

プチッ…

「取り消せ!!」

ベルの怒りが頂点に達したのか珍しく怒鳴り散らす。ヒュー、きつと神様が見てたら泣いて喜ぶんじやない？もうさっさと付き合っちゃまえよ。

「ず、凶星かよっ。あんなチビの女神が主神で恥ずかしくないんだらう？」

「ーッ!!」

そろそろ我慢の限界だ。やっすい挑発だが最近虫の居所が悪いもんでな、乗らせてもらおう。

ガタツと荒々しく立ち上がりクソガキの近くに歩み寄る。距離が縮まるにつれカタカタと震えが増してくがお構い無しだ。お前らがけしかけた喧嘩だもんな。

「大事な仲間バカにされて、黙ってられる程俺も大人じゃねえんだよ」

「は、はあ？」

「これが俺のお…答えだアアア！」

右手に全身全霊を込めて体重を乗つけた拳をその憎き顔面に叩き込む。

その衝撃が顔面の抵抗とぶつかった瞬間に拳を折って第二撃を入れる。

すると第二撃目の衝撃は抵抗を受ける事なく完全に伝わり切りクソガキは店外に吹き飛ばす。俗に言う『二重の極み』だ。よく分からない人は調べてみよう、カックイイぞ！

「これでおあいこだな…」

「てめえよくも!!」

「やりやがったな!!」

立ちあがった冒険者の1人に今度はヴェルフが殴る。蚊帳の外の

冒険者達はこれ以上とない昂りを見せる。意外にも参戦したベルを気かけながら俺とヴェルフは喧嘩に熱中する。順調に喧嘩相手を痛めつけ遂に最後の一人が残った。さつきまで椅子に座り酒を飲んでクールキメてたイタイあんちゃん2号（1号はベート）はグラスを投げ捨て立ち上がった。

「うおっ！」

「ヴェルフ!？」

意識が向いてなかったヴェルフの腕を掴み片手だけで逆方向に投げ飛ばす。あの反応：レベル2じゃない、3だな？

次はベルが仇と言わんばかりにその男に突っ込むがあっさりと躲され顔面に一発食らう。

「ベル様!？」

リリルカの悲鳴と一緒にベルを受け止めた丸テーブルが音を立てて壊れた。弁償とかするのかな？

「まだ撫でただけだぞ？」

次は俺に接近して顔面に一撃が入る。しかし少し考えて欲しい。俺はこれまで幾度となく吹き飛ばされてきた。体長5mにも及ぶベオウルフの拳を受けたり、アラストルに壁上まで飛ばされたり、拳句の果てにはゴライアスにも18階層の端っこまで吹き飛ばされてきた。その経験を詰んでると自然と殴られ慣れというものが生まれる。なんだよ殴られ慣れって：言ってる悲しくなってきたぞ。まあ、何が言いたいかというと、奴のパンチなんて屁でもないという事だ。ちよつと口の中が切れたくらいだ。

「ほう…」

「一発は一発：受け止めろよ？」

ギリギリと握り拳をイタイあんちゃん2号に向けるがその拳はカウンスター席から聞こえた破壊音が止めた。

『!』

音のした方を酒場にいた全員が一斉に振り返る。その先には灰色の毛並みを持つ狼人の青年、つまりはイタイあんちゃん1号がいた。「揃いも揃って、雑魚が騒いでんじやねえよ」

顔に刻まれた刺青が歪む。その機嫌の悪さを発露している人物に、誰もが言葉を失う。

「てめえらのせいだ、不味い酒がクソ不味くなるだろうが。うるせえし目障りだ、消えやがれ」

要約すると「皆の迷惑になるから喧嘩は他所でしてね☆」って事か…なんだ、良いところあるじゃん。

「調子乗ってんじゃねーぞ」

俺の胸ぐらを掴み顔を寄せて威嚇してくるがこれも要約すると「気を抜くんじやない」という事か…。ツンデレかな？

ー【ホーム】ー

そんなこんなで帰ってきた俺達は神様やりりから治療してもらっていた。とはいえベルには神様、ヴェルフにはリリルカが担当してる為俺は切れた口を治すためポーションを口の中に含んでその様子を眺めていた。

「驚いたよ、君が喧嘩をするなんて。ベル君も男の子だったんだね」
「……」

膏藥を優しい指で塗りながら諭すように彼女は語る。ベルは悔しそうに黙り込んでいた。

「でも、やっぱり喧嘩はよくないぜ？サポーター君の言う通り、しっかり怪我までしているじゃないか」

「だって、あの人達っ、神様を馬鹿にしたんですよ!？」

それは初めてベルが神様に反抗した瞬間だった。リリもヴェルフも手を止めて、ベルを見上げてる。そんなベルと見つめあっていた神様はやがてふつと微笑んだ。

「君がボクの為に怒ってくれるのはとても嬉しいよ。でも、それで君が危険な目に遭ってしまおう方が、ボクはずっと悲しいな」

「……」

「ベル君の気持ちはわかるんだ、逆の立場だったら、ボクも火を吐くほど怒る。でもそれで相手と喧嘩したボクが、ボコボコになって帰ってきたら、ベル君はどう思う？」

「…泣きたくなります」

もうさ、Y o u 達付き合つちまえよ。不肖このハチマン・ヒキガヤ、アキバのオタク達がガチでドン引きする位応援するぜ？

まあ、その後は適当に言葉を交わし俺はいつものソファで眠りについた。クソダサコートって……。

次の日、ベルと共にチユールさんの元に向かい一連の報告をした後にダンジョンについての座学を受けた。元々学生だった事もあるし、勉強もそこまで嫌いでは無いのでノートにもスラスラと書けた。チユールさんの座学はスパルタと有名だったらしいがしつかりと話を聞いていれば分らないことは無い。隣の席に座ってるベルは終始頭を悩ませていた。帰ったら勉強に付き合つてやろう。

「ハチマンはこの後どうする？」

「そうだな…じゃが丸くんの新しい味を開発したいんだが頼めるか？」

「甘い味…？」

「いんや、トマトソースグラタン味だ。甘くは無いはずだ」

「それじゃあ受けようかな」

「厳しめで頼むぞ」

そんな他愛もない話をしながらロビーを出たところ女性冒険者2人が俺たちの道を塞ぐように立っていた。ん？よく見れば酒場で絡んで来た奴らと同じエンブレムしてんじゃん。

「ハチマン・ヒキガヤで間違いない？」

「は、はあ…」

気の強そうな短髪の人が尋ねてくる。狼狽えながら頷くと、今度は後ろに控えてた柔らかそうな長髪の人がオドオドしながら歩み出た。

「あの、これを…」

差し出される招待状。封蝋には弓矢と太陽のエンブレム。

「ウチはダフネ。この子はカサンドラ。察しの通り「アポロン・ファミリア」よ」

「あの、それ、案内状です。アポロン様が『宴』を開くので、も、もし良かったら…べ、別に来なくても結構なんですけど…」

「必ず貴方達の主神に伝えて。いい、渡したからね?」

「はあ…」

「ご愁傷様…」

そう去り際に呟かれた。

「もう死んでるんだよなあ…」

えっ?とベルが聞き返すが俺は手元の招待状を見下ろしていた。

ホームに帰り神様に事の顛末を話すとパーティには出席しないと後が面倒くさいとの事で勿論ベルが同伴する事になった。ベルの一張羅や神様のドレスをチェックしてほつれとか無いか確認した後暇になった俺は街を宛もなくブラブラしていた。そんな時だ。

「見覚えのあるコートだと思ったら、ハチマンか」

「アラル…奇遇だな」

「ああ、お前に預けた剣を返して貰おうと思っててな。使い心地はどうだった?」

「一回しか使つてないから分かんないが良かったんじゃないか?なんかバフみたいなのも付いてたし」

「だから…なんでお前といいダンテは…!」

怨念に震えながら俺と知らない男の名前を呟くアラストル。なんだ、他にも貸してたんだ。ダンテ…違和感を覚える名前だ。

「あ?ダンテ?誰だそりゃ」

「?…後で会うことになるさ。丁度いい、紹介したい奴がいるんだ!ベル君!ヘイカモツ!」

「アラル様、歩くのが速いです…」

アラルを先輩と慕いながら駆けつけたのは後輩キャラとしては筋肉と凶体が隆々としていて長い白髪と白髭を蓄えたおっさんだった。は?ベル君?俺の知ってるベル君とは正反対の男のようだ。

「アラル様、その小僧は…まさか!」

「例の俺の弟子だ。ハチマン、コイツはベル君、俺やマキャヴェツリと同じだ。後々にお前の稽古に付けたいと思ってる」

「ども、ハチマン・ヒキガヤです弟子じゃねーよ…ん?同じ?あつ…」

(察し)」

じゃあきつと本名を短くしてたり振ってたりしてるのだろう。て
いなか稽古?

「ベルだ。訳あって貴様には本名を明かせない。吾輩が鍛えるからに
は死ぬ気でやってもらう。宜しくな」

ベル君(仮称)と硬い握手をする。熱い漢の気を感じる。まあ、見
るからに熱血タイプだもんな、鍛冶師って言っても違和感さんが仕事
しないもん。

「あつそうだ、ベル君、先に教会に戻ってくれ。この後の用事はコイツ
と行くからよ」

「ちよ、勝手に決めるなよ!」

「了解した」

「了解するな!」

俺の静止に耳を貸さず教会の方角に歩いてくベル君のデカイ背を
見届けアラストルに向き直る。

「どういうことだ?」

「いやな、この後の用事にベル君を連れてくと色々と面倒になるから
たまたま見かけたお前に乗り換えただけだ」

「クズの発想だ、そりゃ」

なんだろう、ベル君(仮称)が少し不憫に思えてきた。今度マツ缶
(偽)を奢ってやろう。

「まあ、その格好でもあれだし、少し着いてこい」

手を引かれ連れてかれた場所は高めの服が置いてある仕立て屋だ。
そこで採寸とか丈合わせをしてそれなりにいいスーツを拵えても
らった。手袋も黒革の厚くないやつに取り替えられた。髪の毛も弄
られオールバックにされた。

「おお…似てる」

「あ?誰にだよ」

「さつきダンテって眩いだろ?その双子兄貴のバージルって奴だ」
「あつそ」

他人に似てると言われるのは変な気分だ。俺は俺なのに。バージ

ル…放っておけない名前だ。

「さてと、行くか」

「行くって…まさか」

「とある太陽神が開く宴だ。そこでお前の自慢でもしておこうと思つてな」

「い、嫌だ…!」

抵抗虚しくタクシーに乗せられ遅れた形で会場に着く。着くなりアラストルとは別行動になり「後は好きにしろ」と放り出す始末、自由すぎるだろ、アイツ。

「…取り敢えず、食うか」

個人的な見解としてパーティのランクは設備もそうだが出てくる料理で決まると思う。飯が美味けりやそれなりに話も弾むもんじやないのか? まあ、パーティ行つたことないけどね。

「うん…微妙だな」

材料は良いのを使つてる。貧乏人の俺達じゃ手の届かないような物だ。だがコスト削減に調味料をケチつてる。これじゃ材料の良さを活かせない。まあ、アポロン・ファミリアもこの程度なのだろう。ガワがしっかりしてそうで案外中身がスカスカのプライドだけの連中なのだろう。

グラスに注がれたワインを一口飲む。あ、美味しい。

「あれ!? ハチマン!」

ベルが驚愕の声と共に駆け寄ってくる。釣られて色んな人達もこつちに来る。ヘステイア様は勿論、タケミカツチさんや命さんに加えミアハ様とナアーザさん、ついでにヘルメスとアスフィさん、それにヘファイストス様も来た。久々の大所帯の為少し酔いそうだ。

「久しぶり…でもないわね。元気してたかしら…／＼」

「え、ええ…」

「あつ、スーツ似合ってるわよ。いつものコートもカツコイイけれど新鮮で素敵よ」

「あ、ありがとうございます。貴方もドレス…その、似合ってますよ…?」

「そうかしら／＼…フッフフ…照れるわ」

何故かヘファイストス様と話すとドギマギしてしまう。この前の出来事のせいだろう。この人の前でみっともなく泣いてしまった…うっ、死にたくなってきた。

ざわつつ、と広間の入口から大きなどよめきに、俺達の成立すらしていない会話は遮られた。

「おっと…大物の登場だ」

ヘルメスがおどけるように言葉を紡ぐがその一言一句にすら何故か腹が立つ。

「あれは…」

何時ぞやの女神とその従者が礼服を身に纏い衆目を一身に浴びていた。

ベルは神様に目を塞がれ命さんやナーアーズさんも見惚れかけている。アスフィさんは露骨に目を逸らし見ないようにしている。

「そう、フレイヤ様だ」

説明口調のヘルメスやその場にいる全員の視線の先に圧倒的な『美』がそこに立っていた。オラリオ一の従者を引き連れて…。

「言うほど美しいか…?」

俺の素直な感想は会場の喧騒に吞まれた。

#25 このすぼ

「主神よ、アポロン・ファミリアから宴の招待状が来たぞ」

書斎で彼の事を考えているといつの間にかやって来ていたのか私のファミリアの団長の【椿・コルブランド】が招待状を手渡してくる。へえ、1人だけ眷属を連れてけるのね。

「椿…アポロンの所は行かないって言ってるでしょ？丁重に断つってちようだい」

アポロンについては天界にいた頃から知っているがいい噂はめつきり聞かない。数多の女神に求婚しては振られる。私には声が掛からなかったのは不幸中の幸いって奴かしら。

「そうか？ちよつと小耳に挟んでな、神ヘステイアの方にも声を掛けてたらしいぞ？」

「え!？」

つまり彼が来るかもしれないってことかしら!?!いや、よく考えるのよヘファイストス、ヘステイアはベル・クラネルに惚れている。ならば宴に連れてくるのは当然その子よね…。

「!!」

いや、だめよヘファイストス！ネガティブな事を考えちゃいけないわ！ヘステイアが彼を連れてくる可能性に全てを賭けましょう！

「行かないのか?」

「行くわ！椿！貴方も用意しなさい！今日とはびきりの勝負服で行くわよー!」

「あ、ああ…」

待ってなさい！ハチマン！

「ヘファイストスじゃないか！見てくれたまえ！ベル君は何を着ても似合うだろう?」

「え、ええ…そうね」

知ってた、この世には神も仏もいないんだって…って、いたわね、掃いて捨てるほどね。

はあ、彼は今頃何してるかしら？またパフエとピザとコーヒをバカ食いしてるのかしら…。一緒に食卓を囲むなんて…

『へファイストス、はい、アーン』

『あーんっ！美味しいわー！ハチマン！』

『H A H A H A！君が沢山食べれるなら俺はいくらでも作るよ！ハニー♡』

『ハチマン…／／もうっ！好きっ！（理性崩壊）』

『照れるぜ、ベイベ（語彙力逃走）』

なーんて事もあるのかしら!!えっへへへ／／

『へファイストス…一体どうしたんだい?…』

『あっははは…あれ!?ハチマン!』

えっ!嘘!?どこどこ!!?

その場に居合わせた顔見知り達と駆け寄る。焦ってるのがバレないように若干早歩きで。

「あっ…」

いた、黒と銀の混ざった髪をオールバックにして相変わらずの目付きでワイングラスに口をつける彼がこちらを見ていた。コート以外の服を着てるのも珍しくしつかりとその姿を脳裏に焼き付ける。

「久しぶり…でもないわね。元気してたかしら…／／」

「え、ええ…」

嗚呼…私はこの時間が堪らなく好きだ。私でさえ嫌いな目を綺麗だと言ってくれた彼と交わす言葉全てが…あわよくば彼と一生を共にしたいと刹那に願う私はきつと、世界一バカな神なのだろう。人間と結ばれる筈なのに。

フレイヤとかいう神が入場し、宴の雰囲気はガラリと変わった。どこかピリピリしている、きつとアレの目にかかりたい神達がお互いを牽制し合っているのだろう。これが恋の抑止力というやつか…。

そんな視線も意に返さず女神はこちらに歩み寄ってきた。回れ右してほしいなあ…なんて。

「来ていたのね、ヘステイア。それにへファイストスも。神会以来か

しら？」

「っ…やあフレイヤ、何しに来たんだい？」

ひくついた笑顔を浮かべながら下手くそな営業スマイルをするとベルから離れて身構えた。あれで威嚇してるつもりなのだろうか。ヘファイストスさんも少しムツとしている。

「久しぶりね、ハチマン」

「ども」

心の際に入り込むような声を出しながら近づいてくる。ちよつと近くない？パーソナルスペースって知ってる？

「！今夜、私に夢を見させてくれないかしら？」

「夜11時には床につき必ず8時間は睡眠をとるようにする。寝る前にあたたかいミルクを飲み20分ほどストレッチで体をほぐしてから床につくとほとんど朝まで熟睡ですよ」

「！」

手フエチの殺人鬼が言ってたんだけど実践してみるとまあまあ眠れるんだよ。皆も試してみよう！

「あら、残念。一流のシェフに作らせたジャンボパフエがあるのに…」

「!!」

ちよつとハチマンの心がマグニチュード800000くらいなんだけど。右肩の悪魔が「行けよ…」って叫んでるんだけど。ちなみに右肩の天使は「美味しそう…ジュルリ」とか言ってる、ダメじゃん。

「ダメよ？」

ニツコリとしながら、けれどもドスを効かせた声でヘファイストス様が俺の肩を掴む。

「うつす…」

どうしてこんなに怒ってるんだろうか…。

「マキャヴェリって男、知ってるかしら」

そつと、耳元でフレイヤが俺に抱きつく形で囁く。艶めかしい声だが色を含んでいない。至って真剣な話なのだろう。ここですか？

「顔を合わせた程度ですけど…」

「ウチで監禁して研究させてたんだけど熱が入ったらしくて逃げられたの」

「んなことしてるからじゃないんですか？」

「それもそうね、方法はなんでもいいわ、排除してくれればご褒美を出すわ」

「へえ、例えば？」

「私とかは「別のならいいですよ」…相変わらず釣れないわね」

いつの間にか首に絡めていた両手を解き、その距離を開かせる。まあ、悪くない匂いだつたな。

「それじゃあ」と言い女神フレイヤは去っていく。別にクールでもなんでもない。

「随分と熱い話、してたんとちやうかー？」

また違う所から陽気なエセ関西弁が聞こえた為そつちを見ると朱色の髪色をした女神がいた。そのすぐ隣には綺麗なドレスを見に纏ったアイズ・ヴァレンシユティンがいた。

「ロキ!？」

「おー、ドチビー。ドレス着れるようになったんやなー。めっちゃ背伸びしとるようで笑えるわー」

俺がコーデイネートしたんだが似合わなかったんだろうか…。ていうか男装してるアンタに言われたくないと思うんだが…どうして男装なんて…あつ…。(察し)。

なにやらギャーギャーと喧嘩してる二人を流し目にテラスに移動して一息つく。今日は疲れた、特にあの女神のせいだ。精神力をゴリゴリに削ってくる。

「お疲れのようだね」

まただ、またこうやって…今度は誰だ？

振り返ると会いたくない神ランキングNo. 2のヘルメスがそこにいた。

「なんの用で?…ここには美人はいませんよ?」

「あはは…僕、君に嫌われるような事したっけ?」

もう存在というかなんというか…生理的に無理なんですよ。すみ

ません。

「さあ、どうなんでしょうね?」

と言いつつ18階層でモルドが襲撃の際に使っていた兜を落とす。
「なんだい?これは」

「18階層の件でモルドという冒険者が被ってたんですよ。少しオハナシしたらアンタに聞いてくれーって言っててね。心当たり:ありませんか?」

「全く:君にお惚けは効かないな:要件はなんだい?」

驚いた、こころも簡単に折れるなんて予想外だった。

「別に、アンタがちよっかいかけて来たならそれなりの報復でもさせて貰うってだけだ。アンタがやって、俺がやっちゃいけないって道理はないんだからな:覚悟しろよ」

「わ、分かった:」

少しは怖気付いたのか後ずさりするヘルメス、ふふふ、俺の威嚇中々効いたな。

「あれ?ハチマンとヘルメス様?二人で何話してたの?」

「なーに、仲良く世間話をしていただけさ、ねっ!」

「まあ、な」

適当に話を合わせる。ベルにいらん心配をかけてられないしな。

「ベル君は、どうして冒険者になつたんだい?」

手すりに背を向けながら、ヘルメスはベルに問いかける。

「祖父が:育ての親が、亡くなる前に言つてて:『オラリオには何でもある。行きたきや行け』って」

「へえ?」

「オラリオにはお金も、その、可愛い女の子との出会いも、何でも埋まってる:何だったら女神の【ファミリア】に入って、手っ取り早く家族になるのもありだつて」

「ーはははははっ!」

「:ベル君の育て親は、愉快な人物だったみたいだね」

「そう、ですね。面白い人でした」

そんな2人の会話をBGMに俺は過去について考えていた。雪ノ

下とも由比ヶ浜とも、小町や母ちゃんに親父…その他全員の今と何故かオラリオにいて気味悪い鎧を装着していた葉山…そんな事を考えるだけで頭が痛む。忘れなきや…

「さあ踊ろう！ベル君！」

そうへスティア様に半場強引に連れてかれたベルの背中を見届けながら俺はワイングラスに口を付けていた。

「君は踊らないのかい？」

相変わらず隣にいて一緒に酒を飲んでいるヘルメスが問いかける。ホールは賑やかでヘアァイストスさんが知り合いの神に挨拶しているのが見られる。こころなしか少しソワソワしている…トイレか？

「別に…踊るほど親しい相手なんていませんし」

オールバックにしていた髪を手でくしゃくしゃにして元の髪型に戻す。

やっぱり普通の髪型が一番だな。

「えらく張り詰めてる気がするけどどうかしたのかい？」

「いつもの流れだとかこういうイベントのラストに絶対何か嫌な事が起こるんですよ」

いやほんとマジで…初めて飲みに行った時だってクソ狼に煽られるし、レベルアップ祝いの時だってモルドとか言う奴に絡まれるし、ヴェルフのランクアップ祝いにもアポロン・ファミリアが…あれ？この宴の主催って…アポロン・ファミリアだよな…。あつ…（察し）「そうならない事を祈ろうか…」

断言しよう絶対起こる。

「いや、起こさせない」

例えシュタインズゲートの決めた運命であろうと俺は抗う。やつと安定？してきた日常を壊されてたまるか。そうと決まれば即行動に移さなくては…。

グラスの中を飲み干しツカツカとホールに入っていく。丁度ダンスも終わったらしく踊っていた面々は微笑みを浮かべている。女神口キと踊っていたヴァレンシュタインにも目をくれずベルと神様の元

へ向かう。

「引き上げるぞ」

ベルと神様の間に入り少し声を潜めて帰宅の意を示す。

「ハチマン！急にどうしたの!？」

「ハチマン君、まだ宴は始まったばかりだよ。踊る相手がいなくてね？拗ねちゃあダメだよ！ほら、ヘファイストスでも誘って踊ってごらん？」

「そんな悠長な事言ってる場合じゃありませんよ」

「急にどうしたの？」

ベルが心配そうに問いかけてくる。

「打ち上げとかの時に必ず起こるのは？」

「あつ……！」

気付いてくれたか、流石ベルだ。

「神様……逃げましょう……！」

「ベル君まで……分かったよ。でも事情は後でちゃんと聞くからね！」

よし！そうと決まれば！

ここまでは完璧だ。後は踵を返して逃げるだけ……そう思っていた時期が私にもありました。そんなのは世界一気まぐれなオラリオが、そして愛すべき読者が許す筈なのだ。

「諸君!!宴は楽しんでるかな？」

月桂冠を被るこりやまたヘルメス以上に気持ちの悪い男神がホルのど真ん中にある階段の上で高らかに叫んだ。その構図は丁度俺達を見下す形になっていた。

「盛り上がっているようならば何より。こちらとしても、開いた甲斐があるというものだ」

そしてアポロンは神様に目を向けた。

「遅くなったが……ヘステイア。先日は私の眷属が世話になった」

「……ああ、ボクの方こそ」

「私の子は君の子に重傷を負わされた。代償をもらい受けたい」

「言いがかりだ!?!ボクのベル君だって怪我をしたんだ、一方的に見返りを要求される筋合いはないぞ！」

「だが私の愛しいルアンは、あの日、目を背けたくなるような姿で帰ってきた…私の心は悲しみに砕け散ってしまいそうだった!」

まるで芝居をしているかのようになり、アポロンは胸を押さえ、かと思うと両手を広げて大袈裟に嘆いた。

ルアンという単語が出てきた辺りから奥からミイラのようにグルグル巻にされたパルウムの男は姿を見せた。

「痛てえ!居てえよお〜!」

「まさかハチマン君…本当にここまでボコボコに…?」

「してませんよ…でも、それより酷い始末にしてやろうか?」

「ダメだよ!」

ベルの叫びが聞こえるが内心本気だったりする。一生医務室のベッドに寝る羽目にさせテヤロウカ?

「更に、先に仕掛けたのはそちらだと聞いている。証人も多くいる、言い逃れはできない」

パチン!という指パッチンと共に俺達を取り囲む複数の神とその団員。きつとあの現場にいた奴らかアポロンに抱き込まれた奴らだろう。その面しつかり覚えたからな?

「団員を傷付けられた以上、大人しく引き下がるわけにはいかない。ファミリアの面子にも関わる…ヘステイア、どうあっても罪を認めないつもりか?」

「くどい!そんなものは認めるか!」

待つてましたといわんばかりの醜悪な顔をするアポロン。

「ならば仕方ない。ヘステイア君に『戦争遊戯』を申し込む!」

チュールさんとの勉強で憶えている。対立する神と神が己の神意を通すためにぶつかり合う総力戦。言わば神の『代理戦争』。

『アポロンがやらかしたアー!』『すっつげーイジメ』『逆に見てみたい』

退屈持て余したモンスター、おっと間違えた。娯楽好きの神達はざわついていた。

「我々が勝ったら…君の眷属、ベル・クラネルとハチマン・ヒキガヤを貰う!」

畜生…それが最初から狙いだっただか…！

周りを見渡すと真剣な面立ちのロキと瞳を見張るヴァレンシユタイン。目を細めるヘファイストスさん、悔しそうな顔をするタケミカツチ様とミアハ様、苦笑するヘルメスと目をそらすアスフィさん。完全孤立無援、誰も助けてくれない。そんなのいつも通りのはずなのに何故かとてもなく悔しい。違う、これは悲しい…だ。

嗚呼…仁義もクソもないこのみすばらしい世界には祝福も無いのか…。

「ハチマン…髪が…」

どうせまた銀に染まってきたのだろう。

「帰るぞ」

ボソツと言い民衆に背を向ける。

「アポロン様とその愉快的証人達」

ゆっくりと振り返り真っ直ぐ見つめる。

「顔は覚えたからな」

極彩色の空が広がる八幡の心、その中央にそびえ立つ巨大な門を中心に半径20mが円状に黒く澱んでいた。

『そろそろ…か』

門の中から愉快そうな声が聴こえる。

まるで釈放間近の囚人の様に。

#26 帰る場所

朝だ、とは言え一睡もせずホームの中の植木鉢を手入れしたり寝てる2人を起こさないように掃除をしたりしていた。

落ち着かないからだ、どこか嫌な予感がして堪らない。ベオウルフの時の様な死の予感ではない、もっと恐ろしい喪失の予感だ。

「んん〜…」 「むにやむにや…」

仲良さそうにベッドで寝ている2人を見つめるようにいつものソファに腰掛け俺達が手間隙かけてリフォームした部屋をぐるりと見渡す。匠もうんざりするような仕上がりだが皆も気に入っている。リリルカも「素敵なお部屋ですね」って褒めてくれたし、ヴェルフだって「狭くなきゃ100点だな」と評価してくれた。

何がなんでも死守せねば…やっとの思いで手に入った他人との繋がり証なのだから…。

「んんん…ハチマン…」

寝言を発するベルの髪を手を伸ばして少し撫でる。付き合いこそ短いがベルは俺の弟の様な存在だ。どこに行こうと着いてこようとしたり、お菓子作りの味見役になってもらったりしたなあ…。

『ハチマン！どこに行くの？』

『ポレポレー』（いつもの喫茶店です）

『じゃあ僕も行くよ』

『ベル、新作が出来たんだ、甘党じゃなくても食えるチョコだ』

『パクツ うん！美味しいよ！お店開いてもいいんじゃない!?』

『褒め過ぎだ、この』

そう、柄にもない感傷に浸りながら俺は2人が目覚めるのを待っていた。

ベル・クラネル

L v 2

力：C 635

耐久：D 594

器用：C 627

敏捷： B 741 魔力： D 529 幸運： I

《魔法》【ファイア・ボルト】

《スキル》

【英雄願望】・能動的行動によるチャージ実行権

ハチマン・ヒキガヤ

Lv2

力：B 788 耐久： C 5694 器用： B 729

敏捷： B 739 魔力： A 899 ソードマスター：

C

《魔法》【魔力操作】

《スキル》

【スタイリッシュユライズ】

- ・早熟する。
- ・敵に攻撃を命中させる程成長する。
- ・敵の強さにより効果向上。
- ・戦意を喪失した場合ステータス激減。

「神様：なんか俺のだけめっちゃ紙汚くありません？」

何かを消した後がびっしりと付いてる紙をヒラヒラさせながら問いかける。だって色々汚いんだもん。

「きつ、気のせいだよ！それより全くアポロンめつ、よくも抜け抜けと戦争遊戯なんかっ…」

誤魔化された気もするが彼女の言う事も一理どころか千理ある。バイトの用意と出かける用意をしてる2人を見ながら俺も出かける用意をする。

「二人共、気を付けてくれよ。流石に昨日の今日で何かをしてるってことはないと思うけど、アポロン達はこじつけてちよっかいかけてくるかもしれない」

「は、はい」「うっす」

「それじゃあ2人共、出るのが一緒なんだし、どうせだからバベルまで行こうぜ？」

「はい、いいですよ」「分かりました」

隠し部屋の地下室を出て階段を上ってく。祭壇が備わった広い屋内は抜けた天井を除けばそれなりに生活に困らない程度には整理させといた。

扉のない教会玄関を1番先にくぐる。

「――」

朝日を浴びた瞬間、周囲の建物の屋根や屋上に佇む、無数の目が俺達を捉えた。正面玄関を囲むように配置された彼等、冒険者は、弓矢、杖を装備している。

「アポロン・ファミリア」

「ベル！神様！」

2人をありったけの魔力を注いで作った魔腕で包んで怪我しないように教会奥に持つてく。

―その瞬間、背後から身を焼く炎と身体中に大量の矢が突き刺さる感触がした。

状況の整理ができずその場に座り込んでいる、今、目の前にいたハチマンが：

「ーシャアツー！」

突然上から3人の獣人がロングソードを持って襲いかかってくる。しかし、その刃が僕と神様に届くことはなかった。

「ヒューツ、ヒューツ…」

ハチマンだ。おかしな息遣いをしてその場に立っている。その体にはロングソードが3本突き刺さっていた。その内の1本は心臓を的確に貫いている。

その3人を魔腕で手短に始末したハチマンは僕の所に倒れ込んでくる。反射的にそれを受け止め背中中に手を回すと背中には幾つもの矢が突き刺さっているのが感触で分かった。

「ハチマン君…？その傷…！」

「にげろ…みちはおれがひらく」

乱暴に僕達を立たせて裏道に行かせる。考えたいのは山々だけど目の前のハチマンが危ない。出血が多すぎる、このままじゃ、ハチマ

ンが…。

暫くハチマンの誘導で走っていると5名ほどの冒険者が得物を構え突っ込んでくる。

「みぎだ」

右に折れた道に手をやって僕達を逃がしてくれる。路地に入ると金属のぶつかる音と何発かの銃声が聞こえた後にハチマンも路地に入ってくる。

「ハチマン…あの人は…」

「ごろしてない」

背中に刺さった矢や剣を抜きながら答える。その表情は痛みに歪んでいる。相変わらず変な呼吸は止まらず目も虚ろになっている。敵から奪ったのか手に持っていたポーシオンを全身に浴びて傷の治癒を試みるが気持ち程度しか回復していない。

「っ…もうダメだよハチマン君、これ以上戦ったら死んじゃうよ!？」

「家がなくなった、俺達のかえるいえが…せめてお前たちだけでも…なくしたくない」

いくぞ、という号令で再び逃走を謀る。道は塞がれている為適当な屋根に飛び乗って辺りを見渡すと

「諦めたほうがいいよ」

「!」

背後から投げかけられた声に、振り返った。同じ人家の屋根に立っていたのは数名の団員を率いたダフネさんだ。小隊の中にはカサンドラさんもいる。

「アポロン様は気に入った子供を地の果てまで追いかける。手に入れるまでね」

「…!」

「ウチやカサンドラも、見初められてずっと追われ続けたんだから。都市から都市、国から国…観念するまで、ずっとね。逃げても早いか遅いかの違いだけだって」

ダフネさんが同情の眼差しを送ってる中、神様は表情を歪めた。

「アポロンの執着を甘く見ていた」

「投降しない？そつちには怪我人もいるから、できれば手荒なことはしたくないんだけど」

「…できません」

勧告を聞き入れずじりじりと後退していく僕と神様の前にハチマンが歩み出た。

「ベル、これ頼む」

そう言うとハチマンは肌身離さず付けていたネックレスを外して手渡してくる。

「ハチマン…これって」

「絶対に逃げ切れ、そして待ってろ、必ず返しにもらいに行くから」

大丈夫だ、と震える指でピースをするハチマン。

「そうなるよね、じゃあ…：…かかれ！」

指示を出すのと同時に短刀を投擲するがハチマンが振り向きざまに弾いてくれた。

「…っ！神様、逃げます！」

「わ、わかった！死ぬなよ！ハチマン君！」

神様の腰に左手を回し、脇に抱える格好をとる。あまりの姿勢に神様の頬が紅く染まった。

ハチマンに背を向けて走る。ただ走る。

「あんだ、その傷でウチ達を止めようっての？」

相対するダフネが何か言ってるが聞こえない、頭がぼーっとする。右手の感覚がない、でもなんとか動く。

正面から迫る槍を右手で受け止めるが力が足らずその切っ先が体に少し食い込むが左手でそいつの腕を掴んで関節が曲がる方向と逆に曲げる。

バキヤ…

鈍い感覚とそいつの苦悶の表情が見えるが気にせず首根っこを掴んで気道を塞ぐことによって酸欠させる。力なく倒れ伏したそいつの頭を踏みにじって他の団員達を見据える。

「負ける気が…死ねえ」

その言葉と同時にその他の団員が襲いかかってくる。傷を負いながらも一人また一人と再起不能にしていく。中途半端に相手した所で奥にいるカサンドラが魔法で治癒するのだからやるなら徹底的に……だ。

残るはダフネとカサンドラになり2人に閻魔刀を向ける。

「あの、ダフネちゃん、やっぱり止めた方が……いいような気がする」

「何が?」

「あの子達を、刺激する真似……『兎』と『影』を追い詰めちゃいけない」

「また夢?どんなの見たの?」

「うんと、傷付いた影が、強大になって兎と一緒に太陽を呑み込むって
いうの……」

こちらを注視しながら何かしらの話をしているが敵意がなさそうだからベルを追いかけようとするが足が思うように動かない。閻魔刀も維持できず光となって消える。俺はそこに力なく倒れ込んだ。

「ああ、さむいな……」

走る。ひたすら走り敵と対峙したら戦いそしてまた逃げる。なんとか辛勝してるのはハチマンが体を張ってベル達を逃がしてくれたからだ。

「うっ……うっ……」

「ベル君、泣いてるのかい……?」

「違い、ますっ……これはっ……汗です」

「大丈夫だよ、ハチマン君が死ぬわけじゃないじゃないか!怪我したって一晩でけろっつとしてるようなタフガイだよ!死なない……よ」

しかし内心ヘスティアも焦っていた。今までにない程ハチマンの反応が消えかかっているからだ。まるで消えかけの蠟燭のような、風前の灯火という言葉が当てはまる状態だ。

しかしそんなヘスティアの内心を無視するかのように立ち塞がる冒険者がいた。冷笑を浮かべ白を基調にしたバトルクロス、腰に下げた長剣と短剣、揺らめく大型のマント。アポロンファミリアの首領、ヒュアキントスだ。

「よくここまで逃げたな、ベル・クラネル！私自ら相手してやるー喜べ」

「ぶっつ!？」

ヒュアキントスとの戦闘は圧倒的に負け戦だった。ヒュアキントスの前にはベルの力も、反応速度も、そして何より速さでも負けた。「暴れられても困る。どうせ後で治すのだ、腕の一本は斬っておいても構うまい」

左手に持つ剣を鳴らし、嗜虐的な笑みを浮かべるヒュアキントス。長剣がベルの肩を貫こうとした直後。幾多もの矢が、ヒュアキントスの立っていた場所に着弾した。

「犬人か…」

余所見した好きを見てベルは逃げた。ヒュアキントスもそれを追おうとするが遠くの塔から狙撃したナーザの矢に拒まれた。

追っ手との戦闘を繰り返す内に騒ぎを聞き付けて応援にやってきたヴェルフとリルルカ、そしてタケミカヅチ・ファミリアの団員達に応援を呼んでくれたミアハと袋小路にて合流する。

「危ない所だったな…おいベル、ハチマンは？」

「そういえばお姿が見当たりません…まさか」

「ハチマンは…僕達を逃がすために重症の身で…」

ハチマンから託された血のついたペンダントを握りしめながら苦虫を噛み潰すような思いで語る。一同が信じられないという表情を見てヘスティアも顔を伏せる。

「ならばうだうだしている場合ではない、早急にハチマンを見つけなくては…」

ならば私達が…とタケミカヅチ・ファミリアの面々がハチマン捜索に名乗りだしベルとヘスティアの護衛にその他が当たり解散しようとしたその時だった。

「見つけたぞオオ!!」

見つけにくい袋小路を選んだのが裏目に出て大量のアポロン・ファミリアの団員に追い詰められる。疲弊したベルと神達を後ろにやり桜花とヴェルフを前衛に、その他の団員達は中衛や後衛に廻り迎撃体

制をとる。

「この量…やれるか？」

「関係ない…やるぞ!!」

ヴェルフと桜花の漢気溢れる声をベルは後ろで聞いて、とてつもない頼もしさとそれに負けない位の悔しさを感じた。

「相手は少ない! かかれえ!!」

押し寄せる敵をヴェルフと桜花が叩きのめす。討ち零したのは命の魔法や千草の援護のお陰でなんとか持ちこたえていた。

「ぐぬぬぬ…こうなったら…ベル君! 直ぐにアポロンの所へ行こう!」

「ええっ!? どど、どうしてですか？」

「このままじゃジリ貧だ、ボク達がやられちゃ時間を稼いでくれた皆に顔向けできないっ…」

「行ってどうします?」

「戦争遊戯に受けて立とうと思う。でも今のままじゃ勝てない…ボクができるだけ時間を稼ぐからベル君はその間に強くなってくれ」

「稼ぐって…どのくらい…ですか?」

不安そうに問いかけるベル。そんな彼の頬を優しい手つきで撫でへスティアは告げた。

「1週間…」

「足りないなあ…」

そんな2人の会話に割り込むように紫電と共に男が現れた。その時生じさせたであろう雷はアポロン・ファミリアの構成員に直撃して戦闘不能にした。

「あつ、貴方は…アラル神父!」

「よっ、白髪坊主」

「神父君…足りないってどういう事かい?」

「戦争をするにしろしないにしろ今のハチマンは弱すぎる。それを仕上げるためにもっと時間が必要ってんだ」

「!!…ハチマンはっ、無事なんですか!」

アラルの肩をガシツと掴んでベルが詰め寄る。

「ああ…虫の息だがなんとか生きてる」

「そつか…良かったあ…」

安堵のせいか腰に力が入らなくなりしりもちをつくベル。ヘスティアも安心して胸を撫で下ろしている。

「神父君、ボクだって時間を稼ぎたいがその方法がないんだ、いくら頑張っても1週間の限界だ」

「だったら俺が手伝う、破壊工作なりなんなりしてもう1週間は稼ぐ」
「神父らしからぬ発言だね」

「手段なんて選んでらんないからな、そうと決まればさっさと戦争遊戯を受け入れにいけ」

「色々ありがとうございます、アラル神父！」

「頭下げんな、俺は俺の目的のためにやってるだけだ、気を付けろよ」

そう言い終えるとアラル神父は再び雷と共に姿を消した。

「僕達も行こう！ベル君！」

「はい！神様」

それから少ししてオラリオ中に「ヘスティア・ファミリア」と「アポロン・ファミリア」による戦争遊戯が決定したという噂が広まった。

――【オラリオ郊外のとある山奥】――

森奥にある小屋の中に食卓を囲む3人の男達がいた。

「相変わらず人間達は愚か極まりないな。争いを好むなど、まるで悪魔の真似事だ」

「その癖に弱つちいもんな、愚か過ぎて呆れるを通り越して抱きしめなくなるな」

「まあそう言うな、アイツらにはこれといって天敵がここウン千年つていなかっただ。浮かれるのも領ける」

「そういえば、オラリオにネヴァン様の気配がした。あの方はどうしてるんですか？」

「ネヴァンか、最後に会ったのは歓楽街だったな…」

「そのような所に…」

「なんだ、行ってみたいのか？」メモメモ

「メモらないでください！まったく、マキヤヴェリ様のメモ癖は…」

「ハチマン：起きねえな」

「心配か？アラストル…」

「あの程度で倒れるなど…随分と軟弱な！」

「そうかつかすんなよ、ベル君☆」

「ですが…」

「きつと、話してんだろいな」

「マキヤヴェリ様、一体誰と？」

「中身だよ…」

三人の視線は近くの備え付けのベッドに寝かされているハチマンに注がれる。あるものは期待と、あるものは心配、あるものは疑問を胸に抱きながら彼の目覚めを待っていた。

#27 オラリオよ、俺は帰ってきた

アポロン・ファミリアの襲撃から1週間が経った。神様と一時的に別れた僕はロキ・ファミリアに頼み込んで秘密裏に特訓を受けさせてもらっていた。アイズさんを初め、ティオナさんやティオネさんと僕の四人でロキ・ファミリアの管理する訓練場でビシバシしぼかれていた。今はやつと休憩を挟ませてもらっている。

ティオナ「そういえば今頃ぼーえー君はどうしてるんだろうねー？」

ベル「アラル神父にオラリオ郊外に連れてかれて特訓してると思いますが」

ティオネ「へー、あの神父がねー…」

ベル「アラル神父とお知り合いなんですか？」

アイズ「私達の遠征に着いてくるの」

ベル「ええっ!?! そうだったんですか？」

ティオナ「ずーっと遠い所から見ただけなんだよー」

ティオネ「ファミリアの団員が死なないか高みの見物してるの。

死んだら遺体を回収して自分の所の墓地に埋める…だから死神って呼ばれてるの」

アイズ「深層に行ってもモンスターに狙われることがないのも不思議」

ティオネ「死体にしか興味ない奴があの子を目にかけるなんて絶対何かあるから気をつけるよ言っときな」

ベル「わ、分かりました」

アラル神父：中々闇が深そうな人だ。でも、あの人は悪い人な気がしない…どこか僕達を見守ってくれているような気がする。

フィン「やあ、特訓は順調かい？」

すると奥から4人のよく知った人達が現れた。1人は小柄な体に大きな力を宿したパルウム、1人は豪快が服を着て歩いているようなドワーフ、1人は冷静沈着な雰囲気のエルフ、最後の1人は鋭い目をし

た野性味溢れる狼人。

ベート「チツ！どうして俺が雑魚の見学なんかしなきゃいけないんだよ…」

リヴェリア「そう言いながら一番ソワソワしてたのはベートじゃないのか？」

ベート「うっせえ！ババア！！ぶっ潰すぞ！」

ガレス「ガツハツハツ！ベートは素直じゃないのお！」

ベートさんは心底嫌がってそうだけどその光景はつい最近まで僕達にもあつた幸せな日々だった。ハチマン…神様…ヴェルフ…リリ…。

フィン「聞かせてくれないかな？アポロン・ファミリアがあの時何をしたのか」

しやがんでる僕の目線に合わせてフィンさんが優しく問いかける。僕はあの日起こつた出来事を細かく伝えた。

フィン「そんなことが…」

何かを考えるようにフィンさんが状況を察した。

ティオネ「えげつないことするわね…」

ベート「はっ、気にくわねえ…」

ガレス「随分と豪快に仕掛けられたのお…」

フィン「まあ、君達が無事でよかつたよ」

そんなこんなで話をしていたら訓練は再開された。途中で参加した方々は僕を観察するように見ている。少し居た堪れないけどやるしかない。

「はああああああ！！」

（ハチマン…今頃どうしてるんだろう）

ナイフにハチマンへの思いを乗せて今日も訓練に励む。そして地面を転がるのはその一秒後だった。

ー【ポレポレ】ー

「パフェうめー…」

「あんた…最近まで重症だったんじゃないんかい？」

「我が娘が！愛娘が！考えた最高の一着ウ！」

と同時にその娘さんが恥ずかしそうに奥から持ってきたコートは確かに素敵なデザインだった。暗めの紫を基本色として、血管を想像させるような赤いラインが入っている。右肩には俺の知らない銀色の花が刺繍されている。

「この花は？」

「わ、私が作ったっていうマークみたいなものです…お気に召しませんでしたか？」

ヘアアイストスさんの武器みたいなものか…ふーん、いいじゃん。

「いや、そんな事はないです…いいセンスだ。なんて花ですか？」

「っ!!これはオオアマナです。私が好きな花で店唯一のお得意様のヒキガヤさんに着て欲しくて作ってみました。いいセンス…エツヘへ…」

すると褒められたのが嬉しかったのか笑顔いっぱい表情になり説明してくれる。なんだろう…この気持ち…これが妹萌えってやつか？

「店長…あと二つ…頼みたいことが…」

「服に関する事ならなんなりと申し付けてください」

「ズボンとブーツとインナーも新調したいんです。あと一つは…」

店長さんのやり取りは日は傾き空は橙色に染まろうとする頃に終わった。代金を払い終え店を出た俺は新しい服を体に馴染ませながらとある場所へと向かった。

ー【旧ヘステイアファミリアホーム】ー

(……………)

瓦礫の前に立ちすくむ。

自分ながら正直未練タラタラなものかどうかと思うがあの日は感傷に浸る暇もなかったんだ。今くらいは別にいいだろう。家が恋しくなるのは人間の本能なのだから…きつと間違っていない…はずだ。

懐かしい…ここに初めて来た日を思い出す。あの日は拒絶されなにかビクビクしながら敷居を跨いだっけ…そんでいざ暮らしてみるとボロくて建付けが悪いから木材とか煉瓦とか買ってリフォームし

たんだっけ…。

『クラネル…そっちにある板、取ってきてくれ』

『はい…床も張り替えるの?』

『まあな、見た感じ腐ってるのもあるし…せっかくの部屋だ、綺麗にした方がムードもでるもんでしよう? 神様』

『!…: そうだね! 部屋は綺麗にしてなんぼだよ!! 中身だけじゃなくて外見にも気を付けないとダメなんだぜ!』

今や苦労してやったのにこんな瓦礫に変わり果てちまってな…。胸にポツカリと穴ができた気分だ。

「アポロン・ファミリア…俺の家を奪った罪はデカいぞ…」

小さくそう呟き復讐を誓う。

「さてと、どこで寝泊まりしようかな」

冷たい風が頬を撫でる。

「はっ…はっ…ぶえっしよい!!」

次の日、今日はオラリオを囲んでる壁の上で訓練をすることになったんだけど…。

ベート「…チツ…どうして俺が…」

リヴェリア「……」

謎のエルフ「キツ……」

ベートさんとリヴェリアさんが見てくれているのは分かるけど、知らないエルフの人がこちらをずっと睨んでいる。ベートさんは相変わらず悪態をついているけどどうして来たんだろう。

そんな人達に囲まれながら僕はアイズさんとの訓練に打ち込む。あのエルフの人は僕が転ばされる度に少し笑顔になるのはどうしてだろう…。

アイズ「ベル…強くなったね…」

ベル「あ、ありがとうございます…」

褒めてもらった事は嬉しいけどまだ足りない。もっともっと強くなって、追いつかなきゃ…!

キヤツキヤツ…

「ん？」

少し下の方が騒がしいから上から覗いてみる。他の人たちも何事かと一緒に覗くとそこには信じられない光景があった。

「すごいすごい！！」

「速さが足りてるう！！」

「世界がちっぽけに見える…！！」

黒くて大きい手に乗った子供達がぐるぐる回っている。そしてその中心に紫のコートを着た見覚えのある男が立っていた。

「大丈夫かー？」

「It's so fun!!」

「ん、よろしい」

満足そうに少し微笑んだ彼は魔法を解除して子供達を地面に下ろした。

「あー楽しかったー」

「これじゃあふつーに走っても速さが足りないよー」

「世界が大きくなっちゃった…寂しい」

「じゃ、きーつけて帰んな」

「えー！もう終わりー？」

「責任取ってよー」

「僕を…もつと高みへ…」

「また今度な？俺用事あんだよ」

軽くあしらい子供達を帰路へつかす。彼…ハチマンは軽く欠伸をしながらその背中を見送った。

「ふう…戻って寝るか」

「ちよつと待ってー！！」

思わず叫んでしまった。周りの人達がガン見してくるのが恥ずかしい。

「てなわけで、久しぶりだな、ベル」

「ハチマン！もう大丈夫なの？」

「平気だ、寝てポーション飲んだらバツチりだ」

「相変わらず凄い回復力だね…」

本人ですらドン引きするくらいの回復力であり、それ故にアラストルとベル（おっさん）との訓練がえげつなくなつたのを思い出したハチマンは身震いした。

「そういえばここで何してるんだ？」

「訓練だよ、アイズさんに教えて貰ってるんだ」

「ほえ〜…」

ちらりとベルの周りを見渡すハチマン。

「ちよつと多くね？ヴァレンシユタインさんとリヴェリアさんがいるのは分かるがその他2人はどうしたんだ？」ボソボソ

ベート「聞こえてんぞクソ野郎！」

??「その他ってなんですか！その他って！私にはレフイーヤって名前があるんですから！」

その時、ハチマンの長年培ってきたヤバい女センサーが反応した。このレフイーヤって奴は危ない！関わるとうろくな事がないぞ！と本能が叫んだのだ。

ハチマン「あつ、ご丁寧にも、ハチマン・ヒキガヤっていいます…」

とつさに受け身に回ることと敵対心が無いことを相手に悟らせる高度なテクニク。これには本人も惚れ惚れしている。

レフイーヤ「意外と礼儀正しいんですね…」

ベート「俺は無視かよ！」

ハチマン「いや別に…」

ベート「あからさまに目え逸らすな!!」

するとハチマンとベートの間にアイズが割って入った。

アイズ「2人とも…喧嘩はダメ…」

「もう二度としません…あ？」

意外な所で息ピッタリなのを発見したりヴェリアは微笑んでいた。それをチラリと見たハチマンは少し顔を赤らめた。そんな彼を他所にアイズが近づく。

アイズ「ハチマンはこの1週間…何してたの？」

ハチマン「言わせないでくれ…思い出したくない」

遠い目をしながらただそれを告げるハチマン…。一同が状況を察して目を逸らす。その中ベルはひっそりとそんなハチマンに憧れを抱いていた。

(やつぱりハチマンは凄いなあ…)

ハチマン「そんな事より…戦争はどうなってるんだ？」

ベル「あつ！聞いてハチマン！ヴェルフとリリ、そして命さんが僕達のファミリアに入ることになったんだ！」

ハチマン「おお…そりやありがたい」

ベル「あとね、ヘルメス様の計らいで助っ人が1人参加してくれるんだって」

ハチマン「助っ人…ヘルメス…つていつたらあの人しかいないな…後でお礼しに行かなきゃな」

ベル「そうだね」

ハチマン「で、特訓はどこまでいったんだ？」

アイズ「試してみる？」

それはハチマンとベルの一騎打ちの提案だった。最初は両者ともに困惑していたがその提案に乗ることになった。

ベル「負けても泣かないでね！ハチマン！」

ハチマン「そのセリフ…そつくりそのまま返してやる」

ハチマンがポケットから出した1ヴァリス硬貨を指でピンと弾く。それが地面に着地した瞬間…勝負は始まった。

「ぜああッ!!」

最初に動いたのはベルだ。2本のナイフを構えハチマンに突撃する。ハチマンの手にはフォースエッジが握られている。

ガキン!!

金属のぶつかる音がして火花が散る。斬撃はハチマンには当たらず2本のナイフをフォースエッジで受け止め防いだからだ。

(だったらー！)

片方のナイフを手前に引きもう一度ハチマンに向けて斬撃を繰り返すがハチマンが上に飛ぶことで躲かされてしまった。

「ファイア・ボルトオ!!」

すかさず魔法を上空にいるハチマンに向けて打つ。ハチマンのいる場所が爆発する。

(やったか…?)

爆煙から離れ様子を探るベル。

「やったか…って思ったのなら、とんだ思い違いだな」

「!!」

爆煙から黒い斬撃が飛んできてナイフで受け止めるが威力に押しされ4、5m飛ばされる。

「普通の冒険者ならやられてたな」

「へへっ…まるで自分が…普通じゃないみたいない言い方だね」

倒れながら笑って答えるベル。

「異常…なんだろうな、俺も、お前も」

「違ういや…」

「おい、立てるか？」

「ちよつと手を貸してほしいな」

「世話のかかる奴だな…ほら」

差し出したハチマンの手を掴んで立ち上がる。手袋越しだけどそこには確かな温かさがあった。

「じゃ、腹減ったから飯食ってくる…特訓頑張れよー」

手をヒラヒラさせて去るハチマン…しかしそんな彼の袖を掴む一つの影があった。

「まだ何か…?ヴァレンシユタインさん…」

「行っちゃ…ダメ」

「ダメって…空腹なんだけど」

「約束…」

「約束って…じゃが丸くんか…今じゃなきやダメ？」

「今がいい」

目を輝かせながら見つめられるハチマン。昔からそういう曇りなき視線には人一倍耐性がないから答えは一つしかなかった。

「分かった」

しかし、ハチマンは了承こそしたものの他は許さないとはいえず、例えばイズが良いと言っても他の団員達が許すはずがない。一言でもNOと聞ければ「あつ、じゃあ失礼します〜」って帰る算段だ。我ながら最高の作戦だと内心自画自賛しているのを他所に

ベル「ハチマンの手料理はすっごく美味しいんですよ！お菓子とかもとっても美味しくて！ほっぺが落ちちやうって神様も絶賛してたんですから！」

リヴェリア「ほう、それは是非食べてみたいな」

ベート「ほー、持ち上げんじやねえか…上手くなかったらぶつ殺すからな？」

レフィーヤ「アイズさんが取られちゃう…でもお菓子…うう…迷っちゃだめなのに…私もお腹すいてきた…」

どうやら無邪気なベルによつて外堀も固められたらしく逃げ道がなくなつたようだ。

(こりや観念するしかないのか…)

内心後悔しているが30分後に歓喜に変わるのはまだ誰も知り得なかつた。

【ハチマン・ヒキガヤの観察レポート】

○月？日

オラリオ外にある研究所(仮)にハチマンが運ばれた。アポロン・ファミリアによる襲撃で重症を負つたらしい。ある程度の傷ならポーシオンやハイポーシオンを使って塞ぐ事はできたらしいが心臓の損傷が激しい。応急処置としてハヤト・ハヤマに装着させたネオ・アンジエロXを作つた際に余つた【ギルガメス】があつたのでハチマン・ヒキガヤの傷に流し込んだ。【ギルガメス】の性質上意思こそないが宿つたからには絶対に宿主を生かすという研究成果がある。予想は的中してみるみるうちにハチマン・ヒキガヤと同化した。その適合は驚くほど早く、ハヤト・ハヤマが霞んで見えるほどだ。コイツで実験したい気持ちをグツと堪え回復を見守る事にする。

○月△日

次の日にはハチマン・ヒキガヤの傷は完治しており意識も覚醒していた。いくらなんでも早すぎる、マジでなんなの。その日からハチマン・ヒキガヤの強化訓練が開始され、その内容は悪魔でも泣き出すレベルだ。アラストルも言っていた。「Devil May Cryな訓練にしたろ」ってな、昔から悪知恵だけは群を抜いていたからな、改めてイタズラされないように細心の注意を払わねば。ベルもといベリアルも恨みにも羨望にも見える眼差しで彼を見つめていた。聞くに次の日の担当は彼らしい。私も早急にアレを完成させなければいけないが材料が圧倒的に足りない。ふむ、どうしたものか……。訓練後ハチマンの体を改めさせてもらったが中々仕上がっている。無駄な脂肪は根こそぎ削ぎ落とされており筋肉も無駄に膨張していない。すげ

○月□日

明朝に3人で話し合い、ハチマン・ヒキガヤを強くする為には人である事を少しずつ辞めてもらう方針に固まった。あんなデタラメスベックをしているが一応人間なのだ。首を切られれば死ぬし毒を飲んでも死ぬ：はず。よって彼の食事に我らの血を少し混ぜて食わせてきっかけを作ってやることになった。いざ食わせてみると味とかにケチを付けられた。少々頭にきたので後で料理本を読んでみることにした。後は夜になったら恋バナというのも4人でしてみたが中々楽しかった。どうやらアラストルには恋人(悪魔)がいたらしいがスパードに浮気しようとしたら切り刻まれたらしい。本人も納得しているがスパードもやる事がえげつない。そういえばスパードは女性関係が広いが浮気を絶対に赦さない男だったと思ひ出した。ハチマンにも聞いてみたがどうやら好きという感情が麻痺しているらしい。よって私が気を利かせて彼に休暇を与えることにした。どうせ私の訓練は装置無しでは成り立たない。ならば、人間性を磨くのも訓練だ、とゴリ押しして彼に1週間の休暇を言い渡した。オラリオに行くにはアラストルの早馬を使わせよう。

#28　そして俺は、知らぬ感情に悩む

ー【ロキ・ファミリアのキッチン】ー

そこには全てが揃っていた。用途毎に使い分けられるな鍋、ピカピカの包丁、ボロボロじゃないまな板「ブエックション!」、凸凹してないフライパン、新鮮かつ豊富な食材達…。

ハチマン「ま、まさか…本当にここを使ってもいいのか…?」

アイズ「うん…」

だったらツ…だったら俺も本気で作らねば…無作法というもの…。ハチマン・ヒキガヤ、推して参ろう!

ベル「そんなに嬉しいんだ…壊れちゃったけど前のホームはダメだったの?」

八幡「馬鹿にしてるにも程がある…」

ベル「そこまで!」

そりやそうだ、ヴェルフに会うまで穴の空いたフライパンを使ってたんだ。食材が焦げないように、落ちないように上手く調節するのがマジでキツかったんだぞ。

ベート「マズイの作ったら容赦しねえからな?」

ハチマン「当たり前前だ、お前達の舌に合わなかったら俺は二度と台所に立たないと誓おう」

ベート「そこまで腹くくんのかよ…」

ハチマン「こんな良い台所を使わせてもらえるんだ、それで失敗したら料理人の名が廃る」

リヴェリア「覚悟は良いが何を作るんだ?」

ハチマン「うーん、少し材料確認しますね…米はある、ケチャップも、グリーンピースもある、あれもこれも…じゃあオムライスでも作るか」

コートを脱いでベルに預けてエプロンとバンダナを着ける。手を洗い、食器や調理器具も洗う。材料も並べて調理に取り掛かる。

アイズ「私も何か手伝う?」

ハチマン「いや、いい…なるべくこのキッチンを独り占めしたい」

ベル「そこまでこのキッチンに惚れ込んだんだ…」

アイズ「むう……」

リヴェリア「アイズ、いくらなんでもキッチンにヤキモチを焼くな」
アイズ「だって…」

ヴァレンシユタインさん改めアイズさんとリヴェリアさんの会話やベルとベートのチグハグな会話や匂いに釣られてやってきたヒリュテ姉妹の小さな喧嘩といったBGMに耳を傾けながら手を進めていく。

レフィーヤ「結構手馴れてるんですね」

カウンターからひよっこ顔を出したレフィーヤに羨望の感情が含まれた賞賛を頂く。

ハチマン「まあ、ガキの頃からこういうのやってたからな…」

レフィーヤ「慣れだったんですか…：てつきりヒキガヤさんのお母様
が作っているのかと…」

ハチマン「まあ、普通はそうだろうな」

レフィーヤ「普通は？」

ハチマン「俺の場合…自分の飯は自分で用意しなくちゃいけなかったからな…」

レフィーヤ「えっ…それってどういう…」

ハチマン「俺は…あの人達の子供であって家族じゃなかったから…」

レフィーヤ「………」

ハチマン「ああ…すまん…湿っぽい話をしちゃった。そら、もうすぐ完成するから手洗って席つけ…な？」

レフィーヤ「なっ、分かってますよ！子供扱いしないでください！」
プリプリしながら引っ込んでくレフィーヤ。いかんいかん…あんな過去…忘れなきやいけないのに…柄にもなく語ってしまった。きつと心の何処かに後悔とかあるのだろうか…もう遅いのに…二度と帰れないのに…切り捨てた方が楽なのに…。

ハチマン「全員分行き届いたな？それじゃあ…」

(一部除く) 全員「いただきまーす！」

パクっ……

(一部除く) 全員「おいしー!」

口にあって良かった…恥ずかしくて声も出せなかった狼人もバクバク食っちゃまってお代わりが欲しそうにチラチラとこつちを見る。

ハチマン「ほらよ、一つ余った」

ベート「あ?お前の分がねえじゃねえかよ」

ハチマン「ガタガタ言っていると他のやつにやるぞ?」

ベート「チツ…受け取ってやるよ」

チヨロ……

ハチマン「アイズさん…あとこれ…」

アイズ「!!…じゃが丸くん」

ハチマン「じゃが丸くんハチマンズスペシャルver. 9. 1. 3」

リヴェリア「そんなに作ったのか…?」

ハチマン「いや、設計段階でボツになったのもありますから…アイデアでいえばもつとあります。まあどれも人に出せるもんじゃないんですけどね」

アイズ「…おいしい…!」

レフィーヤ「ツ……!!」

ハチマン「感謝ならベルに言ってくれ」

アイズ「?どうして?」

ハチマン「9. 1. 3ができたのはそれまで数々の試食&感想を言ってくれたベルのお陰だからな」

ベル「僕は別に…食後のデザートみたいな感じで出されてただけだから…凄いのはハチマンだよ、どれも見た目は同じなのに味とか飽きないようにアレンジされてるんだもん。毎日楽しみだったんだ」

ハチマン「ふっ、ハチマン冥利に尽きるぜ」

ドドドドド…!!

そんな会話をしていると扉の向こうから大量の足音が押し寄せてきた。扉が開かれるとヨダレを垂らしたロキ・ファミリアの団員達が流れ込んできた。

リヴェリア「お前達…どうしてここに…」

「「良い匂いがするから飛んできました！」」

ざっと数えて100人超え…そこからは数えるのを辞めた。頭痛
なくなってきたんだもん。

リヴェリア「だそうだが…大丈夫だろうか？」

少し眉を潜めてリヴェリアさんが聞いてくる。いつもなら断って
いたけどリヴェリアさんをお願い…ゲフンゲフン、俺の料理を待ち遠
しくしてくれているのだ。NOとは言えないな。

ハチマン「まあ、材料とか買ってきてくれるなら…」

フィン「だ、そうだ！後ろにいる者は材料を買って来てくれ！」

「はい!!」

ハチマン「フィンさん…いつの間に…」

フィン「僕も匂いに釣られてやってきたんだ、迷惑だったかな？」

ハチマン「いえ、別に…」

「そっだよ」なんて言えない…後ろのテイオネさんの鬼のような形相
が控えているのだから…。

フィン「この数だけど大丈夫かい？」

ハチマン「ふっ…別に…満腹にしてしまっても構わんのだろう？」

フィン「頼もしいよ」

さてと、エプロンの帯を締め直して再び台所に立つ。たまには剣で
はなく包丁を振るうのも悪くないと考えてしまう。

二時間後……

「「ご馳走様でしたー…」」

ぜえ…ぜえ…ぜえ…流石に疲れた…誰か全部捌いた俺を褒めてく
れ…。疲れすぎて列に5、6回ベートが並んでるように見えたんだが
末期だろう、もう。

フィン「凄いね…あれ程の数を捌くのにも関わらず味を落とさない
なんて、何かコツでもあるのかい？」

ハチマン「俺の料理を待っていて…それを知ってるから」

フィン「君は見た目に反して…優しさを持ち合わせているんだね。
やはり冷酷無慈悲という噂は噂に過ぎないんだね」

ハチマン「優しいねえ…生憎俺はそこまで優しくありませんよ。並んで歩いてるカップルの間をズカズカと通れるくらいは意地が悪い」
ベル「わ、悪い…!」

ハチマン「さらに、彼氏が転んだらめっちゃ染みる消毒液を渡す位には無慈悲だと自負します」

ベル「ぎ、残酷だツ!!」

ククク…痛みで悶絶する姿が実に滑稽だ。思い出すだけで笑いが込み上げてくる。これが…愉悦…か、悪くない。

ハチマン「ねっ?」

フィン「どうしてそんなに自信に満ち溢れてるのは分からないけど…理解はしたよ」

ならいいんです、と話を切りあげる。

ベル「それじゃあお腹もいっぱいになったので…アイズさん、テイオナさん、テイオネさん特訓、お願いします!」

ハチマン「おっ、頑張れー」

レフィーヤ「ヒキガヤさんは鍛えないんですか?」

ハチマン「そうしたいのは山々なだけだな…」

体内のギルガメスの事もあるし…何より今めっちゃ疲れてるから…極力動きたくないんだよな…。

レフィーヤ「むくっ!勝負です!!」

ハチマン「は?」

どうして訓練を渋ったら勝負を持ちかけられるの?ポケモントレナーなの?目すらろくに合っていないのに。

レフィーヤ「1週間後に戦争遊戯が控えてるのに怠けてちゃいけません!ベル・クラネルが頑張ってるのに貴方がサボるなんておかしいです!」

ぐうのねも出ない意見…。ベルは頑張ってるのだからお前も頑張れ…ね。言ってる事は正しい分余計腹が立ってきた。

ハチマン「分かった…応じよう」

―【訓練場】―

ハチマン「悪いな、使わせてもらって」

アイズ「ううん：ベルも見て勉強した方がいいと思うから…」

ベル「ハチマン！バツチリ見てるからね！」

ティオナ「ぼーえーくーんもレフィーヤも頑張れー」

ティオネ「レベル差は歴然：どう仕掛けるのかしら…」

リヴェリア「さて、お手並み拝見といこうか」

他にも立派な髭のガレスさんやフィンさんが観客席で見ている。好奇心に駆られた目に晒されるのはいい気がしないが今は集中せねば：なんせ相手はレベル3：だったっけ？次元が1つしか変わらないう相手だ、アラストルやベリアル：ベオウルフにギルガメスとかに比べれば赤ん坊みたいなものだ。

「さてと：勝ちに行くか」

さあ、今日も戦闘だ。

お互いに見つめ合う。その距離は20m、レフィーヤの手には杖、対して俺はフォースエッジ：ではなくて最近出番が少なくて寂しそうにしていた閻魔刀が手に握られている。

アイズ「じゃあ、いくよ」

アイズさんがコイントスをして1ヴァリスが宙を舞う。コインから目を離しレフィーヤに視線を移す。あいつ：まだアイズさんをチラ見ている。見とれるのは分かるけど大丈夫なのか？

チン：

「解き放つ一条の光、聖木の弓幹。汝、弓の名手なり。狙撃せよ、妖精の射手。穿て、必中の矢：アルクス・レイ!!」

超速の光の弾が飛んでくる。ホント早い：でも反応できない訳じゃない：特訓してなきや殺られてたかもな。ん？：あいつ：もう勝ったような顔してやがる。

「なめるなツ：い」

閻魔刀で目にも止まらない速さで居合を繰り出すと無数の斬撃によって光の弾は切り刻まれ消滅した。

「なツ!？」

「決める…」

高速で移動することによって互いの距離を瞬時に詰める。後ろに回って閻魔刀の刃を細い首元に近付ける。

「降参してくれると、たすかる」

「は、早い……でも……」

後ろ蹴りを繰り返そうとするが地面から生やした【魔界金属ギルガメス】によって構成された漆黒の棘がその眼前に迫る。

「まだ抗うか？」

「くっ……降参、します」

降参の言葉を聞くとギルガメスを引っ込める。閻魔刀も納刀して青い光に分解して体に吸収する。

「強い、ホントにレベル2……？」

「誘い文句は良かったけど、戦闘^{ブレイ}がお粗末だったな。それに相性を考えろ。アンタ、前出てガンガン戦う奴にどうやって勝つか対策考えてなかったら……次があったら気を付けろよ」

言いたい事を一頻り言い終わると彼女に背を向けて戻る。疲れた：ギルガメスを使うと楽なんだけど動きながら使う訳だから同時思考もしなくちゃいけないくて疲労感が半端ない。

「おめでとう」「おめでとー！」「凄いわね」「やるのう」「凄いじゃないか」……

観客席で控えてた人達が賞賛の声を浴びせてくれる。勝って褒められたのってこれが初めてかも？

「どうしてそんなに強いのか？」

ふと、アイズさんが問いかける。真面目にやってきたからよ！なんて事は口が裂けても言えない。

「強くない……」

「君は充分強いよ？」

「だったら家を奪われちゃいない」

「……」

「ツ……悪い、色々あって混乱してんだ、今日はもう戻らせてもらう。ベル、4日後教会に來い。戦地まで送ってく」

「う、うん……」

「訓練、頑張れよ」

足早にロキ・ファミリアのホームを出て行く。最低だ、俺って…アイズさんは何も悪くないのにキツく当たってしまった。切り替えもできない俺に嫌悪感が湧いてくる。

(助けてほしかった…)

こんな気持ち…どうしたら消えてくれるんだろうか。オンボロ教会の長椅子の寝転がりながら蠟燭の炎に照らされているバカでかいステンドグラスを眺める。

その絵は上・中・下の3段で構成されており、上段には楽しそうに食事をする神々…そして中段には必死に農作物や家畜を殺してる人間…そして下段には人間を食してる悪魔がいる。

「ん…？」

下段のステンドグラスの真ん中に気になる物があった。数々の悪魔が人間を食してるのにも関わらず独りの悪魔が4枚の羽を広げ今にでも泣きそうな顔で上に手を伸ばして何かを欲している絵だ。

(やつも俺と同じ異常なんだろうな)

共感を覚えてしまい変な気分が駆られる。

ギイイ…

蠟燭の炎が揺らめき扉の隙間から風が吹き込んできたのを教えてくれる。客か？こんな時間に珍しいな。

「誰だ…？」

重い頭を上げて客人に目を向ける。そこにはアイズ・ヴァレンシユタインが立っていた。

「どうしてここに…？」

「お話をしに来たの…」

「取り敢えず、座ってくれ…」

突然の来客に困惑しながら向かいの椅子をこつち側に向けて座る部分をハンカチで拭いて案内する。一体どうしてこんな所に…？

「畜生…!!」

アポロン・ファミリアのホームにてアポロンは宛もない悪態をつ

く。今まで順調に思えた計画が大幅にズレたからだ。

「ヘスティアが体調不良により1週間も休むとは…！」

しかしそれは自分たちが大きく関わっているから納得するしかない。無理な襲撃によってヘスティアの気を損ねたからこうなるのは織り込み済みだった。

「問題は…！」

ドンドンドンドンドン!!

「アポロン様!!まだトイレですか!？」

「少し待て!腹の痛みが収まらんのだ!」

ファミリア内において謎の腹痛が蔓延している事だ。ヘスティアが戦争遊戯に応じてくれたのが堪らなく嬉しくてファミリア内で祝会を開いた翌日からこうだ。皆揃って腹を下している。すれ違いでトイレから出てきたヒュアキントスもさつきゾンビみたいな顔をしており心がとても痛んだ。ついでに腹も。

「アポロン様あああああああ…」

「待っておい!今ミルクィウエイならぬブラウニーウエイをかけておるのだ!」

20分後…

「ぜえっ…ぜえっ…ふう」

身体中の水分が殆ど流れてった気がする。水分補給をしなくては…。

ゴキユゴキユ…

「ぶはあっ!この爽快感よ!砂漠で遭難してやっとの思いでオアシスを見つけたような気分だ!」

「アポロン様、いかが致しましょうか?」

目の前で跪くヒュアキントス…しかしその右手は腹に…左手は尻に当てられている。ヒュアキントスよ、痛みを耐えながらもなお私に尽くしてくれるのだな。

「うむ、すぐさま原因の究明とディアンケヒト・ファミリアから効果的な腹痛薬セイ・ロガンを買って占めてくるのだ!」

「はっ!」

ギョルルルルル……

「うぐう!!??」

これは暫く時間がかかりそうだ。そう思いながら私とヒュアキン
トスはトイレの前の長蛇の列に並ぶのだった。

#29 気分はリア充か月乙女か蛇

「……」

「……」

目の前に座る少女、アイズ・ヴァレンシユタインは沈黙を貫いている。口下手なのかモジモジしながらチラチラとこっちを見ている。

「話があるって言ってたけど、何の用？」

「謝りたくて……」

「謝るって……何も悪いことしてないでしょ」

「ううん……私、あの後ベルに聞いたの」

沈んでいく太陽と共に彼の背中が遠ざかっていくのをただ見つめることしかできなかった。彼を怒らせてしまったのだろうか……彼を悲しませてしまったのだろうか……いつもなら感じることの無い不安が心に根付く。

「アイズさん……」

「ベル……今は1人にして……」

折角来てくれたのは有難いけど、訓練はテイオネとテイオナに頼んで、そう言おうとした……その時だ。

「アイズさん、本当にこれで良いんですか……？」

「……」

「ハチマンは気まづくなったら二度と接してこようとしませんよ。幾ら時間が掛かって……絶対に、です。それで良いんですか!？」

それは凄く……困る。理由は分からないけど……彼と、ハチマンと話せなくなるって思うと胸がモヤモヤする。そんなのは、嫌だ。

「……!!」

大地を蹴ってホームを飛び出す。今の私は、誰にも止められない。彼が集合場所に指定していたアラル神父の教会に行ってみよう……!

「ベル……そんな事言ってたのか……」

「うん……」

少し傷付くんですけど…。いや間違っちゃいないんですけどさ、いざ言われるとくるものがあるなあ…。

「その…ごめんなさい」

「謝るのは俺の方だ。家すら守る力が無かったのは俺…アイズさんには落ち度がこれっぽっちもない…」

「でも…貴方が傷付いてるのを知ってた…」

ベルめ…余計な事をベラベラと喋りやがって…今度じゃが丸くにワサビたっぷり入れて食わしてやる。

「許すから…そんなにしよげんなよ」

「本当？」ズイ

急に詰め寄ってこないで！前髪が目の前で揺れて…うおっ、いい匂いするなあ…やめて！見ないで！そんなキラキラした目で見られるとハチマン溶ける！

「ほほほほんと…だから…ち、近い…」

肩を掴んで押し出し距離を離す…アツ、とか寂しそうに言わないの。俺じゃなきや尊死してるね。

「じゃあ明日も来ていい？」

「まあ…勝手にしたら…」

「うん…！」

「もう遅いから…帰りな…リヴェリアさんとか、レフィーヤさんとかが心配するぞ」

「分かった…じゃあ、また明日…ハチマン」

手をフリフリしながら帰っていく…アイズさんと話してるとペーすが乱れるな…また明日…ねえ。

「期待はしとくか…」

じゃあ、いつ来ても良いように掃除しとくか…。

—次の日—

「…て…お…て…おきて…」

「んあ？」

ハチマンの重い瞼が開く。ステンドグラスから朝日が差し込み目

にダイレクトに入る事はなく、目の前の3つの影がそれを遮り、その輪郭から光が漏れる。

「あつ、起きた」

「ようやく起きたか」

「ぼーえーくん！おっはよー！」

寝起きで重い体を起こし目を擦りながら彼はその声の主を見る。

1人は中腰でこちらを覗き込んで、1人は少し呆れ気味に立っており、1人はは腕を後ろに組みながら笑っている。

「どうして…ここに？」

「昨日…来ていいって」

「ええ…次の日の朝から来る奴がいるかよ…」

「じゃあ、帰る？」

若干しよんぼりしてる雰囲気を感じ取るハチマン。そして後ろの2人は彼をじーっと見ている。

「いや、折角来てもらったのに悪い…シャワー浴びてくるから待っておれい」

着替えとコートを持ってシャワー室に入ってから10分、タオルで髪を拭きながら出てきた彼はエプロンを付けて台所に立った。

「朝飯は済ませたか？」

「うん…」

「朝早く出たから食べてないな」

「お腹ぺこぺこだよー」

「ええ…」

だったら食ってから出れば良かったのでは？なんて口が裂けても言えない。なぜなら台所に立った瞬間3人の目付きが飢えた獣のように豹変してハチマンを見ているだから。

「適当に済みますか…」

調理をして約20分、食卓に着く3人の前に数々の品が置かれた。どれもこれも適当の範疇を超える出来だった。

「見てわかる…」

「これは絶対…」

「美味しいッ……！」

柄にもなく目を輝かせてハチマンが席に着くのを待っている。気にせず食べればいいのに……とはあえて言わない。

「それじゃあ」

「……いただきます（まーす！）」

料理が3人の口に運ばれる。反応が気になり少しソワソワする彼……しかしそれに気付くのは誰一人としていない、なぜなら既に3人の意識は料理に持ってかれたのだから。

「凄く美味しい……」

「食べた途端故郷を思い出したぞ……」

「気分はハイジ……」

中々の反応に小さく頷きながら一口食べる。そんなに美味しいのか？とか思いながら咀嚼していく。

そんな微笑ましい光景も時が過ぎれば終わり、片付けも済まして長椅子に腰掛ける。対面には3人が座っている。

「……」

圧倒的無言。アイズはハチマンを凝視し、リヴェリアは目を瞑り、ティオナはステンドグラスに目をキラキラさせてる。

「ベルは頑張ってるか？」

沈黙を破ったのは珍しくハチマンだ。

「うん、凄い勢いで成長してるよ」

「そっか……」

「ハチマンはこれから何するの？」

「そうだな……仕込みでもしに行くか……」

「……仕込み？」

「ま、勝負は開始前から始まってることですよ」

ニタア、と不敵に笑う彼に疑問と少しばかりの畏怖を感じる3人であった。後に普通に笑ったつもりのハチマンはそれを聞いて少し涙目になった。

アポロン・ファミリアにて

「ううぬ…」

偶然ミアハ・ファミリアで3割引にされていたセイ・ロガン（セツトで色々を買わされたが）を買い占めファミリア内に普及させる事で何とか蔓延していた謎の腹痛は収まり、先日には神会して戦争遊戯の細かいルールや形式を決めることができた。

・我がファミリアが勝った暁にはベル・クラネルとハチマン・ヒキガヤを迎え入れる

・もし、億が一、いや、一兆分の一の確率で負けた場合ヘステイア・ファミリアの言う事をなんでも聞く

・戦争形式は攻城戦、先行はヘステイア・ファミリア

・ヘステイア・ファミリアはフレイヤの計らいにより、助っ人が導入された。但し都市外のファミリアの構成員だ。

ここから見るに我が子達は負ける道理が一切ない。たかが構成員2人に α だ。ヒュアキントスやダフネを筆頭とした優秀な子供達が戦局を見誤ったりしない限り大丈夫だろう。

しかし一つ気がかりがある。

ハチマン・ヒキガヤだ。奴は神会でも他の神々が言っていた通りレベル2の道から外れた桁違いな力を秘めている。奴さえ完封できれば問題は無いのだが…

「どうしたものか…」

別にハチマン・ヒキガヤが喉から手が出る程欲しいわけじゃない。ただ、不思議な何かを感じるのだ。我が子達を打ちのめせた恐怖でも打ちのめした怒りでもない。彼を見るとどこか体の芯が痺れるような感覚に襲われるのだ。

「アポロン様…」

ヒュアキントスがやってきて我が思考の連鎖を遮る。どうしたんだ、と感情を悟られぬようゆつくり言葉を紡ぐ。

「客人が…」

「一体何の用だ？」

「どうやらハチマン・ヒキガヤに対抗できるらしく…」

すると奥からガシャツ…ガシャツ…と鎧特有の金属の擦れる音が

響く。その男は銀色の鎧を身にまとい私の3m先に立っていた。

「ほう…ハチマン・ヒキガヤをどうにかできるのだな？」

「……」

すると無言でその男は頷く。私に対する不敬だとヒュアキントスが剣を抜こうとするが手を横に出しそれを遮る。気迫だけで分かる。彼は強い

、とてもヒュアキントスが太刀打ち出来るような相手ではない。私は子は信じるが特攻させてやるほど冷徹でもない。

「では、主神権限をもって今から貴様をアポロン・ファミリアの臨時構成員として認めよう。本番では好きに動くといい！所で貴様…名は？」

「……ネオ・アンジエロ」

そう小さく呟くとネオ・アンジエロは踵を返して帰っていった。

「アポロン様、宜しかったのですか!？」

「ハチマン・ヒキガヤと対峙しても貴様は勝てどタダでは済むまい。リスクを抑えたに過ぎん」

こうも都合よく駒が揃うなんて…どうやら私は幸運の女神にすら愛されているようだ。そう思うと自然と笑みが零れてしまう。

「この勝負…貰ったぞ…！へスティア!!」

「ふう…」

戦争の仕込みも終わった…昼飯も色々と済ませた…後やり残したのは…一つあったな…夜やるか。はあ…汚れ仕事が多すぎる気がするぞ。

「日も傾いてきた、帰ったらどうだ？」

振り返り、今日一日べったりくっついてきた3人に帰宅を勧める。

「まだ夕方…」

しかしそのうちの一人が口答えをする。

「でもな、遅くに女3人で歩いてたら暴漢に襲われるかもしれんぞ」

「大丈夫、私達、強いから」

「そーだそーだ!」

「余り悔ってもらっては困るぞ」

「でもなあ、もうする事ないんだ今日の所は大人しく帰りな」
「ダウト」

間髪入れずリヴェリアさんが指摘してくる。そう、これは教えて貰ったことだが、彼女は人の嘘を見抜けると神に似た芸当ができるらしい。厄介だな…。

「そりや帰ったらやる事とかありますよ」

「適当にピアノ弾いたりとかね。」

「それに俺達は別のファミリア、あんまりベタベタしてる所を見られても困るのはお宅らでしょ？」

その一言が決め手となったのか渋々と3人が帰っていく。その背中を見送っているとアイズが振り返る。

「また今度ね」

「明日は勘弁してくれよ…」

そう言うのと心做しかクスツと笑った彼女は2人の背中を追っていく。全く、ベルに見られたら怒られそうだな。

「さてと、最後の仕事に行くか…」

教会とは別の方向に向かっていく。

仕事内容を頭の中で整理する。

・クライアントはソーマ

・自分がほったらかしにしてたファミリアの財政を見直してるとを見直してると不審な点が見つかった為、その不穏分子を排除して欲しいとの事…手段は問わないらしい

・これは今日リルルカを訪ねた際に聞き、犯人は団長のザニスに間違いないとの事、他にも色々黒い事業に加担してるらしい

聞いた限りかなりの金の亡者らしく、金のためなら殺人も厭わないらしい。悪行の数々も氷山の一角に過ぎないらしい。

「改心…は無理だな」

したところで今までの悪行も消えることは無い。そいつのせいで悲しんだ人も少なくなかろう。裁くにしたって誰かが手を汚さなくちゃいけない。

「そこで俺だな…」

どうせ手なんて幾らでも汚れてんだ。今更なんて事ないだろう。

「着いたな…」

ソーマ・ファミリアのホームに到着した頃には日は沈み月が俺を照らしていた。

「さてと、月にかわっておしおきといこうじゃねえか」

クイツクシルバーで時を止めて、10カウントの間にホーム内の適当な倉庫に入り、能力を解除する。マジックポーションを飲んだら少し開けた扉の近くに待機する。気分はスネークである。

カツ　カツ　カツ…

足音から察するにどうやら2人だ。

「最近のソーマ様、変わっちゃったな」

「そうだな、まあ、いい変化なんじゃないのか？神酒とまではいかないが美味しい酒はくれるしよ、ステイタス更新だって無料でしてくれるしな」

どうやらソーマの変化はウケがボチボチらしい。

「違えねえ、けどよ、うるせーのはザニスだよな、テメエの収入が減ったからってギャンギャン喚きやがってよ」

「ザニスと言えば聞いたか？ヘステイア・ファミリアをアポロン・ファミリアが襲撃した時にザニスも加担しようとしたらしいがソーマ様が止めたらしい。どうやらヘステイア・ファミリアの亡影と仲が良いらしい」

「あの亡影が？噂じゃ結構な女たららしいな
ん？」

「マジかよwwそりや罪深けーn」

チャキツ…

ルーチエとオンブラをそれぞれ2人の頭に近付ける。

「大声出したら一瞬で頭とお別れさせる」

ガタガタと震えながら両手を上にあげ無抵抗のポーズをする。

「よろしい、分かったらゆっくりと後ろの倉庫に入れ」

2人を誘導して倉庫の中に入れる。何かアクションされても困る

からギルガメスを幻影剣に纏わせ2人の喉元に突きつける。

「ぼ、亡影、なぜここに…」

「ちよいとザニスに用があつてな、大人しくするなら傷付けやしないが…」

「な、なんでも話す。だからどうか…」

「ザニスは何処にいる?」

「中央階段を登って3階に上がってすぐ目の前にある部屋の隣だ。この時間なら金の勘定をしてるハズだ」

本当かどうかを軽く探るために透明な魔力を俺を中心にしてドーム状に広げハンターハンターの円のようにして人の場所を探る。ふむ、どうやら3階の中央ら辺に人がいるな。

「分かった、協力感謝する」

幻影剣を解き2人を解放する。

「ソーマは…ああ見えてアンタらに向き合おうとしてる。今までの事を考えればそう上手くいかないのは分かるが、不器用ながら頑張ってるんだ。支えてやってくれ…それと、俺はたらすほど女に免疫なんてない。覚えとけ」

素晴らしい倉庫から出て時を止めて3階に上がって中央右部屋に入る。ザニス金を握りしめて名簿みたいのに何かしらを書き込んでいる。制限時間も近づいてるため、ザニスな猿轡をしてベオウルフで金魂を思いっきり蹴りあげて解除する。

「~~~~~ツツツ!!!」

白目を剥きながら倒れたザニスを予め持ってた麻袋に入れて口を縛る。他にも関係がありそうな書類とかもあら方纏めて懐に仕舞い、金庫に入ってる金を全て頂戴する。他にも床とか棚をひっぺがしたりして何か隠してないか隅々まで探す。

「これでよし…」

金が大量に入った袋とザニスを抱えて隣の中央部屋に入る。

「よ、久しぶりだな、ソーマ」

「ハチマン、怪我は大丈夫なのか?」

「ダメだったらここにはいない。依頼通りザニスとその悪事の数々と

金は俺がかつさらつてく…いいんだよな？」

「ああ、ザニスは欲に溺れすぎた、これではファミリアが正常に機能しなくなる。アーデも、帰って来れない」

そう、リリルカはファミリアを脱退する事はできたが改コンバージョン宗はザニスが邪魔をする為でできないでいたのだ。

「すまない、ハチマン…こんな事を頼んでしまつて」

「なに謝つてんだよ、これはお前が決めたことだろ？それに俺を使うのに何を躊躇う」

「しかし…」

「だったら後でパフェを一杯奢れ、それでチャラな」

「それじゃあ…「いいんだよ」」

「これでお前と、その子供達が変われるならリリルカも悪い気はしないだろう、だから、それでいいんだ」

後でパフェ奢れよ、と言い残し窓からデカい袋2つと沢山の書類を持って飛び出す。今度は寄り道せず教会に戻ろう。

「色々とは聞かせてもらうぜ？」

拉致か…今日で2回目なんだよな…。昼にアポロン・ファミリアの構成員1人、酒場で最初に喧嘩ふっかけて来た奴、確かルアンっていつてたっけ。それとザニス。自分がされた事をいざし返すとなるとどこかもどかしい気持ちになる。

「憂鬱だ」

終わったらミアさんのパスタを食べに行こう。こんな美談にもならないような事はこれで終わるのだろうか。

「はあ…」

袋を抱え屋根から屋根へと飛び移る。姿を見られないように18階層で押収した【ハデスの兜】を被る。え？最初から着けてればよかつたって？バカヤロー！そんな特典装備みたいなもの着けてクリアしたって虚しくなるだけだろ？

アポロン・ファミリアとの戦争遊戯まで後5日

#30 分岐路手前

いつもの精神世界、目の前の扉にもたれかかっていたが力を抜きズルズルと腰を落とす。

隙間から吹く黒い風は俺の全身を撫で、ハチマン・ヒキガヤとしてではなく、比企谷八幡としての記憶を甦らせる。

まるで遠い昔の御伽噺のようにページを捲ることによってその記憶をまるで劇場を見るような感覚に陥る。

母は比企谷八幡をあまり好いてはいなかった。過労により腐った目が子供にも遺伝したかのように子供が成長する度に腐っていったからだ。

否、比企谷八幡の腐った目が嫌いなのではない。気づいていたのだ。自分達が比企谷八幡に親として何もしていなかったことよって親を見限ったことよってその目が腐ったことを…。

その事実を受け止めていながらも尚母は比企谷八幡を放置していた。親ではない他人が彼の目を癒すと考えたからだ。

……………

途中までは上手くいっていた。比企谷八幡は親ではなく他者に居場所を求めて着実に居場所を確立させていった。

だがそこで思いもよらぬアクシデントが起きた。妹の比企谷小町の家出だ。仕事で帰りの遅い親、友人になれそうな者達との交遊で帰りの遅くなった兄、家出するには充分な理由だ。

結論、親から妹の家出の責任を問われた比企谷八幡は妹が寂しくならないよう、親に怒られないように交遊を自ら断たざるを得ない状況に陥った。

結果比企谷八幡は中途半端な交遊を断ち切った事によりクラスメイトからの不信と無邪気な悪意を一身に受ける事になった。

年月は経ち、比企谷八幡はズルズルと引き摺らざるを得ないかつての足枷を未だに着けており、そんな足枷を着けなくてはいけなくなっ

た原因たる比企谷小町は人あたりの良さから瞬く間に自分の居場所を作り上げた。自分が足枷をつけて虐げられている比企谷八幡の妹だと言うことを必死に誤魔化し、学校内での接触をしないように釘を刺しながら…。比企谷八幡はそれに従っていた。最早自分は人生の敗者だと確信した彼はせめて自分だけの安泰を守るために妹に媚びへつらい、機嫌を取ることによって家にいさせてもらっていたのだ。

それ故に彼の母は己の子供に罪悪感を密かに感じていたのだ。

父は比企谷八幡を嫌っていた。なんでも出来る彼に嫉妬していたのだ、一回二回と回数を重ねる毎にその腕前や出来は完成へと近づいていったからだ。そして彼の目に怒りが募っていった。妻とは違う腐り方をしており、親としてではなくまるで他人を見るかのようなあの目に腹が立って仕方なかったのだ。自分がいつしか見下されてしまうのではないかと未来へ恐怖していたのだ。

だから彼をねじ曲げる事にした。過去の失敗談や人への不信感を教訓という名の呪いとして彼に施していた。教育は公をなし、ただでさえ人付き合いの苦手な息子は周りから孤立していき自ら独りになる事を選んだ。他にも色々と言響はあるだろうが自分の教育の賜物だと鼻が高くなっていった。

そして比企谷八幡の分愛娘へ愛情を注ぎまくればいいのだ。旅行も連れてくしオシャレだって目一杯させていた。家には完璧なセキユリ比企谷八幡ティがあるのだから。

そんな家族との繋がりがマトモにない比企谷八幡は近くの神社に良く向かっていた。幼い頃から何度も祈っている神社だ。何百回と聞いた五円玉が賽銭箱に入る音を聞き、鈴を鳴らす、そして二回手を叩き深々と頭を下げる。

「神様ア…どうか、どうかぼくに…家族をツ…」

そして無駄に五円玉が消えてくのだ。

そつと目を閉じる。凄惨な過去は今を縛る。いい事なんてひとつも無くて今がある。今が…ある。

.....
.....
果たしてそうだろうか？過去へと風化していく今を目の前にしてもそれが言えるのだろうか…燃えて崩れていく家、どんなに探しても見つからない宝物。紡ぎ守らなくてはいけない明日も見失いそうになる。

「はあ…」

ふと扉の向こうにいる彼を隙間から見ると、どうやら彼も己の過去を振り返っているようだ。いくらハチマン・ヒキガヤを名乗ろうとその体は既に比企谷八幡として確定しているのだ。ハチマン・ヒキガヤに比企谷八幡は殺せない。

「しつかりと向き合え…」

私みたいな過ちを犯すな。過ぎてからでは遅いのだ、何もかも…。意識は再び闇に包まれていく。さてと、眠るか…。

ゆつくりと目を開ける。随分と胸糞悪い夢を見た。重たい体を起こしステンドグラスから漏れる朝日を睨みつける。普通こういう日って雨とか曇りじゃないのか？

空気の読めない天気だな、と悪態をつきながらシャワーを浴びる。サッパリしたら朝御飯を用意して1人もつきゆもつきゆと食べる。昨日殆ど一日四人で過ごしていた為少し微妙な感じがする。

「ぶっこそさん…」

食べ終わるや否や歯を磨いてコートを着ずに適当に見繕った服を着て外に出る。

宛もなくフラフラと街を歩く。じゃが丸くんを売ってる出店に出向き味付けにケツをつけ…アドバイスしたり、書店に入って何冊か本を買ってみたり、ぶらりオラリオ旅を満喫していた。

(結構楽しんできました…)

晩飯のために八百屋系ファミリアの店で買った野菜の入った袋を抱えて歩く。やはり袋つてのはこういうのでいいのだ。ザニスとかは重すぎるのだ。そうそう、ザニスについては聞くこと聞いたら二度

と悪事を働けないように手足をズタズタにしてソーマ・ファミリアの地下牢にぶち込んだいた。

(ままま待ってくれ！金なら幾らでもやる！だからここから出してくれ！頼む！)

(ごめんな…あんたの毒牙が二度と俺達や罪の無い人達に及ばないようにするにはこれしかないんだ。…それにアンタはやらかしすぎたんだ)

(や、やめッ……ギヤアアアアアア!!)

頭を軽く横に振って忘れようとする。しかし瞼にこびり付いた光景は取れることは無い。

(一生付き纏うんだろうな…)

とんでもないメンヘラに好かれたもんだ。

鍛錬を始めて既に11日…次の日はハチマンに教会に呼ばれたから実質訓練最終日ということだろう。

今は小休憩と言うように剣を下ろしているアイズさんの前で息が盛大に上がっている僕は自分の体を見下ろした。

着実に実力が付いてきてる気がする。

テイオネさんが集めてくれた情報によると戦争遊戯が始まるのは4日後ということらしい。移動のことを考えると居られるのはあと2日…アラル神父の言っていた2週間は訓練できなかつたけど十分すぎる成果だ。

「たっだいまー！」

噂…ではないが思考をすればテイオネさんやテイオナさんが肉や魚を持ってやって来てくれた。このお陰で僕とアイズさんは訓練できている。

無理やり食料を胃に詰め込む。焼いた肉でも魚でも、ハチマンが作ったのとは天地ほどの差がある。アイズさん達も少し食事に違和感を覚えたそうだ。余談だが、あれからロキ・ファミリアでは食事の度にベートさんを筆頭に冒険者達が一口食べると少し首を傾げるといふ謎の現象が起きてコックが涙目になっているらしい。

「続き、お願いします!!」

3人が食べ終わって食後の休憩も終わった所を見計らって訓練を申し込む。今度は3対1だ。武器を交わし、転がり、指南される内容をひたすら反復しながら、今日も鍛錬に明け暮れた。

次の日

早朝、アイズさん達にお礼を言い、ハチマンの待つ教会へと向かう。敷地内に足を踏み入れ、墓地の奥の端っこにある「EVA」さんのお墓に腰を下ろして水をあげているハチマンの元に歩み寄る。彼の脇には大荷物が置かれている。

「ハチマン…」

「ああ、ベルか…案外早いな」

行くぞ、と荷物を背負ったハチマンに誘導されて教会を抜けて歩く。どこかハチマンの雰囲気黒い気がする。

「どこに行くの?」

「一応、戦争遊戯の会場に向かうけどその前に寄り道してこうと思つてな」

「ふーん…」

暫く見慣れた道を歩いていると着いたのは僕達の馴染みの店である【豊饒の女主人】だ。店の前には神様とお店の店員達が揃っている。

「ベールーくーん!!」

「!…:神様あ!」

神様とベル。お互いの再会を噛み締めていたり、シルさんからお守りを貰っている中、ハチマンは荷物の忘れがないかチェックしていた。

「アンタも輪に入りな!」

ミアさんに肩をバチコーン!と叩かれたハチマンは肩を擦りながら僕たちの方に向かって来た。すると神様は僕たちの首に腕を引つ掛けて顔を引き寄せた。どことなくハチマンの顔が赤い、きつと僕もそうなんだろう。

「いいかい、2人共、あまり無茶しないで帰っておいで!特にハチマン君…君には色々負担をかけてしまったよ、ごめんね」

「や、俺は…」

「グダグダ屁理屈を言わない！ほら！勝利の栄光が君達を待ってるよ！行ってらっしゃい！」

「行ってきます」「行ってきまーす」

背中を押されて一緒に一步を踏み出す。ハチマンと自然と目が合い、少し微笑む。

「じゃあ、帰る為に勝とう！ハチマン！」

「そうだな…」

足を揃えてオラリオの門に行くと、馬を連れた門番さんが僕達を見つめるなり手を振ってくれた。

「おーい！」

「バン・モンさん…」

「えっ、ハチマン知り合い？」

「まあな、毎日外で訓練してる時に顔覚えられてな」

駆け足で門番のバン・モンさんに駆け寄る。

「ほら、預かってたお前の馬、【トウ・ザ・ハイヤー】だッ！」

黒い馬、落ち着いてハチマンをじっと見ており、ハチマンがどうどう、と鼻や顎を搔いてあげると、嬉しそうに尻尾を振っている。

「今日はお前達の晴れ舞台だ。お前達をよーく見てる出店の皆が饞別に俺に預けていってくれたよ」

大きな袋を預けられる。中を見てみるとパックには言ったじゃが丸くんや焼き鳥、刺身、お菓子、色々詰め込まれている。

「ありがとうございます」「ありがとうございます！」

「いいんだよ、それ食って勝つてこい！良い宣伝になるからな！リトルルーキーと亡影、2人を支えた出店の味ってな！」

「売上落ちるぞ」

【トウ・ザ・ハイヤー】に乗ったハチマンの後ろに乗る。ハチマンのコートをきゅつと握る。なんだろう、気分はおとぎ話のお姫様だ……何か大切な物を失っていく気がする。

「ベル、掴まってるよ、こいつ性格は大人しいのに足はめちやめちや早いからな」

「えっ？ そうなの？ ハイヤー！」 うまだっち!？」

ズキーン!と飛び出し、ドギューン!と加速し、バキューン!と駆け抜け、ブギューン!とコーナーを攻める。勢いで最初は目を瞑っていたけど段々慣れてきて目を開けると絶景が広がっていた。

「いい眺めだよなあ…」

感慨深く話す彼の声をBGMに僕は景色を楽しむ事しかできなかった。

「そうだ、一つ気がかりな事があるんだよ」

「? どうしたの?」

「今回の戦争遊戯のフィールド、ギルドの職員がボヤいてるのを盗つて…小耳に挟んだんだが、森があるらしい」

今盗聴って聞こえたけど聞こえてないフリをしよう。

「森? それはあるんじゃないの?」

「いや、本来そのフィールドには森なんてなかった。1ヶ月前までは更地だったのに森林が出来上がってたんだ」

「1ヶ月?!」

木は何年も掛かって大きくなる…なのに1ヶ月で森林レベルまでに成長するなんて普通有り得ない。

「絶対に何かある、近づくなよ…死ぬぞ」

命の宣告:彼は低く思い声でそう言った。

ハチマン曰く距離は結構あるようで明日の朝には着くとのことらしい。焚き火で餞別に貰ったものを焼き直したり調理して食べる。食べ終わったら近くの川で腰に布を巻き2人で水浴びをする。

「ハチマン…それって…」

ハチマンの胸を見ると心臓辺りを中心に怪我の跡が色濃く残っていた。心臓周りの血管が黒く浮かび上がってまるで花が咲いているように錯覚する。

「跡まで消す時間が無くてな…これが終わったら消しに行く」

へらつと笑うがきつと無理をしているんだろう。ハチマンに無茶をさせた自分に途方もなく無力感を感じた。

寝袋にくるまり、他愛のない話をする。終わったら何をしようか

とか、祝勝会は【豊饒の女主人】で開こうとか、今度一緒に訓練しよう、と約束した。

次の日

あさイチで出発する。2、3時間すると会場へと到着する。

「つと…着いたな。【トウ・ザ・ハイヤー】預けてくからエントリー済ませてくれ」

僕を魔腕で降ろし有無を言わさず去っていく。やれやれ、ハチマンは世話が掛かるなあ…。

馬を預けて【ヘスティア・ファミアリア】の陣地に向かうと馴染みのあるメンバーが出迎えてくれた。

「ハチマン!!」

ヴェルフが駆け寄り、命さんとリユーさんが遅れてやってくる。

「怪我は大丈夫なのか?」

「ああ、この通りだ」

ガシツと腕を構えてくるからそれに応じて前腕をクロスさせるとヴェルフはニヤツと笑った。

「ヒキガヤ殿、この度はヤマト・命、受けた恩を返しにヘスティア・ファミアリアに加入することにしました、以後、よろしくお願いします」

「おう、頼りにしてる」

相変わらず固い性格してるが、いい人なんだろう。

「ハチマンさん…」

「リユーさん、すみません、巻き込んで」

「友が困っているんです、ここで手を貸さなくてはエルフの名が廃ります」

「それに作戦だって…」

「いいんです、そんな物にこだわっていたら、リユー・リオンの名が廃ります」

「そうですか…と言うとベルが駆け寄ってくる。

「エントリー終わったよ!戦争遊戯は明日の10時からだって!」

「マジか…リリスケ…ちゃんとバレてねえか?」

「信じよう、リリはやれるよ」

そう、リリルカはここにいない。「アホロン・ファミリア」に潜入している。この前俺が誘拐したアポロン・ファミリアの構成員のルアンに魔法で成り代わっている。因みに本人はミアハさんの所で監禁している。内部の情報とかは少し揺らしただけでベラベラと決壊したダムみたいな喋ってくれたからものすごく助かったりする。

「明日の10時ですか…」

「それまでに英気を養っておきましょう」

各々ゾロゾロと動き出すのを俺は見ていたが…

「それも大切だが、作戦の確認は？」

「…「そうだった！（でした！）」」

「…」

少し幸先が不安になって来たぞ…。

「ザツと確認な、最初はリユーさんが西側の壁側、俺と命さんが東側の壁から襲撃を仕掛ける。変身したリリルカが俺達に戦力を割かせてる間にリリルカが南側にある唯一の城門を開けてベルとヴェルフがそこから侵入、リリルカから城の構造を粗方聞いた後にヒュアなんとらとベルが一騎打ち、ヴェルフは邪魔してくる奴らの妨害。何か疑問に思ったことは？」

「ハチマンと命さんが一緒に行動する理由は？」

と、ベルが質問を投げかけてきた。

「18階層でも見たと思うが、命さんの魔法は重力系の魔法だ。それで雑兵達を足止めしてるうちに俺がパパッと片付ける算段だ」

「ハチマンさんはその魔法に耐えることができるのですか？」

「まあ、大丈夫だと思いますよ」

ベル（おっさん）との訓練で悪魔体のおっさんを担がされたんだ。これ以上重くなるなら無理だが…大丈夫だろう、うん。

「他には？」

すつ、とヴェルフが手を上げる。

「ドンパチには関係ないが…今晚の飯はどうするんだ？」

「…あつ……」

すると俺とヴェルフ以外のメンツが気付いたような声を上げる。用意してなかったんだ…まあ、予想出来てたことだ。

「俺が作ろうか？」

「いや、やったー！！」

ヴェルフとベルが万歳して喜ぶ…バカヤロー、んな事されたって嬉しかねーぞ！

「まあ、有り合わせで適当に作るから、余り期待すんなよ」

その日は5人で焚き火を囲み明日に備えて英気を養った。本番は明日、失敗は許されない…勝てる気はするが如何せん嫌な予感がする。いつも以上に気を付けないとな。

そしてよがあげた

戦争遊戯はハチマン達だけではなく、オラリオにも大きく影響がある。世界一熱い町が催す大イベントの一つに数えられている。各地にある酒場などの冒険者が交流する場においてとてつもない盛り上がりを見せていた。

「お前はどこに賭けたんだあ!？」

「勿論！アポロン・ファミリアよ！」

「俺もアポロン・ファミリアだけどなあ…」

「おつ、どしたよ」

「神共が大穴狙いやがってヘステイア・ファミリアに賭けてやがって倍率さげてやらー」

「そりゃ、迷惑だな…モルド！お前はどこに賭けたよ？」

「あ？ヘステイア・ファミリアだ」

「はあ!？お前どうしちゃったんだよ！」

「今に見てろ…度肝抜かれるぜ…」

そんな会話があたり…

「さあ！今回の戦争遊戯の実況はこの私イ！イブリ・アチャー！そして解説を務めてくれるのはく？」

「俺が！ガネーシャだツ!!」

「ガネーシャ様あ！今日の戦争遊戯、ヘステイア・ファミリアが劣勢だ

と思われていますがどう思いますか!？」

「俺がッ！ガネーシャだッ！」

「成り立たない解説あざーっす!! (泣)」

「またもや場所は変わり、バベルにて。」

「それじゃあ、ウラノス、『力』の行使の許可を」

【許可する】

ヘルメスの問に答えるようにギルド本部の方向から重々しく響き渡る宣言を聞き届けたようにオラリオ中にいる神々が一斉に指を弾き鳴らした。瞬間、酒場や街道の虚空に鏡が現れた。

「戦争遊戯は後10分…ベル君…ハチマン君…へ？」

緊張故に重かった頭を上げ、鏡に写った光景にヘステイアだけでなく、その場に居合わせた神々も驚愕する。

その映し出された光景には薄い虹色の玉が空を待っていた。目で追うその出処は…今回の戦争遊戯で注目されている2人だった。

「今の時間は？」ジャブジャブ

思い出の詰まった総武高校の制服を身にまとったハチマン・ヒキガヤが隣のライトアーマーの少年に問う。その右手には小さな入れ物が持たれ、左手の小さな筒を出し入れしていた。

「えーっと、9時50分だね。後10分！」ジャブリ

同じくその少年も彼と同じ動作をしていた。その顔はどこか落ちて着いている様だ。

「フ~~~~」

一斉に筒の反対側、何も付けてない方に口をつけ息を吐く。すると綺麗な球体が空に登っていく。

「あゝ、ハチマン殿？何をしてらっしゃるのですか？」

「恐る恐るヤマト・命が問う。」

「シャボン玉、差し入れの袋の一番下に入ってたんですよ。この前遊んでやったガキンチョ達が入れてくれたんでしょう…一番最初に、コイツと一緒にね」

胸ポケットから一通の手紙を出し、ヒラヒラと見せびらかす。

「へえ〜それはよかつたなく…じゃなくって！どうして今なんだよ！」

赤髪の青年、ヴェルフがノリツツコミをかます。

「ベルがどうも緊張しちまってな、リラックスさせろ為だ。じゃなきゃ俺もやんねーよ」

「うん…落ち着いてきたよ…ありがとうハチマン！」

何度かシャボン玉を飛ばしていたベルから容器を預かり、それを荷物にしようと一同はアポロン・ファミアの拠点がある方角に目を向けた。

朝日が彼らを照らす。

「さてと、行こう！皆！」

「太陽を墜す時間だ」

「負ける気がしねえ…！」

「いざ尋常にツ！」

「行きましよう」

ダツ！と駆けるが彼は知る由もなかった。この戦争が彼の人生のターニングポイントとなる事を。

#31 譲れない者達

ズドーンン!!

空気が震えた。衝撃がアポロン・ファミリアの拠点に走る。

「なっ!なんだ!?!」

「西の壁側に敵が来たぞー!」

「魔剣を持つてるぞー!50の兵士を向かわせろってヒュアキントスが言ってたぞー!」

ルアン（リリルカ）の誘導で大勢の兵士がリユウの元へと向かう。そんな光景を遠目に2人の冒険者が反対の東側から見ていた。

「さてと、命さん。デカイのカマしますから伏せて下さい」

「わ、分かりました!」

その場にしゃがみこみ、耳を塞ぎながらハチマンを見上げる命。その目に写る彼の表情はどこか笑っていた。

チャキキ:

二丁の拳銃を構えその銃口を壁に向ける。

刹那、空間が歪んだ。彼の腕から黒い魔力が銃口に集まり、その密度が大きくなっていくと黒い魔力に白い稲妻が走る。

バチ:バチ:

「芸術は爆発だツ:」

その密度が臨界点に達したのか彼が引き金を引くとバン!という弾けた音と共にとてつもない速さでそのエネルギー弾は壁に向かっていった。嫌な予感がし命は思わず目を瞑る。

激しい光と音が辺りを包む。命の目が開き、その視界に色が戻った。

「!!」

啞然、その的にされた壁は跡形もなく消滅しており、そこに半径15mはクレーターができた。

「さて、行きましょう」

手早くマジックポーションを飲み干し、空き瓶をポケットに仕舞うと彼は淡々と告げた。

「数が揃ってきたら詠唱を、魔力は俺が適当に誤魔化しときます」

「は、はいッ！」

彼の後を着いていく。噂に違わず恐ろしいポテンシャルを秘めているハチマンをヤマト・命は改めて感心した。

「誰かいませんか〜?!」

崩れた瓦礫にノックして煽り散らかすように大声を出すハチマン。命は大き目の瓦礫に隠れている。

「亡影が来たぞー！」

上からルアンが叫ぶ。ハチマンとルアンが一瞬目を合わせ、うん、と互いに頷く。

ゾロゾロと応援が駆け付けてきた。

「おのれッ！よくも我らが城を！」

「オタクらだって同じことしたろ？おあいこだろ」

なっ？と首を竦める。しかし煽られっぱなしの団員達は歯をギリギリと鳴らしハチマンに襲いかかる。そこへ物陰から命が飛び出てきた。

「ー神武闘征ッ！フツノミタマ!!」

ドーム状に輪が広がり、その中にまんまと入っている構成員達は重力魔法に屈することしかできなかった。但し、ハチマンを除いて…。

「か、かなり、重ッ…」

「ハチマン殿！」

ハチマンを心配してその魔法を解こうとするがハチマンが手で制する。足を一步一步進め、構成員達の顔を一人一人確認する。

「お前…いたな…」

「ヒイッ！」

バコーン！

ハチマンのベオウルフがその顔面に振るわれる。重さ故に吹き飛びはしないが少し浮いた体はやがて地面に衝突した。

「お前は…いなかったな」

「へ？」

ストーン

その項にベオウルフの手刀を喰らい地面に伏す。そうやってハチマンは一人一人顔を確認してはぶん殴るか意識を奪うの2択の処刑をしていた。そして最後の1人を殴り飛ばし終え、一息ついたハチマンは振り返り言った。

「言つたる？面覚えたからなつて…」

凄まじい執念と記憶力。その言葉に少し震えた酒場の一部冒険者達が後にハチマン達にお詫びの品を持ってきたのはまた別の話である。

「次の応援が来る前に門を開けましょう」

ルアンに扮したりリルカの先導で門を開ける。すると丁度到着したベルとヴェルフがやって来た。

「ありがとう！」

「さつさとケリつけて来い！」

するとまた別の所から応援がわらわらとやって来た。一部はリューの元へ向かうようだ。奥には見覚えのある女冒険者が立っていた。

「命さんはリューさんの応援に、リルカ、残りの部隊はこれだけか？」

「ええ、ダフネという冒険者が引き連れている部隊です。今までとはひと味違います」

「厄介だな…」

当時は意識が朦朧としていたが彼女の指揮能力が高いことを思い出して唸るハチマン。

「これが最後なら俺も残るか…！」

「ヴェルフ、お前はベルと行くんじゃないのか？」

「はっ！ベルもガキじゃねえよ。それに、またお前に無茶させるとへファイストス様の胃がもたねーからなッ！」

「あんがと、ベル、行けるか？」

「うん！任せて！」

そう頷くベルはその場の誰もを安心させた。

「案内はリリに任せてください！」

リルルカに手を引かれる形でベルと城内へ向かう。
その光景はもちろんオラリオ中に中継されていた。

「むぎー……」

「落ち着け……ヘスティア……」

ハンカチを噛み締める女神（笑）を窺めるミアハ。その隣でアポロンは焦っていた。

（ま、不味いッ！）

本来3日に渡って行われる戦争遊戯を超短期決戦に持ち込む形で我々の意表をつき、デコイを仕込むことで指揮系統を麻痺させる荒業、長らく忘れていた言葉、「戦争は始まる前から始まっている」を思い出す。

（ま、まだだッ！）

暴れにあげられるハチマン・ヒキガヤを止める手はある……！と胸を張って言いたいとその切り札がまだ出て来ない。

「何をやっているのだ……ネオ・アンジエロはッ！」

爪をガジガジ齧りながら小声で悪態を着く。

「ふふふ……より黒く……輝いてるわ」

成長している彼にただ一柱、女神フレイヤだけが妖美に微笑んでいた。それとは反対にただ一柱、女神ヘファイストスは強くなつていく彼に心配していた。

「あの爆発の威力、あの手甲、足甲、普通の威力じゃないわね……1週間……彼に何があったのかしら……」

ー【ロキ・ファミア】ー

談話室にて、ロキ・ファミアの幹部陣とレフイーヤは鏡を見ていた。その鏡はロキが少し口を聞かせて細工をさせ、見られる光景を変えられることができる特性の鏡だった。

「ぼーえー君、強いねー」

ソファに座ったティオナが部屋の中央にある鏡を見ながらあつけられかんと言う。それに同意するようにレフイーヤが頷くが……

「あの執着心……まるで誰かさんを思い出すのお」

ガレスが髭を撫でながらアイズに視線を送る。

「……」

ヴェルフの魔法によって魔道士達が爆発する中、ハチマンは単身乗り込んで構成員達をボコスカ殴っては魔腕で投げ飛ばし、ブンブンと振り回して人間ヌンチャクとして攻撃を繰り返したりしていた。

「容赦がないバトルスタイル、あくまで敵は敵、人としては見てない：だから敵でさえなければ彼も本気で戦えない、そういった感じかな？」

的を得ている予想であった。数々の即死級の技や武器を持っている彼の苦手な分野が手加減である。

「……」

そんな考察がされていてもアイズ・ヴァレンシユタインは映像から目を離さなかった。少しでも長く彼を見ている為に…。

バキヤア!!

また1人の顔面を潰し一息つく。そしてジロリと睨みを孕ませた視線をダフネに送る。

「くッ……」

「あんまり女に手えあげたくないが、抵抗してくれるなよ」

後退りをするダフネ。しかし開いた距離をハチマンも詰める。

「ハチマン!!」

しかし突如下から声がした。声の主はベルだ。ダフネから視線だけを外してその声に応える。

「どうした!?!」

「このお城、思った以上に固くて…ハチマン!上から大きいのお願い!!」

「分かった!…アンタも死にたくなきや部下引つ連れて逃げな」

壁を破壊し飛び去っていくハチマン。近くで応戦していたヴェルフも足早にその場を去る。大きい、その言葉がダフネに恐怖を甦らせる。壁を破壊したあの爆発か、それ以上…食らったらただでは済まないのは目に見えている。

「総員退避ー」

そんな声が聞こえる頃、ハチマンは城の真上の空にギルガメスで足場を作り魔力のチャージをしていた。同刻、ベルは城の真下にてスキルによるチャージをしていた。

リン：リン：と鈴の音が鳴り、右手に光が灯り、光る手を真上に向ける。後はその名を口にするだけだ。

両腕を前に突き出し交差させてから大きく横に広げてエネルギーを溜めた後、腕をL字に構えて真下に放つ。

「ファイア・ボルト!!」

「ゼペリオン光線ツ!!」

コンマの差もなく叫ばれたその魔法と技は空に、地に昇り、堕ちていった。そして二つの光は丁度中心、城の最上階、ヒュアキントスがいると思われる場所でぶつかった。

バチバチツ!!

しかし衝突したからといってその場で爆発はしなかった。寧ろその場でぶつかり合ったままだ。2人共、どうでもいい意地を張っているのだ。先に途切れた方の負け、両方そう思っているからこうなったのだ。

「があああああアツ!!」

「ぬうううううツ!!」

どちらも譲らず、寧ろ威力が上がっていく。ベルの足は地面にくい込み、ハチマンの落ちるはずの体は少し浮いていく。

「うああああああアツ!!!」

「はああああああアツ!!!」

ズゴoooooooooo!!

しかし空間が耐えれなくなったのか、2人の魔力が尽きたのか：中心点に大爆発が起きた。その爆発はハチマンが仕掛けたチャージショットinギガフレアの比ではなかった。

ヒュルルルル：

落ちていく中、ハチマンはマジックポーションを3本飲み干し、魔力を回復していた。着地の衝撃を無効にする為に自身の周りにギル

ガメスを出し、体を包ませることによって衝撃を分散し難なく着陸を成功させた。

「やりすぎたな…」

「そうだね…」

すると近くにベルが歩み寄ってくる。その手にはマジックポーションが入っていたと思われる瓶が握られていた。

周りには城なんて呼べるものはなく、瓦礫が山となって城があったのを証明していた。

「ベル・クラネルウウウ!!」

瓦礫からヒュアキントスが這い上がってきた。バトルクロスのうちこちが焦げ、プスプスと黒煙が上がっている。

「ご指名みたいだぞ」

「らしいね、行ってくるよ」

「ああ、行ってこい…」

ベルの背中をバシン!と叩き送り出す。そんなハチマンの近くにはヴェルフ、リリルカ、リユー、命が集まっていた。

「さてと…俺も、片付けるか」

チャキツ…バン!!

いきなり銃を取り出し一人一人が隠れられる位の瓦礫を撃つ。するとその影から一人の男が出てきた。

「ゼペリオン光線、中々良かったよ…僕も年甲斐もなく、心が踊ったよ。懐かしい思い出を思い出させてくれてありがとう、比企谷」

「ここまで来てお前の面拝むなんてな…葉山、なんでお前がオラリオにいるんだ」

そこにはハチマンと同じ服を着た男、髪と肌は病的なまでに白く、しかし目は赤く変色した葉山隼人が立っていた。

「君と同じだよ。ま、ミンチになった君とは違い僕は飛び降りてバラバラになったんだけどね」

ゆっくりとハチマンに歩み寄る。

「だから、どうしてだ。三浦、戸部、海老名さん、おまけ2人に、由比ヶ浜はどうしたんだ。…雪ノ下だって…」

「比企谷、僕はね…うんざりしたんだよ。僕が信じてやまなかった人の善意は…とてつもなく脆弱で、巨悪なものだったんだよ」

「んな事は知ってるが…お前も言ってたろ…「人は変われる…どんな人も良くあれる？」…覚えてんのかよ」

2人の距離は3m。剣を、拳を振るえば届く距離、間合いだ。

「そう、あんなのは偽善、悪意を知らない…いや、知ってて目を逸らしていた卑怯者の僕が吐いた世迷言だ」

「……………」

「けどどうだ！人は変われなかったッ！君が死んだと聞かされてもッ！君の善意に溢れた行為を聞いてもッ！人はッ！アイツらは変わらなかったッ…！君の家族でさえもッ！君の死を笑った…誰も比企谷八幡を受け入れていなかった…どうしてなんだ…どうして比企谷、君は誰にも理解されないんだ…！」

それは、本来比企谷八幡が思つて、叫ぶべき内容だった。それを聞いたハチマン以外の面子は信じられないという顔で彼を見るが彼の表情は見えなかった。

それを聞き、見ているのは彼ら彼女らだけでなく、バベルにいる一部の神々、そしてロキ・ファミアアの幹部陣達だった。

「肌に合わなかった…ただそれだけだ」

「え……………」

「アレルギーみたいな物だったんだろう」

「……………」

「それにな、葉山、俺はそんなの気にしちゃいない。あそこに本物は無かった…ただそれだけだ。それに俺がイラつくのはそこじゃない」

「何……………」

「お前がここにいるのが問題なんだ、俺が折角お前からの依頼を受け入れて、身をてーしてお前の大好きな環境を守つてやったのに…脆弱？巨悪？巫山戯るな、お前はその選択をして、俺の屍を踏み越えたのに…何勝手に諦めてんだよ。アレは、どんなに悪しきものでも、お前が保ち続けることに価値があったのに…お前への一生物の足枷だったのに…」

#32 目覚め+?・α

「なんだ、これ…」

ヴェルフはただ眩く事しかできなかつた。

「ガアアアアアアッ!!!」

「ウッアッアッアッアッアッアッ!」

「こんなのって…」

リルルカが驚愕の表情で彼等の戦いを見ていた。

「これは…決闘と言えるのでしょうか…」

「いいえ、これは殺し合いに分類されます…」

血が飛び散る。鎧の欠片が宙を舞う。何度目かの鏢迫り合いが起こり、2人の間に火花が激しく散っている。お互い一步も引かず、その刃が体に、鎧に食い込む。

「葉山アアアアアア…!!!」

「比企谷アアアア…!!!」

「うおおおおおおおおお!!」

そしてお互いに刃を引き、肩から反対の脇腹にかけて大きな刀傷を作った。

「…「なっ…?!」」

ブシヤアアアアアアアア…

先に崩れたのはネオだ。両膝が着いた所にハチマンが頭を掴む。腕に魔腕を纏うように重ね、思い切り殴ろうと振りかぶるが再起動したネオに掴んでいる腕を掴まれ捻られることで体制を崩してしまう。

「まずいつー!」

それを見ていたヴェルフが叫ぶが時既に遅く、体制を崩したハチマンの腹をネオが思いつき蹴りあげるとハチマンは血を撒き散らしながら天高く登っていった。

「うおおおおおおお!!!」

ハチマンの体は小さな点になるまで登っていった。ネオはそれを見届けると一息着いてヴェルフ達に向き直った。

「今度は俺達をやろうって訳か…」

一同がネオ・アンジエロに警戒するが、今度はベルの方に向き直った。

「があああああああああッツ!!」

ベルの拳がヒュアキントスに刺さり、丁度戦闘は終わったようだ。ベルは一息付き、一同の元へ向かう。ネオと目が合い、ベルが緊張をするが、ネオはベルがちゃんと一同に混ざるのを待っていた。

「一つ…いいかい?」

「!!」

ネオ、いや、葉山が口を開いた。

「君たちにとって比企谷八幡…いや、ハチマン・ヒキガヤとは?」

兜を外し、真剣な眼差しで問いかけた。

「家族です」

ベルが

「相棒だ」

ヴェルフが

「兄のような人です」

リリルカが

「恩人であり、尊敬に値する人です」

命が

「かけがいのない友」

リユーが

それぞれが応えた。それを聞いた葉山は一瞬きよとした後、少しだけ、ほんの少しだけ微笑んだ。誰にも分からない位だ。

「だってさ、比企谷…聞こえるかい?」

葉山隼人は、涙が出る程蒼い空を見つめた。

およそ上空15kmハチマン・ヒキガヤは空にいた。その目線の先には雲もなく、誰もが見たら感嘆しそうな程絶景だった。

「綺麗…だな…」

「………のか?」

「体に力が入らないな…」

「変わった!?!」

命とリユールが声を上げる。丁度直上の空が紫になったからだ。ベルとヴェルフとリルルカはまるで待っていたかのように空を笑いなから見ていた。

「……………」

それを黙って見ている葉山の前10mに紫の隕石とも取れる塊が墮ちた。激しい衝撃と共に爆炎が広がる。

「そんなデタラメ…有り得たのか」

眩しさにより、閉じていた目を開いた頃には辺りは紫の炎が燃え移り、地獄のような光景に風変わりした。より一層燃えている所に影が見える。影は右手を振るい、炎を払った。

「待ちくたびれたよ…比企谷」

そこには比企谷八幡が立っていた。髪は銀色に染まりきり、目は微かに赤くなったが、確かに比企谷八幡だ。その体には紫のオーラが纏われ、そのオーラは人型にしては異形で、モンスターにしては人と似た形、上手く形容するなら悪魔のような形をしていた。オーラは彼に一拍子遅れるようにユラユラと動いている。

「さあ、第2ラウンドと洒落込むか」

「ああ」

ネオ・アンジェロが剣を構えると手ぶらの八幡は右手をすつと横に出した。

「来い…リベリオン」

右手に炎が集まり、炎が晴れると銀一色の大剣が現れた。鏢に当たる部分の中央に二本の角が生え、口の開いた髑髏の彫刻、その反対側には口の閉じた顔が彫刻されている。それを持ち上げ、切っ先をネオに向ける。すると同じく剣を持ったオーラ状の魔人も同じポーズをとる。

ダッ!!

お互いが一斉に飛び出し、剣を振りかぶる。そしてお互いの剣がぶつかり合うが、その数コンマ後にネオは吹き飛んだ。ハチマンの魔人が遅れて攻撃したからだ。

「チイツ!!」

体制を立て直すのが既にハチマンは接近しており、目が合う頃にはハチマンの拳が目の前に迫っていた。

「無駄ア!!」

とんでもなく強い拳が腹に刺さり、再び吹き飛び、壁に衝突する。揺れる視界の中、ネオの眼前にハチマンが猛スピードで突進し、リベリオンで無数の突きを繰り返している。

「うおおああああああああああああああ!!」

ガギャギャギャギャギャギャギャ!!

しかし、その剣先は葉山の体に刺さることは無く、鎧のみに当たっていた。無数の突き故、鎧に亀裂が入る。それでもハチマンは手を止めずに絶えず技を繰り返している。

とうとうその亀裂が全身に入った頃、思いっきりハチマンが振りかぶる。後ろの魔人も相まってとんでもないプレッシャーだ。

「これで…終いだアアア!!」

その一撃は鎧を砕け散らせ、葉山隼人の体を瓦礫の更に向こう側へ吹き飛ばせた。丁度魔力も切れたのか魔人は消え去りハチマンは地面に膝をつけてぐったりしている。そこに仲間達が駆け寄ってくる。

「ハチマン（様）（殿）（さん）!!」

「大丈夫…?」

ベルがしやがみ、ハチマンの顔を覗き込む。するとみるみるハチマンの容姿は元に戻り、彼の目がうつすらと開かれる。

「少し、いいか?」

「うん!」

ハチマンの手を取り、彼を立たせる。ベルやヴェルフの肩を借り、葉山の元へヨロヨロと歩いていく。

「おい、平気か…?」

「うっ…うっ…」

彼に切られた切り口から白い物体がこぼれ落ちる。

「お前っ…これは…」

ハチマンが拾い上げる。それはつい2、3ヶ月前まで嫌という程見

ていたものだ。そう、奉仕部の部室（仮）があった事を示すルームプレートだ。シールが貼ってあり、何度も貼り直されたのか角度が少し変わっている。

「君が…持つに値する物だ…君は守ってみせたんだよ…俺のグループも…奉仕部も…千葉でさえも…」

「……」

「グループに関しては…僕が無駄にしたんだけどね」

葉山に腕を捕まれる。苦しそうな表情をしているが笑っている。目じりには小さい小さい涙が見える。

「ありがとう…葉山…今は休め、怪我治ったら顔見せに来いよ。そんなに、沢山話そう…今までできなかった分も…な」

「ははっ…君から誘ってくるなんて…嬉　しい…な」

パタンと力なく倒れた葉山…彼は倒れても笑っていた。ハチマンは立ち上がり、葉山を見ている。

「ハチマン…この人は？」

ベルが静かに尋ねる。周りの面子もそれを知りたそうにハチマンを見ている。少しも悩むことなくハチマンはため息を一つ吐いて答えた。

「俺の、友達だ」

キョトンとしている皆を他所にハチマンはその場を立ち去る。暫く歩いて立ち止まり、振り返る。

「帰ろうぜ？俺達ホームの家に」

「…ツ…うん!!」

そして皆で歩み出す。己の帰るべき場所へと。

「!!」

仲間たちと歩いている中、ハチマンは嫌な視線を感じた。フレイヤみたいな目線ではなく、もつとこう、おぞましく、ドロドロとして、恨みの籠った視線だ。

「ハチマン？」

「なんでもない、さ、行くぞ」

視線を辿ると少し離れた所に森があった。

余談だが、俺と葉山の戦いは放送されなかったらしい。神様曰く少女や他の冒険者に悪影響を及ぼす内容だった為、バベルだけで限定公開されてたらしい。

別に見られたい訳でもなかったが、解せん。

ー【バベル】ー

葉山と八幡の戦いを見届けたヘステイアは心底嬉しそうに微笑む。最初は目つきの悪い少年だと思っていたけど、彼の心の優しさに触れ、彼が眷属になつてくれた事を本当に喜んでいるのだ。

しかし今は喜びを噛み締める時ではない。隣でガタガタと震えているアポロンに向き直る。

「ヘッ…ヘステイア…」

「アポローン…!」

「ヒエツ…」

「覚悟はできているだろうか?」

地獄の底から響くような低い声に、アポロンは盛大な尻もちをつく。

ベルやハチマンを虐げられ、ホームを破壊され、町中を追い回されて、ことごとく見下され。果てしない鬱憤が爆発寸前と化している女神の前に、アポロンはガタガタと震え上がり、はらはらと涙をこぼしていく。

「勝った暁には、要求を何でも呑むと約束したよなあ?」

「ガタガタガタガタガタガタガタガタ…」

「ホームを含めた全財産は全て没収、【ファミリア】も解散ーそして主神である君は永久追放、二度とオラリオの地を踏むなアーーーーーッ!!」

「ひぎやああああああああああつっ!!」

都市を震わせる絶叫が響く。ハチマン達の知らない所で、また因縁の争いが幕を下ろした。

戦争遊戯が終わり、早2日。俺達は巨大な屋敷が建つ、広い庭の中

に立っていた。

「じゃーん！どーだ、これが今日からボク達のホームだ！」

『おお〜っ』

見上げるほどの、三階建ての大きな邸宅だった。神様が言うには中庭と回廊までも備わっているらしい。敷地には背の高い鉄柵に囲まれており、花や庭木が植えられた広い前庭も備わっている。

「しかし、本当に【アポロン・ファミリア】のホームを乗っ取ってしまいましたねえ…」

「ふん、ボク達は理不尽にホームを潰されたんだ、文句は言わせないぞ！」

屋敷を見上げるリルカの言葉に、ヘステイアは堂々と云ってのける。

「賠償金もたつぷりある、趣味の悪い彫像やらの撤去を含めて屋敷全体は改装しよう！何か要望があったら言ってくれ！」

「へ、ヘステイア様！どうかお風呂の導入を！」

「ヘステイア様ー！作業用の炉を造ってくれー！」

「まあまあ、落ち着きたまえ、胸を張って【ファミリア】を名乗れるようになったんだ！先にエンブレムを決めようじゃないか！」

予め用意していたのかごそごとと画材と画板を取り出して絵を書き始める。彼女を中心として羊皮紙を覗き込む俺達は家族のように身を寄せあった。

「へっへーん！ずっと前から考えていたんだ！」

「じゃん！」と完成した羊皮紙を見せつける。

「これは…炎と」

「なるほど。ヘステイア様の象徴は護り火なのですね」

「鐘…ベルか」

「そんなことはどうでもいいんですっ、このエンブレム、要はヘステイア様とベル様ということではないですか！」

「いいだろー。この【ファミリア】はボクとベル君が始めたんだから」

やがて俺とベルに羊皮紙が渡る。

「ハチマン…どう？」

「最高だ…左肩に刺繍を入れたくなってきた」

既にオオアマナが入っている右肩の逆には何もなかった為、寂しいと感じていた所だったからだ。

「さあ、君達。今日が本当の意味でボク達の「ファミリア」の門出だ。おかえり…」

『ただいま！』

lepisode of Spada

魔界が管理する地上に神が不祥事を起こした。一時的に世界(地上だけだが)の時間が止まり、天体の運行も止まった。相も変わらず杜撰な管理体制に痺れを切らしたのかモンドウスが俺に天界に赴き事情聴取をするよう命令した。ついでに敵情視察も。

「よう、スパードちゃん！まあたモンドウス様から雑用押し付けられたのか？相変わらず下つ端根性が抜けないnあああ!!!」

近くを飛んでた羽虫グリフォンを叩き落とし、首根っこを掴む。

サイズはあるがなんて事はない。

「五月蠅いぞ、鳥頭…」

ポンと投げると勢いでどこまでも飛んでいく。多少は懲りて暫くは絡んでこないだろう。

「行くのか？スパードさん」

デカイ蜘蛛の形をした魔物、ファントムが近付いてくる。こいつの事は余り好きではない。モンドウスにも俺にもヘコヘコしてて媚びてるようで好感が持てない。

「ああ、ちよつと天界まで」

「お気を付けて…」

低い頭を更に下げるのを横目で流しつつ、翼を広げて上昇する。暫く昇ったと思ったら閻魔刀を出して頭上に向けて大きく一閃を放つ。次元は裂け、空間に大きく穴が空いたらそこに飛び込む。

一瞬で地上まで出る。相変わらず青い空をしている地上。こんな所で生活できている人間に嫉妬に近いものを感じる。しかしだからといって襲撃するのも悪魔げないので再び空に昇る。

2度目の次元斬で天界に到達する。そこは魔界とは全く違く、地面が雲のような物で構成されていた。空には青が広がっており、またもや嫉妬を抱く。

「出迎えは…ないか」

組織として本当にやっていけるのか、と不安に駆られるが他人、しかも神なんて心配する道理がない為、ボスがいそうな場所に向かう。余り騒がれても癪だから人間体になって宛もなく歩く。この姿嫌いなんだよな…。

(誰かに聞くか…)

キョロキョロと周りを見渡すと家が神殿一件目に付いた。カーテンを閉じているが光が盛れているため在宅しているのだろう。

コンコン…

「……………」

返事がない…聞こえなかったか？

トントン…

「……………」

返事がない…集中しているのか？

ドンドン…

「すみませーん」

「……………」

返事がない…居留守か？

プチッ…

流石に温厚で知られたスパードさんもキレるぞ？わざわざ来てやったのに居留守こくたあ戦争の火蓋スパスパ切ってる事と同意義だぞ？

「殺す…」

「だー！ー！婚約はしないって!!何度言ったら分かるんだい!!しつこい神はモテないぞ!!」

バン!!と強引にドアが開く。目の前には髪はボサボサで寝巻きも着崩している女神が呆れた表情で立っていた。

「って…あれ？」

その女は俺の姿を見るや否や汗をダラダラと流す。

「誰が貴様に婚約なぞすると思っっているんだ？」

「あ、悪魔ッ!？」

「居留守使うなんていい度胸してるじゃねえか？」

スパードを取り出し、首元に当てる。

「ヒエツ…」

「まあいい、ここで一番偉い奴の所に案内しろ」

「は、はい…」

彼女に先導される形でゆつたりと歩いていく。

「どうして、居留守を使った？」

「ここ最近婚約を迫ってくる男達が多くて…今回もその類なのかなあつて思いました…」

「……………」

婚約か…俺も闇に生まれて……………数えてねえや。このまま独身であり続けるのだろうか…手っ取り早く女悪魔でも捕まえて結婚すれば仕事も無くなるのだろうか…。いやいや、どうせムンドウスに人質に取られるだけだろう。

「どうか…したのかい？」

「ここは…活気が無いな…」

「みんな、仕事をしないんだ。娯楽を貪って…人間達をこれっぽっちも導こうとしない…墮落しきってるよ」

「お前もな」

「うっ…」

そんなこんなで女神…名をヘステイアに暫く案内されるとデカイ神殿にたどり着いた。

「このゼウスって神様が最高神だよ」

「案内…ありがとう」

するとヘステイアはキョトンとこつちを見ている。

「なにか？」

「い、いやっ、感謝できるんだなあつて…」

「悪魔とて礼節は弁える」

呆れながら神殿の中に入っていく。奥からワイワイと騒ぎが聞こえるが慌てることもなくその音源に向かっていく。

「まてまてく〜い!」

「キヤー!ゼウス様のエ○チー!!」

「むほほほ!っーかまーえた!」

そこには色ボケた爺が女神を追っかけ回していた。カオス:とまではないかないが頭が痛くなるような光景だ。

「おい」

すると動きを見ピタリと止めた爺はグギギギと首を回し、こつちを見た。きつきのヘステイア並に汗を流している。

「なんだ、悪魔か:F O O O O!焦ったー!ヘラだったら殺されてたわい!ガハハハ!!」

「ムンドウスの遣いで来たスパードだ。世界の時と星々の運行が止まったのでな:事情聴取に来た」

「あ〜:あれね?はいはい、浮気相手の子供が余りにも可愛くてな?衝撃で止まったのじゃ」

衝撃で時と天体止めるなんて:流石全知全能:

「浮気って:仮にも神だろ:」

「お主は悪魔にしては誠実そうではないか?ん?」

「安心しろ、俺にだって愛人の20や50はいる」

「わほほ、やっぱりそうじゃろう?」

「ああ、剣も女も人生さえも思い立った時こそ至宝なのだから:」

「あつ!いい台詞!もーらい!」

「.....」

随分とマイペースな最高神だな、ペースが乱される。ていうかこんなに喋ったのは始めてだ。

「ま、他にも色々聞きたいこともあるからここに滞在させてもらおう、別にいいよな?」

「いいよいいよー」

ゼウスに背を向けて神殿を去る。すると出口の柱にヘステイアが寄りかかっていた。退屈そうに石ころをコロコロと足で弄りながら。

「あつーやーつと終わったんだね！」

とてとてと駆け寄ってくるヘスティア。そのグイグイくる性格をした奴は魔界にはいない為、少し新鮮だ。

「何の用だ」

「スパード君…だっけ？ここに暫くいるんでしょ？すると泊まる所に困る訳だからボクの神殿に来るといいよ！」

胸に手を当てプルんと揺らす。

「要件は？」

「魔界とか、君にとつての人を教えて欲しいなーって」

まあ、機密情報とか洩らす訳でもないし、厚意に甘えるか。

「分かった。世話になる」

「いやったあー！」

そんなこんなで彼女の神殿に入ると、それは沢山の書物があつた。読んでいいか？と聞くと話しながらでいいなら、と快諾してくれた。

「それじゃあスパード君？1つ目の質問だ。好きな食べ物は何？」

「人肉、動物の肉もいいが、今の所人がいちばん美味しい。筋肉が多いのが俺的には好みだ」

「そ、そうかい…2つ目の質問、んー、趣味とかは？」

「特には無いが…鍛練…人間観察…仕事…どれも違うな…強いて言うなら音楽？」

「音楽？悪魔も音楽を嗜むのかい？」

「今の所俺しかやってない…人間の奏でる音はどれも素晴らしいものだからな、俺も勉強してるところだ」

「へー、後で聞かせてくれないかい？」

「…いつかな」

そして俺の隣に読破された本が2000冊位積まれた時だ。

「じゃあ最後に、君にとつての人間は？」

ページを捲る手が止まる。

「格好のいいエサ…なんて胸を張って言いたいがきつと嘘になってしまふ。今でこそ俺の所の派閥が人間界を支配しているが、もし何かしらのきつかけで人が自由になったらどうなるか…好奇心を擽られる」

「君は悪魔なのに、人が好きなんだね」

ハツとヘステイアを見ると彼女は真つ直ぐ優しい目で俺を見ていた。別に心が動かされたわけではないが、核心を突かれたようでギクツとする。

「んなわけないだろ、愚かな人間を好きになるなんて有り得ない。争ってばかりで、俺達悪魔が導いてやらねーと何もできやしない鈍弱な生き物なんだから」

「でも、そんな生き物を見放さないのが君だ」

「……………」

「君には良心があるよ」

「俺に…叛逆しろというのか?」

「そ、そんな事ないよ」

ギロリと睨むと慌てて否定する。

「今日は色々と質問に答えてくれてありがとう。明日はボクの神友に紹介してあげるよ!」

いや、いいと言おうとしたが敵情を知れるのだ。本を読みたい欲は抑えて承諾する。

「今から寝るけど、襲わないでくれよ?これでも処女神なんだからね」

「鉛玉が欲しいなら言えよ」

「ジャストキティーン…」

そこらの床に伏す。はあ、こんなのがずっと続くと考えると頭が痛くなる。叛逆…か。

―時は過ぎ…

―【ヘステイア・ファミリア】―

ヘステイア・ファミリアの一室に買い込んだ大量の古本を置いている図書館がある。そこで本を読んでいる一人の青年、ハチマン・ヒキガヤがいる。

「あれ?ハチマン君?」

「神様…どうしたんですか?」

「いや、皆出掛けちゃってね、退屈してたんだよ」

椅子に腰かける彼の対面にヘステイアも座り、頬杖を付いてベルとリルルカが最近イチャコラしてないか…とかクソほどどうでもいい話を聞かされる。

「ねえ、ハチマン君」

「はい？」

「ハチマン君は…人をどう思う？」

ハチマンのページを捲る手が止まる。ヘステイアをチラリと見ると真剣そうに彼を見つめる。

「嫌いですよ…争ってばかりで、全く学習しない」

「……………」

「でも、本とか音楽とか…こういうのは飽きさせたくないから五分五分って所ですかね」

「そうかい…」

「ええ」

ヘステイアは満足そうに微笑むと窓から外を眺めた。

「君は似ているね」

そしてハチマンのページを捲る音が室内に響いた。

番外編 病んだオラリオにボツチを添えるのは間違っている

窓から漏れた光で目が覚める。目を開けると新しい自室の天井とはまた違う天井が見える。両手の自由が効かないのは縛られているからだろう。

また、これか。

「あ、やっと起きた…」

声のした方に首をグギギギと動かすと、寝てる俺をまた拉致した犯人、アイズ・ヴァレンシユタインが近くの椅子に座ってこちらを眺めていた。

「アイズさん…どうしてまた」

ハツと己のへまに気付くが遅い、またやらかしてしまった。慌てて訂正しようとするがアイズさんはワナワナと震えている。

ギリリリ…

「いっつー!」

手首を縛る縄をきつく締められる。

「何度言ったら分かるの? 私の事はアイズって呼んで?」

「でも…」

「でもじゃない、私は君に呼んで欲しいの…アイズって…」

寝ている俺の上に跨り、顔を近づける。こんな美少女に接近してもらうのは嬉しいが今は、というかこれからも恐怖が勝つ。なんとかして逃げねば。

「あ、あ、アイズ…?」

「ふふふ、なあに?」

心底嬉しそうに笑う。その目は完全にハイライトが消失していた。有給取ってないで働いてくださいお願いします。

「お腹空いたからご、ご飯が欲しいな、君の作りたてのご飯が…」

我ながら虫酸の走るセリフだ。こんなセリフもう二度と言う機会なんてないんだろうな。

「うん、分かった。スタミナ料理をたくぷり作るから待っててね。その後は私達2人で…ふふふ」

ま、不味い!!早急に逃げないと17年間守ってきた貞操を消失してしまう!今はポーカーフェイスで取り繕い、やり過ぎさなくては。

「美味しいの造るから…我慢しててね?ダーリン」

奥に引っ込んでいき、足音が遠のいたのを確認したら幻影剣を出現させ静かに手の縄を斬る。窓を開けてクイツクシルバーを発動させ音もなくアイズの隠れ家を去る。離れた路地裏に身を潜めてポディーチェツクをする。ルーチエ、ある。オンブラ、ある。ネツクス、ある。手袋、コートポケットに入っている。

「危なかったー…」

壁にもたれかかりズルズルと座り込む。アイズが豹変したのは1週間前からだ。最初は行くところに現れて奇遇だなあって思ってた。気が付けば監視されてて…それから段々エスカレートして…拉致されるまで至るようになった。

「帰るか…」

部屋の鍵、また壊されてるだろうからベルに匿って貰おうかな。いや、いつそ葉山に…。

そう思いながら路地を出るがすぐさま引っ込む。ヤバい人第2号がいた。逆の道を行こうとするが、謎の手に肩を掴まれる。あ、もうオワタ。

「何処に行こうとするんですか? あな…ハチマンさん」

「リユースさん…」

あな?

「今日はお部屋にいらっしやなかったので心配しました。今まで何処にいたんですか?」

「いや、アイズに拉致られてしまって「大丈夫でしたか!」ヒエツ…だ、大丈夫…です」

「剣姫に何かされませんでしたか!?手は!?目は!?皮膚には!?触れられませんでしたか!?スンスン…この匂い…あの女、ハチマンさんに触れた…!!」

「いやホント平気なんで帰って寝れば大丈夫です、それじゃあごきげんよう!!」

「待ってください」

再び肩を掴まれる。今度はとんでもない力が込められている。痛い痛い痛い、ハイライトさんも仕事して。

「ハチマンさんもハチマンさんです。どうしてあの女が来るのを想定して部屋に鍵を掛けるなり対策をしなかったんですか? どうして彼女を拒絶しなかったんですか?」

「鍵しても壊されるんですよ…」

それに拒絶しようものなら殺されかねん。

「ああ言えばこう言う、そんな五月蠅い口は塞いでしましましょうか。ハチマンさん、私と一緒に来ましょう。大丈夫です、【豊饒の女主人】の地下にいるだけでいいんです。3食ちゃんと美味しいご飯を出しますし、食後の運動(意味深)もお風呂もありますから…ふふふふふ」

そう、このリユーさん。一時間でも俺を目に入れてないとヒステリックを起こしてしまうらしい(シルさん談)。毎日5枚にも及ぶ手紙を出してくるし、3食全部【豊饒の女主人】で食べないと次の日の手紙が倍になる。つい2日食べなかつたら箱一杯の手紙を送ってきた。

「黙って聞いていれば随分な言いようね」

闇から現れたのはやはりハイライトさんが仕事を放棄しているヤバイ人第3号、ヘファイストスさんがやって来た。

黙って聞いていればの部分に違和感を覚え、身体中をまさぐると見たことも無いビー玉の様なものが出てきた。きつとGPSか盗聴器の類だろう。てかこんなマジックアイテムあるんだ。

「女神ヘファイストス、私のハチマンさんに何か用ですか?」

「あら? 聞き違えたかしら、ハチマンは私の夫よ? 貴方みたいなウエイトレス風情が釣り合うとでも?」

「ヘファイストスさん…」

それは少し言い過ぎなんじゃ…

「大丈夫よ、ハチマン。貴方のことは24時間365日ちゃん見守ってあげられるのだから、安心して私と添い遂げましょう?」

「そんな羨まツ…けしからぬ事、神が許しても私が許しませんツ!」
「ふーん! 私達は既に夫婦なのよ! 青二才が口出すんじゃないわよ!」※へフアイストスの妄想です

2人でいがみ合っているのをいい事にクイックシルバーを発動させ、命からがらその場を後にする。え? リューさんの時にやってればよかった? いやね、パツと消えたらより嚴重に監視、管理されるでしょ? そうしたら俺の貞操、命諸々が危うくなる訳よ。

「ぜえ…ぜえ…」

やつとの思いでホームにたどり着き、玄関を開ける。

「たでーまー…」

シーーーーーーン

おかしい、いつもなら誰かが反応してくれるはずなのに…。嫌な予感がする。リビング、図書館、キッチン、談話室、ベルの部屋、ヴェルフの工房、女性陣の部屋…は見れない。

「お誰も…いない?」

ダ あ り ん ♡

バツ! と振り返るとそこにはアイズがいた。右手に包丁を持って…。まさか、Scholdays的なアレになるのか? 誠になるのか!?

「ダメじゃない…朝飯も食べないで出掛けちゃうなんて…折角作ったじゃが丸くんが冷めちゃったじゃない…」

「アツ……………」

ぺたんと尻もちをつく。ジリジリとアイズは近付いてくる。よく見れば左手にじゃが丸くんを持っている。

「ねえ、ダーリン、食べてくれる? 私が入ったじゃが丸くん」

口の前に持ってくるじゃが丸くん。抵抗虚しく口にじゃが丸くんを突っ込まれる。口に広がるのは俺のよく知ってるじゃが丸くんの味とは程遠く、鉄分が口に広がり、何やら妙な薬でも入れたんだろうか変な味もする。

「美味しい? ねえ、ダーリン、美味しい?」

なんとか世辞を言おうとするが意識が朦朧とする。即効性の睡眠薬だったんだらう。

「今度は逃げられない所に行こう…ね?」

「!!」

ガバッと起き上がる。そこにはいつも見慣れてる壁、天井があった。寝汗が酷かった為、シャツがぐっしよりだ。周りの皆に迷惑をかけるないように静かに部屋を出てシャワーを浴びる。

「ふー、朝の冷たい目シャワーは気持ちいいな」

体と頭を拭き、リビングで一息つく。コーヒーを啜りながら部屋をボーツと眺める。郵便受けにあつた手紙を見る。リユースさんとヘアリストスさんからの手紙だ。まあ、内容は同じだろう。

AM:06:30

「そろそろ、かな」

キッチンに立ちエプロンを着け、朝ご飯の支度を始める。慣れた手つきで調理を進めていく。完成が間近になってきた頃、パタパタと慌ただししい足音が聞こえる。

「おはよーございますー!」

「おう、おはよう」

「おはよー…」

「おう、2人共顔洗って来い」

「うん…ふわくくあ」

「はい!」

テーブルに朝ご飯を並べ追える頃には全員揃い、皆揃って食卓に着く。合図を今か今かと待っている。

「いただきます」

「いただきますーす」

一斉にご飯を食べ始める。

「うん！美味しいよー！パパ！」

「そうか、良かった」

「相変わらずパパのご飯は美味しい」

「よく噛むんだぞ」

娘2人から賞賛の声を聞き、上機嫌になる。これが毎日の励みだ。

「どうだ？今日はお前の好きな品にしてみたんだが」

「うん、美味しいよ、ダーリン」

愛妻のアイズからも褒められる。

夢にまで見た幸せな家庭だ。

「ダーリン、今晚も…どう？」

「ちよつ、子供達の前だぞ」

「パパもママもなんの話してるのー？」

「いや、あの、そのお…プ、プロレスだ！そう、プロレス。格闘技の一種だ、ほら、母さんも父さんも元冒険者だったから」

「ふー…ん」

なんとかその場を凌ぐ。全く、アイズはデリカシーが少し欠けてるからな。夜の誘いなんて子供達の前で平気でしてくるからな。気を付けないと。

「…ご馳走様でした」

食器も片付け、子供達は外で遊びに行く。我が子ながら元気ハツラツだなあ。窓の外で追いかけてっこしてるのを眺めているとアイズが後ろから抱きしめてきた。

「どうした？」

「今、幸せなの」

「そうか…俺もだ」

「ねえダーリン」

「ん？」

「もう、逃げちゃダメだよ？」

「逃げるわけないだろ」

だって今、物凄く幸せなのだから。

2. 5章 魔境都市 千葉 編

2. 5章 #1 Take off for Chiba

「なんかクエストねーかなあ」

ギルドのクエストボードにて俺は仕事を探していた。いつもなら「働いたら負けだと思ってる」と、豪語しているが、今回は事情が違う。

(パフエが食いてえ!!)

そう、コードの新調、制服(偽)の制作費、諸々で手持ちの金が底を着いたのだ。まだ戦争遊戯が終わって4日というのに、悲しい事だなあ。

「ん?」

クエストボードの端つこにある羊皮紙が目にと留まる。随分と汚い字だが読めないことも無い。なにになに?

【マキヤキヤ遺跡の調査求む!!】

ふざけた名前の遺跡だ。調査だけなら楽だろうか、報酬も悪くない。ん?はじーつこにちーっさな字が書いてある。

「chiba?ち・ば?千葉!?!」

つい大声を出してしまい周りの冒険者達に見られる。恥ずかしい事をした。これは…キニナル…。受けるだけ受けて危険そうだったら途中棄権すればいいか?

「やるだけやってみるか」

エイナさんにその趣旨の報告をしようとする多数の人影に囲まれた。こ、これは!!

「ヒツキガツやくーん!僕のファミリアに入らないかい!?!」

「バカヤロー!はつきゆんは俺のファミリアに入んだよー!ねっ!?!」

「お、おでの…ファミリアに入ると…楽しい…よ?デユフ」

So 神だ。戦争遊戯での経験を得て、俺とベルはレベルアップした。今回は根回しをしてなかった為、神々の目にかかり、執拗い勧誘を受けていた。

「い、いやっ、俺はっ…」

人の波に飲まれ、溺れていると…。

「きーみーたーちー？」

声が出た。奇跡を殺す歌を歌いそうな声だ。

「やっべー！」

「ヘステイアだ！」

「にげろー！ー！」

わああああ…と蜘蛛の子を散らすように撤退した神々。ふう、助かった。

「ありがとうございます。神様」

「いいんだよ、君が困るなんて珍しい事なんだから。ん？その羊皮紙…クエストを受けるのかい？」

「ええ…少しその事で相談がありました。仮住まいで皆と話したいんです」

「分かった。君はアドバイザー君と話してから来るんだよ？皆も今は出払ってないから待ってるよ」

「ありがとうございます」

先に仮住まいに向かった神様を見送りエイナさんの所へ向かう。因みに仮住まいについてなんだが、「ゴブニュ・ファミリア」に新居の改築を頼んでいる間に広めの宿を借りており、そこを仮住まいと呼んでいるわけだ。

「エイナさん」

「ハチマンくん、さつきは見てたけど大変だったね」

「はい、神様がいなかったらどうなってたか」

「フフ…人気者は大変ね。クエストを受けに来たの？」

「はい、これなんですけど」

「これは…ギルドの認可を受けてない…もしかしたら報酬とか踏み倒されるかもしれないよ？あまりオススメはできないかな…」

「それでも…知りたい事がそこにあるんで」

「…深くは聞かないけど、細心の注意を払うこ…と」

エイナさんの言葉のキレが悪くなる。どうしたんだ？

「ハチマン君も罪な男だね…」

「俺が何を…」

エイナさんは俺の後ろを黙って指さす。え？とか言いながら振り向くと羊皮紙を覗き込んでいるアイズ・ヴァレンシユタインがいた。

「ど、どうしたんすか？アイズさん」

「……………」

「あの、アイズさん？」

「クエスト…受けるの？」

「ま、まあ…」

「…私も行く」

「はあ？」

何を急に言い出すんだ？

「いや…？」

ふつーにいやなんですけど、と言おうとしたその時、ギルド中の殺気が俺に向く。

「あまり調子に乗るなよ」

それはモテない冒険者達の怨念だった。オラリオ随一の美少女に誘われて断るのは男の恥だ。と言わんばかりの汗臭い殺気。

「まあ、別に…構いやしないけど」

「やった」

小さくガッツポーズをするアイズさん、可愛い。

「じゃあハチマン君、気を付けてね」

クエスト認可のハンコを受け、羊皮紙をしまつて仮住まいに向かう。アイズさんにも話そうかと思っただが、俺の過去にもまつわる話の為、南口で待っているように言っておいた。

ー【仮住まい】ー

「皆にこれを見て欲しい」

羊皮紙をテーブルの上に出すとベル、ヴェルフとリルカ、命さん

と神様で回し読みをする。

「よくあるクエストだね」

「こりやまた変な名前の遺跡だなあ」

「マキヤキャ遺跡、聞いたことありません」

「これがどうしたんだい？」

「むっ!?これは…」

どうやら命さんが見つけたようだ。

「ヘステイア様、この字に見覚えは？」

「むむむ?見た事ない字だ…サポーター君は？」

「残念ながら…」

「うーん、俺もベルも見覚えがねえ。ハチマンこれがどうしたんだ？」

「…これは俺と葉山の故郷の言葉（少し違うけど）でな、【千葉】って書いてある」

「ハチマンの故郷の!？」

「こんな字なのか…」

「画数が多いですねー」

「それでだ、俺はこのクエストに行こうと思ってる。何かよからぬ事が起こるかもしれないからな」

嫌な思い出しかなくても故郷なのだから。

「一人で行く…なんて問屋が卸さないぜ」

「ハチマンを一人で行かせられないよ」

「こういう時に頼ってくださいいね！」

「いつだってお供します！」

「だって僕達はファミリアなんだから！」

「みんな…」

巻き込みたくない思いがあったが、ファミリアだから…か。理由になつてしまうのが怖いな。

「千葉案件かい?同行しよう」

「葉山院……」

ガチャリとドアを開けて入ってきたのは花京i…ゲフンゲフン、葉山だった。

「盗み聞きしてたのか？」

「遊びに来たらつい聞こえてね」

「皆、葉山も加わって大丈夫か？」

「二」「もちろん」「三」

「留守番は任せてくれよ？」

そんなわけでフルメンバー十？αで南口に向かうと…

「あつ…来た」

「雑魚共が群れやがって…」

「なんで？」

そこにはアイズ・ヴァレンシユタインの他にベート・ローガがいた。だからなんで？

「それは…」

それは私が一人南口にて待っている時のこと。

(ハチマン…まだかな)

金髪を弄りながら気長に待っていたら

「アイズ…何してんだ？」

暇でウロウロしてたベートに見つかり、事の顛末を話すと

「あの野郎のクエストか…面白え俺もついてってやるか」

「え…」

「え、じゃねーよ!!」

「…つて事なの」

「ええ…」

「んだよ、悪いかよ」

壁にもたれかかっていたベートさんがこちらを睨む。

「別に…1人や2人増えても驚きやしねーよ」

行くぞ、と門番のバン・モンさんに挨拶してオラリオから出る。気分はドラクエ、小さい頃やったなー。

「比企谷」

「?どうした」

「その2人は誰なんだい？」

葉山がアイズさんとベートさんを交互に見ながら問いかける。知らなかったのか。

「オラリオ一二を争う派閥の幹部だ。アイズ・ヴァレンシユタインさんとベート・んんさんだ」

「ローガだ！ベート・ローガ!!」

「成程…ていうかどうして2人が？」

それな!!という顔で今まで黙ってたヘステイア・ファミリアの面々がこつちを見てくる。

「かくかくしかじか…こんなことがあってな」

「」「成程…」「」

納得してくれたようで助かる。

それから1時間近く羊皮紙に指定された方角に歩くと遺跡の入りらしきものが見えた。本練が見当たらないが…地下に続いているのか。

「こつから先、何があるか分からない。気を引き締めるぞ」

リリルカの指示でフォーメーションを組む。前衛にベルと俺、中衛に命さんとリリルカ、後衛にベートさんとアイズさん。索敵は命さんの便利魔法。中々の陣形だ。

「おい、なんで俺たちが前衛じゃねーんだよ」

「お客人にあまり手を煩わせたくないからです、後から色々言われると面倒ですから」

「チツ…思慮深いパルウムだぜ、フィンと似てやがる」

しかし一向に進んでもモンスターは現れず、途中の部屋なども無く、あつという間に最深部にたどり着いた。鋼鉄製のドアを潜るとそこは半径20mの円状の床がガラス張りで敷かれており、その下にはいくつもの魔石が敷き詰められている。中央とその上には訳の分からない機械がある。

ガチャン!!

俺達が入ったのを見計らったのかドアが思い切り閉まる。どうやら閉じ込められたようだ。

「チツ!!洒落せえ!!」

ベートさんが思い切りドアを蹴り破ろうとするが、ドアはそんな第一級冒険者の蹴りを弾いた。

『ザザツ…ようこそ、マキャキャ研究所に』

何処からか声がする。よく聞き慣れた声だ。

「この声…マキャヴェリか！」

『よう、ハチマン…体内のギルガメスは馴染んでるか？』

「テメエ…なんの真似だ！」

『なあに、予定してた修行だ。これからお前達は千葉に行き、千葉をめちゃくちゃにしてる混沌を祓はなくてはいけない、やんなきゃ帰れんぞ』

ポチツ…

「おい！今なんか押した音がしたぞ!!」

耳のいいベートが叫ぶ。すると床が淡く光り出す。魔石が共振しているのが目に見える。

『それじゃあ、素敵な旅路を☆』

「ハチマン！どうしよう!?!」

「くっ…衝撃に備えろ!!」

床と天井の機械が電気を帯びる。魔石の光も目を開けていられないくらい光、俺達は為す術なく閉じこめられたまま光に包まれた。

「くっ!!」

「うわっ!!」

「うおっ!!」

「ギャツ!!」

「くっ!!」

「クソがッ!!」

「キャツ…」

「おっと…」

光に包まれた瞬間、次の瞬間地面に衝突して各々が叫びを上げる。しかし全員冒険者、すぐに起き上がって周りの状況を把握しようと周りを見渡す。空は夕焼け時で、カラスが鳴いていた。

「これは…」

ベルが呟く。そう、辺りは墓だった。オラリオで見たような西洋風の墓ではなく日本式の墓だ。

「お墓…ですね」

「随分変わった墓だな…」

「それより…ここはどこでしょう」

「千葉か…」

1つの墓が目に残り、その墓を見つめながら皆が欲しがる答えを出した。そう、ここは千葉のお寺だ。

「ハチマン…それって」

「ああ…」

ベルが俺の元に近付く。もれなく全員も俺の近くにやってくる。

「ひき、がや…?」

命さんが震わせた声を出す。どうやらあつちの極東でもこの漢字は読めるようだ。

「そう、俺の墓だ」

『!!』

俺の墓があるって事はきつとここは千葉の寺が管理する墓地だ。

俺は…忌まわくとも愛しい千葉に帰ってきたようだ。

「さっきの声の野郎、お前の知り合いか?」

ベートさんが睨みながら聞いてくる。

「ああ」

「なにもんだ?」

「名前はマキャヴェリ、研究者兼 銃鍛冶師。俺のルーチエとオンブラを作ったのもそいつだ」

コートを一ヒラリと捲り、二丁拳銃を見せる。

「取り敢えず状況整理だ、マキャヴェリ曰くこの千葉を巻き込んだ混沌とやらをなんとかすれば帰れるらしい…すまん、巻き込んで」

腰を曲げ、頭を下げる。

「そんな！着いてきたのは僕の方だから：ハチマンが謝る事ないよ！」

「ベルと同意見だ。何するにもファミリアだろ？」

「そうですよ、リリもハチマン様の力になりたいですから、この位ヘツチャラです！」

「新参者ですが：私もファミリアの一員です。着いていきます！」
「皆：ありがとう」

ホント、いい家族に恵まれたよ。

「面倒だが：面白くなってきたじゃねえか」

「私はハチマンの故郷に来て嬉しい：よ？」

「ブレないな：アンタらは」

頼もしいのかなんなのか：。

「比企谷、ここに居てもアレだ。移動しよう」

「移動ったって：どこに？」

「街に降りようと思う。そこで適当な廃ビルで身を潜めよう」

墓地から離れて道を歩く。

「ハチマン様、この石畳とはまた違う地面はなんですか？」

リリルカがアスファルトを不思議そうに観ながら問いかけた。そうか、オラリオにはそういうのとか無いもんな。

「アスファルトって言ってな：地面のあちらこちらに敷いてある。転ぶとマジで痛いぞ」

「私のいた所と違いますね：」

やべ、誤魔化さなくちゃ。

「そりゃ：地域も違ければ文化も違う。巫女さんのいた所は神様とか恩恵とかあったけどこっちはそんなのなかったから：独自の文化を築くしかなかったんだ：うん」

我ながらそれっぽい言い訳ができたと思う。

「着いたよ：」

「わあ!!」「なんじやこりゃ!」「大きい：!」「天晴れ：」「見たことない：」「ぶっ壊しがいがありそうだな」

皆にとつては見たことない場所で新鮮なんだろうが俺と葉山は怪訝そうな顔をしている。おかしい…

「人がいない…」

街灯は点いてる…ビルにも光が点いてるテナントはあるが人の気配が無い。無音、車も走ってない。完全にロックダウン状態だ。

「何があった…?」

無音の街の道路を歩いて回る。既に空は暗く、視界は街灯が頼りだ。嫌な予感がする。嫌な匂いもする…この匂い…来る。

「ギギギイイッ!!」

突如前方5m地点に人間大の大ききで虫のようなモンスター…いや、悪魔が6体程やって来た。歯にあたる部分をガチガチと鳴らして威嚇している。

「やる気みてーだな」

「命様、索敵お願いします。他の皆様は追加で敵が来てもいいように警戒をお願いします」

リリルカの指令に従い、命は魔法で鴉のような動物を飛ばし俺達は武器を構える。

『……………け…』

「うっ!」

「ハチマン!?!」

何だ!?!今のは…一瞬気分が悪く…

「大丈夫?」

「平気だ…」

アイズさんに心配されて情けない。頭を振ってリベリオンを構え直す。

「うおらあ!!」

一気に3体、ベートさんに蹴り飛ばされ、絶命した。危険を察知したのか残り3体は既に逃げの体制に入っているため、ルーチェ&オンブラに持ち替えて取り出し引き金を引く。

B A N G ! B A N G !

2発の弾は虫のような悪魔の頭を的確に撃ち抜き、絶命させる。再

びりべりオンを取り出し、残りの一体は思い切り飛び上がって急降下して地面ごと串刺しにして殺す。

「付近に反応はありません！安全…だと思えます」

緊張が解け、戦闘態勢を解除する。

「今のはなんだったんだ？」

「魔石も…出ていません。モンスター…だったのでしょうか」

「悪魔さ」

ヴェルフとリルカの疑問に葉山が答える。俺以外の全員が葉山の方を向く。

「悪魔…」

確かベルはアラストルの悪魔形態（本当の姿）を見たんだっけ。俺がヘアアイストス・ファミリアの元団員達に拉致られた時。

「悪魔だあ？」

「そう、モンスターとはまた違う生き物、あれは低級すぎて考える脳が殆ど無いけど、強くても弱くても極めて危険な生き物さ」

「ここに住んでる奴らは恩恵を持たない…もし悪魔が沸いたならなされるがままだ」

「」「ゴクリ…」「」

「まあ、マキャヴェリの言ってた混沌とやらも粗方掴んだ…と思う。生存者の探索は日が昇ってからにするか」

全員が固唾を飲むなか提案する。きっと疲れているだろう。ずっと緊張してばっかだしな。

「取り敢えずそこらのビジネスホテルに泊まるか」

ホテルに入り、女性陣と男性陣に分かれて部屋に入る。従業員数とかはいないが、代金は葉山がついでに寄ったコンビニで飯を買った時におろした金を払ってもらった。人がいなくても金は払わんとな！

大部屋に入る。俺とベルとヴェルフと葉山とベートさん。ベッドは4つしかない。誰かが床で寝なくてはいけない。しかし全員見知らぬ土地で疲労困憊、譲る訳にはいかない。無論俺もだ。

「これで決めるか…」

『!!』

手をゴキゴキと鳴らす。ベートさんも釣られて肩を鳴らしている。葉山を手を握ったり広げたり余念が無い。ベルもヴェルフも覚悟を決めたようだ。

「二二行く(ぜー)(よー)(ぞー)」「二二」

『じゃーんけーん…ポンッ!!』

「そんなあああ…!!!」

隣からハチマンの叫びが聞こえるなか、女性陣は静かにベッドの上で座っていた。

「あちらは仲良さそうにしていますね…」

「そうですね…」

「ベッド…フカフカ…」

一人ベッドの上で軽く跳ねてはしゃいでいるアイズをよそにリルカと命は神妙な顔をしていた。

「ベート様に遮られてしまいました…あのハチマン様のお墓とはどういうことでしょうか…」

「さあ、自分にはサツパリです」

再び沈黙が時を刻む。

「だったら聞こう」

何を思い立ったのかアイズは部屋を飛び出す。

「連れてきたよ」

ハチマンを肩に抱えてアイズは部屋に戻ってきた。一冊の本を手にとってるハチマンは何が何だか分からないようだ。

「で、聞きたい事ってどうした?」

「ハチマンのお墓の事について」

「ああ、あれか…そのまんまだ、俺はこの地で死んだ。だから墓が立ってる、以上」

「以上って…どういう事ですか?」

リルルカが恐る恐る聞く。

「街歩ってる時見たろ?車ってやつ」

「ええ、馬より早く走る鉄の箱…ですよね」

「そう、俺はそれのもつとでかいヤツに轢かれてミンチになった。でも、気が付いたらダンジョンにいた…5階層にな」

「あの時…」

ハツと初めて会った時の事を思い出すアイズ。

「訳が分かりません」

「ああ、俺もだ。気がつきや訳の分からない所で化け物に襲われるわ金髪美少女に助けられるわベルに拾われて冒険者になるし…ホント、色々あったな」

「ハチマン殿はオラリオが嫌い…なのですか？」

「いや、別に…むしろ好きだ。有り得ねえ位お人好しはわんさかいるしよ、パフエとピザとコーヒ―は美味しい。そして何より…帰る場所があるからな」

その一言を聞いて2人は納得した。例えハチマンがどうであろうとハチマンはハチマンなのだ、と。

「分かりました…所でハチマン様はなんの本を読んでいるのですか？」

「これか？葉山に渡された運転教本」

「二うんてんきよーほん？」

「まあ、参考書みたいなものだ、気にするな」

それじゃ、と言いハチマンは部屋を後にする。

「何話してたんだ？」

女部屋から戻ったハチマンにヴェルフが問う。

「ここについて色々な」

床にどかりと胡座で座り教本を読む。既にその内容は半分は頭に入っていて後はマシンさえあれば熟練者並のドライブテクニクは披露が可能だ。しかしハチマンが望むのはさらにその先、人にはできないような動きだ。バイクで壁を登ったりできないととても戦闘には活用できない。

「えつと…は、ハチマン」

「どうした、ベル」

「もしハチマンが良かったら僕のベッド半分貸すよ」

「おお、ありがとう」

スペースを空けたベルの横に寝転がり教本を読み続ける。ベートはそれを見るなり何やら不思議な感情を抱き、葉山とヴェルフは微笑ましい光景に内心尊んでいた。

#2 再開と罨

朝、窓から零れた朝日でベルは目を覚ます。それに釣られてヴェルフ、葉山、ベートも目を覚ます。

「起きたか」

ベルの隣で寝ていた箸のハチマンが扉にいる。何処かから戻った様だ。少ししか寝てないのか目の下に隈がある。

「俺は済ませたがシャワー順番に浴びろよ、その後にはロビーに集合」

それを言い終わると隣の部屋に向かって起き始めた女性陣にも同様の内容を話す。

〜40分後〜

ロビーに全員が集まるとそこに机と椅子がそれっぽく並べられており、机の上には朝ご飯が置いてある。

「おかわりはある、ジャンジャン食え」

『いただきます!』

ハチマンを抜く全員が料理に手を伸ばし、それぞれのペースで箸を進める。その間ハチマンは膝の上にパソコンを置いてカタカタツターンと操作する。

「ハチマン…それは何?」

「パソコンって言ってな、環境さえ整ってればどこでも見れる掲示板みたいなものだ…それより食いながらでいいから聞いてくれ」

「何か分かったのかい?」

「いや、何も…何も出てこないんだ」

全員がハチマンの方を見る。

「こんだけの騒動になってれば何かしらの書き込みが絶対にあるはずなのに…今の千葉の現状について何一つ書き込まれていない」

「隈無く探したかい?」

「無論だ、Yahoo(ヤッホー)、Noog(ノーグル)、My Tube(マイチューブ)、Kasut(カスッター)、8ちゃんねるetc…ありとあらゆる所を探したが不自然過ぎるほどヒツ

トしない」

「それってよオ、マズイことなのか？」

料理に夢中だったベートが口を含みながら問いかけてくる。

「かなり異常だ…例えるなら分ごとくに状況報告される戦闘にて自分の部隊だけ何も連絡がない位だ」

「そりやマズイな…」

「他の地域は？」

「健在だ、悪魔の事なんてこれっぽっちも…いや」

少しごもるハチマン。

『？』

「海外にも大量に悪魔が沸いたらしい」

『!!』

「1ヶ月前だが大勢の人が死んだらしい」

「そこって今はどうなってるの？」

「一応元凶は叩けたらしい。元通り…とまではいかないが復興するのも時間の問題だろうな」

「他にもなにかあったの？」

それでも神妙な顔をしているのはにベルが問いかける。

「これといって成果は…」

神経を張り巡らせたせいかわハチマンは疲れている様だ。ポケットに入れていたアルミ缶のタブを開け口をつける。

「まあ、結果としてここに関しては驚く程何も出てこなかった。取り敢えず持ち物を確認したい。各自持ち物を教えてくれるか？」

「えっと、僕はいつもの装備とポーションが1つ」

「俺は大刀に砥石だな」

「リリはボウガンにポーションとマジックポーションを各自10本づつ」

「自分は太刀にポーションを2本です」

「私はデスペレートとポーションが1つ」

「俺はフロスヴィルトと双剣」

各自武器はちゃんとある。ポーションが14本、マジックポーション

ンが10本か。

「ん、サンキュ。それじゃありりルカと俺と葉山以外はポーシオンを2本ずつ持つ事、残りは全部りりルカが管理。マジックポーシオンはそうだな、ベルとアイズさんが3本、俺は2本。残りはりりルカが管理。いざって時に使う。異論は？」

「比企谷はともかくなんで僕にはないんだい？」

葉山が不服そうに聞く。

「そりやギルガメスの防御力はめちゃくちゃ高いからな。そんじよそこらの攻撃じゃ傷すらつかないだろ」

「まあ、そうなんだけどさ…信頼されてるのかされてないのか、判断に困るなあ」

ポーシオンも配り終え、食器やベッドの片付けも終わり、全員ビルから出る。朝日は暗雲に覆われており、青空も見えやしない。

「取り敢えず、人の避難しそうな場所に行こう」

「ハチマン、心当たりは無い？」

「学校…とかが災害時の避難場所になってるな」

「だったらそこ行くぞ」

格好をつけて先に歩こうとするベートだが行き先が分からずハチマンをチラチラと見てくる。

「はあ、葉山先導頼む」

「僕だっってここら辺はあまり詳しくないんだけど…」

しかしそこは葉山、何とか現在地を把握し学校へと向かう。道中世界にチェーン店を展開しているファストフード店のアハドナルドに立ち寄り、紙袋を1つ拝借するハチマン。目に当たる部分に穴を開けおもむろに紙袋を被る。

「ハチマン…またなの？」

「またっって…こんな事してたのか？」

「仕方ない…今回は顔を見られる訳にもいかないからな」

いそいそと紙袋を被り、ショーケースの硝子に写る自分自身を見て細かい位置の調整に入る。

「よし、行こうか」

ビッグバーガーをもつきゅもつきゅと食べてるアイズに声をかけ再び搜索を再開する。因みに作者はえびフィレオ派です。

「あつ、そうだ」

葉山が何かを提案しようとする。

「はっはっはっはっ……!」

「ギギギギ!!」

走る、ただ走る。後ろを向かずとも奴ら悪魔が追いかけてくるのは背中に突き刺さる殺気で分かる。奴らと私の距離は5mもなく、追いつかれるのも時間の問題だ。

(こんなつ……はずじゃ……)

どてっ!!

「キャッ!!」

荷物を持って走ってた為、足がもつれて転んでしまう。こんな事になるなら荷物なんて捨てておけば良かった。

悪魔達は立ち止まり、齒をガチガチと鳴らしながらジリジリと滲み寄ってくる。絶望に染まった私の顔を見て喜んでいようだ。

「たいし、けーちゃん……」

こんな自体になってから行方が分からない妹の名を呟く。その声が弟と妹に届かなくても…

「ギギイイー!!」

餌の前に待ちきれなくなったのか悪魔が飛びかかってくる。ああ、もう…終わりか…。

目をそつと綴じる。

グシャア!!

肉の砕けた音がする。不思議と痛みはない。アドレナリンが大量に分泌されたせいかな痛覚を麻痺させたのだろうか。

グチャ!グシャ!!グチイ!!

どんなに残酷な肉の弾ける音がしても意識が遠のく気配はせず、恐る恐る目を開けるとそこには男が立っていた。身長は180に差し掛かる程で、紫のロングコートを羽織っている。右肩には花の刺繍、

左肩には鐘と炎の刺繍。手と足に鎧?の様なものを付け、悪魔を何度も何度も踏みつけている。その顔は…紙袋に遮られ見る事はできなかった。

「……………」

その男はゆっくりと私の方に振り返ると暫くこちらを見ていた。

「あつ…助けてくれて…ありがとう…」

こくりと頷く。一言も喋るつもりは無いらしい。

「ハ、ヤハタ〜!!」

ヤハタ…すなわちハチマンの元にベル達が駆け寄って来る。

「急に走ってくからどうしたのかと思ったよ…」

すまん、とハンドサインを出すハチマン。

「川崎さん…だよね」

葉山がついさつきまで襲われてた少女、川崎沙希の元に近付く。川崎は信じられないといった顔になる。

「あ、あんた…!行方不明だったはずじゃ!!」

「色々訳あつてね…今は彼等と行動してるんだ」

「そう、だったんだ…そうだ!葉山!大志とけーちゃんを、私の弟と妹を見なかつた!?!幼稚園生なんだけど…」

ピクリとハチマンが反応する。

「まさか、はぐれたのかい!?!」

「うん、真夜中に奴らが出てきて…それで人混みの中で避難したら、はぐれちゃつて、大志は探しに行つて…もう1週間も経つ…」

俯き、顔を手で抑え泣きそうな声を出す川崎。

「普通に考えてりや死んでるな」

「ツ!!それでも生きてる可能性に賭けたいから…」

それを聞いたハチマンは立ち膝でしゃがみこみ、地面に手をつける。魔力をドーム状に広げ、引っかけた人や物を探知する魔力結界の応用技だ。魔力消費は大きい。

「ヒット…そこにいろ」

声に分からないくらい音で呟くと猛スピードで駆け出さつた。

〜10分後〜

「……………」

まだかまだかと待っていた川崎の元に寝ている少女と少年を抱えたハチマンがやって来た。

「けーちゃん!! 大志!!」

ハチマンから妹の京華を受け取る。ハチマンは葉山にそつと耳打ちをする。

「疲れきって寝ているそうさ。スーパーの控え室の片隅で震えていたらしい。ご飯はお惣菜とかだったらしい」

「よかった…よかったあ…」

2人を抱きしめポロポロと涙を流す川崎。

「ヤハタ…さんだっけ。ありがとう…私だったら見つけられやしなかった…本当にありがとうございました」

2人を抱きしめたまま頭を下げる川崎姉。ハチマンは何も答えず何処かを眺めていた。

「全く…大層な能力だな」

ベートがハチマンの腰を小突く。ポリポリと紙袋越しに頭を搔くハチマン。

「川崎さん、今千葉を取り巻く状況を教えてくれるかい？」

「分かった。避難所に行きながら話すよ」

話を聞けば悪魔が沸いたのは1週間前の夜中7時辺り。大勢の人が殺される中、命からがら生き延びた人達は総武高校や海浜高校に避難し、そこで怯えながら暮らしているらしい。何故川崎が街に居たかと言うと、食料調達部隊として街に出て食料を探すと同時に位妹や弟を探していたらしい。食料調達部隊は聞こえは立派だが、実の所生還率が低く、くじで決められた人間が調達に向かうが、その半数は悪魔の餌食になるらしい。川崎は調達6回目らしい。

「すごい勇気ですね…」

「そんなんじゃないよ」

ベルの感嘆の声に照れくさそうにする川崎。

「つと…着いたね」

校門前に立つ。校舎は2、3ヶ月前と見てくれはぜんぜん変わらず鎮座していた。唯一変わったのは悪魔の侵入を抑える為の柵に設置された有刺鉄線だけだ。

靴は履き替えず、校舎の中をズンズンと進んでいく。俺と葉山以外は物珍しい顔であちらこちらを見渡している。

(このルートは…)

ハチマンの予感的中した。川崎に案内されたのは職員室だった。

「ここは学校全体を管理する本部。教職員をはじめ、生徒会とクラス委員長が主体で管理、統制をしているから、一応挨拶と報告にね」

コンコン、ノックして職員室に入る。職員達は出払っているのかがガランとしている。

「戻りました、先生」

「あー、川崎か。また君に会えて嬉しいよ、弟さんと妹さん、見つかったのか、良かったあ」

煙草をスパスパ吸っている教師がやってきた。葉山と八幡がよく知っている教師が。

「その人達は？見た所一般人じゃないっぽいが」

「悪魔に襲われていた所を助けてもらいました。葉山、紹介してくない？」

「葉山？葉山じゃないか！生きてたのか！私はてっきり死んだのかと…！」

葉山の肩をバシバシ叩き嬉しそうにする。

「先生、話は紹介が済んでからで…えっと、順番に紹介します。ベル・クラネルさん、ヴェルフ・クロツゾさん、リルカ・アーデさん、ヤマト・命さん、アイズ・ヴァレンシユタインさん、ベート・ローガさん、そして、ヤハタ・サーティーン（ハチマンの偽名）さんです。因みに名前、苗字です」

「そっかそっか…悪魔に対抗できる人達か…改めて歓迎しよう。私はこの長…的なのを任されている平塚静だ。よろしく」

ニカツと笑う彼女。しかし違和感を覚えているのはハチマンだけだった。

「葉山：君に何があつたのか教えてくれないか？」

「簡単ですよ、遭難して意識不明の所をこの人達に助けてもらっただけですよ」

「なるほど：改めて私の生徒を助けてくれてありがとう。ん？君が被っているそれは…」

平塚がハチマンの紙袋に注目する。

(ま、マズイ!!)

喋ればバレるため、身振り手振りでコミュニケーションを測るが何も伝わらない。

「先生、彼はシャイなので…」

葉山がその場しのぎの言い訳をする。ほう、と納得した平塚は川崎に向き直る。

「川崎、彼等に校舎の概要と案内をしてくれたまえ。君の弟妹は私が救護室に運んでおこう」

「はい：着いてきて」

川崎に案内されるハチマン一同。

「校舎の教室と体育館は避難民の仮の家になってる。とは言え、教室に住めるのは管理委員の関係者が指名した人達だけなんだけどね。体育館にいる人は学校にコネのない人達は薄い板で仕切られた狭い居住スペースで暮らすしかないんだよ」

体育館に入ると一斉に視線がこちらを刺す。一同が関係者という嫉妬、食料の配給だと勘違いしている期待、行き場のない怨念、様々な感情がヒシヒシと伝わってくる。

「除くだけにしな：今の私達に出来ることなんて限られてるんだから…さ、次行くよ」

臭い物に蓋をするように思い扉を閉める。

「次は：コンピュータ室かな。ていつてもあそこの連中は一日中引きこもって外に救助を求めたり、海浜高校と連絡して情報を交換してるだけなんだけどね」

ノックをして開けるとパソコンの排気熱故の熱発がムワツと頬を撫でた。

「何の用だ…川崎氏」

部屋の奥から声だけが聞こえた。

「今日の成果は？」

「無論、無理だ。私の英智をもってしてもこの壁は高すぎる」

「あつそ、失礼するね」

川崎がドアを閉めようとした瞬間、ハチマンが手で遮る。

「どうかしたんですか？ヤハタさん」

（先…行つてろ）

そう葉山に耳打ちする。

「彼は後で追いつくらしいから先行こう」

「わ、分かった」

ハチマンを端目にコンピューター室を後にする一同。

一同が去ってから暫くすると俺は足を進め声の主の元に向かった。

「何の用かな？新顔よ」

パソコンに夢中になつてるその男は室温が高いのにも関わらず茶のコートを身につけており、百均の指ぬきグローブを嵌めていた眼鏡のデブだった。

「何してるんだ？」

「…外への救難要請と、海浜高校との、連絡だ」

「にしては違う画面だな」

「海浜高校は潰れた…つい昨日。695人も人が死んだ。救難要請しようにも外とのネットワークは見れても発信はできないようになつている」

「そうか……」

「そういうお主は…何をしてたのだっ…！八幡ッ…！」

紙袋を取るとその男、材木座義輝は振り返る。目には涙を浮かべ、鼻水をダラダラと流している。

「泣くなよ…みつともない」

「瞬き…グスツ…してないし…ズビツ、花粉症だから…デュポオ…仕方ないのだ」

最後の気持ち悪い擬音はスルーしてコロのついた椅子に座る。10分、材木座は鼻をかみ、目をシパシパさせ、気持ちを整理させていた。

「落ち着いたか？」

「うむ、大丈夫だ。それより八幡よ、お主、死んだ筈ではないのか？」

「話すと長いぞ」

「うむ」

前屈みになって聞く姿勢をする材木座。

「〜って訳だ」

「なるほどなるほど…つまり八幡は我がこくんにも苦労してる時に女子とイチャコライチャコラしてたのか…そうかそうかつまり君はそういう奴だったんだな」

「おいエーミール、今の話のどこにそんな要素があった」

「H A H A H A H A H A H A!! ジョーダンだっ! それより八幡よ…お主」

「ん? どうした」

材木座が上から下へと俺の全容を確認する。

「雰囲気が変わったな…もつとジメジメしていた筈なのに…」

「変わらなきやいけない環境に身を置いてるからな」

「厨二病？」

「ちげーよ」

そんな話をした後、やっと本題に入る。

「てかお前マジで何やってるんだ？」

「それを聞く前に我の話を聞いて欲しい」

真面目な顔をする材木座。

「どうした…」

「八幡…この事件は…人が起こしている」

「な、何!？」

材木座から告げられた衝撃の事実には驚きを隠せなくなる。

#3 ALIVE at the Chiba

「まあ、予想は着いてた」

「なぬう!？」

「だってそうだろ？情報発信できないって事は機械に詳しい人間が関わってるってこと、だろ？」

「ウヌウ…ふふふ、ふううははははははは!!」

急に高笑いしだす材木座、なんだ？強がりか？

「八幡よ、そんなんでマウンテイングしたつもりだが我にはまだ2つ程自慢できる事があるぞう？」

「どうしたよ」

「外に助けを求めた!!」

バサリとコートをはためかせダサイポーズを取る。ギニュー特戦隊みたいなポーズを想像してくれ。

「!!」

「そして！なにやら地図を入手した！」

プリントアウトされた紙を渡される。これは…研究所の見取図？見た所中々のデカさだ。

「それに、何やら文書の一部を手に入れた」

渡されたメモを読む。

「なになに？『重要参考人は地下3階の…に収容』？」

「地図の場所は地図で特定済みだ」

有能だなあ、おい。

「よくやった!」

材木座の肩を掴みグワングワンと揺らす。

「はぽん？」

「そこに潜入できればこの事件の犯人の尻尾を掴めるかもしれん」

「し、しかしだ！外には悪魔が彷徨いておる！死ぬぞ?」

「死なねえよ、あんな奴ら皆殺しにしてやる」

「……本当に、変わったな」

悲しいのか嬉しいのか分からない感情を含んだ声で材木座が呟く。

「今夜行ってくる」

「くれぐれも気をつけるのだぞ」

「おう、あんがとな」

見取り図を貰い部屋を後にする。紙袋は被り直す。

昼になった。何も無くなつた部屋元奉仕部屋で今の所することの分からない

一同は暇を持て余していた。ハチマンは全員に材木座からもらった情報を伝えていない。余計な混乱を招かない為だ。葉山は忘れ物を取りに行くと言つてどこかに行つた。

「ちよつといい？」

『？』

「昼ごはんの配給…手伝つてくれない？人手が足りなくて」

「わ、分かりました」

動き出すベルに着いていく。ベートは「ちつ、なんで俺が…」とかボヤいている。きつと戦いたいのだろう。

校庭に出て仮設テントまでいくと炊き出し用の米とスープが入つた銀のドラム缶が用意されていた。川崎から詳しい配給方法を聞く。デカイおたま一杯のスープに決められた器一杯に米を入れるとの事だ。

「こんななら外出て悪魔共殺しまくつた方がマシだ」

「珍しいな、テメエと同意見なんてよ」

ベートとハチマンがボヤきながら配給を進めていく。こういう作業に関しては不器用なのかアイズはたどたどしく危なっかしい為、ちよくちよくハチマンが手助けをする。

「ありがとう…」

「慣れないよな」

「ううん、闇派閥との戦争が昔にあったから…慣れない私が悪い」

「そんなのがあったのか…」

「うん…」

オラリオも戦争すんのか。と内心複雑な感情になるハチマン。ふと配給待ちの人達を見渡す。そこに笑顔なんて物は存在しなかった。

今を生きるのに精一杯であった。

カラン…

お玉をその場に置く。その音にその場にいる全員がハチマンを見る。

「ハチマン?どこか調子悪いの?」

「いや、バカみたいだって思ったんだ」

急にこんな事言っただけでも本当に訳が分からない。いつもなら、オラリオに来る前なら、変な夢を見なければ、コイツらと関わらなければきつと俺はもつと冷たく、鋭くあれた。

「アイズさん…今は…」

ベルが俺の名前を訂正しようとする。

「いや、いいんだ。俺の名前は比企谷八幡で…いいんだ」

ブルルルルウウウウン!!!

激しいエンジン音と共に現れたのは赤いバイクに跨った葉山だ。周りの人間が群がるが葉山は小さく電流を流す事でそれを遮る。バイクと俺の間に人が空けた道ができる。

「やっ腹が決まったんだな…比企谷」

「もうなりふり構わない。俺は千葉を救う事にした」

葉山から鍵を受け取る。

「金田のバイク…」

「君も好きなんだろう?僕もだ」

葉山とグータッチをする。

「ハチマン…」

ベルが心配そうにやって来る。ヴェルフもリルカも命さんもそうだ。アイズさんとベートだって近付く。

「情けない所見せた」

「ううん」

「おい、目標は決まってるのかよ」

「目星は付いてる」

「いや、お前達はここを守ってくれ。悪魔共がなりふり構わず押し寄

せてくるかもしれん」

こんな物はいらぬいな、と紙袋を取る。周りの息を飲む声が鮮明に聞こえる。ヤハタ・サーティーン…短い間だが世話になった。こっから先は比企谷八幡に任せて欲しい。

「お兄、ちゃん？」

人混みの中からヨロヨロと現れる3つの影。その正体はかつての父と母と妹だった。

「よう、久しぶりだな」

「アンタ…どうして」

「死んだ筈じゃ…」

死んだ筈の息子が生き返ったのに恐怖を抱いているのか声が震えている。足は付いてるぞ。

「アンタらに構ってる暇はない」

「アンタらって…家族、でしょ？」

「悪いな母ちゃん、俺の家族はガキの頃に死んでんだよ」

バイクに跨りエンジンを付ける。タイヤの縁が緑のプラズマを発する。葉山はスピード抑えていたがこれはもっと早く走れる。

「行ってくる」

「まっ……」

アクセルを全開で捻り、誰かの静止を振り切り、学校を走り去る。轟音と共に走ってる為、悪魔がわんさかと寄ってくる。もしかしたらボスが寄越したのかもしれない。

「悪魔にモテたってなあ…!!」

バン！

上空から強襲したつもりの悪魔の脳髄を威力の高いオンブラで吹き飛ばす。その周りの悪魔はバイクを走りながら回転させながら連写性能の高いルーチエで的確に目玉や頭を撃ち抜きながら材木座から教えてもらった研究所を目指す。

「報告があった、1人向かってるらしい。バイクに乗ってるようだ。全員、位置につけ」

屋根の上にいる異形がほか6体の異形に声を掛ける。その異形達は個体差こそあるが、虫のような羽や顔に動物のような体に角を生やした天使のように白く、悪魔のように禍々しい生物だ。

「えー、またやんのー?」

「まあ、しょうがないよ。チャチャツと片付けよう?」

「早く帰ってハニトー食べたーい」

「つべー!!独りとかマジナニガヤくんなんだかー!」

「だな」

「それな」

手に付いた血を舐め、次のターゲットが予測されるルートに来るのを今か今かと待ち構える。

ブオオオオオオオオン!!

「来たぞ…」

爪を尖らせ、低姿勢を取り、何時でも襲える構えにする。そのエンジンは段々と大きくなっていく。

ブオオオオオオオオ…

「ぶぎゅ…」

突然止んだエンジン音、轟音が無くなったと同時に仲間の一体の情けない声がすぐ近くで聞こえる。スローモーシヨンの様に声を出した仲間を見ると紫のコートの男に思いつきり鳩尾にドロップキックを入れられ、その男と一緒に吹き飛ぶのが見えた。

「姫菜!!」

「海老名さん!」

ドオオオオオン…

激しい衝撃と共に煙が上がる。

バキツ…ズルズル…バキツ…ズルズル…バキツ…

「なんの…おと…?」

煙が晴れると紫のコートを着た男に足を掴まれ、何度も屋根に頭を激突させられる仲間、異形と化した海老名姫菜の姿があった。

「もう伸びたか…弱っちな」

「「「「「!」」」」」」

その男に異形達は戦慄する。1, 2ヶ月前に死んだ筈の男、比企谷八幡が頭に青筋を浮かべながら執拗に海老名姫菜をいたぶっていたからだ。

「や、やめ……やめろおおお!!」

「とべつち!!」

鋭い爪を立て、八幡に突進する戸部翔。しかし常日頃から戦っている八幡からすれば鈍すぎる突進は通じなかった。

「……………」

「……………え?……………あ、れ?」

引き裂いた…と思った矢先、その爪には血が一滴も付いていない。なんなら戸部の全身に激痛が走る。何の事かと自身の体を確認すると何本もの赤い筋が全身に走っていた。

「あゝあゝあゝあゝあゝ!!!」

「……………ちよせえ」

後ろから声があるが、振り向かずとも分かる。遥かに超える速さで居合をされたのだ。それは彼が持っている日本刀が物語っている。戸部は力なくひれ伏した。

「わ、わあああああ!!」

「うおおおおお!!」

「ま、待てー!」

主格の異形が2人を制止するがパニックに陥った2人はそれを無視し、八幡に突進する。

「チツ……………学べよ」

コートの内側に手を入れる。手を出した時、その両手には白と黒のハンドガンが握られていた。

「うわあああああああ!!!」

「はア……………」

無数の銃撃が2人を襲う。その凶弾は2人の体中の肉を抉る。手足、胴体、頭はわざと外されている。

バタツ……………

力なく倒れる2人、余りの呆気なさに逃げる気すら失せる残り3

人。無言で怒りを体現している彼はゆっくりとこちらに歩み寄ってくる。

「どうだ？これが蹂躪される人の気持ちだ。お前達が殺して殺して殺しまくった人間達の気持ちだ」

「……して？」

「あ？」

「どうしてこんな事をするんだし!!」

「どうしても何も…人殺しの悪魔いたぶって咎められる筋があるかよ」

「ウチらは悪魔なんかじゃない！天使だし!!」

会話が成立しないバカに呆れる八幡。この馬鹿さ加減に見覚えがあるがきつと人違いだろう、と内心想っているが実際本人であった。

「うっさ…」

B A N G ! B A N G ! B A N G ! B A N G ! B A N G ! B A N G !

無慈悲に撃ち出された弾が三体の異形の手足胴体を撃ち抜く。その痛みに喘いでいる三体に唾を吐く八幡。

「精々ここで痛がつてろ…っ」

謎の頭痛が彼を襲う。千葉に来てから、いや、あの門を開いてから体に不調が現れている。髪の色も目の色だって不安定だ。

「急ぐか…」

下に停めてあったバイクに跨る。因みにさっきの強襲のタネはクイックシルバーを発動させ、その間にバイクを止め、屋根に登ってドロップキックをかましたという事だ。なんとも地味な絵になるが、仕方ない。

ブオオオオオオオン…

そしてまたバイクを走らせる。

「うぐっ…海老名さん…」

ちぎれかけている体を引きずって最愛の人物である海老名姫菜の元へ向かう。海老名はピクリとも動かない。

「戸部っち…？」

「なっ！我々は人間だぞ!?殺す気か!？」

「人間名乗るなら…人らしい事してから言えよな!」

「っ…構うな!撃てー!!」

右拳を地面に叩きつけると自分を中心にドーム状のエネルギーを発生させ、銃弾を弾き黒服達を巻き込む。バレてちゃ隠密もクソもない。

「うわー！ー!!」

「魔力食うな…」

魔力効率の良い閻魔刀に持ち替えて室内を走り回る。追加の黒服達がワラワラとやって来る。放たれた銃弾を一つ一つ丁寧に閻魔刀で切り裂く。

「防人の一閃…その身に刻め!」

飛び上がり、閻魔刀を相手に向かって振り下ろす。蒼い斬撃は黒服達の元に落ち、青い爆発を巻き起こす。気分は歌って戦う防人だ。

「確か地下3階って言ってたなっ!!」

黒服の腹をぶん殴る。傍のエレベーターを起動させ、B3のボタンを押す。暫くしてエレベーターに乗り込み、目的値のボタンを押す。

ゴウンゴウン…と揺れに揺られるが、上から響いた1発の発砲音と共に俺の体はフワリと浮く。

「野郎っ…ケーブル切りやがった…」

地下3階はとんでもない深さにあるのか、暫く落ちていく。体はエレベーター内の床を離れ、無重力を擬似的に体験している。

「どうしょ…」

チュドー…ン!

一方総武高校にて

「ちっ!!何体来やがる!」

ベートがもう何体目かも分からない悪魔の頭に蹴りを落とす。

「ふっ…!」

少し離れた場所にいるアイズも悪魔を三体同時に切り刻む。

「ぜえやッ!」

ベルも空を飛ぶ悪魔に飛び移ってはナイフで切り刻むを繰り返していた。

「やつら…何体出てきやがる!」

「一々数えてたら…キリが…ありませんッ!」

「今は口よりも手を動かしましょう…!」

命の魔法で抑えた雑魚悪魔をリリルカが狙撃していく。ヴェルフは命やりリルカの護衛に専念している。

「はあああッ!!」

大剣から放たれた雷を落とし黒焦げにする。7人で学校に攻め入ろうとすら悪魔を返り討ちに行っている。

「今になってどうして…」

(この学校を取り巻く環境が変化したのは僕達が来てから…いや、比企谷が学校を出てからだ。黒幕は比企谷を引き止めたいから悪魔を山ほど向かわせたんだろうが、比企谷八幡という男を見誤ったね…黒幕さん)

「でも…そろそろキツイなあ…早く終わらせてくれよ…比企谷!!」

ガン!…ガン!…ガン!…ガアン!!

ひしやげたエレベーターの扉を殴り飛ばす。

「……………」

煙を手で払いながら先に進むが地下3階の異様な雰囲気警戒する。それもそのはず、景色が一段とおかしいからだ。壁は黄色や緑といった明色の入混ざった壁に何やら読み取れない言葉が書いてある。

「うつ…」

また頭痛がする。こんな時にやめて欲しい。幾本かの柱に固定された急ごしらえの(それでも頑丈だが)床はガツガツと踏むとまだ下に何かあるように音というか衝撃が響く。半径200mはありそうなドーム状の部屋であり、あちらこちらには研究所突入前に遭遇した悪魔に似た形状の死骸が無惨に転がっている。それも山ほど。

「ちっ、薄気味悪い…」

何かありそうな中央に歩いて向かう。すると倒れてる人が見えて

きた。

「！」

駆け足で駆け寄るとその人物の詳細が分かった。重要人物がこの人なら黒幕の大体想像がつく。しかし理由は分からない。

「ッ!!」

思い切りこちらを見たその人は袖に隠し持っていたであろう悪魔の死体からむしり取った爪で喉を目掛けて突いてくる。しかしそんなスピードでは仕留めきれず、呆気なく手を掴まれる事でその人、雪ノ下陽乃の奇襲は幕を閉じた。

「ひき、がや……くん……?」

「話した後、逃げますよ」

「きやつ」

お姫様抱っこ……ではなく、首に巻き付けるように担ぐ。これなら戦えない事もない。

「ろまんが、ない、なあ……」

「ごちやごちや言ってる舌噛みますよ」

パチパチパチ……

出口に向かって歩き出そうとすると拍手が室内に響き渡る。何事かと音のした方を見る。

「柱に隠れてると祝う意味ないだろ……雪ノ下」

「あら、そうかしら? 貴方が影でされるのは陰口位だからこの位許容範囲よ……ゾンビ谷くん」

相変わらずの罵倒口調で影から出てきたのは今回の黒幕と思しき女、雪ノ下雪乃だった。

#4 約束

「これはなんだ…雪ノ下」

周りに転がっている悪魔の死体を視線で指さす。よく考えてみたら殺した悪魔とは違い消滅していない為、生きてはいるのだろう。

「帰天に失敗した元人間よ、悪魔の出来損ないね」

ポケットに手をつ突っ込みながら淡々と説明した。

「帰天…？」

聞いた事のないワードだ。

「5年前に実家の会社が資金提供していた宗教都市フォルトゥナ。そこで密かに行われていた人間に悪魔の力を宿す儀式を転用したものだ。何を間違えたのかオリジナルに比べて成功率は低いけれど…より強力な個体を精製するのに成功したのよ」

「人…う…これが人なのか…」

じゃあ俺がさつきボコボコにしたのは人間だったのだろう。いや、オラリオでもこういうのは日時茶飯事だ。罪悪感を感じるが後悔はしてはいけない。アイツらは人の道から外れたのだから。

「そうよ、ほら、貴方の足元にいるのは…確か戸塚君だったわね」

「!!」

「一人で何とかできると思ったのかしら…ここまで辿り着いたご褒美に儀式を施したらこのザマよ。苦しみながら体の6割がゲル状になったわ」

「……………」

「貴方が癒しと拝んでた人が悪魔の力にも耐えきれず肉塊になったのに怒ったかしら？」

足元の肉塊と化した戸塚を見下ろす。半分溶けたような悪魔の顔でも俺には最後の最後まで諦めていない顔に見えた。雪ノ下はその相変わらずの美貌で微笑む。しかし目は笑っていない。

「ゆきの…ちゃん…もう、やめよ？」

「黙りなさい、私は何としてでも計画を完遂させるわ。それが上に立つ人間の義務よ。貴女のような半端な人間と一緒にしないで頂戴」

雪ノ下がポケットから手を出すとポケットが握られていた。嫌な予感がし、それを撃ち抜こうと拳銃を取り出すがコンマの差でボタンを押されてしまった。

「ゆきのしー……た……」

「……………」

揺れる部屋、音を立てて崩れゆく床崩壊する天井、様々な音が入り交じり彼女が何を言っているかは聞き取れないが、ああ、きっとこういう事なのだろう。付き合いが長い（自身のこれまでの人付き合いから比較）とある程度分かっってしまうのが怨めしい。

「必ず…殺してやる」

深く胸に誓うのであった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……!!!

悪魔の群れを撃退し、各々が集まり状況を確認をしていた際に突然の揺れが研究所だけでなく千葉全体を襲う。

「なんだなんだ!?!」

「凄い揺れ……」

「また沸いてくるんじゃないやねえだろうなあ?」

「皆さんまた何が出てくるか分かりません!警戒態勢を!」

「何が起こってるんだ……?」

「あ、あそこを!!」

命が指さした辺りを周りが注視する。地鳴りは段々強くなっている。すると突然地面が割れ、巨大な塔が地中から生えてきた。止まることを知らない塔は何処までも伸びていった。暫くすると塔の成長も止まり、空には暗雲が立ち籠った。

「あれは…バベル!?!」

そう、オラリオにいる人間なら誰しもが見違える建造物はバベルに似ていた。相互点を挙げればその色は黄色や緑といった明色がふんだんに使われた外壁。明るい色と相まっておどろおどろしすぎる雰囲気であった。

ヒュルルルル……

「ん？」

すると一同の上に黒い影が被さる。迎撃しようと全員が身構えるがその正体を確認したら安堵の息と共に武器を下げた。その影は時間と共に大きくなっていく。

ギャギャギャギャアアアア!!!

「うっぷ……」

一同のすぐ隣に赤いバイクと共に八幡が落ちてきた。魔腕を出しており、そこには葉山以外が知らない気絶している女性が握られていた。

「ハチマン!!」

ベル達が駆け寄る。単騎でカチ込んだハチマンの身を案じていたからだ。アイズも心無しか心配そうな顔をしている。

「どうした…怪我はしてないだろ？」

すると一同が顔を見合わせる。ベートも葉山と怪訝な顔をしている。するとアイズが自身の頭を指差しハチマンに確認を促す。

「頭？………あふん」

すつと頭に手の平を置きそれを確認するとボロボロの革の手袋に真っ赤な血を付着させていた。いつ付いたんだ？と思考を巡らせていると白目を剥いてその場に倒れ伏した。

「ハチマン!?!」

「ハチマン様!!」

「ハチマン殿!!」

「医務室に運ぼう、その陽乃さんも」

「私は…大丈夫…」

すつと、陽乃の目が開く。しかし一応の事もあり医務室に行き、その担当の人に診察をしてもらおうという事だ。

「軽い衰弱状態だったようね、聞いた話、そんな所にいたらそうなるもおかしくないわ…よく頑張ったわね」

「ありがとうございます…」

保険の先生の鶴見先生の軽い診察によって安堵する陽乃…その周

りには話を聞こうとオラリオ一同が集まっていた。

「問題は比企谷君よ、頭を強く打ってるわね…失血による気絶で済むといいのだけれど…絶対安静よ」

「分かりました…」

娘の様子を見に行くと行って鶴見先生は部屋を後にする。ベッドに横たわる比企谷を背に一同は話を聞く。

「自己紹介が遅れたわね、私の名前は雪ノ下陽乃」

「陽乃さん、聞かせてください。千葉に何が起こってるんですか」

「事の発端は私の父、雪ノ下秋人と宗教国家のフォルトゥナが原因よ」

「フォルトゥナ？」

「ええ、その国はかなり特殊な神様を崇拝しててね、悪魔を崇拝しているの」

『!!!』

「その悪魔の名前は…スパルダ」

「スパルダ？ベル、聞いた事は？」

「ううん？」

オラリオ一同はスパルダを知らない為、頭にハテナを浮かべている。

「2000年前に正義に目覚めて魔界に反旗を翻し人間界を救った伝説の悪魔よ。当時隔たりのなかつた魔界と人間界を分け隔て封印した私達人間にとっての英雄よ」

「英雄…」

「そんな悪魔を崇拝しているフォルトゥナの頂点に君臨する教皇はやがてそんな神にも等しい悪魔の力を欲して禁忌に手を染めたの」

ゴクリ…誰かが唾を飲み込む。

「悪魔の力を人に降ろす儀式を編み出したのよ。フォルトゥナ崩壊の際に父の手下がその技術を盗んでそれを強化発展させた“帰天”…そして父も悪魔の力に魅入ったの。研究所の地下深くに塔を建設、最深部には父が創造したハリボテの悪魔の体が設置され、その真上には帰天の儀式場。スイッチを押せば塔が地下から地上に生え、より大掛かりな儀式を執り行える。地下じゃ狭すぎるからね計画発動までの

カウントダウンが始まった頃にクーデターが起こった。私の妹：雪ノ下雪乃が父に引き金を引いたの。計画は見事に乗っ取られて千葉が特殊結界と内側から発信できなくても外側が見れる電波網が張られた。後はついでに盗んだ技術の極小地獄門で雑魚悪魔達に千葉を恐怖に陥れた。後は適当な人間に帰天を施して、成功したなら部下に、失敗したなら人造悪魔の肉になる…そして計画は塔の起動と共に最終段階に入った…これが全てよ」

陽乃の長い話が終わり、オラリオ一同は黙り込む。そこに慌ただしい足音が近づいてきた。

「大変だ！皆の衆!!」

ベージュのコートを荒立てながら医務室に駆け込んできたのは材木座義輝だった。

「材木座君、何があったんだ?」

「コンピュータ室に来れば分かる。っ…八幡は…」

「軽い気絶だよ、すぐに起きるさ」

「分かった…着いて来てくれ」

八幡独りを残してコンピュータ室に向かう。アイズは別にいいと言いつ残し、ハチマンの傍に座り彼の手を握っていた。

「これを見てくれ」

モニターに映し出された映像は塔の頂上を写していた。なんでこんな光景が見れるのか心底不思議に思っている一同を察し、材木座が適当にはぐらかす。頂上には丸く黒く、そして大きな繭のようなものが赤い光と共に鼓動していた。

「あれが…雪乃ちゃん…」

「なんと…雪ノ下嬢であったか!!ここに居ないと思ってたら…ならば由比ヶ浜氏とも繋がってるかもしれないなあ」

「目標は分かった…要はアレをぶっ潰しやいいんだろお?」

「今は無理ね」

陽乃が断言する。

「あ?んでだよ」

「今現在あの繭の中には大量の魔力が流れているわ。下手に刺激を加

えると周りの街に被害が出かねないわ…殺すなら羽化した直後ね」

「そんな…殺すなんて」

「ごめんなさい…でもあの子は沢山の人の命を弄んだわ。到底許される行為じゃない…止めたとしても待ち受けるのは苦しい死。知らない人に殺されるより知ってる人に殺された方がまだ幸せよ」

「じゃあ…誰が命を奪うんですか…？」

「……………比企谷君よ」

『！！！！』

「ダメですよ!!ハチマンに人殺しなんて…させられません!!」

ベルが激しく抗議する。ヘスティア・ファミリアのメンバーも同意したような顔をしている。

「だったら僕が立候補しますよ。雪乃ちゃんとは知らない仲じゃないからね」

「隼人はあの子に嫌われてるじゃない…それに、貴方にあんな動きができるかしら？」

「あんな動き？」

「瓦礫から瓦礫へと飛び移る運動神経、私に傷一つ付けないように計算尽くで落ちてくる大量の瓦礫を撃ち落とす反射神経、自分をどこまでも犠牲にできる残酷さ…貴方は持ち合わせているかしら？」

「……………」

押し黙る葉山…その場の空気は重く、暗くなっていた。

「俺が…殺ります」

声のした方を向くと入口に比企谷八幡とアイズ・ヴァレンシユタインが立っていた。

「またここか……………」

最初はウユニ塩湖の様な綺麗な精神世界だった筈なのにいつの間にか俺の立っている水面は黒くドロドロとしたものになり空は暗雲に閉ざされていた。両開きの扉はどちらも30度位開き、無理矢理体を捻り入れれば入りそうな気がする。もっと開けば強さを手に入れられるのだろうか。

「予想は当たっているが死ぬ程痛みを味わうからやめとけ」

「アンタか…」

「ああ、にしてもとんでもない巡り合わせだな、因縁の女がラスボスか…人生生きてりゃこんな事あんだな」

「アンタにもそんな経験があるのか？」

「いや、あー…一人滅茶苦茶面倒臭い女がいたな…ワンナイトラブな関係だったが相手さんは俺にベタ惚れしたのか執着してきて困ったなあ」

昔を振り返り懐かしむ扉の向こうの男。

「どう断ったんだ？」

「妻子がいるからゴメンなって」

「!?アンタ結婚してたのか!？」

「まあな、幸せな家庭だった」

「精神世界ここにいてるって事はアンタ死んでるんだよな…平気なのか？」

「大丈夫と言えば嘘になるがアイツ等なら大丈夫だろう…なんせ俺の家族だからな。んな事よりお前の話だ、どうすんだよ雪ノ下って女」

「…殺すしかないだろ」

「それがお前の答えか…あの塔からとんでもない魔力量を感じる。人造悪魔か…洒落臭い」

「なんかマズイのか？その人造悪魔つてのに」

「自分のクローンとか作られたら気持ち悪いだろ…その延長線だ」

「そうか…」

「勝てそうか？」

「当たり前だ…勝負もまだ着いてないしな」

『勝ったものが敗者に何でも一つ命令できる権利を与えよう!』

「そんな事もあったな…そろそろ起きたらどうだ？お前の目覚めを待つ人間もいるしな」

「? 誰だ？」

「起きてからのお楽しみだ」

「むがががが…!!」

「むう…」

囁かな騒音がハッキリと聞こえてくると共に目を開けて騒音のする方を見ると後ろ姿のアイズが小さな女の子の頬を横に引っ張り少女は短い腕でアイズの腕を掴み小さな抵抗をしていた。

「おいおい、何してるんだ？」

「この子がハチマンの…／＼」

「むががががが…」

「とりあえず手を離せよ…な？」

アイズが手を離すとアイズの背後でよく見えなかった少女の全貌が明らかになった。長い黒髪、落ち着いた目：鶴見留美だった。

「ルミルミか…どうしてここに？」

「おかあしやんに…はちみゃんがここにいてひいて…あと、ルミルミいふな」

ヒリヒリする頬を両手で撫でながら説明する。可愛い。

「お母さん…？鶴見先生の娘だったのか…驚いたなあ。で、アイズはなんでルミルミに？」

「ルミルミツテイウン」

「ルミルミちゃんか…ハチマンのベッドに入ろうとしてたから…／＼」

俺史上初観測の顔を赤くするアイズ。

「…ルミルミはなんでベッドに？案件にでもする気？」

「それは…ハチマンが寒そうにしてたから…あとルミルミ（以下省略）」

「こういうのをませがきつてテイオネが言ってた…！」

ちよつとテイオネさん？純心なアイズに何吹き込んでるんですか？何故か分からないけど目のハイライトが消えかけてるんですけど？

「落ち着けよ…相手は子供だぞ？」

アイズとルミルミの間に割って入りアイズを制する。

「むう…」

そして何故か頬を膨らますルミルミ…

「そういえば他の奴らは？」

「こんぴゅーた？室に行つたよ」

「マジか、俺らも行くぞ」

腕がされていたコートとを手に取り、外されていた手袋を手の傷を隠すようにはめる。部屋を後にしようとするどと持つてない方の袖を引かれる。犯人は確認せずとも分かる……この2人だ。

「何？袖引き小僧ならぬ袖引き小娘なの？」

「……また、戦うの？」

2人の顔は不安に塗れていた。

「もちろんだ……」

「どう、して？」

「剣や銃を握れる手がある。豊富な魔力が体を巡っている。ギルガメスが心臓になり鼓動を刻んでる。魂が叫ぶ、「守る為に戦え」って。ゴメンな……待たせてる奴がいるんだ」

いくぞ、とアイズに声を掛ける。今度は誰にも止められることなく部屋を後にする。

「八幡!!」

「？」

廊下にてルミルミに呼び止められる。

「死なないでね」

「おう、サンキューな、留美」

階段を登りコンピユータ室を目指す。

「俺がって……比企谷、何を言ってるのか分かってるのか？人を殺すんだぞ？」

葉山が比企谷に詰め寄る。

「そうだ、俺は雪ノ下雪乃や悪魔に魂を売った畜生共を殺さなくちゃいけない」

ベルとヴェルフとリリと命は不安そうに八幡を眺め、ベートは横目で八幡を見つめ、アイズは彼に何をしたらいいのか分からず困ったようにしている。

「次の戦いはさつきまでと比べ物にならない程キツくなる…お前達に
どれだけ言われようと巻き込みたくない気持ちは変わらない…だか
ら…俺の我儘に付き合ってくれ…クイツク シルバー…」

時を止めた八幡は材木座と雪ノ下陽乃以外の人間の意識を首トンス
する事によって刈り取った。使われてないコードで手足を縛り空き
教室に閉じ込めた。

「もう二度と顔向け…できないなあ…」

どのような形であれ仲間には牙を向けた。その事実が八幡に深く刺
さる。今まで受けたどんな傷より痛む。血も出てないのにどうして
こんなに痛むのだろうか、と屋上にて星空の元悩む。

「君が彼ら彼女等を大切に思ってるからだよ」

その答えを簡単に雪ノ下陽乃は出した。

「頭の中身見ないで貰えますか？」

「ゴメンね…比企谷君」

深く謝る陽乃に振り向く八幡。彼女は八幡の元に歩み寄り彼の隣
に座る。彼等の前には紫に光る繭があつた。

「それは何に對してですか？」

「悪魔になったとはいえ人を…ましてや知り合いの女の子を殺さなく
ちやいけない状況に持っていつちやって…私が止められてたら…雪
乃ちゃんを…キヤツ」

彼女が最後まで言い切るのを八幡は彼女を片手で抱き寄せる形で
遮った。抱かれた陽乃には見えないが八幡は闇夜でも分かる程顔が
赤くなり手が震えていた。

「は、陽乃さん…そこから先は言っちゃいけません。アンタはこれ
も姉なんだ。家族なんだ。言っちゃいけない…と思います。安心し
て下さい、雪ノ下は俺がちゃんと息の根を止めますから…」

震える彼の手に陽乃も自分の手を重ねる。

（恐いのね…これから人殺しをするのが…家族のような仲間に二度と
会えなくなるのが…）

暖かい彼の胸に顔を疼くめること数十分。

「比企谷君…ありがとう」

悩みを振り切った彼女の唇が彼の頬に触れる。

「なっ!?!／／／」

「さっきのお返しだよ、じゃあ私は寝るね／／」

屋内に戻っていく陽乃の背中を八幡はただ見つめる。後ろで繭が一瞬だけより一層の輝きを放っているのを知らずに…。

「お前のせいで…!!」

「どうして…」

「死ね…」

しかし誰一人として俺を止めようとしなない。否、止められないのだ。避難民達からしたら俺は人の形をした得体の知れない化け物なのだから。

「アンタさえ産まなきゃよかった…」

材木座が用意してくれたのか校門前にバイクが停めてある。ピカピカに磨かれており、頑張れ、と書かれたメモがハンドルに貼られていた。

「……………」

バイクにまたがりエンジンを着ける。そんな俺に小さな影が幾つも見えてくる。石だ、頭やバイクに当たりそうになるがギルガメスをほんの少しだけ展開し受け止める。

「はあ……………」

ホルスターに手をかけ拳銃を取り出し空に向かって一発撃つ。すると罵詈雑言だった雑音は悲鳴へと変わり体育館内に引っ込んでいく。

「ははっ…いい大人が恥ずかしくねえのかよ」

アクセルを捻りトップスピードで走り出す。暫く真っ直ぐ走っていると徐にブレーキをかけた。進行方向に対して垂直にドリフトしながら車体を停めた。所謂バイクスライドブレーキだ。進行方向の延長線上に5つの影があつたからだ。

「残り約2キロってところで…」

順に平塚静、三浦優美子、由比ヶ浜結衣、戸部翔、相模南がいた。塔からは蝗害のように悪魔が沸いて俺の方に向かってきた。

「さてと…頑張るぞい」

さあ、明日を掴み取ろう。

窓から紫の光が洩れる。ハチマンが戦闘を開始したのだ。空を埋め尽くさんとする悪魔をビームや銃を駆使して殲滅している。

「おーおー、やってるなあ…」

「!!!」

「なんでこんな所に!? って顔だな…まあ猿轡位は取ってやるか…ほれ、どうだ喋れるか白兔」

「なんでここにいますか、アラル神父!」

一同の前には初老の神父服を着た男がいやらしく笑って立っていた。

「マキャヴェリとは古い知り合いでな、話聞いたら気になったから来ちまったよ」

「お願いです! 鎖を解いてください!! このままじゃハチマンが死んじやいます!」

しかしそんな要望を嘲笑うアラストル。ベル以外の面子はアラルを睨んでいる。

「そいつはできない相談だな」

「どうして…」

「アイツにはさあ…強くなって貰わなきゃ困るんだよ」

「でもハチマンは十分「黙れ」っ……」

「確かにお前らのものさしで計ればアイツは強いのかもしれない。でもな、そんなんじゃ足りねーんだよ」

「?」

「ま、そこで指咥えながら見てな…あ、縛られてるんだっけな? ギャーハツハツハツハツハツ!!!」

「……………」

電に包まれアラルは姿を消した。

「どうしよう………」

トン…

悩むベルにヴェルフが軽くベルに体当たりする。彼の目は諦めていなかった。

「ケプコン! ケプコン!」

そこに外からわざとらし過ぎる咳払いが聞こえた。

「材木座さん」

極めつけはこれだ、雑魚悪魔の相手をしていけば圏外から悪魔と化した由比ヶ浜や平塚先生とかからちまちま攻撃される。

「あははは!!ヒツキーどう!?アタシこーんなに強いんだよオ!!」

「ふははははは!!圧倒的じゃなイカ!!ワレラハ!」

「海老名さんのかたきいいいいいい!!!」

「ひいきいがあやあああああ!!!」

「フウ…フウ…フウ…!!!」

「チイツ!!!」

腕から光線を放つがやはり雑魚悪魔達が盾となって攻撃を塞ぐ。多勢に無勢…俺の魔力は残り僅かとなっていた。

「邪魔すんじゃねえ…!!」

フォースエッジを構えて由比ヶ浜の元に飛んでいく。雑魚悪魔がさせまいと飛んでくるのを足場として利用して更に加速する。

ガキン!!

フォースエッジは由比ヶ浜のでかい爪と衝突して鈍い音を発する。こいつら、薄々勘づいていたが昨日よりも格段に強くなっている。レベルに換算するなら4…か。

「あはは!ヒツキーイ、独りぼっちなのに勝てるなんて思ってるのオ!?むりダヨオ!ギャツ!!」

ベオウルフで腹に一発蹴りを入れて由比ヶ浜を吹き飛ばす。

「衝撃ノオオ!!ファーストブリットオオオ!!」

「がああツ!!」

とんでもない拳が後ろから繰り出されモロに後頭部に当たり地面に落とされる。この技…平塚先生か。彼女の攻撃に特化した右手は脅威だ。

「もう諦めたらどう?ヒキオオ…戸部はどうだか知らないけど痛くないように殺してあげられるよ」

あまり積極的に攻撃してこない三浦に槍を突き付けられる。周りには悪魔達が俺を眺めている。くたばるのを待っている様だ。

「君も見れば分かるだろ?詰みだ」

そこに平塚先生も現れる。口からダラダラと涎を垂らしてる戸部

叫びか咆哮と共に発せられた黒い波動が空気を走り悪魔を霧散させる。帰天の悪魔達ダメージこそ受けど間一髪彼から離れる事が出来た。

「センサー、ナニアレ!？」

「分カラン…禍々シイ魔力…本能が恐怖スル」

「調子二乗ルナアア!!」

激しい歯ぎしりをしながら戸部が比企谷?に飛びかかる。今までの八幡なら止めるので精一杯なのを黒い影は片手でピタリと受け止めた。

「アレ…?」

「……………」

掴んでいない方の手を思い切り振りかぶり戸部の顔面に拳をめり込ませる。戸部は掴まれていた右腕を残して家から家突き破りながら吹き飛んだ。

「……………」

「相手ハ独リ!」

「かかれ!!」

怯んでいた悪魔達が比企谷に襲いかかろうとした時だった。

「ファイアボルトオオ!!」

赤と白の稲妻が悪魔を塵に変えた。

「ナンダシ!!」

「グルウウ…………」

稲妻が出た所には7つの影があった。

「比企谷!!」

「隼人君…ヤッパリセンサーの言ってた通りだった…」

「…ツ…イケ!!アイツヲヲ殺セ!」

三浦の命令により雑魚悪魔達はベル達のいる所へと向かうが。そんな事を許さない影が一つあった。

「……………」

閻魔刀を乱暴に振り回し魔力による斬撃を多数放ち悪魔を切り刻んだ。尽かさず彼の背中からドス黒く大きな手が目にも留まらぬ速

グチャ!

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!!」

何度も何度も何度も拳を突き出した。叫びにすっかりと耳を傾けて。

乱暴にはなく、一回一回、自分に戒めるように。

慈悲を以て、命を刈り取った。

「ヒキガヤアアア!!!」

そこに突如戸部が現れた。

掴まれた右腕は再生する事はなく、殴られた顔の半分はグチャグチャにかき混ぜられ、胴体には女性のような顔が浮かび上がっている。

醜悪な姿に拍車がかかった戸部はそれでも罪なき命を刈り取っている影へと向かう。

B A N !!

B a n g !

シュイン!!

そんな戸部の頭を捉えた3つの凶弾と1本の剣。

「あれは!!」

「幻影剣!?!」

頭に刺さった。見覚えのある魔力の力に比企谷八幡の戦いを知る者たちは驚愕する。そして飛んで来たと思われる方を見つめると遠くから鉄の塊が走ってくる。

ブオオオオオオオン!!!

「今度はナンダ!!」

「あれは…モーターホーム?」

「もーたーほーむ?」

「車ってあっただろ?あれとワンルーム位の部屋がくつついた奴さ」

「ほー、便利なもんだなあ」

「お二人はなーに呑気に喋ってるんですか!」

葉山とヴェルフの会話にリリルカが突っ込む。

モーターホームは影の手前10mで横向きに滑りながら止まった。

すると横に飾られていたネオンが青々しく光る。

「あれは…なんて書いてあるの？」

「ぜんっぜん読めねえ…」

「デビル…：メイ、クライ」

扉が乱暴に開くと3人飛び出してきた。

「おいネロ!!もう少しマトモな運転はできねえのか!?!子鹿でももつと上手いぞー!」

「うっせえよダンテ!無免許なんだから仕方ねーだろ!」

「お前から何か言ってやれよバージル、親だろ!」

「俺から言う事は無い…」

喧嘩しながら出てきた3人組、ネロと呼ばれた青年は青いジャケットコート。ダンテと叫ばれた初老の男性は茶色のコート。バージルと話題を振られた初老の男性は紺色のコート。

「ギヤアアアアアア!!」

そんなギヤグイ空間も相模の叫び声によつて掻き消された。比企谷が首を引きちぎったからだ。

そして3人に一瞥することも無く塔へと向かう。されどさせまいと雑魚悪魔達は群れを成して一帯を囲む。

「おいアンタら!ありやなんだ!」

「な、仲間のハチマンです!黒くなって、様子がおかしくて…」

「そっちじゃねえけど、仕方ねえ、ここは俺達に任せろ!アンタらはお仲間を何とかしろ!」

「はい!!ありがとうございます!」

「素直に言われると調子狂うな…」

ポリポリと頬を掻くネロ。

「俺達…ねえ。言うようになってたなあ」

「んだよ、たまには共闘もいいだろ。報酬は前払いでもらってたからよ、楽できりや得だ」

「ふん、まあいい…おいダンテ、どっちが多く倒せるか勝負だ」

「なんだ?俺にリードされてんのが気に食わないのか?」

「馬鹿言うな!同点だったはずだ。数をちよろまかすな」

「へいへい…じゃ、行くぜ！」

「セコいぞダンテ！」

飛び上がったダンテに釣られてバージルも飛び上がる。

「はあ、仲が良いのか悪いのか…」

こめかみを押えながらネロも戦闘に参加するのであった。

#6 雪の女王

「……………」

「ハチマン…」

ベル、リリルカ、ヴェルフ、命、アイズ、ベート、葉山、そして八幡。両者睨み合いの状態が続いている。後ろではダンテ、バージル、ネロのドンパチが繰り広げられている。

「力づくで止めるしかないな…」

「葉山さん…」

「今の比企谷は自分の魂に意識を乗っ取られている、ある程度のダメージを与えて比企谷を引きずり出すのが最善だろう」

葉山が前に出ると同時にその体に比企谷と似て非なる銀色のギルガメスが纏われる。以前のネオ・アンジェロをベースにシャープな鎧に右手に

巨大なドリルが着いている。

「ネオ・アンジェロ・ライガー…今の姿の名前さ」

「何っ!？」

「プフフフ!!」

声の主はダンテとバージルだ。ダンテは腹を抱えて笑っているのに対してバージルはプルプルと震えている。

「バージルの野郎黒歴史ほじくられてやんの」

「……………」フルフル

「うっさいぞダンテ!マジメに戦ったらどうなんツフフフ」

「ネロ!」

ダンテを咎めようとしたネロもつられて笑う。それもそうだろう。実父の黒歴史が魔改造されて、しかもドヤ顔で登場したのだから。

「……………」

「葉山…さん?」

「行くぞ比企谷アアア!!!」

『『ぎゃ、逆ギレ…』』

「ドリル!!アタアアアアツク!!!」

右手のドリルが勢い良く発射される。そのまま真っ直ぐ比企谷の元へと飛んでいくが：残念だった、ドリルアタックの命中率は平塚先生が身を固められる位有り得ない確率なのだ。古事記にも書かれている。

ぺしっ

「あぶねっ！気を付けろ！」

そんなドリルアタックは比企谷のビンタ一つであらぬ方向に飛んで行った。

「そんなん!?!」

すっかり意気消沈する葉山。影の比企谷も頬を搔いて気まずそうにしている。

「…こうなったら、僕が行きます」

「ベル…」

「さて、ハチマン…2者面談をしよう」

ベルがナイフを構えて歩み寄ると後ろからも着いてくる音がした。

「悪いなベル、7者面談だ」

「ハチマン様を助けたいのは私達も同じです。全力でサポートします」

「すみませんハチマン殿、これは私のわがままです。私はまた貴方と共に戦いたいです」

「ハチマン…何となくだけど分かる。そこから先に行っちゃダメだよ」

「ハッ、今までの鬱憤テーマで晴らせるなんて最高かよ」

1人ちよつとおかしいが頼もしい味方が増えた。葉山は隅っこでまだいじけている。

『『行くよ（ます）（ぜ）』』』

初撃はベルだった。距離を詰めてナイフを振るうが後ろに反る事で避けられる。そこをしゃがんで回し蹴りをする。：がそれすらも予見されていたかのようにバク転で避けられる。

「らあッ！」

比企谷が着地した所にベートのかかと落としが上空から迫るが背

中から生えた魔腕により掴まれる。

「すまん比企谷、耐えてくれ…燃え尽きろ、外法の業々ウィル・オ・ウィ
スプー！」

ヴェルフの魔法により魔腕を中心に爆発が起きた。咄嗟の事でも
ベートは離脱できたが比企谷は爆発に飲まれた。

「やったか…！」

「それダメな台詞です!!」

爆煙を切り裂き比企谷はヴェルフに飛びかかろうとするがその肩
をリリルカが放ったボウガンのボルトが当たった。

「……………」

「ひっ、んんん、こっちです！」

お望みとあらばと言わんばかりにリリルカに飛びかかる。そこに
物陰に隠れていた命が魔法を発動させる。

「ツ…フツノミタマ!!」

一瞬比企谷の膝が地面に着く。封じ込めに成功したかと思われた
が全然そんなことはなくちよつとしたら直ぐに立ち上がった。

「……………」

チャキ……

オンブラ銃口が命の元に向く。

B A N !!

「ッ!!」

しかし命に弾は当たることなくその後ろの隠れていた悪魔に当
たった。脳天を打ち砕いており、悪魔は塵へと変貌した。命の魔法が
切れ、比企谷は塔へと歩いて行こうとした時だった。

「ふっ……………」

「ああッ!!」

そこに後ろからアイズとベルが切りかかる。

ガキン!!!

「……………」

ベルのナイフをリベリオン、アイズのサーベルを閻魔刀で受け止め
る。

「お願いハチマン…戻って…!!」

「一緒に高みへって…約束したでしょ!？」

ギン!!

「ツ!!」

そのまま弾かれ後ろへと少し飛ばされる。姿勢を崩す事無く視線は比企谷へと向いている。比企谷はリベリオンと閻魔刀を構えている。

「…………ツ!!」

ズシャアアツ!!

すると比企谷の胸から2本の刃が生えてくる。否、後ろから突き刺されたのだ。その刀の剣身は彼が今持つている剣と同じだった。

「閻魔刀…なぜ二振りも……」

「ハチマン!!」

刺した犯人は明確。後ろに立っているダンテとバージルが物語っている。

「おい、ソイツは仲間に向けて使うもんじゃないだろ?」

ダンテの手が八幡のリベリオンを持つ手に重なる。

「貴様の力は、こんな事に使うのか?」

バージルの手が八幡の閻魔刀を持つ手に重なる。

「……………」

八幡の手はぐったりと地面に座り込んでしまい戦意は全く感じられなくなった。

「今だ、クラネル君」

「はい……………」

ナイフを収め彼の元へ歩いていく。

「あの頃を思い出す。」

「初めて会った時もこんな感じだったよね?」

「あの時は置いて行って逃げてごめん」

「もう逃げないよ」

「八幡……」

「……………」

「八幡が背負ってる物、半分くらい分けてよ」
「……………」

「大丈夫、僕は英雄になるまで死なないから」
「…」

「冒険をしようよ」

「戻ってこい！ハチマン！」

「ハチマン様！」

「ハチマン殿！」

「……………」

「ビッ　　ギ　　イ　　イ　　イ　　イ　　イ　　イ　　!!!」

すると奥から猛スピードで由比ヶ浜が八幡へと飛んできた。その爪が近くのベルに振り下ろされそうになった。

「感動の再開だぞ由比ヶ浜…空気を読むのはお前の特技だろうに」

その爪を掴んだのは比企谷八幡だった。体は黒に染まっではないが髪が銀色に染まりきっており目が赤みがかっている事しか変化がない。

「ツ!!…ハチマン！」

「泣くなよベル、男前が台無しだぞ」

袖で目を拭い八幡の隣に立つ。寄ってきた悪魔を迎撃していたヴェルフやリリルカや命、ベートとアイズと葉山も近くに来た。由比ヶ浜はどこかに投げた。

「皆、迷惑かけた」

「こんくらい大した事ねーよ！」

「ありがとう、ヴェルフ」

「へへっ」

鼻を嚙るヴェルフの肩を叩く。

「私達が迷惑を掛けてばかりなので寧ろ安心です！」

「心強さに救われるぞ、リリルカ」

「えへへ」

満面の笑みで喜びリリルカの頭を撫でる。

「仲間ですから、お供するのは当たり前です！」

「その誠実さ、好きだぞ。命さん」

「ふええ!?!/!/」

何故か顔を赤くする命に疑問を抱く。

「バカヤロー」

「今度美味いもん山ほど作ってやるよ」

「オムライス200個だ」

ベートの食欲に遠くない自分に激励を飛ばす。

「むう……」

「あの、アイスさん？」

「ずるい……」

「ええ……」

「じゃが丸君……」

「……任せろ」

「それだけじゃない」

「うおっ」

アイスに手を掴まれ自分の頭に置かれる。

「僕は続けても良いんだよ?」

「もう大丈夫だろう……葉山」

「どうした?」

「こ、これ程お前と知り合えて良かったと思える日は無かった。昔の俺が見りや卒倒する位にはな」

「奇遇だね、僕もだ」

互いに笑い拳を合わせる。

そして後ろを向き初老の2人に向き合う。

「返すぞ」

胸に突き刺さった剣を抜き二人に投げ返す。

「……苦勞をかけた」

「!!」

「……お詫びにハグする?」

「ハグって歳じゃねえよ」

「余り調子に乗るな」

銃弾と幻影剣を飛ばされるがフォースエッジを取り出して回転させることで弾いた。やれやれ、と今度は全員で塔に向き直る。

「目標は変わらず雪ノ下雪乃改めつぎはぎ悪魔の殺害、並びに奴を護衛する悪魔の掃討。これによる千葉県魔境化回避だ」

一呼吸置く。比企谷の隣にはみんながいる。あれ程嫌っていたながらも欲しかったみんなが。

「みんな…死ぬなよ」

『『誰に!!』』』

わらわらと寄ってくる雑魚悪魔。その中には生き残っていた平塚と三浦とボロボロの由比ヶ浜がいた。

「行くぞ、ミュージックスタート」

【♪ Devil Never Cry♪】

塔へ全員で走る。ダンテ、バージル、ネロといった3色御三家は雑魚悪魔を狩るらしい。

『ギギギギギ!!』

「燃え尽きろー!外法の業…ウィル・オ・ウィスプ!」

雑魚悪魔が口からビーム?を出そうとした所にヴェルフの魔法で自爆する。取り込まれてた時うつすら覚えてたけどそれ強いよね。

「とにかくハチマンはボス戦まで戦うな!道は俺達が切り開く!」

「ヴェルフ…」

「このセリフ、言ってみたかった…!」

「一応死亡フラグだから気を付けろよ…」

すると上空から迫る影があった。

「ギイイイイイイイイ!!」

「邪魔です!!!」

リリルカがボウガンで頭をぶち抜いて仕留める。怖、今度から怒らせないようにしよつと。

「見えてきました!塔のふもとです!あつ!!」

彼女が指さした先には塔のふもとで待ち構えている平塚先生、三浦、人を食ったのか欠けた体が治ってきている由比ヶ浜がいた。どれ

も人間態なのが気掛かりだ。

「ここが相手の最終防衛ラインなのでしょうか…」

「つまりここを突破すれば大丈夫…」

命とアイズが飛んできた悪魔を当時に切り殺す。やだ、カツコよすぎる…。

「よそ見をするな!」

近くで隠れていた複数の悪魔を青い魔力で構成された悪魔が刀のような物で切り殺す。声からしてバージルだろうと予想はついた。いいなあそれ、後で真似してみよつと。

「サンキュー」

「……ふん」

そう言いながらも尻尾はパタパタさせてんの可愛いやん。そうこうしているうちに平塚先生達と対峙した。

「先生、どいてくれませんか?」

「そう言われてどく奴は今までにいたか?比企谷」

「いませんね…新展開開拓してどいてくれませんか?」

「悪いな比企谷…私はいつまでも王道系が好きなのだよ」

「そうですか…そうでしたね」

「君も厄介なのを内に秘めている様だ。お仲間には迷惑が掛かるんじゃないのか?さつきみたいに」

「そうですね…俺も、さつきまでそう侮ってましたよ。でもまあ、その、今度はちゃんと止めてくれますよ…コイツらは」

「そうかそうか…実はな、君を奉仕部に入れた理由は面倒事を押し付ける手軽な駒が欲しかった三割、生意気な君の更生三割、雪ノ下の良き友になれる器だったからという三割があったからなんだ」

「残り一割、忘れてますよ」

「はっ、君に言うつもりはないよ」

平塚先生の体が、会話を黙って聞いていた三浦が、体が9割治った由比ヶ浜が光出した。光が収束すると悪魔と化した3人がいた。

「ハチマンは上に行くことだけを考えて」

「いいのか?」

「うん、大丈夫だよ」

「ありがとな」

『撃滅ノオ：セカンドツ!!ブリッドオオオ!!』

平塚悪魔が拳を地面に叩きつけると俺のいた所の地面が急に盛り上がり俺の体が宙に投げ出された。そしてそれを利用して塔にしがみつくと事に成功した。そしてそのままよじ登って頂上を目指す。

「我ながらだせえ…」

気分はゴキブリ：壁にひっついてカサカサと動き回る。そしていきなり後ろからスプレーやはえ叩きで叩かれるのだ。

『ギエエエエエ!』

「ん?」

後ろを見ると雑魚悪魔が口からビームを出されそうになる。あれ?これって結構マズイ状況なのでは?

「ハチマン!!あいつを捕まえろ!リリ助!」

「分かりました!!」

「訳分からんが分かった」

今にもビームを撃とうとしている悪魔を捕まえるべく飛び上がって上から悪魔に迫る。

「やああああああっ!!」

するとリルカがブーメランの容量で車のドアを俺と悪魔の間に投げしてきた。その小さな体から想像できないがいつもデカイバックパックを背負っている為一応領ける。

「ウイル・オ・ウイスプ!!」

『ギえっ!!?』

「え」

するとドア越しでデカイ爆発が起き、ドアにへばりつきながら俺は更にも上へと飛ばされた。

「ぎゃあああああ!!」

「ギャーギャーうるせーぞ!クソザコナメクジ!」

すると壁を走ってきたベートの罵倒が聞こえた。

「今回だけだぞ!!」

そう言いベートは足を曲げながら空に向けた。

「っ…サンキュー！」

加速が無くなってきたドアから飛び移りベートの足裏に俺の足裏をくつつける。

「蹴り…付けてこい」

「当たり前だ」

「うおらああああ!!」

ベートの圧倒的な脚力に押され更に上へと登って行く。

ここにいる仲間のお陰でやつと頂上に着いた。目の前の巨大な紫の繭は鼓動を刻んでいる。

ドクン…ドクン…

やがて紫の繭は色が抜け真っ白になり亀裂が走る。

「やつと着いた…待ったか？雪ノ下」

「そうね…かなり待ったわあ…」

繭が破れ中から全長14、15mはある化物が出てきた。髑髏がグロテスクな死体をドレスのように着込んでおり、スカート代わりに腸が下半身を隠してる。腕には肉の足しに使われた帰天に失敗した悪魔のぐちやぐちやの顔が所々にくつついている。

「いい趣味してるな…」

「あら、逃げ谷君にも気の利いた言葉が使えたのね。驚いたわ」

声のした方は髑髏の口からではなくあばら骨の中からだ。

「お前は…何がしたいんだ…」

「人の世を正すのよ。穢れに穢れた人の心を私が正しい方向へと導くの」

髑髏の周りの気温が下がるのを感じる。コートを着ててこれ程良かったと感じることは無い。

「さしずめ雪の女王って所か…」

「そうかもしれないわね…でも残念ながらカイもゲルダも悪魔の鏡も無いのよ」

「そうかよ、それでも俺のやる事は変わらないぞ」

「だったら来なさい比企谷君…貴方の言葉…忘れてないわよ」

「ツ…雪ノ下アアアア!!」

リベリオンを手に持ち雪ノ下の元に向かう。

グロイ髑髏は氷柱を両手に持ち応戦する。

比企谷 八幡

雪ノ下 雪乃

さあ、終わらせよう

V
S

#7 別れの賛美歌はない

雪ノ下を包む髑髏から発する冷気で霧が町中に発生する。神の恩恵を受けていても少し不便に感じる。そんな状況でも俺と雪ノ下は戦闘を繰り広げていた。

「らあッ!!」

バリイン!

髑髏の持ってた氷柱を破壊しその胸に剣を突き立てようとするも来る事が分かっていたのか上空から迫る氷柱に阻まれる。

「これならどうかしら?」

髑髏の口が開く。見るからに冷凍ビームを撃とうとしているのが分かる。回避に努めようとするが雪ノ下が何の策も無しにそんな事をする筈が無いと考え、思わず射線の延長線を見る。そこにはよく見慣れた建物があった。総武高校だ。

「選びなさい…あなた一人か避難民を」

「ホントに…悪魔みたいな奴だ…」

「フッフッフ、褒め言葉として受け取るわ…」

髑髏の口から水色の光線が出る。躲すのは容易いがあそこには雪ノ下さんも材木座も川崎も…親父も母ちゃんも小町もいるのだ。

「おおおおおおお!!」

ギルガメスを全力で壁のように展開し光線を受け止める。激しい威力に押されるが何とか耐えられる。

ザシユツ

「ッ…!?!?」

見なくても分かる。雪ノ下が俺の後ろに展開した氷柱を足に刺したのだ。ホントに…悪魔みたいな女だ。

「ウッフッフッフッフッフッフ…貴方がこうするのは予想済みよ。本当に変わらないわね…貴方は、自分よりも他人を優先する。だから拒絶される…だから私は貴方に…」

「喋るか撃つか…どっちかにしろよ…クソいてえ…」

「じゃあ撃つわ」

ザシユザシユツ!!

「グアッ!…普通攻撃止めてお話しする展開だろ…」

今度は右脇腹に穴が空く。力が抜けて光線に押され膝を着く。

「いい加減諦めなさい!1に諦め2に諦め3に諦める貴方が何故こうも踏ん張るの!?!」

「雪ノ下……俺はアイツらと出会って『諦めない』ってのを学んじまっただよ……グウツ!……愛も力も誇りも手に入れなきゃいけない……『共に高みへと』って約束も果たさなきゃいけない……!」

光線に押され、塔の縁にまで追いやられる。

「ツ!!」

ハリネズミにしようとしているのか後ろに大量の氷柱が出現する。

「前言撤回するわ、変わったのね。私達以外の人の手で」

きつとプリキュアなら今の所で謎のパワーアップか助っ人が来るだろうが現実はそう甘くない。でもどうせなら一矢報いてやるか。

「~~~~オラアツ!!」

冷えきっているギルガメスの壁を思いつきり思いつきり振り、髑髏に向けて光線を弾く。

「ツ!!無駄な足掻きよ!」

光線を弾いた反動で俺の体は吹き飛ばされる。重力に逆らわず地面に向かって落ちていくが魔腕を壁に引っ掛けて落下を止める。

「これ、登るのめんど……」

「こりやまたひでえな……」

すぐ後ろに翼を生やした悪魔がいた。人型で山羊のような角を生やした悪魔、2、3回見たことがあるし手合わせのした事のある奴だ。

「アラストルか…来てたのか」

「おう、にしてもスゲエ怪我だな。レンコンみてえだww」

ケラケラと笑うアラストル。この体たらく、笑われても仕方ないだろう。

「うるせえ……」

手を伸ばし上に登って行く。

「……………」

登る光景をアラストルはずっと見つめてくる。

「なんだよ」

「また行っただって殺られるだけだぞ」

「かもな」

「それでも上んのかよ」

「まあな……………」

「……………あーもうツ!!仕方ねーなあ!?今回だけだぞ!!」

そう言うど何をとち狂ったのか自身の右手首を魔剣アラストルでバツサリリストカットした。やつの血がドクドクと溢れ出てる。

「おま…何やって…ガツ!!」

強引に口を開けられ血を喉に流し込まれる。鉄臭い味が口の中に広がる。

「ゲホツゲホツ!!何しやがる」

「見ろよ」

顎でクイツと俺の傷を見るように促さる。傷を確認するとみるみるうちに穴が塞がっていく。

「なんだ…アンタの血はポーションかなんかなのか?」

「答え合わせは終わってからだ。行け」

怪我が治ったのにどこか落胆している雰囲気のアラストルは飛び去って行った。まあ、助けてくれたのならありがたい。

「そんじゃ、行くかつ!…うおっ!」

思い切り上に向かって飛ぶと体は思っていたよりも遥かに上に上昇して行った。これもアラストルの血の力か?

「貴方も懲りないのね…比企谷君」

「ごめんな雪ノ下、今回ばかりも『諦めない』を通させてもらう」

「そう…なら貴方も楽園の土となりなさい!」

場面は平塚静とベルとの戦闘に切り替わり2人は打っては捌き打たれては捌くといった一進一退の攻防戦を繰り返していた。

「フツ!!」

「ぜああつ！」

平塚の拳に対しベルのナイフの刺突。ヘステイアナイフは平塚の拳を突き破った。

「どうした！その程度か!？」

「ツ!!ファイア・ボルトオオオ!!」

アカイホノオは平塚の肩を貫きその右腕を焼き切った。

「フハハハハ!……これでは戦えんな……」

「どういうつもりですか？」

「いやはや、聞きたいのだ……比企谷のことを」

「ハチマンの事？」

「そうだ、アイツは君たちから見てどうだ？」

「ハチマンは僕の最初の仲間家族です。面倒くさがりやだけどなんやかんや面倒を見てくれて……料理も掃除もとても上手で……僕の兄のような人です。レベルアップした時も一緒に喜んで、どこか思い詰める様な顔をしてしまいますけど、僕は最期までハチマンと一緒にいきたいです！」

「そうかそうか……それは、よかった」

悪魔の平塚はどこか嬉しそうな声を出すと後ろ向きによろめいた。

「ハチマンの事を思ってるならこんな事もうやめてください……悲劇が増えるだけです！」

「はっ!彼の事なんて思ってやいないさ、嘗ての小間使いがどうしているか気になっただけさ……ただ私は今度こそ生徒達に寄り添おうとしただけさ……」

「？」

「持ちすぎるが故に人から拒絶された雪ノ下雪乃……彼女の暴走に一枚かんだだけさ……それでも人が死ぬよう暗躍した罪は消えんがな」

塵になっていく平塚……。彼女の命はそう長くない事は傍から見てもよく分かった。

「ただ一つ……心残りがあるなら……私は生まれる世界を間違えたのかもな……教員ではなく冒険者になれたらなあ」

「……………」

「氣病むな少年…比企谷を頼む。アイツは人の心をよく知っている。故にそれを守ろうと自分を平気に犠牲にする」

そう言い残して平塚静は息絶えた。

ベルとそれ程離れていない場所でアイズとベートは由比ヶ浜と戦っていた。

「アイズ!!」

「うん…この悪魔、攻撃を受ける度に強くなってる」

「邪魔アア!!シナイデエエエエエ!!」

ボコボコに膨れ上がった肉体の由比ヶ浜はその剛腕を乱暴に振り回す。

しかし相手はレベル6の猛者。駆け引きのかの字もない攻撃なんぞ当たりやしない。躲しながらアイズに切り傷を入れられベートに肩を碎かれる。それでも由比ヶ浜の肉体はブクブクと膨れ上がり体がまた一回り大きくなる。

「無駄…ナノ、ワカッテルルルウ??」

「こいつ…段々バカになってねえか?」

「!!ベートさん、何度も攻撃を当て続ければ…」

「面白そうじゃねえか…!」

幾度もなく細胞分裂を繰り返して体を肥大化させ由比ヶ浜自信が制御出来なくなるまで強化させ自滅へと導くのがアイズの考えだった。

「ふっ!!」

「おらアアアア!!」

そこからはされるがままだった。アイズの剣撃、ベートの打撃が無数に叩き込まれる。えぐられた部位と切り裂かれた部位は肥大化しより体は鈍重になり、最初に相対した時の面影すら最早残っていない。

「ア…ア………………」

意識が朦朧とし始めたのか由比ヶ浜結衣は動くことすらまもなくなくなった。

「はっ！こんなもんかよ…にしても汚えなあ」
「……………」

足裏に着いた由比ヶ浜の肉を忌まわしそうにするベート。剣先に着いた血肉を少し気にしているのかアイズも怪訝な顔を僅かにしている。

「オイてめえ、んな目にあっても俺達の邪魔をする訳はなんだよ」

「……………ヒツキーを…知りたかつ、だから」

「ヒツキー？あいつの事か…」

「あの時…何で ヒツキーが姫菜に 嘘のこ はくをしたか知って…ひどいこと言っちゃって……………いつか 謝ろうと思っても…ヒツキーは死んじゃって……………」

肉塊は段々と萎んでいき人間の女の子の形を象っていく。

「こんな私じゃ…謝れないかな……………」

少女の視線はアイズへと向かう。

「貴女は…そうならないようにね…ヒツキーは、目を離すとすぐ独りになっちゃうから……………」

そう言い残すと由比ヶ浜結衣は塵へと帰っていった。

「行くぞ…アイズ、邪魔は消えた…」

「うん……………」

ベル達やアイズ達とそれ程離れていない場所でヴェルフとリルカと命と葉山は三浦優美子と戦っていた。

ヴェルフ達は三浦が操る悪魔達を相手にし、葉山はそんな三浦と戦っている。

「隼人…今ならウチからユキノシタさんに言って仲間に入れられるツ！また、また、やり直せる！」

「それで…どうするんだい？昔に戻って僕はまた皆の『葉山隼人』になって皆の人形にならないといけないのかい？」

「ツ！……………ゴメン…色々押し付けた事は謝るよ…あーし、周りが見えてなかった…」

「それはヒキガヤに言って欲しかったよ優美子…僕達は彼に押し付け

すぎたんだ。彼の顔に幾度もなく泥を塗ってしまった」

「分かってる…分かってる…」

「ならどうしてこんな事を！」

「……………」

「優美子!!」

「罪滅ぼしのつもりだった…最初、ヒキオが死んだなんて何も思わなかった。ほんのちよつとした笑い話としか受け止めてなかった。でも…姫菜から話を聞いて…あーしら、取り返しのつかない事をしたんだなって…それで雪ノ下さんの計画に乗って…でも何故かヒキオが生き返って…姫菜も大岡も大和も殺されて…………」

「罪の意識が消えてきたのか…………」

「ヒキオのアノ目！人殺しの目だった…あーしらの事をそこら辺のゴミとしか思っけてない目だった！」

感情的になった三浦の攻撃が雑になってきた。

「それがヒキガヤの見られてた目なんじゃないのか？」

「!!」

「自分がどう思われようとアイツはいつも人の為に戦う。例え相手が旧知の仲でも」

「ツ!!クソオオオツ!!」

三浦の大振りの攻撃を避けた葉山は手のドリルを三浦に向ける。

「ドリル…アタック…」

放たれたドリルは三浦の胸を貫き地面にくい込んだ。

「がはッ…………」

「ゴメン…優美子…」

「隼人…アタシ…」

地面に落ちた三浦はその手を葉山へと向ける。葉山はそれを掴みとる。

「ヒキオに謝つといて…」

「ああ…」

三浦の体は塵と化して地面に崩れていった。

「葉山さん…お辛いですよね…」

リルルカが心配そうに葉山に声を掛ける。

「いや……………そうだね…偽物でも…本当の思いがあったんだ…」

「……………」

「さ、まだ悪魔は残ってる。ヒキガヤの所に行かないよう片付けるよ」

一本…また一本と雪ノ下の伸ばしてくる腸をリベリオンで切り裂く。血が中に入っていたらしく辺り一面は血の海だ。

「ちよこまかとツ…………」

さつきみたいに口から冷凍ビームを出そうと口にエネルギーを貯めている所に魔腕を出して顎を押しさえつける。

「これでビームは撃てないな…ぐおっ！」

髑髏が思い切り体を揺さぶった拍子に血飛沫が飛び散り目に血が入る。目眩しを食らったところで髑髏の巨大でグロテスクな肉のこびり付いた手で掴まれる。

「これで攻撃出来ないわね…さあ、その手を離さない…さもないと雑巾みたいに絞るわよ」

ググググ…バギイツ！

「グブツッ！」

口から血が溢れる。肋骨が肺に刺さったのだろう。更にいえば左腕の感覚が無いのは神経が潰されたのだろうか。

「大人しくすれば苦しまないように殺してあげるわ」

「どっちにしろころすんじゃないかねえかよ…」

ギギギギ…………

魔腕を離さずに髑髏の顔を掴む力を強める。

ミシミシミシ…!!パンツ!!

それでも俺を掴む髑髏の力は強まりどこかの内蔵の弾ける音がした。口からさつきと比べ物にならない程の血液が流れ出る。

(あ、このままだと死ぬな…)

ーうちの部員をいたぶってくれたようだけれど、覚悟はできているかしら？ 念のために言っておくけれど、私こう見えて結構根を持つタイプよ？

「ええ。つい最近気づいたのだけれど、私はこの二か月間をそれなりに気に入っているのよ」

「ようこそ、奉仕部へ。歓迎するわ」

「ああ…思いました」

「今更何を思い出すって言うの？ 恥ずかしい走馬灯かしら？」

『平塚先生曰く、優れた人間は哀れな者を救う義務がある』だったっけか？」

「どういう…意味かしら？」

「こういう…意味だッ！」

モゾモゾして右腕を取り出し、素早くホルスターの中の拳銃を手にする。オンブラを髑髏の胸、雪ノ下がいると推測される所に何発も撃ち込む。

「リスクリターンの計算は貴方の得意分野の筈だったのに残念ね…死になさい」

今度こそミンチになると覚悟していたがいくら待っても痛みを感じることが無い。

「な…なんだ？」

「ッ…ッ！このっ…動きなさい！」

「…して」

『い…い』

『苦し…』

『…は…ち…ん』

肋骨の心臓部から聞こえる雪ノ下の焦った声とは別に声が無数に聞こえる。声の元は今俺を掴んでいる髑髏の口からだ。

「これは…相模と似たような感じか…？」

しかし今回は制御が上手くできていないように感じる。相模は人質として人間を体に取り込んでいた。…まあ、俺がこの手で皆殺しにしたが。

『八幡…僕だよ』

呻き声ばかりが聞こえるのにハッキリとこの耳が俺を呼ぶ声を捉えた。

「誰だ…？いや、まて、聞き覚えがある…この声…まさかッ…とっ…か？」

満足そうに頷いた髑髏は俺を地面に下ろして俺に近付きじつくりと俺を見つめる。その一挙一動に戸塚の面影を感じる。ああ、認めたくなかったがまさか本当に…

『ゴメン八幡…僕達もこの体をそう長くは乗っ取れないんだ…』
「この死に損ないッ…！」

雪ノ下と戸塚達が激しく体の取り合いをしている。髑髏の挙動が不安定になつているのがいい証拠だ。

『八幡ッ!!今の内に…皆の願いを…残された人たちの明日を…』

『頼む！小僧！』

『殺してくれよ…』

『もう嫌だ…』

『俺達がこれ以上増えないようにッ！』

『家族を…巻き込みたくない…』

『君しかない…』

『解放してくれ…！』

「……………分かった」

閻魔刀をベルトに挿し、リベリオンを背中に背負い、右手を閻魔刀の柄に近付けて居合のように構えて目標を見定める。魔力を練り上げ閻魔刀とリベリオンに集中させる。閻魔刀は蒼く、リベリオンは紅く光る。全体的に高まった俺の魔力は背後に魔人を作り出しそいつも構えを取っている。

『『ありがとう…』』

「……………」

涙混じりな声が聞こえる。全員、本当は生きたかったのだ。明日を見たかったのだ。人として当たり前前感情、それを雪ノ下が摘んでしまった。到底許されるべきではない。

『私を…止めて…』

崩れる瓦礫の中で雪ノ下は確かにそう言った。もし、俺の仮説が正しいのならばこれこそ彼女の希望なのだろう。

次元斬…絶

刹那、閻魔刀の居合により髑髏の体に無数の切れ目が走ると同時にその体の延長線上の何も無い空間にも切れ目が走る。

同時にリベリオンのステインガーを髑髏の心臓部に穿つ。紅い光は的確に心臓部を捉え背中までその刃は貫通した。その勢いで髑髏は天を仰ぐように倒れる。

「……………」

リベリオンを抜きそのまま髑髏の直上に飛び上がりフォースエッジを取り出す。紫の魔力帯び、赤黒い稲妻が走るその刃の先を真下の倒れた髑髏に向けて降下する。

「天獄……雪ノ下、お前の死が来たぞ」

フォースエッジが髑髏を介して地面に刺さった瞬間に赤と黒の入り交じったドス黒い魔力が塔を砕きながら迸る。亀裂は塔のあちこちに広がりとうとう衝撃に耐えられなくなりその巨塔は崩れた。

ゴゴゴゴゴゴ……

「塔が…崩れてく…」

集まったオラリオ勢は崩れる塔を眺めていた。未だに戻らない仲間を待ちながら。

プププー！

「お前ら！危ねえから乗れ！」

トレーラーを運転するネロのデビルブリンガーと扉からやれやれ、と面倒くさそうに出て来たダンテとバージルによって一行はトレーラーに乗せられた。

「ま、待つてください！まだハチマンが！」

「…貴様らの仲間はこの程度の瓦礫で死ぬのか？」

「待つことだって信頼の一つじゃないのか？」

シートに深く腰を掛けて寡黙な雰囲気醸し出しているバージルと呑気にピザを食べているダンテに諭される。

「取り敢えず総武高校の体育館まで行くぞ。避難民達の世話をキリエとニコがやってる」

「あの鬼ババ達は何してんだ？」

「万が一の為に体育館の護衛をしている」

「ダンテさん…一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ坊主、野郎のナンパはNGだぞ」

「どうして八幡にあそこまで？黙って見過ごしていればあのまま敵を殲滅していたのに…」

ダンテがいくらおちやうと葉山の目は真剣だった。

「あの力はな…上手く説明できないが…あんな風に使っちゃいけないんだ。衝動に任せて振るう暴力程みつともねーのはない」

「悪戯に命を奪っても残るのは罪悪感とやるせない気持ちだ。ならば正気で、本気で挑んだ方が良いに決まってる」

「なるほど…」

ダンテとバージルにも過去に何かあったのだろうと察して深追いしない葉山だった。

「私からもお一ついいですか？」

「おつ、なんだ？嬢ちゃんからの逆ナンなら大歓迎だぜ」

「後で二人に言っつてやる」

「マジで勘弁してくれネロ」

「コホン！改めまして…どうしてバージル様は閻魔刀を持っているのですか？」

「それはこっちのセリフだ」

「はい？」

「リベリオンと閻魔刀は2本目なんてある筈がない。あつてはいけな
いのだ」

薄く目を開けいつも以上に真剣に語るバージル。

「それって…どういう」

「リベリオンと閻魔刀はな…親父の形見なんだよ」

「!!!」

「ちよ、ちよつと待ってください！リベリオンと閻魔刀は…あの、ハ
チマンが作ったんです」

「なに？」

うまく だせ、なくて」

「ああ…」

比企谷が雪ノ下の元に近付く。

「なんだ……」

「……………これが、答えよ……」

突如彼女の腕が比企谷の襟を掴み、その顔を自分の元へ引き寄せる。そして彼女の唇が彼の唇に触れる、ことはなかった。彼の唇のすぐ横だった。

「ね……さんに、して もらってた でしょ……」

「見えてたのか……」

「つみなおとこ……地獄に……落ちなさい……」

「直ぐは行かねーよ……由比ヶ浜と待ってる。最高の土産話を聞かせてやる」

彼の中で既に修学旅行の件はどうでもよかった。その件は今回の勝負で既にケリがついていたからだ。

「ちりになって……死にたく、ないわ……」

「勝ったのは俺ただけどな……わあつた」

「勝った方が負けた方に何でも命令できる、というのはどうだ？」

「そんな事もあった……怖いな、全てが過去になっていくのが」

「かこ……では、ないわ……おもいで……よ」

そうか、と呟き比企谷はルーチエを取り出し一発……雪ノ下雪乃に銀色の弾丸を撃ち込んだ。満足そうに微笑みながら死亡した彼女の体はポロポロと帰天悪魔達と同じように崩れていった。一つだけ違う点は手の平に収まるほどのとんでもない冷気を発する欠片を残した事だ。

「……………」

それを拾い上げ、ハンカチに包みポケットに入れる。そしてフラフラと歩き出し瓦礫から少し離れた所に無造作に置いてあった紅いバイクに跨り学校へと運転していく。

「……………あ……」

暫く運転していたが体力と身体がが限界に達したのか転倒し、バイ

クから転げ落ちた。朦朧とする意識の中で彼の目にはほんの少量の涙が浮かんだ。

「あら…こんな所に大きい落とし物ね」

「トリツシユ…これが話に聞いた…」

「何呑気にしてんだよ！こいつ左腕潰れてんぞ！早く運ぶぞ！」

「分かったわ…あら？泣いてるのかしら？」

「泣いてない…これは雨だ…」

「雨なんて降ってないわ…」

金髪の女性に担がれてハチマンは総武高校の保健室まで運ばれた。

「……………んあつ？」

重かった目が開くと昨日運び込まれたばかりの保健室の天井が視界一杯に広がった。何故か上裸なのを置いておいて左腕の違和感を確かめると包帯でぐるぐる巻きにされていた。

「いてて…」

重い体を起こして椅子に掛けてあつたコートを上から羽織る。そのままフラフラと目的もなく歩く。今は午後の暗くなってきた頃なのだろうからか、その際に誰一人ともすれ違わないのに違和感を覚えながら歩を進める。

外に近付くにつれてガヤガヤと人の気配が多くなっていく。あまり目立たないように慎重に昇降口から外に出ると違和感の正体が分かった。

「夕飯の配給か…………」

テントの中には見慣れたメンツと配給係だと分かるようビブスを着た生徒が飯をよそっては渡しを繰り返していた。唯一知らない事といえば見知らぬ茶髪の美女がいる事だ。何だあの天使スマイルは!?

「何ともなさそうだ…」

今の所悪魔の脅威に晒されてないようだ。終わったのか…。

ギョルルルル……

「そういえば何も食ってねーな…」

「ほらよ」

どうにかして配給を受け取ろうと考えていたら突然隣から弁当が差し出された。

「どうも……」

「髪色…黒くなってるぞ」

「白黒つかない髪なんすよ…」

確かネロさん…だったっけ？いつの間にか隣にいた彼から弁当を受け取り食べようとするが左腕が使えない為魔腕を出して左腕代わりに使い食べる。うん…美味しいな…ちよつと冷めてるが絶品だ。

「美味しい……」

「だろ？キリエの手作りなんだ」

「キリエ？」

「ほら、あそこの茶髪の…」

「ああ、あの美女か…」

「一目惚れしたのか？」

ちよつとネロさん、殺意出てますよ？

「まさか、そういうのは信じない主義なんで」

「アンタも面倒くさいんだな…」

「なんとでも言ってください…」

箸を進めあつという間に完食する。

「ごっそさんでした…ハックシヨイ!!うう…チツ」

「そんな格好してるからだ…ちよつと来てくれ」

ネロに誘導されるがままについて行くと。彼等が乗ってきたトレーラーに案内された。

「ニコ、いるかー？」

「なんだよ、今煙草吸ってんだろ…」

急いでポケット灰皿に煙草をしまおうニコと呼ばれた褐色肌とへそ出しが特徴的な女性がいた。

「俺が昔着てたコートどこやった？」

「知らねーよ…奥の棚じゃねーの？」

「適当な女だな……」

ガチャガチャと辺りを調べたネロさんは赤いパーカーと黒いコート一式を取り出した。

「ボロボロの格好じゃ締まらねーからな、俺のお古だけど着てみるよ」
ニコさんの目を気にしつつ「お前の裸体なんて興味ねーよ」……それはそれで男の尊厳に関わる気もするが気にされないなら良いだろう。……ぐすん。

着替えをする際にホルスターを外して二丁拳銃を机に置くと運転席にいたニコさんが勢いよく飛んできた。

「おい！ちよつと見せろ！」

「え!？」

まさか俺の裸体に……と思いきや置いた銃に目が釘付けになっていた。銃に負けた……のか、俺は。

「見た目はトリッシュのと同じだ……お前……これをどこで？」

「知り合いの悪魔からプレゼントされたんすよ」

「知り合いの悪魔って……大丈夫なのか？」

「まあ、まだ実害はないですから……」

少し体弄られたけど。

「おいお前……ハチマンとか言ったな……これ借りてもいいか？」

「え……何すんすか」

「ちよーつとじっけ……改良してやるよ。今までよりホットでクールな45口径にしてやるよー」

「まあ、火力とか上がるなら別にいいですけど……」

着替えの邪魔だからどいてくれませんかね？

「よっしやー！ラボに引っ込んでるから邪魔すんじゃねーぞ！」

嵐のように銃をかつさらいニコさんは奥に引っ込んで行った。

「嵐みたいな人ですね……」

「まあな、腕は確かなんだけどな」

そういう話している内に着替えは終わった。

「おお、似合ってるじゃねーか」

包帯巻の左腕を首から吊るしているため痛ましさが取れない気がする。ま、似合ってるって言われてるのだからいいのだろう。

「やるよ、それ」

「え…いいんすか？」

「ああ、着られなくなつて燻つてるよりまた着られるならソイツも喜ぶだろう？」

「じゃあお言葉に甘えて…頂きます」

「俺はキリエん所に行くからそこに飲みもんとか食いもんがあるから適当に飲んでてくれ」

ネロさんはトレーラーから出て行つてしまった。

バンバンバンバン!!

するとニコさんの引つ込んだ奥から銃声が聞こえた。今までより重く強い音がした。どうやら本当に強化されてるのだろう。

「あー！ー!!ムツずかしいなあー！」

突然痙攣を起こしながらニコさんは出てきて冷蔵庫に入っている飲み物を強引に取つて俺の隣に座り栓を開けた。

「詰まつたんすか？」

「構想は出来てただけだな。銃口が熱くなつちまつてな…連射が効かなくなんだよ… アタッチメントとの干渉もあるしな…」

「あ……だつたらこれ、使えませんか？」

ボロボロのコートに入っていたハンカチに包まれた雪ノ下が遺した欠片を渡す。

「冷たっ！おおお…これならイけるかもな！サンキューー！」

勢いを取り戻したニコさんは再び奥に引つ込んで行つた。

「これは…」

また暇になつた俺は辺りを見渡していると気になる本を見つけた。グラフィアとか雑誌ばかりなのに1冊だけある一風かわつた本。表紙に大きくVとあるその本をパラパラと捲ってみる。

「悪意から語られる真実は、どんなでつちあげの嘘も顔負けだ。…ウイリアム・ブレイクか懐かしいな」

中学二年の頃にめちやくちや格言とか調べまくつたっけ…それを小町に披露して引かれたのは記憶に残っている。

「お前は本を読むのか？」

するとガチャ…と蒼いコートの男、バージルさんが入って来た。

「まあ、暇な時とかに…」

「そうか…アイツらは文学に詳しくないから新鮮だ」

「そつすか…まあ、失礼ですけどそんな感じしましたもん」

ネロさんは明るい陽キヤみたいな感じで本とかはあんま読まなそうだし、ダンテさんに関しては何を嫌悪してそう。

「おーおー、言ってくれるなー」

するとダンテさんが入って来た。ダンテさんは俺の対面に座るバージルさんの隣にどかりと座る。あ、バージルさんちよつとスペース空けた。いや、距離置いてるだけか。

「調子はどうだ？担ぎ込まれた時は失血による貧血で死にかけてたんだぞ？お仲間さん達の血液型なんて分からねーから俺達が血分けてやったんだからな？そこら辺感謝しろよ？」

「…ありがとうございます」

「なんか素直に感謝されるとむず痒いな」

冷蔵庫から冷えたジャンボリーパフェを2つ取り出したダンテさん。見た感じストロベリーサンデーだろうか。

「食うか？」

「もちろん」

「バージルも食うか？」

「…今回だけだ」

「素直じゃないねえ…」

ダンテさんからパフェを受け取ったバージルさんも加え今までにあった体験とかを談笑しながらパフェを平らげた。ベル達が来て安静にしてると怒られるのはその後の話だ。

この2人と話していると親友がいるはずも無い自分の子供と話している気分になっていたのは秘密だ。

#8 贈り物【終章】

「暇だ……………」

ベッドに寝かされてる男が一言ぽつりと零す。

「それが骨折と内臓破裂してる人間のセリフ？」

白髪の少年は若干からかうように言葉を返す。

「別に痛くても動けりや平気だろ」

「ハチマン様は感覚が麻痺りすぎです！もつとご自分の体を大切にしてください！」

小柄な少女は寝かされてる少年を叱責する。

「分かったから…大声を出さないでくれ…怪我に響く」

「そういう時だけ怪我を引き合いに出すのか…」

赤髪の少年は呆れ気味に頭を抑える。

「なんというかハチマン殿らしいです！」

黒髪の少女は何故か目をキラキラとさせている。

「命さん…褒めてるかバカにするかどっちかにしてよ」

「そういえばハチマン…その服は…」

「ああ、ネロさんから譲ってもらったんだ。あまり似合ってるとは思えんが…まあ、着れるから問題ないだろう」

「ううん…似合ってるよ」

「さ、そうか…あんがと？」

金髪の美少女は満足気に頷いている。

「おい、腹減った」

「お前さっきまで食ってたの見てたからな？何お前、はらぺこあおむしなの？」

「うっせ、さっさと怪我直せ」

ベッドをガシガシと蹴る銀髪の狼人。

「そういえばハチマン、僕達はいつオラリオに帰れるんだい？」

「あ？そっぴや終わったらどうすんだらうな…」

金髪の少年に素朴な疑問を投げられるが質問されたハチマンでさえどうやって帰るかは目処がついてないのだ。

「その点に関しては問題ナッシング!!」

「お前は!」

「アラル神父…!」

「おいおい、そんなに睨むなよ……帰りは明日の12時ピッタリに最初の墓場にポータルが開くようマキヤヴェリが設定している。お前達がいけない間のオラリオだが…心配するな、辻褄が合うようになってる」

「な、成程…」

「じゃあそういう事だ、ここにいと殺されかねないからな。Cia
o☆」

突然乱入してきたかと思えば去っていくアラストル。しかし彼がそうするのも納得がつく。なぜならここには超腕利きのデビルハンター5人もいるのだから。

「て訳だから明日には帰れんぞ…お前らもゆっくり休めよ」

「分かった。それじゃハチマンもゆっくり寝るんだよ?おやすみなさい」

挨拶をして保健室から出ていく一同…ただ1人を除いて。

「アイズ…さん?」

「ハチマンはどうして強いのか?」

「俺は強くないですよ……ホント、今回の件でこれでもかって位思い知ったんですから……」

「……………」

「雪ノ下の計画だったんですよ。ただのネットユーザーの材木座が電子網を抜けられたのと、避難民達を今の今まで襲わなかったのも……悪意なんて欠片もない戸塚が計画に離反して止めに入るの事によって避難民達を絶望させ、己の今までの他人の命に無頓着なのを改めさせる。悪の化身として千葉を恐怖に陥れて予め材木座に呼ばせたダントさん達に自分を殺させるつもりだった」

「でも私達が来た……」

「そう、予想外の来客が来た…しかも死んだはずの知り合いが…悪魔を蹴散らせるだけの力を持って……」

「それでハチマンをダンテさん達の代わりにした…」

「その結果避難民達はどうか？」

「皆安心して笑ってるよ…それでもハチマンが守ったんだよ？」

「そうか…正しさってなんだろうな…」

「私にも分からない…でも、ハチマンが正しい事をしたのは分かるよ」
よいしょ、と彼の頭元に腰掛け、強引に彼の頭を持ち上げて自分の膝に乗っける。

「ちよー！何してんだよ」

「いい子いい子……」

彼の不安定な髪色をしてる頭を撫でるが彼は困惑したままだった。

「何だこのプレイ……」

「リヴェリアがよくしてくれる…これをされると落ち着くからハチマンにもって…嫌だった？」

「いや、寧ろ最高だが…そうか、リヴェリアさんがそんな事してんのか…」

「うん、ハチマンもしてもらおうといいよ」

「い、いや、遠慮させてもらう…病みつきになっちゃう気がして怖い」
トントン…

恐る恐る繰り返されるノックを聞いた途端にハチマンはクイックシルバーを使い時を止めてアイズを側の椅子に座らせて膝枕されていた状況を止まった時の中で終わらせた。

「どうぞ……」

「あれ？」

「失礼します……」

おずおずと保健室に入って来たのはかつて袂を分かった血の繋がった妹といつかからか家族から家族もどきと成り果てた肉親だった。その表情はどこか暗い。

「誰……？」

「両親と妹だ…アイズ、お前はベル達の所に行ってくれ」

「……分かった」

無言で保健室を去るアイズ。彼女が保健室を去るまで両者の間に

は沈黙が流れていた。

「で、何の用なんだ、お見舞いを頼んだ覚えはないんだが？」

「!…:本当にお兄ちゃんなんだね」

「だったらなんだよ…」

今までにされた事のなかつた高圧的なハチマンの態度にたじろぐ小町。一歩下がる小町の前に母は出てきた。

「私達…:アンタと話したくて」

「要件はなんだよ…」

「私達、もう一度やり直さない？」

「…:…:は？」

「ほら、アンタも帰ってきたから…:もう一度家族として…:ね？」

「今回の一件で俺達は考えを改めたんだ…:だからな、戻って来い」

「…:舐めてんのかよ」

「え？」

「家族に戻る…:？冗談も大概にしてくれ…:俺はもうアソコに戻る気は無い…:俺は今の生活に幸せを考えてるんだ。命懸けで夢を追う楽しさを知っちまったんだ。居場所を守るための妹のお守りに逆戻りなんてゴメンだ」

「そんな…:お兄ちゃん戻って来てよ…:小町寂しいよ」

涙を一筋流す小町。それが引き金になったのか寝たままだった八幡はその顔を怒りに歪めながら起き上がった。

「俺は…:ずっと寂しかったツ…:！何をしても認められない終わらない劣等感を！自分の存在意義が愛想のいいだけの妹のお守りだという屈辱を！どれだけ訴えても信じて貰えない悲壮感が！」

はア…:はア…:はア…:と息を着く暇もなく捲し立てた結果、肩で息をしている八幡。そんな彼の今までの気持ちを明かされた肉親と妹は呆気なく立ちすくんでいた。

「それにさ…:アンタら…:俺が怖いのか？」

彼が指を指す。その先には小さくカタカタと足が震えている3人の足があった。

「ち、違っ…:！」

「いや、いいんだ…そうだよな、普通じゃ勝てないような悪魔を虫けらみたいに蹴散らせんだからな。血の繋がった息子といえどビビるのもそうなんだろうな…アンタらの家族つてのはさ」

「……………」

「それにさ、俺…やつと見つけたんだ。17年間魂から欲してしようが無かった単純明快な本物をさ」

だから、と立ち上がり3人の方をきちんと向き合って彼は一言告げる。

「俺のタダイマはここじゃない」

「……………」

そんじゃ、と言いつ残しハチマン・ヒキガヤは彼等の居る部屋へ歩いて行く。精算できない過去を残し、新しい今へと向かう為に。

ー次の日ー

「ふう☆やつぱりマツ缶は最高だな！」

屋上にて黄色と黒色のThe危険色の缶コーヒーを一人啜っているハチマン。その隣には同じくマックスコーヒーと文字の書かれたダンボールが幾つも積まれている。

バアン！

「見つけたー！」

「!!」

突如扉を蹴り破ったのは目の下に薄くくまを作ったニコだった。その手には白と黒の二丁拳銃と何かしらのモジュールが幾つか握られていた。

「どうしたんですか…ニコさん。あれ?…それって」

「そう！私の最っ高！傑作！だ!!」

「マジすか！あれ、それは…………」

受け取ったルーチェとオンブラの見た目はこれといって特に変わっておらず、何かしらを接続させる為の蓋が追加されていたり、グリップに見覚えのある青い結晶が埋め込まれ、透明のカバーで覆われ

ていた。

マツ缶を置いて受け渡された銃を記憶に残った過去の銃と見比べる。

「鏡のように磨き上げられたファイディングランプ、強化スライドだ。サイトシステムもオリジナル、サムセイフティも指を掛け易く、延長してある。トリガーも滑り止めグリーブを付けたロングタイプだ。リングハンマーに：ハイグリップ用に付け根を削りこんだトリガーガード。それだけじゃない、ほぼ全てのパーツが入念に吟味され、カスタム化されている。マキャヴェリの作品の面影を残しつつっっかりとニコさん個人の技術もふんだんに使われてる、最高ですね」

「わかってんじゃねーか！いいセンスしてるだろ〜！」

褒め言葉に喜んだニコはガシガシとハチマンの頭を撫でる。

「それだけじゃないんだよ！それにこれを付けるとこいつの使い道もガランと変わるんだ！」

銃をホルスターにしまうとニコから4つのモジュールが渡された。

「こいつぁエネルギーモジュール、お前の体内電気とか諸々のエネルギーを利用してレーザーを撃つ、ネロでも気絶すんだから効果はお墨付きだね。それとテザーモジュールに麻酔モジュール、足止め専用のモジュールだ、殺したくない時に使え。後は：ランペイジモジュール！こいつを撃つと威力がバカみてーに跳ね上がる！威力がデカいから腕が吹き飛ばないように気を付けろよ！」

「あ、あざっす……」

あまりの魔改造モジュールに若干戸惑いつつモジュールをポーチにしまう。

「それと、こいつぁダンテとバージルからお前に作るよう頼まれた奴だ」

手渡されたのはリボルバー拳銃だった。三つの銃身と三つの回転式弾倉、三つの撃鉄を持つその銃身には犬のような装飾が施されていた。

「魔界で殺したケルベロス族の生き残りとかなんとか言ってたけど：ま！威力はその子達にも引けを取らない。弾もやつから大切に使いえ

よ！」

「あ、あぎつす…（2回目）」

本当に…こんなに至れり尽くせりでいいのだろうか。親切心が怖い。

「なんかあつたら閻魔刀で次元でも裂いて寄ってこいよ！そんなじゃあな！」

「はあ…」

再び走り去ったニコ。てか閻魔刃ってそんなこと出来るんだ…使
い道広がるな。

「そろそろ行くか…」

「もう行っちゃうの？」

「雪ノ下さん…どうしてここが…」

「んー、何となくかな…ここにいそうだったからね」

「お見通しって訳ですか…」

隣まで歩いて来た陽乃はハチマンの飲みかけのマツ缶をぐい、と飲
み干した。

「あら、結構美味しい…」

「そりゃ千葉県民のソウルドリンクですから、遺伝子的に好きになっ
ちやうんすよ」

「遺伝子に刻まれてるなら仕方ないわね…」

「……………」

「……………」

「それじゃ、元気で…………」

ダンボールを幾つも抱えてハチマンは屋上から去った。

ブロロロロロロ

「うわああああああ!!!」

「ぎよええええええ!!!」

「ぬおおおおおお!!!」

「ふおおおおおお!!!」

「お前達少しは静かにしろよ…」

4人に愚痴を零しつつ赤いバイクを駆るハチマン。フロントにベルがしがみつき、右側にヴェルフ、左側にリルカハチマンの足の間に命が体育座り、後ろにはアイズがハチマンにしがみつき、更に後ろにはベートがしがみついている。葉山はネオ・アンジエロ・ライガーとなり俺の荷物を抱えながら隣を走っている。

「大丈夫かい？」

「何がだ……」

「ろくにお別れも言わないで」

「別に……未練なんてない。お前も来るなら黙って走れよ、舌噛むぞ」
「素直じゃないなあ……」ボソツ

6人という有り得ない人数を乗せて一行は始まりの墓場までやってきた。そこにはどうやって回り込んだのか鶴見、材木座、川崎、陽乃がいた。そして近くにはアラストルがニヤニヤと暗黒微笑を浮かべて立っていた。

「なんの真似だ……？アラル」

「いやさ、コイツらが言いたいことがあるんだとよ」

「……」

「八幡っ……行っちゃうの？」

鶴見留美が悲しげに問う。その目には大粒の涙を浮かべていた。

「まあ、な」

「グスツ……また、会える？」

「きつとな……」

「きつとじゃない、絶対？」

「生きてるなら会いに行く」

「約束して？」

「ああ」

留美の小指と八幡の小指を結び付けゆびきりげんまんをする。もう彼女の目には雫なんてなかった。

「寂しくなるな……」

「そうか？今までとそう変わんないんじゃねーのか？」

「バカを言うな……誰が僕の小説を見ると思ってるんだよ」

「俺としてはあんなの見なくて清々するけどな」

「そんなっ！ひどいっ！……なんてな、また来るのだろう？だったら原稿書いて待つてるさ……私の傑作！待ちわびてるんだな！」

満面の笑みを浮かべる材木座。どうやら彼にはまだアシスタントが必要な様子に内心八幡はホットする。

「ねえ…比企谷君。私もそっちに行つていい？」

「陽乃さん？」

「私もう色々面倒くさくなっちゃった！雪乃ちゃんの事を引き摺るのも、後処理の事もさ！静ちゃんだつてアレだったんだしさ！もう、逃げちゃいたい！」

「陽乃さん……」

「………なんてね、逃げるなんて私らしくない。比企谷君が戻つて来た時には色々と覚悟しててね？この街をデトロイトみたいにしたげるから！比企谷君が目印にしやすい用にマツ缶タワーを作つてその頂上に比企谷君の像を作る！」

「そりゃ…楽しみですけど俺の像だけは勘弁してください」

本当にやりかねない陽乃に恐怖ではなく一種の安心感を覚える八幡。

そこにワームホールが現れた。バリバリと不安定そうなそれは俺達が入るのを今か今かと待ちかねている。

「時間か……そんじゃあな」

「お世話になりました！」

「色々大変でしたけど楽しかったです！」

「くるまってやつこの事今度は教えてもらおうぞ！」

「お米、美味しかったです!!」

「あばよ」

「ありがとう…」

「じゃあ…ね」

それぞれが一言残してワームホールの中に入っていく。八幡をバイクを押しながら、ベル達は手を振りながら、葉山は八幡の荷物を抱えながら。

そしてワームホールの中の光は眩い光を放ち彼等の体を包み込んだ。

「よお【亡影】！思ったより帰りが早いじゃないか！ってなんじゃそりゃ!!」

バイクに驚く門番のバン・モンさんに迎えられ俺達はオラリオに帰って来た。マキャヴェリの作業なのか俺達が帰ってきたのは千葉に向かつてから30分後のオラリオだった。

「それじゃ、私達はこれで」

「まあまあ面白かったぜ」

「僕は少し休むよ…疲れた」

アイズとベートは千葉での出来事が朦朧としてきている。混乱しているのかそれともまたまたマキャヴェリが仕組んだのか。葉山は…疲れたんだな。荷物持ちとかさせちまったもん。ゆっくり休めよ。「なんか4日も千葉にいたのにオラリオではそう時間が経ってないとなるなんて不思議ですね」

「そうだね、まるで千葉にいたのが夢だったような…」

「俺も少しぼーっとしちゃってる。気を引き締めねーと」

「そうですね…ヒキガヤ殿？」

「ん？どうした」

「いえ、少し様子が変というか…」

「俺は大丈夫だ」

きつとベルもリルカもヴェルフも命も今は覚えていても後1週間もすれば千葉を忘れるだろう。

「怖いな…思い出って」

何故ならそれは今を痛感させる最悪のスパイス。

「そう？いつか笑い話にできる時が来るから楽しみじゃない？」

「それもそっか」

訂正、明日を楽しくさせるスパイスだった。

3章 春姫編

#333 それ（ムツツリ）でも、守りたいもの（童貞）があるんだ！

今、新しいホームに新しい家具や子供達の荷物が運び込まれている。ベル君は汗水垂らしてよいしょよいしょと荷物を運んでいる。ヴェルフ君は新しい鍛冶場に歓喜で震えている、よっぽど嬉しかったんだろうね。サポーター君も自分の体格に見合わない荷物を持っている。相変わらず度肝を抜かされる。命君は：見てないなあ。そして目を引くのがハチマン君だ。両手一杯に荷物を積んでいるのはまだ分かるが彼の背中や肩から生えている紫の腕はそれよりもっと多くの荷物を運んでいる。

【魔力操作】：自身の魔力がある限りそれをどんな風にも加工して使用できる。腕、剣、ビーム、用途は彼の想像の数だけある。

そんなハチマン君は最近様子がおかしい。態度や行動には何も変化がないがどこか思い詰めている面が見られたり吹っ切れた面が見られる。食後に少しだけブーツとしてたりベル君達とより一層仲良くなっているのがその証拠だ。後者はいいとして問題は前者だ。ウェイターのエルフ君が話を聞いて貰えなくて拗ねていた。友神のヘアアイストスも『彼、どこか上の空で心配なの』って身を案じていた。夜勤のバイトが終わって一人帰っていると身を隠したフレイヤが『ちゃんと彼を見なさい：』と軽く警告して来た。それにデメテルだって『お野菜のチヨイスが少し甘くなってるの：調子悪いのかしら』とか言ってたんだぜ!?全く何人誑かしてるのやら！

他に変わった点を挙げるとすると：彼に新しいスキルが現れた。スキルとは心境の大きな変化や何かに伴って発現するもの。ベル君の憧憬一途（リアリス・フレーゼ）とかがいい例だね、発現した経緯は気に食わないけどさ！それでもハチマン君の発現しそうになってるスキルはベル君のそれとは常軌を逸している。彼に何かがあったのは確実だ。

「だってあんなスキルが「スキルがどうかしたんですか？」どうわああああああ!!」

突然後ろから掛けられた声に思わず叫んでしまう。声の主は心中で話題になっているハチマン君だ。後ろには大きいソファが置かれている。

「ビックリした…どうかしたんすか？」

「いや!? なんでもないよ!? (君の事を考えてたんだよ!)」

「そつすか…このソファどこに置きます？」

「ああと、そこに頼めるかい？」

ほい任されて、と言いついで器用に彼はカーペットとかソファを配置した。他にも家具の数々を置いて彼はまた荷物を運びに外に行った。

思えばハチマン君には普通とは違う事が多々見受けられる。人となりは本当にできた子だ。優しさや思いやりがベル君に引けを取らない程ある。誰かの為に必死になれる子だ…自らの命を軽んじる傾向があるのは腑に落ちないが。おつと考えが逸れたね、彼が普通とは違うのはスキルと武器だ。【悪魔の魂】、デビルズソウルそれに閻魔刀とリベリオンとフォースエツジ。そして何より…彼のステータス欄に刻まれた【諦めない】。

悪魔というのはその存在自体が恐ろしすぎるあまり地上の子供達にすら存在が伏せられている。本当に古い文献とかなら悪魔をほのめかす存在があるかもしれないがそんな物残すなんて愚の骨頂だ。何故なら自身の黒歴史を記す事になるからだ。そんな存在に頼って生きていたなんて口が裂けても言えないし残せないからだ。そんな歴史から抹消させられた悪魔という種族は少数の神々以外が知る事は無い。そんな悪魔という名前がハチマン君という少年の背中に刻まれている。

そして彼の武器だ。

閻魔刀とリベリオンはボクが天界で引きこもりをしていた時に知り合った悪魔……スパイダ君が所持、使用していた物だ。あの日子供達にでも遺そうか、と言っていた物が今彼の手にある。でないと彼がスパイダ君の息子だと言うのだろうか? それは彼に聞いてみない

と分からない。最悪ボクは神だ。相手の嘘は見破れてしまう。YESかNOかは分かるだろう。……そんな考えに至ってしまう自分に嫌気がさす。どこか踏み込んでしまうといけない気がしてならない。その理由はフォースエッジにある。スパード君はそれを子供に遺すとは思えない。彼から聞いた話だがフォースエッジは彼が一番最初に使っていた剣だ。戦いでしか自分を見い出せなかった彼がそれまでを譲るのだろうか。

最後にくるのは【諦めない】。本来ステータス欄には決まった項目に各種ステータスやスキル、魔法が記されている。そんな欄に【諦めない】。強い思いというのは偶にスキルに昇華されるが：彼の【諦めない】はそんな事無かった。まるでその思いを加工するのがおこがましいと恩恵そのものが拒んでいるかのように。

うんうん……と考えているが、考えれば考える程謎が深まるハチマン君。

「答えを知るのは彼のみ……か「誰の事なんすか？」どううわわわわわわあああああああああ!!?」

「ノックしましたからね……それに神様も『うん……』って返してくれました」

「どうしたんですか？神様」

「人騒がせな神様ですな……」

そう言いながらゾロゾロ入ってきたのはボクの眷属達だった。ハチマン君はタンスを持ち、ベル君はヴェルフ君と木箱を抱えて、サポーター君は小動具を持ちながら。

「ゴメンゴメン……少し考え事をね」

「浮かれるのも良いですけどファミリアの運営とかにもちゃんと気を配って下さいね！ランクが上がってバベルに納める税金とかも上がってるので……ブツブツ」

「まあまあ！難し事は後で考えるよ。今はこの後の事に目を向けようじゃないかー」

「この後何かあるんですか？」

「フツフツフツ！聞いて驚きたまえ！今日の昼、ここに入団希望者が

来るんだ！」

「ええ！いつの間そんな事を？」

「皆がダンジョンに行ってる間に団員募集のチラシをバイト先に貼らせてもらったりギルドの掲示板に掲載してもらったりしてたんだ！」
おおくく、と室内に鳴り響く拍手。えへへ、もつとしてくれてもいいんだぜ？って、何かバカにされてる気がするんだけど？

「どんな人が来るんだろうねハチマン！」

「俺達の戦争遊戯での勇姿に惚れた美女が押し寄せてくるかもないどーするよ、『キヤー！ベル様ー！（全力裏声）』なんて言われたら『どうかア…しましたかア？（ため息混じり）』…なんてどうかな」「おお、いいじゃないか？」

「ハチマンも『す、好きですー！』なんて言われたら」

『「H A H A H A！およし下さいレディーー！』…なんてどうだ？」「うん！バツチリだね！」

H A H A H A!!と今まで以上に意気投合してる2人。この前は2人でパフエやピザやスパゲティをた食べたり買い物に出かけていたらしい。しかもベル君のお誘いで！本当の恋敵はもしかしたらハチマン君なのかもしれないね。

「なーにーがーバツチリなんですか？」

「ギクツツ!!?」

「いいですか！お二人にはもつと団長と副団長としての自覚をですな！クドクドクドくくく」

「はい、マジですいませんでした……」

ガヤガヤガヤ…

どうやらサポーター君の説教の間に入団希望者達が集まったようだ。その様子に説教を受けて頂垂れていた2人も感嘆の声を漏らしている。

「ハチマン、そういうえば葉山は来るのか？」

「少し小難しくなるが入団こそしないけど呼べば助っ人とかには来てくれるらしいぞ。まあ、残り半分の今月は無理っぽいけどな」

「？、どうしてなんだ」

ハチマン君曰く戦争遊戯で本気の死闘を繰り広げた相手だった葉山ハヤトという少年はその力の源を恩恵としていなく、ギルガメスとの不完全な同調によるものだったらしい。それ故にフルタイムで動く事は不可能で休みと定期的な投薬が必要らしい。ダンジョン探索には不向きだろう、とハチマン君の口から告げられた。

「ま、ちよくちよく遊びに来たいって言ってたぞ」

「そりゃ歓迎しなきゃな！」

「ああ」

「それじゃあ！早速面接に取り掛かりましょう！」

どこにいろのやら命君を除いた子供達は正面玄関から出て入団希望者達を眺める。ベル君は一斉に向けられる視線にたじろきながら、ハチマン君はかんこーひーとやらを口にしながら、ヴェルフ君は少し緊張しながら、サポーター君は品定めをするように目を光らせながら。

(さてと、皆と冒険できるような子はいないかな?)

ダダダダダダ!!

命君かな？早足で来るあたり慌てているのだろうけどどうしたのかな？

「へ、ヘスティア様ー！」

血相を変えて飛び出してきた命君、その手には一枚の紙切れが握られている。あれ？それってまさか…

「荷物の中から借金2億ヴァリスの借用書がー!!」

「ぶうツ!!」

突然の出来事に吹き出してしまふ。

「は?」

固まるサポーター君。

「にお、くっ?」

呆然とするヴェルフ君。

「あ」

「え」

バタン！と倒れるベル君とハチマン君。ていうかハチマン君は

知ってたよね!?

あまりのショックで俺とベルは気絶した。俺は前から聞いていてやっと思い出というタンスの隅に追いやっていたのに思い切りこじ開けられたことにより脳が考える事を止めてしまったのだろう。

「それで、どーゆー訳か説明してくれますよね？」

目を覚ました俺とベルは皆の待つ談話室に呼ばれた。そこには神様を囲むようにヴェルフとリリルカと命さんが立っていた。どこか申し訳なさそうにしている命さん、どうしたのだろうか。

「あれ？入団希望者は？」

俺の心を代弁してくれたベル。

「借金2億もあるファミリアに入りたい冒険者がいますか？」

「あつ……（察し）」

「それに偵察もしてきましたがヘスティア・ファミリアは借金が2億もある爆弾ファミリアとして都市中に広まっています。今後入団希望者がくる見込みは……ゼロです」

「うちに金が無いと分かった途端手のひら返しか……どうしよう、グーで殴りたい」

「わーっ！ハチマン早まらないでー！」

ベオウルフを装着し街中の冒険者の頭にカボチャサイズのタンコブを作ってやろうとしてるところをベルに止められる。ペツ、命拾いしたな。

（ま、募集で本物が来る訳ないよな……）

そういえばコイツらと出会ったのって殆ど奇跡みたいな感じだな。

ーベルはダンジョンで

ーリリルカはカモにされ

ーヴェルフはベルの装備を作ってて

ー命さんはダンジョンで襲われてる時

まあ、こういう出会いをそうそう繰り返す訳ないよな。

長考してる間に考えは纏まったらしく、神様は借金を自分だけで返

すらしく、俺達は日銭をダンジョンで稼ごうか、という方針に決まった。

「じ、自分はお先に就寝させてもらいます」

うーむ、命さんの様子がおかしい。引越しの用意をしてる時にタケミカヅチ・ファミリアの千草さんが訪ねてきてから命さんが挙動不審だ。そしてヴェルフとリルカはその様子に気付いているようだ。俺？俺は皿洗いしてんだよ。

ガチャ：

音から察するに自室ではなく外に出た命さん。そしてそれを追うヴェルフとリルカとベル。やはり放っておけないのだろう。

「仕方ない…」

《アラルの所に行つてきます》

と書き置きを残してエプロンからネロさんのお下りのコートを着て外に繰り出す。黒もいいけど今度紫に染め直そうかな？

屋根から屋根を伝いヴェルフ達を尾行する。少し距離が開いた所に歩いている命さんと千草さんは合流して南東の方角に向かつて歩いて行く。その方角の先を見るとそこはより一層キラキラしている場所だった。カジノはあると聞いていたがこんな所エイナさんも教えてくれなかったな。

「人目が多くなってきたな…」

こつそり地上に降りてベル達を見失わないように4、5m離れて歩く。

「こつこつて…ああ…」

様々な香水の香りが鼻腔を擽る。周りには肌面積の多い衣装を纏った女性が男を誘惑して時代劇で見た吉原のような建物の中に消えていく。ここは歓楽街だ。所謂エツチなお店が沢山ある場所だ。それならエイナさんが教えない訳だ。

自体の不味さに気が付いたのかヴェルフとリルカがベルを返そうとするが命さんを見失ってしまう為不本意ながらベルを連れて行ってしまう。

犬人、猫人、ドワーフ、はたまたエルフまでもが店先で男を誘惑している。やはりエロは人を繋げるのか…（呆れ）。

下卑な人達にナンパされてる命さんと千草さんをヴェルフとリルカが救いの手を差し伸べる為に駆け寄るが周りに目を奪われて気が付いていないベルは置いてかれる。

『今からサービスターン！』

ナニをサービスするのか、そんな時間に入り人通りが多くなってきた。更に人の波に揉みくちゃにされるベル。なんとか救出して家に返そうと思ってる矢先俺の周りにも人が増えてきた。

「ゼエ…ゼエ…」

なんとか人混みから抜け出し移動を再開する。

「ねえ、おにーさん…アタシとイイ事しない？」

エルフのお姉さんに声を掛けられる。

「ツ！ いや、いや、大丈夫です！」

手を振り払い先に進む。歩いていると羽を着けた帽子を被った見覚えのある男神に出会った。

「あれ？ハチマン君も奇遇だねー！君もやつぱり男なんだね」

「変な勘違いしないで下さいよヘルメス様…そんな事よりもここら辺にベル来ませんでした？」

「さつき見掛けたよ、極東のお店に向かって行ったね。隅に置けない君にもはいこれ、餞別だ」

「これは？」

「精力剤さ☆」

「ぶっ！！あー、もう！」

あまり時間を取られてもアレだから聞いた極東のお店に向かって走る。すると案の定アマゾネスに囲まれて揉みくちゃにされてるベルがいた。

「ベル…」

「ハチマアアアン！！助けてええええ！！」

バツ！と俺のたった一言の眩きに反応する女性達。背筋に悪寒が走る。蛇に睨まれたカエルの気持ちがよく分かる。しかしベルよ、そ

んなに泣くなよ。

「アンタ…亡影かい？」

後ろから声がした。振り返るとそこにもアマゾネスの女性がいた。

「アタシはアイシヤ。あんた私の一晩を買わないかい？」

「へ？」

突然のお誘いに戸惑っているアイシヤと名乗る女性は蠱惑的に微笑みながらゆっくり近づき腰に手を回してくる。

「ちよ、俺は…そんなつもりじゃ…」

「じゃあこれはなんだい？」

コートポケットに適当に突っ込んだ精力剤を見せびらかされる。周りの反応を見るにベルも同じのを持っていたらしい。

(ヘルメスうううううう!!様)

頭の中のヘルメスが親指を立てているのを振り払い現実を見る。今俺達は大量の娼婦に捕まっている。しかもヤル気満々だと勘違いもされている。しかもこの女性、力が強い。普通に抵抗しても振り解けない。

「大人しく天井のシミでも数えてるんだね」

俺達は彼女のホームに連れ込まれた。ホームに部外者を入れてもいいのかと聞いたが彼女達からしたら日常茶飯事らしい。無防備なのかそれとも襲われても勝てる自信があるのだろうか。

「ハチマン…僕達どうなっちゃうんだろ」

「安心しろ、俺もこんな形で純潔を散らせたくはない」

「何か考えが？」

「……」コクリ

希望が見つかったのかベルの目に涙が浮かぶ。きつと捕まってなかったら抱きついてきただろうな。

「ここは私達のホーム、女主の神娼殿。この建物だけじゃない、ここらへん一帯は私達の島…：イシユタル様の私有地さ」

お城のようなそのホームの管理者、もとい彼女達の主神はイシユタルという名前らしい。

「なんだ、お前達。そろそろと集まって」

吹き抜けになった上階から投げかけられた声の方を見ると。そこに女神がこちらを見下ろしていた。情欲をそそる衣装に身を包んだ女神。僅かもない衣で張りのある乳房や妖艶な腰を覆い、褐色の肌を大胆に惜しみなく晒している。編み込まれた長い黒髪は艶があり、紫の色にも見える。煙管を片手に持ちながら、彼女は悠然とこちらを見下ろしていた。

ベルは彼女に見とれているようだ。

「イシユタル様を見ちゃダメー！」

「みんな骨抜きにしてっ、また奪われたら堪ったもんじゃないよ！」

するとアマゾネス達が見るもの全てを魅了してしまうと言う彼女の力を危うんで、団員達が一斉に俺達を庇う。しかしベルにだけ……どうやら俺は目付きが危なっかすぎてあんまり見向きされない様だ。悔しくなんかない……断じて。

「？、アンタ……イシユタル様を見ても平気なのかい？」

「え？別に……なんとも……」

ピシツと周りの空気が固まる音がした。ベルの周りにいたアマゾネス達は信じられないといった目で見てきた。魅了がどうか言っているがそんな色仕掛けに引っ掛かるのもどうかと思うけど。アイシヤさんに至っては腕を組んではお、と声を漏らしている。

「ふん、これから来客故、青い子供にかまける時間はない」

なんかそれはそれで腐りきった尊厳を踏み躪られた気がするんだがあんな香水臭い女神を抱かずに済んだんだから良かった。

ズシン……ズシン……

「やばいアイシヤ！フリユネが来る!!」

急にアイシヤさん含むアマゾネス達の目の色が変わった。こっちに来い！とか、隠れろ！とか強引に連れてかれそうになるが時間とは時に残酷でソレの訪れの方が速かった。

「若い男の匂いがするよオ……！」

「……？」

地響きと共に奥の闇から現れた2mを超える、巨女。しかし短い手足は太く文字通り筋肉の塊だった。横にも縦にも太く、彼女ホントに

娼婦?というくらい醜かった。ギョロギョロと蠢く目玉と横に裂けた口は、まさにヒキガエル――

「ゲゲゲッ!男を捕まえてきたんだって、アイシャ?」

「ちっ、何しに来たんだ、フリユネ」

「お前達が寄つてたかつてガキ2人を連れてきたって耳に挟んでね、興味がわいたのさあ」

アタイにも見せなよ、と続けのっしのっしと歩いて来た。俺にはそれが死刑を待つ囚人のような気分になった。

「ヘステイア・ファミリア」の『兎』と『影』じゃないか!まだまだ青臭いけど:アタイの好みだよ!!押し倒した体に跨って、その可愛い顔を滅茶苦茶にして:そそられるじゃないか!!」

ゲゲゲゲ?!と笑う彼女の涎が俺のズボンに落ちそうになった途端防衛本能が働きクイククシルバーを発動させた。時が止まった途端俺は涙と鼻水を流しながらベルを抱えて一目散に走った。

10秒、時が経った頃にクイククシルバーは解けた。

「あれ!?ハチマン?」

「うぐっ:えぐっ、ベルう:」

『『逃げたぞ!追えー!』『』』

狩の合図に気を失いかける。

「しっかりして!」

ピシャン!

「はっ!!ここは:地獄か:」

ベルのビンタでなんとか意識を取り戻したがここが地獄だということに再び絶望する。

「見つけたぞー!」

「~~~~~ッ?!」

お互い声にならない悲鳴を上げながら逃げ回る。基本このアマゾネス達はあまり戦闘力が高くなくlevel3となった俺達の速さに追いつく人物はそう多くなかった。一人を除いて。

「ぎゃああああ!!」

隕石のように落ちて来た『ソレ』は舌なめずりをしながらこちらを

睨む。フリユネと呼ばれていたモンスターは動きで分かる…俺達よりレベルが上だ。

「ゲゲゲッ、逃がさないよオ〜？」

その巨体に似合わない速さで拳が繰り出される。『逃げる!!』と叫ぶ本能のまま回避行動を取る。空振りで終わったその一撃は凄まじく風圧で頬に波ができる程だ。それだけではなくフリユネは他の娼婦を掴んだかと思えば南斗人間砲弾宜しく投げ飛ばしてくる。

「あ、有り得ない…」

その力量に頬が痙攣する。

「あんの、ヒキガエル…!」

視線の先でアイシャさんが舌打ちをする。彼女を尻目に俺達は逃げ惑う。アイシャさんも追ってくるが俺たちの方が速い。

「リーシャ、イライザ!三番通りに入ったよ!」

今度こそ逃げ切れると勘違いしていた。外に出ようとここは歓楽街、イシユタル・ファミリアが管轄しているのはそこら中の娼館の看板にそのエンブレムが掛けてあるので理解できた。

「ベル!あそこだ!」

「うん!」

歓楽街の区画の端っこに位置する店に入る。ただ入るだけではバレルのがオチだから例に習ってクイツクシルバーの出番だ。ベルも止まるため引っ張って連れていく。

そして時は動き出し、俺達は一般客を装いたまたま目に付いた部屋に身を潜めようと襖に手をかける。娼婦が騒いだ時用に麻醉モジュールをルーチェに付けていつでも撃てるようにスタンバる。

「お初にお目にかかります、旦那様。今宵、夜伽をさせて頂きます、春姫と申します」

襖の先には、三指を着いて頭を下げる一人の獣人の少女が座していた。きらやかな金の長髪に、同じ毛並みの耳と尻尾。あまり見かけない亜人の為、少しばかり見とれてしまう。

「あら…今日は御二人なのです…あまり心得はありませんが精一杯頑張りたいと思います。さ、どうぞこちらへ」

その亜人は固まる俺の手を引き敷かれている布団へと導く。

「その、ちがくてツ…うお」

「キャツ…」

いきなりの展開に動転したのと長い事必死に走った疲労により俺は彼女と共にベッドに倒れてしまった。彼女が俺に覆い被さるようになる。

「あわわわわ…／＼／＼」

「むぐぐぐ…むっ？むうう…」

「す、すみません!?私つたら…」

体を起こした彼女、その際に顔に当たっていたたわわは離れていった。べ、別に悔しくなんか無いんだからねっ！……

どうするか思案してある間にも彼女は服を脱ぎ下着姿になり俺の服も脱がそうとする。

「私が、旦那様に、ご奉仕を……………!」

「うわああああ〜／＼／＼」

「……………とっ、」

そこで彼女は突然、固まった。ピンツ!と尾を立てて、耳まで赤くしながら、呆然とこちらの首もとを直視する。ベルは俺の初舞台になるかもしれないのに顔を真っ赤にしながらこっちを凝視している。ちよつと!俺の尻尾もスタンドアップしそうだから早く助けて!!

「とっ、殿方のっ、鎖骨くっ!!」

急に赤面した彼女は意識を手放した。その際こちらに倒れて込んでしまう。おっしや!へブンイズカミング!!

再び到来した天国に内心歓喜する。

「春姫っ!ここにヒューマンが来なかった…か…」

「あっ…(察し) お取り込み中でしたか…すんせしした」

マズイツ!と思ったが何かを察した空気の読める団員は襖を閉めた。

「だ、大丈夫だね、ハチマン!」

「すう…はあ…すう…はふへへ」

息が出来ない為深く深呼吸をしてから彼女を退かす。さて、四畳

位の部屋に男2人と気絶した女一人、しかし外には追っ手が山ほどれるマズイな…。

(神様、今日帰れるか怪しいです)

鼻から垂れてきた鼻血を拭いながら俺はファミリアに思いを馳せるのであった。

#34 詐欺師

「も、申し訳ありません!」

目の前で狐人の少女が土下座で頭を下げる。ベルも俺もチエイスで疲れ果てたからここに暫く身を置かせてもらうことになった。ていうか別に謝る事なんて何一つないのに。むしろ我々の業界ではごほうびです。

「わ、私、春姫、と申します。貴方達は…」

「ご、ご丁寧にも…僕はベル・クラネルです」

「俺はハチマン・ヒキガヤつす…」

ひとしきりの自己紹介を済ませてここまでの経緯を説明する。仲間を追ってきたこと、アマゾネスに連れてかれたこと…：襲われかけた事。

「そ、それは大変でしたね」

同情的な眼差しを向けられる。

「アマゾネスの方々と言いますとアイシャさんの事でしょうか？」

「ええ、まあ、知り合いなんですか？」

「はい。私はアイシャさんによく面倒を見てもらってます」

少し申し訳なさそうに、けれど彼女は裏表なく微笑んだ。彼女に追い回された身としては想像できないが案外良い人なのかもしれない、但し春姫さんに対しては、だ。

「約束のお時間が来るまで…私と、お話をしませんか？」

てなわけで始まった彼女との会話。一応コミュ障を患っている俺はそんなに話が長く続くことは不可能だ。生まれついた無愛想がここまで響くなんてな。

「クラネル様のご出身は、どちらなのですか？」

「僕は大陸の、えっと、このオラリオの北の方にある遠い山奥で…」
『クラネル様』なんて呼ばれて小っ恥ずかしくしているが君、ベル様と呼ばれてるじゃないか。

「そうなんですか、ヒキガヤ様にもお尋ねしても宜しいですか？」

「俺は…千葉っていう極東にある場所なんですけど前人未到の地でし

て…未だ嘗てそこを見た人は居ないんですよ。ベルとか仲間たち以外に」

前人未到という言葉に惹かれたのか彼女にそこに住むのはヒューマンなのか、どんな景色が広がっているのか、なんてことの無い事柄を尋ねられる。聞いては喜び驚く彼女を俺は『箱入り娘』なんて言葉が浮かんだ。

「やはり、このオラリオには冒険者になるために来られたのですか？」
「そう、ですね…夢みたいなのがあつて、それにお金もなかったですし…あれ？ハチマンつて…」

「俺か？俺は…気が付いたらダンジョンに居たんだよ」

「あ…も、申し訳ありませんっ。私ばかり聞いてしまった」

照れ恥じる彼女に俺は苦笑することしか出来なかった。

「えつと、それじゃあ…春姫さんは、どこの出身なんですか？」

話を聞く限りどうやら彼女は命と同じ極東の出身らしい。そこから話は展開され、彼女がここに至るまでを聞くことができた。

5年前、当時11歳の彼女は神への贈り物である神饌を寝ぼけて食べてしまったという。当時彼女の家にはパルウムが良く出入りしては春姫をべた褒めしていたとの事。親に殺されそうになった所をそのパルウムによつて一命を取り留めたがその代わりに勘当されてパルウムにその身柄を引き渡されたこと。モンスターに襲われて見捨てられた後山賊に拾われ生娘である事を確認された後オラリオに娼婦として売り払われたらしい。なんとも腹の立つ話だ。

「あつ…で、でもっ、島国育ちの私は大陸に興味がありました。叶うなら、ぜひ来てみたかったです」

茫然と自失するベルに気を使って彼女は慌てて取り繕った。微笑んで明るく喋るその姿が、今はもう痛々しく見えてしまう。

「それに…極東にも沢山の物語が伝わっている、このオラリオには憧れていました」

『『迷宮神聖譚』、ですか？』

「はいっ」

それからはベルと春姫さんのオタク話だ。俺の出る幕ではなかつ

た。日本に伝わる物語と少しだけ似ていたり文字つたりしているその物語を彼と彼女は語り合った。

「私も本の世界のように、英雄様に手を引かれ、憧れた世界に連れ出されてみたい…そう思っていた時もありました」

その言葉にベルは口を閉ざした。寝ながら両手を頭の後ろで組んで目を閉じていた俺はうつすらと片目を開ける。

「なんて…ただのはしたない夢物語でございます。連れ出してもらえ資格は、私にはございません」

「英雄は、春姫さんみたいな人を見捨てない！資格がないなんて、あるわけない！」

「私は、娼婦です」

「!!」

思わず声を荒らげたベルは絶句した。

「未熟ではありますが、私は多くの殿方に体を委ね、床を共にしています」

鎖骨見て気絶するのに？

「そんな卑しい私を…どうして英雄が救いだしてくれるのでしょうか？」

「英雄にとって娼婦は破滅の対象です」

「…もう、刻限です」

連ねられる彼女の言葉にベルは口を閉ざす事しか出来なかった。彼女はもう何もかもを諦めている、そんな目をしていて。俺の昔の目と一緒に。家族というものに絶望して何にも期待しなくなった俺と。

「とても、楽しい時間でございました…ありがとうございます」

彼女に道順を教わり俺達はホームへと帰った。

「ベル…分かってるな…？」

「うん…」

あの子を絶対に救い出そう。

「で？説明をしてもらおうか」

平たく言えば俺達は説教を受けた。歓楽街に行つて朝帰りになれ

ば怒られるのも領けるだろう。

「ご、誤解です！兎に角僕達は何もやましい事はしていません！」

「ほう？じゃあ2人のポケットに入ってたこれはなんだい？」

神様の手には同じ小瓶が2つ握られていた。あれ？一つは俺のだけど…と思いいベルの方を向くと汗をダラダラと流していた。

(お前もかー！ー！！)

「どうします？へスティア様」

「嘘は言っていないけど歓楽街に行ったのは事実だからね、二人には罰を命じるよー！」

俺達は近所への挨拶回りや手伝いをしていた。屋根の修理や荷物運び。淡々とこなしていくうちにやがて俺達は「豊饒の女主人」の手伝いをする事になった。

「手伝わせてしまつてすみません、ヒキガヤさん」

「いえ、別にいいんですよ。これが仕事なので」

「ではお昼はここで食べていかれるといいです」

誘いを断るのも気が引けるのでベルと一緒にトマトソースパスタを食べることになった。皿に山盛りになったそれを俺達は無言で食べる。きつとベルも春姫さんの事を考えているのだろう。あんな別れ方としてはモヤモヤするのも領ける。

「白髪頭と半端頭はどーしてそんなに元気じゃないのかにや？」

「え、いや…大丈夫ですよ！ね、ハチマン」

眉を下げながら愛想笑いを浮かべるベル。ていうか俺の事半端頭つて…まあいいけどさ。

「ああ、ギルドに払わなきゃいけない税金の事を考えてたら憂鬱になっただけだ」

まあ、シャワーのサービスとか医療とかは助かってんだけど今までは比較にもならないくらい納める税金が膨らんだからな。リリルカが叫んでたのを思い出す。

「あれ？2人の匂い…」

「！ッ、じゃあ僕仕事があるのでー！」

シルさんが鼻をスンスンとさせると顔を青くしたベルは急いでパ

スタを口に詰め込み俺を置いて外に飛び出した。

「ヒキガヤさん、香水とか付けてましたか？」

成程、そういう訳か…ベルめ、後で激辛じやが丸くんを食わせてやろう。

「ベルとアラルン所で馬の世話してたら匂いがアレだったんでシャワー浴びて適当に香水付けただけですよ」

平静を装いながら嘘をつく。別にこの人達に歓楽街に行った事を話す必要なんてないだろう。

「嘘…ですよね」

「…ですよね……………」

やっぱりバレた。この娘怖くない？ポーカーフェイスに定評のある俺でもビツクリなんだけど。さあ、どう言い訳しようか…。

「ここに坊主がいると聞いたが…いたか」

すると巨漢の漢、戦争遊戯で世話になった悪魔のベリアル改めてベルさんが扉をくぐってやってきた。悪魔でも救世の天使に見えてしまうのは何故だろうか。

「ベルさん、どうかしたんすか」

それでもあまり人前に顔を出さない彼が来るのは不思議だ。何かあったのだろうか。

「用事のアラル先輩からの手紙だ、マキャヴェリ先輩は外に出たくないらしいから俺が来た。受け取れ」

確かに渡したぞ、と言い残してベルさんは立ち去った。そっか、あの悪魔、人が大嫌いなんだっけ。

「どんな内容なんですか？」

シルさんが覗き込むようにして尋ねてくる。

『3人目が見つかつた』…としか書かれてませんよ」

「3人目？何か知ってるんですか？」

「まあ、貴方達には関係ありませんよ、と。俺も仕事の方に戻らせてもらいます」

席を立ち【豊饒の女主人】を後にする。見つかつちまったのか…いつでも大丈夫なように準備はしとかないとな。

「ハチマン君、君に指名の仕事だよ。クライアントが来るまで中央噴水の近くで待つてね」

「うっす…」

僕達は僕が神様に恩恵を授かった本屋に来ていたけどハチマンの元に舞い込んだ突然の仕事で彼は席を外すことになった。

「さ、リリ達も仕事を続けましょう」

嫌な予感がすると言っているヴェルフを他所に作業を進める。ヴェルフ、リリ、命さんが木箱に書物を詰めたり、本棚に向き合って本を並び替える。神様は別の部屋で店主のお爺さんと作業をしている。

僕は迷っていた。命さんに春姫さんの事を聞いてみるべきか…もし話してしまったら命さんが危険な目に合わないか、と心配していた。そうして迷っている内に既に空はオレンジ色に染まってきた。

「あの、命さん…」

「どうかしましたか、ベル殿？」

本棚から振り返った彼女に…今朝からずっと気になっていたことをやっと勇気をしぼって尋ねた。

「春姫さんっていう狐人を、知ってますか？」

「どっ……—とここでその名前を!？」

僕の質問に命さんは身を乗り出して大きく反応した。リリとヴェルフもこちらに振り向く中、彼女達が知人である事を確認する為に僕は昨夜あつた事を打ち明ける。遊郭にいたこと、このオラリオにやってきた経緯を。

「もしよかったら…命さん達と春姫さんの関係も、教えてくれませんか？」

遡る事十年ほど前、屋敷から出れなかった彼女をタケミカツチ様主導の元彼女を裏山に連れ出して遊んでいたそうだ。野山を駆け、田畑を巡り、川辺ではしゃいで、と幸せな時間を過ごしていたらしい。ただ一度バレてしまった事があり、警邏との攻防は熾烈を極めたらしい。春姫さんの父親も激怒していたらしく、その度にタケミカツチ様

が土下座をして許してもらっていたらしい。

しかしそれも長くは続かず、貧困に苦しんでいた命さん達は日銭を稼ぐようになって疎遠になった中、久しぶりに屋敷に窺ったら春姫さんは勘当されていた。

その言葉の数々には春姫さんへの想いと悔悟が滲み出ている：目の前にいる僕も胸が切なくなるほど苦しくなる。

「わかっているとありますが…その狐人の方を助けようなんて考えないでください」

「!!」

ぱつと顔を振り上げた僕と命さんに、リリは冷静な表情で淡々と話す。

「当然です。戦争遊戯を終えたばかりだと言うのに、また抗争をするおつもりですか?」

そして手痛い正論を叩きつけてきた。

「戦争遊戯で「ヘスティア・ファミリア」は丸裸にされたと同然です。観戦していた者達にはベル様達の魔法、攻撃、武装やアイテム、手の内を知られています」

全てを出し切って掴んだあの戦争の勝利には、代償が伴ったと、リリはそう告げる。

「何より、ヘスティア様に膨大な負担をかけることになるでしょう。能天気過ぎてまだ自覚はないかもしれませんが、都市の勢力図に頭を食い込ませたあの方は、少なくとも神様達に疎まれている筈ですから」

「おい、一人で悪者にならなくてもいいぞ」

本の背表紙で、リリの頭をトントンと叩く。

「わ、悪者なんてっ!」

そうか、リリは敢えて心を鬼にして、悪者——『嫌な奴』を演じていた。赤らめた顔を背けるリリの隣で、ヴェルフはみんなをまとめる長兄のように笑った。

「ファミリア」の一員としてはリリスケに賛成だ」

だがな、と僕と命さんの顔を見回して、言葉を続ける。

「お前達が何かしたいっていうなら、俺は手伝ってやる。最後まで付き合っただけさ」

それにな、とまた言葉を続けたヴェルフは顎で窓の外を指す。窓の外には見覚えのある黒いコートの端っこ側が見え隠れしていた。ハチマンだ。仕事が終わりに帰ってきたら僕達の話が聞こえたものだから途中で参加するのも気まずくて外で聞いていたのだろう。

「……………」

そして、どこか安心したのか何かを決心したような表情で彼は書店には戻らずどこかに向かつて歩き出した。

「あいつ何しようってんだ？」

「昨日の今日で歓楽街に向かうとは考えにくいですけどもしかしたら……………」

リリが心配の声を出すがその続きのセリフはノック音によって遮られた。皆が一斉に音のした方を向くと神様や書店のお爺さんではなく、白髪で紺色のコートを着た切れ目で初老の男が立っていた。

「アラル神父…」

「よっ」

軽く手を挙げて挨拶をする彼はフラフラと歩いて適当な本を手に取りパラパラと読み、ため息を付いた。

「アイツには追加で依頼させてもらっただけ、その報告をお前達にもって思っただけ」

本を読みながら話している為全く僕達と目を合わせようとしていないアラル神父。リリもヴェルフも彼に苦手感を抱いている為、少し怪訝な顔をしている。

「前々から思っていました貴方はハチマン様をどうして気にかけているのですか？」

ふむ、と一息置いて彼はまた新しい本に手を出した。

「気にかける訳……………」

本をパタンと閉じて視線を僕達に向ける。何時もの陽気なイメージとは違ってかわり重い雰囲気空気が漂う。

イシユタル・ファミリアの地下

そこは地上の華やかさとは真反対に暗い石畳が敷かれ、3 m先が見えるかどうかとも怪しい間隔で蝋燭が寂しく置かれていた。壁や床には極東の札や何かしらの効果を発する魔法陣が幾つも施されている。た。

「……………」

闇の中で蠢く繭にはモンスターとは似ても似つかないパーツが乱雑に融合されていた。この世の物とは思えない翼や鱗にしては大きすぎる尾、黒く変色している溶けた剛腕。

「随分と成長しているが大人しくしているな…ふっ、悪魔にも通ずる我が魅了はやはりフレイヤのそれとは比べ物にもならないな」

その雰囲気とは天と地の差はある妖艶な女神がその繭の前に立っている。目の前に鎮座する悪魔の繭に通った自分の能力を褒め散らかしている。

「これで忌まわしいフレイヤを…いや、世界を我が手中に…クツフフ…アツハハハハハハ!!」

その笑い声に同乗するかのように蠢く繭のは淡く暗い色を放っている。

夜空に浮かぶ金色の月。

通りに面する張見世の中で、春姫は夜空を見上げる。宵闇と望月に近付いていく月影を一頻り眺めた後、視線を下ろせば遊郭には昨夜に負けない人通りがある。

(いないかな、いないかな)

昨夜会った二人の少年を想う、特に黒髪が目が特徴的な少年の姿を想像してしまう。春姫の視線の動きに合わせて、臀部から伸びる太い狐の尾が、ぱたり、ぱたり、と揺れる。

(昨日は本当に…)

楽しかった。夢のような時間だった。

あの少年は温かな気持ちと優しい一時を春姫に分けてくれた。闇に染まった目が綺麗だった。どこか希望に満ちた目が素敵だった。

彼との会話を思い出すと唇に笑みが、胸には温もりが宿る。

通り側、格子窓の前に張見世の中から何かを探し出そうとしているその人物と目が会った。

「春姫殿！自分ですっ——命です！」

瞬間、春姫の呼吸が止まった。

遠く離れている故郷の幼馴染——男装した命だ。

（恥ずかし！恥ずかし！恥ずかし！）

手を取り笑い合った幼馴染が、過去の美しい思い出が、娼婦に身を墮とした今の自分を見つめてくる。

全身を焼き焦がす羞恥の心。

「…他人の、空似でしょう。私は貴方のような方を存じません」

拒絶の言葉に目を見開いた命は泣きそうな表情を浮かべる。

「春姫、お呼びだ」

「はい…」

いつも以上に心を暗く染め上げながら、はい、と返す春姫は、男が待っているであろう部屋へ静かに向かった。

シャツシャツシャツシャツ…

「ども」

部屋の奥で待ち構えていたのは昨日見知ったばかりの少年だ。布団の上でカードをきりながら春姫を待っていた。

「な、なんで貴方様が…」

「ま、同じ穴のムジナだった訳ですよ…ベクトルは違くとも俺も身を汚してるんでね」

そう答えた彼は脇目も振らずにカードをきつていく。そして春姫が座るであろう場所との間にカードを丁寧に並べる。

「ま、フルタイムで遊べるようにしといたからとことんゲームしようぜ」

「……………はいっ」

娼婦の作法を忘れて慌てて座る春姫、その姿はまるで今は遠いあの日の子供のようにだった。

「残り1枚ですっ」

「UNOうんまるって言ってないぞ、ほれドロ―4」

「こんつ!？」

「ごちそうさまでした……」

次の日の朝、ホームの食堂。小さなパンを一つ食べ終えた命が、皿を片付け始める。スープも野菜も食べず、碌に食べ物か喉を通らないといった様子だ。

「なあ、命君、どうしたんだい?」

「昨日遅くまで出かけていた様ですが…ハチマン様も」

リリルカの移った視線の先には少し眠そうにしているがしつかり朝ご飯を食べているハチマンがいた。

「アラルの野郎が教会の管理を押し付けやがったんだよ…墓の管理さえすれば後は何してもいいって言ってたけどよ…何個あると思っただよ…ったく…洗剤だつてタダじゃねえつてのに…今日も明日も行かなきゃいけないのに…」

段々小声になっていくハチマンの気苦労を察してリリルカは目を逸らした。

「ハチマン…最近動きすぎだよ…少し休んだ方がいいんじゃないの?」

「それもそうだな…少し休む」

身の回りの環境が変わった事と春姫の事で知らなくちゃいけない事が山積みだが休みを選ぶハチマン。

「1時間くらい寝るから部屋に来るなよ」

「あつ…(察し)」

「違うからな」

そんな多忙の身なハチマンは大き目のバッグに何やらジャラジャラとした物を大量に詰め込んで自室に入っていた。

「やるか…」

超ウルトラスーパー賢い俺は春姫さんの所に開店から閉店まで毎日通うことにした。推測だが男の鎖骨を見て気絶するような彼女は

恐らく生娘：所謂処女って奴だろう。本人はそうは思っていないが：今の所は気絶して萎えた客が帰るといふ流れが出来ていると彼女の先輩娼婦が言っていた。今の所確認されていないが寝ている所を無理やり：なんて事もこの先考えうる。故に俺が独占するという考えに至ったのだが金が無い。パフェと Pasta とピザでおじやんになっっている俺はなんとかして金を稼がねばと考えた結果、一つだけ短時間で大金を稼ぐ方法が見つかった。決して褒められる訳じゃないが致し方ない。

「ストレートフラッシュ」

SO カジノ!!

カジノ浸りのバカ共から奪って金を稼ぐ。

ん？『完全運なのにどうやって勝つの？』だって？ふむ、その答えはこうだ。

『クイックシルバー』…」

止まった10秒をフルに使って己の手札を良い物にすり替える。デッキをパラパラ見て望むカードを手に入れる。相手がイカサマしていようとも手札を交換すればいいだけの事だ。つまりディーラーとその他の相手が組んでイカサマしていようとも俺が勝つ。

「フルハウス」

「つ、ツープア…」

こうして俺のチップはあっという間に山を形成する。これを両替すれば手持ち50万が200万になった。

「ごつつあんでした、と」

そして大量の金を持ってトイレとか人気の無い所に行って誰にも見られない事を確認したら闇魔刃で部屋まで次元を繋ぐ。

「完璧だっ」

小銭を持って悦に浸りながらルンルン気分を外に出向くと門の前に皆が集まっていた。馬車が止まっていたようだが走り出してしまった。

「どうしたんだ？」

「ハチマンか、来てくれ！」

呼ばれるまでもなく皆の元に向かう。

「依頼？」

「ああ、アルベラ商会って所からだ、パントリーで石英を取ってこい、って書いてある」

「報酬がおかしなくらい依頼内容と釣り合っていないな」

「これからもご鼻屑にしてくださいって事だろう」

「するかバカめ、と唾を飛ばしたいが相手も生きる為に必死なのだろうからその位は目を瞑ってやろう。」

「で、報酬は？」

「100万ヴァリス」

「ひゃ、100万…!!」

余りの金額に息を飲むベルと命。

リルル力ならまだしもこの2人の組み合わせは珍しい。

「どう思いますか？ハチマン様…」

「直接会って話した訳じゃないが…本格的な取り引きはしないで、今回限りのお付き合い…ってことにしようか」

「言い方が誤解しか招きませんよ…」

「バカヤロー、ホントはもっと冷たいぞ？ちよつと話しかけただけで『もうやめて』なんて言われんだからな、アイツらキャラ捨てても俺が嫌だったのかよ…」

「ハチマン様…強く、生きてください…」

「俺の事はいいんだよ…さ、本業の時間だ」

「紆余曲折あったが俺達は100万ヴァリスの為に楽チンなクエストを受けてダンジョンに潜った。」

「やっぱこの感じだよな」

「バン!!」

新しく貰った3連リボルバーのケルベロスも一発でモンスターを粉碎した。少し腕が痺れるな…鍛え足りないな。

「凄まじい武器ですね…人に撃ってしまったらどうなるんです？」

「ん？晩飯がハンバーグになる」

うっ…と軽くええいたベルに冗談だ、と諭す。

どうやらベルと命さんは春姫さんを身請けしようとしていたらしい。その為にお金を稼ぐ方法を探していたらしい。後でこつそりベルの財布に200万入れてやろう、どんな顔するんだらうな。

「止まってください」

同じく先頭を歩いていた命さんが意識を切り替え、鋭く振り返る。

「ライガーファングが2体…」

「探知系の『スキル』か、便利だな」

「いえ、一度遭遇したモンスターでなければ感知できませんし…自分の心身の状況によつて効果も左右されます。過度に期待しないでください」

後方の横穴から現れたのは下層から上がってきたと思われるモンスターだった。リルカの判断だとイレギュラー、逃げがオススメだろうが…

「やるか」

「うん」

ベオウルフを構えてベルと並ぶ俺達に気付いたのか2体のライガーファングは咆哮をあげる。

「うおらアッ!!」

「ぜえやっ!!」

更に集まって来たモンスター達との戦闘に俺達は入った。

「足音…モンスターと、人です」

こつちに向かつて来る趣旨を命さんは小さく呟いた。ピタ…ピタ…と髪から滴る血を忌まわしく思いながら俺はため息をついた。

「ライガーファングの口の中に入るからこうなるんですよ!」

「腹を突き破ってきた時は心臓が止まるかと思っただぞ…」

「ハチマンは先頭の際はバーサーカーだからね」

意外とやる事えげつないし、と補足するベル。

「仕方ないだろ、なんか、戦うのを楽しむ自分がいるんだから」

「足音…近付いてきます」

「…!!」

またパスパレードか…と思いながら迎撃体制をとる。最近出番の少なかつたベオウルフのつま先をトントんと鳴らして準備する。

「引きましようー！」

戦う気満々だったがリリルカに出鼻をくじかれる。

もと来た道を逆走するが詰まってくる後ろの距離を肩越しに確認する。

広い十字路に出て一息つく。が、本当に一回呼吸するだけで終わってしまった。なぜなら俺達を挟むように他の冒険者達がモンスターを引き連れてきたからだ。

「二方向!？」

リリルカの悲鳴が響く。

「う、おおおおおおおっ!？」

「み、みなさん!？」

あまりにも多すぎる数のモンスターが雪崩込み、俺達は一緒にいたにも関わらず離れ離れになった。

しかも厄介なのはモンスターだけではなく冒険者達ですら俺達に牙を剥いたのだから。

「なんだ、コイツらー！」

色違いの外套を纏う冒険者はモンスター達を飛び越えて俺達に攻撃を仕掛けてきた。

「付き合ってもらおうよ…！」

その言葉と共に蹴り上げられた俺はモンスターの檻から弾き飛ばされた。

(分断された…)

通路に空いていた横穴の奥に蹴りこまれた俺の他にいるのは追撃者と同じ格好をした外套の冒険者だった。

「アイシャさん…！」

外套を脱いだその冒険者はこの前に歓楽街で襲ってきた戦える娼婦のアイシャさんだった。

「恨みを買った覚えは無いんだけどな…！」

「アイシャ…！アイツだよ！カイル達をやったのは！」

どうやらあったようだ。記憶を辿って身の覚えがないか探ってみると一つだけあった。

「ああ、あの夜のか……」

「お前のせいだな……！カイシルはっ！二度と立てなくなったんだぞ！」

「え……」

確かにボコボコにした記憶はあるがそこまでやった覚えはない。しかし相手は涙目だ。もしかしたら後遺症とか残ってしまったのかもしれない……。

「ガッ……！」

思考の海に溺れていると後ろからとんでもない打撃を受ける。

「騙されたなッ！バカめ！」

「テメエ……つら覚えたからな……！」

後頭部にクリーンヒットした為、意識が朦朧とするが一矢報いる為に1発殴ろうと近付くがさせまいと拳や蹴りのリンチに会う。

（気絶オチなんて……サイテー……）

暗転、それから先何があったのか俺に知る術は無かった。

#35 霸王

ピチヨン…ピチヨン…

滴る水滴の音で死んだように気絶していた男、ハチマン・ヒキガヤの目が覚める。

チャリ…

その音で察するに両手が鎖で繋がれているようだ。

「捕まった…!?!」

隣から驚愕の声が響く。重い頭を横に向けると彼と同じく鎖に繋がれているベルと視線が交差した。

「ベルか…」

「ハチマン大丈夫!?!」

「ああ、平気だ」

我慢出来るレベルの頭痛しかしらない為平気だと伝える。

辺りを見回すと、カビのような臭いを漂わせたその空間は窓もなく、壁に作り付けされた魔石灯が光っていた。室内には鞭、鎖、蠟燭、足枷に手枷、棘のついた棒。まるで拷問部屋を彷彿とさせる道具が転がっていた。

「あの時を思い出すな…」

ヘファイストス・ファミリアの落ちこぼれ鍛冶師達に拉致されて言われのない拷問をされた事を思い出す。

剥がされた爪、折れた指、焼かれたハンマーで殴られた顔、憎たらしい彼らの笑う顔、焼かれたレーザーアーマー、頬を引つ掻き回す冷たい風。封じられていた記憶が音を立てて頭を支配する。

「ふっふっふっふっふ…」

「ハチマン…?」

「頭ん中だよ…俺が話しかけてくるんだ、『お前は誰だ』って…俺なのに何言ってるんだよ」

「ダメだハチマン! 気をしっかりして!」

「話す事なんて何も無い…何故なら皆を巻き込みたくないから…」
「え?」

「やつとできたかぞくなんだ…迷惑なんて掛けられない…何も貰えなくとも…」

「……………」

「ごめんなさい…俺のいた世界はここほどキレイじゃない、こと争い、殺し合いに関しては誰よりもエキスパートなんだ…よ」

そう、比企谷八幡はオラリオに来てから苦しみつばなしだった。今は殆ど気にならないが自身の腐った目を避難される事、今までの文化とオラリオの文化とのギャップを埋める為にエイナの元で猛勉強。無意識に家族に尽くすために炊事家事洗濯を担う。そこまでなら平気だったが…度重なる戦闘での負傷、日本とは違いドストレートにやってくる人間の悪意と何も知らないバカな神のイタズラ。帰郷しても同郷の知り合いを殺す羽目になる。

凄まじいストレスが彼に降り掛かっている。戦闘で発散していたそのストレスも今回のアマゾネス達、特にフリユネとかいうヒキガエルが引き金で爆発したのだ。

「……………」

目の光が完全に消え、ブツブツとどこかに向かって喋り続けるハチマン。今すぐにも抱きしめてやりたいベルはその様子を繋がれている故に出来なかった。

「ゲゲゲゲッ!!目が覚めたようだねえ」

「ッ!!」

闇の中から現れた醜悪な巨女。ベルはそのショックから気を失いそうにもなるが隣のハチマンの分頭張ろうと意識を保った。

「ここはアタイだけの愛の部屋でねえ… ダイダロス通りが隣接している影響でホームの地下にはこんな秘密の部屋と通路があるのさ。アタイは気に入った男はいつもここに運んでるのさあ、ここはあの不細工共にもイシユタル様ですら知りはしないよお」

ここに誰も来ない事を確認して絶望するベル。

(考えるベル・クラネル！何か打開策はないのか!?!ハチマンならどう切り抜ける!)

鎖を揺らし、脱出を心見ているがびくともしない。

「無駄だよお！その鎖はミスリル製、何重も巻かれれば上級冒険者だろうとすぐには壊せない。魔法を使えば手首ごと吹っ飛ぶから下手な事は考えないのが身のためさ」

「クツ……………」

「さてどう犯してやろうか……………アア？」

ベルの下半身を眺めたフリユネは舌打ちをする。

「これだからガキは……………しょうがない、精力剤を持ってくるかア」

そう残して部屋を後にするフリユネ。

「逃げなきや……………今の内にツ!!」

死に物狂いで束縛を解こうとした。その時——ぎい、と。

「は、早いっ!!」

再び鉄格子の開く音がなった。早過ぎる再来に絶望していると人影は奥から部屋に入ってくる。もう終わりだ、と絶望に沈む視界に映ったのは狐の耳と、金色の尾、鮮やかな着物を纏う彼女は現れた。
「春姫……………さん？」

フリユネの出入りを過去に目撃していた彼女はここにベルとハチマンがいる事を推察し、忍び込んできたのだ。

「ヒキガヤ様……………」

「……………」

虚ろで焦点の合わない目は春姫の方を向いても変化は無かった。

「その……………ハチマンは……………心が……………」

「すみません、私のせいで……………」

「そんな事ありません！その、ハチマンは過去にこういった目に合つて……………トラウマになって……………」

一通りの説明で春姫の誤解を解く。動けないハチマンをベルが背負う。

「さ、早く……………ここから離れましょう」

「はいっ」

ハチマンを背負ったベルは薄暗い道を進んで行った。

『俺のタダイマはここじゃない』

4人だけの保健室で俺は家族だった物にそう告げる。

『雪ノ下…お前を殺す』

かつての憧れに俺は剣先を向ける。

『残された人たちの明日を…』

数少ない理解者を犠牲にして俺は明日を繋いだ。

『俺はハチマン・ヒキガヤ…特に何者でもない』

今になっても俺は自分が何者かが分からない。

『嫌な事、どうしようもない事があつたら逃げてもいいんだ』

あの夜、ベルに言った。俺も逃げていいのかな。

『絶対追い抜かして吠え面かかせてやんよ』

どこぞの狼に誓った。

『もつと…もつと力がある。誰にも負けない力が』

アラストルに頼んだ、悔しさをバネにした。

『ありがとう、お兄ちゃん！』

小町ではなくベルから言われた。結構気に入っていた。

『今すぐ剣を降ろしなさい。まだ今なら歯止めは効きます』

ごめんリユーさん、俺の手、汚れちゃったよ。

俺を中心に周りに浮かぶ光る泡のような記憶。辺り一面の闇で輝くそれはまるで空っぽの俺にはコレしかないと表しているようだった。良い物だけでなく悪い記憶もある。

あれ？何か足りない…

俺を突き動かした何か…この身をそこまで至らしめた決定的根拠。いくら思い出そうとしても頭に何も浮かんでこない。分からない…いくら考えても分からない。

『ゴミイちゃん』

『あんななんか産まなきやよかった』

『小町一人いれば良かったのに』

違う…！

これは俺の欲しい答えじゃない…

【もういいんじゃないのか？】

声がする。目の前に立つのは下に向かって曲線を描く大きな角が2本あり、全体的に黒く歪な人形をしており、その目は紅く光る悪魔が立っていた。

アンタは？

【お前が死ななかつた原因、そして全ての元凶】
分かりやすく説明してくれない？

【できてたらとつくにしている、今日は誘惑しに来た】
誘惑だと…？

【もう充分戦つただろう…休んでもいいんじゃないのか？】
や、休む…？

【お前の仲間のベル・クラネルも言つてただろ】
…それも、そうかもな

【実際お前はよくやった…もう良いだろう？】
ソレは俺に手を差し伸べてくる、その手を掴もうと手を出す。

【どうかしたのか…？】
俺はそれを両手で掴んだ、肯定ではなく、否定の意味で。手を取ればどれ程楽になれるだろう、そんな思いを精一杯振り切つて。

ゴメン、そういう訳にもいかないんだ…まだやり残した事がある。約束…そう、約束を果たしてない。嘘つき呼ばわりはされたくないから

『誰もが到達し得ない境地へ！』

『僕は英雄になりたい、ハチマンは？』

『俺は…愛と誇りと力への探究心を満たす』

『欲張りだね』

『うっせ、良いだろ？別に』

子供のように語つたその記憶が闇の中から眩く光ながら現れる。これが、俺の戦える理由だ。

【幼子の様に簡潔で大きな夢だな】
でもさ

【それでいい】それがいい

ガチャリ…と後ろの方で大きな扉の開く音がした。全部開くのではなく半分くらい…なんとも中途半端なんだろうか。

春姫よりイシユタル・ファミリアが何をしようとしているのかを聞かされる。春姫の魂を殺生石と呼ばれる魔道具に封じ込め。それを砕き、妖術とまで謳われる狐人の魔法を自在行使できる破片を量産。——その力を行使してイシユタルが目の敵にしているフレイヤ・ファミリアを壊滅させる計画だ。

そしてそれを知ってしまった事をアイシャとその他のアマゾネスにバレて交戦、その際にハチマン・ヒキガヤは囚われる。戦況を見て逃走を測ったベル・クラネルとヤマト・命。囚われたハチマンは二人を誘き出すための餌として春姫を贄にする為の祭壇付近に放置されている。縛ったりしないのは儀式に大忙しなのと廃人故に抵抗はないだろう、という油断から来ている。

餌があるうと無かるうと関係なくベルと命は乗り込んできた。サミラという戦闘娼婦との死闘、ベルはアイシャとの死闘を繰り広げている。しかしその間に何者も割り込んで参戦することはなく、フリユネもその様を眺めている。

「サイシャ、春姫を殺りな」

儀式剣を握った娼婦が頷き祭壇へと登っていく。祭壇の横で伸びている廃人を目にも止めずに。

「や、止めろー！ーッ！」

命の悲痛な叫びを他所に娼婦は剣を振り上げる。春姫はどこか悲しげだがそれでもいいのだと諦めの目をしている。

「ふッー——！？」

その剣を振り下ろすも刃が春姫に届く事は無かった。何故ならその手首から先が無くなったからだ。

「あ、ああああッ!？」

叫ぶ娼婦の首を掴んで祭壇から蹴落とす影が一つ。

イシユタル・ファミリアがホームの屋上故に冷たい風が吹く。闇色のコートをはためかせてその影は祭壇の上に、春姫の前に立っている。

「あ、あ……」

「春姫さん、大丈夫ですか？」

さつきまで虚ろな目をしていた彼は優しく涙を浮かべる囚われの春姫に語りかける。雲で隠れていた月光が影を照らす。

「どうして…」

「理屈なんていいんですよ…知った人が困ってるなら助けないと、おちおち寝てられないんでね」

ほろほろ、と涙を流す春姫。彼女に向き合っていた影は後ろに控えている娼婦達に向き合う。

「さてと？…どうして春姫さんがこんな事になってるのか俺は知らない…本当なら身請けなりこつそり拉致るなり考えてたけど…殺すつてんなら貰つても良いですよね？」

口端を吊り上げ、ニヤリと笑ってはいるがその目は殺る気満々な目だった。腕を切り落とした闇魔刃をしまいベオウルフを装着する。

「来い、立てなくなるまでやってやる」

「ツ…：相手はレベル3ただ一人！数で押せー！」

フリユネは危機感を覚えたのか攻撃を仕掛けに行かず、他の娼婦達が襲いかかるのを眺めている。

「レベルなんて所詮数字…そんなので俺を計られちゃ困るな。だって俺数学嫌いだし」

祭壇に一歩足を登壇した先頭の娼婦の顔面に重い一撃を食い込ませる。そのまま吹き飛ばさずにグリグリと拳をねじ込み重症を負わせる。鼻血をボタボタ流すのを見た彼はやっとその拳を前に突き出す。

「らアツ!!」

どこかに飛んで行ったその娼婦を他所に次から次へと娼婦達に殴る蹴る等の暴力の限りを振るう。

「そよ風と共に彼方へ！ジ・ゼーカー！」

一人の戦闘娼婦の魔法でハチマンの体は宙を浮き祭壇たる屋上から落とされる。

「『やった！』なんて思ってたら勘違いだぞ」

ハチマンが落ちたと思われる所から紫の腕が伸び、適当な娼婦を5人掴む。

「このッ！」

「離せッ！」

なんて喚いてるのを聞きながらその腕は彼女達の体を頭から壁に突き刺す。丈夫な冒険者だからこそ出来た芸当だ。一般人でやったらどうなるかは想像に任せる。

ぐったりとした娼婦の下半身を踏み台にベオウルフを装着したハチマンは祭壇へと飛び移って戻る。ゴツゴツとした足が背中や腰骨を容赦なく踏み躪るがそんな事を気にしていない様子だ。

「鬼畜：私達を人と見てないんだ」

「家族を殺そうとしてる奴らをどう人と扱えと？」

続きだ：と吐き捨てハチマンは次々と娼婦を始末していく。

「残るはアンタだな：クソガエル」

「ッ!!」

頬にこびり付いた血を拭いながらゴミを見るような目でフリユネに死刑宣告をする。

「ぜああああああッ！」

「はああああああッ！」

命とベルの戦局を見守っていても直ぐに意識を切り替えフリユネに殺気を放つ。

「このオツ！糞ガキがあああッ！」

追い詰められた獣の最終手段は全身全霊を持って敵を殺す事。今のフリユネは格下だが確実に脅威であるハチマン・ヒキガヤという狩人に死の宣告をくらって正常な判断をしていないのだ。

「早いけど：ダメだ」

（バージルは言っていた、『敵をよく見ろ』と）

必要最低限の回避でフリユネの大ぶりの攻撃を避ける。

「ほらよッ：と」

（ダンテは言っていた『柔軟な思考を持って』と）

千葉でパフェをかつくくらいながら語り合ったのを思い出しながら飛び上がりフリユネの後頭部に一撃踵を入れる。

バンッ！

地面に着地するまでの滞空時間に懐の銃を抜きフリユネの両肩を撃ち抜く。

「ぎゃあああああああああ!!」

フリユネの断末魔が夜空に響く。

ダラン、とぶら下がるその腕は二度と使えない事を意味していた。

「もう、いいだろ…」

カチャリ…とルーチェとオンブラにポーチに入っていたモジュール、『ランページ・モジュール』を付ける。モジュールを通して赤く発光しているそれは誰が見ても危険だと分かる。

「ま、待っ……」

「あばよ」

最期の言葉を聞かずに引き金を引く。

激しい轟音と光と共にフリユネは姿を消した。

「ハチマン!!」

「ハチマン殿!!」

ベルはアイシヤを、命はサミラを撃破し、ハチマンの元へ駆けつける。今まで精神崩壊していたのが嘘のようにピンピンしていたからだ。

「心配かけたな」

「もう、大丈夫なの?」

「ああ、俺は平気だ…命さんは?」

「自分は身体中が痛いです…帰って一風呂入りたいです」

「積もる話もあるだろう、春姫さんと入るんだな」

「っ!!」

ビクン、と体が跳ねる春姫。

「私は…娼婦です…」

「知ってます」

「この身体は汚れきっています」

「知ってます」

「こんな私を…連れてってくれると言うんですか…」

「生憎ここに英雄なんていませんよ、卵ならいますけどね」

ベルの頭をガシガシと撫でながらハチマンは答える。

「さ、お前達は下にいる皆と帰れ」

「え…ハチマンは？」

「最期の一仕事だ」

ウイイイイイン…

下から何かしらが登ってくる音がする。ギルドの昇降機のような音だが規格が違いすぎる大きさだ。

「来たか……」

「一体なんですかっ…」

「悪魔達の住む世界…通称『魔界』の三大派閥が一角…アルゴサクス」
祭壇の中央が開き下から赤々とした光が登ってくる。

「イシユタル・ファミアリアは保険を掛けていた…春姫さんをどう利用するかは知らないが追い詰められた時の最期の切り札を隠していた」
そして祭壇の中央に姿を現したのは真っ赤に燃えている人型のナニカだった。背中には二対の羽、天を指す二本の角。その有様は神々しきすら感じる。

「イシユタルの本気の魅了に操られてる…」

「ベル！命！ハチマンっ!!」

「大丈夫ですか！」

すると階段を登ってきたヴェルフとリリルカだけでなくヘステイアまでやって来た。

「なんだ…こいつ…」

いまだ微動だにしないアルゴサクスにヴェルフが絶句する。リリルカは目の前の死を体現した存在に絶望感すら覚えている。

「取り敢えず合流だよ」

ヘステイアの指示によりベルの元にやってきたヴェルフ達。

「神様…春姫さんを安全な場所に。リリルカ、持つてるポーション全部ベルと命さんとヴェルフとリリルカで配ってくれ」

「は、はい！」

テキパキと均等に回復アイテムを配る。

「ハチマン…ありやなんだ？」

「俺も聞いた事しかないが『霸王・アルゴサクス』：悪魔の中で三本指に入るくらいヤバい奴だ」

「そんな奴がどうしてここに…?」

「どーセイシユタルがアルゴサクスの繭を地下に仕舞って育ててたんだろう」

ハチマンの解説にどうしてそこまで知っているのか不自然に思っていたヴェルフだがその思考は近くから聞こえる声に遮られた。

「やってくれたな…ガキ共…よくも我が悲願を…!」

「はっ!!子供を犠牲にする勝利なんて勝利とは言わねーんだよ…くそばばー」

「なっ…!我を愚弄するか!」

「バカに馬鹿つつつて何が悪いんだよ…ヴあくゝか」

「ぐぎぎぎぎぎ…アルゴサク!!手始めにこの小僧を殺せ!!」

!!

指令を受けた直後思い出したかのようにアルゴサクスは動き出した。神様と春姫さんの避難はまだ済んでいない。

「やるしかないか…皆、付き合ってくれるか?」

「…勿論!!」

待っていたのか即答するファミリアにハチマンはこんな状況でも幸福感を覚えた。

ヘステイア・ファミリア

VS

アルゴサクス・ザ・デイスペア・エンボディード

立ちほだかる絶望とそれに抗う人間の戦いの火蓋は切って落とされた

#36 霸王と俺と+α

「ゴアアアアアッ！」

「うおラアアアアッ！」

激しい戦闘が繰り広げられていた。

アルゴサクスの炎の剣とハチマンのフォースエッジの激しいぶつかり合い。

ハチマンの背後にいる魔人も彼の行動に合わせて攻撃をするも流石『霸王』。フォースエッジを左手の剣で、魔人の攻撃を右手の剣で捌いていた。

ヒュン…

更には瞬間移動すら使うアルゴサクス。攻撃しては離れるヒットアンドアウェイである。

「ちい…ッ！」

ガガガガガガッ！

すぐさま二丁拳銃に持ち替えてアルゴサクスを乱れ打つハチマン。全弾命中するもそのダメージは霸王故に微々たるものだった。もしこれが無強化の銃だったら着弾する前に蒸発していた所だろう。

「オオッ！」

そして太陽のような翼をはためかせると熱光弾がハチマンに向かって飛んできた。そしてそれを横に転がりながら躲す。その際に両手の銃に力を溜める。

「これならどうだ…!!」

魔力を込めた射撃、チャージショットと後方に控えさせていた幻影剣を同時に発射するも翼でガードされる。

「ガードしたって事はダメージが通じるのか…？」

そう考察しているうちにアルゴサクスは両手の剣をハチマンに向けてその体を高速回転させながら突撃してくる。それもローリングで躲すも厄介な事に瞬間移動で回避した先に飛びその攻撃を強制的に当ててくる。

「ぐおおおおおッ!!」

ギルガメスを眼前に展開するもその威力と熱波によって押されてその体は宙を浮き、オラリオ外まで押し出される。

「ハチマンッ！」

辛うじて聞こえたベルの声に返事をする余裕はなく防御に専念するしかない。

ミシッ…ピシッ…

いや音が聞こえたハチマンは咄嗟にクイック・シルバーで時を止める。止まった時間の中でも重力は働き、ハチマンだけが落ちる。

「ヒーロー着地ッ！」

鉄の男宜しくカツコをつけて着地するも両膝と拳に痛みを感じて『やるんじやなかった』と後悔する。

「やるな…人間」

真つ赤な光を発しながらソレは確かに喋った。

「喋れんのかよ、アンタ…。てか操られてなかった？」

「神風情に操られるなど悪魔の恥晒しである。この程度の演技、朝飯前だ」

「演技派悪魔とか笑えねーよ…」

「人間、俄然貴様に興味が沸いた。その出で立ち人間は人間のそれだが身に秘めているのは我らに近い」

「……………」

「このまま操り人形であるのは私も遺憾だ…故に人間、私をモノにして見せろ」

「は…………？」

突然何を言ってるんだ…コイツは。

「本気でかかって来い…そして奪い取れ」

「……………分かった」

だがきつとやるしかないのだろう。

奴も本気だ。

ならばこつちもそれ相応の態度で望まなくては。

「ふう、やっと終わりましたか…」

【豊饒の女主人】、そこに働くエルフのウェイトレスのリュー・リオンは最後の団体客を見送り一息つく。

「ん？」

ゴオオオオオ……!!

ふと空を見上げると空に走る炎があった。その炎はオラリオの壁を越えて外に出るとすぐ近くに降り立ったように見えた。

「一体あれは……」

元冒険者としての嫌な予感がする。嘗て仲間を失った時のようなとてつもない程の嫌な予感が彼女の神経に走った。

タツタツタツタツ：

「クラネルさん……？」

激しい足音のする方を見ると【豊饒の女主人】常連客のベル・クラネルが滅多に見せない表情で南門まで走っているのを見掛けた。

(いない……)

いつも彼の隣に居るはずの彼が居ない。最近どこかぼーつとしていた節があったが何をすることも近くにいたはずだと彼女は認識している。

そして嫌な予感は更に加速していった。ベルのあの表情はハチマンが拷問を受けた時に必死で探していた時と似た様な顔をしていた。

「まさか……」

ベルを追うリユー。レベル3である彼に追いつくのは容易い筈だが中々追いつくのに時間を要したのは彼の【俊敏】のステータスが高い事とそれ程焦る要件なのを表していた。

「クラネルさん！」

「リユーさん!？」

「何かあったんですか？」

「ハチマンが!!」

それだけで彼女がベルについて行き彼の安否を確認する必要が出来た。

(どうか)無事で……)

今はそう祈るしかない。

「ハチマン…?」

「ハチマンさん……」

門番のバン・モンさんに事情を説明して快く門を通らせてもらい、激しい爆音と熱光を発していた場所に向かう。

そこは地獄だった。辺りの地面には夥しい量の血が撒き散らされ、事態の深刻さを物語っている。恐らくハチマンが防御に使ったのか地面から生えたままのギルガメスの壁が乱立していたり倒れたりしている。

「よお……待ったか…?」

その中央に立つハチマン。髪の毛はやはり銀色に染まりきり、コートは所々焦げ付いているし穴が幾つか空いている。吐血したのか彼の口の周りには血がべっとり付いている。体からは魔力を纏っていたのか黒くおぞましい魔力の闇、否、深淵が漂っていた。

「あのモンスターは?」

「……」 V

ただ黙って左手でVサインを作るのは勝利か平和を意味していた。

「ハチマン…その剣は?」

彼の手に握られていたのはフォースエッジでも闇魔刃でもリベリオンでもなかった。人の身の丈程ある刃には剣と言うには余りにも禍々しい肉が付いていて謎の宝玉が埋め込まれていた。

「これは…俺の魂だよ」

そう言うと言はれは光り輝いた。光が収まる頃にはその剣は消えて無くなり、フォースエッジとハチマンが常に身に付けていたネックレスがその手に握られていた。

「リユーさんが居ることに敢えて突っ込まないけど…つかれた」

そう言い残してハチマンは地面に思い切り倒れ込んだ。

(いつものハチマンだ…)

どこか悲しそうにしていたのはベルの勘違いだったのだろうか。

「そんな所に寝てては首を痛めますよ」

そう言うと言はれ彼女は彼の頭元に座りハチマンの頭を強引に自分の膝

に乗つけた。

「皆が来るまで時間があるので待ちましょう」

「はい」

軽く返事を返したりリユーは既に寝静まったハチマンの頭を撫でる。

あれから2日が経った。

気が付けば入院させられていたハチマンはベルと共に2日も寝てしまっていた様だ。

「なあベル…大切な話がある…」

「た、大切な話？何？」

ベッドから起き上がりドアの方にひたひたと歩いていく。

「誰にも聞かれたくない話だし…」

「!!」

カチャリ

入院中故にか手袋を外している彼の手を見るベルは何故か顔を赤らめていた。

「誰にも見られたくない」

シャツ、とカーテンを閉める。そして部屋の隅から隅を魔力で結び境界を張る。その余りにも嚴重すぎる警戒にベルはやつと見当違いの期待をしていた事に気付く。

「この前のアルゴサクスの戦闘で俺の体がおかしくなったんだ」

「え?」

ハチマンが目を閉じると彼の体から紫の魔力ではなく黒い霧のような深淵が彼の身体から溢れ出る。千葉での暴走した時とは違い彼がコントロールしているようだ。

「わぁ……」

「ツ!!」

その深淵は彼の体を包む。

暫くするとその闇は晴れ、姿を変えたハチマンが姿を現した。

人の形はしているもののその正体がハチマンだという事は誰にも予想すると事は不可能だ。

真つ黒な体に二本の角、背中には大きな二対の翼。頬まで裂けた口に真つ赤な目。その姿は悪魔のそれだった。

「ハチマン…それって…」

「あの時、アルゴサクスとの戦闘で成れるようになった。でもまあだけ、なれるのは3分だけなんだけどな」

淡い深淵と共に人の姿に戻る彼。ベルは彼のあの姿に瞳をキラキラとさせていた。

「カツコイイよ！ハチマン!!」

「ふつーそこはもつとこう…いや、お前に普通のリアクションを期待してた俺がバカだった」

コメカミに手を当てるハチマン。別に非難してほしかった訳ではなかったが余りの予想外のリアクションだったからだ。

今までは自身を強くする為の引き金トリガーは自らの体を悪魔の姿に変える【デビルトリガー】へと進化した。

「さて、そろそろ退院するぞ」

「うん！」

全快した趣旨をこの病院を経営する【ディアンケヒト・ファミリア】のアミッド女医に話して軽く検査した後退院を言い渡された。

「シャバの空気がうまいな」

「刑務所にいた訳じゃないんだから…」

タハハ、と笑うベルを連れて歩く。アルゴサクスとの戦いでダメになっちゃったコートコートを新調する為だ。

「あ！ハチマンさん！待ってました！」

「すみません、何度もダメにしてしまつて…」

「いいんですよ、最後まで着てもらった服達も本望でしょう。クローゼットに入れられっぱなしの方が嫌がると思いますからね」

「そう言ってくれると助かります…新しいコートなんですけど、これを参考にできませんか？」

そう言い手渡したのはアルゴサクス戦でボロボロになったネロのコートだ。

「これは…見た事のないコートですね」

「これを参考に新しいコートって作って頂けませんか？前回のデザインを上手くこれにトレースするような感じで…」

「ふむふむ…分かりました。結構時間を取らせてしまうので2、3時間したらまたいらしてください」

分かりました、と告げて店を出る。

「ベルも何か揃えたいのあるか？」

「ううん、僕は特にないけど…そうだ、ポーチを新しくしたいから「ファイストス・ファミリア」のお店に行かない？」

「分かった、俺も手袋ダメになったしな…」

ボロボロの手を忌まわしそうに見るハチマン。努力の証であるはずのその手はあまり人前に出さないのは何故だろうか、とベルは不思議に思っていた。

「いらつしやいませー」

気の抜けた挨拶に迎えられてベルとハチマンはバベルにてヘファイストス・ファミリアの営んでいる装備品店に入った。

「どんな手袋がいいか…」

ポーチを選んでいるベルを他所にハチマンは新しい手袋を選んでいた。

「やっぱり頑丈な革の手袋がいいんだよな…」

今まで使っていたのはバベルの受付嬢であるエイナ・チュールからプレゼントされたのを修繕に修繕を重ねて使っていたが今回の戦闘で溶けてしまい使い物にならなくなってしまったのだ。

（エイナさんには悪いことしたな…）

内側が柔らかくなつていて剣を振っても手に痛みを感じない黒い革の手袋を手に会計に進む。

「4万ヴァリスになります」

「はい…」

「丁度ですね、ありがとうございます」

新しい手袋を手にはめて満足した様子の子のハチマン。そんな彼に向かう影が一つあった。

「よっ！小僧」

「アラル：どうしたんだ？」

「アイツを殺った祝いだ、プレゼントしてやんよ」

「そう言いハチマンに渡したのは1冊の古びた本だった。表紙には『激熱！隣の奥様く愛・おぼえていますか』と書かれている。」

「官能小説じゃねーかよ……！」

「オラリオに来て溜まってんだろ？オカズを提供しただけだ。これに入れてけ」

「紙袋：はあ、どうすりやいいんだよ……」

「絶対部屋で読めよ！捨てるんじゃねーからな！……それと、ダンジョンに異変がある……気いつけろヨ」

「んじゃ、と残してアラストルは去っていった。」

「ハチマン！手袋買った？あれ？その紙袋は？」

「いや、気にしないでくれ。ベルの方は大丈夫か？」

「うん、バッチリ買ったよ！そろそろ時間だしコートを取りに行かない？」

「ああ」

今後の探索や戦術とかを話し合って彼等は新しいコートを取りに行った。

「ハチマンさん！出来上がりましたよ！」

濃い紫を基本に血管を彷彿とさせる赤い刺繍、肩にはお馴染みと化した白いオオアマナの刺繍。黒のシャツとズボンの上にそれを羽織る。

「うん、似合ってるよ！」

「最高です!!」

「あ、ありがとう……」

代金を支払いベルとホームに向かう。

「ただいまー」

『『おかえりなさいー!』』

l e p i s o d e o f s u p a d a

「はあッ！」

「やあッ！」

「……………」

双子である息子二人が私に向かって木刀を振るう。それを軽くいなして両者に足を引っ掛ける。

「うわあ!!」

「中々…良くなったな」

転んで汚れた息子二人を抱えて家の中に入る。廊下を歩き風呂場に向かい洗濯カゴに汚れた服を入れて風呂に入らせる。

「ダンテの神は母さんに似たんだな」

「へっへー、サラサラだぜ！」

シャンプーを泡たてガシャガシャと頭を洗う息子を見ているともう一人がやって来る。

「お父さん…俺は？」

「バージルは私に似たな」

「そ、そう？やたッ…」

偶にワックスで私の髪型を真似しているのを微笑ましく思い出しながら3人で身を清めてリビングに向かう。

「母さくん！俺の髪って母さんに似てるんだって！」

「そう、良かったじゃない！」

ダンテを抱き上げる妻。引っ込み思案なバージルは甘えるのが苦手だからその意図を汲んで私もバージルを抱き上げる。

「俺はお父さんと似てるんだよ！」

「そうね、バージルは本当にお父さんと似てるわね」

優しくバージルの頭を撫でる。

食卓に並べられた料理に2人は目を輝かせ椅子に座る。

「この子達の将来が楽しみだ」

「ダンテはどんな人と結婚するのかしらね…」

「意外とだらしなからしっかり者の人だといんだけどな」

「バージルは引っ込み思案だからグイグイ引っ張るお姉さんみたいな人がいいわね」

残された私達も席につき料理に手をつけ始める。

「そうなる」と孫はどんな性格になるんだろうか」

「貴方と似て紳士な人になるのかもしれないわ。人に誤解されやすいけど心はちゃんと温かい人に……」

「そうなるといいな」

今日も4人の平和を噛み締める。

悪魔の身だがこんな日が続けばいいな、とつくづく思う。

#37 恋と愛の悩みと国家転覆

「らっしやい…」

チリンチリン…と鈴の音が来客の合図だ。俺はカウンターに座り万が一客が粗相をしないか目を見張る。

そう、俺は今バイトをしている。働いたら負けを掲げる俺が何故働いているかというと……………

ーカフェ【ポレポレ】ー

『代金1万5000ヴァリスだよ』

『はいはい…やべ、金ねえ…』

ヤバい…コートと手袋代で財布の中が氷河期だ。家にはまだ貯蓄が…あ、ベルにイタズラでプレゼントしたんだった。

『アンタ…食い逃げは許さないよ』

『……………』

『アタシが立て替えてやるよ』

するとやって来たのはエルフの女性だった。

『助かりました…ありがとうございます』

『そんじや1万5000ヴァリス分働いてもらうよ、『亡影』さん』

『……………うす』

てなワケでその女性が営む【魔女の隠れ家】で働くことになった。

チリンチリン…

「らっしやせー…」

手元にある本を捲り読書に耽ける。どうせこの客も何も見ないで帰るんだ。

「ふむ、やはりここは品揃えが良いな」

聡明そうなお客が来たな、と思いつながらまたページをめくる。すると目の前のカウンターに他の客がやって来た。

「すみません、これ下さい」

「はい：合計2万ヴアリスです」

「ちよいとまけてくれませんかね」

「びた一文値下げする気は無い：悪いね、店長からの言いつけで俺の
一存じや値引きできないんだよ」

「ちつ：ほらよ！」

「ありがとうございます」

乱暴に金をテーブルに叩きつけて店を出る態度の悪い客。

「これとこれください：」

「ポケットに入れてる奴も出しな：5000ヴアリスだ」

「ごっ！5000!?3500ヴアリスじゃないの!?!」

「口止め料だ、なんならガネーシャ・ファミリアに突き出してやっても
いいんだぞ?」

「ぐぬぬぬ、やられた!!」

「まいど」

獣人の女の子はプンスカとした様子で店を出ていった。店に残る
のは俺とふむ、とか言つてたお客だろう。

「アルベラ商会：」

「!!」

「先日何者かにより襲撃されたらしい」

「それは：大変でしたネ：」

「前々から闇派閥との関わりがあると疑惑があつたが確証が無くてギ
ルドが燻っていたらしくてな」

「そう：だったんですか」

「被害者は商会メンバー全員漏れなく病院送り。重鎮に近づく程その
重症度は増していき一番酷い者は五感全てが奪われていたらしい」

「……………」

「キミだったんだな」

緑色の髪をしたそのエルフは俺に詰め寄ってくる。

「確かに俺ですよ：でも喧嘩ふっかけてきたのはあっちなんですよ？
その件に着いて問い詰めようとしたら手を出してきて：だから仕方

ないんですよ」

「だとしてもやりすぎでは無いのか？」

「俺は兎も角、家族に手え出すのがいけないんですよ」

「……………」

何故か黙るその女性、「ロキ・ファミリア」の幹部であるリヴェリア・リヨス・アールヴ、その人だった。

「家族を守る為か…ならば仕方ないな」

「そうでしょ？ だったら「だが」……………」

「コレは余りにもやり過ぎだ」

「……………」

「店主、このバイト君を借りてもいいか？」

すると店の奥に引っ込んでた店主はドタドタと走ってやってきた。

「リ、リヴェリア様！ どーぞどーぞ一日中貸しますよ！」

悲報、俺、貸し借りできる物だった。

てなワケで俺はリヴェリアさんに連れ出される事になった。

「俺ガネーシャ・ファミリアに突き出されるんですか？」

「いや、結果的に君がした事はいい事だ。突き出すことはしないよ」

取り敢えず首の皮一枚は繋がった様だ。

「少し君と話がしたくてね」

適当なカフェに立ち寄り端っこの人目に触れないような席に座る。

「私はカフェオレを、君は？」

「俺は今手持ちが無いんですよ」

「そういう訳にもいかない、奢るぞ？」

「俺は養われる気はあるが、施しを受ける気はありません」

「何が違うのか理解に苦しむが…彼にはカプチーノを」

俺の渾身の決めゼリフを無視されて施されてしまった。

「君はアイズとはどの様な関係なんだ？」

「どの様になって聞かれましても…よく分かりませんよ、他所のファミリアですから余り親しく接する事は出来ませんししませんし、かと言って無視する程関係がないと言えは嘘になります…結論よく分かりません」

言い終えたとリヴェリアさんは俺の瞳をじつと見つめてきた。まるで心を見透かす様に。

「そもそも人との関係はそう簡単に呼称出来ませんよ。同じファミリアだったら家族で済むかもしれないけど、自分が友達だと思っただらそうじゃなかったってケースがあるんですから。ソースは俺」

「……」
少し気不味くなり、置かれたカプチャーノをその視線から逃げるように飲む。

「君は人との関係に予防線を張るんだね。それ以上踏み込ませないために、その予防線を互いの距離の中央線にする為に」

「……」

「凶星かな……まあそれを咎める気はサラサラないよ。アイズとはそういう関係じゃないなら頼みやすいかな」

「……あ？」

「頼まれてくれないか？君に私の恋人になって欲しいんだ」

「……あエ？」

拜啓ベルよ。俺の心の声が聞こえますか？今俺はオラリオで一番の魔法使いに『恋人になって欲しいんだ』と言われました。俺はリヴェリアさんの事を何も知らないのに。

『愛』と『恋』は何が違うのだろう。

得意分野である自問自答を繰り返していたら一つの屁理屈が生まれた。『恋』には下に心、即ち下心があり『愛』は中心に心がある為、その違いは相手に欲情しているか思っているかの違いだ。

しかし恋人も愛人も情交はするだろう。よってこの屁理屈は屁理屈足り得ない。

女神イシユタルは気に入った男を魅了して力尽くで物にしていた。ならば彼女と同じく『愛』を司る女神フレイヤは？その眷属達は真剣に彼女を想い、彼女も彼等彼女等を想っているのだろうか。

そこで一つ疑問が浮かぶ。

果たして皆に等しく与えるのは『愛』と呼べるのだろうか。その体

を様々な神に委ねたのを『愛』と呼べるのだろうか。

一人それぞれの『愛』があるんだよ。

なんて頭がお花畑の人は言いそうだがそれぞれの『愛』がベストマッチするなんて虚数の彼方を探しても見つからないのではないのか？

「何を考えているんだ？」

「いや、『愛』って何なんだろうなくって思いまして」

馬車に揺られながら目の前に座る俺の『恋人』のリヴェリアさんは俺の顔を眺める。

「それは…私にもよく分からないな」

顎に手を当てて考えるリヴェリアさん。すると何を思ったのか彼女の額を俺の額にコツンと当てた。

「恥ずかしいか？」

「いや…急すぎてよく分かりませんよ」

「そうか、レフィーヤがよく読んでいると言う本には恋人達のことといったシーンがあつて両者共に赤面するのが定石だと記してあつたんだがな」

「フィクションとリアルを混合したらマズイでしょ…」

レフィーヤさんも何を読んでるんだか…まあ、個人の読書にあれこれ言う筋合いはないんだけどな。

「ていうか一々それで判断してたら俺は兎も角世の中の男子が卒倒しますよ」

「分かつてる、こういうのは君にしかしないよ、ダーリン」

「はいはい、そうしてくれると助かりますよ…は、は、は、ハニー」

「もうそろそろ緊張を解したらどうだ？」

「エルフの高名なお姫様と表面的には言え『恋人』になっちゃったんですから緊張しない訳ありませんよ。ていうか俺じゃなくても良かったんでは？フィンさんとか居るじゃないですか」

「フィンはパルウムの女性にしか興味が無い。それに私はフィンをそういう風に見れないからな」

「あくまで仲間は仲間止まりだと…」

パルウムにしか興味無いか…こりやテイオネさんの勝ち目がない気がする。というか家のリリルカが彼の毒牙にかからないか心配だ。

「じゃあベートとかは…」

「アイツにこれが務められると思ってるのか？」

「無理っすね」

あの人口悪いから何処でボロ出すか分かったもんじゃない。

「あとどれ位なんですか？リヴェリアさんの実家」

「この速度だと後3、4時間のはずだ」

事の始まりは一通の手紙だ。リヴェリアさんの親父さんから『恋人は出来ないのか』という趣旨の手紙を貰ったらしいのだが主神のロキがイタズラで『結婚の予定がある人がいる』と書いて出してしまったらしく、それを受け取ったリヴェリアさんの親父さんが紹介する席を設けてしまったと言う。バックレたいと言っていたが各国のお偉いエルフが集まるらしく引こうにも引けないらしい。因みにロキは酒を根こそぎ没収されたらしい。

「今更なんですけど俺ヒューマンなんですよ？大丈夫なんですか？エルフは排他的って聞きましたし、実際一部のエルフはそういう傾向がありますし」

「公衆の面前で差別をする様なエルフは居ないはずだ、ただでさえ他種族と共存していかなくてはいけない時代なのだから、もしそういった事をしようものならソイツの品性が知れる訳だ」

「つまり陰口言われ放題じゃないですか…や、慣れてますけど」

思い返せば消しゴムを貸してくれた女子に勘違いをしまし、新品の消しゴムをプレゼントしたらガチで引かれたんだっけ。はは…はあ。

「着きました」

問者対策でカーテンが閉められていた馬車の中に光が指す。外には森が広がり小鳥がチチチ…と囀っていた。

「マイナスイオンってこういう事か…」

「何をしてるんだ？行くぞダーリン」

今まで無視していたが俺達を出迎えたエルフ達に一礼してリヴェリアさんに着いていく。何故無視していたのかというと公衆の面前で差別やらなんやらはしないと断っていたがその視線に全ては込められていた。

「よくぞおいで下さいましたリヴェリア様」

「歓迎はいらないと言ったんだが…」

「そういう訳にもいきません、皆リヴェリア様のお帰りを待っていたのですから」

俺は完全に無視なんですね、聞いてた以上に陰湿なのは？ここにベリアル呼んでやってもいいんだぞ？呼ばないけど。

「そしてこのヒューマンが……」

「ああ、私の彼だ」

「ハチマン・ヒキガヤです」

「……かしこまりました。部屋まで案内させてもらいます」

嫌悪感の籠った目で見られるもリヴェリアさんと部屋まで連れたいかれる豪華なスイートルームのようなそこに俺達は案内された。

「では、2、3時間後にお呼び致しますのでそれまでお待ちください」

綺麗なカーテン、豪華そうなテーブル、大きいダブルサイズベッド。

最早歓迎されてるのかされてないのかが分からなくなる。

「どうだった？君から見たエルフは」

「別に、なんとも思いませんよ」

「そうか…少し外に出ないか？ここ辺りを案内したい」

「いいんですか？」

「ああ、じつとしても落ち着かないのは性分なんだな」

という訳でリヴェリアさんと共に外に繰り出す。森に囲まれているがその生活様式はオラリオとそう変わらず、貧困に苦しんでいる様子は無い。

「私のペットのユニコーンだ少々気性が荒いが懐くと可愛いぞ」

「おお、ユニコーン…かっけー」

スマホがあつたなら、と酷く悔やむ。

「ぶるるるるるる…」

「よおしよしよし……いい子だな」

「驚いた、この子がこんなな懐くのも私を除いてそういないんだぞ。君は動物が好きなのか？」

「好きというか……アラルン所の教会に馬が居るのでよく世話してたりしてるんでどこ撫でればいいのかが分かるんですよ」

それにニンテンドッグスもやり込みまくったから撫でスキルには自信がある。

「変形とかは……」

「する筈ないだろ……何を言ってるんだ」

「デスヨネー」

オラリオだからもしかしたら、とは思ったんだが……

「これはこれはリヴェリア様」

「貴方は……オシタランナ卿」

振り向くとそこには帰属風のイケメンが立っていた。その表情の裏にはとんでもない事を考えていそうな気がする。

「小鳥も囀る貴方をお目にかかれて光栄です。そのうす汚いヒューマンは何なのです？」

「私の恋人だ、余り悪く言うのは辞めてもらいたい」

「こ、恋人ッ!? 貴方ともあろう方がこんな男と!？」

「私の目に狂いがあるとでも?」

「め、滅相も御座いませぬ。失礼します」

カツカツ、と早歩きで去っていくオシタランナ卿。ド直球で批判するもんだからビックリしたよぼかあ。

「オシタランナ卿は少し離れた地の王子らしい。余りいい噂は聞かないがこの国にもある程度は輸出しているらしい」

「へえ……」

「殺るなよ? オラリオにも多少は口が聞くらいから君がどうなるかは計り知れない」

「勿論ですよ……家族に迷惑が掛かりますもんね」

別に小馬鹿にされたからといって怒りはしない。逆上すれば相手の思うつぼであり同じ土俵に立つことだからだ。

「リヴェリア様…国王様がお呼びです」

「分かった今向かう」

「ヒキガヤ様はヒューマン故、王室には立ち入れられません。申し訳ありませんがお待ちください」

「分かりました、じゃありヴェリアさん、また後で」

「…分かった、気を付けて」

王室とやらに向かうリヴェリアさんを尻目にこれから何をしようかと考える。部屋にいるにしろ刺客とかに狙われたら逃げられないしな…。

「失礼ですがヒキガヤ様はリヴェリア様とどこで知り合ったんですか？」

「ダンジョンですよ。思わぬアクシデントで死にかけた時に助けてもらいました」

「そこから今の関係に発展したと？」

「そう捉えて頂ければ助かります」

「最後になりますが貴方はリヴェリア様の事を愛していますか？」

「……………」

「…愛してられないと？」

「言わせないで下さいよ…恥ずかしいんですから」

「奥手なのですね…ありがとうございます」

残った伝令は足早に戻り、やはり俺一人残された。

「ぶるるるるるるるる……………」

「分かってるよ…分かってる…」

ユニコーンの目と鼻の間をカリカリと撫でる。

「探索…してみるか」

街を歩けば怪訝な目では見られるがオシタランナ卿とは違い声には出されない分精神ダメージは少なく済む。

街を少し離れると10軒位の規模の村があった。少し古めだが貧困ではなさそうだ。

「この木…爪痕がある。ここにも…モンスターか？」

その家の近くの木には深い爪痕が沢山付いていた。まるでナワバ

りだとアピールするかのよう。

「お兄さん…誰？」

「？」

玄関から顔を覗かせていたのはエルフの少女だった。

「怪しい人じゃないよ…って言っても信じないか」

「ううん、目は怖いけどお兄さん優しいそう」

トテトテとやって来る少女。金髪の似合う様子だが少し服に汚れが目立つようだ。

「この爪痕が気になってて…何か分かるか？」

「ここ辺りの村はレッドメイルのナワバリなの…」

「やっぱりモンスター…避難とかはしないのか？」

「大丈夫なの、オシタランナ卿が食べ物とか置物とかを運んでくれるから皆生活していける…少し足りなかったりするけどね」

「そっか……」

オシタランナ卿がね…意外といい所あったりするんだな。

「ここだけじゃなくてあっちの村にも寄付してるってお母さんが言ってたよ」

「へー…ありがとうな、取り敢えずここは危ないから家に戻りなさい」

「はーいー」

いい子だったな…と感想を抱きながら興味本位でその村へと向かってみる。そこもさっきの村と同じ規模で同じ状態だった。

「ここにも爪痕…」

爪痕の形が違う事から別のモンスターなのだろうか。結構近い所にナワバリがある為村がモンスター同士の抗争に巻き込まれないか心配だ。

「ごめんくださいーい」

コンコン、と目に付いた家を訪ねる。すると玄関から用心深く覗いてくるのは老いたエルフだった。

「なんだ…ヒューマン」

「ここ辺りの事を聞きたくて…」

「……入れ」

「お邪魔します」

気前のいいエルフなのだろうか、快く家に入れてくれる。オシタランナ卿の給付により水や食料はやはり潤沢しているらしい。

「ここら辺か…ヴァルスのナワバリになっていてな、下手に動くところにあるレッドメイルからヴァルスだと思われて襲われるかヴァルスがレッドメイルだと思って襲われるかの二択だ」

「ここにもやはりオシタランナ卿が？」

「ああ、水に食料、偶に変な置物を押し付けてくるけどな、助かってる」「置物？どんなのなんです？」

これだ、と渡されたのは粗く彫られたマトリョーシカのような置物だ。手のひらサイズで振るとカラカラと音を立てる。

「どうして置物を？」

物資ならまだ分かるが別に必要ないだろう。例えるなら被災地に千羽鶴を贈るのと一緒だ。食料だと思って箱を開けたらこれなんだからシヨックだろうな。

「オシタランナ卿の国の子供達が私達を思いやって掘ってくれたらしい。捨てようにも捨てられんよ、外は危険だからな」

「……………」

「リヴェリア様が恋人を連れて来たと聞いたがこれじゃ押められそうにないな…」

「…これ、頂いても？」

「構わないぞ…ていうか持ってってくれ」

家を後にして部屋まで向かおうとする後ろから殺気を感じた為身をそらすと鋭い爪が髪を掠めそうになった。

「あつぶね…」

茶色の体毛に覆われたビッグフットのようなそのモンスターが真つ赤な目で俺を見つめてくる。

「ヴァルスって奴か」

吠えて威嚇しようとした隙にフォースエッジでその喉元を突き刺し仲間を呼べないようにする。念の為に幻影剣も何本か刺しておく。

魔石を回収して再び部屋に戻ろうとすると草むらから赤い影が飛

び出してきた。赤いウォーシャドウのようなそれは三本の爪をカチカチと鳴らしている。

「赤い体…レッドメールだな」

コイツもまた仲間を呼ばない内に頭に幻影剣を何本も飛ばし剣山のようにする。

「エンカ率高いな…」

今まで両陣営とも緊張状態にあって迂闊に行動出来なかった筈なのにこの変わり様…ここら辺を歩いている時と今を比べて変わった物といえば時間帯…は30分でここまで変わるのもおかしい。だとすると…心当たりは一つだけだった。

「まさか、コイツか…」

マトリョーシカのようなそれを眺める。一応魔力で包みその効果が発しないように気を付ける。

「ふう…」

ベッドに腰掛けて落ち着く。まだ魔力で包んでいるそのマトリョーシカを机に置いて懐から暇潰し…というか成り行きで入ってしまったそれを取り出す。

『激熱…隣の奥様く愛・おぼえていますか』

「……………リヴェリアさんが帰ってくるまでだ」

ズボンも下ろさずティッシュも横に置かず読んでみる。すぐそのドアが開かないうちに…zzzz…

深い闇の中、俺は俺と瓜二つの自分と対面していた。

『俺にとつての魔法とは？』

ー強い力、弱い自分を強い自分にする為のバネ。

予想されたら対応される。対応されたら攻略されるからだ

『俺にとつて魔法はどんな物？』

ー闇、暗い過去も辛い記憶も全部包んでくれる。…俺の身の丈に合ってるものだろう。

人を殺す選択肢がある俺に光だのなんだのは似合わない

『魔法に何を求める？』

―学習し、変化し、自分に見合った物に変換する
予想されにくくされてもそれを上回る力が欲しい

『それで終わりか?』

―もし叶うなら……俺は人を守る悪魔で在りたい。この身が人でなくなってるのならヒトではなく人を守る悪魔になりたい。家族も親しい人も知ってる人もこの手が届く範囲にいる人も纏めて助けられるモノで在りたい。

『それが答えなのかもな』

「zzzzzzzzzzうあ?」

いつの間にか眠ってしまってたらしく、顔の上に乗っかっていた官能小説をどけると目の前に腕を組み此方を見下すリヴェリアさんがいた。

「随分な物を読んでいたらしいな」

それは二重の意味で見下していた。蔑視と位置的な関係でだ。

「違うんですよ……これ読んだ瞬間急に眠くなって……」

「よんだら眠く?少し貸してくれ」

パラパラと官能小説のような本を読むリヴェリアさん。うーむ、なんか新鮮な光景だ。

「これは……魔導書?!どこで手に入れた?」

「アラル神父からある事の記念に……」

「ある事?」

「まあ、強敵というか怨敵を倒した記念ですよ……」

成程、と息を着くりヴェリアさん。因みに魔導書の残骸は燃やされた。どうやら内容はしっかりしてたらしい。勿体ないなあ。

「そういえば【ロキ・ファミリア】とアラル神父って仲悪いんですか?なんか険悪そうでしたけど」

「探索で死者というのはどうしても出てしまう。アラル神父はその亡骸を回収しては自身の墓地で供養する。そうしてる内に何故か一方的に嫌われてな」

「アイツ考えてる事分かんないですから仕方ないですよ。俺に教会の

管理を任せて姿はくらしめますし…」

「それは大変だな、暇があったら手伝うよ」

「まあ、その時は有難く甘えさせて貰いますよ」

隣でベッドに腰掛けるリヴェリアさん。意識してなかったが近いな…。

「そういえばこれは？」

「ああ、里を歩いていたら貰ったんですよ。何かのマジックアイテムらしいから一応魔力で包んでるんですけどね。所で王室で何か言われませんでした？」

「一通り予想してた事は言われたよ」

「あんな目が腐ったヒューマンなんぞ追い出してしまえ！とかですかね」

「オシタランナ卿が言ってたよ…全く、だからエルフのこういった一面は嫌いなんだ」

聞けば彼女は自分の知らない世界を見て回りたくて親友とこの里を飛び出したらしい。その親友の娘が俺とベルの担当アドバイザーであるエイナさんらしい。オラリオについたら半ば強引にロキにファミリアに加えられたらしいがいずれオラリオも出るつもりらしい。その後継者として教育されているのがレフィーヤさんの事。

「世界…か」

そういえば俺はオラリオ位しか外は行ったことないな…ここが初めての遠出先か。

「旅も中々悪くないですね」

「それが分かってもらえて嬉しい」

難しい事とか考えなくて済むし。

でも今は謎の置物と2種類のモンスターのナワバリ争いとオシタランナ卿の関係について考えなくてはいけない。

「そういえば今後の予定は？」

「明日の昼に君を含めた会食の予定だよ。気を引き締めた方がいい」

うつす、と返事してベッドに寝転がろうと思ったが近くのソファに寝転がる。

「私が無理矢理連れてきてしまったんだ、私がソファで寝るよ」

「いえ、俺ソファ以外で寝ると死ぬ病を患わってて…」

「さっきまで寝てたじゃないか…」

聞こえないふりしてリヴェリアさんに背を向けて寝る。魔導書を読んで寝ていたせいかもしれない。2、30分寝ようと努力するもの全然眠れない。

「スー、スー、スー」

「少し出掛けます、昼までには戻りますつと…」

書き置きを残して窓から外に出る。

静まった森は薄気味悪くてちよいとばかし恐怖心を煽られる。

「行くか……」

取り敢えず辺りを見渡して王室以外で豪華そうな建物を探す。ここに来て重鎮達が寝泊まりしてる場所がそこだろう。

「あれか……」

屋根から屋根を飛び移りそこに向かう。ある程度警備が厳重だがクイック・シルバーを多用して警備をやり過ぎし建物の敷地内に潜入する。

淡い光を放つ窓に近づき、中をこっそりと覗く。

「首尾は？」

「上々です、配給も完了しました」

「よし、これでこの国にある程度の恩が売れたな」

声の主はオシタランナ卿だった。ベッドに腰を下ろして部下と会話しているようだ。

「ナワバリ争いを利用して恩を売りつけこの国に付け入る計画、感服です」

「褒めるな、分かりきってる。それにこのままいけばあのリヴェリアと結ばれるのも間違いなしだ」

「それにしてもあのヒューマンが気がかりです」

「はん、どうせオラリオの汚い冒険者だ。私に強く出れんよ。出たとしてもその瞬間……」

指で首を掻き切る仕草をする。

奴が何かしらの悪行をしているのなら突き出せば勝てるが今はそんな事が出来ない。何故なら証拠が無いからだ。

「……………」

取り敢えず情報が足らなすぎる。

オシタランナ卿が何かを企んでいる：リヴェリアさんを手に入れるのが目的なのだろうか。それともこの国を乗っ取るか。

リヴェリアさんに案内された図書館に忍び込みモンスター図鑑的な奴を見る。

「レッドメイル：西の地に群生するモンスター、繁殖力が高い。ヴァルスとは敵対関係にある。知能は低く、屋内には入れない。ヴァルス、東の地に群生するモンスター、繁殖力が高い。レッドメイルとは敵対関係にある。知能は低く、屋内には入れない」

何故だ？何故それぞれ別の地にいるモンスターがここに集まっているんだ？

―種族単位の移動があったからか？

否、それだつたらヴァルスと合間見えるのはそれぞれの元のナワバリを中心点、ここは有り得ない。

―連れてこられたから？

有り得る。

―その目的は？

この国の乗っ取りか。

けれどこれは全て憶測だ。

やはり鍵を握るのはこれしかないらしい。

「謎のマトリョーシカ…」

さて、どうしたものか…。

この二セものコイ人作戦は何故か急展開を迎えた。

#38 クソツタレのエルフと新魔法

とある日のヘスティア・ファミリア

「なあベル…馬の獣人っていないのかな…」

「え？どうしたのハチマン」

「女の子ばかり集めてレースさせれば儲かるんじゃない？」

「ハチマン…色々な所から怒られるからこれ以上やめとこうよ」

「そうだよな…」

「!!」

「リリも『その手があつたか!』なんて顔しないで!!」

(こんな感じのくだらない小話をちよくちよく書いてこうかなって思ってます)

この先本編です。

AM11:30

大理石の床、ステンドグラスに囲まれた室内にて半径5mはある円卓を囲むエルフ達の国の重鎮達がある男を一斉に見つめていた。

「さて、オシタランナ卿。ヒューマンであるハチマン・ヒキガヤ氏が来ない内に話をしたいと思っついていてね」

「左様ですか、アールヴ王」

「君は最近…良くない事に手を出していると小耳に挟んでね。皆の者これを目に通してくれ」

円卓を囲む各国のエルフ達に配られたのは数々の名前が記された名簿だった。状況を察したりヴェリアを含むエルフ達から驚きの声があがる。

「そう、これは犯罪組織の顧客名簿です。そこにオシタランナ卿、貴行の名前が記してある。これは一体どういう事かな？」

「さあ…私に恨みを持つ者が勝手に書いたのでは？」

「証言は上がっているんだぞ？」

「…はあ、あまりやりたくなかったんだけど、やれ」

するとただ一つの入口からオシタランナ卿の配下である兵士がゾロゾロと雪崩込み、重役たちの首元に刃物を構える。

「おっとリヴェリア様…どうか反抗しないで頂きたい。おもわず手元が狂ってしまうかもしれない。それに私を倒した所で辺境の村々がどうなるかを考えていただきたい」

「なんだと…!」

「貴様、何を企んでる!!」

ヘラヘラと笑いながらオシタランナはカツカツと音をわざとらしく立てて歩く。

「この国とリヴェリアを…頂く」

「!!」

「お主に我が娘を渡すものか!!」

「高貴な身分である私か汚らしいヒューマンに渡るかを考えれば答えは明確だと思えますけどねえ」

「ッ!!」

苦虫を噛み潰したような表情をする捕らわれたエルフ達。リヴェリアはそんな彼らを見て内心呆れ果てた。それでもハチマンを認めようとしないうエルフ達を。

「大変ですオシタランナ卿!!」

「なんだ…」

「あ、アイツが…闇が此方へ!!」

「闇イ…??」

a m 10:30

「避難も済ませた…さてと、これで全部かな…」

魔力で包まれたマトリョーシカのような置物、それも一つだけでは何十個もの数が後ろに積まれている。

広い野原に俺ガイル。

「殺るか!」

展開していた魔力を解除する。マトリョーシカの中身はレッドメイルとヴァルスの雌フェロモンを凝縮した物だった。それを入れ物

に入れて村に配りドアも開ける知能のない奴らはその周辺にナワバリを敷く。

「やっぱエルフと叫びたらその膨大な知識だよな…お陰様で色々勉強させてもらった。ここら辺の地図とかな」

とんでもない数のフェロモンに釣られた両者は俺の元に走ってくる。しかしその前衛にいるモンスターは俺の元にたどり着くことは無かった。

「ギギギッ!!」

「ギャギギギ!!」

落とし穴：簡素にて原始的な罠だ。あまり時間もない為そんなに掘れなかったが効果は覲面だ。

「これもプレゼントだっ!!」

村にあつた酒樽を拝借し布切れで導火線を作り火炎瓶ならぬ火炎樽を作り上げ、それを落とし穴付近まで転がす。

「3、2、1、点火だ」

爆音と衝撃と共にモンスター達が吹っ飛ぶもほんの10分の1が殺せただけだった。

「後は俺がやるか…いらつしやいませええええ!!」

大体残りは1時間半…必ず戻ってやる。

「うおらア!!」

閻魔刃を左手に携え、リベリオンを右手に構えて押し寄せるモンスターを切り裂き、串刺し、葬っていく。

「ぐっ…!!ぬううう!!」

余りの物量故に肩に噛み付かれるも魔腕でそれ等を引き剥がして地面に叩き付ける。モンスターの血が顔にこびり付く。

「まだまだ…弱いな…」

満足なんかしてはいけない…俺がもつと強かったらイシユタル・ファミリアに拉致られる事も無かったのだから。

「はあああああ!!」

腹を切り裂き首を刎ね、脳天を撃ち抜く。

そんな行為を30分近く続けていると最後の一体と思われるモン

スターがやって来たがそいつの様子は今までのモンスターとは違うようだった。

「傷だらけ……それに…服?」

そのモンスターは戦う前からボロボロだった。ウォーシャドウのような身体のみならずその身に纏う衣までもがズタズタだった。

「はア…はア…がッ…!」

「……………」

死にかけの獣のような呻き声ではなくまるで人間のような呻き声を上げるそれはこちらに向かって歩いてきた。

「罨……じゃないな」

視線に敏感な体質故に油断を誘ってる様子ではなく、シラフのようだ。

「がハッ……」

歩く力を失ったのかソレは俺の元にたどり着く前に倒れた。

「おい…アンタ……」

薄気味悪がりながら近付くとソイツの手は俺の腕を掴んだ。

「空だ……」

「ああ……」

「仲間の 所に…戻りたい……」

「その体じゃお前さん無理だぞ」

「頼む……あのエルフを…殺してくれ……」

「…オシタランナか」

「……………」

パタリ…と腕を掴んでいた手は重力に従い地に落ちた。喋るモンスターがいたなんて事は驚きとして現れず何故か怒りの感情がフツフツと沸いてきた。

「ヒヒーン!!」

後ろから馬の鳴き声が出て振り向くと昨日見たばかりのユニコーンがそこに居た。

「綱をちぎって来たのか…」

「ブルルルル…」

乗れと言われたような気がしてユニコーンに跨る。

「送ってくれ…リヴェリアさんの所に」

赤くも緑色にも光らないそのユニコーンは怒りに震える俺を乗せて里まで走った。

「ヒューマンだ!!」

「ここで止めろー!」

オシタランナの兵士が扉を固めるも銃を取り出してチャージショットを撃ち込み扉ごと破壊する。それでも押し寄せる兵士達をリベリオンと幻影剣の餌食にしていく。

「ギャー!」

「ぐあああッ!!」

「助けてえッ!!」

「許してくださいッ!」

許しを乞う声を振り切り切り諸共薙ぎ払ってはユニコーンに跨りながら突き進み魔腕で掴んで盾や飛び道具として投げたりしていく。

「あの一際でかい扉…いけるか?」

「ヒヒヒーンッ!!」

高く大きく嘶くユニコーンに揺られて進んでいく、兵士の頭を掴んで壁に押し付けながら。

バアアアッ!!

扉を突き破り王室の中に入っていく。ユニコーンから降りて室内を見渡すとその場にいた全員が呆気に取られた表情で俺を見つめてきた。

「これはこれは『亡影』…少しでも動いたらどうなるか分かってるだろうな?」

人質を取っているつもりのおシタランナはいやらしい笑みを浮かべながら俺を見下す。

「……………」

人質にナイフを構える兵士の場所を確認してクイック・シルバーを発動。その肩や腕に向かって発砲する。

「…何がどうなるって?」

「え?」

オシタランナが間抜けな声を出した途端兵士達は呻き声を出す。肩や手には大きな穴が空いていた。

「ヒューマンのお前のどこにそんな力が!!」

「さあ…あの世での課題にしたらどうだ?」

「くツ!!…あの世に行くのはお前だ!!」

「後ろだ!!」

リヴェリアさんの叫びに反応して後ろに向かって発砲すると闇討ちを狙っていた兵士が倒れた。

「か、かかれエ!!」

扉で待機していた残りの兵士は怯えながらも俺の元に襲いかかってきた。ベオウルフに切り替えてその顔面に拳をめり込ませたり腹に大きな一撃を繰り出したりと、容赦のない攻撃が兵士達に返ってきた。

「俺の方がリヴェリアに相応しいのに…!!」

次々とやられていく兵士達を前にオシタランナはそう言葉を漏らした。

「そのような筈がないだろうに…」

「王…エルフの私がヒューマン如きの奴に劣るとでも!?!」

「当たり前だ…己を非難した種族をたった一人で守ろうとしたのだ。やり方は少々えげつないがな」

「ぐツ…」

苦虫を噛み潰したような表情のオシタランナにリヴェリアは向き直る。

「あ、貴女なら分かるでしょう!!こんな退廃的なエルフの国は変わらなきやいけない!!私の革命の隣には貴女が必要なのですツ!!」

オシタランナの説得に眉一つ動かさないリヴェリアに動揺する。

「確かにエルフは変わらなくてはいけない状況だ」

「で、でしたら!!」

「だがこのやり方は間違い過ぎている。古今東西の歴史を振り返って

も革命が成功した例はない。何故ならそのやり方が間違っているからだ」

それに…トリヴェリアは言葉が続ける。

「私の隣には貴様の様な下郎な輩は不必要だ」

「そんな…」

落胆したオシタランナの足元に兵士の体が飛んで来る。

「残るは…お前だな」

その拳と顔を血に染めながら俺はオシタランナの方を向く。

「ま、待て!!私はこの王になるんだぞ!」

「それで?無理だろ…器じゃないんだから」

「そ、それに…私はオラリオにも少なからず影響力があるんだぞ!!」

「それで?」

「私に手を出したらお前のファミリアはタダじゃ済まないんだぞ!!」

「だったら尚更だな」

「ひっ…!」

尻もちを付いて情けない格好になっているオシタランナは目に涙を浮かべていた。そんな奴に三連リボルバーのケルベロスを向ける。

「クイズだ。なんでヒューマンの俺がここに来たのか…①リヴェリアさんの恋人だから。②リヴェリアさんに頼まれたから。③エルフの里に来てみたかったから」

「に…?」

震えた声を出すオシタランナ。

バンツ!!

「正解は④…仕事だからだ。選択肢は最後まで聞けってエリート様の学校で教えられなかったか?」

頭の無いオシタランナに語りかける。

「それにさ、お前は手に掛けたんだ…名前も素性も知らない彼を」

今際の際にでも空を見ていた彼を思い出す。

「君のやり方はこうなのか?」

「まさか、今日は奇跡的にコイツが俺の怒りに触れただけですよ」

「関係ない兵士もか?」

「黙って通してくれれば何もしませんでしたよ。でも、コイツらだつて脅威になり得ましたから」

「話してみてください」

「適当な椅子に座り同じく座るリヴェリアさんの方を向く。」

「俺の中でファミリア^家というものは何よりも信じるべきものとして扱ってるんですよ」

「噂で聞いている。アポロン・ファミリアに襲われた時も己の身を案じずに庇ったと聞いたよ」

「そう、自分でも驚く位にこの感情はとめどなく溢れてきた。家族なんだから守らなくちゃいけない、どんな手を使ってでも。でも殺さないし殺したくない。そう思ってたら……あの日、転機が訪れた」

「あの日……?」

「かこ……では、ないわ……おもいで……よ」

雪ノ下を撃ったルーチェとオンブラを取り出して雪ノ下の結晶が埋め込まれた部分を見つめる。

「何の罪もなく、悪くない人達……でも助かる見込みなんてゼロで待ってるのは苦しみだけだった人を殺した。事の発端で俺の……憧れだった人も殺したあの日から」

「!!」

「あれからですよ……何をするにしたって誰と接するにしたって選択肢に『殺す』が出てくる」

「……………」

「選びたくなんかない……でも家族を守らなきゃいけないから……アイツらに人殺しなんてさせたくない……汚れた手は俺一人でもいいのだから」

「それが君の手袋を着ける理由」

「コクリ、と頷く。汚れた手で誰にも触りたくない……まるでその罪を擦り付けているようで罪悪感に苛まれてしまうから。」

「その手袋は君の努力の証であると同時に君自身の汚点であるのか……」

何を思ったのかりヴェリアさんは俺の手袋を外してその手を見つ

める。

「この手の豆：尋常では無い程剣を振るつた跡だ。それにその瞳、常に魔力を限界まで使ってるから瞳が変色してきている」

強引に手を離させて手袋を付け直す。

「朝2時に起床。オラリオ外壁付近で素振りとおラリオ外周をランニング。たまにアラルが来ては身体能力を赤ん坊レベルまで落ちるようなギアを付けて火矢を放つ彼に馬車で追い回される。6時半に帰宅し家事を担当、その腕前はロキ・ファミリアお抱えの一流シエフがベそをなかく程だ」

「なんか詳しくありません？」

「私は君の恋人なんだぞ？」

「ソーデシタネエ……」

「それと同時に冒険者だ」

「そうでしたね」

揃って立ち上がりポカンとしているエルフの重役達を向く。

「という訳で色々荒らしちゃってすみませんでした。本当なら片付けとか手伝いたいですけど俺も明日の予定とかあるんでお暇させていただきます」

「いいや、謝りたいのはこちらの方。エルフ内のいざこざに君を巻き込んでしまった事を謝罪したい」

「いえ、その件は俺が勝手に首を突っ込んだので……」

「どちらにせよ、だ。君の英雄的行為に感謝する者もいれば君の残虐的行動に批判的な者は少なくないのは確かだ。よってこの件に関してはオシタランナ卿を裁判の結果、極刑に処した事にして君はクローダーに加わった兵士を倒した事だけにする。足早にこの地を離れよ」

「それで、君は分かったのかい？」

「何をです？」

馬車に揺られながらリヴェリアさんは口を開いた。

「『愛』の事だよ」

「人類が古今東西の謎を解いたら最後に残る謎、という事しか分かり

を積んでるのですか？」

「？、オラリオの外周を走ったり目隠しされながら四方八方から飛んでくる火の矢を躲したり、身体能力を赤ん坊レベルまで落とす拘束具を付けてひたすら打ち合いさせられたり……はあ」

段々自分の目が腐っていくのが実感できる。

「アラル神父との特訓は僕も見ただ事があるけど……あれは流石にキツすぎるかなあ……」

「ハチマンもただで強くなってる訳じゃないんだよな……」

「リリ達に迷惑をかけないように、隠れて努力をしてらっしゃるんですね……感激です！」

「ばっかお前ら、そんなんじゃないよ。オラリオに来てまだ日が浅かったから舐められないように強くならなくちゃダメな訳だからな？」

「これは……どんなデレなんだ？」

「神はこういうのを『捻デレ』と言うそうですよ？」

いやいや、聞き慣れてるだけぞそれ。

「兎に角、ハチマン様も魔法の効果を試したいでしょう？じやあ外に出ましようーとりあえずベル様の魔法がいいと思うんですけど……」

「ええ!?僕？」

「リリルカ……こういうのはな？本人の同意が無くちゃダメなn」「いいよ」What?」

「ハチマンになら……いいかな……／／／」

「ぶはっ!?」

リリルカと神様が倒れた……何でとは言わない……不覚にもトキメキかけてしまったよ。なんだか戸塚に浮気したような気分だ。付き合ってもなかったのに……グズん。

――【豊饒の女主人】――

「あれーやっちゃったねー」

「ミア母さん、どうかしたんですか？」

厨房にて珍しくミスをしたミアにリユーが何事かと訪ねた。

「やーねー、トマトソースパスタを作りすぎちゃったわ」

皿に山のように積まれたそれを眺めながらミアは零した。

「ミア母さんにしては珍しい…どうしましょう」

「!!…ちよつと待ってな」

そのままミアはもの凄い勢いでもう一品用意する。

「リユー、出前に行つてきな!」

「ええ!?でも頼まれてませんよ?」

「アンタの好きな人にも売りつけりやいいじゃないか!」

「わ、私にはす、好きな人なんて…／＼」

「いいから黙つて行つてきな!配達したら今日はもう上がつていいからー!」

「しかしクロエとアーニヤとルノアだけで大丈夫ですか?シルは今日休みですし…」

「あーだこーだ言つてないで行け!」

「はあ…」

ミアに気押されて外に出た、否、出されたリユーは手に持つ料理を見て誰に届けようか迷った。

「好きな人…好きな人…私に…／＼」

「ううん…ううん…ううん、よし」

ロキ・ファミリアのホームである【黄昏の館】の自室にてアイズは机に向かっていた。一枚の紙を大切に折りそのまま日の沈んだ外に出向く。

「アイズ…どこに行くんだろー」

「珍しく机に向かつてると思つたら外に行つたわね」

「何か持つてませんか?」

「あの色とサイズから見えて…手紙か?」

傍から覗いていた保護者組…ティオナとティオネとレフイーヤとリヴェリアは柱の影から考察していた。

「もしかして…ラブレター?」

「!!!」

テイオネの眩き一同に戦慄が走る。

「着いていきましよう！」

「レフイーヤ？」

「どこの馬の骨かも分からない人にアイズさんは任せられません!!」

「それもそうね」

「賛成だ」

「いいのかな」

テイオナを除く3人はその目を鋭く光らせてアイズに気付かれな
いよう夜闇に紛れ、テイオナは悩みながらも着いて行くのであった。

「……アイズに……男……」

「ベートが倒れておる!!衛生兵!」

鎚を振り下ろすと赤い火花が散る。

それを何度も繰り返す事によってその金属は硬度を増していく。
ただ固ければ良いという訳でもなく硬いと切れ味は上がるがその分
欠けやすかったり脆くなる。

「ダメね……」

神基準では駄作となったその鉄クズは廃材置き場に置かれた。

「最近仕事に熱が入らないわ……」

今までは鍛冶の事だけを考えて鎚を振っていたが今は別の事を考
えてしまう。

「ハチマン……」

彼の名前を呼ぶと胸が熱くなる。

最近……と言っても結構前になるがレベルアップを果たした。その
プレゼントを贈ろうと武器や防具を作っているがそれ等はどれもこ
れもが彼に似合わないガラクタと称される事になった。鎧を作つて
も彼からコートを奪ってしまう事になる。剣を作っても彼には見た
事もない上等な剣が何本もある。ネックレスを作っても彼は既に首
から下げている。

「そうよ……いつそハチマンに聞いた方がいいのよ!」

無駄に悩む事は無かったのだ。欲しい物は彼から聞けば良いと思

いついたのは彼女、ヘファイストスが部屋に籠って3日が過ぎてからだった。

「お、やっと出てきたか、色恋に忙しい主神」

そうすると彼女のファミリアの団長【椿・コルブランド】がからかい混じりに訪ねてきた。

「例の彼の所か？」

「そうよ、悪い？」

「別に構わないが一風呂入るといい。正直焦げ臭いぞ」

「えっ!? すんすん…本当! 忙しいで入ってくるわ! ありがとう!」

並の冒険者も涙目の速さで風呂に向かうヘファイストス。

「やれやれ…それにしてもハチマン・ヒキガヤか。主神が熱くなる程の男…: 気になってきたな」

三日月の下でローブを身にまとった女神は微笑んだ。

「フレイヤ様、どちらに」

「散歩よオツタル。イシユタルも居なくなつたからもう散歩を邪魔されないわ」

「会いに行かれるのですか、【亡影】に」

「ええ、護衛はいらないわ」

深くフードを被つて女神フレイヤはオラリオに繰り出した。

「ぜえ…: ぜえ…: ぜえ…: つ、げほつ、げほつ」

ヘステイア・ファミリアのホーム【竈火の館】の庭にてハチマン・ヒキガヤは新しい魔法の練習をしていた。

手の平を前方15mにある分厚く大きい鉄的に向ける。

【ファミリア・ボルト】 ツ…: ダメか…:」

手の平からチョロつと出た火花と火の粉を前にため息をつく。それだけしか出なくても魔力は減っていくからだ。

「つたくもう、こんなん使えなくてもこれがあるのにな…」

幻影剣を的に飛ばす。そのど真ん中に突き刺さった幻影剣を見つめてまたため息を吐き出す。

「ダメだな…：せつかくベルが使わせてくれたのに」

~~~~~

「おいマジでやるのかよ…」

「発動魔法は己が体感し理解した物のみ…：ですからね」

「ガマンしてねハチマン…：【ファイア・ボルト】オオ!!」

「ぎゃああああああ!!」

~~~~~

「まだやれる…：な」

もう一度試してみるもやはり結果は同じ、火花と火の粉が出るだけだった。

「ヒキガヤ様…」

「春姫さん、どうしたんですか、こんな時間に」

月明かりが近づいて来る春姫を照らす。

「ヒキガヤ様が頑張っていていらっしやるのに眠ってはいられません」

「そう…：ですか」

「新しい魔法は如何ですか？」

「無理そうです…：静電気と火の粉が通じる敵じゃない限り役に立ちません」

手の平からパチパチツと失敗魔法を見せてため息を漏らす。

「そう落胆しないでください、今は出来なくてもきつとできるようになります…」

「だといいですけどね…」

「むう、少し休憩は致しませんか？マジックポーションを持って参りましたので」

「よくリルルカが許しましたね」

『『将来への投資』と仰っていました』

彼女らしい、と若干微笑んで芝生の上に座る2人。

「生活には慣れましたか？」

「ええ、皆さん良くしてくださるので毎日が楽しいです。明日が楽しみで眠れなくなります」

「そりゃ良かった」

「これもクラネル様と命ちやんと、ヒキガヤ様のお陰です」

「俺は別に……」

「いえ、ヒキガヤ様には危ない所を何度もお救い頂きました。ヒキガヤ様がいらつしやらなかつたら私はもう……ヒキガヤ様にお救い頂いた時、物語の英雄のように思いました」

「英……雄……」

「えええ！」

尻尾を降っていることから本音だと悟った彼は少し顔を暗くした。

「俺は……英雄にはなれません」

「？」

「英雄は……ベルみたいなのがなるべきなんです。夢を胸いっぱい抱いて迷いもなく突っ走れる白いアイツが、英雄たる資格を持っています」

「英雄たる資格……」

「俺は……ベルじゃないから……ベルの魔法も撃てない……」

「ヒキガヤ様はヒキガヤ様です、誰が何を言おうと変わりようがありません」

「そう、ですよ。俺は……オレ……だからベルの魔法を撃つ事は出来ないしする必要なんて無い。ベルがくれたのは魔法の材料だから後は俺が好き勝手に料理して俺好みの魔法を撃つてもいいのか」

勢いよく起き上がり手の平を的に向ける。想像するのはベルの

「ファイア・ボルト」ではなくて自分の「ファイア・ボルト」

「ファイア・ボルト」!!」

手の平から出たのは赤と黄色の閃光ではなく、おびただしく黒い炎に包まれた赤い稲妻。真っ直ぐ飛んだそれは鉄の的に命中してドロドロに溶かした。

「や、やった……」

「やりました！ヒキガヤ様!!」

彼の手を掴んでびよんびよんと跳ね回りまるで自分の事のように嬉しがる春姫。

「記憶魔法は発動時己の性質に侵食される……とは言え俺の本質ってあ

んな黒いのか？」

「それは…どうなんでしょう」

苦笑いする春姫を他所に頭を掻いて悩む彼は春姫に家に戻るよう言い再び魔法の練習に努めようとしてみるも。

「身が入ってるね」

「葉山か…」

「こんばんは」

「ギルガメスの透析は終わったのか？」

「まあね、今度はあまり無茶をしないようにするさ」

「大変だな」

「これも生き残る為さ」

ふーんと聞き流しながらハチマンは三日月を見上げる。

「比企谷、少し散歩しないかい？」

「…分かった」

静まり返った街を2人で歩く。

「比企谷は…魔剣士スパードについてどの位知ってる？」

「スパード？…ダンテさんとバージルさんの親父さんでネロさんの祖父に当たる悪魔で人間界を悪魔から解放させた張本人としか知らんぞ」

「大体は知ってるんだね。そのスパードは自分の強大な力を3本の魔剣にに分けたのは？」

「そこまでは知らなかったな」

「その剣が『魔剣リベリオン』と『魔刀 閻魔刃』とフォースエッジの真の姿『魔剣スパード』だというのは？」

「は？」

「その様子じゃ知らないようだね。続けて質問するけど、どうしてそれを君が生み出せたんだい？」

交差点のど真ん中で彼の足が止まる。

「葉山は…自分の魂と会話したりするか？」

「というと？」

「俺は…いつも死にかけたりすると精神世界みたいな所に入る。一点

の曇りもなかったそこには馬鹿みたいにデカイ門があった。最初にこじ開けようとしたのはベオウルフと殺りあつた時。少し開いたその門に何故か手を突っ込んで掴んだものを引っこ抜いたらそれは闇魔刃だった。次はお前と戦つた時。空高く吹き飛ばされた時にまた少しこじ開けて今度はリベリオンを手に入れた。フォーエツジは冒険者になつて日が浅い頃にアラルから貰つた」

「精神世界に門…僕はそんな経験は無いな」

「だよな…自分の魂と会話出来るのがおかしいよな…」

「もしかしたら比企谷の本心なのかもしれない」

「そうか?」

あれやこれやと話し合っていると四方から人が来る気配を感じた。

「知り合いかい?」

「知らない」

40人は確認できるその人影は誰も彼もがエルフ特有の耳をして
いた。

「ヒヒヒ!!お前が『亡影』かア!」

「オシタランナ卿の仇だア!!」

「とか言ってるけどどうなんだい?」

「殺した…クソツタレのエルフを一匹」

「全く…」

槍を構える葉山とベオウルフを構えるハチマン。

「気の毒だけど喧嘩を売る相手を間違えたね」

「夜中だし静かにやるか」

「かかれーー!!!」

大勢のエルフが一斉に襲いかかってくるが2人は何も動じなかつた。なんなら彼らの目は少し笑つてもいた。

#39 「己」の戦い

「ふう」

「俺にしては中々の出来だな」

目の前にあるのは裏路地の奥に生けられたエルフ達。その顔は地面に埋まりきり、誰もその表情を見ることは出来ない。手足はピクピクとしているがそれ以上のアクションを起こす事は無いだろう。

「行くぞ…邪魔は消えた」

「そうだね」

路地から出て交差路に出る。

「なあ葉山」

「どうしたんだ？」

「どうしてあんな奴らがのうのと月と太陽の光が届く所で生きていけるんだ？どうして…雪ノ下は死ななきやいけなかつたんだ？」

「…雪乃ちゃんは、純粹すぎたんだよ。雪のように白くて崩れやすい。黒を白と言えない…世渡りが絶望的に下手だったのかもね。君が死んだ責任者である世界を崇ろうとした所に君が現れた。それが雪乃ちゃんの運の尽きだね」

「皮肉だな…」

「そうだね、これ以上ない位の最悪の皮肉だよ」

「だったら俺は雪ノ下を止める事は間違いだったのか？」

「さあ…僕も分からないや。ていうか君も既に気付いているんだろう？雪乃ちゃんの気持ちに…」

「殺すくらいなら…いや、辞めとこ、脇が冷たい」

二丁拳銃を取り出して雪ノ下雪乃が遺した結晶を見つめると淡い蒼い光を発していた。

「はっ、愛し合う2人はいつも一緒、って事？」

「馬鹿言うなよ…」

二人の間に沈黙が流れる。

「そういえば…」

最初に切り出したのはハチマンだった。

「お前は喋るモンスターを知ってるか？」

「モンスターが？知らないな…いるのか？そんなのが」

「いた、この前見つけた。空に憧れながら死んだけど…」

「気の毒だ…」

「上流階級とブラックマーケットで出回ってるかもしれない…ルーツと顧客リストを片っ端から調べてくれるか？」

「分かった」

ネオ・アンジエロ・ライガーと化して飛び立った葉山の背中を眺めて帰路に着こうとすると4方向から迫る気配を感じた。

「リユースさん…？」

「はあ、はあ、はあ、ヒキガヤさん…！」

前から迫るのは頬を赤らめて息を切らしながらバスケットを持った目を獣の如く光らせるリユース・リオンだった。

ザツ！

「ハチマン…！」

「ひっ！アイズ…さん？」

後ずさろうとすると後ろから躍り寄るのは目の下に濃い隈を作って片手に何かを隠したアイズ・ヴァレンシュタイン、その目は獲物を見つけた狩人の如く鋭かった。

前と後ろが塞がれ横に逃げようとするも左から鎚を持った赤いショートヘアの見覚えのある女神と左から道のど真ん中をやって来る女神がいた。

「み、見つけた…!!」

「あらあら、大所帯ね♪」

リユース

ヘフアイ

俺

アイズ

フレイア

(とその保護者たち)

それぞれの想いをぶつける為、意図せず集まってしまったこの事件は後に第一次ヒロイン対戦と名付けられた。

「「「「……………」」」」」

「よ、夜の散歩は危険ですよ…何してんすか」

「二」それをアナタが言いますか（言うのかしら）（言うの）…」」」
「うす…」

それぞれが彼に話がある趣旨を伝え、順番でその要件を伝えることになった。全員2人きりで話したいらしく、最初はリユーからとなった。

「ヒキガヤさんは異性にモテるのですね…」

「いや、そんなんじゃないと思いますよ？俺は特に何もしてませんもん。知らないけど…それで、リユーさんはどうかしたんですか？」
「あつ、あの…これ、ミア母さんが作りすぎてしまつて…それで差し入れにと思つて…」

「あざす……お金出します」

「いえ！そういう訳にはいきません」

「いきませんつて…一応店の出し物なんですから」

「ダメですヒキガヤさん！」

ポケットから金を出そうとするとリユーはその手を掴んで離さない。ハチマンはLv3彼女はLv4、その力の差は大きかった。

「支払い拒否する飲食店つて聞いたことありませんよ！」

「ダメなんです！ダメなんです…」

「どうしてなんですか…」

リユーはハチマンの袖を掴みながら顔を俯かせた。

「私は貴方との関係をす、進めたいと思つてます…」

「ゑ……？」

「その……私は貴方と……／／／」

頬を赤らめてモジモジするリユーを他所にハチマンは表情が青くなつていく。中学校時代の悪夢が蘇るからだだった。

「と、友達に…なりたいと思つて…ます…！」

気絶しそうになつてたハチマンは意識を取り戻す。

「と、友達…ですか？」

「はい……たまにご飯を食べに行つたり、一緒に鍛錬を積んだり、その、悩みを聞いたり…」

「悩み……」

「はい、最近のヒキガヤさんは…その、傍から見ても元気が無いように見えましたから…力になりたくて…」

「……………」

「ダメ…ですか？」

涙目で上目遣いになるリユウに少し胸が高鳴るハチマン。それは強敵を目の当たりにした時のそれとは違かった。

「今度、ポレポレに行きましょう…」

「!!…はい！」

待ってます！と言いいリユウはその場を去って行った。本来渡すはずの料理を渡すことなく。

「少し腹が減ったんだけどなあ…」

「すみません、待たせました」

「そそそそそうね！わ、私の方は準備バッチグーよ！」

矛盾を孕んだセリフに苦笑いしながら。ハチマンは話を続けた。

「それで、ヘファイストスさんはどうかしたんですか？」

「やけに落ち着いてるのも何かこう…：まあいいわ、貴方のランクアップのお祝いに何か贈ろうと思ってるの。何か希望はあるかしら？」

「いや…素直に貰う訳にはいきませんよ。俺、ヘファイストスさんの眷属でも何でもないのに…それに、他の眷属に示しが付かなくなりますよっ。」

「いいのよ、これは私のやりたい事…それに皆今の所良い子だからお咎めはないわ」

「そういう話じゃなくて…俺、祝われるような事なんて何もしてません」

神じゃなくても分かった。謙遜で言っただけでなく、本心から彼は言っていた。18階層の黒いゴライアスを討伐するのに一役買って出た事も、ネオ・アンジエロと化して正気を失った悪魔の鎧を打ち倒したことも、不幸に見舞われた悲しい運命の少女を助けた事も、エルフの里

の転覆を阻止した事も……愛する故郷を尊敬する彼女を殺してまで救った事も、全てが適材適所、求められたから、やらなければいけないと分かっていたからしただけだった。

酷く歪んだ少年。

己は尽くして当然。

尽くされなくて当然。

「頑張り過ぎよ……ハチマン」

「いいんですよ、俺。ヘファイストスさんとかが気付いてくれただけで嬉しい……ですから」

「少しでも辛かったら私の所においで」

「はい」

「それはそれと貴方に贈り物はさせてもらうわ」

「ええ……」

「そうね、どんなのがいいかしら！考えるのが楽しくなってきたわ！ハチマンも何かあったらいつでもおいでなさい。それはそうと明日に予定はあるかしら？」

「無いと思いますけど……」

「じゃあお昼に中央広場に集合よ、異論反論は偶には認めるけど無理のない範囲でいらっしやい」

「うす」

頭をくしゃくしゃと撫でられた後にヘファイストスは自分のホームに戻って行った。

「惚れるなあ……」

「ハチマン……」

「お、おう」

目の下に濃い隈を作ったアイズは懐から出したブーツをハチマンに突き出す。

「手紙……？」

「うん……読んでくれる？」

「言った方が早い気がするんだが……分かった」

~~~~~

ハチマン・ヒキガヤさんへ

明日特性のじゃが丸くんを作ってください。

悩みがあるなら相談してください。悩んでいる姿を見るのは私も辛いです。

沢山話して、沢山食べて、沢山遊びませんか？

アイズ・ヴァレンシュタインより

~~~~~

「そこまで…悩んでそうか？俺は」

うん…と頷くアイズ。

そっか、と頭をポリポリと掻く。

「別のファミリアなのに一緒にいて大丈夫なのかよ」

「大丈夫…だと思おう」

「なんかあとが怖いな…」

アイズは曲がりなりにもオラリオ屈指の人気冒険者。そんな奴と俺が一緒に遊んだりして良からぬ噂が立つのは自明の理だ。断るのなら簡単だがこっちは心配まで掛けてしまったのだ。それに相当悩んだのだろう目の下に隈まで作って。

「分かった…一回だけだ…」

「！…うん」

見るからに表情が明るくなったアイズ。何が嬉しいのか理解できない。

「まあ、もう遅いしあそこに隠れてる保護者達に送ってもらったらどうだ？」

「…分かった。ハチマンも行こ？」

「いや、あとひとり残ってるから」

「皆と待ってるよ」

有無を言わさずそのまま保護者達の方に向かって行く。

「モテモテなのね、妬けちやうわ」

「これはそんなのじゃないと思いますけど？」

「貴方…朴念仁って言われなにかしら？」

「勘は鋭い方なんですけどね」

腕を組んで胸を強調しようとハチマン・アイアンハートにはそんな色仕掛けは通用しない。視線が少し下にズレるだけである。

「で、要件はなんですか？」キリツ

「単刀直入に言うわ、私のファミリアに入らないかしら？」

「え、普通に嫌なんですけど」

「話はこれからよ、休みは週に2日。休日出勤は余程の緊急事態じゃないければ有り得ないわ」

「ほう…」

「新人教育に徹底しているわ、熟練の先輩が貴方に手取り足取り私のファミリアでの生活をサポートするわ」

「先輩ねえ…」

「教育者には事前に新人教育の資格を取らせてあるわ。長所を潰さず短所を比較的抑えられるよう目を養わせているわ」

「ふうん…でもパワハラとか少なからずあるんでしょう？」

「否定はしないわ、やや性格に難のある子はいるわ。互いに切磋琢磨し合った結果だったり過去の遺恨が残っていたりするから性格が歪む子もいるわね」

「……………」

「強さを求める貴方にとって悪くないと思うわ、ヘスティアよりも貴方を生かせると思うけど、どうかしら？」

「それはどうでしょう…俺を見てくれている神様だから今の俺がいる訳ですし…おすし」

「そう、そう思うのならハチマン…私のファミリアに体験入団しないかしら？」

「するメリットがこれっぽっちも見当たらないんですけど？」

「そうね…私の子達を手に掛けた事と…あの覇王を食べた事も黙ってあげるわ」

「何故それを…」

「ヒントは鏡よ」

「ぜひ体験入団させてくださいな」

24時間365日監視されてちや迂闊に動けないな…

「嬉しいわ、素直な子は好きよ」

「脅してくる女は苦手だ…」

こうして碌に考え事もできない対談は終わりを告げた。

「待たせたな」

健気に待つていたアイズとその保護者達。

「一体あの女神と何を話していたんだ？」

リヴェリアさんに尋ねられる。

「いや、なんか体験入団する事になって…」

「え〜！ぼーえ〜くん、ファミリア抜けちゃうの!?!」

「いや、抜けませんよ。色々脅されて一日だけって話になって…」

薄着のティオナに詰め寄せられ目のやり場に困りつつも答える。あの女神にはなんとかして退けないと、思っている。

「じゃあ、帰ろう」

何故か膨れたアイズに手を引かれ歩き出す。後ろでレフイーヤが凄く睨んでくるが気にしてはいけない気がする。

「そういうえばロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリアは仲が悪いらしいけどなんかあったんですか？」

「実力主義の強いファミリアだからオラリオが如何なる緊急事態になろうと無関心だったりしてな…ファミリアの運営方針が違い仲違いする面が多いんだ」

「成程…『弱きは死ぬ』って感じか…」

「大まかに言えばそうなるな」

まあ、俺もオラリオが危険になろうと優先的に守るのは豊饒の女王人とポレポレと仕立て屋位しかないからな…。

「アンタ…案外共感してたりする？」

「別に…戦いますよ。俺が必要とあらば」

「そう、期待しとくわ」

フン、と鼻を鳴らすティオネさん。

「「「「「……………」」」」」

「あの〜」

静まり返った空気にレフィーヤが恐る恐る声を出す。

「もしかしてヒキガヤさんって人付き合いが苦手なんでしょうか？」

「苦手じゃない、必要性を感じないだけだ」

「それって苦手な人の常套句ですよ…」

やれやれ、とこめかみに手を当てるリヴェリアさんや呆れ返るアイ

ズ以外に疑問を抱く。

「まっ、コミュ力が高けりやそもそもオラリオに来る事なんて無かつたもんなア？」

「アラル…」

民家の屋根から見下ろしていたのは白髪オールバックの神父服を纏った悪魔アラストルだった。

「アラル神父…一体なんの用だ？」

「そつちこそ、俺の可愛い息子分に手え出してんじやねーよ」

「えっ!? ぼーえー君とアラル神父って親子だったの？」

「息子分よ…息子のように可愛がってるってことよ」

「息子分って…初耳なんだが」

「心で繋がってりやいーんだよ! それよりハチマン! 新しい魔界の特訓メニューを思いついたからお前の明日を寄越せ!」

「いや…明日はとある女神と呼ばれてて…」

「何よ!? 俺より女神をとるのか!? いつからそんな女神たらしに…そんな男に育てた覚えはないぞ!!」

まるで自分は悲劇のヒロインかのように手で顔を覆い嘆くフリをするアラストル。

「アンタに育てられたのはフィジカルだけだ! 嫌な言い方すんなよ! ほら、ロキ・ファミアアの方々がとんでもない勘違いをしてらっしやるぞ!!」

「じゃかーしい!! 取り敢えず明日の午前中は貰うからな! ……ヒーロー着地!!」 バキヤ

プリプリと怒りながら屋根から反対方向に飛び降りるアラストール。その後が容易に想像できる。

「ハチマンと神父って仲良いよね…」

「え?」

「そーそー、あんな神父見たことないよね。いっつも死体集めに必死でダンジョンをさ迷ってるんだよー」

まあ、聞いた事あるな…この前死体集めの理由を聞いてものらりくらりとはぐらかされた覚えがある。

「私達と対峙しても憎まれ口ばかりでね、ベートとは違う方向性の暴言なのよね…。本質を捉える正論の暴言だから言い返せなくて」

「怒ったティオネが殴りかかったら軽く返り討ちに会う始末だ」

「そんなに強いんですか!?!」

「本当に強いわ…レベル幾つかギルドに聞いても全然教えてくれないし…どこかのファミリアに所属してる訳でもないし…」

驚くレフィーヤを尻目に想像する。きつと内心鼻くそほじって相手してたんだろうな、と。

「アンタは何か知らないの?」

「そうですね…知ってはいますけど本人の許可無しに言える内容じゃないんですよ」

チラリとリヴェリアさんを見る。この人は人の嘘が見抜ける人だ。神とは違く呼吸や視線、声のトーンで見抜いてくるから余計厄介だ。ここは正直に隠した方が良いだろう。

「それに、曲がりなりにも可愛がって貰ってるんで裏切るような事は出来ませんよ」

「それはごめんなさい…貴方を通して探りを入れるような真似をして…」

いえ、良いんですよ。と返してロキ・ファミリアのホームに着く。「じゃ、おやすみなさいと…」

手をヒラヒラとさせてその場を去る。散歩とはいえ俺も少し眠くなったのだ。皆に心配を掛けてられない。

「おはよう世界、今日も嘯いてるね」

「なーに言つてんだよ、オラ、とつとと立て」

言われるがまま地面に背を預けていた状態から地に足をつけて立ち上がる。前には悪魔姿のアラストール。後ろには同じく悪魔姿のベリアル。左右にはマキャヴェリのお手製殺人タレットの銃口がこちらを正確に捉えている。

「そんじゃ、もっかい行くぞ」

「死ぬ気で捌かねば命はないと思え」

「避けようとしたつて1000通りの行動が予想されてる。下手な事は考えない事だ」

「二」行くぜ(ぞ)!! 「二」

赤いレーザーは眉間の間に固定され、目の前から特大級のエレキボール。後ろからはとてつもない熱を感じる。

「こうなりややくそだ!!」

新たな引き金、デビルトリガーを使用し不定形な悪魔の姿となり強化された閻魔刀を抜刀し、飛んでくる飛翔体を切り裂く。

「閻魔刀の使い方にも慣れてきたな。それに体の方は大丈夫か？」

「まあ、勝手は分かってきたかな。コレやった後めちやくちや疲れるんだよなあ…」

「体力が足りんな…今度は逆さまで崖に登ってもらおうか」

「勘弁してくれ…この後予定があるんだ。閻魔刀で帰らせてもらおうぞ」

そう言いながら閻魔刀をスラリと構える。帰る場所のビジョンはホームの自室だ。これなら余計な邪魔が入らない限りワープ先を間違えることは無いだろう。

「そういえばベリアル。後5分で女神だけが入れるという浴場が開くらしいぞ。くくくにあるらしいがどー思う？」

「別になんとも思いませんぬ。噂によると毎日入りに来る美女神がいるらしいがどーだろーなー。マキャヴェリ先輩はどう思いますー？

(棒)

「なーぞでーすねー(某)」

無視無視、奴らが何を話してしようと俺に関係は無いのだ。
シユピン

十時に切り裂かれた次元は俺のイメージした場所へと繋がっていた。

見知ったベッドや机…ではなく湯気の立ちこめる銭湯だった。

「むつつりだなーハチマンよ」

「貴様も御の子だな」

「メンタルトレーニングにはなるんじゃないのか？」

「え？ちよつ…うおっ!？」

背を押されてその裂け目に押し込められた。

噂には聞いていた。その浴場は入浴が許されたのは女神のみ。前人未踏のそこは覗こうものなら一瞬で首が飛ばされるらしい。

「「アディオース!!」」

憎い悪魔達の笑い声を背中に受け、裂けた次元はそのまま閉じていった。勿論日本のような浴場ではなく、古代ローマを彷彿とさせる浴場。よく分らん布を巻いた男女の石像がよく分らんポーズを決めて立っている。ベンチとかも設置されており、『できたてなので触れないでください』の張り紙と共に白のペンキが置かれている。

「さてと、帰るか…」

もっぺん次元を切り開けばいい話なのだ。

「男の声が聞こえたぞー!!」

奴らの声が聞こえたのか女性の叫び声と共に足音が近付いてくる。もしバレたら地獄を見ることになるだろう。覗き魔のレットルを貼られて晒し首になるのがオチだ。今更次元を切り開いても場所特定されるだろう。

「そうだ…」

端っこにある手頃な男の石像を次元斬で跡形もなく粉々にする。そしてクイックシルバーを発動。自殺する思いで恥を忍んで裸になり床のタイルを剥がして服をそこに仕舞う。そしてギルガメスを展開。石像のような布を体に纏ってペンキを大量に頭から被る。全身隈無く白くなったのを鏡で確認してさつきまで石像があつた所に

立ってそれっぽいポーズを決める。そうだな…キラークイーンが良
いだろう。想像してくれ：嘘、やっぱしないで。そして最後に後始末
をダブルチェックする。床のタイル、よし。石像の粉、よし。

ペンキ缶も元に戻したし大丈夫だろう。表情筋もコンマミリ単位
で動かさないように気を付けよう。

ガラガララツ!!

「男ッ!!」

鬼のような形相で入ってきたのは俺でも知っている。ガネーシャ・
ファミリアの団長の…えーと、なんとかささんだ。

「シャクティ団長!どうかしましたか!」

あ、そうそう、シャクシャクささんだ。

「いや、男の声がしたような気がしたが…」

「気のせいですよ! 団長最近寝不足らしいじゃないですか。今朝のエ
ルフ達が地面に活けられてたのだからって団長が後始末したじゃないで
すか。休んでもいいんですよ? それにここに侵入するなんて余っ程
の自殺志願者ですよ」

「それもそうだな、戻るとするか。そろそろ開館だ。気を抜くなよ?」

「はーい」

下っ端と共に戻っていくシャクトリ団長。彼女等が戻ってから暫
くしない内にソレはやってきた。

「あー! やっとお風呂入れるくく!!」

天国は行くものではない、待つものだった。

デカイ乳。小さい乳。ありとあらゆる供給先の無い需要は石像に
扮しているたった1人の俺になだれ込んできた。女神達は手前の風
呂から入っていくから奥側にある俺の方にはまだ来ないだろう。こ
のまま隙を見てどうにかして逃げなくては。

(…………ツツツツツ!!!)

「あつ、ヘファイストス! それにヘステイアも! やっほー!」

「やあー!」

「やっほ」

この天国はこの一瞬にして己と戦う鍛錬場へと変貌した。

『次回ハチマン死す！……デユエルスタンバイ！』

#40 ハチマン危機一髪

さてと、今の状況はマズすぎる。

現在午前10時。ヘファイストスさんとの待ち合わせまであと2時間だ。幸いすみっこにて石像に扮している為、バレる心配はまだない。

「君の目の事もあるし端の浴槽にしようか。キミも眼帯を着けたまま浴槽に入りたくないんだろう?」

「あ、ありがとう。ヘステイア」

そう言い俺の前にある浴槽に浸かる女神2人。

何故そこで気を利かせられるんだ!!神様アア!!?

「で、どうなんだい?今日ハチマン君とデートするんだろう?」

「デ、デートじゃないわ!!彼の装備の事とかで話をしたくて……／＼

もう逆上させてきたのか顔を赤らめるヘファイストスさん。ムフフ顔をしている神様は久しぶりに人をからかえて少し上機嫌そうだ。

「素直じゃないなく!君も彼も!」

「そういうヘステイアはどうなのよ。愛しの彼とは」

「ベベベルくんは関係ないだろう!?!今は休暇と一緒に新しいメンバーをどうするか話し合っているよ」

「因みにその子…女の子かしら?」

「ああ……」

「彼に対しては?」

「惚れてるよ……」

うっそ、マジかよ!!春姫さんもうベルに惚れてんの!?!あいつホントに女たらしだなく。神様とリリルカというものがありながら。

「少し競争率高くないかしら?」

「ホントにね…困ったものだよ。他のファミリアの子も意識してるってヘルメスから聞いたよ」

「敵は多いわね…」

「諦めるのかい?」

「いいえ！そんな理由にならないわ」

あれ？ヘファイストスさんもベルが…？でも会話の流れ的にはか違う気も…？？訳わかんなくなってきたな。

「あれ？そういえばこの像…変わってないかい？」

「あら、本当ね。『できたてなので触れないでください』だから変更されたのよ。ヘステイア、イタズラしちやダメよ？」

「そんな事しないさー！」

「……………」

マジマジと見てくる2人。

「……………」

「それにしても似てるわね…」

「そうだね……」

ギクツ!!?!

「あら、ヘステイアじゃない」

「!!!!」

疑いの視線が向けられた瞬間、2人の後ろから声が掛けられる。

そこには圧倒的なソレがあった。神様も神様でとてつもなくソレを遥かに凌駕するモノが彼女には備わっていた。

「デメテル…それとロキ…」

神様の脇で見られないようにと眼帯を着けるヘファイストスさん。

女神デメテルの横には名前が呼ばれるまで存在感の欠片も無かった女神ロキがいた。デカイ彼女とは違く、どこがとは言わないが清々しい程負けている彼女が。イケね、涙が出てきた。

「なんも言わんと言ってや」

「あ、ああ、分かったよ」

「それよりヘステイア、『亡影』君は元気してるかしら？」

「え…デメテル、ハチマン君と知り合いなのかい？」

「そうよ、彼、私のお店によく来てくれるの。彼ったら、野菜を見る目があるわね」

いやあ、照れますよ。

「それで、アンタらは何を話してたんや」

「あ、そうそう。この石像が気になってね」

一同の視線が俺に刺さる。

「なんや、『亡影』はモデルの仕事を受けたんか？」

「いやあ、そんな話は聞いてないけどな」

「もしかして……」

へファイストスさんが俺の目の前にやってくる。このままではバレルのも時間のもんだろう。あーあ、しょぼい人生だったな……。

「!!」

その時、死を肌で感じたハチマンに走馬灯が走った。絶体絶命の時に生存の手がかりをその記憶から探るのが走馬灯である。

~~~~~

「ハチマン様の新魔法『Realize』は理解して体感したものをコピーできるんですよ？」

「まあな、でも少しは性質が変わるからガチャ要素が含まれるな」

「ガチャがなにが分かりませんが…それならリリの魔法はどうなんでしょう？体感…の部分がよく分かりませんができるかもしれませんね」

「ベルの奴ができたなら試してみる」

「もしできたら戦術の幅が効かせられそうですね」

「嫌な予感がするけどな…」

~~~~~

「きやあッ!!」

少し離れた所で小さな悲鳴が聞こえた。

「このベンチペンキが塗りたてじゃない！」

その瞬間、普段は悲鳴が聞き慣れていないその銭湯ではちよつとしたパニックに陥った。

(今だ!!!)

クイックシルバーを発動。

Realizeを用いてリルルカの魔法、シンダーエラをコピーに成功。

隠した服を脱衣所の端にある目立たないカゴに投げ入れる。

白色のにごり湯に潜ってクイックシルバーを解除。

「なんだ…ペンキか…」

「この程度で騒がないでよね…」

そんな喧騒の中、誰とも面識の無い人物が余計白くなった湯船から現れた。ストレートの黒髪だが頭頂部に特徴的なアホ毛があり、普通にモデル体型の目つきの悪い美女だった。

ささっと体を洗い流し、ペンキを落としてさっさと銭湯から出る。インナーだけの着用に済ませ、コートを脇に抱えてそこから脱出しようにと出入口に向かう。

「もしこの…どこかで会わなかったか？」

そこで見張りをしていると喋っていた…えと…えーつと…シヤクシヤク団長？から声を掛けられる。

「な、ナンパならお断りよ。私は、そつちには興味無いの」

「そうか、済まなかった…どこかでみた覚えがあつたものだから」

フン、と鼻を鳴らして銭湯から出る。

そして足早に近くの路地へと向かう。

「あら、面白い所から出てきたわね」

「はアっ?!?!」

路地の向こうには今一番出会いたくない女神ランキング圧倒の1位。その腹黒さはきつとオラリオ1番の女神。その名もフレイアが不敵な笑みを浮かべてそこに立っていた。

「失礼します!!」

踵を返して帰ろうとするも後ろにはいつから立っていたのかオラリオ最強の冒険者、オツタルが立っていた。

「アンタか…愛しの女神が他の男と話すのを手助けするのか?随分みつともないわね」

「それがフレイア様の思し召しなら…」

「そう…」

魔法を解き、元の姿に戻る。

ああ、この魔法で影響する俺の性質つてのは性格もモデルになった人に似るって奴か?罵倒キャラは強く根付いてるな…。

「さて、この事を証言したら貴方はどうなるかしらね？」

「何がなんでも無罪を掴みとりますよ…俺は」

「神相手に嘘が付けないのは分かっているのかしら？」

「勿論…それすらも跳ね除けるトリックがありますから」

危険な博打になるけど一生ムシヨ暮らしか晒し首ならやらなくちやいけないだろう。

「そう…体験入団の日程が決まったわ。明後日に私達のホームまで来なさい。案内はそこからよ」

「オツタルさんはそれでいいんすか？訳の分からない男が家に上がり込んで来るんですけど…」

「それがフレイア様の思し召しなら…」

「もう少し自由意志を持った方がいいと思うんだけどなあ…」

ガチ恋勢やん。

「それじゃあ、俺はこの後予定があるので…」

「貴様…フレイア様を邪険に扱うのか」

少しピリピリしてるだけで空気が震えてる感覚がする。これがオラリオ最強の風格か…。

「違うな…お前とあの女神が2人きりになれる時間を多くしてるだけだぞ」

「そ、そうか、有難い／＼／＼」

チヨロっ…これでいいのかよ、オラリオ最強。

「待ったかしら？」

「い、いえっ!?!…全然待ってませんよ？」

ふわりと石鹸の香りを漂わせながら彼女はやってきた。さっきの出来事もあるから心臓が高鳴ってしまう。罪悪感と謎の緊張が頭を埋め尽くす。

「どうかしたのかしら…？」

「なんでもないんでっ…早く行きましょう…」

ずいっと寄ってきて顔を覗き込んでくるもその肩を掴んで引き離す。

「?……そうね、じゃあ私の工房まで着いておいで」

先導するヘファイストスさんに着いていき、その工房まで向う。鼻をスンスンと鳴らすと部屋の中はやたら小綺麗で芳香剤の香りと炭の匂いが鼻をくすぐった。

「えっと、一応のデザインと用途はここにあるから意見をちょうだい?手直しとかあったら気軽に言ってね」

分厚いファイルを渡される。

適当な椅子に腰掛けてファイルを開く。隣に彼女が座ってきて一緒に眺めていく。

「剣はもうあるから大丈夫かな…ボウガンも大丈夫か…」

多数の敵に靦面なりベリオン、一対一に適当な閻魔刃、普通に使えるフォースエッジ。遠距離に使えるルーチエ&オンブラとその他モジュール。何かと使えるギルガメス。

今の俺に足りないのは…なんだろうか。

「魔法…?」

「?…何かあったかしら?」

「いや、俺って魔法に依存してるのかな…って」

しかしまた考えてしまう。

俺は誰かからもらいすぎなのではないだろうか。

銃も…剣も…全部に誰かのモノだったり貫い物だったりする。冒険者としてそれは普通なのかもしれないがどこかもどかしくなる。

それに新しい武器を次々と手に入れて俺はちゃんと今までの武器達を使いこなせているのか?

フォースエッジは?閻魔刃は?ベオウルフは?ルーチエとオンブラは?リベリオンは?数々の魔法は?

きつと、これ以上手に入れるのは傲慢というものだろうな。

「武器がダメなら防具ね…ていうか貴方、どんな防具を着けてダンジョンに行ってるの?」

「?…このままですけど」

「はあ!?コートにシャツ一枚って貴方ダンジョン舐めてるの!?!」

「ルーキーの頃は着けてましたけど…色々あって付けてませんね」

それから防具らしい防具は着けていない。

そもそも体を動かすのに邪魔でしかない、機動力が落ちてしまい殺されるのならこのポテンシャルを最大限に引き出せるこの格好がいいのだ。

「苦悩してるらしいな…主神よ」

いつからいたのか扉の付近に立っていたのはサラシを巻いた眼帯を着けた痴女みたいな女性だ。うわ

「そうなのよ…椿」

「椿…ああ、団長の人…」

ヴェルフがそんな事言ってたな。

へフアイストス・ファミリアの団長はおっかないって。

「ねえ椿…ダンジョンに何も着けてかない人っているのかしら？」

「ふむ、そんなの自殺志願者位だな」

「ちよ、そこまで言わなくても…」

「手前が噂に聞く『亡影』か…色々噂は聞いてるぞ？派手に暴れてるらしいな」

ギグツ!?

「何かしたのかしら？ハチマン」

「いやあ、俺は別に…何も」

「イシユタル・ファミアアとの徹底抗戦。たった一人の可哀想な女子を助ける為に何人もの団員を重体にしたと言えはいいか？」

「……………」

「ハチマン、そんな事したの？」

「先に仕掛けてきたのはあっちですよ。それに、俺達がやらなかったらオラリオは今頃火の海でしたから」

「そう、なら感謝はしても責める権利は私にも誰にも無いわ」

「そう言つて貰えると嬉しいです」

「それと、これは個人的に気になっているのだが…手前、朽ちぬ魔剣を持っておるな？」

「朽ちぬ魔剣…？どういう事？」

「ダンジョンにて、手前が魔力の刃を飛ばす魔剣を使っている場面

を見た事があるという話を何度も聞いた」

「!!」

「手前、ヴェル吉に魔剣を作らせているのか?」

椿さんの目が鋭くこちらを見据える。

へフアイストスさんも真偽を確かめるように見てくる。

「まさか、ヴェルフには自分の作りたいものを作って欲しいですよ。それに壊れる前提で作られる魔剣は俺も好きじゃないですし」

「成程…」

そう、壊れる事が分かっているのにそれを振るえる感覚が俺には分からない。意図せぬ破損ならまだ分かる、それが剣の本懐だからだ。しかし壊れる事が運命付けられて生み出される剣は…悲しいだろうに。武器の本質は…人を守る為にあるのだから。

「俺は…コイツら。闇魔刃にリベリオンにフォースエツジ、ベオウルフにギルガメス、ルーチェとオンブラとケルベロス、それと魔法…さえあれば他には要らないですかな」

「…その心は?」

「売ってる商品を見ても何も惹かれやしないから」

「儂の作品を見てもか?」

「勿論、俺はコイツらにゾッコン、めっちゃラブって奴ですから…これ以上浮気したら刺されるかもしれないんで」

「……………」

「まあ、俺なんぞに渡そうなんて思ってるなら…もっと、必要にしてる人に貸し出したりした方が儲かりますよ」

3人の間に沈黙が流れる。

ヤバい、言い過ぎたかもしれん。

「…貴方は冒険者としては失格よ。録な防具も着けないし、より良い武器があっても使わないなんて…貪欲じゃなきゃやってけない仕事なの」

「分かっています」

「でも…そう言えるアナタが好きよ」

「ありがとうございます…」

「だったらここにいる用も無くなったわね。早く家族の元に戻りなさい」

「はい…」

「貴方に武運を願うわ…」

「ハチマンですから…大丈夫ですよ」

彼女達に見送られてホームに戻る。

夕焼け色に染まった空は意外と短いようで長い時間あそこにいた事を証明していた。きつとヘアアイストスさんと関わっている時間も俺の中ではかけがえの無い時間になっているのだろう。

「惹かれる…ね」

考えもしなかった。

天界にいた頃は果てしない時間、腕と鎚を振るっていたから、ただ強い武器を作ろうと必死だったから。

「さ、椿。日も暮れて冷えるわ。中に入りなさい」

そんな格好なんだから、と付け加えて室内に入ろうとするも椿は微動だにしない。

「椿…?」

「主神よ…あの男が言ってた言葉に嘘はあったか？」

「冗談言わないで…ハチマンはああいう時には嘘はつかないわ」

「何も惹かれない、か…フフツ」

「椿…?」

「決めたぞ主神！儂はあの男に儂の武具を身に付けさせる!!」

「え?」

「絶対だ！絶対彼奴の愛刀と呼ばれる位最高の傑作を持たせてやる!!」

キラキラとしたその顔には何とも言えず、彼女に火をつけたハチマンに少し妬いてしまう。

ホント、女たらしね

「「「「「いっただつきまーす！」「」「」「」」」」」

「今日の料理当番は命さんか…うん、サバの味噌煮が美味しい…箸が進むぜ」

「魚はあまり食べたことないけど…うん！美味しい！」

頬を赤らめて照れる命を他所に皆が美味しい美味しいと箸を動かす。

「うーん…」

「神様、どうかしましたか？ハチマンを見つめて」

「ねえ、ハチマン君。君、石像のモデルやった？」

ピタッ……………

「やって、ませんけど？」

「そうだよねえ…今日は何をしてたの？」

「今日は…アラル神父達と特訓して…それからハファイストスさんと話をして…」

うさみちちゃんみたいな目をして見てくるヴェルフを他所に神様は淡々と質問を繰り返していく。今日の昼前についてばかり聞いている。

「どうかしたんですか？ハステイア様」

「いやね？今日はハファイストスと風呂に行ったんだよ」

「あの、女神浴場ですか？」

「うん、男子絶対禁制のね。それでそこには石像が何体か置かれてるんだけど、そこにハチマン君そっくりの石像があつたんだよ」

「ええええー！！？」

「…趣味が悪いツスね」

「それでどうしたんですか？」

「その石像なんだけど…少し目を離れた瞬間に消えていたんだ」

「！！！！」

空気にヒビが入った気がするがポーカーフェイスを保たせてマツ缶に口を付ける。俺に甘いのはお前だけだよ…擬人化したら即告ってフラれるまでである。フラれちゃうのかよ…。

「まさか神様…ハチマンは覗きをするような人じゃありませんよ!?ヘルメス様じゃないんだから…」

~~~~~

「はあツくしよい!!」

「ちよつとヘルメス様!?汚いですよ…誰かに噂されてるんじゃないんですか?」

「アハハ…そうかな、可愛い子ちゃんなら歓迎だな」

「もうやだこの主神…」

~~~~~

「で、どうなんだい?ハチマン君」

「俺が覗きを進んでするとも?」

そう、仮にも千葉の紳士である俺は女風呂を覗こうなんて馬鹿な真似はしない。自分からは絶対しない。

だが脳裏によぎるのは罪悪感。

このまま隠し通すのだからできるだろうけど…きつと心はそんなの許さないだろう。脇の銃はほのかな冷気を発している。まるでそれが正しい選択だと言おうとしているように。

「少し…聞いてくれますか?」

俺は話した…訓練が終わり、閻魔刀で帰ろうとしたら次元が繋がってしまい、余儀なくその場に潜んだ事を。

神様やベル達は軽蔑することなく俺の話を聞いてくれた。途中でどもってしまった俺が話し続けるのをじっと待ちながら。

「……それが、今日の出来事でした」

「嘗てあの銭湯に立ち入って…タダで済んだ者はいなかった。ヘルメスすら潜入できない程嚴重な警備故にだった。1人だけ成功させた神がいたけど奥さんにそりやもう酷く叱られていた」

「はい…俺も罰は覚悟しています」

「罰はもう受けたじゃないか…ハチマン君」

「え……」

「君の話術ならボクたち神を騙すなんて造作もない事の筈。それなのに騙さなかったのは君がやつと自分の心に従ったからじゃないのかい?」

「……………」

「キミにはいつも嫌な立ち回りを任せてるから…今回の件はこれで不

問とするよ。皆もいいかい？」

「「「異議なーーーーし!!」」」」

ああ、本当に、ここに来て良かった。

「それとハチマン君、壊した像は何とかして元に戻すんだよ」

「目星は付いてますから大丈夫ですよ」

その後、寄付された余り物のアポロンの石像が設置されたがその余りにも不評さに客足が減った為一日で撤去されたのはまた別の話。

カポーンと音のなるホームに設立された風呂に男3人で入る。いつもは別々というか自由な時間に入っていたが今回は何となく一緒に入る事になった。

「ふいーーーー、沁みるなーーーー」

「癒されるーーーー」

「いい湯だな」

なんてほのぼのしているとベルが口を開いた。

「ねえ、次のダンジョン探索…春姫さんの事は連れていく?」

「俺は本人次第でいいと思うが…ハチマンはどうだ?」

「俺は…彼女に戦って欲しくないと思う。確かに春姫さんの魔法は強力だけど俺達はそれ目的で彼女を引き入れた訳じゃない。もし戦いたいと言っていたらそれはきつと俺達の力不足から出した結論かもしれない。だからってホームで燻らせるのもどうかと思う」

「…という?」

「ハブリりは…良くない」

うーん、と水面を揺らせながら話し合いは続く。

「結論俺達が強くなったらダンジョンにも連れて行けるのでは…?」

「きよ、極論…!」

「しかしハチマンの論にも一理ある…新人の為にベテランがついて行くのはどのファミリアにも当てはまることだ。だがな…」

「このファミリアにベテランがない…」

うーーーーん、と再び思い悩む。

「きつと、俺達のこの思いが彼女の足枷になる。俺達は春姫さんがどこまで戦えるか分からないしその伸び代も図る術を持たない。ゆっ

くり、時間を掛けて考えさせてやるのが先決だ。俺達に出来ることは彼女の選択が後悔に苛まれない様に全力を尽くすだけになる」

「そうだね、決めるのは春姫さんだからね」

「だったら俺達は後腐れなく……」

「「冒険をしよう」」

よし!!と立ち上がる。

「背中でも洗いっこするか!ベル!背中見せろ!」

「うん!ハチマンも後ろ見せて!」

「俺もやるのか……ヴェルフ、魔腕で背中洗うけど良いよな」

各々がそれぞれの思いを込めて背中を洗い合う。

明日は……フレイヤ・ファミアか……

いつも以上に気を引き締めないと……殺されるかもな。

#41 竜の少女と不調の俺

生きとし生けるもの全てにおいて好調、不調が存在する。それほどんな強者にも有り得る事だ。ほら、かの有名なうまぴよいするダービーでもそんなステータスあるでしょ？ ケーキ食べさせれば問答無用で絶好調になる魔道具は全国の社畜さんには是非配って欲しいな。

閑話休題、俺は今とんでもなく不調だ。

倦怠感、頭痛、高熱 e t c . . . : 体調不良のフルハウスなもんだからベッドで眠るしかない。フレイヤファミリアの所に行きたくないから風呂上がり体を拭きもせず外に出た訳じゃないよ。ホントだよ

「じゃあハチマン：僕達ダンジョンに行ってくるから安静にしててね」

「おう：気を付けろよ」

ベル達を見送り何とも言えない不安に駆られながらホームに戻る。一足先にバイトに行った神様もこんな気持ちなのだろう。

カチン：コチン：

大きくてのっぼだが新品の時計が時を刻む音を反響させている。神の恩恵故かはたまた悪魔の力のせいなのかは分からない。それ程体に対する影響が強くなってきた。

考えてみればオラリオ中の冒険者に訪ねたところで悪魔由来の力を持つのは俺くらいしか居ないのだろう。葉山に関してはそもそも冒険者じゃないからカウントしないが。

比企谷八幡は人間から生まれたはずなのに：こんな力を持つ理由は一体どこから来ているのだろうか：スキルは本人の思いに呼応して発動するらしいが俺は内心とんでもない事を考えているのだろうか。

「ダメだ：ネガティブな事ばかり考えちまう」

こういう時は寝るに尽きる。

いや、待てよ？ そういえば俺がオラリオに来てからだよな：悪魔が出現したのって：ベオウルフにギルガメス、葉山、アラストル、マキャヴェリ、ベリアル、アルゴサクス：他にいたっけ：後は、俺の心の中

のアイツか。

「訳が分からんな…」

震える体に鞭を打ちコートを羽織る。ミアハさんの所で薬でも買おう…そうすれば少しは楽になれるだろう。

「うう…寒…」

季節的にそんな事なのに風を感じるだけで震えが止まらない…本格的に弱ったな、と思いながら街を練り歩く。

おぼつかない足取り…家を出た時はハッキリしていた意識も少しラグイ。

「よお、体調悪い子ちゃんなのか？」

「アラル…助ける…」

「はいよ」

肩を担がれて教会に運ばれる。適当な長椅子の上で寝かされて診察?を受ける。

「アルゴサクスを取り込んだ影響か…一気に受け入れすぎだ。昔居たんだよ、アビゲイルっていう大悪魔を取り込んだクソザコナメクジの悪魔がよ…ま、キャパオーバーで全然力を使いこなせてなかったがな」

へー、と流してステンドグラスを眺める。

「取り敢えず暫くは休め…じゃないと、死ぬぞ。この短期間で傷付き過ぎだ」

「……わーったよ」

「ただいまハチマン！体調はどう？」

「無論大丈夫だ、探索はどうだった？最近良からぬ噂が広がってるらしいが…」

そう、最近オラリオでもつばらの噂になっている喋るモンスターの件。以前出会った事があるがそれっきりの為あんまり気にしていなかったが…と考えた所でベルの後ろに隠れている少女の影を見つけた。

「ベールう？まーた女の子を誑かしたのか？そのうち刺されても知

「らんどぞ?」

「そ、そんなのじゃないよ!この子は…神様が帰ってきてから話をしよう」

「どうやらこの少女、問題を抱えてるらしい。」

「ただいまあー!ハチマン君、大丈夫だった?」

「まあ…そんな事より、ベルが大切な話があるらしくて」

「ぬわあんだってえええ!今行くよ!!」

バイトから帰った神さまを迎えて俺も談話室に向かいベルから話を聞く。

「喋るモンスター!?!」

ベルのサラマンダーウールを被ってよく見えなかった少女は限りなく人間に近いモンスターだったようだ。さり気なく懐に手を入れて何時でも撃てる用意をしておく。

「俺としてはホームに置いて俺は全然構わないが、他の冒険者達の目が気になる。暫くは事実上の軟禁状態になるが…」

不安なのは俺達が冒険者であるという点だ。数え切れない程モンスターを手に掛けている。そこ辺り割り切れないのがリルル力を始めとした皆の心情なのだろう。

「モンスターは下界の住人の、君達の敵…争わなければならない存在だっていうのはわかってる。でも、こうまで怯えられちゃあ見捨てることはできないよ」

きつと神様にとってもこの子の存在は謎なのだろう。

「それじゃあ……!」

「ああ、この娘はしばらく保護しよう」

とまあ、このナンタラって種族の女の子を我が家で保護することになったのだが、肝心の話を忘れてる。

「そういえばこの子の名前は?」

「!!!」

「身元の確認は必要だろ…ま、モンスターに名前があるか疑問だがな」

モンスターの少女に視線を移すとベルの方にべったりして顔をうずくめてしまった。どうやら俺の悪人面はお気に召さなかった様だ。

「ま、そこ辺りの話はお前達で決めてくれ…俺は寝るよ。…少し疲れた」

部屋に戻りベッドに倒れる。

「ゲホツ…ゲホツ…ガッ…！」

ホント、どうしたんだろう…俺。

死ぬのかな…なんて思っていると部屋に足音が近付いて来る音がした。

「失礼します、ハチマン殿…」

「命さん…どうかしたんですか？」

ズカズカと歩いてきた彼女はベッドまでやって来るとおもむろに枕をひったくってきた。

「やはり、体調がここまで悪く…今すぐ人を…！」

赤く染った枕の裏側を見た命さんはどこかに行こうとするが肩を掴んで首を横に振り止める。

「大丈夫です、ゆっくりしてれば治るらしいので…暫くはあんまり動けないだけです」

「で、ですが！」

「ただでさえあの子でいっぱいなんです…俺が足を引っ張る訳にはいきません。せめてこの件が片付いたら然るべき場所には行きますから…」

お願いです、と肩を掴む力を強めると彼女は俺を見据えて続けた。

「分かりました…ですが、極力戦闘には不参加でお願いします。それと素人目線でも危なくなったら直ぐに医療機関に送りますからね」

ふう、と一息付くとベッドの縁に腰を下ろす命さん。寝てては失礼だと起き上がろうとするも胸に手を当てられて制される。

「そういえば自分とハチマン殿はあまりぶらいべーとで会話した事が無いな、と思い訪ねたのです」

「あー、俺も命さんもあまり自分から喋りませんもんね」

最初に会ったのはベル達にモンスターを押し付けた後だったんだっけ。俺が追いかけた時に出くわしたんだ、今となっては遠い昔のようだ。

「改めて、春姫殿を助けて頂き…ありがとうございます」

「いいってことよ…同じファミリアじゃないですか。それに困ってた春姫さんを見捨てる理由なんてどこにもありませんでしたし」

「…、ハチマン殿はどうしてそこまで分け隔てなく誰かに優しいのですか？」

フツ、と鼻で笑う。

「優しくかったら俺は人に剣を振るいませんし…どっちかっていうと哀れみに近い感情なんですよ」

一息ついて俺はポツリポツリと言葉を探しては繋ぎ合わせていく。「力が大きくなるにつれて誰とも知らない記憶が脳裏に過ぎるんです。日の目を見れない人生…太陽とは真逆の場所にある闇で必死に空に手を伸ばす異形の腕…そんな誰かの記憶にあてられた俺は春姫さんや、あの女の子にできるだけそう思って欲しくないと助けてようとしてるだけです。だからこれはベルみたいな高潔な善心ではなく経験に基づく偽善心なんです」

知っちゃえばその程度だと笑い飛ばせる理由だろう。俺でも自分が嫌いになる。

「それでも、偽善心でも、救おうとする心に偽物も本物もありません。きつと大切なのは…救い方や心をしつかり汲み取れるかなのでしよう」

何科を決心したかのような横顔をする命さん。

「吹っ切れました？」

「はい！ありがとうございます！」

ベッドを立ち部屋を後にしようとする命さんはふとこっちを見る。

「それと、彼女の名前が決まりました。ウィーネとなりました」

「いい名前だ…美人になる名前だ…」

そうですね、と返す彼女が扉を開けると盗み聞きをしていたのだから他の皆が一斉に倒れる。

「あはは…それじゃあボクは寝るよ！おやすみ！」

「あっ神様!？」

蜘蛛の子を散らすように部屋に戻る奴らをベッドから見送りそろ

そろそろ重くなってきた瞼を閉じる。

窓の外を見るとオツドアイの鼻がこちらを見つめていた。

「盗聴は関心しないな…」

「アラストル…それは!?!」

「なんで俺が何10年とちまちまと人間の死体を集めてたか…これがその答えだ。いつか奴が現れることを信じて待ってた俺の勝ちだな」

「比企谷にそれを食わせる気か…!」

「道は一つしかないんだぞ? 黙って見てたら奴は死ぬ」

「っ!!くそ!」

「そう悔しがるなよ葉山くん。やっと出来たお友達が助かるんだぜ? 本望だろ?」

黙りこくる男を前に異形の悪魔はクルクル回る。

「猛特訓による身体の強化、どさくさに紛れて補強用のギルガメスの移植手術をしようと思ったがアホロンのお陰で難なく成功。閻魔刃、リペリオンの精製、動力炉と成りうるアルゴサクスの吸収…そしてアビゲイルに続きムンドウス…ガタが来たらこの実を食わせて限界を越えさせる。フフハハハハ…楽しみだ」

その手には禍々しい林檎のような実が握られていた。

「あ、そうだ…葉山、アイツにこれを渡してくれ…不届き者の亡骸だ」

朝、少しは体調が良くなったが気は抜けない。

「今日はウィーネ君みたいな喋るモンスターの情報を集めてもらいたい。今の状況じゃ誰が敵になってもおかしくない…細心の注意が必要だ、どうか気を付けてくれ」

神様のいうとおり、俺達には情報が欠落している。その点には賛成だが…どう集めようか…一応外に出て宛もなく彷徨うが特に何も得られず中央広場のベンチで休んでいると見知った人がやってきた。

「やあ、比企谷」

「奇遇…じゃなさそうだな葉山」

「まあね、この前渡されたリストを辿ってみたよ」

「結果は？」

「どうやら奴らは一つのルートからモンスターを仕入れてるらしい。これが巧妙な手口だからどこからとはまだ分からないな」

「そっか、サンキュー。後は危ないから手を引いてくれ。お前といえど闇派閥に目を付けられたらひとたまりもないだろう？」

「そうさせてもらうよ」

あ、それと…と葉山は肩から下げているギターケースを渡してくる。

「何これ」

「アラル神父からの贈り物…らしい」

開けてみれば紫色の鋭利なギターが入っていた。

「ネヴァン…」

「知ってるのかい？」

「や、何でもない…ありがとう」

立ち上がり葉山の視線を背中に受けながらホームへと戻るも別の視線を感じる。この気味の悪さは女神フレイヤだろう。約束を破れたのを不服に感じているのだろうか。

「よオ、プレゼントは受け取ってくれたか？」

「アラル…？ストーカーに成り下がったのか？」

かなり痛めのゲンコツを喰らう。

「ばーか、途中絡まれたら面倒だろ？ホームまで担いでつてやんよ」

有無を言わさずアラストルに担がれホームまで運ばれる。

「ありがとう…そこまでしてくれるなんてアンタにしては珍しいな。今度は何を企んでるんだ？」

「別に…？愛弟子の世話を焼くのは師匠の務めだからネ！達者でな！」

手を振り後にするアラストルに何とも言えない不安を覚えながら門を潜る。丁度昼時、今日は春姫さんの当番だった気がする。

「ただいま…戻りました」

「おかえりハチマン君、どうだった？」

「一部富裕層の間で喋るモンスターの取引がされてるのを見つけれ

た。どうやらモンスターの仕入先はたった一つらしいです」

「つまりウィーネ君の仲間はいると…」

「まあ、こんな事されてるなら数は少ないでしょうがね…希望が無い訳じゃないですね」

「分かった…ハチマン君はご飯を食べてゆつくり休んでくれ」

「はい……」

談話室からキッチンに向かうとメイド姿のはるひめさんが丁度昼ごはんを作り終わった所の様だ。

「あつ！ハチマン様」

とてとて、と駆け寄って来た彼女は皿に盛られたサンドイッチを差し出してくる。

「どうか、味見をお願いします…ちゃんと作れたか私一人では不安で…」

「ええ、春姫さんの腕なら必要ないんじや」どうかお願いします!!」あ、はい」

尻尾をブンブンさせる春姫さんの目の前でサンドイッチを一口に運ぶ。

朝一で買った採れたてのレタスはシャキシャキしておりハムやトマトと美味しくマツチングしている…トマト？

「俺、トマト嫌いなのに…美味しい」

「本当ですか!?良かった…!」

空も飛べるんじゃないの?と思えるくらいブンブンしてる尻尾とは真反対に胸をそつと撫で下ろす。

「今からお庭にいるクラネル様とウィーネ様に届けようと思っているのですが一緒にどうですか?」

「や、俺は苦手意識持たれてるっぽいんで遠慮しますよ」

「ハチマン様!めっ!ですよ!」

「?」

「歩み寄るからこそ子供に好かれるんです!行動あるのみですよ!」

「ええ…?」

ずいっと詰め寄る彼女の謎説得により無理やり外に連れ出される。

芝生の広がる庭にてベルとウイーネは抱き合っていた。児ポかな？

「ハチマン？」

「よ、良かったら飯、食わないか？春姫さんが作ってくれたんだ」

「うん、全然大丈夫だよ。ね、ウイーネ」

俺を見た途端ベルの後ろに隠れたウイーネはおずおずと前に出てくる。その視線は俺と横にいるベルを行ったり来たりしている。

「あー、自己紹介をキチンとしてなかったな…ハチマン・ヒキガヤだ。えと…よろしくな」

視点を合わせて髪をポリポリと掻きながら挨拶をする。元来自己紹介を真つ当にした事がなかった為慣れない。

「言葉足らずだけど優しいよ」

ベルのひと押しもあつてかウイーネは俺を見る。

「よろしく…ハチマン」

「えと、親睦を深める為に昼食を取らないか？」

「？」

「ハチマン様、言葉が難しいと上手く伝わりませんよ」

「ああ、すまんすまん…仲良くなりたいたいからご飯を食べよう？」

なんだかストレートに伝わった気がするが田だろうか？

「いい…よ？」

「あはははははっ」

「ふふふふふ…」

「何笑つてんだよお」

ベルと春姫さんに微笑まれ理由が分からずとも俺たちはサンドイッチに手を伸ばす。きつとこの関わりは楽しいだろうがそれ相應のリスクがともなうのだろうか…なんて考えながら。

片翼 モンスター の定義

今一度自問する。

モンスターとは？ダンジョンに潜る俺たち冒険者や街で暮らす人々にとつて必ず相対する絶対悪 or 人ならざる者を総称したもの。「分かんないなあ……」

では逆の立ち位置から考えてみよう、人ってなんだ？と。人、群れを成しその欲をぶつけてくる者達。やられるからやり返すとすぐ被害者振る。食物連鎖の頂点に君臨するがその実感が無いのだろう、ベート・ローガはその点を重々理解しているからあの物言いになるのだろう。

「どうしたの？ハチマン」

「俺、冒険者向いてないのかなあ」

モンスターを狩る冒険者としてあってはならない考えをしている。きつとベルや皆も同じ思いを抱いているのではないのだろうか？

「そんな才能や武器を所持しているんです。そのつぶやきはここだけにしないと嫉妬に駆られた冒険者様に後ろから刺されますよ？」

「ハチマンだいじょーぶ？」

「ああ、心配ない……」

リルルカに軽い忠告を喰らうがそもそもその悩みの種はベルの膝に乗っている彼女が原因なのだ。ウィーネ、珍しいとされるヴェイブルだけでは飽き足らずさらに珍しいであろう喋るモンスターときた。もしベル達と出会った時彼女を追っていた連中が諦めていなかったら厄介だな。消すのも手だな、どうせ汚いヒトなのだから……そんな奴らが死んだ所で悲しむ人なんかいないだろう。

「ハチマン？どうかしたか？」

ヴェルフが顔を覗き込んでくる。

流石ファミリアの兄貴肌、良く俺達を見ている。嬉しい反面ちよいとやりずらさを感じる。

「や、この後4人でダンジョンに潜るだろ？後衛の方に控えようかなって思ってたな」

「珍しいですね、いつもは先頭で大暴れしてらっしゃるのに」

「俺だって病み上がりだから足引つ張るよりかは後衛に徹した方がいいと思っただけ」

チクつと刺さる視線の方を見ると命さんがうんうんと頷いていた。これは彼女に以前に提案された俺が探索に同行する妥協案だ。

「確か19階層だよな、だったらサラマンダーウールを着た方がいいのか：ちよつと待っていてくれな、赤のコートに着替えてくる」

部屋に戻るべく廊下を歩いていると後ろから後を追うようにヴェルフがやって来た。

「ヴェルフ、どうかしたか？」

「ハチマン：：お前、今回も無理をするのか？」

隠し通せていなかった、いや、それなりに付き合いが長いのだ。これくらい見透かされるだろう、これが仲間ってやつなのかな。

「しなくていい無理はしないようにする。お前達に何かあったらヘファイストスさんやタケミカツチ様やソーマに合わせる顔が無いし。それに俺は、ほら、頑丈だし傷の治りも早いからな：：ただでさえ少ないファミリアの団員が減ったら俺だって悲しい」

だから、と言葉を紡ぐ。

「俺は俺に出来ることを可能な限りするだけだ」

そう、ファミリアのメンバーは勿論ウィーネも害から守り抜く。彼等彼女等の冒険にケチも邪魔も作られた舞台も要らない。

部屋に戻りクローゼットを開ける。目当てのものを取り出し紫のコートと取り替える。赤いコートを着ると何故かダンテさんを思い出す。『気楽にやればいいだろ？』とか今にでも聞こえそうだな、そんな場合じゃないのに。

「さてと、行くか」

「その前に！ハチマン様、18階層とは言え4人での探索ですのでこのリストのアイテムを買ってきて欲しいのですがよろしいでしょうか？」

「？、分かった」

「それでは1時間後にいつもの所で集合です！」

俺を子供か何かと勘違いしているのだろうか。買い物なんて人混みの中でも針の穴を通すように歩ける俺には20分もあれば余裕である。

「……」

しかしやはり現状最も危惧すべきなのはこの不調がいつまで経っても良くならない事だ。

「いらっしや…ハチマン・ヒキガヤ…」

「ども…えつと、カサネさんと、ダフンドラさん？」

「ダフネとカサンドラ!!全く…人の名前くらい覚えなさいよ!」

やってきたのは「ミアハ・ファミリア」の店、カウンターの奥に人影を感じる。神威は感じないからミアハ様は居ないのだろう。…好都合だ。

「至急で頼みたい薬があるんです…レシピと金はここに」

そう言い1枚の紙と材料に大きな麻袋に入った金を渡す。所詮カジノでぼろ儲けした金だ。惜しくはない。

「わ、分かったよ」

金の多さに気圧されたのかダフネさんが奥に引っ込んでから暫くするとナアーザさんがすつ飛んできた。

「ハチマン…いくら何でもこれは受けきれないよ…」

「いいや出来ます、【調合】のスキルを持つ貴方ならば」

「こんなの…何に使う気?」

「自分以外に何があると?」

「だったら、尚更ダメ…」

「立派な医者気取りですか…だったらもつと金を積みましょう」

懐からさっきの金袋の一回り大きい袋を取り出す。

「いくらお金を積まれても…」

「ナアーザさん、そういえば今月の取り立てはもうそろそろでしたね?」

「!？」

「ダフネさんやカサンドラさんがファミリアに参加して収入が増えた

所で莫大な借金の前には焼け石に水…更に加えてミアハ様は店の品をばら撒き赤字続き。簡単な事ですよ…リスト通りの薬を渡してくれば当分は借金に困ることも無い…ミアハ様との時間も増えるんですよ?」

それは彼女にとっての悪魔の囁きだった。ミアハ様に恋する彼女にとってメリットでしかないその条件は釣り針の無い餌と同意義だった。ポーションを薄めて定価の3倍の値段で売りに出してまで稼がなくてはいけなかった彼女はこれを受けざるを得ない。

暫く熟考したナーアザさんは店の奥に引つ込む。4〜5分した後戻ってきた彼女の手には箱があった。

「多用は厳禁…本当に死にそうな時しか使っちゃダメ。使用后落ち着いたら暫く休む事。それなら…渡せる」

「了解しました…勿論、自分の体なのでそこは分かっていますよ」
箱を受け取り中身を見る。小さな小瓶が20個…中にはオレンジ色の液体が入っている。

「教えて、何をする気なの?」

「できる無茶をするだけです…」

そう残して店を後にする。

「ねえナーアザ、【亡影】に渡した薬は?」

「……………」

「お待ちせ、待った?」

いつもの噴水前でポケーっとしてしていると慌ただしく駆け寄ってくるベルを始めリリルカとヴェルフ、そしてリユースさんとアイシャさんがいた。

「いや、全然…後ろの2人は?」

「今回の探索を円滑に進める為に頼んだら…」

少し胃をキリキリさせたリリルカの説明を遮る。

それ以上はいけない、ベルのヒロインレースは倍率が高いからね。

「まあ、なんとなく読めた…それじゃあ、よろしく願います」

まったく、ベルも罪な男だな。

ダンジョンに足を踏み入れた俺たちは前衛に経験値を稼ぎたいヴェルフとベル、そのカバーにリユーさんとアイシヤさんにリルカと挟み撃ちにならないよう対応する殿の俺。

しかし後ろから来るモンスターは少なくヴェルフ達が率先して片っ端から倒してしまう。

「……………」

後ろから見るとベルの戦う姿は何処か辛そうでその理由は十中八九ウイーネにあるだろう。

気持ちは分かるがそれで死んでしまつては元も子もない。

「くっ……い！」

ほら見ろ、攻撃が一瞬疎かになつた隙にモンスターが攻撃を繰り出そうとする。

バアン!!

モンスターの脳天に穴が開き素材と化す。ベルが申し訳なさそうに見てくるが顎でクイツと前を刺し集中して探索することを促す。

「ベルさん、何かあつたのですか?」

何かを察したリユーさんが質問を投げかけてくる。

「さあ……思春期なんじゃないんですか? 成長が楽しみですね」

「はあ……?」

ベルの変化を感じ取りながらやってきたのは18階層。ちよつと前までは死に物狂いでやっと到達したというのに……頼れる助っ人達のお陰もあるだろうが着々と『力』を得ている実感を感じる……いや、感じていたのだが今の俺の状況を考えると少しやるせなさを感じる。

「じゃありり、お願いね」

「かしこまりました!」

リユーさんとアイシヤさんを引き止める役のリルカが既に営業スマイルで2人をリヴィラの街へ連れ込んで時間を稼ぐ。

「確かここ辺りで会つたんだよ」

深い森の中、ウイーネと出会つたと思われる場所で俺達は辺りを見渡す。やはりそう上手くはいかないか、と思いつていると木の影からフードを被つた謎の人物が歩いてきた。

(冒険者か?)

「――同胞ノ臭いがスル」

声を聞いた途端一斉に距離をとる。

「同胞ヲ攫っているのハ、貴方達か?」

「ツ!!」

獯猛な獣のような殺気をピリピリと感じつつ俺は言葉を選ぶ。

「…同胞?―一体何の話だ」

「…いや、違ウ。血の臭いがしない。もしや、貴方達ガ、フェルズの言っていた方々ですか?」

必死で選んだ言葉も無視され麗しい女性の声をしたソレは次々と言葉を発する。

「貴方達二聞きたい。我々は共生できるト思いますが?」

その言葉で疑問は確証へと変わった。彼女も喋るモンスターだ。

「我々ハ、手ヲ取り合えるト思いますカ?」

「なっ…」

絶句するヴェルフとベル。

かく言う俺も冷や汗をかいている。

「貴方達ハ私達ヲ殺す。私達も貴方達ヲ殺す。…定め、なのでしようか。わかり合えないのでしようか?私ハ…日の光ヲ浴びたい。この閉ざされた奈落デはなく、光の世界で羽ばたいてみたい」

そう言い彼女はフードを取る。それはウィーネと同じく整った顔立ちをしていた。

「分からない…俺達は殺さなくても他の奴らは殺すのかもしれない、アンタ達が殺さなくても他の奴は殺すかもしれない。答えなんて当事者達との間でしか存在しない」

1歩、彼女に近付くと釣られて彼女は1歩下がる。

「きつと、それも答えなんだ」

「そう、ですネ…貴方達ハ、何か違うような気がする…少シ、期待しています」

そして、両膝を深く折って屈んだ瞬間、彼女は跳んだ。宙高く舞い弧を描いて何処かに飛んで行った。

「冗談だろ…本当に、あいつ…」

「ウィーネと同じ…」

後ろにいるベルとヴェルフの声を聞きつつ地面に落ちた彼女の『羽』を拾い上げる。

18階層から帰っている途中、5人組のパーティーとすれ違った。赤い槍を持ってゴーグルをした男が先頭に立っていた。

「……………」

ただの同業者に何とも思わず視線を前に戻すと明らかにベルが緊張していた。

（ああ、あれがきつとウィーネを追っていた連中なのだろう）

そうと決まれば早速決行だ。

曲がり角を曲がって奴らの視界から外れた所でクイツクシルバーを発動させる。

（こんな体じゃいつまでもつか分からない…）

時間との勝負だ、走って奴らの元まで向かいつつ幻影剣を構える。実体のある剣だと足が着いてしまいそうだからだ。

「1つ…2つ…3つ…4つ…」

断頭、四肢切断、胴体分断、縦二分割…惨い殺し方をしていく。できただけモンスターの仕事に見せかけるように。

「最後だっ…ううッ!!」

全身が刺されるように痛む。頭は鈍器で何度も叩かれ脳みそを鷲掴みされたような感覚に陥る。

「タイムアップか…せめてッ！」

ベオウルフで天井や壁を蹴っては殴り傷を付ける。丁度亀裂の奥にはモンスターが見え、もうすぐ突き破って来る勢いだ。

ベル達の元に全速力で戻りクイツクシルバーを解除する。

「ああああ…!!」

遙か後方から余りにも小さい叫びを聞き届け地上へと戻る。

「ッふふふふ…」

ふと乾いた笑いが込み上げてくる。

「ハチマン、どうしたの？急に笑い出して」

「いや、ただの思い出し笑いだ：気にしないでくれ」

モンスターの彼女やウィーネですら歩み寄ろうとしていたのに俺はそれすらせずに邪魔者の排除に取り掛かる。

(これじゃあ、どっちがモンスターなんだろうな)

ナーザさんに作って貰った薬を飲み干す。

ホント、嫌な役だな。

重責 血濡れの代償

きつとこれでいい、これでいいんだ…。

「「ただいま」」

これを言う為に仕方なかったんだ。

どうせ汚れた手だ。

そう言い聞かせるも自分への嫌悪感は募るばかりだ。

千葉の時とはまた違う。

死ぬしかない者を殺めて見とるのではなく、殺したい者を殺した。

(…代わってくれよ)

家族を守る為ならなんでもする…だからこの辛さを感じないように。

「はちまん…?」

「?、どうかしたかの?ウイーネ」

「ううん…なんでも」

「そうか」

そう言い微笑む彼に「ヘスティア・ファミリア」の中で付き合いが長いベルやヴェルフ、リリルカ、ヘスティアは言い得ない不気味な感情を覚えた。声や口は笑っていてもどうしても目は笑っていない。

(ハチマンはあんなに表情がコロコロと変わってないよね)

(アイツ、言葉遣いも妙に変わってるような…)

(まるでリリの昔を見ているような…)

(嘘は吐いてなさそうだね)

「ねえ、ハチマン君。久しぶりにステータスの更新をしないかい?」

「かまw…分かりました」

ヘスティアの後に続くハチマン。

比較的付き合いの短い命と春姫も彼の異変に首を傾げざるを得なかった。

「それじゃ始めるよ…」

上着を脱いで傷だらけの背中をヘスティアに預ける。
そこに血を一滴垂らし彼のステータスを踵にする。

「ツ!!!」

神聖文字はノイズ塗れになり所々が文字化けし、禍々しく黒く濁っていた。常人ならば有り得ない、ある筈がない。誰もが見ても明らかにイレギュラーがそこで発生していた。

(これは、神の恩恵が消されて…いや、侵食されてる?)

「どうかしましたか?」

ヘスティアの動揺を聞いたにも関わらずどこか嬉しそうに彼は尋ねた。

「ハチマン君…君は一体、自分の体に何をしたんだい?」

うつ伏せの体制から起き上がり首から下げたネックレスを眺めるハチマン。

「何をした?ですか、もっと強くなる為に必要な事をしたまですよ。

これも必要な事…結果オーライじゃないですか」

「結果オーライって…そんな体でどうしてそんな事が…」

「アポロン・ファミリアの奇襲で心臓を激しく損傷した俺はマキヤヴェエリのラボに運び込まれ魔界金属ギルガメスを心臓の代替をさせる事で丈夫な骨格と命を手に入れた」

「っ……」

責め立てる気は無いものの責任を感じるように話しヘスティアに強い気をさせないよう牽制する。普段の彼ならそうはしないだろうというの是一目瞭然だった。

「強い外殻を手に入れてもそれを動かす為の炉心がしょぼかった。歓楽街でイシユタル・ファミリアと対峙した際に出てきたのはエネルギーの塊であるアルゴサクス。アイツを吸収もとい食してこの身体を運用するにあたる力を手に入れた」

「アルゴサクス…だって…」

「中々、強かったですよ」

魔界三大勢力の一強。

神々が天界にいた時代に猛威を振るっていたのは記憶にある。

「次は心、急な成長で心が壊れてきた。だからねむってたおれがいる」
「え……」

「だいじょうぶですよかみさま。おれ、まだまだつよくなるんで……」

「そんな、ダメだ……!」

「かみさま みんなもういーねもまもるのもっともつつかいつぶしてください」

「……………」

「冗談ですよ、じょうだん。じゃあ、戻りますね」

ヘステイアの目の前から消えるハチマン。クイツクシルバーで時間を止めたからだ。

「皆、聞いてた?」

きい、と開いたドアから盗み聞きしてたファミリア一同が入ってくる。誰もが深刻な顔をしている。

「神様……ハチマンは……」

恐る恐るベルが聞く。

「部屋に戻ったんじゃないかな……瞬きする暇も無かったよ」

「出ていった訳じゃないんですね」

ほっと胸を撫で下ろすベルだがそうしてる場合じゃないのは彼も重々承知している。

「八幡の話かい?混ぜてくれよ」

「葉山さん!」

窓の向こうにいつの間にかいた葉山。慌てて窓を開けると軽い身のこなしで館内に入ってきた。自称ハチマンのストーカーもといサポーター葉山隼人。

「質問だけど、八幡が強くなって君達に何か不利益があるのかい?」

「えっ……」

「君達の戦力が大きくなるだけじゃないか。ダンジョン攻略も戦争遊戯でも事が有利に運びやすくなるだけじゃないのかい?」

「でも、ハチマン様のやり方は命を縮めるやり方です!認められるものじゃありません!」

リリルカが声を荒らげる。

まるでハチマンを戦力としてしか見てないような物言いに腹が立ったからだ。

「そう怒らないでよ。元はと言えば八幡が悪いんだ。これはね、八幡のエゴが生んだ結果なんだよ」

「ほう、続けるよ、金髪」

固く口を閉ざしてたヴェルフが口を開く。

「八幡は怖くてしようがなかったんだ。やっと出会えた、やっと手に入れた『本物』の家族。何人たりにも傷つけて欲しくない。君達に自由によって欲しいって願いが八幡自身を変貌させたんだ」

一同の顔を見回して葉山は続ける。

「アポロンの仕組んだ戦争、イシユタルとヘルメスが巻き込んだ事件。他にも巻き込まれたのはあるだろうけど君達は数多の思惑の中心にいる。今回だってそうじゃないのか？」

「……」

「自由に己の願いを叶えて欲しい。家族を守らなきゃいけない。強迫観念にも近い感情が生み出した化物だよ。その為なら己の大切なもの以外全てを犠牲にする。雪乃ちゃんも結衣も優美子も姫菜も戸部も罪なくとも死を待つだけの人々もさ」

君達はもう忘れてるかもしれないけどね、とヘラツと笑ってた葉山は真顔になる。

「誰にも認められない、褒められやしない…八幡の抱いたたった一つのエゴの対象であった事にも気付けなかった君達が責める義理なんて無いよ。はつきり言うよ、君達は八幡の家族の資格はあっても器じゃなかったんだ」

それさえ頭に入れてくれればいい、そう言い残して葉山は去った。皮肉な事にファミリアに自由にやって欲しいと願い奔走した結果ファミリアに影を落とすことになったのはハチマン自身のせいであつた。

次の日、誰よりも早起きしたハチマン？は外に出てオラリオの街を散歩していた。

「この街の住人達は果たして幸福なのだろうか」

哲学臭い事を呟いてもどうしようもない。答えてくれる相手はいないのだから。

「昨日は少し揺さぶりすぎたな…悪い」

独り言は止まらない、考えたい事が沢山あるのだ。

「んなどこで何ブーツとしてんだよハチマン」

「アラストル…か。フフフフ」

「何笑ってんだよ、雷落とすぞコラ」

白髪オールバックでヘラヘラしてるアラストル。

昔の姿を重ねるとどうしても笑いが込み上げてしまう。

「いやなに、お前も老けたな」

「っ!!、お前まさか…!」

「久しぶり」

さてと、俺はこれからどう動こうか。

分離 剣姫と誓う

「ここは…どこだ？貴方は…誰ですか？」

「マジか…そんなんあるのかいな…」

ハチマン君がいなくなった。

ボクたちのいるヘステイア・ファミリアの一番槍と呼ばれた彼はオラリオの中でも頂点に近い家族愛を持っているとも囁かれていた。それ故、噂に信ぴょう性が感じられなくとも街中でヘステイア・ファミリアのメンバーを見た冒険者はその暗さを隠した表情を見て疑念から核心へと変えていた。

―愛想を尽かされたのではないか

―彼の凶暴性をコントロールしきれなくなったのか

―食の好み が 別れたのではないか

―あまりもの浪費家の女神に呆れたのか

―街で彼を見掛けたがまるで別人のようだった

根も葉もないが知らない人にとってはそれらしい様々な憶測が飛び交うも真実は全く違かった。

しかし世界は残酷に回り続ける。

クエストが記された1つの封筒がそれでも前に進めと背中を押すのだから。

「強制任務…！」

ウィーネ君を連れて20階層のとある場所に行く趣旨の手紙がホームに届いた。

「こんな時にですか！ギルドは一体何を考えてるんですか…！それにウィーネ様がいる事がどこで漏れたんでしょう…」

「ギルドにだって話は来てるはずだ…俺達を試してるつもりか？」

「命ちゃん…」

「大丈夫です…春姫殿…きつと、きつと…」

「ウラノスは一体何が狙いなんだ…？」

眉間に皺を寄せるヴェルフ君と、努めて冷静でいようとしながら口

調に余裕がないサポーター君。指令書に目を通してはいるベル君も、また深刻な表情で黙りこくつている。ウィーネ君はこの場にいななく、部屋で寝息を立てている。椅子にも座らず、全員が広間に立ち尽くしている。

「行くしか…ありません、強制任務を受けなければヘスティア・ファミリアに重いペナルティが課せられます…戦力的にはギリギリ行ける範囲です、ハチマン様がいなくても…不可能ではありません」

ギルドという都市の管理組織にボク達のファミリアの内情が筒抜けである以上、逃げ道は塞がれているも同然だ。ばオラリオからの脱出も許されはしないだろう。相手はボク達が喋れるとは言えモンスターを匿っている事実を公式に発表するだけでヘスティア・ファミリアを村八分にして抹殺することなんておちやのこさいさいだ。現状、行く以外の選択肢は許されず存在しない。抵抗は無意味、退路は断たれて喉元にナイフを突き立てられている状況だ。

「ゴメン…皆を巻き込んで…」

「後悔しないで下さいベル様…ウィーネ様を助けた事実を否定する事になってしまいます…」

「言うな…ファミリアだろ？」

どうやらハヤマ君に言われた現実を受け止めた子供達は引掛かる所はあれどそれでも前に進もうとしている。ハチマン君、君にも見せてあげたいよ…。

「よーしーそうと決まれば直ぐに準備しよう！出発は明日の朝イチ！人気の無い時間を狙うよ!!ハチマン君に情けない所は見せてられないからね!!」

「「「はい!!」」」

【ロキ・ファミリアのホームにて】

「食堂に集合したら重大発表って…団長はロキ様から何か聞いてますか?」

「僕も聞かされてないよ…一体何をやる気なんだか…」

廊下を競歩で歩く団員からの質問に呆れ半分疑問半分で答える

フィン・デイルナは後ろを歩くりヴェリアを案じていた。

「……………」

「どうしたんだい、リヴェリア？」

「!!、いや、なんでもない」

嘘なのは長年の付き合いである彼には分かりきっていた。ヘスティア・ファミリアのハチマン・ヒキガヤが居なくなっただけという噂が流れてからリヴェリアをはじめ、アイズなどがどこか上の空だ。

「よーし！皆揃ったなー！今から超重大発表だからなー！」

「ロキー、引つ張らないでよ」

「まーまー！そう急かすなやティオナ。えー、コホン、今日から新しいコック兼掃除夫兼事務員が住み込みで働く事になったでー！みんな驚くと思うけどせーしゆくにするよーに!!それじゃーはいりー！」

ガラガラ、と扉を開けて入ってきた男にロキ・ファミリアの面々は目を見開き、口をあぐりと開けていた。

「きよ、今日から働かせていただきましゆ…す。比企谷八幡です…よろしく、お願いします…」

黒く濁った瞳には以前の触れる物全てを破壊せんとする強迫観念にも近い迫力は無く、自信のなさど斜に構えたような濁ったものだった。不安定な白黒の髪色ではなく、アホ毛が特徴の真っ黒な髪。服装は派手な紫のコートではなくI♡千葉とプリントされたTシャツ。以前までのイメージ全てを破壊したソレがオドオドと立っていた。

『『『えー…?!!?』』』』

ざわつきは暫く起こり、真相を知ろうと静まりを取り戻したファミリアの構成員を一通り見回して主神のロキは続けた。

「ロキ、どういうことだ？他のファミリアの構成員じゃないか」

「いや違うで、フィン。このヒキガヤハチマンにはどチビのヘスティアの恩恵も無ければオラリオについて、お前達の事について、あまつさえ自分の事さえ知らんのや。ただの一般人や」

「ちよ、言い方…好物に出身とか一般常識は兼ね備えていますよ」

「でもその一般常識もここじゃ通用せんぞ？」

「ぐ、それはそうですけど…」

「取り敢えず…煮え切らない皆になんか作つたれや！」

「無茶ぶり…ではないですけど、この人数なら…2時間で作ります」

「てなワケで皆2時間後にもつかいしゅーごーや！質問とかはいっぺんに言っても邪魔やから幹部に代理でもらうように！」

そう言い手をパンと叩くとゾロゾロと退室する構成員達。それはそのまま指揮系統の潤沢さを表していた。残った幹部陣はじつと八幡を見つめる。

「ホントに儂らの事は覚えちよらんのか」

「すみません…ここに来たのだからってロキさんに無理やり連れてこられて…」

心底申し訳なさそうにしてる彼の表情は打算や企みを一切感じさせなく、より一層彼に孤独感を感じさせただけだった。

「君の事を教えてくれないか？分かる範囲でいいから」

「はあ、それなら全然大丈夫です」

エプロンに着替えて台所に立つ彼にリヴェリアが質問する。

調理を進めながら彼はポツリポツリと自身についてうち明かす。

「名前はさつきも言った通り比企谷八幡です。年齢は17歳の高校生、男。誕生日は8月8日の血液型はA型。家族は父親と母親と妹の小町と猫のカマクラ。趣味は読書と人間観察です。出身は日本の千葉県…総武高校出身で奉仕部つてここに所属してます」

「奉仕部…とは？」

「やましい部活じゃないですよ、生徒の悩みを聞いてその解決策に導く事です。なんていうか、『魚を与えるのではなく、魚の取り方を教える方針』ですね」

「なるほど、面白い方針だな」

「恐縮です」

ふむ、と一呼吸置いたりヴェリアはその読心術をもつてしても彼が嘘をついてなく、本心で話してるのを汲み取った。

「ここに来るまでの記憶を無理のない範囲で教えてくれないか？」

「えと、最後は学校にいて、修学旅行で京都に行くことになって…それで、気が付いたら知らない路地裏にいて…何か…人じゃない何かが目

の前に立ってて…気を失って…ロキさんに拾われました」

こめかみを抑えながら答えた内容に一同が顔を見合わせる。

「人じゃない何かってのはなんだよ…」

「翼が生えてて、角があつて…赤い目で…アレは、悪魔だった」

「悪魔とは？」

「ここにはいないんですか？魔界から人を殺しに襲ってくる人知を超えた化け物。この前だつてレッドクレイブって街の住人達何万人つて死んだんですよ」

シヤカシヤカ、と手を動かしながら言葉を紡いでいく。知性なき獣のモンスターに加え、それ以上の被害を見込ませる悪魔がこのオラリオに現れたとなるととてもない災害が起こる事がロキ・ファミリアの重鎮には分かっていた。

「質問はその辺にしといたれや、次から質問はウチを通してくれや」

「それどこのプロデューサー？いや、気にしないでください…俺は別になんともないですから」

知りたい事が多い彼等彼女等であつたがそれ以上口を出す事は無かつた。一人を除いて…。

「私の事は覚えてないの？」

「すみません…」

「初めて会った時の事も？」

「……………」

「私と約束した事も？私が君にしてしまった事も…？」

「……………何も」

「ツツ!!」

「アイズ!!」

思わず立ち上がり走り去るアイズ。

リヴェリアが彼女を呼び止めても彼女は止まらず食堂を飛び出してしまった。机には一粒の雫が乗っていた。

「すみません、俺が不甲斐ないばかりに」

「いいんだ、アイズも君に相当入れ込んでたからな。それより手を止めるとダメじゃないのかい？」

「は、はい…」

見守られる中、約束の時間が来るとファミリアの構成員達はゾロゾロとやってきた。

「時間の都合上、今回作ったのはプリンです…口に合えばいいんですが」

彼がそう言うもロキ・ファミリアは知っていた。彼の料理の腕前を、そして期待していたのだ。記憶を無くしても毎日続けていた料理という経験だけは無意識に根付いているのを。

『『『やっぱり…美味い…』』』』

頬を落とす一同を見て一応の信頼を得た事に安堵する八幡。たった一つ余ったプリンをどうしようか決めあぐねているとロキがやってきた。

「もってつたりや」

「だけど…」

「部屋かくかくしかじか、こう行くんやで。次泣かせたらタダじゃおかないで」

「はい…!」

プリンとスプーンを持って食堂を後にする八幡。

「よかったのか?アイズに悪い虫が付くのが嫌じゃなかったのかい?」

「悪い虫なら…嫌やな」

「しっかし、戦いを知る前の『亡影』はあんなに笑える男じゃったとは驚きじゃな!リヴェリアもうかうかしてられんぞ?」

「なツ!!何を言ってる!」

「もうバレバレじゃぞ。素直にならんとこのまま独り身じゃのお!!ガツハツハツ!!」

「そこに直れドワーフ、消し炭にしてくれる!」

ロキさんに教えてもらった道を辿りその部屋の前に着く。耳を傾けると少しすすり泣いているような声が聞こえる。

(男を決めるんだ、比企谷八幡。俺は女の子を泣かせてしまったんだ)

コンコンコン、とノックをすると部屋の中からした音はピタリと止んだ。

「あ、アイズさん…比企谷です。その、プリンが出来上がったのでできれば食べて欲しくて…」

「いらない…」

「それでも…食べて欲しい」

「……………」

「俺、最低ですよ。アイズさんとの約束を忘れて、ノコノコと目の前に現れて…それでプリンなんかで機嫌とろうとして…本当に、申し訳ないです」

「最低だよ…私」

「え？」

「君が記憶を無くしたのに私は君に戻ってもらおうとしちゃった。今の君を殺そうとしちゃった…」

「そんなの、当然ですよ…知ってる人が知らない人になったら戻そうとするのなんて当然です」

扉に背中を当てて座る。

「ううん、きつと私との約束で君は無茶して強くなろうとしたのかもしれない。そうじゃないのかもしれないけど、そのせいで君は記憶を失ったのにまた君にそれを押し付けようとした…」

足音がして扉の前で止まり座るような布の擦れる音がする。

「きつと、アイズさんのせいじゃありません…きつと俺は、餌を取ろうと必死になって取るべき餌を間違えたんです。その結果がこうなのだから自業自得です。それに、無茶したお陰でこうして話せるんですから、結果オーライ」

「それが、本当の君なんだね」

指がなぞる音がして扉越しに背中にそつと手が当てられる。

「どれも本当の俺です。ここにいてこうして話しているのが比企谷八幡であって貴方達の知るハチマン・ヒキガヤなんです。俺はオンリーワンなんですから」

「約束して」

「はい」

「もう、私の事を忘れないって」

「忘れません…」

「プリン食べさせて」

「はい…ええ？」

ガチャ、と扉が開き後ろに倒れそうになるのを太ももでキャッチされる。鍛えられているはずの太ももはシン・八幡史（5時間前に誕生）に刻まれる柔らかいものランキング堂々のトップに躍り出た。

「す、すみません！」

久々に顔を赤くして起き上がった八幡は奇跡的に無事だったプリンをスプーンですくい上げそれをアイズの口に運ぶ。

「あー、んっ」

「……………」

まじまじと眺める同世代の女の子の口内に謎の劣情を抱いて自己嫌悪に陥りながらも次から次へと明鏡止水、無の境地に近い感情でスプーンを運び続ける。そして最後のひと口を食べ終えたアイズは満足そうな表情を浮かべる。

「指に何か着いてるよ？」

「え、どこですか？」

「ちよつと、貸して？」

強引に左手を取られその左薬指を根元まで口の中に咥えられる。

「な、何して…ッ！」

第2〜第3関節に少し強目に噛みつかれて若干の痛みを感じつつ指先に舌のヌルツとした感じにより集中してしまう。

甘噛みされて約1分、やっと解放された指は液状の糸を引き噛まれた部分は軽く内出血を起こし、無理にでも指輪を彷彿とさせた。

「やくそく、忘れないで」

顔を隠した彼女の赤い耳を見逃さなかった八幡は部屋から出される。呆然としながら食堂に戻り洗い物を始める。

「なあ八幡、どうして左手ポッケに突っ込んでるん？ちゅーにびようかいな？」

「そう、かもしれません」

異世界忘却

「ロキ・ファミリアのホームにて」

「これを、そう、そこに入れるんだ。計算は苦手だと言っていたが出来ない事はないな…飲み込みも早いし、優秀だよ君は」

「あ、ありがとうございます」

リヴェリアの自室にいる比企谷八幡は彼女からかのファミリア内での収支整理をしていた。各団員がまとめた経費での買い物の際の領収書を見て帳簿に書き込むのだがこれが中々の量がある。机を挟んで紙を眺めて計算して書き込んではまだ紙をめくる作業だ。

「……………」

リヴェリアは彼に対して大きな興味がある。彼の捻くれているにも関わらない優しきや彼の嘘偽りのない全くの未知である地名等の用語。例えば『日本の千葉県』と言っていたがあたりとあらゆる地図を眺めてもそんな場所が無かった。ロキに聞いても『ウチも知らんけど嘘じゃなかったで』と言われ益々興味が膨らんだ。

「君の故郷について、教えてくれないか？」

「別にいいですけど…面白い事なんてないですよ？」

「君の口から聞きたいんだ」

「文明はここより幾分か進んでますね」

「ほう、文明レベルで違うのか…！」

リヴェリアの耳と脳に新しい情報が追加されていく。コンクリートと呼ばれる建築素材や電気という魔石に変わるエネルギー、車や電車という馬車を遥かに超えるスピードで走る移動手段。それが当たり前になっっているのだからオラリオでは到底適わないと本能が結論付ける。

「取り引きとか、考えてました？」

「考えなかった訳じゃないが、こうも差を聞かされると到底対等な立場を築けないと思うよ」

「魔石とかなら代替エネルギーとしてはいいのかもしれませんが、俺がオラリオ側だったら絶対取り引き相手にはなりませんね」

「その訳を聞かせてくれないか？」

「簡単ですよ、異種族で常人より遥かに強いからです」

ピタリとリヴェリアの手が止まる。

そして申し訳なさそうな顔をしてる八幡は作業しながら話している。

「俺の元いた世界ってのは、信仰するもの、話す言葉、肌の色一つ違うだけで長らく戦争と虐殺を繰り返すような所です。戦争があつたから文明が発達したと言っても間違いないじゃ無いですからね…そんな醜い場所に俺はオラリオにもこの世界の人間達にも関わって欲しくないですよ」

「すまない、興味のあまり君のデリケートな部分に触れてしまった」

「いいんですよ、俺が話したくて話しましたし。それにリヴェリアさんは俺が異世界の人間だって勘づいてますよね」

「バレていたか…」

「そりゃあ、賢くて聡明だつて話があちらこちらか聞こえてきますから…確かめたくて俺をここに連れてきたんですよ」

「半分正解で半分不正解だ。君は知らないだろうが私はそれなりに君の事を信頼しているしそれなりに君の事を好いている」

「す、好ッ!?お、俺…リヴェリアさんに何したんですか…」

「フフ…親に挨拶に行った仲だよ」

「……………え」

八幡の顔から血の気がさあつと引いていく。決してリヴェリアとの年の差を気にしている訳ではなく、こんな自分がハイエルフとこんな関係であるという衝撃のカミングアウトをされたからである。

「ダーリンなんて呼んだらハニーと君は返してくれたんだけどな」

フフっ冗談だと言おうとするリヴェリアだったがそれよりも早く比企谷八幡は軽やかに飛び上がり正座するように座り両手を八の字になるように地面に付けて頭を地面のスレスレになるまで下げた。

「不束者ですが…記憶のないこんな俺ですが、どうぞよろしくお願い申し上げます…」

「頭を上げてくれ！冗談…ではないが誤解だ！話を聞いてくれ!!」

「へ？」

リヴェエリアから里帰りする際の偽物の恋人役をした趣の真相を聞く。しかし彼の中では誤解は誤解であつても解が出てしまった。これは揺るぎない事実であるのが彼も彼女も分かっていた。

（しかしさっきの台詞…青い所はあつたが言い表せない感情を覚えたのは事実だ…もし、この誤解を解かずにゴールインしていたらどうなっていたのだろうか…）

『お、おはよう、ダーリン♡』

『おはようハニー、今日も可愛いね。世界中の小鳥達もそう囁いているよ☆』

『照れるわよ…そんなの。それに私は貴方だけに囁いて欲しい…な／＼』

『……………』

『キヤツ！ダーリン、昨日も一杯愛してくれたじゃない…また、するの？』

（なんて…考えてしまうな…）

この時、全世界のエルフが嫌な予感を覚えたのは誰も知る由もなかった。

「リヴェエリアさん、ここ、どう計算しても合わないんですけど…」

「あ、ああへファイストス・ファミリアの備品か…領収書を持って問い合わせに行つてくれないか？何かしらの手違いだから直ぐに済むだろう」

「あ、はい…」

「地図と項目をメモしておこう…それと、噂の事もあるから軽い変装道具と一応の事情を手紙にして置いたから知り合いを名乗る輩に絡まれたらこれを読ませるんだ」

「あ…はい…それじゃあ」

「行つてらっしゃい」

得体の知れない感情を差し向けられた八幡はリヴェエリアの部屋を後にして街へ繰り出す。

「メガネって…これで誤魔化せるのか…？ジロジロ見られてる気がする

るが…」

比企谷八幡は知らない、メガネを掛けた彼は整った顔のパーツを台無しにしているその目の腐り具合が緩和されてイケメソになっている事を。

周りの目線にビクビクしながらバベルのヘアアイストス・ファミリアの店に足を踏み入れる。

「いらっしやませええええええ!!?ぼっぼぼぼっ 『亡影』!?!」

「すみません、ロキ・ファミリアのお使いで来たんですけど椿・コルブランドさんはいらっしやいますか?」

「は、はあ…今呼びますので少々お待ちください」

情緒が反復横跳びしてる店員が奥に引っ込むと奥の部屋からドンガラガツシャーンともものすごい物音が響き、それらしい人物がやってきた。

(ちよ、目のやり場に困る人だ…何ここ、街でもそうだったけど痴女が蔓延ってるの? いいぞ、もっとやれ!)

「久しいな、『亡影』…噂を聞いた時は驚いたぞ」

「比企谷でいいです…これ、リヴェリアさんの手紙と領収書の件です」

「やけに他人行儀だな…どれ…!?!」

手紙を受けとった彼女は読み進めていくうちに顔から血の気が引いていった。

「少しばかり付き合え…」

有無を言わさず手を引かれて先程の部屋に入れられる。覗き窓から覗いていたヘアアイストスがそっちの部屋に向かう椿を確認すると慌てて引っ込んでいった。

「あの人も知り合い…だったんですか?」

「特に親しかかったから心配してたんだが、今の手前がその状態だとうなるんだろな」

「俺用事思い出したんで帰りますお世話になりましたッ!」

「待たんか、用事はここにしか無いはずだぞ」

首根っこを掴まれ苦渋の退散もさせてもらえなかった。

(ていうか力強っ!何なのこの人、痴女みたいな格好してるくせにこ

の馬鹿力は!?!ステータスつてのはここまでなのか…!)

奥に入ると碇ゲンドウよろしくのポーズをとっているヘファイストスが待ち構えていた。

「何か言う前に主神…これに目を通してくれ」

リヴェリアさんからの手紙を読み進め、やはり彼女も顔を白くしていく。

「記憶喪失…?」

「そう、らしいで…すう」

(アカン、この赤髪の女性から平塚先生みたいな匂いがするツ!独神的な感じじゃなくて大人の女の色気みたいなのを…)

「そう…貴方が私との記憶を無くしたのは悲しいけれど…寧ろそれで良かったのかも知れないわね…」

どこか聖母のような微笑みを浮かべながら彼女は立ち上がった彼に近づく。女性に対して自称警戒心MAXの八幡もその表情に悪意を微塵も感じないがそれでも彼女との記憶が無い八幡は後ずさる。それはこの後予想される彼女の行動を甘んじて受けようとした自分への戒めだった。

「優しいんですね、ヘファイストスさんは。貴方にとっての俺は死んでも同然なのに…」

「貴方に分けてもらったのよ、私の目を素敵だといった貴方が私の心の鉄を熱く熱してくれた。貴方の言葉の一つ一つが私の鉄を貴方の形にしてくれた…貴方は『俺は死んでも同然』って言ったけど、ほら、私を見てくれてるでしょ?私が傷付かないように言葉を選んでくれるでしょ?」

話を続けながら眼帯を取ってその目の隠された部分を露わにする。

「そんな事は…」

「いいの、貴方の心の形が変わってしまった所でそれは貴方であることに変わりはないのだから…今度は、今度こそは戦わなくてもいいんじゃないのかしら」

「俺は戦えませんが…恩恵もなければ技術も失ったのでね」

「そうなのね、それなら今後何するか後悔のないように決めなさい」

「はい、じっくり考えてみますよ…」

書類の方にサインを貰い店を後にする八幡はロキ・ファミアの日当として貰ったお小遣いで何を買おうか決めあぐねていた。

「ん？この匂いは…ま、まさかッ!!」

僅かに鼻腔を撫でたソレは諦めかけていた渴望を蘇らせて全身の神経がそれを欲するように体を動かせる。行動に移すまでゼロコンマー秒を無駄にすることなく人の並を針の穴をくぐり抜けるようにくぐり抜けそこに辿り着く。

「いらっしや…い」

どこか驚いた様子の店主に疑問を抱きつつ適当な席に着くとコト、とすぐさまコーヒーの入ったマグカップを出される。

甘い匂いの正体を感じきつつ、恐る恐るソレを口に入れる。

「これだ…この甘ったるさ…完璧にマックスコーヒーだ…」

「泣くほどかい…」

呆れたながら言葉を漏らす店長？らしき人に視線を戻すと親指で店に張り出してるポスターを見るようにジェスチャーを取っていた。

『この顔にピンと来たら！ヘスティア・ファミリアまで連絡を!!ハチマン・ヒキガヤという名前です!』

ゴ丁寧な似顔絵と特徴をまとめた張り紙がデカデカと貼られており事が大きくなっているのに少し戸惑う。

「マジかよ…」

「あたしにやアンタの事情なんて知らないけど、家出も程々にするんだね」

「家出って言われてもね…何も覚えてないですよ」

目を伏せて暗く答えると店主は目を見開いて頬を緩めた。

「お代は結構だよ…その代わり地図を書いてやるからそこに行って確かめな」

「はあ…どうも」

カランカラン、と乾いた鈴の音を背に地図通りの場所にゆっくりと足を進める。

「カフェを出たな…」

「ホームの方向じゃない、どこに行くんだらう…」

「なんか持つとるなく」

カフェを出た八幡。どこかに歩き出す彼を影から見つめる影が幾つもあった。その見事な変装で周りを欺いているがオラリオで初めてのおつかいが心配で着いて来ていたリヴェリア、目を離すとどこかに行ってしまうそうで気が狂いそうになるのを抑えているアイズ、面白そうだから付いてくるロキだった。

「メモ？」

「店に入るまでは持つてなかったな」

「店主の入れ知恵やな、記憶を戻そうとしとるのか？」

「……………」

本当に彼の記憶が戻っているのだろうか。

争い、傷付き、強さを求めた果てがコレならもう彼を血生臭い世界から遠ざけるべきなのではないか…そんな考えが2人の頭に浮かび上がる。

「ロキは、どうして八幡に気を掛けるの？」

「ああん？なんやアイズたん、嫉妬しとんのか!？」

「していない、はぐらかさないで」

「そりゃなあ、タダの勘や」

「嘘、八幡が『糸目キャラは何考えてるか分からないから気を付けろ』って言った」

「チクショー!!」

「2人とも静かにしろ！監視に気付かれるだろ」

やいのやいのと騒ぐ2人を他所にリヴェリアだけは片時も目を離さず八幡を眺めていた。

「む、アソコは…」

ねりねりと地図と見比べながら練り歩いていた八幡が足を止めた場所は路地裏にひっそりと放置された崩れている廃教会だった。

「……」

あの店主に行ってみるとだけ言われたそこはただの倒壊寸前な廃教会：教会自体行ったことない為疑い半分期待半分でその敷地に足を踏み入れる。

やや埃が積もっており長らくこの建物が使われていないことが分かるが崩れているように見えてこれ以上倒壊しないようにしっかりと柱が固定されている。

「壊れたままで保存してる…普通なら建て直すはずだ。…施設として機能させてないって事はそれ以外の用途があるのか…？」

辺りをくまなく探していくと床に点々と見える茶黒いシミを見つける。ひと目で分かる。ここで戦闘があつた事が。

「うッ!!」

脳裏に知らないビジョンが流れる。

『つ…もうダメだよハチマン君、これ以上戦ったら死んじやうよ!!』

『家がなくなった、俺達のかえるいえが…せめてお前たちだけでも…なくしたくない』

ボロ雑巾のような俺に顔がモヤがかかって見えないが若い男の聲が響く。

体には刀傷や矢が刺さっている。人間なら確実に死んでるのが素人でも分かる。

「なんなんだ…今のは…ん？」

埃の積もってない場所…誰かが手を加えたであろう地下室への入口を見つける。扉を開けて石造りの階段を降りて行く。

「……………」

キッチン、ソファ、ベッド、洗面所、机。質素な部屋でそれ以外感じることは無いはずなのにモヤツとする。

『ハチマン…どこに行くの?』

『んー、ポレポレ』

『じゃあ僕も行くよー!』

『ベル、新作が出来たんだ、甘党じゃなくても食えるチョコだ』

『うん!美味しいよ!お店開いてもいいんじゃない!?』

『褒め過ぎだ、このヤロー』

「うッ…!!」

突然頭に入ってくる情報に耐えきれなく胃から込み上げてきたものを台所に吐き出す。

「確かベルって言ったな…」

洗面所の鏡に手を付け顔を上げる。

「張り紙にはヘスティア・ファミリア：俺の今までいた場所か：確かめてみよう」

地下室を後にして地上に出るとバツが悪そうに待っていたアイズとリヴェリア、そして物珍しそうに物色するロキがいた。

「付けてきたのか？」

「ごめんなさい…」

「別に、寧ろ安心だ：いざって時に守ってくれるからな」

「うん：絶対に守る」

「あのどチビもハチマンもこない所で暮らしてたんやな：今度会ったら少し優しくしたろ…」

「どチビって：女神ヘスティアの事ですか？」

「ん？ああ、何か思い出したんか？」

アイズとリヴェリアの視線が八幡に刺さる。一気に2人の警戒心が引き上げられるのを彼も感じていた。

「ベル：って奴の事。それと、ここで死にかけてる時の事位ですかね」

「戻りたいと思った？」

「いんや、でも、知りたいと思った」

「……」

「ほら、暗くなってきたんで帰りましょ：酔っ払いに絡まれると勝てませんし」

「うん、帰ろう」

「それもそうだな」

「帰ったら酒飲むでー!!」

4人で帰る中、それぞれが考えていた。

(ベル：ベル・クラネル：一体どんな奴なんだろうか)

(八幡にはここにいて欲しい：何をすればいいんだろう)

(今の八幡の状況を考えればずっとロキ・ファミリアに在籍させるのは困難か…ヘステイア・ファミリアからどうやって引き取ろうか)
(ドロドロしてきたな)

冒険者失格

「こんにちは、比企谷八幡です。」

ただ今よく分からない飲食店で正座させられています。

目の前には巨漢のおばちゃんが腕を組んで見下してくるのがかれこれ30分です。一体どうしてでしょう、朝の買い出しをしていただけなのに…。

「……………」

「……………」

ウエイトレスが厨房からチラチラと見てくる。そしてヒソヒソ話している。まるで…まるで、あれ？いつもなら出るはずの黒歴史が思い出せない。特にあのエルフの人、気迫が他の人と段違いだ。

「ウンウン唸ってないで何か言ったらどうだい？」

「…帰りたいです」

刹那、奇跡的に彼の目で捉えられた最後の光景は巨漢のおばちゃんから繰り出される隕石の如き拳骨だった。

死

ろくな記憶も思い出せず彼の意識は刈り取られる。

「……………」

声も出さずに目を開ける。最低限音を出さないように周りを見ると誰もいない一室に寝かされていた。

「いッ……………」

頭に巻かれた包帯がああ拳骨の威力を物語っている。

(に、逃げなきや…殺される!!)

痛む体をゆっくり起こして窓の外を眺める。

建物の2階、下はまあまあ忙しそうなお音がする。

ちようど下は花壇の土がある為落ちても音は響かなさそうだ。

(や、やるしかない…!)

窓を開けて身を乗り出す。恩恵もない体では2階からの落下は運

が悪ければ死に繋がる。

(五点接地転回法…見よう見まねだが…できるか?)

地上最強の男を目指す漫画で見た時はなんじゃこりゃ、と思っていたがまさかこんな時に役立つなんてジャパニーズカルチャーには感謝しかない。

(なんとかなれ!!)

先ずは足裏で着地、次にふくらはぎを地面に着けて太もも、尻、背中
中の順で転がる。

「うおお、痛くねえ…!」

後は真っ直ぐロキ・ファミリアのホームに戻れば脱出成功だ。

(きつとあの人達も『亡影』に引っ張られてるんだろうけど、残念だったな、ここにいるのは比企谷八幡なのだ…そんな地味にかつちよいい
2つ名なんてないのだ)

「どこに行くんだい…?」

デデンデンデデン!!

どこぞのT-8000も裸足で逃げるような鬼迫を放つそれは颯
爽と逃げようとする俺の後ろに立っていた。

(ああホント、神の恩恵ってクソだ)

本日二度目の気絶カットは開始から約600字で訪れました。

「で、説明してもらおうか…?」

「はい…」

ロープで縛られ、正座させられている男は取り囲むように座っている
ウエイトレス達に見下されながら今自身が把握しうる情報をこぼ
していく。

「えーと、俺の知りうる限りの時系列順に話させてもらいます。辻褄
が合わないなら俺も分かんないのでご了承下さい…

①日本の千葉出身の俺はよく分かんらんがオラリオにやって来た。

②俺は知らないけどヘスティア・ファミリアに在籍して目まぐるしい
活躍をしたらしい。

③よく分からないけど路地裏で倒れていた俺はとある神に保護さ

れる。

④②で得た恩恵の力も記憶も無くしてた。

⑤朝の買い出しに出掛けてたらよく分からん人達に拉致監禁された↑今ココ

とまあ、こんな感じですよ」

1人を除いてアイズやヘアファイストスさんまでとはいかないが愕然としていた。

(この人達もお世話になっていたのか…あれ？記憶喪失前の俺って意外と活発だったの?)

過去の自身が持つ謎のコミュニティに戦慄しつつその後の展開に備える。戻れと強制されるか、そのままでもいいと許容されるのか。

「ヒキガヤさん…これからどうされるんですか？」

「これから…故郷には帰れそうにないですし、このままのんびりスローライフでも送ろうかな、と」

「…冒険には行かれないんですか」

リユースは数少なく心を開いていたハチマンに問い掛けるも返ってきた答えは期待に反するものだった。

「別に名声、力、この世の全てを欲しいわけじゃないですし」

(ていうかこの緑髪エルフの姉ちゃんを見ると何故かブルマの事が頭に浮かんでくるんだよなあ…)

「何故そこに富がないのか気になるニヤ…」

「…だって、死にたくありませんし。寧ろ今までがおかしいんですよ、【ファミリア】と銘打つても所詮はクラスメイトとか、部活仲間みたいな感じでしょ？それに背中を預けて命掛けて戦わなくちゃいけないって…俺には無理ですよ」

言葉を捲し立てる八幡の胸ぐらをリユースは掴む。その表情はとても辛そうだ。

「それ以上は…やめてください…」

「だったらこの手を離して俺を解放してくださいよ。勝手に拉致って勝手にボコって勝手に期待して勝手に落ち込んで…俺なんぞに時間割くなら店の支度をした方がいいですよ…」

俯いたリユーは震える手で八幡を放すと服を正して買った食料を持って出口へと向かって行った。

「俺の戦場はダンジョンではなく台所なのだから…」

「そう言い残して彼は【豊饒の女主人】を後にした。」

「リユー…」

「いいんです…私はまた彼を死地に向かわせようとした…ハチマンさんの反応は当然です…でもツ…」

ポタリ、ポタリと床に小さな水滴が落ちる。

「リユー、アンタの部屋から水漏れだよ…直したら今日は休みな」

「…すみません」

リユーの背中を見送ったミアはもう誰もいない出口を眺める。

「戦場は台所…ね」

「そういえばハチマンは料理が上手いつて聞いた事があるよ。こういう生き方もあるんじゃないのかな…」

「そういえば…」最近「ロキ・ファミリア」が来ないから早目にお店を開けないと売上に響くニヤ！」

「!?、ロキ・ファミリアが来なくなったタイミングって、あの子が居なくなっただのと同時期じゃない?もしかして…」

「まったく…災難な日だな…」

喉に魚の骨が突つかかったようなもどかしさを覚えながら彼は新しいホームへと戻る。

「おいコラ、メシはまだかよ」

ベートにゲシつと尻を蹴られる八幡。冒険者としてかなり上位の彼の蹴りを食らっても平気なのは彼がじゃれ合うつもりで放った一撃であってそれが不器用な表現であることを八幡は知っていた。

「蹴ったからオカズマイナス一品…」

「ふ、ふぎけたこと言ってんじゃねえ!!」

2度目の蹴りは寸止めで止まりベートはズカズカと食堂に入っていく。配膳の時にヤケにソワソワしていたのはまた別の話だ。

「いつも悪いね」

パルウムの団長であるフィンが配膳に勤しむ八幡に話し掛ける。

「まあ、ここに置かせて貰ってるんで：なんかしないと悪いでしょ」

「そうだね、君が食堂に立ってから外食用の経費も黒字になってきたし皆の交流の時間も増えて士気も上がってるよ」

「煽ってもデザートしか出てきませんよ…」

配膳も終わりファミリア全員で同じ釜の飯を食う。

（今までの生活では考えられないな：小町にも成長したって言って貰えるのだろうか）

かわいい妹の事を思い出し少しセンチな気分になりながら箸は進む。

食後の食器洗いを済ませたら風呂の時間となる。遅い時間の為一人だけしかいない時間に八幡も服を脱ぎ浴場に入っていく。

「ふい〜」

お湯の温かさが身体の芯に染み渡り疲れが緩和されていく。

暫くして湯から出て身体を洗う。

水で泡を流して自分の身体を見つめる。

（他の奴らとそんなに体格変わらんのどこにそんな力があるんだか）

最初はそんな理由だった。

軽く腕を曲げて筋肉を硬くさせて触ったりしていると視界にノイズが走る。

「っ!!」

一瞬だがその目には鏡に映った自分の身体中に剣や槍、弓矢が刺さり見るも無惨な姿になっていたのだ。普通では生存がありえないその姿に吐き気や嫌悪感が沸き上がる。

「ハア、ハア、ハア…」

鏡に手を付き呼吸が乱れるも力は抜けて膝を床につけて体制を崩す。

ゆっくりと立ち上がる彼の顔は青白くなっていた。

「そうだ：もうこんな姿になる必要なんてないんだ…」

（ここの人達はオラリオでもトップクラスのファミリア俺が戦わなく

ても生き残れる…)

そんな自分の考えに疑念を抱きながら風呂を後にする。

「ん？」

ふと見た外から微かな光が見える。

訓練所の方からだ。

「まだまだっ！もつと早く!!」

訓練所の影からこっさり見てみるとリヴェリアの後釜を期待されているレフィーヤが詠唱時間の短縮に精を出していた。

「こんなんじゃない…皆さんの足を引っ張っちゃう…そんなのっ！」

「……」

「誰ですかッ!!」

「ひえっ…俺だよ…」

顔の脇に光の矢が当たりビビり散らかした八幡はバツの悪そうな顔でレフィーヤの前に姿を現す。

「比企谷さんでしたか…覗き見なんて褒められませんよ？」

「すまん、頑張ってる所に水を差したくなくてな」

「なんだか、そう言われると怒るに怒れません…」

変にモジモジするレフィーヤに彼はポケットから取り出した小瓶を渡す。

「魔力つての？使ってるんだろ？ポケットに入ってたから飲んだらどうだ。俺が飲んでも効果は無いだろうから」

「あ、ありがとう、ございます」

近くに寄ってきたレフィーヤは小瓶を受け取りそれに口を付ける。その視線は彼と小瓶を行ったり来たりとウロウロしている。

「そんなに意外か？」

「ふえ？」

「俺が台所に立つのもここにいてこうして話すのも…」

「…そういう訳じゃありません、ビックリしてるのは比企谷さんがこういう一面があったのにビックリしただけです。記憶を無くされる前はなんだか『強くなる』って事にガムシヤラで何かが欠けている感じがしてたので」

「俺をそこまで思わせたへスティア・ファミリアって一体どんな所な
んだらうなあ…」

「それはオラリオでも有名な謎ですよ…」

暫し沈黙が流れる。

レフィーヤは飲み干した小瓶を手の中で転がしてる。

「悪いな、時間取っちゃまって…」

「あ、ちよつと…話しませんか？」

そう言い去ろうとする八幡をレフィーヤが呼び止める。

「比企谷さん、何か悩んでませんか？」

「まあ、な…」

「良ければ聞かせてくれませんか？」

「まあいいが、オフで頼むぞ…」

青白い月明かりの元2人はベンチに座り目を合わせず思いの丈を
語る。

「今日は思う事が多かった。風呂で自分の身体を見た時傷だらけの昔
の体を見た。人として機能するのが奇跡というか、本当に人なのか疑
わしかった」

「それは…」

レフィーヤは『そんな事ない』という言葉に詰まった。いくら恩恵
を持つていてもそんな重症を負えば治ったとしても後遺症が残るは
ずなのだから。遠い所にいた彼の悩みを隣で聞くとやはりどうも彼
女にも感じる所がある。

「その反応だとやっぱり普通の事じゃないんだよな…」

「はい…」

(あれ?どうして私、驚いてないんだらう…)

レフィーヤは八幡の問いに受け答えできた。八幡とそこまで接点
を持たないハズの彼の悩みをある程度理解出来た。その理由に必死
に頭を回転させる。

「アイズさんだ…」

「はっ…」

幼少期のアイズは『人形姫』と呼ばれる程モンスターを狩る事に尽

くしていた。そして力を誰よりも欲していた。少し前に聞いた彼女についての話と八幡の話は求める強さのベクトルは違えど似ていたからだ。『家族』を守る為に強さを求めてその先でここに行き着いたのは偶然なんかじゃなかったのだろう。

「本当だ…」

「ふえ？」

八幡の視線を追うと影からジトーと見ているアイズを見つけた。2人の視線に気付くとノコノコとやって来た…リヴェリアと共に。

「んっんっ…2人がとても仲良さそうにしていたから見ていたのだがアイズが目立つ真似をしてしまつてすまない」

「リヴェリアが最初に覗いてムムグッ！」

リヴェリアにじゃが丸くんを口に詰められて咀嚼するアイズ。4人で訓練場で屯してるが訓練所を囲む屋根の上にいるフードを被つたエルフに一瞬だけ八幡は視線を向ける。

「冒険者は神から授かった恩恵の力をベースに強くなつてくんだろ？俺つてもしかしたら強くなる為の土台が恩恵じゃなかったんじゃないのか？」

「いや、そんな事は無いよ…比企谷」

アイズとリヴェリアが一齐に警戒する。その視線の先は暗闇に包まれておりその声はロキ・ファミリアの団員の声ではなかったが八幡には声の主が分かった。

「葉山…？」

「久しぶりだね、君の記憶だと僕はまだ『みんなの葉山隼人』なのかな」「どういう事だ…？」

「僕はかつての君の強さの秘訣と動機を知っている。それを君に話す代わりにここに居る人達に話してもいいよね？」

「…ああ、構わない、教えてくれ」

「君の力は神の恩恵が君の歪みと同居していた魂が作用して変化したものだ。過去に同居していた悪魔の魂と契約して君の成長にブーストを得ていたんだよ。更に言えばアラル…いや、アラストルが君の中の悪魔を顕現させる為に君を人間離れさせて耐えられる器にする為に

育て上げた」

「……………」

「君は君の中の悪魔が顕現するだけの器に成長した。後は君が歪んで壊れるのを待った…その結果が今だよ…」

冷たい風が頬を撫でる。

まるでブーツとしてないで話を理解しなさいと言わんばかりに意識を葉山に向けさせる。

「そうか…俺の歪みというのは？」

「……………君の黒歴史なる思い出は詳細に思い出せるかい？」

「いんや全く。あつたという事実は分かるんだが詳細が思い出せない」

頭をポリポリと搔く八幡に葉山は1つ気になる質問を問いかける。

「…雪乃ちゃんや結衣の事も、忘れた？」

「雪ノ下…由比ヶ浜…あの二人が1番分らない…記憶が飛び飛びなんだ…文化祭辺りも…修学旅行も…」

「そうか…その点についてはこのノートに書いておいたよ…向き合う覚悟が決まった時に見るといい、お土産の中に入れておくよ」

葉山に大きめの紙袋とダンボール1箱を渡される。

「こ、これはッ!!」

ダンボールにはMAX COFFEE それは、全てを癒す甘さを持った完全飲料。感極まる八幡を見た葉山は「それじゃ、また今度」と言い残し闇の中に消えてった。

「…それじゃ、夜も冷えるし戻るか」

「八幡…大丈夫？」

「平気だ、いきさつが分かって何かスッキリしたな」

3人に背を向けて部屋まで戻る八幡の苦虫を噛み潰したような表情を屋根に潜んでいたリユーは見逃さなかった。

相見える時

部屋に戻り土産袋を開ける。

一番最初に目につくのはビニルに包まれたよく見なれた服だった。黒のブレザーに白縁。1年と半分程度着てきた総武高校の制服だった。袋から出して壁に引っ掛ける、いつそれに袖を通すかも分からずに。

「？」

袋の中を見てみれば葉山の言っていたノート他に簡単なメモが入っていた。広げてみるとどうやら地図のようだとある場所に印が付いていた。

「：明日、行ってみるか」

ノートから目を逸らして机に仕舞いつつメモを明日着る服の胸ポケットに入れる。そのままベッドに寝そべり葉山の言葉を思い出しながら目を瞑る。

「おはようございます、比企谷さん！」

「おはよーさんです」

朝、いつも通り台所に立ちロキ・ファミリアの朝ごはんを作り待ちわびてる団員達に配る。

なんて事ない日課になりつつある動作だ、1度も苦に思ったことは無い。

「買い出し行ってきまーす」

「お気を付けて！最近喋るモンスターが町に出るらしいので！」

「そんなときやよろしく頼みますよ」

嘘だ。食料なんてこの前買ったばかり何だから潤沢にある。そんなの分かっているはずなのに送り出してくれるのは気遣いなのかはたまたアホなだけなのか。

「……しか無いよな。どうしよう、入りたくない……」

指定された場所はアラル共同墓地。入口の門には『歓迎！ここがアラル共同墓地だよ！』と丁寧な日本語で書かれている。

「背に腹だ……！入るか……」

錆びかけてる扉を開けて敷地に入る。

敷地内をウロウロしているとあるお墓の前で膝を着いている人物を発見した。紫のコート、オールバックの白髪、血色の悪い白い肌。どこか噂で聞いた『亡影』に似ていた。

「心に矛盾を感じる」

「！」

「望みに限りなく近いものを手に入れたもののそれが敷かれたレールの上を歩いてるようで釈然としないのだろうか？」

心を見透かされている。その言葉で八幡は目の前の人物がヒトではなく悪魔であり八幡の魂と共存していつい最近切り離された物だと理解する。

「そういうアンタこそ、久しぶりに会った子供はどうだった？」

咄嗟に出た言葉はその悪魔の心情そのもの。互いに身体を共有していた為何か考えていれば共有できるのをこの短いやり取りで気付く。

「そうだな……私の腰までしか無かった子供達が随分遅く育つたと喜びを感じるだけだ」

その先の感情を知られていても悪魔は伏せる。話してしまえば意味が無くなるような気がしたからだ。

「時代に残された力ある私と、現状に寄生する力無き貴様……」

「シンパシーを感じるな、同じ体に住居してただけあるかもな」

「……近いうちこの街で騒乱が起こる。それまでに覚悟を決めておく事だ」

「出来れば平和でも保って欲しいんだけどな……救世の悪魔さま」

「……孫のネロから、お前にプレゼントだ」

「どうも……」

教会を後にしようとする悪魔、スパイダからかなり大きい目の箱を渡される。中々重く一人分よりは気持ち少し小さい位だ。そこで開けるのも少しいたたまれない為一旦ホームに持ち帰る。

「義手と剣？……グリップとトリガーが付いてる……変なの」

部屋で箱を開けると剣、義手、そして羊皮紙の手紙が入っていた。『やりたい事をやりきれ!!』

たった一文、なんじゃこりやと思いい机の上に置く。

なんとなく気になる為訓練場に義手と持つていく事にする。

試し振りだからこれは…少し闘いに興味がある訳じゃないから。

「ははッ…」

疲れを癒すべく街並みを練り歩いていると腹も空いてきた為適当な店を物色していると見覚えのあるウエイトレスがビラ配りしてた。

「新作出るニャー!寄ってってニャー!」

あのウエイトレスのいる店にはあまりいい思い出もない為スルーしようとするが既に捕捉されてたのかまだ戦闘にすらなっていないのに回り込まれてしまった。

「はあ、なんすか」

「ふみやく、ダルそうにして欲しくないのにや」

「キャッチならお断りですよ…」

「ミア母ちゃんがこの前のお詫びにタダにしてやるって言ってたにや、ハチマンも寄ってくにや!」

「ふむ、タダか…」

ロキ・ファミリアに居候してお小遣いは貰ってるが節約した方がいいに越したことはないだろう。

「分かりました、行きますよ」

「ニャ!!一名様ご案内ニャー!」

背中を押されて入店する。この時間の店は繁盛しておりどこもかしこも埋まってるように見えたがポツンと空いてる大きなテーブル席が一つだけあった。

「ゆっくりしてニャー!」

埋まってるカウンターに埋まってるテーブル席。そこに一人だけでテーブルに座るとどうなると思う?答えは死ぬ程気まずいのだ。

「アーニャがごめんね、今回はミア母さんの奢りだからジャンジャン食べてよ」

「ありがとうございます」

常識人っぽい人に適当に注文してそれを待つ。その間頼杖をしてどこかよく分からない場所を見ながらくつろぐようと試みる。

「あー、ちよつといいかな」

さっきの常識人っぽいウエイトレスがやってくる。

頼んだ料理もなく一体どうしたのかと思つてると彼女は心底申し訳なさそうな表情をしている。

「どしたんスか」

「回転率上げるために他のお客と同席…つてしてもらつてもいいかな」

「え、いやd『メキッ』…全然いいですよ」

俺を見た。嫌だと言おうとしたら彼女の拳が有り得んほど強く握られたのを…同時にそれは彼女が冒険者である事を示して俺との間に絶対的な壁を作ったのだ。

「ホント!?ありがとうございます!気さくな連中だから気まずく思わずに済むよ!!」

スツタカターと入口に戻り客を案内してくる。さて、料理が来たら速攻で平らげて帰ろうか。

「失礼しまーす…」

「あ、はい…どうぞ」

冒険者らしからぬよそよそしい態度でやってきた同席の客達はなんだか他の冒険者たちのような強欲そうな雰囲気は無く、全く見たことないタイプ…分からないファミリアのようだ。まあ話す事なんて何も無い為もしもの為に持つてきた本でも読んでおこう。

「「「「「……………」」」」」」

驚く程視線を感じる。本から視線を上げて視線を追うと周りの冒険、つまり同席した人達が様々な感情の表情をしている。

「どうしたんですか…?」

「い、いやっ、ジロジロ見てすすすみません!」

なるほど、この白髪赤目の冒険者もコミュ障なのか。異物混入してたらそりゃキョドるのも無理はない。安心してくれ、料理が来たら爆

速で食べて帰るから」

「よく噛んで食えよな…」

赤髪のアんちゃんがツッコミ気味に喋る。溢れる面倒見が良さそうな感じが…って思考を読まれた？ええい、冒険者は化け物か!?

「補足しますけど、お客様、思いつきり喋ってましたからね?」

「失敬…」

ちっこい子の補足で真実を知るがそれでもあの小声を聞きとるなんてやっぱり凄いな、と感じる。

「あ、初めまして!リルルカ・アーデといいます!」

「比企谷です、自己紹介が出来るなんて偉いね、何歳?」

「むう!リリはパルウムで15歳です!」

「パルウム:フィンさんと同じ種族か:失礼、ここに来て日が浅いんだ」

プクー、と頬を膨らませるリルルカとやら。彼女に続いて赤髪のアんちゃんも自己紹介する。

「ヴェルフ・クロツゾだ。俺は17歳だぞ?宜しくな」

「同じ年ですか:宜しくする程会う機会なんて無いと思うけど:まあ、初めまして。クロツゾさん」

ヴェルフの出した右手を静かに掴む。そんな彼の表情はどこか懐かしそうで、どこか悲しそうだった。

「じ、自分の名はヤマト・命です!」

黒髪で雪ノ下とはまた違う真面目さを感じる。初対面なのに犬のような感じがしてその気になれば犬にすら見える。

(この人どこか見覚えがあるな:牛若丸?)

「はあ、どうも:極東の出身なんですか?」

「!、ええ!その春姫殿と同じ故郷でして、紆余曲折ありましたが今はこうして共にいます!」

『紆余曲折』辺りに何かしらの感情が見え隠れしたがその正体に気付くことはなく、春姫と紹介された金髪の狐の獣人の子の方に視線を移す。

「サンジヨウノ・春姫です。あの、いえ:お元気ですか?」

「体は至ってすこぶる健康ですよ…あの、どうかしました？」

「いえ、何も…大丈夫です」

辛そうな表情をしてる彼女に困惑して他のパーティメンバーを見ると一同似たような顔をしていた。

「待たせたねえ！トマトパスタだよ!!」

「あの、トマトパスタは頼んでませんけど」

「ごちやごちや文句付けんじゃないよ！お残しは…許さないよ!!」

「ヒエツ…」

相席した奴らが苦笑する中、目の前に山となっているパスタに息を飲む。

カウンターの方をチラリと見るとこちらを見ている店主の大女。

「い、いただきます…」

フォークにパスタを絡めて口に持つていく。

「ん、美味しいな…！トマトは嫌いだったがこれは別格だな…！」

何故かホツと胸を撫で下ろす周りの奴ら。

山を攻略しているうちに頭痛が走る。

「ぐツ!!」

「どうかしたんですか!？」

脳裏に蘇る知らない情景…モヤで分からないがロキ・ファミリアではない事は確信できる誰かと並んで飯を食べる光景。並んでダンジョンに挑む姿。何かしらを話し合う姿。そのどれもが懐かしさと今にない感情を孕んでいた。

「依存するのムリないよな…」

記憶を失う前の自分が計り知れない負の感情を抱いていたのならこの光景は前を向かせる格好の劇薬に等しい。しかし劇薬も行き過ぎれば毒にもなりうる。最高の希望を守ろうとして身を滅ぼしたのかもしれない。

「どうかしたんですか?」

「自分の馬鹿さ加減に気付いただけだ。そういえば聞きそびれたな…アンタ、名前は?」

「…ベル・クラネルです」

「そうか、アンタが【亡影】の……ここ、セツティングしたのか？随分手が込んでるのな。そこまでハチマン・ヒキガヤを取り戻したいのか？」

さつきまで騒いでた客達は各々秘めた表情を浮かべながらコチラ向いている。

「ううん…ボク達は家族の背中を押しに来たんだよ」

カウンター席に座っていたツインテールの女神が歩み寄ってくる。何故か釣られて一歩下がる。

「何を言ってる…」

「覚えてないと思うけど…傷付いて、迷って、苦しんで、身を粉にして足掻いて、また苦しんで…それでも君はボク達に樂をさせようとしてくれたんだよ」

恐らくヘステイア・ファミリアの主神であるヘステなのだろう。酔ったロキが『ドチビ』って言ってたから記憶に新しい。

「そんなの『君の思う君じゃなくても…』…」

「僕達は同じ釜の飯を食べて、同じ屋根の下で眠って、同じ竈火を囲った家族なんだ！ボク達は覚えてる！キミが救ったモノも、キミが悩んで壊してしまった物も!!」

「今更…情に、罪悪感に訴えかけるのか。そこまで戦力が欲しいならスカウトでも募れば良いんじゃないのか？」

「生憎ボクには2億ヴァリスの借金があるからね！団員なんて来やしないよ!!」

「に、2億…!?!」

普通に聞き慣れない単語が出てきた為軽く頭痛が走る。

「そんなボクでも誰1人居なくなる事はなかったよ！誰も幻滅しなかった！」

「だからって今の俺がはいそうですか、って戻るわけないだろ…」

「そうさ、戻りたくなければ戻らなくてもいいさ」

「何がしたいんだよアンタらは…」

支離滅裂な会話にイラついた八幡はヘステイアに声を荒らげる。

久々の怒りか、体は熱くなり、眉間に皺が寄る。

それはモザイクが掛かっても胸に込み上げてくるいつの日かの情景があるからだろう。

「受け入れるさー！」

「何を!？」

「キミが迷ってるなら背中を押ささ、ロキの所に居るなら悔しいけど送り出すし、こんなボクのところに戻って来てくれるのなら暖かく迎えようと思う。だからお願いだよ、ボク達の事もスパイダの事も何も関係ない…キミの思い描く比企谷八幡になっておくれ」

「……ッ!……帰る、ごちそうさんでした」

金を置いて扉をくぐる。

足早に【黄昏の館】に戻り部屋に戻るべく廊下を歩く。

「やあ、珍しく気が立ってるね」

「ヘステイア・ファミリアと…接触したんです」

「それで、どう思いどう感じたんだい？」

「良い人達でした、底抜けに明るくて…規律より絆だぜって感じの集まりでこの中に俺もいたんだなって感じました。」

「僕は君がここに居てくれてるお陰で外食の費用も抑えられたし、士気も中々上がってるんだよ。皆ね、なんやかんや言って君の頑張りを認めてるんだよ」

「はあ…そうですか…部屋、戻ってもいいですか?」

「ごめんね時間取っちゃって…でも理解して欲しいよ、君はココに居ていいって認識して欲しいな」

「……………」

部屋に戻りベッドに倒れ込む。

壁に立て掛けてある『ネロ』さんとやらの贈り物の剣と謎の義手が視界に入る。これは戦う力だ。恩恵とかそんなのはよく分からないが訓練しでは自分でも思った以上に動けた。しかし何のために戦う?アイズやリヴェリアさんとか、ロキ・ファミリアの団員達のため?どうして?守るって言ったって対象はオラリオの中でも指折りの実力者。

「俺が出しゃばってどうにかなるもんじゃないよな…」

寝ようと思ってもどうも寝付けない。酒場での出来事が原因なのは十中八九だろう。黒歴史が出来たって俺は少ししか泣かない自信があるのに、どうしてこうも…涙が溢れるのだろうか。

『キミの思い描く比企谷八幡に』

現代社会に生きていた俺にとつて思い描く自己像というのを実現させるのは至極困難である。社会的要素、経済的要素、そして何より自身の周りを取り巻く環境的要素。

そう言えば1人いたな…失言も暴言も吐くけど嘘だけはつかない奴が…確か、葉山の渡してくれた物にあつたな…。

駆ける

「クソツツ!! 殺してやる! 殺してやる! 殺してやる、ッ!! 『亡影』 エエエエエエエエエエ!!!」
「おーおー、昂ってんね〜」
「てめエは…!」

暗い洞窟の中で復讐に燃える男に神父の皮を被った悪魔は語りかける。

「条件付きだけどアイツに復讐…しちゃうう?」

薄ら笑う神父はその心にドス黒く光る明るい闇を抱えて瞬く間にディックスに詰め寄る…。有無を言わさないようにその喉元に剣先を突き立てながら。

「とりま手土産に連れてきたけど丁寧に扱えよ〜」

その手で引っ張ってきたであろう数多の檻を復讐の鬼に引き渡す。檻の隙間からは人間では無い瞳の輝きが覗かせていた。

葉山の渡したノートを見た。

俺は悪人だ。どうしようもない悪人だ。その記憶が無いだけでこの手は真つ赤に染まつてる。それはどうしようもなく避けられない現実であり、逃げられない罪だ。悪党としてどう向き合っただろう生きるか…。自首する? 罪を償う手としては有効だ。長い年月を檻の中で過ごせばいいのだから。よしそれだ、確かガネーシャ・ファミアリアはオラリオの警察的な立ち位置だったはず。

「俺、人殺しちやってたらしくて…」

「え? え? た、担当の者を呼ぶので暫く待ってて…ください」

受付の人が戸惑いながらもドラマで見たような取調室に移動させてもらう。暫くすると青髪で威厳のありそうな人と象の仮面を付けた騒々しい神っぽい神が室内にやってくる。丁寧に自己紹介までしてたんだ、ガネーシャ・ファミアリアの主神だ。

「全く、忙しい時期なのに世話を焼かせるな、『亡影』。受付の子が戸惑ってたぞ」

「すみません、こうでもしないと気が収まらなくて…」

「記憶喪失というのは嘘ではないようだな」

「まあ、そうですね」

余談なんていらぬ。ここならきつと俺を正しく裁いてくれる。

「人を殺しちやつたらしくて…」か、何人をどうやって手に掛けたんだ？」

「1人以上をよく分からないけどできるだけ惨たらしく殺しました…」

ただノートには『悪魔に囚われた救えない人々を皆殺しにした』としか書いてなかったのだが確証のないハズのその記述はやけに納得ができた。

「…」

青髪の女性は主神をチラリと見る。

腕を組んで唸る象の仮面を付けた筋骨隆々な神はこちらからは見えない瞳で俺を覗く。

「シャクティ…少し外してくれるか」

「ガネーシャ様？」

「ここからは男の話だ」

理解が早いのかシャクティと呼ばれた青髪の女性は取調室を出る。ふざけた象の仮面を付けているがその表情は真摯そのものだがどことなく優しさを感じた。

「許せないのか…過去の自分が…」

「許されちゃいけないんです…あんな事をして、手を真っ赤に染めて裁かれてないのが…」

「戦いに疲れ果てた者は見てきたが君は特に罪悪感を感じているな」

「散々痛めつけて殺してきたんです…その果てに記憶喪失になって全てを忘れて幸せ…になろうとしてる自分に嫌気が差して…せめて裁かれて償った後に…」

「顔向けしないだろうな、君は。清廉潔白でない自分にも嫌気が差して君はまた逃げるのだろうか」

「神の経験則ですか」

「いや、少なからず君の活躍は耳にしていた。公になつていないが君が夜な夜な守るべき一般市民暴力を振りかざす冒険者に鉄槌を下して我々の元に連れてきた事も何度かある」

「そんなの偽善ですよ」

「だとしても救われた者がいる、君の悪評の裏にはいつでも救われた者達や君の新しい家族への愛情があつた。形は暴力であれそれは立派なおこないだ、誇りなさい」

「覚えてない出来事にどう誇れと？」

「覚えのない罪は裁きようがないのだがな」

普通に言い負かされた。少し恥ずかしくなり下を向く。

「許してやりなさい、今まで君は頑張つてきたのだから。罪を自覚しない者達の為に我々がいる。自覚して償うつもりがあるなら我々の出る幕はないさ」

「俺は一体どうすれば…償うたつて今の俺は非力です」

「…今本当に助けを必要としている人達がいる。歴史の闇に、人間の傲慢に踏み潰されそうな人達が…君に出来ることを、君なりのやり方でいい…成し遂げてくれ」

顔を上げると満足そうに頷いたガネーシャ様は俺を立たせて取調室から出るように促す。建物から出た俺は真つ先に【黄昏の館】に向かう。

門を開いてもらい早足に部屋に向かう。

『やりたい事をやりきれー』と書かれたメモと一緒に保管していた剣を取り出して背中にマウントして義手は腰に付けておく。机に置いていたノートをもう一度心に刻むように読む。

「雪ノ下…俺は、もう逃げない…お前からも、自分からも…」

「もうええんか？」

振り返るとドアにもたれかかるようにロキがいた。いつものような二ヘラと笑う表情ではなく、眉先と目尻の角度を下げて心配そうにしている。

「ここいればもう戦う必要はないんやで？もう傷付ける事も、傷付けられる事もないんや」

「ありがとう、ロキ…アンタが拾ってくれなかったら今頃俺は死んでただろう。厨房で料理をして、皆に美味しい美味いって言って貰えて嬉しかった。けど、きつと俺は今動かなかつたらずつと後悔すると思う、だから…」

続く言葉はロキの手によって止められる。

「行つてきーや、やるべき事が終わつたら戻つてくるんやで？飯もキツチリ食べる事！そして、何があつても死なんといてや。約束できるか？」

「死んでも帰ってくる…約束だ」

そう言うときロキのもう片方の手に持っていた綺麗に畳まれたコート一式を渡される。黒いコート、右肩には白い刺繍で百合が描かれている。

「倒れてた八幡が着てたんや、こんな日が来るんじゃないかってボロボロのやったから直しておいて正解やったわ」

黒いズボンに黒い革のブーツ、白いシャツを着てコートを羽織る。

「行つてらっしゃい、八幡」

「ああ、行つてきます」

ロキを残して部屋から出て廊下を歩く。

一歩一歩、廊下を踏みしめながら歩いていると少し先にロキ・ファミリアの幹部陣とレフィーヤが前を塞ぐように立っていた。

「そんな顔をして、どこに行くんだい？」

「そんな顔って…そんなに覇気がありません？」

「いいや、寧ろ逆だ。清々しい表情をしている、まるで死地に向かう戦士のようにだ」

リヴェリアさんが睨むような表情をしてこちらを見てくる。その推察は長年の戦いと払った犠牲の経験からだろうか。

「いいや俺は戦士なんて柄じゃありませんし、どちらかっていうと…勇者？」

ピキツとフィオナさんの青筋が浮かび上がる音がする。

「団長の前でソレを名乗るのかあ…？」

おー怖っ…殺気が肌で感じられるのはフィン団長が『勇者』の通り

名で知られているからだろう。知ってて踏んだ地雷だがちよつぷり後悔。

「君のこうするに至った判断をボクは頭ごなしに否定するわけじゃないけど…神の恩恵もない君がどうこうできる問題かい？」

「確かに恩恵は戦う上でこの上なく便利ですけど…混じり気のない『俺』で戦います。戦って勝って、俺は俺を許せるように、殺してきた相手に向き合える自分に…なれるように」

「だから…見ててください。俺、やりきるので」

そう言うのと満足そうにフツと笑った団長は道を譲るように脇に寄った。それに真似て他の人達も脇に寄る。アイズやリヴェリアさんやレフイーヤは不安そうな顔をしている。

「よく言った！それなら満足するまで暴れて来い!!」

バン！とガレスさんに背中を押される。それは父のような威厳を感じた。

「んな訳だったらさっさと片付けろ！」

ゲシー！とベートに背中を蹴られる。その蹴りの裏には優しさが隠れていた。

「行つてくるー！」

押され蹴られた勢いで駆けていく。

道中ファミリアのメンバーが行つてらっしやいと見送つてくれる。

「開門!!」

丁度よく開いた門をくぐってバベルに向かって走り出す。今はこの勢いを殺したくない。…家族愛って奴なのかな、と思いながら軽い足取りで走っていく。

街中はいつもと違う騒がしきで溢れており「喋るモンスターが」とか「ヘステイア・ファミリアが」とか不穏な会話が耳に飛び込んでくる。

「葉山！」

「呼んだかいッ!？」

どこからともなく現れた葉山は俺の隣で併走する。ほんとキミどこから沸いてきたの？ストーカーなの？

「今北産業！」

「喋るモンスターがダンジョン内で冒険者を襲ってる。

ギルドで探索の制限と討伐隊の編成が行われている。

ヘステイア・ファミリアが疑われてるけど犯人はスパードー行。」

「了解した、サンキュー！」

「ダンジョン18階層に迎え！案内する！」

「おう！」

冒険者顔負けのスピードで疾走するハチマンの姿は瞬く間にギルドへと伝わった。

ギルドでは喋るモンスターの件やそれに関する探索

制限の抗議で溢れかえっていた。中には喋るモンスターに襲われた事を証言するリヴィラの怪我人もいた為噂は真相になり、より抗議の火に油を注いでる状態だった。

(どうして…こんな事に…ベル君…)

受付嬢のレイナはカウンターでその火を鎮めるのに手一杯だった。

「大変だー!!」

ギルドの入り口に吉報か凶報を伝えに来た冒険者がやって来てギルド内がそちらの方に振り返った。誰もが新しい情報を知りたいからだ。

ゼエ、ゼエ、と方で息をする冒険者は言葉を必死で紡いだ。

『「亡影」がとんでもねえ形相でギルドに向かってるう!!』

『「『亡影』!!!!』

「嘘だろ!? アイツ引退したって聞いたぞ!」「バカお前! 復帰したんだろ!」「俺は死んだって聞いたぞ!」「そりゃガセだ!」「やっぱりヘステイア・ファミリアが…」

そんな会話を聞いていたレイナは一瞬安堵したがそれと同時に冷や汗が伝っていた。そんな彼女の心を代弁するように冒険者（バカ共）のカリスマ的存在であるモルドは声を荒らげた。

「お前らア！ 邪魔しようもんなら問答無用にぶん殴られるぞ!! それが

嫌なら手とか盾を上にも上げろお!!」

ゾワリ、と一同にも嫌な汗が出てくる。家族ラブとして知られるハチマンの邪魔をしたらどうなるか：アポロン・ファミリアとの戦争遊戯を見ていた一同はその顛末がどうなるか嫌でも想像出来、一斉に面積のあるものを上に掲げた。

同時に階段を猛スピードで駆け上がってきたヤツが姿を現した。

「葉山アー！」

「分かつてるー！」

人混みに突っ込む手前で跳躍したふたつの影は冒険者達の掲げた剣や盾、手の平にハゲ頭を踏み台にして蓋のしまったダンジョンへの入口に差し掛かった。

「頼んだぞ!!」「ぶちかませえ!!」「何とかしろお！」

オラリオのトラブルメーカーとして知られたハスティア・ファミリア。そしてそれを収めるべく奔走していたハチマン・ヒキガヤはなんやかんやあって冒険者達に期待されていた。アイツなら何とかしてくれる、なんやかんやあって丸く収まる、建物とかぶっ壊れるし怪我人とかもとんでもねえ程出るけど解決？する。そんな期待にもハチマンは背中を押された。

背中 of 剣のグリップを握って加熱させる。ヴィンヴィン！と赤熱した刀身を抜いて男は駆ける。

「今開けるから待ってくださいいい!!!」

「どけえええええ!!」

そんなギルド職員の懺悔に近い願いも虚しく飛び上がった彼は今までの加速と位置エネルギーを無視して急降下しダンジョンの入口である蓋の中央に刀身を突き立てるとヒビと同時に炎が迸りその蓋を瓦解させた。

「今行くぞ!!バカやろお!!!」